

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集

きよ す じょう か まち い せき
清洲城下町遺跡 IV

(本文編)

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

『清洲城下町遺跡Ⅳ』正誤表

訂正箇所	誤	正
本文編 例言32行目 目次33行目 14頁12行目 58頁10行目 58頁23行目 122頁19行目 ～20行目 131頁33行目 131頁35行目 140頁 5行目 199頁最下行 247頁 4行目 268頁35行目	第Ⅳ章第3節K <u>中国製染付</u> 報告書抄録－ <u>283</u> <u>62M</u> 区と同様な （特に <u>巻末図版</u> の遺構全体 本書の <u>巻末遺構図</u> は 曲物桶や木胎漆器椀等～ ～と算定することとした。 <u>井上喜久夫</u> 氏の分類 <u>井上喜久夫</u> （1989） 裏面に「 <u> </u> （日付）」 常滑窯産陶器 <u>建具の飾金具の</u> 周囲は <u>S D 80014</u>	第Ⅳ章第3節K <u>中国窯産青花</u> 報告書抄録－ <u>282</u> <u>62G</u> 区と同様な （特に <u>資料編</u> の遺構全体 本書の <u>資料編遺構図</u> は 様であるが、 <u>金箔の有無の項目を</u> <u>加えることとした。</u> <u>井上喜久男</u> 氏の分類 <u>井上喜久男</u> （1989） 裏面に「 <u> </u> ⁽⁷⁾ （日付）」 常滑窯産陶器 <u>（1243のみ S = 1:8）</u> <u>鉄燵皿等の</u> 周囲は <u>S D 8014</u>
資料編 102頁16行目 写真図版 5	<u>を朱書</u> で表示した。 <u>89E</u> 区下面全体	<u>の右側に実線を引いて表示した。</u> <u>89B</u> 区下面全体

序

「関東の巨鎮」と呼ばれ、日本史上の華々しい舞台の一つとなった清須城は、廃城後は宿場町や村へ移り変わり、往時の面影は追憶へと消えて行きました。その後の人々の清須城に対する思いは様々ですが、勇将織田信長への顕彰と重ねられることが多く、現在では観光資源として活用されています。

こうした清須城が、遺跡として地中に痕跡を残していることが知られるようになったのは、ここ数十年のことです。ちょうど、日本考古学界の中でも、中世や近世を対象とした分野が活発に研究されるようになった時期に当たり、清洲城下町遺跡の発掘調査の成果は、城郭研究において俄然注目されるようになりました。

その一方で、遺跡の保存・整備・調査体制などについては、常に開発事業の後手に回っており、開発と保存・調査と諸費用負担・観光事業と普及活動といった様々な葛藤の中で揺れ動き、決して十分なものとは言えないのが現状です。

このような状況の中、当センターの第4冊目の清洲城下町遺跡の調査報告書が刊行されますことは、誠に意義深いことと思われま。願わくば、本書が中・近世考古学上の諸問題や今日的な諸問題を複雑に抱えた本遺跡の多様な課題に対し、少しでも解答を提示し、問題解決に寄与できれば幸いです。

また、発掘調査や本書の作成に当たり、地元の方をはじめとする多くの方々にご協力・ご指導を賜り、本書の刊行に至ることができました。末尾ながら、記して感謝致したいと思います。

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木 鐘 三

総目次

五条川河川改修に伴う発掘調査報告書は全3冊で構成される予定である。その内容の内訳は以下の通りである。

報告書名	対象調査区（年度）
『清洲城下町遺跡Ⅳ』 （第53集）	昭和61～平成3年度・平成4年度（92C～E区）・平成5年度（93A・B区）
『清洲城下町遺跡Ⅴ』 （第54集）	昭和61～平成3年度・平成4年度（92C～E区）・平成5年度（93A・B区）
『清洲城下町遺跡Ⅵ』 （未定）	平成4年度（92F区）・平成5年度（93C区）・平成6年度以降

なお、『清洲城下町遺跡Ⅳ』・『清洲城下町遺跡Ⅴ』の対象となる調査区の総面積は29750㎡で、その調査成果は膨大である。従って、29750㎡分については、以下のように「城下町編」「宿場町編」と2分割して報告書を刊行することとした。

清洲城下町遺跡Ⅳ（本書）

- 第Ⅰ章 調査概要
- 第Ⅱ章 城下町期以前の遺構と遺物
- 第Ⅲ章 城下町期の遺構
- 第Ⅳ章 城下町期の遺物
- 第Ⅴ章 城下町期の遺構配置

清洲城下町遺跡Ⅴ

- 第Ⅵ章 宿場町期の遺構
- 第Ⅶ章 宿場町期の遺物
- 第Ⅷ章 自然科学分析
- 第Ⅸ章 考察
- 第Ⅹ章 総括

例 言

1. 清洲城下町遺跡（遺跡番号 21002：『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』1986による）は愛知県西春日井郡清洲町のほぼ全域に分布する広大な遺跡であり、一部、春日町・新川町にまたがる。
2. 本書は、愛知県土木部が進めている五条川河川改修に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書3分冊のうち、第1巻に相当する『清洲城下町遺跡Ⅳ』である。発掘調査は、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 昭和61年度から平成5年度までの調査対象面積は30130㎡であり、このうち本書は、92F区・93C区を除く全調査区（29750㎡）を対象とする。調査面積の詳細な内訳は別に記載した通りである（本書第Ⅰ章第3節を参照）。
4. 発掘調査は、城ヶ谷和広（調査課課長補佐：当時の職名、以下同じ）・細野正俊・水谷朋和・梅本博志・日比幸・小塚俊夫・大竹正吾（以上主査）・遠藤才文・小澤一弘・佐藤公保・池本正明・前田雅彦・川井啓介・小嶋廣也・蟹江吉弘・鈴木正貴（以上調査研究員）・中野良法・岡本直久・飴谷一・加藤とよ江（以上嘱託）が担当した。各調査区の発掘調査期間・調査担当者は別に記載した通りである（本書第Ⅰ章第3節を参照）。
5. 発掘調査に引き続き、平成4年度以降に報告書作成のための整理作業を実施した。整理作業は主に鈴木正貴が担当した。なお、遺物整理・製図などには次の方々の協力を得た。
岡田智子・中垣内薫・八木佳素実（以上調査研究補助員）
加藤豊子・小檜山洋子・竹川裕美子・多田富代・土井てる子・早川久美・平野みどり・星野和子・堀田順子・本所千恵子（以上整理補助員：敬称略）
6. 調査に当たっては、本センター専門委員会をはじめ、次の各関係機関のご指導・ご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・清洲町教育委員会・
愛知県土木部河川課・西尾市教育委員会
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
8. 遺構は、以下のアルファベットによる分類記号と通し番号で表記した。番号は地区毎に振り直している。
SA：柵列・SB：建物・SD：溝・SE：井戸・SK：土坑・SX：その他・P：ピット
御園地区：1000番台・本丸地区：2000番台・田中町地区：3000番台・五条橋地区：4000～5000番台・本町地区：6000番台・南部地区（北半）：7000番台・南部地区（南半）：8000番台
9. 本書の執筆・編集は鈴木正貴が担当したが、一部に分担執筆がある。
第Ⅰ章第1節 調査経緯——加藤安信
第Ⅰ章第3節 地形と環境——服部俊之
第Ⅳ章第3節 K中国製染付——岡田智子
10. 発掘調査の実施や本書をまとめるに当たり、次の各氏のご指導の他、多くの方々のご協力を得た。
赤羽一郎・足立順司・伊藤晃・内堀信雄・小野正敏・尾野善裕・金子健一・下村信博・千田嘉博・土山公仁・野口哲也・藤澤良祐・松澤修・前川要
11. 調査記録（図面・写真資料・日誌等）は本センターで保管している。
12. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24

電話番号0567-67-4164

目 次

第Ⅰ章 調査概要	1
第1節 調査の経緯	2
第2節 調査成果と遺跡の研究	5
第3節 地形と環境	9
第4節 各調査区の調査経過と概要	29
第Ⅱ章 城下町期以前の遺構と遺物	41
第1節 概 要	42
第2節 遺 構	44
第3節 遺 物	49
第4節 小 結	55
第Ⅲ章 城下町期の遺構	57
第1節 概 要	58
第2節 中堀 (SD6001)	60
第3節 旧五条川 (NR4001)	66
第4節 溝	72
第5節 建 物	83
第6節 柵 列	95
第7節 井 戸	98
第8節 畝状遺構	111
第9節 土 坑	112
第10節 整地層	116
第Ⅳ章 城下町期の遺物	119
第1節 出土遺物の概要と分析方法	120
第2節 遺構出土一括資料	134
第3節 遺構外出土資料	193
第Ⅴ章 城下町期の遺構配置	249
第1節 区画の設定と分析の方法	250
第2節 各調査区の遺構変遷	251
第3節 小 結	271
結 語	273
索 引	276
報告書抄録	283

挿 図 目 次

第1図 発掘調査区位置図	4	第40図 南部地区主要遺構図 (2)	40
第2図 濃尾平野の地形帯	10	第41図 清洲周辺の古代・中世の遺跡分布図	42
第3図 ボーリング調査位置図	11	第42図 SB3003・SD3018実測図	44
第4図 ボーリング調査の結果	12	第43図 SA3001・SA3002・SA3003実測図	45
第5図 清須城下町の堀の復元と調査区位置図	15	第44図 SE3004実測図	46
第6図 土層セクション模式図	16	第45図 SD8018断面実測図	48
第7図 地震痕(噴砂)の形態分類	19	第46図 90Fb区遺構実測図	48
第8図 63C区における地震痕の分布	20	第47図 古代の土器類実測図 (1)	50
第9図 天正地震と推定される噴砂の跡	21	第48図 古代の土器類実測図 (2)	51
第10図 63R区の「天正地震」による砂脈	22	第49図 中世の遺物実測図 (1)	52
第11図 91A区の中央付近に密集する地震痕	23	第50図 中世の遺物実測図 (2)	53
第12図 第11図①に現れた噴砂丘の断面図	24	第51図 古代瓦・埴輪実測図	54
第13図 SK6151でみられた砂脈	24	第52図 中堀SD6001全体図	60
第14図 第11図⑥に現れた地震痕の模式図	25	第53図 中堀SD6001土層断面図	61
第15図 濃尾地震の地震痕	26	第54図 中堀SD6001石垣実測図 (1)	62
第16図 天正地震の震度分布	27	第55図 中堀SD6001石垣実測図 (2)	63
第17図 調査区の地区割図	29	第56図 中堀SD6001の復元図	64
第18図 御園地区調査区位置図	30	第57図 中堀SD6001出土遺物	65
第19図 御園地区土層断面図	30	第58図 旧五条川NR4001土層断面図	66
第20図 本丸地区調査区位置図	31	第59図 旧五条川NR4001全体図	67
第21図 本丸地区主要遺構図	31	第60図 SX4013・SX4014実測図	69
第22図 田中町地区調査区位置図	32	第61図 旧五条川NR4001埋積後の状況	70
第23図 田中町地区土層断面図	32	第62図 旧五条川NR4001概念図	71
第24図 田中町地区主要遺構・遺物図	32	第63図 溝土層断面図 (1)	73
第25図 五条橋地区調査区位置図	33	第64図 溝土層断面図 (2)	74
第26図 五条橋地区土層断面図 (1)	33	第65図 溝土層断面図 (3)	75
第27図 五条橋地区主要遺構図 (1)	34	第66図 溝土層断面図 (4)	77
第28図 五条橋地区土層断面図 (2)	34	第67図 溝土層断面図 (5)	79
第29図 五条橋地区主要遺構図 (2)	35	第68図 溝土層断面図 (6)	80
第30図 五条橋地区土層断面図 (3)	35	第69図 礎石建物実測図 (1)	84
第31図 本町地区調査区位置図	36	第70図 礎石建物実測図 (2)	85
第32図 本町地区主要遺構図 (1)	36	第71図 礎石建物実測図 (3)	86
第33図 本町地区土層断面図 (1)	36	第72図 礎石建物実測図 (4)	88
第34図 本町地区主要遺構図 (2)	37	第73図 礎石建物実測図 (5)	89
第35図 本町地区土層断面図 (2)	37	第74図 掘立柱建物実測図 (1)	90
第36図 南部地区調査区位置図 (1)	38	第75図 掘立柱建物実測図 (2)	91
第37図 南部地区主要遺構図 (1)	38	第76図 掘立柱建物実測図 (3)	92
第38図 南部地区調査区位置図 (2)	39	第77図 掘立柱建物実測図 (4)	93
第39図 南部地区土層断面図	39	第78図 礎石柵列実測図	95
		第79図 掘立柱柵列実測図 (1)	96
		第80図 掘立柱柵列実測図 (2)	97

第81図	井戸土層断面図 (1)	99	第122図	遺物実測図 SD7023 (1)	171
第82図	井戸土層断面図 (2)	101	第123図	遺物実測図 SD7023 (2)	172
第83図	井戸土層断面図 (3)	103	第124図	遺物実測図 SD7023 (3)	173
第84図	井戸土層断面図 (4)	104	第125図	遺物実測図 SD7023 (4)	174
第85図	井戸土層断面図 (5)	105	第126図	遺物実測図 SD7023 (5)	175
第86図	井戸土層断面図 (6)	107	第127図	遺物実測図 SK7029 (1)	177
第87図	井戸土層断面図 (7)	110	第128図	遺物実測図 SK7029 (2)	178
第88図	畝状遺構実測図	111	第129図	遺物実測図 SK7029 (3)	179
第89図	土坑実測図 (1)	114	第130図	遺物実測図 SK7029 (4)	180
第90図	土坑実測図 (2)	115	第131図	遺物実測図 SK7029 (5)	181
第91図	瀬戸美濃窯産陶器器種分類	125	第132図	遺物実測図 SK7029 (6)	182
第92図	天目茶碗・播鉢器形分類	127	第133図	遺物実測図 SK7029 (7)	183
第93図	土師器器種分類	127	第134図	遺物実測図 SK7029 (8)	185
第94図	調査区別 1㎡当たりの遺物出土量一覧	132	第135図	遺物実測図 SK7029 (9)	186
第95図	地区別産地材質組成一覧	133	第136図	遺物実測図 SK7029 (10)	187
第96図	遺物実測図 NR4001 5群	135	第137図	遺物実測図 SD6001 (1)	189
第97図	遺物実測図 NR4001 4群 (1)	136	第138図	遺物実測図 SD6001 (2)	190
第98図	遺物実測図 NR4001 4群 (2)	137	第139図	遺物実測図 SD6001 (3)	191
第99図	遺物実測図 NR4001 4群 (3)	138	第140図	遺物実測図 SD6001 (4)	192
第100図	遺物実測図 NR4001 4群 (4)	139	第141図	遺物実測図 瀬戸美濃窯産陶器	194
第101図	遺物実測図 NR4001 4群 (5)	141	第142図	調査区別瀬戸美濃窯産播鉢出土分布図	196
第102図	遺物実測図 NR4001 3群 (1)	144	第143図	瀬戸美濃窯産陶器の器種組成図	197
第103図	遺物実測図 NR4001 3群 (2)	145	第144図	遺物実測図 常滑窯産陶器	199
第104図	遺物実測図 NR4001 2群 (1)	146	第145図	遺物実測図 信楽窯産陶器 (1)	200
第105図	遺物実測図 NR4001 2群 (2)	147	第146図	遺物実測図 信楽窯産陶器 (2)	201
第106図	遺物実測図 NR4001 2群 (3)	148	第147図	遺物実測図 楽窯産陶器	202
第107図	遺物実測図 SD4033	151	第148図	遺物実測図 備前窯産陶器 (1)	204
第108図	遺物実測図 SK3029	153	第149図	遺物実測図 備前窯産陶器 (2)	205
第109図	SK3029出土土師器皿口径分布図	153	第150図	遺物実測図 丹波窯産陶器	206
第110図	遺物実測図 SD6068	155	第151図	遺物実測図 唐津窯産陶器	207
第111図	遺物実測図 SK6570 (1)	157	第152図	遺物実測図 朝鮮窯産陶磁器	208
第112図	遺物実測図 SK6570 (2)	158	第153図	遺物実測図 中国窯産青磁 (1)	209
第113図	遺物実測図 SK6151 (1)	160	第154図	遺物実測図 中国窯産青磁 (2)	210
第114図	遺物実測図 SK6151 (2)	161	第155図	遺物実測図 中国窯産白磁	211
第115図	遺物実測図 SK6151 (3)	162	第156図	遺物実測図 中国窯産青花 (1)	213
第116図	遺物実測図 SK6151 (4)	163	第157図	遺物実測図 中国窯産青花 (2)	214
第117図	遺物実測図 SK6151 (5)	164	第158図	遺物実測図 中国窯産青花 (3)	215
第118図	遺物実測図 SK6151 (6)	165	第159図	遺物実測図 中国窯産青花 (4)	216
第119図	遺物実測図 SX7005 (1)	167	第160図	遺物実測図 中国窯産青花 (5)	217
第120図	遺物実測図 SX7005 (2)	168	第161図	遺物実測図 中国窯産青花 (6)	218
第121図	遺物実測図 SX7005 (3)	169	第162図	遺物実測図 中国窯産青花 (7)	220

表 目 次

第163図	調査区別中国窯産青花の器種組成一覧	222
第164図	中国窯産青花の文様	224
第165図	遺物実測図 中国窯・タイ窯産陶磁器	225
第166図	遺物実測図 土師器 (1)	226
第167図	遺物実測図 土師器 (2)	227
第168図	遺物実測図 瓦器	229
第169図	遺物実測図 鑄造関連	230
第170図	遺物実測図 産地不明陶器	230
第171図	遺物実測図 墨書・刻書土器 (1)	231
第172図	遺物実測図 墨書・刻書土器 (2)	232
第173図	遺物実測図 瓦 (1)	233
第174図	遺物実測図 瓦 (2)	234
第175図	遺物実測図 瓦 (3)	235
第176図	遺物実測図 瓦 (4)	236
第177図	遺物実測図 瓦 (5)	237
第178図	遺物実測図 瓦 (6)	238
第179図	遺物実測図 木製品 (1)	240
第180図	遺物実測図 木製品 (2)・漆製品	241
第181図	遺物実測図 石製品 (1)	242
第182図	遺物実測図 石製品 (2)	243
第183図	遺物実測図 鉄製品	244
第184図	遺物実測図 銅製品 (1)	245
第185図	遺物実測図 銅製品 (2)	246
第186図	遺物実測図 銅製品 (3)	247
第187図	遺物実測図 鉛製品	248
第188図	遺構変遷図 (1) 89A区	251
第189図	遺構変遷図 (2) 63R区	251
第190図	遺構変遷図 (3) 90A区	253
第191図	遺構変遷図 (4) 62G区	254
第192図	田中町地区遺構配置図	254
第193図	遺構変遷図 (5) 63B・61A区	256
第194図	遺構変遷図 (6) 五条橋地区	257
第195図	遺構変遷図 (7) 本町地区北半部	258
第196図	遺構変遷図 (8) 本町地区南半部	260
第197図	遺構変遷図 (9) 89F区	264
第198図	遺構変遷図 (10) 61C区・61D区	265
第199図	遺構変遷図 (11) 63S区・89D区	267
第200図	遺構変遷図 (12) 63D区~91C区	269
第201図	遺構変遷図 (13) 91C区~90F区	270

第1表	清須城・清須城下町の研究史略年表	5
第2表	参考文献一覧表	6
第3表	清洲城下町遺跡関連被害古地震一覧	18
第4表	古代瓦出土地点一覧表	56
第5表	溝一覧表	82
第6表	井戸一覧表	108
第7表	NR4001出土木簡積文一覧表	142
第8表	NR4001出土遺物集計表	143
第9表	NR4001出土自然遺体一覧表	149
第10表	SD4033出土遺物集計表	150
第11表	SK3029出土遺物集計表	152
第12表	SK3029出土土師器皿口径別分布表	153
第13表	SD6068出土遺物集計表	154
第14表	SK6570出土遺物集計表	156
第15表	SK6151出土遺物集計表	159
第16表	SX7005出土遺物集計表	166
第17表	SD7023出土遺物集計表	170
第18表	SK7029出土遺物集計表	176
第19表	SD6001出土遺物集計表	188
第20表	遺物観察表 (中国窯産青花碗)	215
第21表	遺物観察表 (中国窯産青花皿)	218
第22表	調査区別中国窯産青花の器種組成一覧表	223
第23表	外面文様・内面文様記号表	224
第24表	見込み・高台内文様番号表	224
第25表	主要遺構出土自然遺体一覧表	248

第I章 調 査 概 要

第1節 調査の経緯

—— 調査に至る経緯と遺跡としての認識の歴史 ——

五条川改修に伴う西春日井郡清洲町ほか所在の清洲城下町遺跡の発掘調査は、遺跡の範囲をどの様に捉えるかという問題と深く関わって展開されてきた。

清須城の本丸跡と目される部分を遺跡として認識することは古くから行われており、既に第二次世界大戦前の大正14年（1925）に愛知県史蹟名勝天然紀念物調査会委員若山善三郎は『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告 第三』の中で、その現状と歴史的価値について記述している。しかし、このような認識がそのまま昭和25年（1950）の文化財保護法施行の中で、周知の埋蔵文化財包蔵地として十分に受け継がれていったわけではない。昭和36・37年（1961・1962）、本丸跡推定地を横断していた東海道本線に並行して東海道新幹線が敷設された折には、五条川を挟む旧城郭内を五条川遺跡としながらも簡単な試掘溝が15ヶ所開けられたのみで工事が進められてしまったし、また、昭和40年（1965）文化財保護委員会発行の『全国遺跡地図（愛知県）』、昭和47年（1972）愛知県教育委員会発行の『愛知県遺跡地図』、そして昭和50年（1975）文化庁発行の『全国遺跡地図（愛知県）』においても、当該部分にドットが一つ付されているに過ぎない。

このように、文献上からくる清須城の重要性と遺跡としての控え目な取り扱いとの認識落差は、長い間解消されないまま続いた。そしてこの間の昭和40年代から50年代においては、日本鉄道建設公団による本丸跡推定地を直撃する内容の瀬戸線建設問題が浮上したこともあり（本件は採算ベースに合わない見積られ、やがて、計画中止となる）、本丸跡推定地の保存を巡る緊張した攻防が展開された経緯を持っている。

清須城とその城下町跡を遺跡として再認識するきっかけを作ったのは、昭和57年（1982）度に（財）愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部（本センターの前身）が実施した朝日西遺跡の発掘調査であった。名古屋環状2号線建設に伴い五条川の左岸に設定されたこの遺跡の発掘調査は、前年度の昭和56年（1981）から始まったのであったが、遺跡名の付け方から理解されるように、弥生時代の大集落遺跡である朝日遺跡との関わりのみが過分に強調されたため、初年度の発掘調査は中世以降の遺構面をことごとく掘りとばすという悲惨な結果に終わっていた。

しかし、昭和57年（1982）度の調査では、発掘調査区が名古屋市蓬左文庫所蔵の『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた外堀内に含まれていることを念頭におき、上面から慎重に検出を進めたところ、果して、16世紀代を中心とする清須城存続時の良好な遺構面と大量の遺物とが発見されるに至ったのである。これにより、清須城とその城下町の遺構は現地表面下に広い範囲にわたって遺存していることが推測され、翌昭和58年（1983）には五条川右岸の名古屋環状2号線内で遺構確認のための試掘調査が実施されることになる。そしてこの調査により、該期の遺構・遺物が絵構えの範囲内に広く展開していることが判明したのである。

名古屋環状2号線建設に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査が昭和59年（1984）から本格化すると、絵図に描かれた水堀や中堀、屋敷割の溝、井戸跡などが次々と姿を現し始めた。そして同時に、それらの調査成果はたまたま同年度から県教育委員会の手によって編集が始まっていた遺跡地図の改訂版

『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』（1986）の中に盛り込まれていく。これは必ずしも総構えの範囲全域を遺跡に含めたものではなかったが、しかし、ここでようやく、清須城とその城下町跡が周知の遺跡として行政的に認識され始めたのであった。

清洲城下町遺跡の中央、すなわち現在の清洲町の市街地の中心部分を流れている五条川の改修計画が具体化してきたのもちょうどこの頃、昭和59年（1984）のことであった。当時、愛知県文化財保護審議会委員を務めておられた故浅野清博士（建築史）から河川改修工事に関する情報を得た県教育委員会文化財課は、さっそく事業者である県土木部河川課に対して、周知の埋蔵文化財包蔵地における工事の計画書を提出するように指導し、直ちに調整に入った（浅野博士は、たまたま地元住民から用地買収に伴う住居移転の相談を受け、この計画を察知されていたのである）。

五条川改修は大雨時における排水量不足を解消すべく計画されたもので、それによれば、遺跡範囲内では左右両岸を掘削して川幅を拡幅し、かつ、部分的に蛇行を和らげて川筋の修景を図ろうとするものであった。掘削部分は主として左岸域を対象としていたが、部分的には右岸の本丸跡推定地にも及んでいた。また、左岸域では奥行き50m近くまでが削られるところも含まれていた。

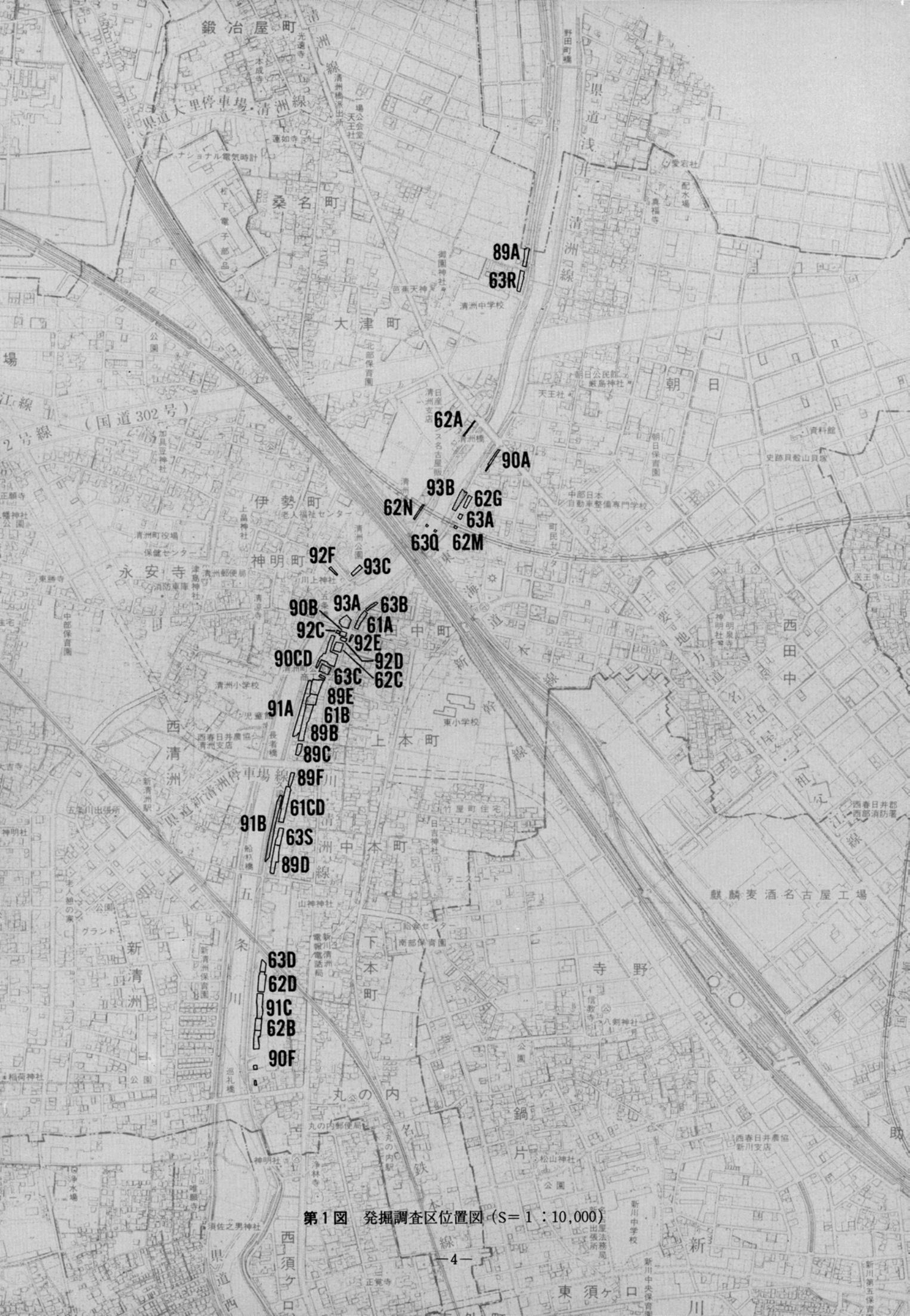
県土木部河川課、同河川工事事務所、同五条川出張所と県教育委員会文化財課及び設立されたばかりの本センターとが、本件取扱いについて本格的な協議に入ったのが、昭和60年（1985）度。この時点でも、遺跡として周知された時期を巡って激烈な議論が繰り返され、また、保存のための計画変更が全く困難であることも分かった。そこでまず、記録保存の対象とする調査範囲を確定するための資料と調査費積算用の資料とを得るために、昭和61年（1986）度前半期に川筋に沿って試掘調査を実施することとした。その結果は、これまでの知見を裏づけるものであったばかりでなく、一部に時期が複合し、複数の遺構面をもつ部分があるらしいことも判明した。これにより、北は清洲町立清洲中学校から南は名古屋鉄道本線以南までの約2kmの範囲、調査面積にして約35,000㎡が調査対象となった。

本調査は昭和61年（1986）度から開始し、平成5年度現在においてもなお継続中である。毎年度、用地買収が完了した地点を中心に5,000㎡程度の調査を進めていくこととし、また、安全柵の設置、表土剥ぎ、埋め戻しについては事業者側で実施するように取り扱った。（加藤安信）

註

「キヨス」の表記は、現在では「清洲」に統一されており、遺跡の名称は「清洲城下町遺跡」としている。しかし、基本的には「清須」の表記が古く、「洲」字が混用され始めるのは15世紀末以降のことであり、近世においてもなお「須」字が支配的であった。このような歴史的背景をもとに、昭和63年（1988）に開催された第5回東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』では現在の地名を示すとき以外は「清須」の表記を用いた。

本書では、こうした動向を踏まえ、固有名詞・歴史的名辞としては「清須」、遺跡の名称・現在の地名は「清洲」の表記を用いている。（鈴木正貴）



第1図 発掘調査区位置図 (S=1 : 10,000)

第2節 調査成果と遺跡の研究

清須城廃城（清須越し）以降の清須城に対する認識の過程を、梅本博志は4期（Ⅰ期－禁忌の時代・Ⅱ期－追憶の時代・Ⅲ期－顕彰の時代・Ⅳ期－研究の時代）に区分してまとめた⁽¹⁾。このうち梅本がⅣ期とした研究の時代は、更に3小期に細分される。Ⅳ－1期（1943～1982）は文献学的・地理学的な研究が進められた時期で、林良幹の著作をはじめとする成果を得ている。Ⅳ－2期（1982～1988）は、前節で触れたように清須城・城下町が遺跡として認識され、発掘調査された段階である。この段階の成果は遺跡の認識・調査事例の蓄積・出土遺物（遺構）の個別資料の検討が中心となっている。Ⅳ－3期（1988～）は、1988年の第5回東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』（清須シンポと略す）を境に区分できる。清須シンポにおいてようやく遺跡全体の把握・歴史的評価・研究の方向性の提示などがなされ、一定の成果を得た。ただし、清須シンポは対象となった調査地点の報告の未刊行、遺構・遺物の詳細な考察の不足といった状態で実施されており、考古学的資料の基礎的な分析を踏まえて遺跡を評価し直すことがⅣ－3期以降の中心的な課題となっている。

こうした遺跡の評価を巡る変遷の中で、遺跡調査の精度と視点も同様に変化している。特に問題となる点は、①遺構面の把握・②地震痕の認識の2点である。前者は、盛土・河川性堆積物が複雑に層をなす地点での遺構面の認識が調査年次によって異なる事態を引き起こしている（本章第4節参照）。後者は、1988年以降に発見された天正地震の痕跡を意識することで、遺構面の認識や遺構の時期の認定に関わるデータを加えることができるようになってきている（本章第3節参照）。

戦国時代から江戸時代にかけての都市遺跡研究の急激な進展を鑑みると、清須城下町の調査に関わる我々が課せられている問題点は多岐にわたる。この状況を踏まえ、本書では、全遺構・遺物の資料化を目標に掲げて編集しつつ、各事象に対する評価を加えている。（鈴木正貴）

註 (1) 梅本博志（1987）「調査の経過」『清洲城下町遺跡Ⅰ』清洲町教育委員会

第1表 清須城・清須城下町の研究史略年表

1943年（昭和18年）	林良幹『清須城懐古録』
1961年（昭和36年）	東海道新幹線建設に伴うボーリング調査 文化財保護委員会編『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
1969年（昭和44年）	清洲町史編纂委員会『清洲町史』
1981年（昭和56年）	名古屋環状2号線建設に伴う発掘調査開始
1986年（昭和61年）	五条川河川改修に伴う発掘調査開始
1987年（昭和62年）	ふれあい広場整備に伴う発掘調査（清洲町教委による調査・報告書刊行） 県道清洲新川線建設に伴う発掘調査開始
1988年（昭和63年）	第5回東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』開催
1990年（平成2年）	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書『清洲城下町遺跡』の刊行 （愛知県埋蔵文化財センター初の清須城下町関連の正報告書）

第2表 参考文献一覧表

通史・概要

- ① 林良幹『清須城懐古録』1943
- ② 清洲町史編纂委員会『清洲町史』1969
- ③ 東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－資料編』1988
- ④ 東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－研究報告編』1989
- ⑤ 愛知県教育委員会『中世城館分布調査報告書（Ⅰ）尾張地区』1992

発掘調査報告書

- ① 清洲町教育委員会『清洲城下町遺跡Ⅰ』1987
- ② 清洲町教育委員会『清洲城下町遺跡Ⅱ』1990
- ③ 財愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡』1990
- ④ 財愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡Ⅱ』1992
- ⑤ 財愛知県埋蔵文化財センター『朝日西遺跡』1992
- ⑥ 財愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990
- ⑦ 財愛知県埋蔵文化財センター『外町遺跡・清洲城下町遺跡Ⅲ』1994

概要報告

- ① 「朝日西遺跡Ⅰ」 財愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984
- ② 「朝日西遺跡Ⅱ」 財愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985
- ③ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985
- ④ 「朝日西遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和60年度』1986
- ⑤ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和60年度』1986
- ⑥ 「土田・廻間遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和60年度』1986
- ⑦ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和61年度』1987
- ⑧ 「土田・廻間遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和61年度』1987
- ⑨ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和62年度』1988
- ⑩ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和63年度』1989
- ⑪ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成元年度』1990
- ⑫ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成2年度』1991
- ⑬ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成3年度』1992
- ⑭ 「外町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成3年度』1992
- ⑮ 「清洲城下町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成4年度』1993
- ⑯ 「外町遺跡」 財愛知県埋蔵文化財センター『年報平成4年度』1993

この他に1986年以降毎年、愛知県教育委員会・財愛知県埋蔵文化財センターから刊行される『愛知県埋蔵文化財情報』にも報文が記載されている。

資料紹介・研究

- 梅村清春（1986） 「遺物からみた城下町その2」『埋蔵文化財愛知No. 3』
- 梅村清春（1987 a） 「清洲城下町遺跡出土の木製挽物漆器について」『年報昭和61年度』

- 梅村清春（1987 b）「木製品にみる清洲城下町の暮らし」『教育愛知Vol.35-3』
- 梅本博志（1985）「1984年出土の木簡・清洲城下町遺跡」『木簡研究第7号』
- 梅本博志（1987 a）「1986年出土の木簡・清洲城下町遺跡（1）」『木簡研究第9号』
- 梅本博志（1987 b）「清洲城下町出土の墨書木製品について」『年報昭和61年度』
- 梅本博志（1989 a）「信長期における清須城下町の様相」『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』
- 梅本博志（1989 b）「清須城とその城下町-発掘調査の成果を中心に-」『月刊文化財312』
- 江原昭善他（1986）「人・獣骨類の出土した大溝」『年報昭和60年度』
- 遠藤才文（1985 a）「遺跡としての清洲城下町」『埋蔵文化財愛知No.1』
- 遠藤才文（1985 b）「清洲城下町遺跡出土紀年銘瓦」『埋蔵文化財愛知No.2』
- 遠藤才文（1985 c）「郷土再発見 清洲城下町遺跡」『教育愛知Vol.33-9』
- 遠藤才文（1986 a）「城下町調査の成果と課題」『埋蔵文化財愛知No.4』
- 遠藤才文（1986 b）「朝日西遺跡出土の「文禄二年」「慶長三・四年」紀年銘資料」
『貿易陶磁研究No.6』
- 遠藤才文（1989 a）「研究会の開催によせて-「清須」研究の成果と課題-」
『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』
- 遠藤才文（1989 b）「清須城（尾張）」『季刊考古学26』
- 遠藤才文（1990）「尾張の城館と城下町」『教育愛知Vol.38-9』
- 遠藤才文他（1992）「尾張国城館図考」『中世城館分布調査報告書（I）尾張地区』
- 小澤一弘（1985）「遺物からみた城下町その1」『埋蔵文化財愛知No.2』
- 小澤一弘（1987）「清洲城下町出土の瓦について」『年報昭和61年度』
- 小澤一弘（1990）「清洲城下町遺跡出土木製立像」『埋蔵文化財愛知No.23』
- 金原宏（1985）「朝日西遺跡出土『楽師』黄瀬戸椀」『埋蔵文化財愛知No.1』
- 金原宏（1986）「清洲城下町の堀の復元」『年報昭和60年度』
- 小嶋廣也（1992）「清洲城下町遺跡」『埋蔵文化財愛知No.28』
- 佐藤公保（1986 a）「1985年出土の木簡・朝日西遺跡」『木簡研究第8号』
- 佐藤公保（1986 b）「中世土師器研究ノート（1）」『年報昭和60年度』
- 佐藤公保（1987）「中世土師器研究ノート（2）」『年報昭和61年度』
- 佐藤公保（1989 a）「清須周辺の中世村落」『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』
- 佐藤公保（1989 b）「考古資料からみた16世紀後半の清須城下町」
『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』
- 佐藤公保（1989 c）「尾張の土師器煮炊具」『マージナル9』
- 下村信博（1989）「文献からみた清須城下町の変遷」『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』
- 下村信博（1990）「文献資料からみた城館研究」『教育愛知Vol.38-9』
- 鈴木正貴（1988）「1987年出土の木簡・清洲城下町遺跡」『木簡研究第10号』
- 鈴木正貴（1989）「清洲城下町遺跡出土井戸桶に関する考察」『年報昭和63年度』
- 鈴木正貴（1990 a）「清洲城下町遺跡出土の柿経」『埋蔵文化財愛知No.21』
- 鈴木正貴（1990 b）「愛知県清洲城下町遺跡出土の漆器小考」『マージナル10』

- 鈴木正貴（1990c）「尾張の城館遺跡出土の陶磁器」『考古学フォーラム1』
- 鈴木正貴（1990d）「1989年出土の木簡・清洲城下町遺跡」『木簡研究第12号』
- 鈴木正貴（1991a）「天正地震下層の出土遺物」『年報平成2年度』
- 鈴木正貴（1991b）「愛知県下出土の朝鮮王朝陶磁」『教育愛知Vol.39-1』
- 鈴木正貴（1992a）「清洲宿場町の考古学」『埋蔵文化財愛知No.28』
- 鈴木正貴（1992b）「愛知県清洲城下町遺跡」『日本考古学協会年報42』
- 鈴木正貴（1992c）「清洲城下町遺跡出土の陶製狛犬」『埋蔵文化財愛知No.29』
- 千田嘉博（1989）「清須城とその城下町―地籍図による復元的考察」
『清須―織豊期の城と都市―研究報告編』
- 千田嘉博（1990）「城館調査の方法と目的」『教育愛知Vol.38-9』
- 高橋信明（1987a）「市町村だより清洲城下町遺跡」『埋蔵文化財愛知No.9』
- 高橋信明（1987b）「1986年出土の木簡・清洲城下町遺跡（2）」『木簡研究第9号』
- 長島広（1986）「朝日西遺跡の井戸について」『年報昭和60年度』
- 中野良法（1988）「清洲宿についての一考察」『年報昭和62年度』
- 服部哲也（1985a）「1984年出土の木簡・朝日西遺跡」『木簡研究第7号』
- 服部哲也（1985b）「朝日西遺跡出土の紀年銘資料及び共伴遺物」『年報昭和60年度』
- 服部俊之（1993）「濃尾平野における歴史時代の地震痕」『年報平成4年度』
- 藤澤良祐（1991）「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 宮腰健司（1985）「清洲城下町遺跡出土穿孔墨書土師皿」『埋蔵文化財愛知No.1』
- 森勇一・鈴木正貴（1989）「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」
『活断層研究7』
- 森勇一・鈴木正貴（1990）「清洲城下町遺跡及びその周辺から発見された歴史地震の記録」
『歴史地震5』

註

- 1 資料紹介・研究に取り上げた文献は、清洲城下町遺跡に関する考古学的資料を呈示したもの、または、この資料を中心に論考を加えたものを中心に集めた。従って、各種シンポジウム資料などに記載されたような「清須城下町」に付いて触れたものを網羅したものではない。また、現地説明会・発掘調査成果報告会等の資料や、新聞記事、そして本センター作成の普及用パンフレット、資料貸出に伴う展示解説等も除外した。
- 2 資料紹介・研究に取り上げた文献の内、『年報』については特に断わりのない限り愛知県埋蔵文化財センターが刊行したものを指している。

第3節 地形と環境

A 遺跡の立地

濃尾平野の中の清洲（地形的背景）

清洲城下町遺跡の立地する濃尾平野は、岐阜県美濃地方南西部から愛知県尾張地方西部にかけて広がる日本有数の沖積平野である。東高西低の地形を呈し、北東より扇状地地帯・自然堤防地帯・三角州地帯という沖積平野の基本的な3つの地形帯が帯状の配列を呈している（第2図）。この濃尾平野は木曾川をはさんで愛知県側を尾張平野、岐阜県側を美濃平野と呼ぶことがあり、それぞれ名古屋市、岐阜市・大垣市が文化・産業の中心をなし、古くから多くの人々の生活の場となってきた。こうした営みを支えるのが、木曾三川を中心とした豊かな水資源である。この地域の人々は、幾度となく姿を変え氾濫を繰り返す河川に脅かされ、時には戦い、その結果として肥沃な土壌を手に入れ、稲作を初めとした生活を支える基盤を得たのである。

本遺跡は、濃尾平野形成の中心的な役割を果たした木曾川の分派流五条川の中流域に位置している。この地域は典型的な自然堤防地帯に属し、自然堤防および後背湿地による小起伏がいたるところで観察される。

地質時代から歴史時代へ（地質的背景）

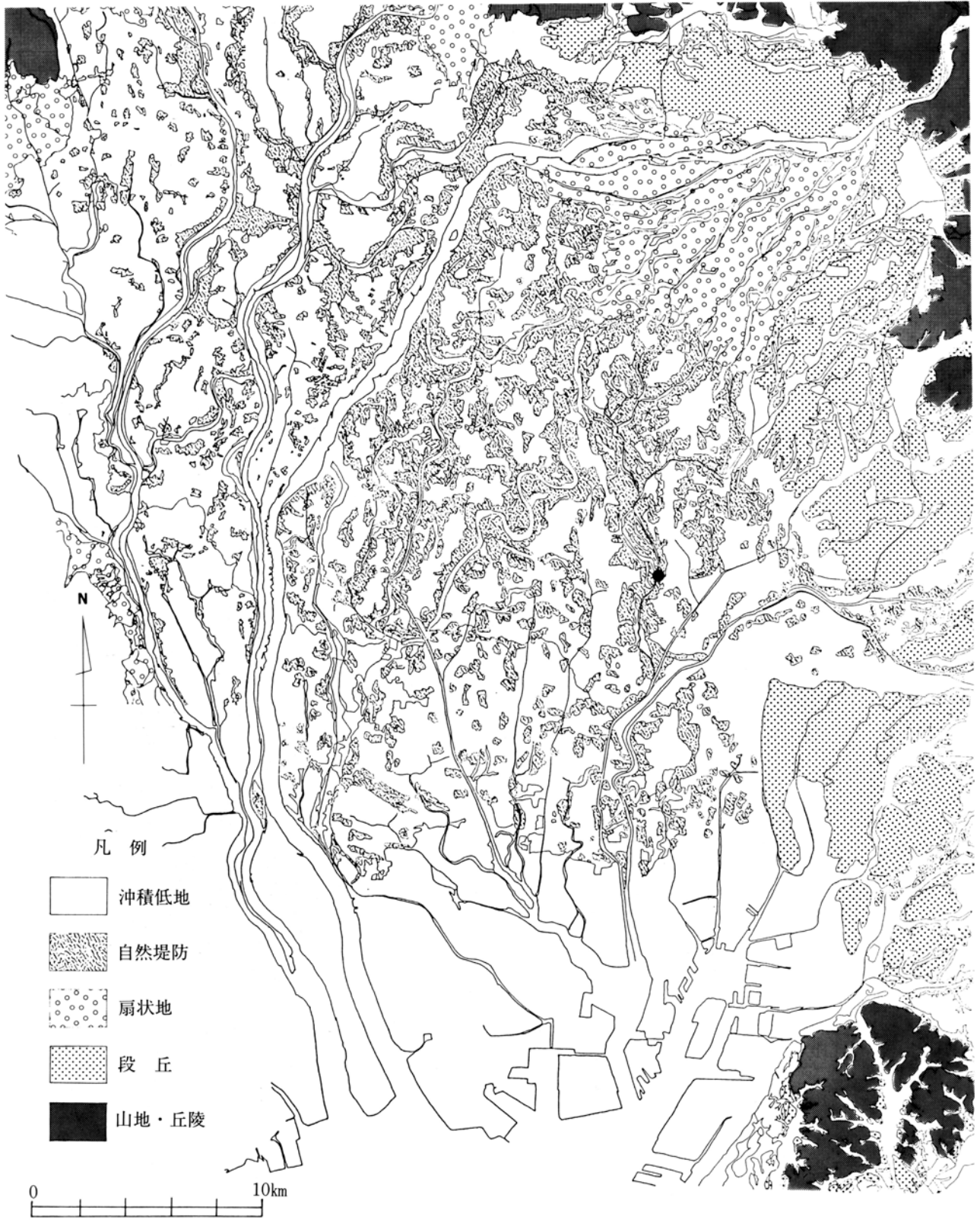
濃尾平野地域では様々な目的のために実施された多くのボーリング資料が得られている（第3図）。第4図は、こうした資料の中から清洲城下町遺跡の成因を考えるために作成した地下断面図である。ほとんどのボーリングは地表から1層目の礫層に到達する深度まで掘られている。この最初に到達する礫層は、最終氷期最盛時の最低位海面に対応して形成された「第一礫層」と呼ばれる礫層で、沖積層の基底礫層となっている。この礫層は犬山扇状地から次第に深さを増し、その上端は清洲周辺で30m程度、木曾三川河口部付近で50～60m程度の深度を有する。

気候の温暖化にともない海面が上昇し始めると現在の平野部にも海域の拡大が及んでくる。第4図の第一礫層上部に砂層の発達が見られるが、これは平野部への海域拡大の際に形成された三角州の前置層にあたる砂層で「沖積下部砂層」（濃尾層）である。

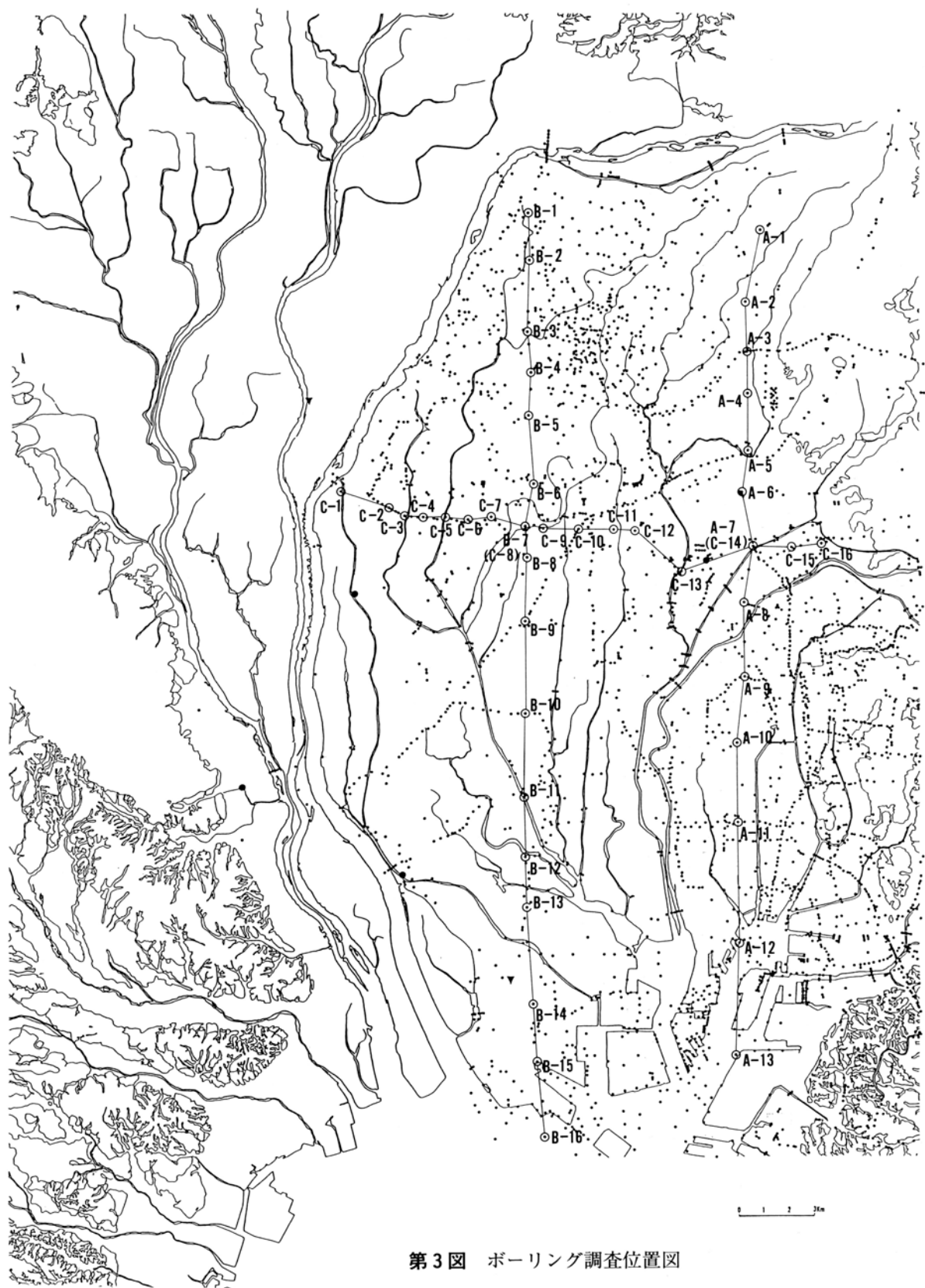
「沖積下部砂層」の上位に広がる泥質な堆積物は、「沖積中部泥層」（南陽層下部）である。この地層は9000年前頃から本格化した縄文海進にともない、大垣市付近まで拡大した伊勢湾の底置層として堆積したものである。一般に濃尾平野西部で厚く30m程に及ぶが、本遺跡周辺では5～10m程度の厚さしかない。

縄文海進の高頂期の後、海面はわずかながら低下しはじめる。この頃から河川の堆積作用が強まり、海側への急速な堆積物の運搬が行われた。この際に形成された三角州前置層を形成する砂層が「沖積上部砂層」（南陽層上部）で、この地層は現在も形成されつつある。同時に、三角州頂置層の部分では河川による下刻をうけ、その河川の氾濫なども手伝って自然堤防や後背湿地などの起伏に富んだ平野を形成した。

汀線の南下による陸域の拡大は決して連続的に進んだわけではない。それは、井関（1974）などの

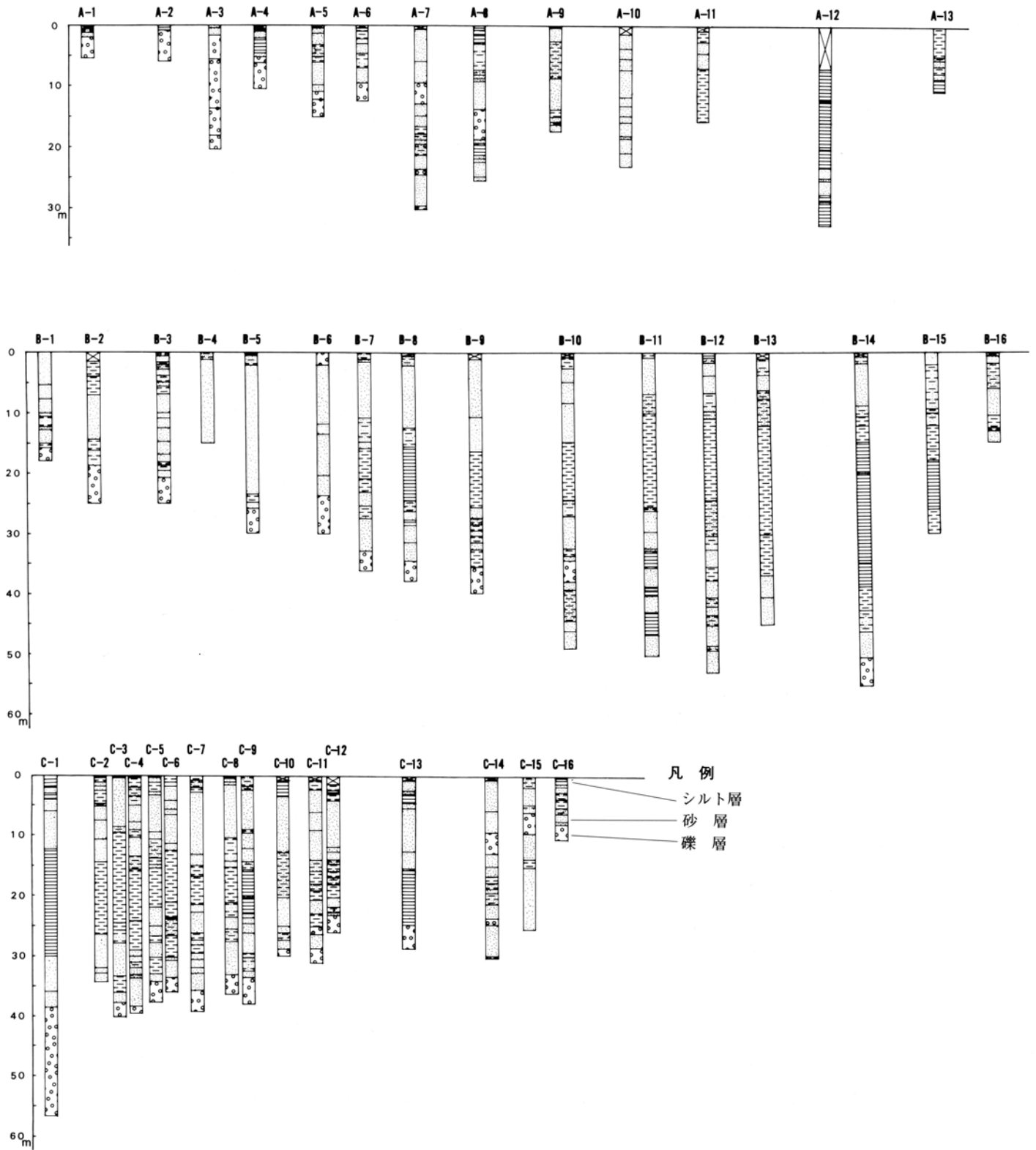


第2図 濃尾平野の地形帯（黒丸は清洲城下町遺跡の位置）



第3図 ボーリング調査位置図

清洲城下町遺跡Ⅳ



第4図 ボーリング調査の結果 (愛知県防災会議地震部会, 1983他より作成)

ほか森（1992）、服部（1993）などが指摘するように、朝日遺跡・山中遺跡などの周辺に砂により構成される、埋没した微高地が存在し、かつ微高地が自然堤防の微高地の方向とは調和的でなくむしろ現在の海岸線に平行するものであることから導かれる。森（1992）はこうした埋没微高地のうち、岐阜県海津郡平田町須脇砂丘（西沢、1978）から海部郡大治町の馬島砂丘（西沢、1978）を結ぶものを第一浜堤、稲沢市一色長畑遺跡・堀之内花ノ木遺跡、西春日井郡清洲町の朝日遺跡を結ぶものを第二浜堤とよびそれぞれ縄文時代晩期～弥生時代前期、縄文時代中期頃に形成された浜堤列であるとしている。またさらに、服部（1993）は一宮市の山中遺跡周辺にも同様の埋没微高地が存在する可能性を指摘している。一見平坦にみえる濃尾平野に存在した微高地と低地の組合せが、弥生時代以降の居住域と水田域をたくみに造りだしていたものと思われる。

清洲城下町遺跡の基盤層とされている砂層は従来、上部砂層として一括されていた。しかし、遺跡周辺のボーリング資料や発掘調査の際の深掘りトレンチなどで、砂層の下部から2～3 mに達する淡水域に堆積したと思われるシルト層が確認できる地域が存在する。これは、縄文海進以降の海退にもなって三角州の前置層として形成された砂層（上部砂層）のさらに上部に堆積する地層であり、上部砂層からは区分すべきものであろう。これを最上部粘土層と呼ぶ場合もあり、この上位に堆積する砂層も上部砂層とは区分すべきではないであろうか。また、次項でふれる天正地震による噴砂が大量に噴出している地域もあり、従来の砂層＝上部砂層とする考えは今後見直されるべきである。

基本層序

五条川沿い南北1.8 kmに及ぶ調査区の基本層序を一括して語ることは不可能であり正確さを欠く。また、地震痕についての認識が定着する以前と以後とでは、地層の識別についての考え方も異なっている。従ってここでは記録されている資料をもとに、第4節で分けられたA～Fの6地区について模式的な柱状図を作成し、基本層序を簡単にまとめることにする。

a 御園地区

① 89A区

本調査区の基盤層は標高3.3 m以下に分布する灰色シルト層である。このシルト層は北側で2 mほどの比高差を有する湿地状の凹地を形成している。凹地を埋積している堆積物は、下部は自然堆積と考えられる粘土、上部は16世紀末～17世紀初頭の整地層である。さらに基盤のシルト層を引き裂いて上昇する砂脈（天正地震の地震痕）も観察される。

② 63R区

本調査区の基盤層は標高1.5 m以下に分布する砂層で、その上位には下部に山茶碗を包含するシルト層（層厚約1 m）、砂層（同約0.2 m）シルト層（同約1.1 m）が堆積している。調査区南部で五条川の旧流路と考えられる凹地が存在している。山茶碗を包含するシルト層中に少なくとも2回の洪水を示すような砂層の堆積が観察される。

b 本丸地区

① 62A区

本調査区の基盤層は標高2.5 m以下に分布するシルト層である。シルト層の上部には、緩やかな

溝状の凹地が形成されており、整地土で覆われていた。

② 62N区

本調査区の基盤層は、62A区より連続すると考えられる標高1.0m以下に分布するシルト層である。このシルト層の上部には整地土が堆積している。

c 田中町地区

① 62G区

本調査区の基盤層は標高2.0m以下に分布する黒灰色粘土層である。この粘土層の上位に古代～中世以前に堆積したと思われるシルト層が堆積している。このシルト層上部には古代～中世の遺構が展開している。さらにこれを覆うシルト層の堆積がみられ、この上部に城下町期前期の遺構が展開する。

② 63A区

62M区と同様な層序を呈しているが、中世の遺構が検出された面に1.5m程度の比高差があり、この間に中世以前の微高地の存在が推定される。

③ 62M区

本調査区の基盤層は標高0.3m以下に分布する砂層である。この上位には古代～中世にかけての層厚2m以上のシルト層の堆積が認められる。これより上位の地層は大溝の埋土（シルト層）に覆われていた。

d 五条橋地区

① 63B区

本調査区の基盤層は標高2.2m以下に分布する粘土層で、その上位には砂とシルトの互層、さらに上位に城下町期前期の基盤となる砂層が堆積する。これより上位は近世の人為的な埋土と考えられる堆積物で覆われ、明瞭な整地層は確認できない。

② 61A区

本調査区の基盤層は標高2.5m以下に分布する砂層で、その上位には層厚0.6m程度のシルト層が堆積している。このシルト層が城下町期前期の基盤であり、同時期の遺構はこの面から掘り込まれていた。さらにこれらの上位に整地層が確認されている。

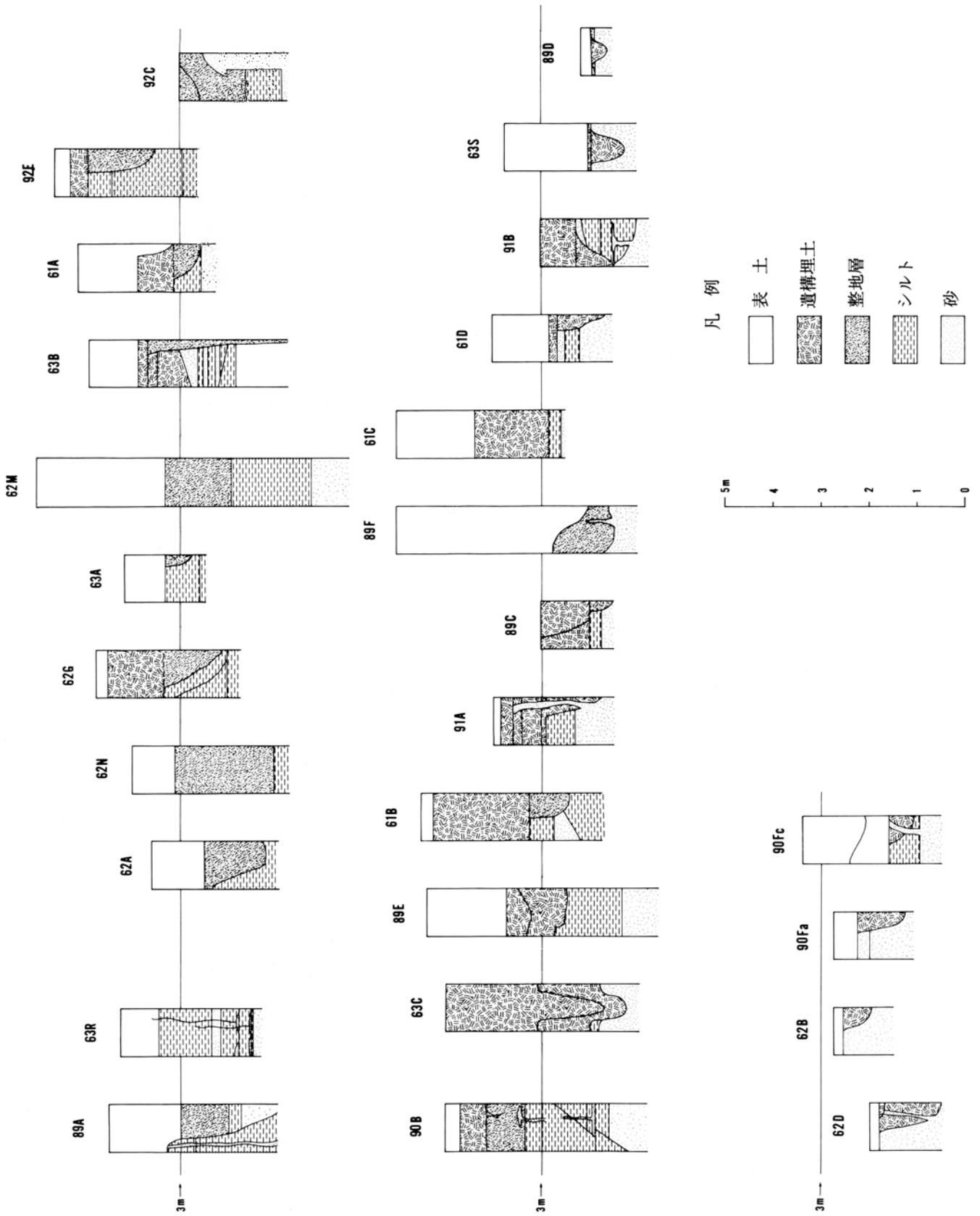
③ 92E区

標高3.0m以下のシルト層の上位に層厚1.6mの砂とシルトの数cmオーダーの互層、さらに上位にはシルト層が堆積している。平成4年度年報には、この砂とシルトの互層は、県道新川清洲線関連の調査で発見された同様の互層とともに、洪水性堆積物として報告されている。しかし、この地層は、非常に規則正しく成層していること、五条川の水面からかなり高い位置に堆積していることなどから洪水性の堆積物とは考えにくい。むしろその分布が五条川左岸の流路変換点（北－南方向から北東－南西方向）付近に限られ（堆積の場にあたる）、シルト－砂の堆積サイクルが夏期の高水位期におけるシルト堆積と冬季の低水位期の季節風による砂の堆積の規則的変化に調和的であることから、小規模ではあるが河畔砂丘による堆積物と考えたほうが良いと思われる。



遠藤才文他（1992）「尾張国城絵図考」
 『中世城館分布調査報告書（Ⅰ）尾張地区』
 の復元図をもとに編集・作成した。
 黒丸は調査区のおおよその位置を示している。

第5図 清須城下町の堀の復元と調査区位置図



第6図 土層セクション模式図

④ 92C区

標高0.8m以下に分布する砂層の上位に旧五条川の堆積物であるシルト層が堆積している。この上位には城下町期前期の包含層が堆積していると思われるが、天正地震の噴砂による攪乱を激しく受けている。

⑤ 90B区

基盤層となる標高1.6m以下の砂層を削り込む旧五条川の堆積物（粘土・シルト）が確認された。この堆積物は標高3.5m付近まで確認され、これより上位の標高4.0mまでは整地層が確認されこの面に城下町期の遺構が展開している。

e 本町地区

① 89E区

標高1.3m以下に砂層、その上位2.7mまでは古代～中世にかけて堆積したと思われるシルト層が重なる。このシルト層上面に城下町期前期の遺構が展開している。さらに0.5～1.0mの整地層が重なり城下町期後期の遺構面となる。

② 61B区

古代～中世にかけて堆積したと思われるシルト層の上位に層厚0.5m程度の砂層を挟み、さらに上位にシルト層が堆積する。砂層上面に城下町期の遺構が、シルト層上面に城下町期～宿場町期の遺構が展開する。

③ 91A区

標高2.3m以下に砂層が、2.9mまでの間にシルト層が堆積している。シルト層の上位はすべて整地層であるが、天正地震の噴砂によって城下町期前期と後期の境界が明瞭に区分される。

④ 89C区

標高1.9m以下に分布する砂層上に0.2m程度のシルト層が堆積している。このシルト層上面には宿場町期前期の畑が展開している。

f 南部地区

南部地区は南北に長い地区であるが、他の地区の不安定な層序と比較すると非常に安定した層序を示している。この地区の基盤層は砂層である。砂層の上限は一般的に南部ほど低い標高を示す。これは城下町期以降の削剝ばかりでなく、自然堤防地帯から三角州地帯への地形的な変化を物語っている可能性が強い。この砂層の上位にはシルト層の堆積がみられる。城下町期後期の遺構面は前述の砂層または、このシルト層上に展開している。

B 清洲城下町遺跡と地震災害

清洲城下町遺跡の変遷には、天正13年11月29日（1586年1月18日）に発生し尾張部を中心に壊滅的被害を及ぼした「天正地震」が大きく関与している。地層中に残された天正地震の痕跡は、清洲城下町遺跡の編年に1つの時間軸を設定するものである。また、同遺跡には、1891年10月28日に発生した

「濃尾地震」による地震の痕跡も数多く残されている。ここでは、2つの地震の地震痕の記載を行い、さらに遺跡における地震災害の影響を述べる。

研究史

考古学と地震学の接点ともいえるべき「地震考古学」という研究分野が、寒川（1988ほか）により提唱されて以来、遺跡における古地震の痕跡（以下、地震痕）が注目され始めた。特に濃尾平野のような軟弱地盤からなる沖積層上に立地する遺跡では規模の違いこそあれ、ほとんどすべての遺跡で地震痕が観察されるようになってきた（服部，1993ほか）。地震痕を残すような地震は、一般に震度V以上の大きな地震であり、古文書などの地震史料にその被害の様子が書き残されていることがある。こうした地震史料の収集は、明治25年（1892）の震災予防調査会発足以来、古地震研究の1つの分野として行われ、その成果は田山（1904）、武者（1941など）から始まり、宇佐美（1987）に至るまで十数冊の書物としてまとめられている。寒川はこの成果と遺跡で発見される地震痕の観察から、遺跡と歴史地震による災害の関わりを、おもに近畿地方の遺跡において明らかにしてきた（寒川ほか，1987はじめ多数）。

濃尾平野では、森ほか（1989，1990）による清洲城下町遺跡をはじめとした朝日遺跡・岩倉城遺跡・尾張国府跡などの遺跡、伊藤（1991）の山中遺跡、服部（1993）の清洲城下町遺跡・堀之内花ノ木遺跡などの報告により少しずつではあるが、遺跡で発見される地震痕の検討が行われるようになってきた。

発生年月日			被害地域及び推定マグニチュード
1096	12	17	畿内・東海道 M=8.0-8.5
1498	9	20	東海道全般 M=8.2-8.4
1586	1	18	畿内・東海道・東山・北陸諸道（「天正地震」） M=7.8±0.1
1605	2	3	東海・南海・西海諸道 M=7.9
1662	11	16	山城・大和・河内・和泉・摂津・近江・美濃・伊勢など M=7.2-7.6
1666	5	31	尾張 M不明
1669	6	29	尾張 M不明
1707	10	28	五畿七道 M=8.4
1715	2	2	大垣・名古屋 M=6.5-7.0
1731	11	13	近江八幡・刈谷 M不明
1802	11	18	畿内・名古屋 M=6.5-7.0
1819	8	2	伊勢・美濃・近江 M=7.2±0.2
1854	12	23	東海・東山・南海諸道 M=8.4
1889	5	12	岐阜付近 M=5.9
1891	10	28	愛知県・岐阜県（「濃尾地震」） M=8.0

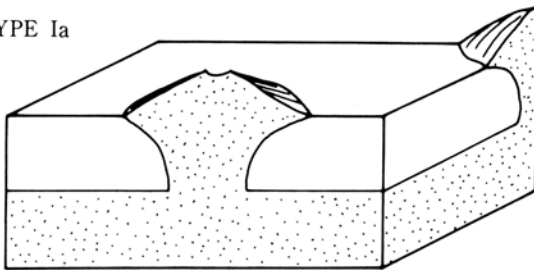
第3表 清洲城下町遺跡関連被害古地震一覧

地震痕の形態的分類

清洲城下町遺跡をはじめとする濃尾平野の遺跡で観察される地震痕は主に、地層に小さな食い違いを生じさせる程度の『断層』・砂層中に異常な堆積構造を残す『液状化』・地表に液状化した砂を噴出させる『噴砂』の3つに分類できる。このうち本遺跡で観察された地震痕は、噴砂がほとんどで、極まれに小規模な断層が観察された。

噴砂はさらに、次の図に示すような4タイプに分類された。

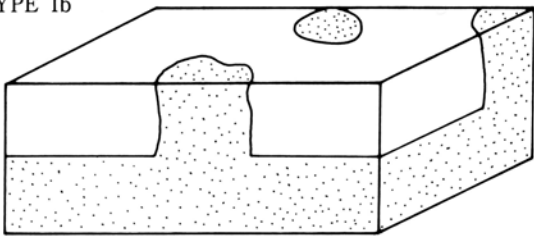
TYPE Ia



噴砂の分類

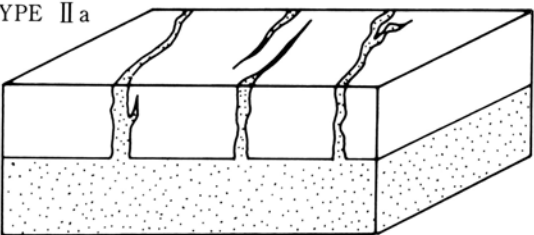
TYPE Ia：地表面に噴き出した噴砂が盛り上がり火山状になったもの（噴砂丘）。砂の噴出口は平面観で円形・楕円形またはTYPE Ibのような直線状を呈する。天正地震の地震痕の典型的なタイプである。

TYPE Ib



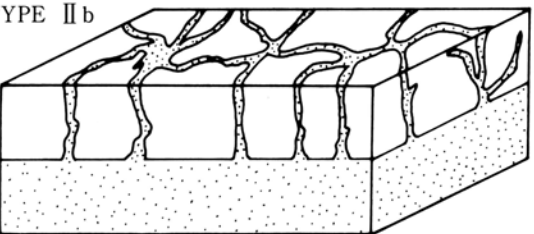
TYPE Ib：TYPE Iaの噴砂丘部分が人為的あるいは自然に削剥され、噴き出し口部分のみが保存されたもの。天正地震の地震痕としてしばしば観察される。

TYPE IIa



TYPE IIa：地表部に直線状の地割れができ、この地割れに下層から噴き出した砂が充されている（砂脈）。濃尾地震の地震痕の典型的なタイプである。

TYPE IIb



TYPE IIb：地表部で観察される砂脈が直線状でなく亀の子状になる。

第7図 地震痕（噴砂）の形態分類

地震痕の記載的事項

歴史時代において、清洲城下町遺跡周辺に被害を与えたと考えられる地震は、地震史料に残っているものだけでも第3表にあげた十数回のある。さらに微小な地震を含めれば何千回という地震が発生しているはずである。しかし本遺跡の発掘調査からは、森ほか（1989）や服部（1993）で報告されている「天正地震」および「濃尾地震」と考えられる地震痕が確認されただけである。

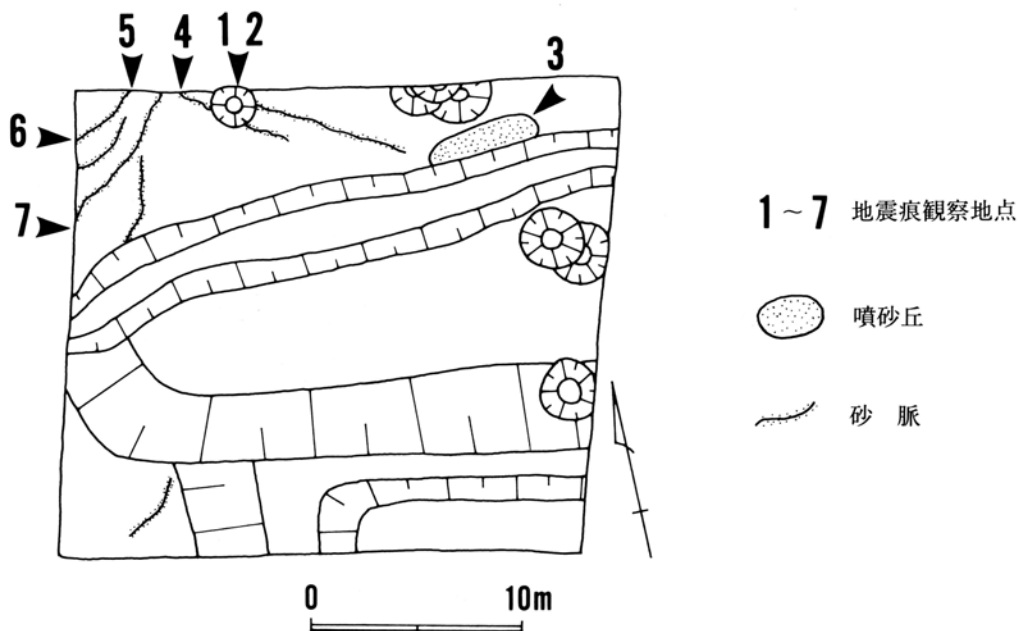
そもそも清洲城下町遺跡において地震痕についての認識が定着したのは、昭和63年度以降の発掘調査であり、本報告書でふれられている昭和61・62年度の発掘調査に関する情報は皆無に等しい。しかし、空撮写真資料をみる限り地震痕と思われる砂脈や噴砂丘状の砂が分布しているので、認識定着以前の調査でも地震痕が検出されていたことは間違いない。したがって、ここで記載する地震痕は、昭和63年度の成果を報告した森ほか（1989）と、それ以降の観察結果に限定しておく。

天正地震による地震痕（参考を参照のこと）

(1) 63C区

清洲城下町遺跡において最初に天正地震の地震痕を確認できたのは、調査区63C区である（森ほか、1989）。以下63R区を含め、森ほか（1989）の記載に若干の修正を加え、あらためて記載を行う。

同調査区では、城下町期後期の清須城の中堀が検出され、その時期の遺構埋土からは天目茶碗などの陶器類が出土した。地震痕は新旧2時期のものが検出された。新期の地震痕は1891年10月28日に発生した「濃尾地震」によるものと考えられる。

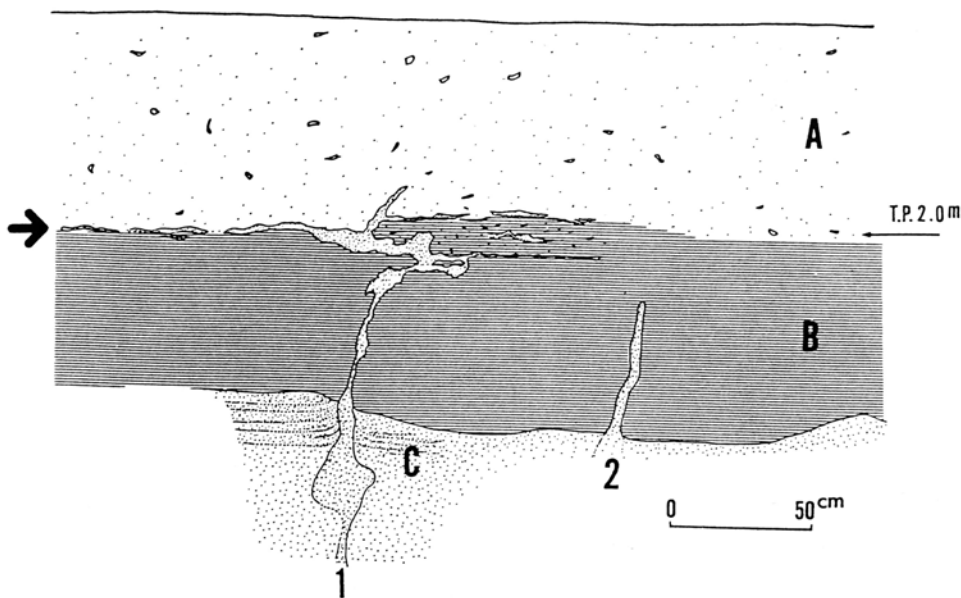


第8図 63C区における地震痕の分布（森ほか1989を改変）

旧期の地震痕は、調査区北側の壁面で観察された（第9図）。この地震痕は形態的には噴砂に分類され、しかも噴き出した砂の上限が16世紀末の整地層に覆われている（第8図の噴砂1、形態的にはTYPE Ia）。ここでは、液状化が起っていない砂層Cを引き裂いて、より下位の砂が噴砂として噴出している。第9図に示した断面図の矢印の位置は当時の地表面を表しているが、地層Aがその出土遺物および土層の観察結果より16世紀末の整地層であると考えられることから、16世紀末頃の地表面と考えられる。噴砂を形成した砂脈の方向はN20°Wを示し、傾斜はほぼ垂直であった。

調査区北東部の凹地には、下位の基盤層から供給されたと推定される縦5m、横3.5m、厚さ0.7mのレンズ状の厚い砂の堆積（第8図の噴砂丘3）が見られた。砂層の下位の凹地状の土層から城下町期前期の遺物が、また砂層を削り込んだ溝の埋土から城下町期後期の遺物が出土している。したがって、この噴砂の噴出時期も噴砂1と同時期と考えられる。なお、この噴砂の噴出口の確認はできなかった。

これら旧期の地震痕を発生させた地震は、①噴砂1が城下町期後期の整地層に速やかに覆われていること（織田信雄による地震直後の大改修と考えられる）、②噴砂1の供給源となった砂層がより下位の砂層であることから地下水位の低い冬季の地震の可能性が高いこと、③噴砂丘3が城下町期前期（16世紀前半）の遺物を含む地層を引き裂き、城下町期後期（16世紀末）の遺物を含む地層に覆われていること、などから考えると天正13年11月29日（1586年1月18日）に発生した「天正地震」であると考えられる。

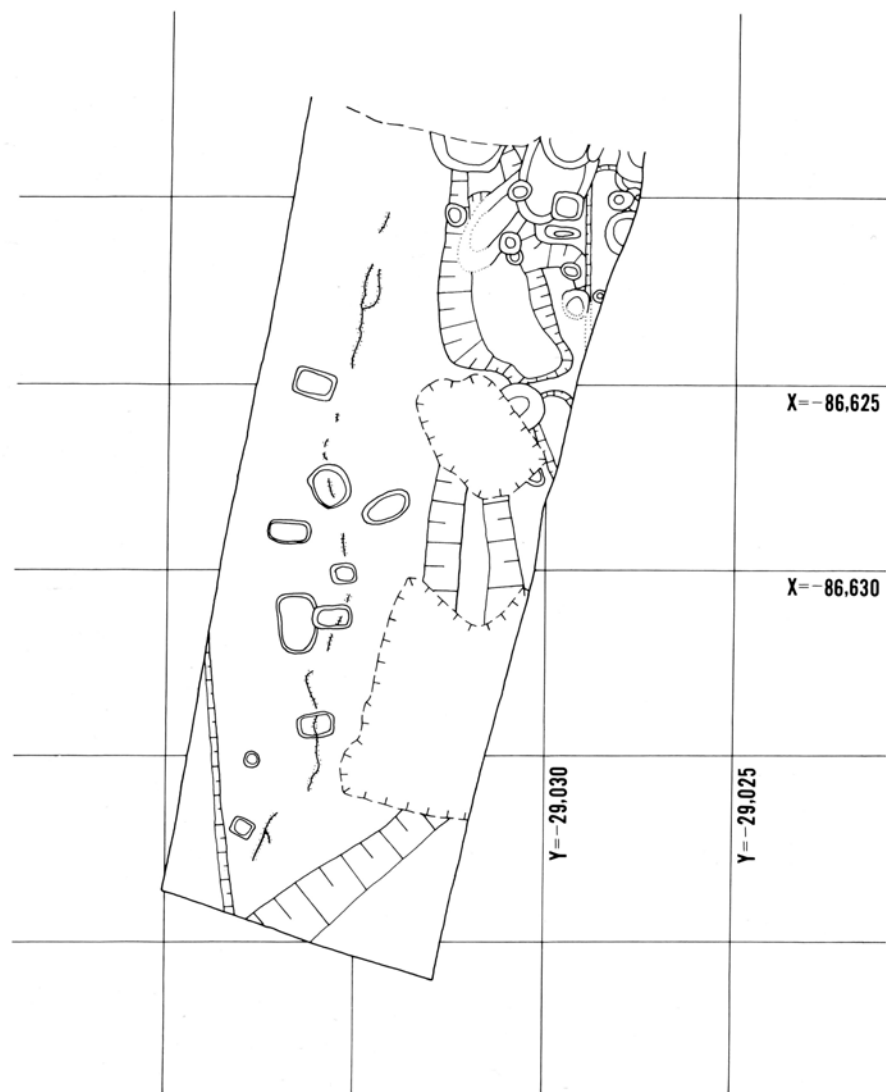


第9図 天正地震と推定される噴砂の痕（第8図の1）

1, 2は噴砂の痕, Aは16世紀末の整地層, Bは16世紀前半の遺物を含む包含層, Cは基盤の砂層（時期不明）。矢印は地震時における地表面と推定される。

(2) 63R区

基盤層の上に、14世紀の遺物を含む砂質シルト層の堆積がみられ、地震痕はこれを引き裂く砂脈として観察された（森ほか、1989、形態的にはTYPEⅡa）。砂脈の平均的な方向性はおおむねN20～40°Eを示し、垂直ないしは80°西に傾いて噴き出していた。砂脈の幅は平均5～8cm、最大幅は13cmに達するところがあった。砂脈の水平方向の延長は最長11m、垂直方向には2m以上に達する。これらの砂脈（噴砂）の頂部は、城下町期後期の遺構埋土で被覆されており、63C区でみられた旧期の地震痕と同時期のものと考えられる。同調査区では3ヶ所で小規模な噴砂丘も確認されている。



第10図 63R区の「天正地震」による砂脈
(砂脈が砂脈)

(3) 91A区

91A区は清須城中堀のすぐ南に位置し、下位より河川性の堆積物と考えられる砂層、シルト層、城下町期前期の包含層、城下町期後期の包含層、清須城廃城以降の盛土層という基本層序で成り立っている。地震痕は調査区のいたるところで観察された。特に地震痕が密集していたのは南北に長細い調査区の中心部付近で、シルト層・城下町期前期の包含層を引き裂き噴砂丘を形成していた（第11図の①～⑥、TYPE Iaの噴砂）。これらの噴砂丘はその上位を16世紀末と考えられる整地層に覆われていたため、天正地震による地震痕と考えられる。

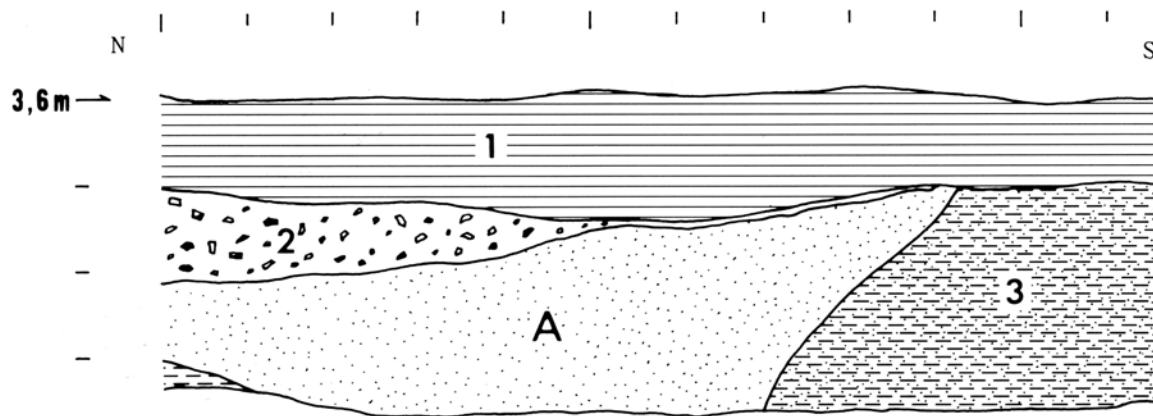
また、同時期の地震痕で、①～⑥の噴砂とは異なる形態の地震痕（噴砂）も観察された（第11図の⑦）。この噴砂は、井戸内部の埋土という物理的強度の弱い部分を選択し噴出していた。地震痕の特徴として、より物理的強度の弱い部分に地震痕が発達する典型的な例である。



第11図 91A区の中央付近に密集する地震痕

①～⑦の白く写っている部分がいずれも天正地震による地震痕である。
①～⑥は噴砂丘を形成するTYPE Iaの噴砂、⑦は井戸に沿って噴き出した噴砂である。

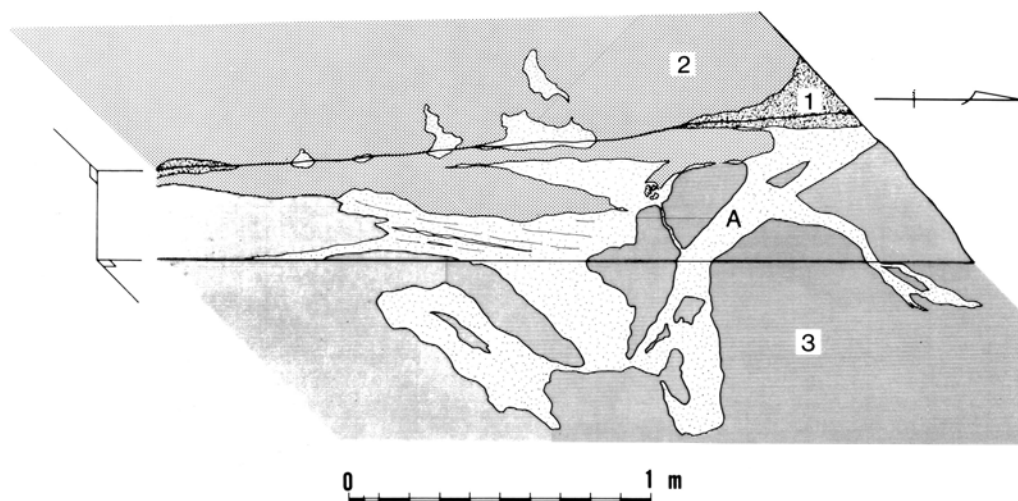
第11図①に現れている地震痕の垂直断面（東西断面）での産状を第12図に示す。この地震痕は城下町期前期の遺物包含層を引き裂いて噴出する典型的なTYPE Iaの噴砂で、噴砂丘の広がり直径2 m以上に及ぶが、噴出口は30cm程度で楕円形を呈していた。噴砂丘を構成する砂は黄褐色の中～粗粒砂で、地震動による堆積構造は特に認められなかった。噴砂丘の上位には、人為的に速やかに埋め立てられたと考えられる整地層が、さらに上位には江戸時代前期の遺物包含層が堆積している。



第12図 第11図①に現れた噴砂丘の断面図（北端は確認できない）

1：江戸時代前期の遺物包含層，2：16世紀末の整地層
3：城下町期前期の遺物包含層，A：TYPE Iaの噴砂
（スケールは1目盛20cm）

同調査区の南端に展開するSK6151（遺構図参照）でも、天正地震の地震痕であることを証明する砂脈が観察された（第13図）。この地震痕は、城下町期前期の遺物包含層（第13図2・3）を引き裂き上端を城下町期後期の遺物を豊富に包含するSK6151の埋土に削剝されていた。この地層の新旧関係は、やはり天正地震による地震痕であることを裏付けている。



第13図 SK6151でみられた砂脈

1：SK6151の埋土（城下町期後期），2，3：城下町期前期の遺物包含層，A：TYPE Ibの砂脈

第11図⑥の地震痕（TYPE Iaの噴砂）については、発掘調査の進行とともに変化する噴砂丘の形状を立体的に観察することができた（第14図）。16世紀末の整地層を取り除いた状態、つまり天正地震発生当時の地表面には、直径2 m程度の噴砂丘の広がりが観察されたが、掘り下げを行うとともに、砂の水平的な広がりは狭まり始め、砂層到達直前では、直径30cm程度の円形の噴出口が出現した。その3次元的な形状は『キノコ状』とでもいうべきであろうか。

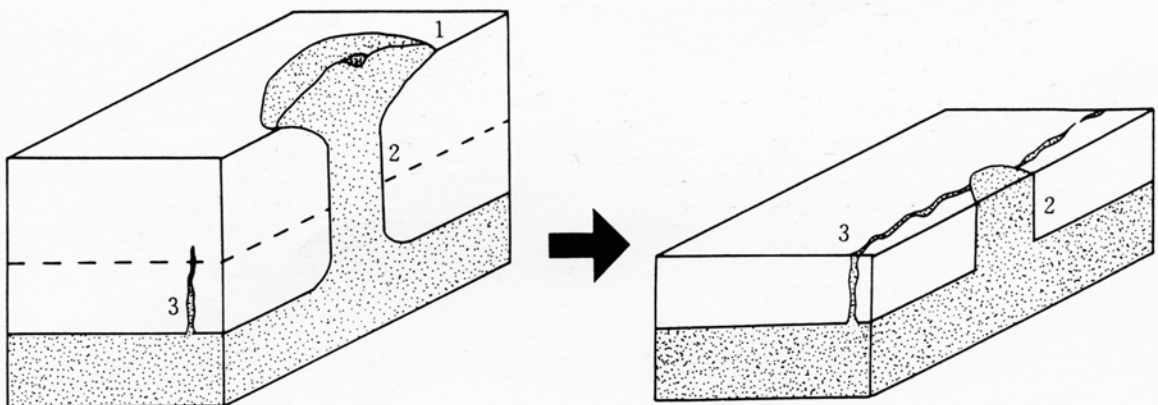
また、この噴出口周辺には、方向に規則性のない幅2～30mm程度の砂脈をともなっていた。この砂脈は、おそらく天正地震発生中に砂の液状化が起こり、砂層内部の圧力の上昇とともに上位の地層（この場合砂質シルト層）を引き裂く際に発生したと考えられる。しかし、近接する地点に噴砂丘を形成させるような噴出口が開いたために急激に圧力が開放され、それ以上の砂脈の発達は起こらなかったであろう。このような成因による砂脈の存在も考えられるため、地震痕による旧地表面の認定には十分な観察が行われなくてはならない。



1：噴砂丘の広がり



2：噴出口



第14図 第11図⑥に現れた地震痕の模式図

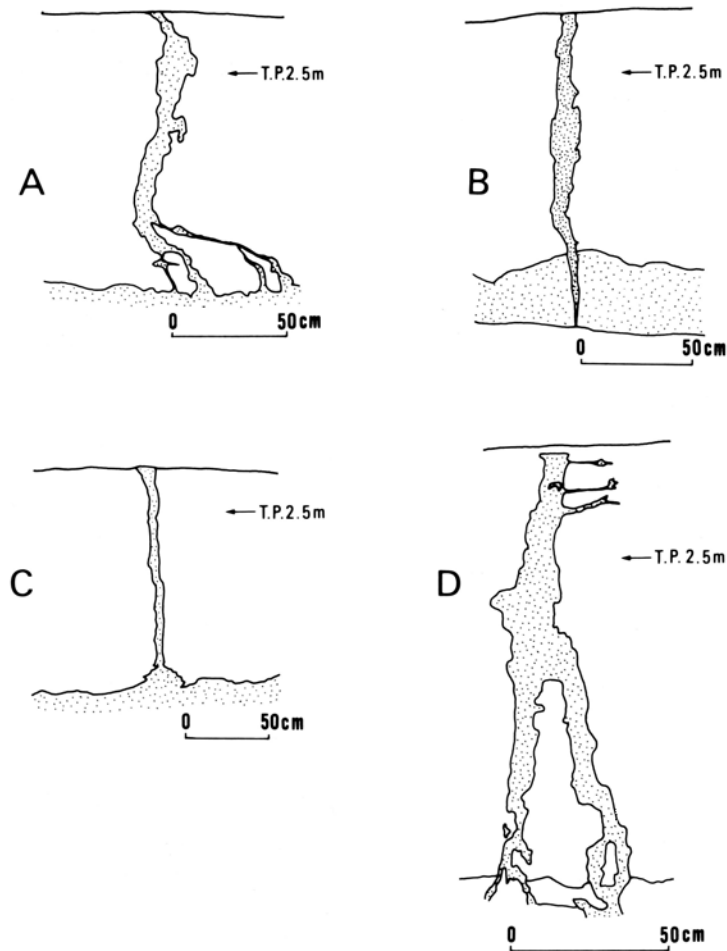
A：噴砂丘⑥の旧地表面付近の模式図，B：噴砂丘⑥の噴出口付近の模式図

1：噴砂丘，2：噴出口，3：微小な砂脈

濃尾地震による地震痕

本遺跡で確認された地震痕には、1891年10月28日に発生し、濃尾平野全域に大きな被害を与えた「濃尾地震」によるものも数多く検出されている。ここでは森ほか（1987）、服部（1992, 1993）の本遺跡での濃尾地震による地震痕についての報告をもとに、その特徴を簡単にまとめておく。

1. 砂脈の上端は現代の耕作・整地などで削剝されていることが多かった。ただし、条件が良ければ92D区のように現地表下30cm程度のところに地震発生当時の噴砂の広がりを見ることも可能である。
2. 検出された砂脈はそのほとんどがTYPE II bの形態を示し、規模は幅数mmから十数cm、延長数十cmから数mであった。
3. 砂脈の方向には規則性があり（服部、1992）、その方向はおおむねN30~50° Wを示す。この方向性は、地震を発生させた「根尾谷断層」の濃尾平野への延長である「岐阜—宮線」の左横ずれ運動（服部、1993）に支配される。ただし、遺構などの物理的強度の弱い部分ではこの限りでない。
(服部俊之)



第15図 濃尾地震の地震痕（森ほか，1989）

A：第8図の4， B：第8図の5
C：第8図の6， D：第8図の7
白ヌキ部分は16世紀末の整地層

参 考

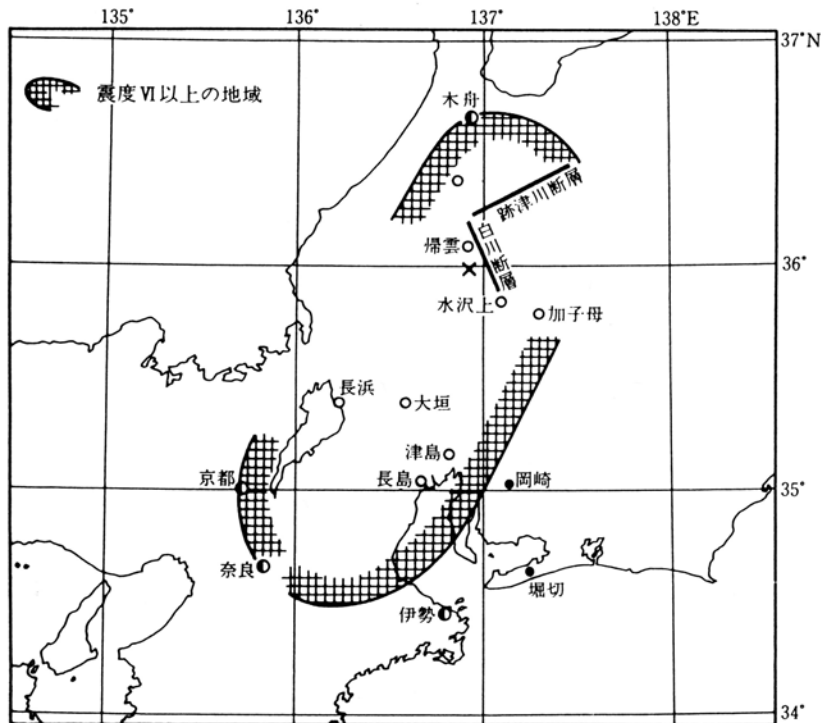
参考までに『新編 日本被害地震総覧』（宇佐美、1987）に収録されている天正地震についての記載をあげておく。

「1586年1月18日（天正13年11月29日）亥下刻発生 畿内・東海・東山・北陸諸道

震源 東経136.9° 北緯36.0° マグニチュード7.8±0.1

飛騨白川谷の保木脇で大山崩れ、帰雲山城埋没し、城主内ヶ島氏理以下多数（300余人という）圧死。山崩れのため白川が堰きとめられ20日間水が流れなかった。白川谷全体で倒家埋没 300余戸。明方村の水沢上で地すべりあり。越中木船城（高岡市の南西）損。城主前田秀継以下多数圧死ともいう。大垣で城崩れ潰家多く、出火、城中残らず焼失。尾張の長島で被害大。近江長浜で城主山内一豊の幼女圧死。城および城下に被害。京都では東寺講堂・灌頂院破損、壬生の堂倒れ、三十三間堂の仏像600体倒るといふ。阿波にも地割れを生じたといふ。余震は翌年まで続く。『家忠日記』によると三河で翌年2月8日まで連日余震、その後、2月11、12、18日、3月9、10、30日も地震。ただし毎日の地震回数は不明。京都でも1月17～18日ころまで連日余震。その後回数は減ったが余震は約1年余続いた模様。尾張・伊勢の海岸三角州地帯で土地のゆりこみ、涌没多し。これは液状化現象であろう。紀伊半島・三河渥美郡・京都・奈良では翌30日丑の刻にも大地震。これは余震か？あるいは別の地震か不明。震央は白川断層上と考えておく。Mは決めにくい。確実に震度がVI以上の地域の半径を100kmとするとMは7.7となる。半径をやや大きくするとMは8.0となる。いろいろと解明すべき点のある地震。御母衣（白川）断層のほかにも阿寺断層も動いたという考えもある。第16図は推定震度。」

なお震源についてはこのほかに、飯田（1979, 1981, 1987）により伊勢湾と推定する考え方が報告されている。本報告では震源について推測するだけの資料が得られないため言及を避けておく。いずれにしても清洲城下町遺跡付近での震度はVI～VIIに達したとされる。織田信雄によって行われた清須城の大改修は、この天正地震の被害を機に行われた可能性が非常に高い。



第16図 天正地震の震度分布（宇佐美，1987）

文 献

- 伊藤隆彦（1991） 「愛知県山中遺跡から発見された地震痕」 『名古屋地学』 53, 31～35.
- 宇佐美龍夫（1987） 『新編日本被害地震総覧』 東京大学出版会. 437p.
- 寒川 旭・佃 栄吉・葛原秀雄（1987） 「滋賀県高島郡今津町の北仰西海道遺跡において認められた地震痕」 『地質ニュース』 390, 13～17.
- 寒川 旭・岩松 保・黒坪一樹（1987） 「京都府木津川河床遺跡において認められた地震痕」 『地震』 40, 575～583.
- 寒川 旭（1988 a） 「考古学の研究対象に認められる地震の痕跡」 『古代学研究』 116, 1～16.
- 寒川 旭（1988 b） 「地震考古学の提唱」 『日本文化財科学会会報』 16, 19～26.
- 田山 実（1904） 「大日本地震史料」 『震災予防調査会報告』 46, 甲, 乙, 1～606. 1～595.
- 服部俊之（1993） 「濃尾平野における歴史時代の地震痕」 『年報 平成4年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター, 126～136.
- 服部俊之（1992） 「清洲城下町遺跡に見られる地震痕について」 『清洲城下町遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集, 187～190.
- 武者金吉（1941～43） 『増訂 大日本地震史料. 1～3』. 文部省震災予防評議会.
- 森 勇一・鈴木正貴（1989） 「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」 『活断層研究』 7, 63～69.
- 森 勇一・鈴木正貴（1990） 「清洲城下町遺跡及びその周辺から発見された歴史地震の記録」 『歴史地震』 5, 33～41.

第4節 各調査区の調査経過と概要

五条川河川改修に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査は8年間に亘り、調査に関わった調査員は21名に及ぶ。地点によっては遺構面が複雑に重なり、遺構検出が難しい場合も少なくなかった。このため、調査員の視点や研究の進展によって調査内容が異なり、隣接する調査区で遺構検出面や遺構自体が接続しないものも見られる。従って、個々の遺構・遺物を記述する前に、過去の調査に対する自己批判を行うため、各調査区毎に調査目的・経過・概要を確認しておく。記述に当たり、調査区を6地区（御園・本丸・田中町・五条橋・本町・南部地区）にまとめ、各地区の中では調査年次の順に述べることとする。

A 概要

今回の発掘調査で確認された遺構・遺物は、遺跡の広がりや内容から以下の3時期に大別できる。

- 1 古代から中世（8世紀～14世紀）
- 2 中世末期から近世初期（15世紀後半～17世紀初）
- 3 近世以降（17世紀中頃～）

各時期の詳細については、各章に譲るが、ここでは大概を述べて各時期の性格を明らかにしておく。

まず、8世紀～14世紀の遺跡の状況は、調査地点によって遺構の有無・遺物量の多少に差が認められる。このことは、この時期に調査区の全範囲に及ぶ大遺跡が展開したわけではなく、範囲の小さな遺跡がいくつか存在したことを示している。遺構の状況から、これらの小遺跡は集落等と評価できるだろう。

15世紀後半～17世紀初頭の遺跡の状況は、地点や細かい時期によって遺構・遺物の差異が存在するものの、各調査区全域を包括する巨大な遺跡の一部と考えられる。この遺跡は著名な清須城に付随する城郭・城下町の遺跡であり、これまではこの時期をその性格から城下町期と称し、織田信雄が入城して改修を実施したとされる1586年を境に前期と後期に区分されてきた。本書では、基本的にはこの名称を踏



第17図 調査区の地区割図

襲しているが、変更した部分もある。

17世紀初頭以降の遺構・遺物は五条橋・本町地区に集中し、文献や遺構の状況から美濃街道の清須宿場町の一部を検出したといえる。この時期を宿場町期と称し、五条川の瀬替えに伴って町並みを改変した1794年を境に前期と後期に区分した。

これらを要約すると以下ようになる。本書ではこの時期区分に沿って記述を進めている。

- 1 城下町期以前（古代から中世）
- 2 城下町期（戦国時代から江戸時代初期）
- 3 宿場町期（江戸時代）

B 御園地区

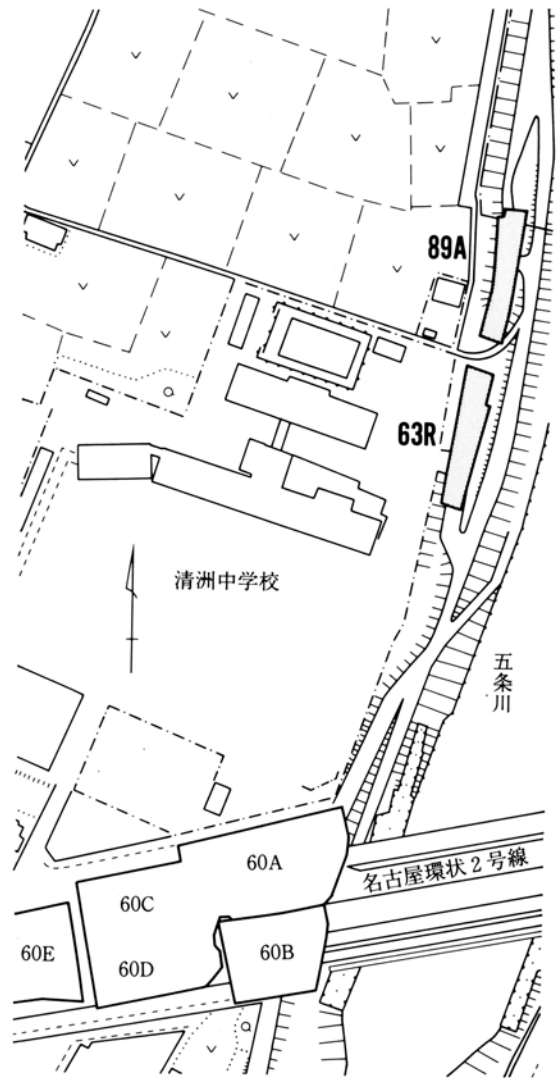
今回の調査区内、最北端の調査区を御園地区とした。ここでは城下町期の遺構はシルト層上面で検出されたが、中世の状況は不明瞭であった。

- ① 63R区 期間 1988.11～1989.1 面積 660㎡
調査担当者 佐藤・日比・鈴木・飴谷

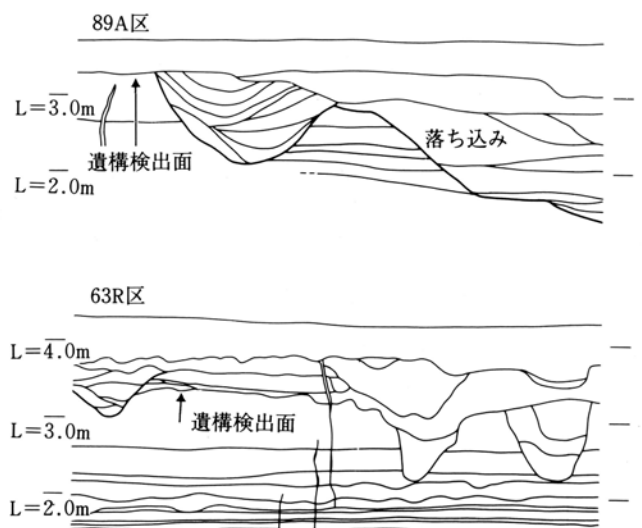
63R区は既に報告が終了している名古屋環状2号線関連の発掘調査区の北に所在する。この調査区では地表下1.0mの標高3.3mで安定したシルト層が検出され、この上面を遺構検出面とした。この結果、調査区中央部で細かい遺構を多数検出し、調査区南半部で溝状の落込みを確認した。中世の遺構も想定されたが、結果として検出できなかった。

- ② 89A区 期間 1990.1～1990.2 面積 750㎡
調査担当者 日比・城ヶ谷

89A区は63R区の北に所在する。この調査区では、地表下約1.0mの標高3.3mで灰色シルト層が検出され、この上面を遺構検出面として調査した。この結果、調査区の北半部は湿地状の落込みがあり、これを16世紀末から17世紀初頭に整地していたことが判明した。遺構の大半は16世紀末から17世紀初頭に所属するが、一部に中世と思われる遺構が存在する。



第18図 御園地区調査区位置図



第19図 御園地区土層断面図

C 本丸地区

五条川右岸の現清洲公園周辺の調査区を本丸地区と称する。基本層序・遺構の状況は各調査区で均一ではなく、全体像を把握しにくい地点である。

① 62A区 期間 1987.11～1987.12 面積 130m²

調査担当者 細野・水谷・中野

県道名古屋祖父江線の南に所在する。標高2.5mを遺構面として調査を実施したが、調査区全面に溝状遺構が展開する結果となった。調査当時は沼沢地と推定された。溝は清須城城郭に直接関わる遺構とは認め難く、整地・築堤に伴う堆積の可能性もある。

② 62N区 期間 1987.11～1987.12 面積 150m²

調査担当者 細野・水谷・中野

JR東海道本線の北に位置する。標高3.0mまで重機による掘削を実施した後に遺構検出を試みたが、結果として、調査区全体が溝状の落込みになっていることが判明した。地山は現五条川に向かって下がり、この上層の堆積は整地・築堤に伴う堆積の可能性はある。一部に礫層が見られたが、清須城本丸との関係は不明である。

③ 63Q区 期間 1989.2 面積 100m²

調査担当者 佐藤・城ヶ谷

大手橋建設の橋脚部分を63Q区として立会調査を実施した。この結果、現五条川の河床と考えられる青灰色砂の堆積を確認し、遺構は認められなかった。

④ 92F区 期間 1992.10～1992.11 面積 240m²

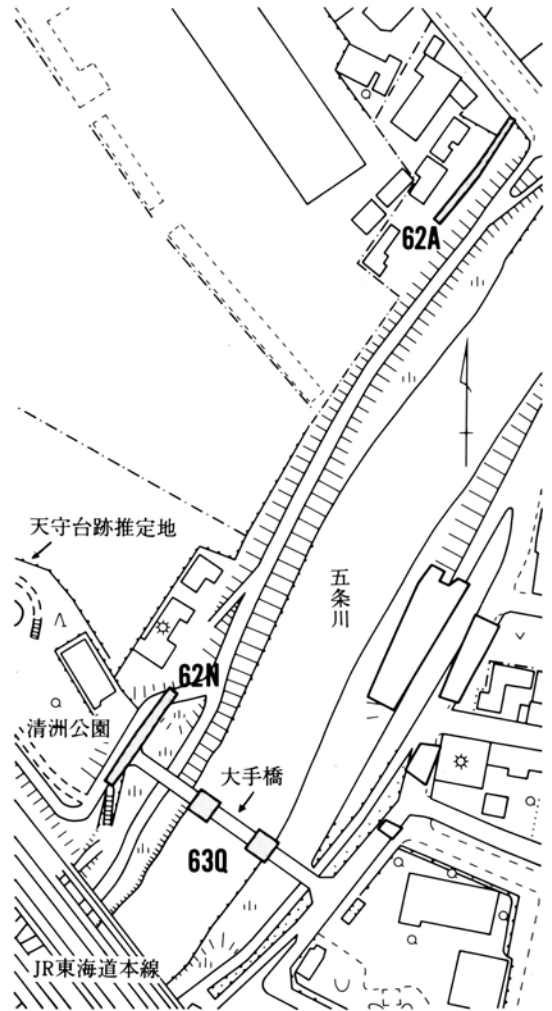
調査担当者 大竹・蟹江・鈴木

92F区は清洲公園の南に所在し、調査区全体が清須城の内堀に相当することが確認された。また、この上層で近世以降の水路も検出された。

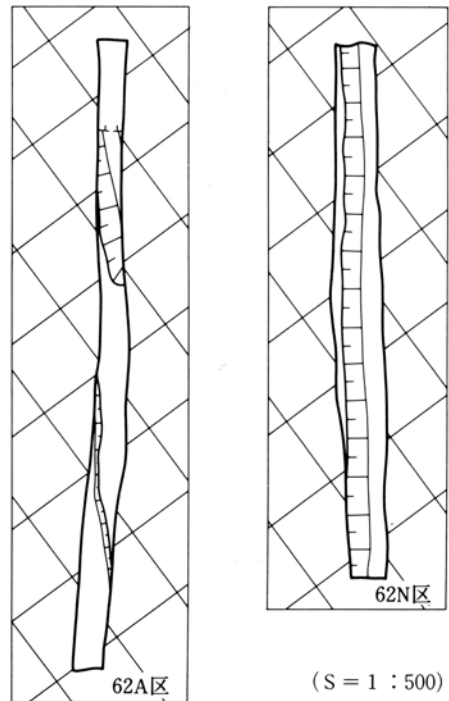
⑤ 93C区 期間 1993.10～1993.11 面積 300m²

調査担当者 大竹・小澤

93C区は清洲公園の南端部に所在し、92F区に隣接する。土留め状の石積みや金箔瓦・花押が記された瓦等を確認した。



第20図 本丸地区調査区位置図



第21図 本丸地区主要遺構図

〔年報昭和62年度〕より転載

D 田中町地区

J R 東海道本線以北の五条川左岸の調査区を田中町地区と呼ぶ。シルト層上面で城下町期の遺構を確認し、下層に古代から中世の遺構が存在する。

- ① 62G区 期間 1987.10~1987.11 面積 500㎡
調査担当者 細野・鈴木

62G区は県道名古屋祖父江線とJ R 東海道本線の間に所在する。標高3.6m前後のシルト層上面で城下町期以降の遺構面、シルト層中で古代の遺構面を確認した。調査区北半部には江戸時代の南北方向の大溝が存在し、これ以前の状況は不明である。16世紀前半の区画溝1条を確認した。

- ② 62M区 期間 1987.10~1987.11 面積 230㎡
調査担当者 細野・鈴木

62M区は清洲町教育委員会調査の大和製本地区と62G区の間に位置する。調査区全体が大溝状の遺構の中に相当していると思われ、黒灰色粘土が厚く堆積している。遺構の復元状況は詳らかではない。

- ③ 63A区 期間 1988.8~1988.9 面積 260㎡
調査担当者 日比・飴谷

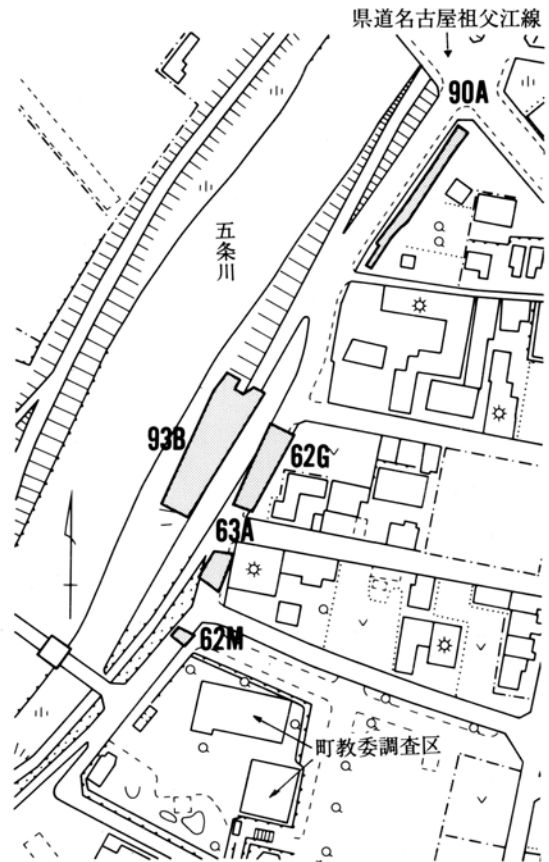
63A区は62M区と62G区に挟まれた調査区で、シルト層上面で遺構が確認された。62G区と同様、江戸時代（『年報』には城下町期後期と記載）の大溝が中央を貫く。その他に中世の柱穴群が検出された。

- ④ 90A区 期間 1990.7~1990.8 面積 750㎡
調査担当者 城ヶ谷・遠藤・鈴木・加藤

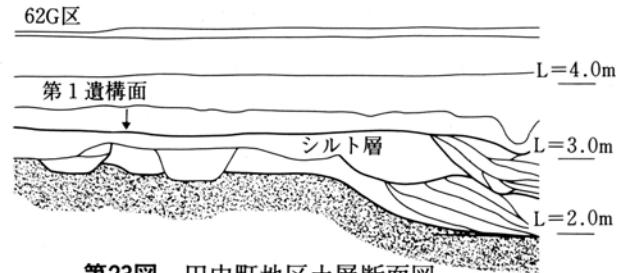
県道名古屋祖父江線の南にある90A区は、標高3.9mでシルト層上面が確認され、これを城下町期の遺構面として調査した。その結果、古代の遺構・中世の井戸・城下町期前期の区画溝が発見された。

- ⑤ 93B区 期間 1993.4~1993.5 面積 600㎡
調査担当者 池本・前田

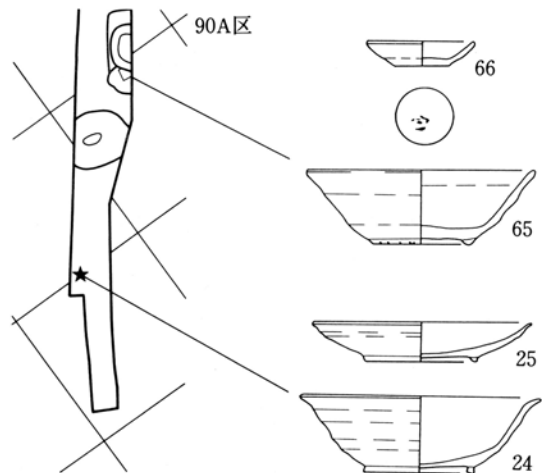
63A区・62G・M区の西側（五条川沿い）を調査した。江戸時代以降の厚い整地層の下にシルト層が検出されたが、顕著な遺構は確認されなかった。



第22図 田中町地区調査区位置図



第23図 田中町地区土層断面図



第24図 田中町地区主要遺構・遺物図
『年報平成2年度』より作成

E 五条橋地区

J R 東海道本線から中堀を検出した63C区までの五条川左岸の調査区を五条橋地区と設定する。この地区は戦国時代の旧五条川が存在する地区で、現地表面から5 m以上掘削した地点もある。城下町期と宿場町期の遺構が存在するが、明確な地山がなく、遺構や堆積の状況が複雑で各時期の遺構面の確定は困難であった。調査に当たっては、遺構検出の難しさ・土量の多さに加え、治水対策上調査期間が限定されたこともあり、不本意ながら、本来の遺構面を飛ばして検出が容易な層位まで下げたり、中間層(包含層)を重機によって掘削した地点が存在する。

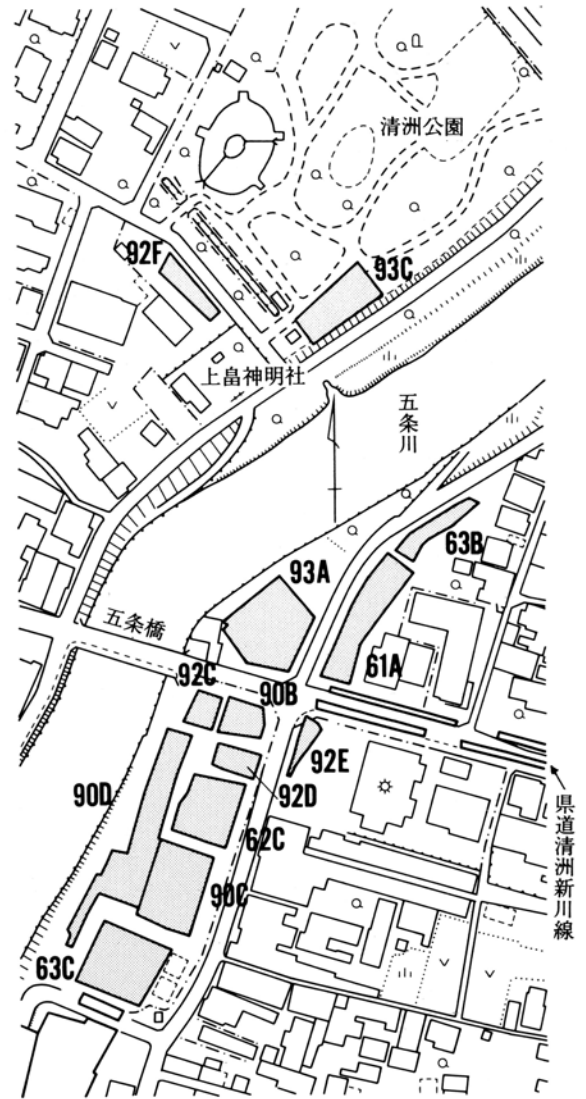
これまでの調査結果を総合すると、現地表下0.3 m~1.0 mに宿場町期後期、標高4.0 mに城下町期前期末から後期、地山の砂層とシルト層上面に城下町期前期以前の遺構面があると考えられる。

- ① 61A区 期間 1986. 8~1986.11 面積 836m²
調査担当者 水谷・中野

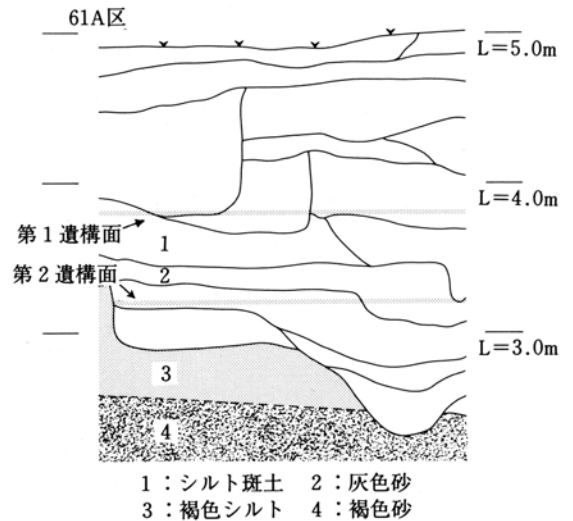
61A区は五条橋左岸の交差点の北東隅に所在する。地山は褐色シルト層及び砂層であり、旧五条川は確認されていない。標高3.8 mの焼土含有層の上面を第1遺構検出面、標高3.2 mのシルト層上面を第2遺構検出面として調査した。第1遺構検出面では16世紀後半以降の遺構(宿場町期も含む)、第2遺構検出面では16世紀前半の遺構が検出された。調査当時、2つの遺構面の間層は整地層とは認定しなかった。

- ② 62C区 期間 1987. 8~1987.11 面積 690m²
調査担当者 細野・水谷・中野

62C区は五条橋の南約30 mの位置にある。ここでは旧五条川が検出され、地山は砂層となっている。標高3.6 mを第1遺構検出面(宿場町期)、標高3.2 mを第2遺構検出面(城下町期後期)、地山の砂層上面を第3遺構検出面(城下町期前期)と認識して調査した。調査当時は第2遺構検出面は1 m以上の整地層を経て構築されたと考えたが、実際は河川による堆積物であった。また、遺構検出が困難であっ



第25図 五条橋地区調査区位置図



第26図 五条橋地区土層断面図(1)

たため、遺構の時期と検出面が対応しない場合も見られる。第1遺構検出面に城下町期の遺構が存在し、この面が城下町期の遺構面として捉えられよう。従って、第2遺構検出面は第1遺構検出面で検出し得なかった遺構を確認したと考えられる。

- ③ 63B区 期間 1988.7～1988.9 面積 550㎡
調査担当者 水谷・川井・岡本

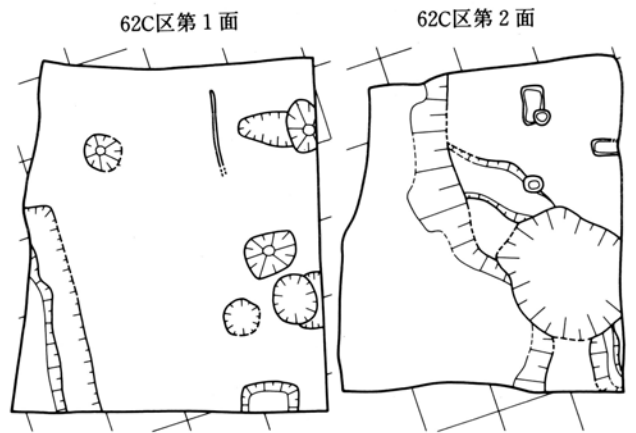
61A区の北に位置する調査区で、赤褐色砂質土を地山として調査した。標高3.7mの整地層上面を第1遺構検出面、赤褐色砂質土上面を第2遺構検出面とした。両遺構検出面は遺物的には明確な時期差が存在せず、断面観察によっても明瞭な整地層は看取できない。16世紀代の井戸・溝が主な遺構である。

- ④ 63C区 期間 1988.8～1988.12 面積 860㎡
調査担当者 水谷・日比・川井・鈴木

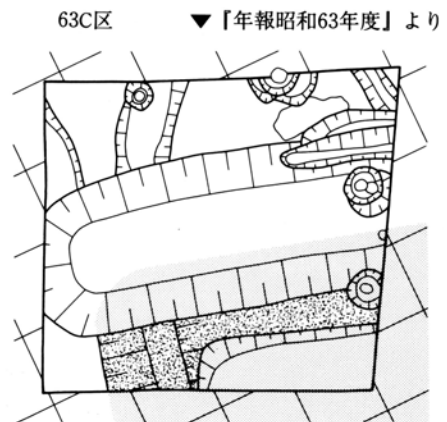
63C区は62C区の南20mの地点に所在する。旧五条川と清須城中堀の存在が予想されたため、遺構検出が困難な層位を標高3.0mまで一気に掘削した。標高3.0mを第1遺構検出面、標高2.7mを第2遺構検出面とした。調査の結果、調査区の北東では標高2.7mで地山のシルト層が確認され、南半部では清須城中堀が検出された。旧五条川は北西端部で確認された。第1遺構検出面の遺構は大半が宿場町期、第2遺構検出面は城下町期後期に属する。なお、中堀は清須城廃城以降に大規模な遺構が掘削されたため、遺構が破壊されて不明な点が多い。

- ⑤ 90B区 期間 1990.9～1990.12 面積 400㎡
調査担当者 城ヶ谷・鈴木

90B区は五条橋左岸の交差点の南西隅に所在する。旧五条川の堆積が確認され、地山は砂層となる。標高3.5mまで重機により掘削し、これを第1遺構検出面とした。この面で宿場町期の井戸と城下町期の遺構が検出されたが、断面観察によって本来は標高約4.0mに城下町期の遺構面があることが判明した。また、標高2.0mを第2遺構検出面としたが、この面は旧五条川堆積層の任意のレベルであり、新たな遺構はほとんど検出されなかった。第2

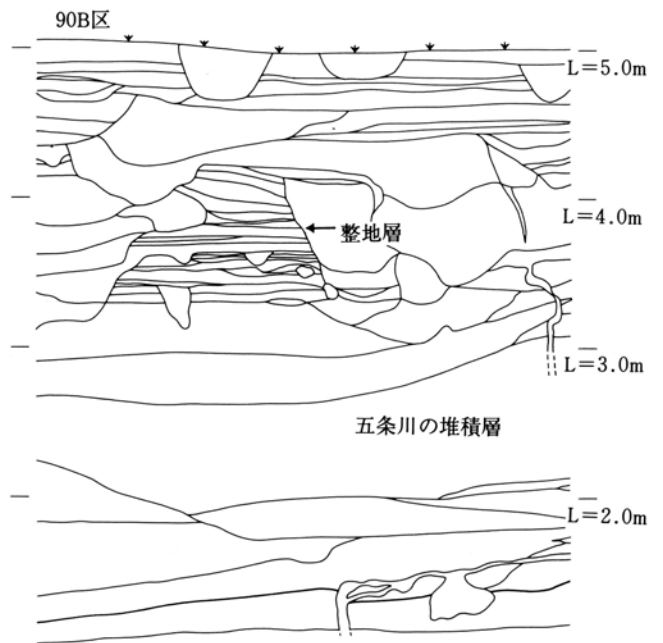


▲【年報昭和62年度】より



▼【年報昭和63年度】より

第27図 五条橋地区主要遺構図(1)



第28図 五条橋地区土層断面図(2)

遺構検出面では、旧五条川と井戸構造物の調査を行った。

- ⑥ 90C区 期間 1990.9～1990.12 面積 1150㎡
調査担当者 遠藤・加藤

90C区は63C区と62C区に挟まれた部分の調査区である。63C区と同様の事情で標高3.0mまで重機によって掘削した。標高2.8mを第1遺構検出面、地山のシルト層と砂層を第2遺構検出面とした。第1遺構検出面では宿場町期の井戸と城下町期の遺構が、第2遺構検出面では旧五条川に伴う遺構群が確認された。

- ⑦ 90D区 期間 1990.9～1990.12 面積 1640㎡
調査担当者 城ヶ谷・鈴木・加藤

90D区は62C区・63C区・90C区の西側に隣接する現五条川沿いの調査区である。90C区と共に調査を実施した。従って、調査経過は90C区と同様であるが、90D区の第2遺構検出面は調査区全体が旧五条川に相当し、調査期間の事情から旧五条川堆積土を重機で掘削した。第1遺構検出面で検出された遺構は少なく、いずれも城下町期に属する。

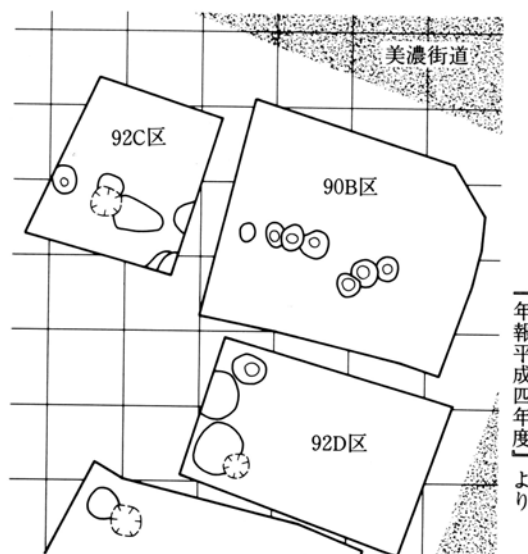
1990年度の五条橋地点の調査は、旧五条川から多量の一括遺物を得ることができたが、このために宿場町期や城下町期後期の細かい遺構を検討できなかったところに若干の問題がある。

- ⑧ 92C区 期間 1992.11～1993.1 面積 220㎡
調査担当者 大竹・蟹江

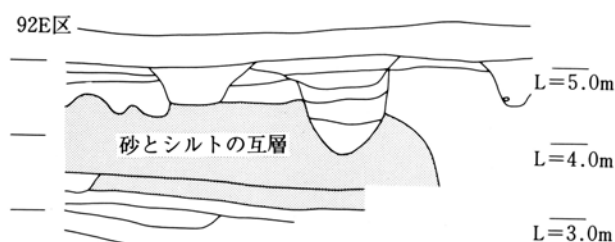
92C区は90B区に西隣する。県道清洲新川線の所見と過年度の反省を踏まえ、標高3.5mを第1遺構検出面、地山の砂層上面を第2遺構検出面として調査した。第1遺構検出面では城下町期前期から宿場町期の遺構が検出され、第2遺構検出面では旧五条川とそれに伴う木製構築物が発見された。

- ⑨ 92D区 期間 1992.11～1993.1 面積 220㎡
調査担当者 大竹・蟹江

92D区は90B区に南隣し、92C区と同様の経過を経て調査を実施した。第1遺構検出面では城下町期前期から宿場町期の遺構が検出された。第2遺構検出



第29図 五条橋地区主要遺構図(2)



第30図 五条橋地区土層断面図(3)

面では予想された旧五条川が検出されず、旧五条川の河岸は複雑に蛇行していたと推定される。

- ⑩ 92E区 期間 1992.11～1993.1 面積 220㎡
調査担当者 大竹・蟹江

92E区は五条橋左岸の交差点の南東隅に位置する。標高4.0mを第1遺構検出面、標高3.0mを第2遺構検出面として調査した。標高3.0～4.6mに河畔砂丘と思われる砂とシルトの互層の堆積層が存在した。

- ⑪ 93A区 期間 1993.4～1993.7 面積 620㎡
調査担当者 大竹・小澤

五条橋左岸の交差点の北西隅に位置する93A区では標高4.0mを第1遺構検出面、標高3.0mを第2遺構検出面として調査した。第1遺構検出面では宿場町期と城下町期の遺構が検出され、第2遺構検出面では城下町期の遺構と旧五条川・百代寺窯式期の時期の遺構が確認された。

F 本町地区

中堀を検出した89E区から長者橋までの五条川左岸の調査区を本町地区と一括する。この地区は地山がシルト層であり、遺構の時期は城下町期前期から宿場町期まで存続する。堤防下の遺構の残存状況が良好な地点とそうでない地点があることや天正地震の痕跡に対する認識の有無などによって、調査地点により遺構検出面が異なる場合があり、接する調査区で不整合が生じたところも見られる。

- ① 61B区 期間 1986.7～1986.11 面積 707m²
調査担当者 梅本・小澤・細野

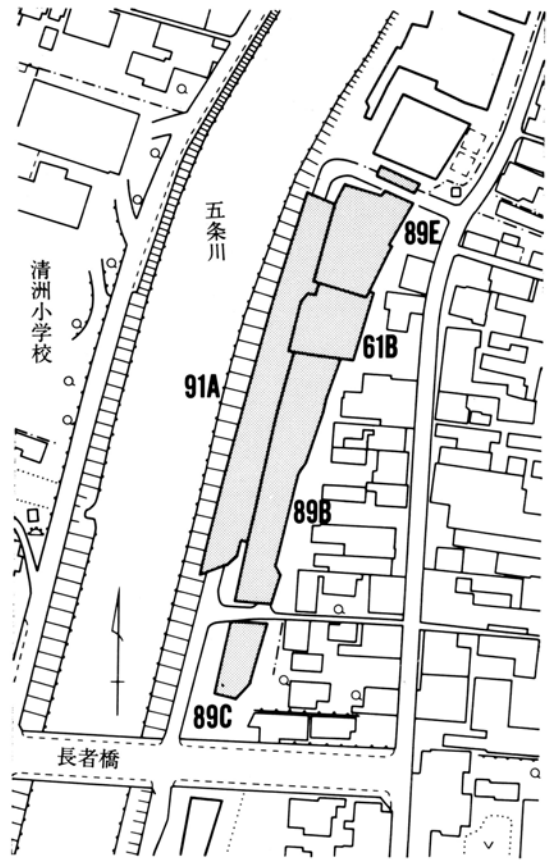
61B区は本町地区の中央に所在する。標高3.2mの灰褐色シルト層上面を第1遺構検出面、標高2.9mの地山上層を第2遺構検出面として調査した。但し、第1遺構検出面の検出状況は時期・遺構配置共に不明瞭であり、第2遺構検出面で城下町期から宿場町期の遺構を明確に確認した。19世紀中頃の巨大な廃棄土坑と城下町期の区画溝が検出された。

- ② 89B区 期間 1989.8～1990.1 面積 2050m²
調査担当者 小澤・小塚・加藤

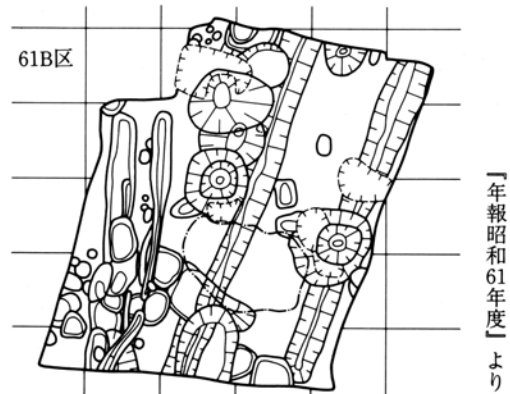
89B区は61B区の南に接する調査区である。標高3.2mで第1遺構検出面、地山のシルト層上面を第2遺構検出面とした。第1遺構面上層には1794年の瀬替え時の盛土層が厚く堆積する。第1遺構検出面を宿場町期の遺構、第2遺構検出面を16世紀の遺構面と考えたが、その後の検討で第1遺構検出面で城下町期後期の建物礎石などが存在することが明らかとなっている。この調査区では、層位的に年代が確定できるのは1794年の整地層のみである。

- ③ 89C区 期間 1989.8～1989.11 面積 700m²
調査担当者 梅本・小塚

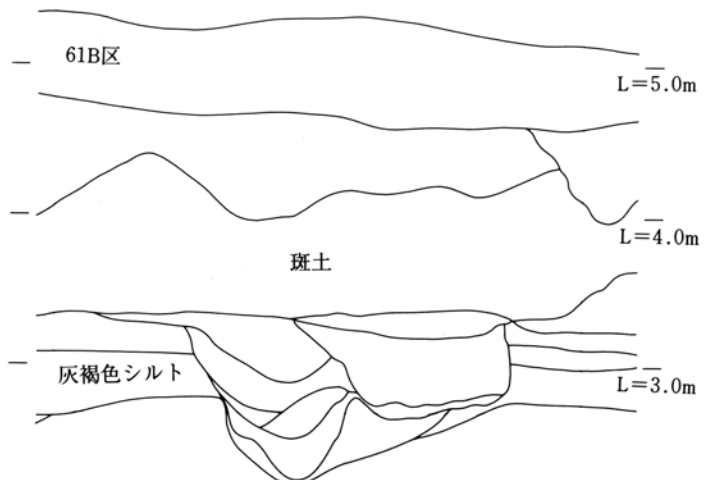
89C区は89B区の南に所在する。地山は標高1.9mを上層とする砂層で構成されている。調査は、1794年の瀬替え時の盛土層直下の標高2.0mを第1遺構面、地山直上を第2遺構面として実施した。第1遺構面では宿場町期の畑、第2遺構面では城下町期の遺構群が検出された。



第31図 本町地区調査区位置図



第32図 本町地区主要遺構図(1)



第33図 本町地区土層断面図(1)

④ 89E区 期間 1989. 9～1990. 2 面積 1300m²

調査担当者 梅本・加藤

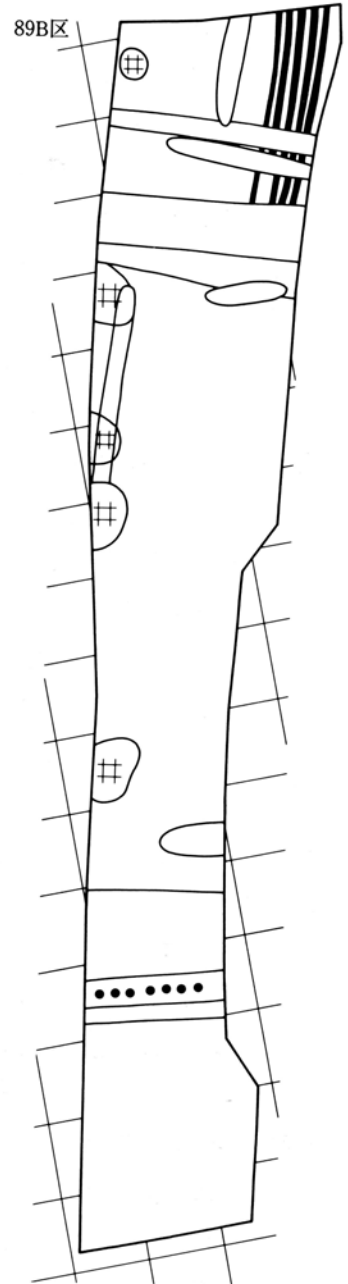
89E区は61B区と63C区に挟まれた調査区である。ここでは、標高3.8mを第1遺構検出面として宿場町期の遺構を中心に、また、標高2.7mの地山のシルト層上面を第2遺構検出面として城下町期の遺構を調査した。調査区の北部で中堀が検出され、堀の端部には石垣が構築されていた。なお、石垣に関しては裏込め部などの調査は十分にできなかった。

⑤ 91A区 期間 1991.12～1992. 3 面積 1800m²

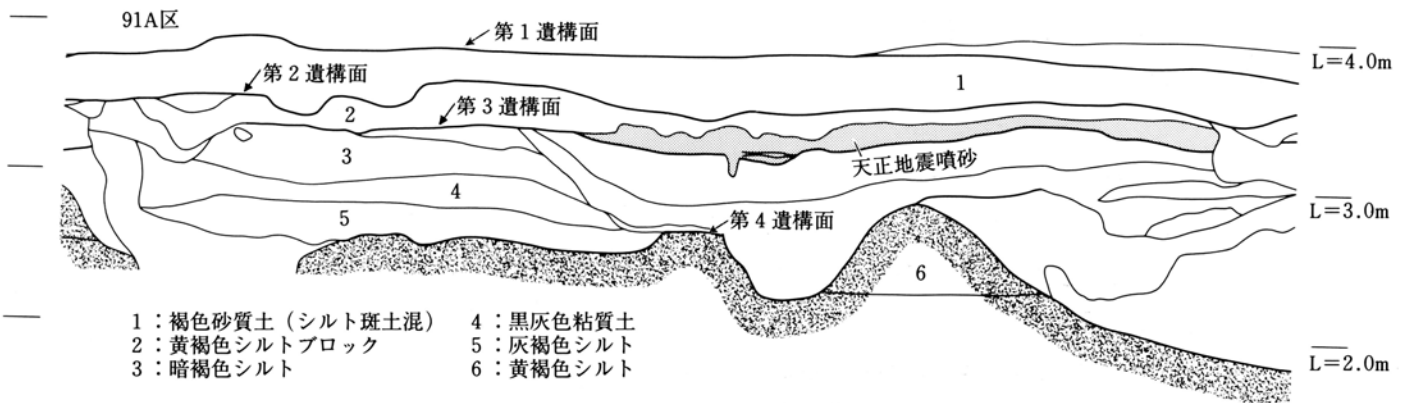
調査担当者 城ヶ谷・鈴木・小嶋

61B区・89B区・89E区の西側の現堤防部の調査区である。遺構の遺存状況は良好で、全部で4つの遺構面を把握した。第1遺構面は現堤防の砂層直下の標高3.6mで、宿場町期前期の遺構が検出された。第2遺構面は宿場町期前期の10cm～20cmの整地層の下面で、標高3.4～3.6mを測り、城下町期後期の遺構が確認された。第3遺構面は調査区内に散見される天正地震の噴砂層の直下の面で、標高3.3mを測る。天正地震直前の時期と判別できる。なお、実際の調査では第2遺構面と第3遺構面は同時に検出を行った。第4遺構面は地山のシルト層上面で、標高3.0mを測り、城下町期前期の遺構が検出された。第3遺構面は、第4遺構面に層厚30cm以上の整地を施して構築されている。

遺構の残存状況が異なるとはいえ、91A区と61B区・89B区・89E区との間における遺構面把握の相違は、地震痕に対する認識の相違などに起因するものと思われる。調査に対する視点の多様化が遺構検出のあり方を変える一つの事例と言えよう。



第34図 本町地区主要遺構図(2)
【年報平成元年度】より



第35図 本町地区土層断面図(2)

G 南部地区

長者橋以南の五条川左岸を南部地区としてまとめる。この地区の範囲は広大であるが、表土・旧田面を掘削すると地山の薄いシルト層か砂層が現れるという堆積状況で共通しており、調査経過・方法を論ずる上で一括できる。遺構の検出は比較的容易で、城下町期後期の遺構を中心に、宿場町期や中世の遺構も確認できた。

- ① 61C区 期間 1987. 1～1987. 3 面積 865㎡
調査担当者 梅本・小澤・細野

61C区は長者橋と船入橋の中央に位置し、久証寺の西に当たる。基本層序は厚い整地層の下に灰褐色シルトと灰色砂層が堆積する状況を示す。調査は標高2.3mのシルト層上面を遺構検出面とした。この結果、宿場町期の遺構や城下町期後期の溝・巨大な方形土坑・石組井戸などが検出された。

- ② 61D区 期間 1986. 11～1986. 12 面積 902㎡
調査担当者 梅本・小澤・細野

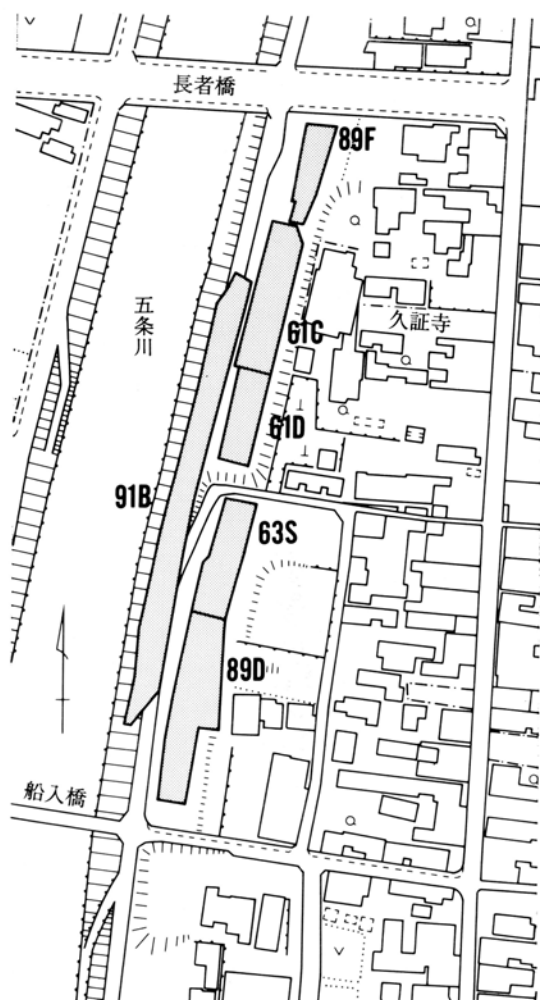
61D区は61C区に南接する調査区で、61C区に先だって調査を実施した。層序は61C区と同様であり、従って調査方法も前述の通りである。主な遺構は61C区で検出された溝と巨大方形土坑等である。

この61C・D区は、朝日西遺跡と同様、城下町期後期になって城下町として拡張された部分であると考えられた。

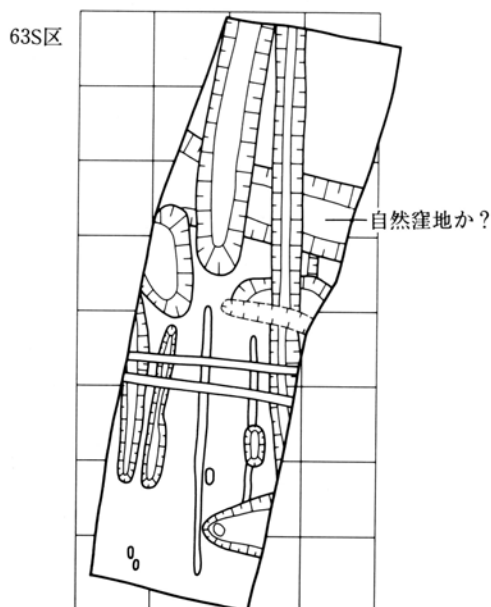
- ③ 62B区 期間 1988. 1～1988. 2 面積 510㎡
調査担当者 細野・水谷・中野

名鉄名古屋本線と巡礼橋の中央に所在する62B区は、調査前は水田であった。この水田耕作土を除去すると砂質土層かあるいは砂層が検出され、この上面(標高1.8m)を遺構面として調査した。この結果、規模がやや大きい中世の溝1条と、これを整地して設けられた城下町期後期の遺構群が確認された。城下町期の遺構には、これまでの遺構とは方位の異なる溝2条などがあり、井戸は存在しない。

- ④ 62D区 期間 1988. 1～1988. 3 面積 990㎡
調査担当者 細野・水谷・中野



第36図 南部地区調査区位置図(1)



第37図 南部地区主要遺構図(1)
【年報昭和63年度】より

62D区は名鉄名古屋本線の南約40mの地点に所在する。基本層序は62B区とほぼ同様に、標高1.7mで遺構を検出した。調査の結果、浅くて広大な遺構（自然の窪地か）を整地した後に城下町期後期の遺構群が展開していた。従って、調査は整地後の標高1.7mの面を第1遺構面、整地前の砂層上面を第2遺構面として実施している。遺構としては、城下町期後期の町屋敷と巨大な方形土坑が確認された。

- ⑤ 63D区 期間 1989.1～1989.3 面積 580㎡
担当者 梅本・佐藤・城ヶ谷・加藤

63D区は62D区と名鉄名古屋本線に挟まれた位置にあり、白色粗砂層を地山とする。標高1.5mの砂層上面を遺構検出面として調査したが、62D区から続く巨大な土坑と城下町期後期の若干の遺構が確認された。この地点の遺構の性格は不明である。

- ⑥ 63S区 期間 1988.12～1989.1 面積 790㎡
調査担当者 水谷・川井・岡本

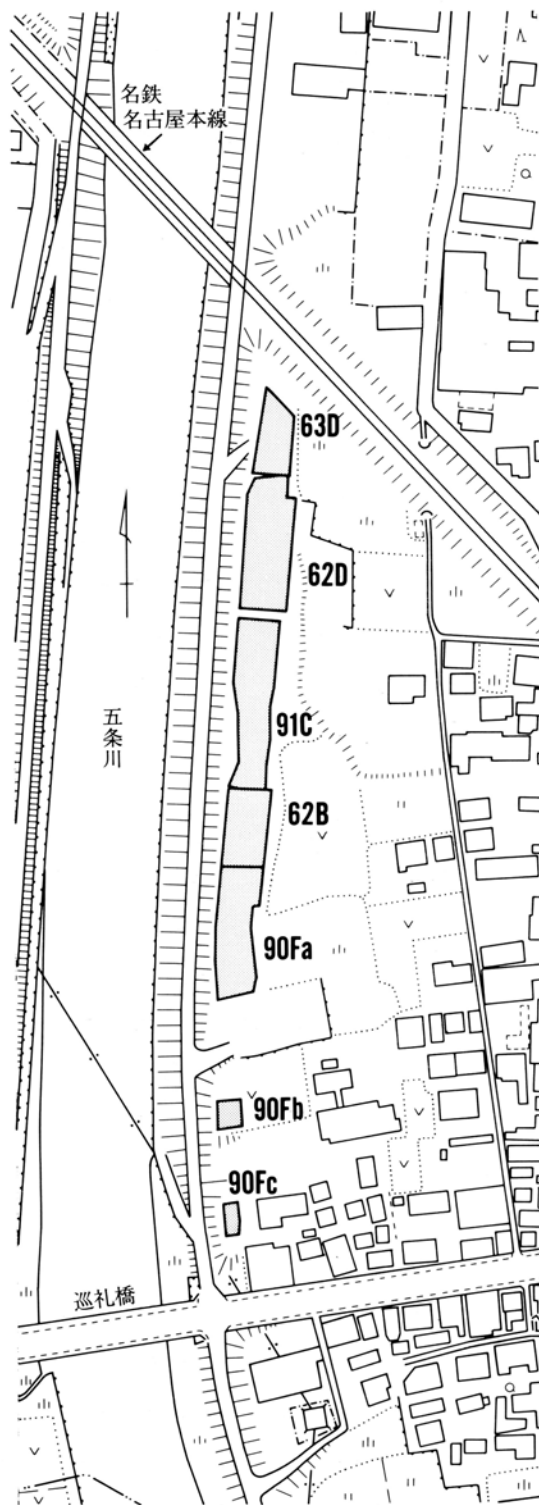
63S区は61C・D区の南に位置する調査区である。調査の結果、62D区と同様に、浅くて幅広の溝など（自然の窪地か）を整地した後に構築された城下町期後期の遺構群が展開していた。従って、整地後の標高1.9mの面を第1遺構面、整地前の砂層上面を第2遺構面として調査を実施した。遺構としては、城下町期後期の溝と井戸が存在する。

- ⑦ 89D区 期間 1990.1～1990.3 面積 1300㎡
調査担当者 小塚・鈴木

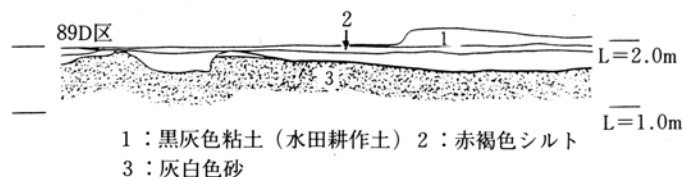
89D区は63S区に南接する。基本層序や遺構の状況は63S区とほぼ同様である。但し、調査区の南端部では、砂層を地山とする状況とは異なり、層厚20cm弱のやや安定したシルト層の堆積が確認された。この上面では比較的細かい城下町期後期の遺構群が検出された。この地点における城下町期後期の生活面は、遺構検出面よりも上にある可能性が指摘されよう。

- ⑧ 89F区 期間 1990.2～1990.3 面積 880㎡
調査担当者 小澤・加藤

長者橋のすぐ南の61C・D区に北接する地点を調



第38図 南部地区調査区位置図(2)



1：黒灰色粘土（水田耕作土） 2：赤褐色シルト
3：灰白色砂

第39図 南部地区土層断面図

査した。4 m近くの厚い盛土層を除去した後、黄褐色シルト層の上面（標高1.9 m）を遺構検出面とした。城下町期後期の溝・井戸などの遺構が確認された。

- ⑨ 90F区 期間 1991. 1～1991. 3 面積 1660m²
調査担当者 城ヶ谷・遠藤・加藤

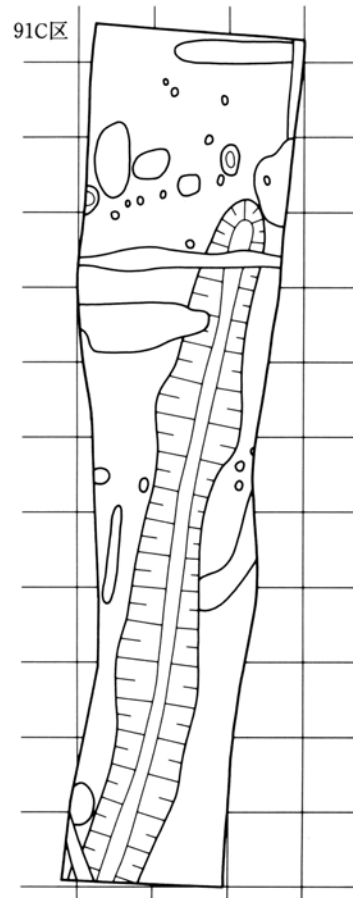
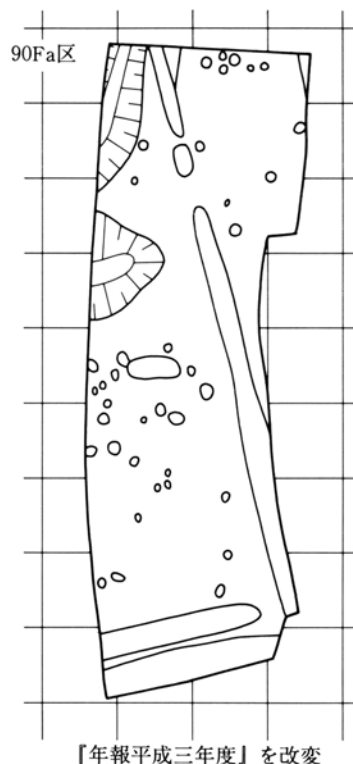
62B区の南に所在する最南端の調査区である。生活道路確保などのため、北から順に90Fa区・90Fb区・90Fc区の3区に分けて調査した。90Fa区の堆積状況は62B区と同じで、城下町期後期の区画溝3条が検出された。90Fb区はa区と相違して、標高2.3mの黄灰色砂層上面を第1遺構検出面、標高1.6mの地山の灰色砂層上面を第2遺構検出面として調査し、中世の小土坑群が検出された。90Fc区では標高1.6mに地山のシルトが存在し、この上面を遺構面とした。結果、溝状の落込みのみが確認された。

- ⑩ 91B区 期間 1991.12～1992. 3 面積 1800m²
調査担当者 城ヶ谷・小嶋・鈴木

91B区は61C・D区・63S区・89D区の西接する現堤防下に位置する。調査区北半部は標高1.3mまで江戸時代以降の整地層が堆積し、良好な遺構面は存在しなかった。調査区南半部では、標高2.4mで地山の淡褐色シルト・粘質土が確認されこの上面を遺構面としたが、遺構がかなり重複するため、便宜上標高2.4mを第1遺構検出面、標高2.2mを第2遺構検出面とした。南部地区北半部については、1989年度までは不安定な砂層に城下町を建設していたと思われたが、この結果から後世の耕作による攪乱で遺存していなかった可能性が指摘されよう。

- ⑪ 91C区 期間 1991.10～1991.11 面積 1220m²
調査担当者 城ヶ谷・小嶋・鈴木

91C区は62D区と62B区の間に所在する。基本層序・遺構検出状況は62D・62B区の成果と同様で、城下町期後期の町屋敷が確認された。（鈴木正貴）



第40図 南部地区主要遺構図(2)

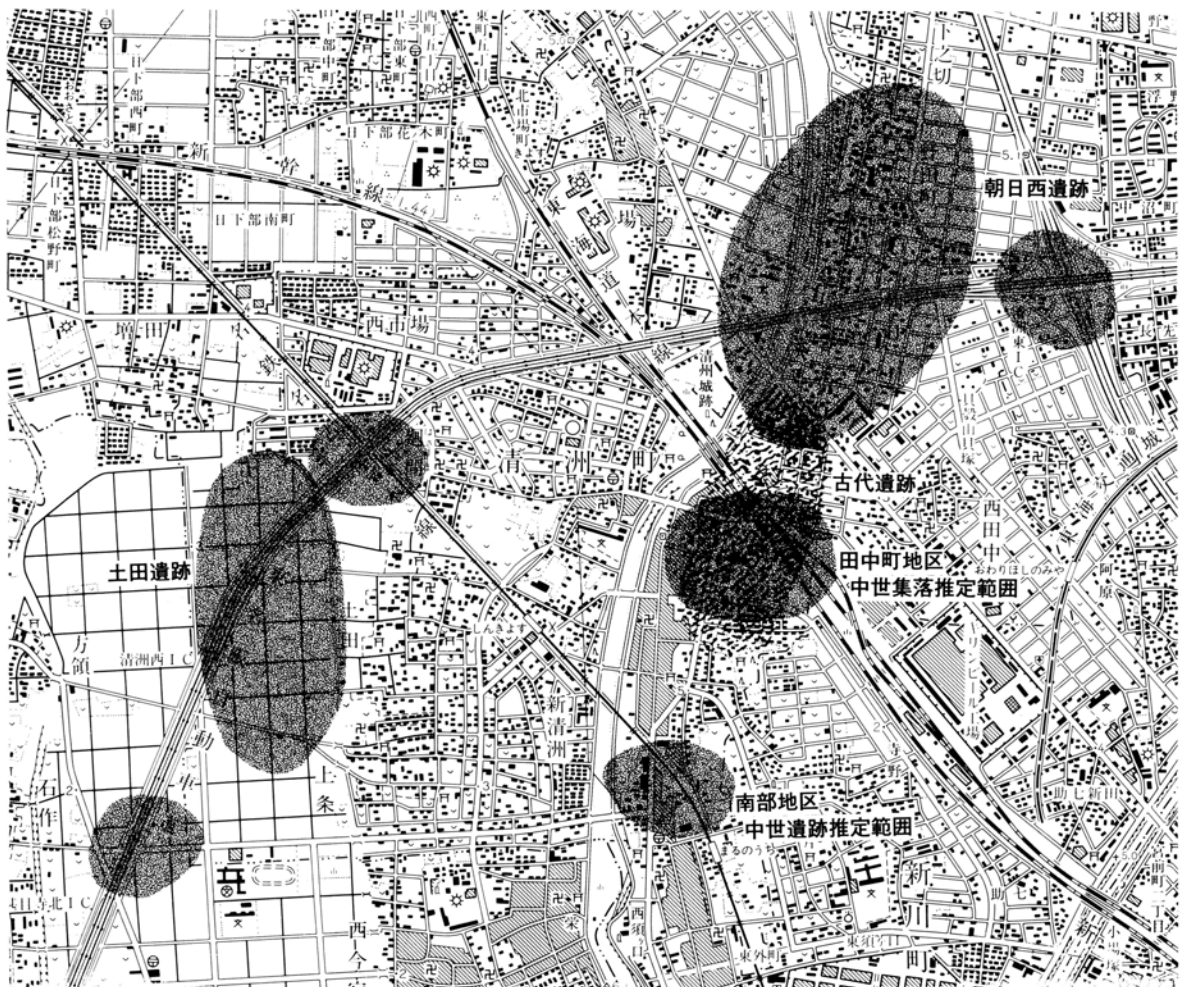
第Ⅱ章 城下町期以前の遺構と遺物

第1節 概 要

清洲城下町遺跡では、清須城が実質的に機能し始めた1478年（戦国時代）以前においても、長きにわたって人々が居住し、遺構・遺物が残存していることが判明している。これら城下町期以前の遺跡の状況を一括して本章で報告する。

城下町期以前の遺構・遺物は、大きく古代と中世（前期）の2時期に区分できる。これらは、各時期によって遺構の展開する範囲や遺構の状況が異なっている。こうした現象は一つの遺跡の中で複雑・多様な内容を持っていることを表しているのではなく、清洲城下町遺跡自体が複数の異なる遺跡（小遺跡）を広く包括していることを示唆しているに過ぎない。従って、まず、本節で各小遺跡単位の面的な範囲と時期的な広がりを概観することが肝要であろう（第41図）。

今回の調査で確認された古代の遺跡（遺構・遺物）は、62G・93A区を中心にその周辺の調査区に分布している。しかし、いずれの調査区においても遺跡の全体像を知る顕著な遺構群が確認されておらず、竪穴住居や土坑が数基検出され、ある程度のまとまりを持った遺物群を得たに過ぎない。こうした状況は、過年度の調査で存在が確認されている田中町地区（大字田中町字町東を中心とした範囲）に広く展開している古代の集落の周縁的な様相を示していると思われる⁽¹⁾。



第41図 清洲周辺の古代・中世の遺跡分布図 (S=1:25,000)

中世の遺跡（遺構・遺物）は、①御園地区（89A・63R区）、②田中町地区（62G・63A・90A区）、③南部地区（91C・90F区）の3つの地点を中心に確認されている。ただし、今回、遺物の破片数などの正確な総量を提示できないが、いずれの調査区においても、一定量の遺物が出土しており、上記の3地点以外にも生活の痕跡が存在した可能性は否定できない。これらの3地区の遺構の状況は、三者三様であるため、以下に地区毎の概要を記すことにしたい。

① 御園地区（89A・63R区）

御園地区では、性格不明の土坑が数基検出されたのみであり、遺物の出土量も他の地区に比べてそれほど多くはない。従って、この調査区は遺跡の中心ではなく、集落跡の縁端に相当する部分と思われる。周辺の調査結果を考え合わせると、名古屋環状2号線関連の発掘調査で確認された東側の自然堤防上の遺構群⁽²⁾とつながるものと推定され、朝日西遺跡の中世大集落の西北端に位置するものと言える。

② 田中町地区（62G・90A区）

田中町地区では、方形木柵を用いた井戸などの遺構が確認され、居住域（集落跡）と想定される。しかし、建物・区画などの遺構は確認できなかった。この遺構群の性格は、①この地点の北部に所在する朝日西遺跡の中世集落の一部⁽³⁾、②この地点の南部に所在する田中町地区南部の中世集落の一部⁽⁴⁾、③この2つの集落とはまったく別の集落の一部、という3つの可能性が考えられる。ここでは、この地点の北部（90A区）から井戸を検出し、南部（62G区以南）にいくにつれて遺構が希薄になることから、①朝日西遺跡の集落の南端部を検出したものと考えておきたい。

③ 南部地区（91C・90F区）

南部地区では、不定形の溝及び小土坑群などの遺構が存在する。この地区の状況は遺構配置から居住空間とは考えられず、周辺に所在する中世集落の周縁部（墓域など）と想定できる。この地区の周辺には、中世遺跡の存在が知られていないが、現存する自然堤防の広がりから、調査区の東部に展開する自然堤防に集落が存在するのではないかと想定している。

以上、今回の調査で約2kmの調査範囲の中で少なくとも3つの中世遺跡が展開していることが判明した。このように中世における清須周辺の微高地や低湿地の開発が広範囲にわたって散在的に行われたことは既に佐藤公保によって提示されており、この意味で今回の調査はこの状況に資料を追加する形となった。（鈴木正貴）

註 (1) 古代集落の範囲などの考察は既に発表されている。鈴木正貴（1990）「A期の遺構」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集。

(2) 遠藤才文・鈴木正貴（1992）「中世の遺構」『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集。

(3) 遠藤才文・鈴木正貴（1992）「中世の遺構」『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集。

(4) 鈴木正貴（1990）「C期の遺構」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集。

(5) 佐藤公保（1989）「清須周辺の中世村落」『清須－織豊期の城と都市－研究報告編』。

第2節 遺 構

A 古代の遺構

古代の遺構は62G・93A区を中心に分布し、竪穴住居1棟・溝1条・土坑などが存在している。前述の通り、遺構の密度は薄く、ここでは3つの遺構を取り上げ説明する。

竪穴住居SB3003（第42図）

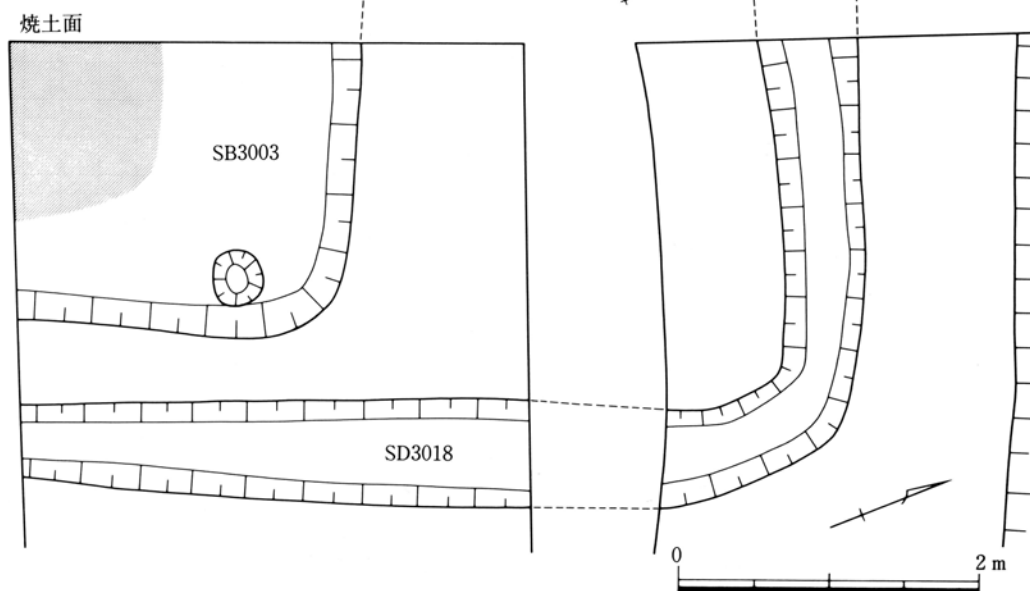
62G区の南部で検出された隅丸方形の竪穴住居で、北東端のみを検出した。黄褐色シルト層中で検出され、検出面からの深さは0.3mを測るが、平面プランの規模は不明である。北東端にピットが1基遺存するが、周溝は検出されなかった。住居中央部に向かって炭化物を包含する薄い焼土面が広がっており、おそらく壁面に設置されるカマドは存在しなかったと考えられる。埋土もベースと同様のシルトで充填されており、河川の増水時に埋積していったと思われる。図化できる出土遺物は存在しないが、周辺から出土する遺物と併せて考えると8世紀に属するものである。

溝SD3018（第42図）

62G区の南部で検出された屈曲する溝で、SB3003を囲む。SB3003と同様の検出面・埋土であり、同時に存在したと思われ、関連性が認められる。検出幅は0.7m強、深さは0.2m弱を測る。出土遺物は須恵器・土師器の小片が存在したのみで時期は不明であるが、SB3003と同じ8世紀を想定したい。

93A区検出土坑

93A区のほぼ中央部の地点で検出された土坑であるが、調査の事情で遺構の正確な位置は測量できなかった。平面形は長径1.00m、幅0.45mの楕円形の土坑で、中には炭化物が充填されていた。深さは0.6mを測る。ここからは良好な一括資料が出土している。周辺の状況から集落の中心を構成する遺構とは考えられず、性格は不明である。



第42図 SB3003・SD3018実測図

B 中世の遺構

① 御園地区

この地区では中世遺構としては土坑が確認されている。また、所属時期不明の遺構（溝・土坑）がいくつかあり、この中で中世に位置づけられるものが存在する可能性も考えられる。

土坑SK1041

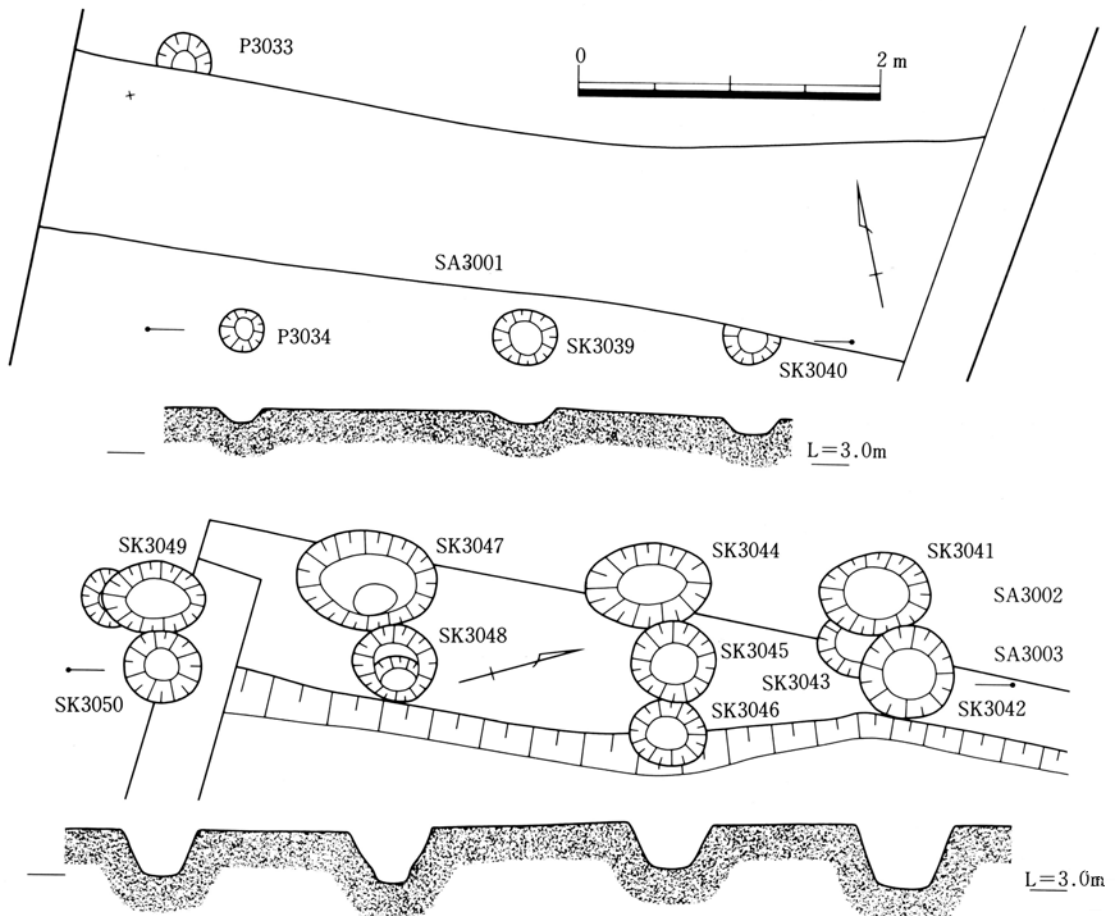
89A区の南半部で検出された長軸6.13m・深さ70cm弱の隅丸長方形のやや大型の土坑である。性格は不明。時期は13世紀後半に位置づけられる。

② 田中町地区

この地区では、井戸1基・溝・柵列3条・土坑等が確認されている。

柵列SA3001（第43図）

62G区の南部のシルト層中で検出された東西方向に走る柵列である。直径30cm、深さ10cm前後のピット3基（SK3039・SK3040・P3034）で構成されている。方位はN77° W、柱間は西から1.85m・1.50mを測る。北1.7mの地点にP3033が存在していることから、掘立柱建物になる可能性があるが、現状では不明である。ピット中の出土遺物は中世陶器片が少量存在するのみである。城下町期の遺構SD3016に切られていることをも考慮すると、時期は中世に所属すると思われる。



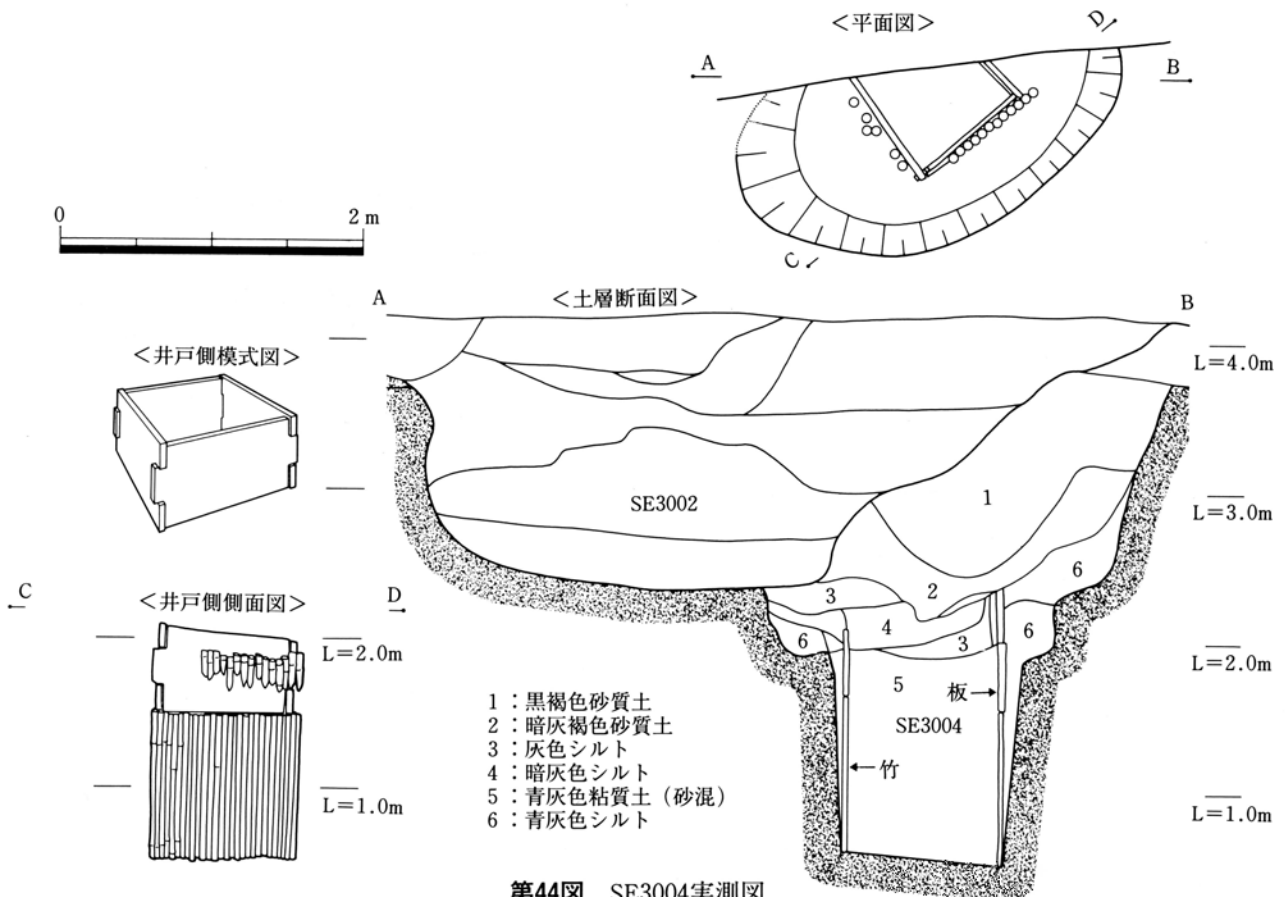
第43図 SA3001・SA3002・SA3003実測図

柵列SA3002・SA3003

63A区の西端部のシルト層上面で、直径0.5～0.8m、深さ0.3m前後のピット4基で構成される柵列が2条検出された。SA3002はSK3049・SK3047・SK3044・SK3041で構成され、柱間は南から約1.5m・1.8m・1.5mを測る。また、SA3003はSK3050・SK3048・SK3045・SK3042で構成され、柱間はSA3002と同様に南から約1.5m・1.8m・1.5mを測る。方位は共にN15°Eで、この2つの柵列は同時に存在したと言うよりも建て替えられたものと考えられる。出土遺物から14世紀前半に位置づけられる。

井戸SE3004（第44図）

90A区の中央部のシルト層上面で検出された、直径2.5m以上の不整楕円形の平面プランを持つ井戸である。内部構造物には、板材と竹材で構築された一辺が約1.0mの井戸側が設置されている。標高2.0mまでは掘形は広く掘られており、それ以下の部分は井戸側が設置される範囲のみを掘削している。井戸側の構造は上部と下部で異なっている。上部は、内側に一辺約0.95mの板材を4枚用いて三枚組手接で方形に組んだものを設置し、その外側に細目の竹材を縦方向に並べている。外側の竹材の遺存状況が不良で、一辺に使用された本数や長さなどは不明である。下部は、長さ約1.0mの竹材を縦に配列して方形に形作っている。竹材を固定するための横棧などは確認できなかった。なお、最下層の状況（曲物桶の有無など）は調査途中で崩落し、危険な状態になったため確認し得なかった。出土遺物は下層から、灰釉系陶器の碗と皿がセットで出土おり、時期は13世紀前半に比定できる。なお、井戸側に竹材を用いた事例は、周辺では朝日西遺跡SE73・SE86、岩倉城遺跡SE04がある。



第44図 SE3004実測図

③ 南部地区

この地区では、溝1条・土坑などが確認されている。

溝SD8018（第45図）

91C区・62B区・90Fa区にまたがって確認された幅約6.0m、深さ約1.2mの規模を持つ比較的大型の溝である。平面形態は直線的ではなく、やや蛇行している。埋土は砂及びシルト・粘土の互層で一部にラミナ状の堆積が観察され、水流があったと思われる。上層の粘土層の上面には足跡状の小穴が多数確認された部分もある。遺構の時期は最下層から12世紀後半の遺物が出土することから、この時期から溝は機能し始め、上層から16世紀後半の遺物が見られることから、この頃には埋没したものと考えられよう。周辺の地形から勘案すると、中世の開発に伴う用水路として機能していたと推定できる。

土坑群SK8228～SK8291（第46図）

90Fb区の全面にわたって検出された土坑群64基を一括して報告する。90Fb区の灰色砂層をベースとする下面で検出されたこの土坑群は、直径0.3～1.0m（平均約0.7m）の楕円形のプランを持ち、深さは0.3m前後を測る。遺構の断面を観察すると、土饅頭状に褐色砂質土が楕円形に堆積している。ベースが脆弱な砂層であることを考え合わせると、極めて短期間に掘削・埋没したものと考えられる。土坑群は一部の例外を除くと、およそN45°Eの方位を持って4列に配置されている。

第Ⅰ列 SK8228～SK8242

第Ⅱ列 SK8243～SK8259

第Ⅲ列 SK8260～SK8272

第Ⅳ列 SK8273～SK8284

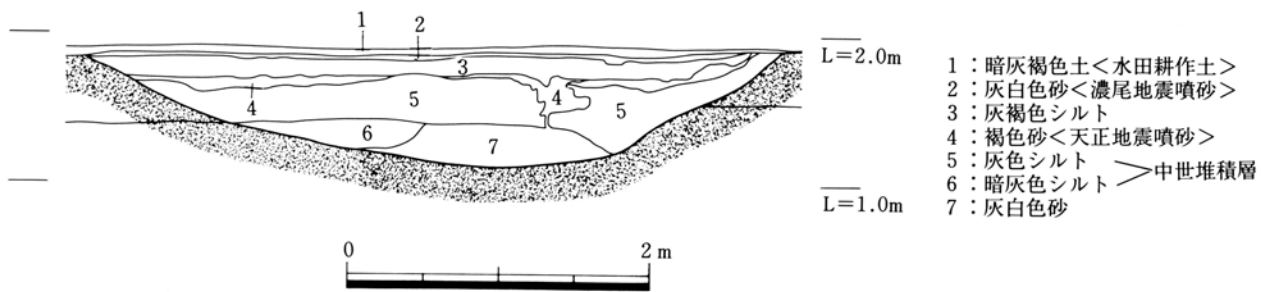
（第Ⅴ列）SK8285

（第Ⅰ群）SK8286～SK8291

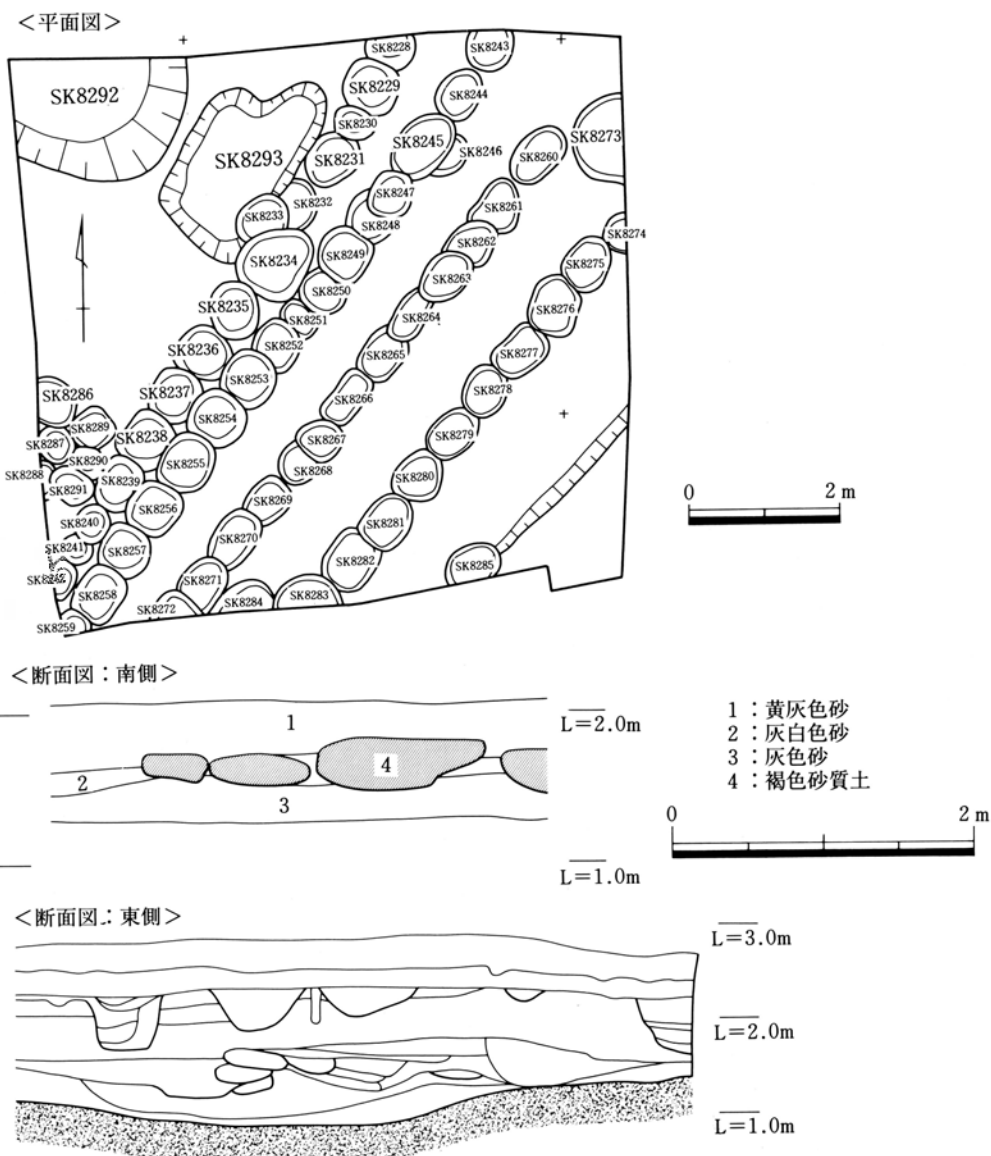
それぞれの列状に並んだ土坑はほとんどが切り合っており、連続して掘削・埋没を繰り返していたことが想定できる。遺構内の出土遺物は僅少であるが、灰釉系陶器の小破片が出土しており、その年代から14世紀代の所屬と言えよう。また、一部には微細な骨片（あるいは焼骨か？）が出土しており、この遺構群が墓塚か、あるいは畑である可能性がある。（鈴木正貴）

註 (1) 小澤一弘編（1992）『朝日西遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

(2) 松原隆治編（1992）『岩倉城遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集



第45図 SD8018断面実測図



第46図 90Fb区遺構実測図

第3節 遺物

A 古代の遺物

古代の遺物には須恵器・土師器などがあり、田中町地区を中心に出土している。一部には、土坑から出土した良好な一括資料や、遺構外からもセットとなって完形の遺物が出土する場合も見られた。出土量の割合は須恵器・灰釉陶器が多くを占めるが、土師器類も一定量を含有している。記述に当たっては、ほとんどが遺構外の出土資料であることから、調査区毎にその内容を記す。なお、器種分類は『清洲城下町遺跡』（1990）における器種分類⁽¹⁾を使用する。

62G区出土遺物（第47図1～18）

この調査区からは、須恵器杯蓋B・須恵器杯B・須恵器碗A・須恵器碗D・須恵器甕・須恵器甌・土師器甕等が出土している。

杯蓋Bは体部の上半部をヘラケズリしたもの（1）と、体部の大半をヘラケズリしたもの（2）の2者がある。前者はO-10号窯式期に、後者はNN-32号窯式期に該当する。3はつまみが剥離したもので、その接合面に回転糸切り痕が残っておりO-10号窯式期に相当する。碗A（4・13）は底部に回転糸切り痕を残すものでO-10号窯式期に相当する。なお、3と4はセットで出土した。杯Bは各器種の中で最も多いものである。底部が厚く中心に糸切り痕を残すもの（9）や、内面が著しく摩滅したもの（5）もある。5・7・9はNN-32号窯式期、6・8・11はO-10号窯式期に所属するものである。10と12はNN-32号窯式期の杯Aであり、特に12は内面にヘラ記号「×」が存在し、底部外縁に手持ちヘラケズリが施されている。碗D（14）は体部下半部に回転ヘラケズリを施し、比較的作りのよい製品である。O-10号窯式期。

15は内外面にタタキを持つ甕である。猿投窯産とは思われず、おそらく美濃須衛あたりの製品と推定される。16は須恵器甌で、底部が横につまみ出されている。8世紀後半ぐらいか。

17は土師器甕Eで内外面にハケメがなく、口縁部が直角に張り出している。18は土師器甕Cで内面に横方向のハケメ、外面に縦方向のハケメが遺存している。いづれも城ヶ谷編年のII-3期に相当し、O-10号窯式期に並行する。⁽²⁾

以上を概観すると、62G区の古代の遺物は、NN-32号窯式期からO-10号窯式期のものが大半を占めており、8世紀後半に位置づけられよう。

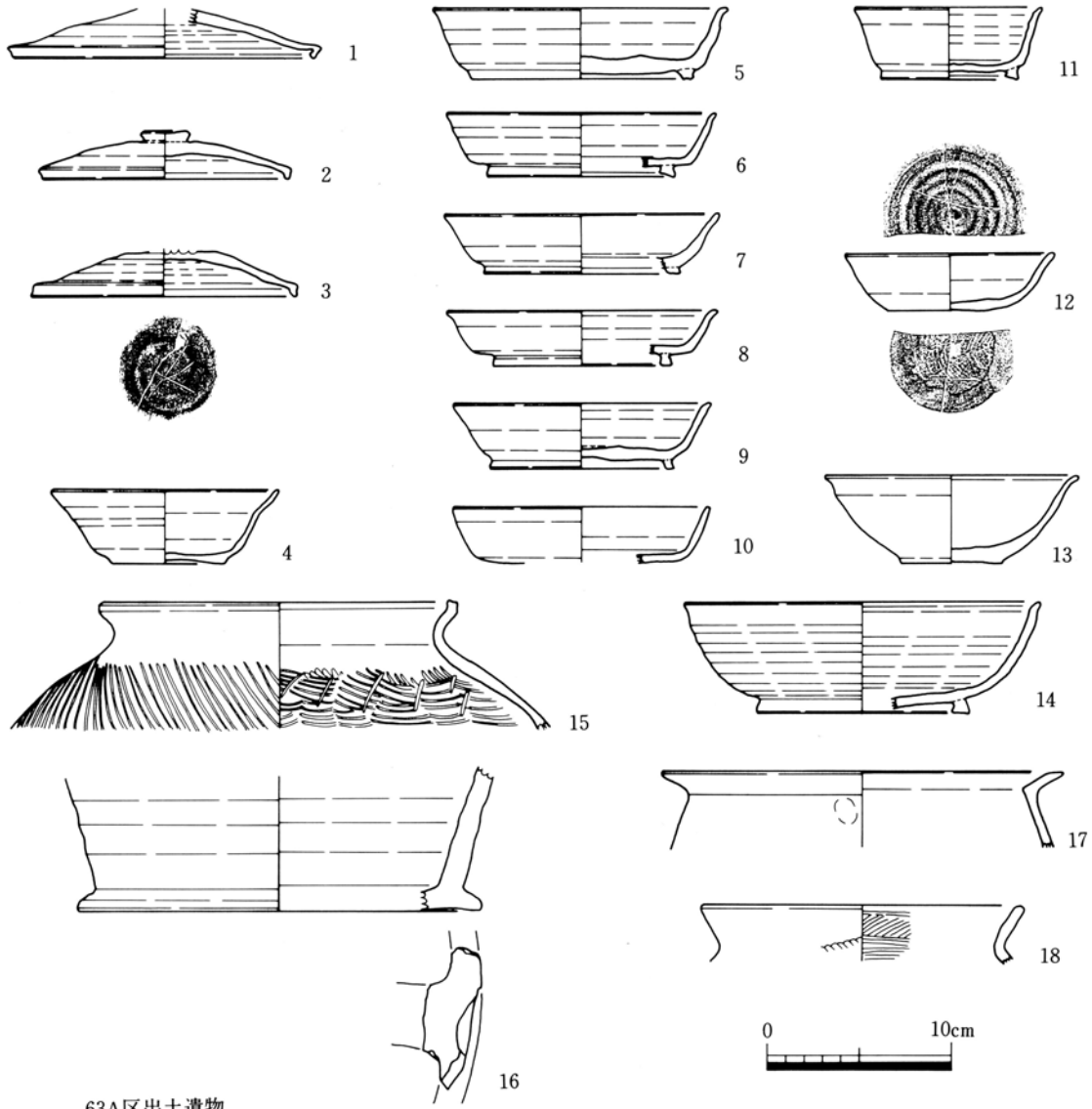
63A区出土遺物（第47図19～23）

須恵器杯蓋B（19）・須恵器盤B（20）・須恵器甌（21）・須恵器壺A（22）・須恵器甕A（23）が出土している。壺A（22）は薬壺タイプのもので、胎土は赤褐色を呈し、外面にタタキが認められる。甕A（23）は黄土を表面に塗布し、雑な波状紋や櫛描き紋が施されている。

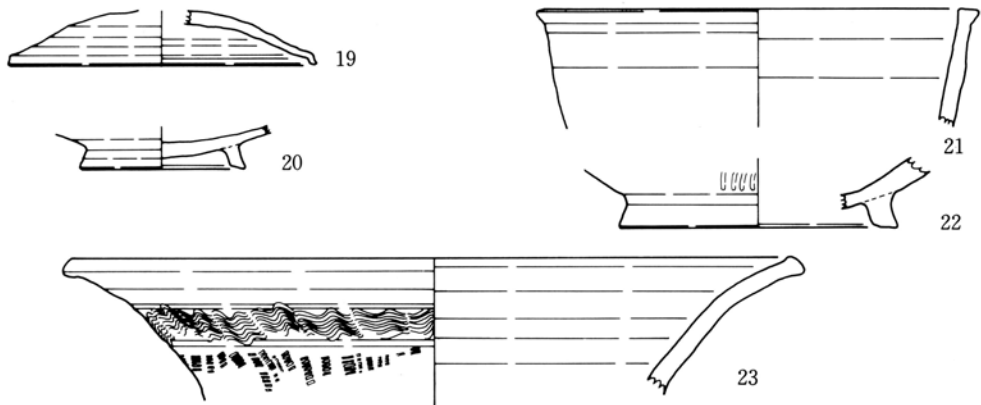
90A区出土遺物（第47図24・25）

須恵器・土師器が少量出土したほか、灰釉陶器碗（24）・皿（25）がセットになって出土した。共に内面全体に灰釉がかかっており、K-14号窯式期に相当する遺物である。

62G区出土遺物



63A区出土遺物



90A区出土遺物

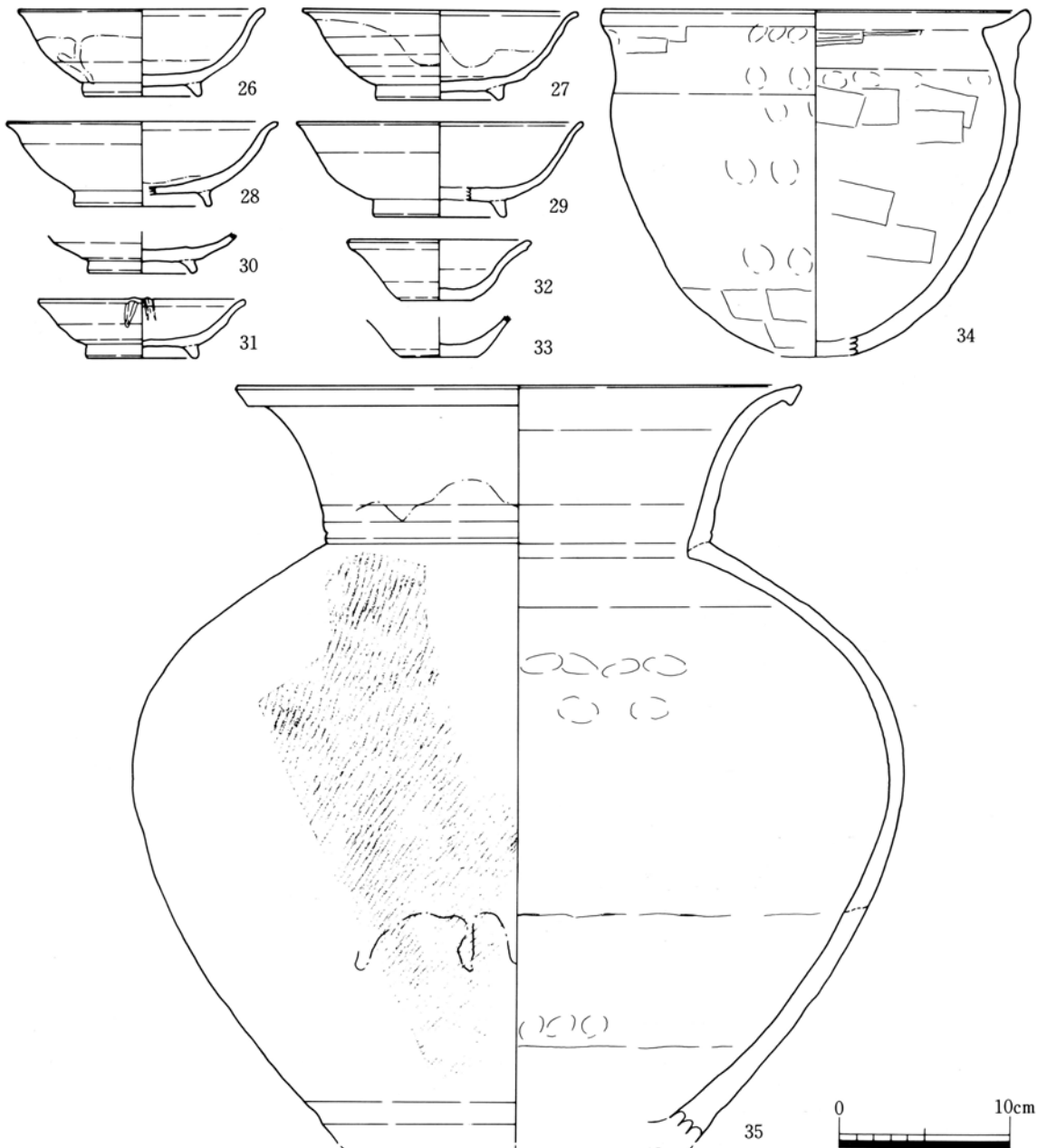


第47図 古代の土器類実測図(1)

93A区出土遺物（第48図26～35）

須恵器甕・灰釉陶器碗・灰釉陶器皿・土師器杯・土師器甕Ⅰなどが土坑からまとめて出土している。26～30は体部が丸みを持って立ち上がる灰釉陶器碗である。26・27は薄い灰白色の釉薬を漬け掛けし、28は淡緑色の灰釉を塗布している。31は灰釉陶器の輪花皿である。これらの灰釉陶器は百代寺窯式期に位置づけられる。32・33は無高台の土師器杯である。淡褐色から灰白色の緻密な胎土を持ち、底部に回転糸切り痕が残っている。体部下半は丸みを持ち、口縁に向かって外反して、口縁端部をややつまみながらヨコナデを施している。土師器甕Ⅰ（34）は口頸部を折り曲げて厚く作るいわゆる「清郷型」と呼ばれるものである。体部外面をユビオサエか粗くヨコナデし、内面には横方向の板ケズリかヘラケズリを施している。外面には煤が付着している。須恵器甕（35）は体部にタタキを持つ。これらの資料は11世紀後半に位置づけられる一群である。

93A区出土遺物



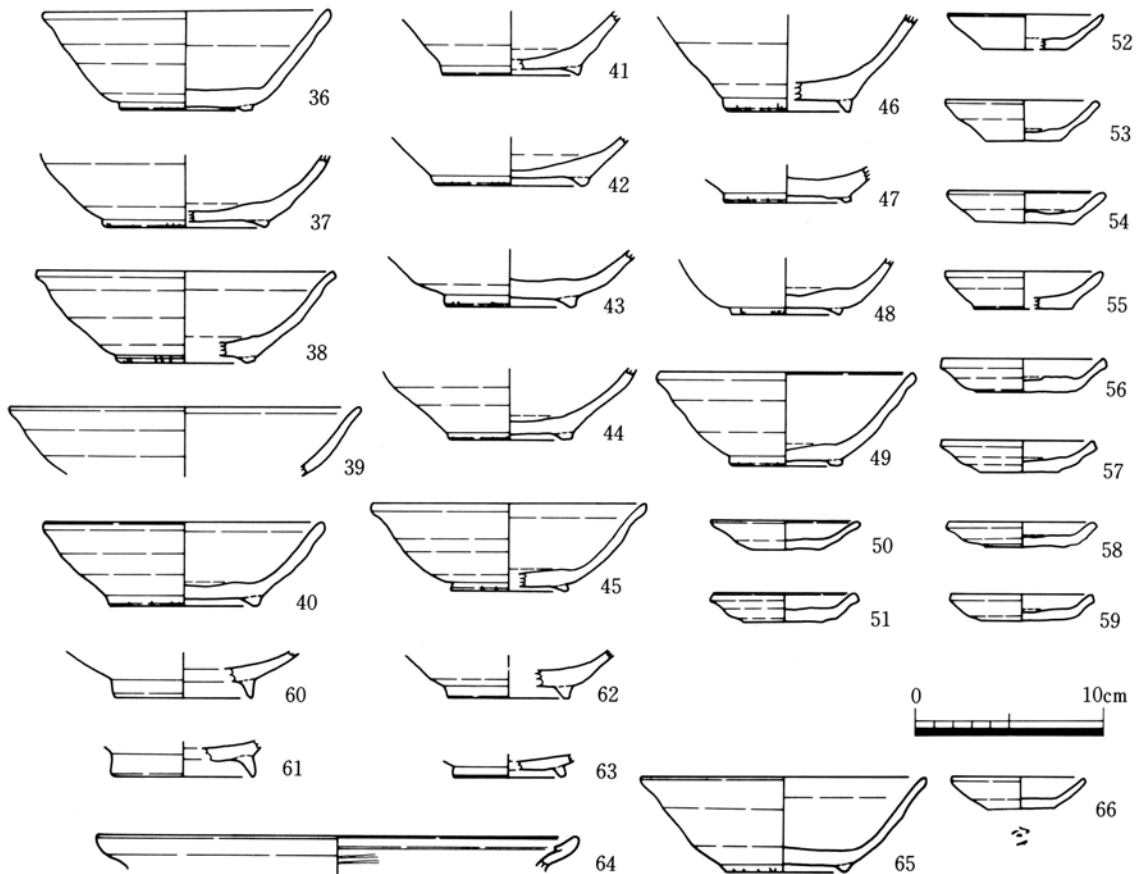
第48図 古代の土器類実測図(2)

B 中世の遺物

中世（前期）の遺物は、一部の例外を除き、すべての調査区から一定量出土している。そのほとんどは城下町期の遺構・包含層から出土しているもので、本来の中世の遺構・包含層から出土したものは極めて少ない。遺構が存在しない地点で中世遺物が出土することは、調査時点で中世の遺構や包含層を見落としている可能性があるものの、城下町期以降の開発に伴い中世遺跡が存在する地点の遺物（土砂）が移動した可能性も指摘できよう。ここでは、中世遺構から出土した遺物の資料のみを紹介し、これら混入した中世遺物群についてはその存在を記すのみにとどめたい。

遺物の種類には、陶器・土師器・磁器等がある。陶器は灰釉系陶器・施釉陶器・常滑窯産陶器に区別できる。灰釉系陶器は古代灰釉陶器生産に系譜を引く瓷器系陶器第Ⅱ類⁽³⁾に分類される無釉陶器（いわゆる山茶碗）、施釉陶器は瓷器系陶器第Ⅰ類に分類される瀬戸美濃窯産の陶器、常滑窯産陶器は瓷器系陶器第Ⅲ類の焼き締め陶器を各々指している。最も出土量の豊富な灰釉系陶器の器種分類と時期設定は『土田遺跡Ⅱ』の「山茶碗」の器種分類⁽⁴⁾に依拠する。常滑窯産陶器は甕が比較的多くみられるが、大半は破片となっており城下町期の常滑窯産陶器との区分が困難なものが多い。施釉陶器の出土量は極めて少ないが、古瀬戸の灰釉四耳壺の小破片などがしばしば認められる。土師器は皿・甕等があり、量的には後者の方がやや多い。また、磁器は中国製の青磁や白磁等が認められるが、出土量は少ない。

SE3004



第49図 中世の遺物実測図(1)

SE3004 (第49図36~66)

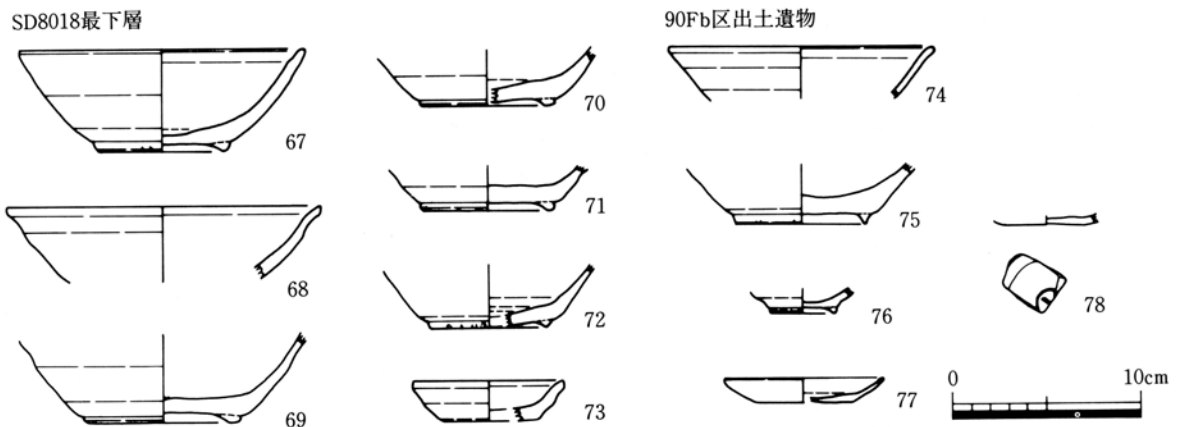
灰釉系陶器碗・灰釉系陶器皿・土師器甕が一括して出土した。このうち65と66は井戸の最下層からセットで出土した資料である。36~49は灰釉系陶器碗であり、高台部にモミ痕を残すものが多い。36~45は常滑窯産のいわゆる荒肌手、46は美濃窯か瀬戸北部窯産の均質手、47は瀬戸窯産の均質手、48と49は猿投窯産の製品と思われる。36は『土田遺跡Ⅱ』の碗A3に相当し、口縁部にススが付着している。41は内面に自然釉が全面に掛かっている。46と47は碗Cに属し、『土田遺跡Ⅱ』Ⅱ期に対応する遺物である。48は内面が著しく摩滅している。50~59は灰釉系陶器皿で、50と52~55は常滑窯産のいわゆる荒肌手、57~59は猿投窯産の製品と思われ、51は特に産地が推定できない荒肌手である。50・55~57は内面全体に自然釉が掛かっている。52~55は皿B2に分類され『土田遺跡Ⅱ』Ⅱ期に対応し、それ以外は体部が浅い皿B3に属すⅢ期並行の遺物と考えられる。土師器甕(64)は口縁部を内側に折り返すいわゆる「伊勢型鍋」であり、新田洋分類の5類の古い段階に位置づけられるものである。最下層から出土した65・66はいずれも常滑窯産の製品で、66の底部外面に判読不明の墨書が記されている。この他に、O-53号窯式期(60)・百代寺窯式期(61)・H-72号窯式期(62・63)の灰釉陶器碗などの古代の遺物も出土している。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる一括資料である。

SD8018最下層出土遺物 (第50図67~73)

SD8018の埋土から城下町期の遺物が多量に出土しているが、最下層では中世遺物のみが出土している。このため、溝が機能していた時期を表現していると考えられる最下層の遺物をここで取り上げる。最下層からは灰釉系陶器碗・灰釉系陶器皿が出土した。67~71・73は胎土に砂粒を多く含有する荒肌手の製品で、72のみが瀬戸窯産と思われる均質手の製品である。碗はA2とB3、皿はB2に属する。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられよう。

90Fb区土坑群出土遺物 (第50図74~78)

90Fb区で検出された墓塚の可能性もある土坑群の一部には、微量ながら出土遺物が存在するものがある。ここではこれらの資料を個々の遺構毎に記述するのではなく一括して報告したい。75は荒肌手の灰釉系陶器碗・76は均質手の灰釉系陶器碗、77・78は均質手の灰釉系陶器皿Cである。77の底部には墨書が施されている。14世紀以降の時期が想定される遺物群である。



第50図 中世の遺物実測図(2)

C その他の遺物

陶器・土器以外の遺物（木製品・石製品・金属製品・骨角製品・ガラス製品など）については、古代や中世に属するものが存在すると考えられるが、該期の遺構から共伴して出土する場合でなければ所属時期が確定できない事情（城下町期以降に所属する遺物の可能性の存在）がある。従って、これまで判明している資料についての報告にとどめ、これが全てではないことを予め付記しておく。

瓦（第51図79～81）

本遺跡では、格子タタキや縄目タタキが施された古代の瓦が8調査区から12点出土している。出土分布については特に偏った状況は認められない（第4表）。

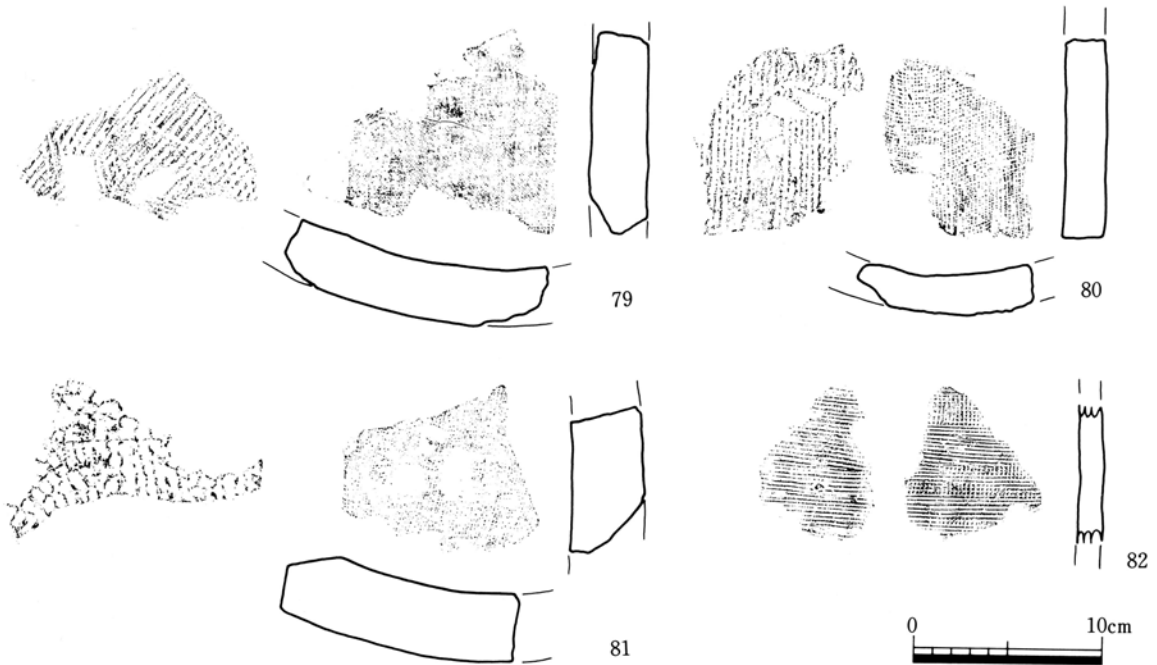
埴輪（第51図82）

63S区のSD7023から須恵質の埴輪片が1点出土した。

弥生土器・ガラス玉

89E区SD6001から円柱状の青色ガラス玉が1点出土した。また弥生土器も若干量出土したが、こうした事象は下層に弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡が存在するというよりも、上流等から流れ込んだものと理解できる。なお、調査区の北東約1kmの地点には朝日遺跡がある。（鈴木正貴）

- 註 (1) 城ヶ谷和広（1990）「A期の遺物」『清洲城下町遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集による。また、城ヶ谷和広氏に資料についてご教示を得た。
 (2) 城ヶ谷和広（1992）「古代尾張の土師器－6世紀後半から11世紀の様相－」『年報平成2年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
 (3) 檜崎彰一（1979）「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3』による。
 (4) 城ヶ谷和広（1991）「土田遺跡における中世土器の様相」『土田遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集
 (5) 新田洋（1985）「平安時代から中世に於ける煮沸用具－『伊勢型鍋』に関する若干の覚書－」『三重考古学研究1』



第51図 古代瓦・埴輪実測図

第4節 小 結

今回の調査で判明した古代と中世の成果をまとめると次のようになる。

古代では、田中町地区において、8世紀を中心とした6世紀から10世紀の時期の集落の縁辺部を検出した。一部では11世紀後半に下る遺物が出土し、古代集落の下限を検討する資料を得たと言える。

中世になると、地区によって様相が異なり、①御園地区は13世紀から14世紀の集落縁辺部、②田中町地区は12世紀後半から13世紀の集落の一部、③南部地区は12世紀後半以降の耕地開発の痕跡と14世紀の墓域といった年代と性格にまとめられる。この成果を踏まえ更に検討してみる。

A 古代と中世の変動

先の結果は10世紀（部分的には11世紀後半）から12世紀にかけて集落が大きく移動したことを物語っている。田中町地区で見られる厚いシルトや砂の堆積物が示すように、古代から中世にかけての度重なる自然災害によって集落の移転を余儀なくされたことが想定されよう。この地域の古代中世の集落は、河川等によって作られた自然堤防の微高地上に形成されたものであり、この地形的環境を大きく変更して作られたものではないと言えよう。

B 中世集落の動態

佐藤公保によれば、清須周辺の中世遺跡は12世紀後半に現れはじめ、13世紀から14世紀にかけて盛行し、15世紀前半以降姿を消して行く⁽¹⁾とまとめられている。今回の成果は、各々の遺跡によって消長の年代が異なるものの大枠としては矛盾のない結果となっている。集落の形態分類や性格の分析は今回の調査範囲では不可能であり、別稿に委ねたいが、ここでは中世集落の終りについて問題点を若干指摘したい。それは、15世紀前半以降姿を消して行く集落の後、次の清須城下町の成立までに半世紀以上の空白が存在する点である。この点については、全国規模の集村化による現在の集落下への移動⁽²⁾・気候の寒冷化に伴う飢饉など厳しい自然現象などの諸説が提示されているが、決定的なものとは言えない。

しかし、この問題は原点に立ち帰って換言すれば、空白の半世紀（15世紀前半～15世紀末）の遺物が消費地遺跡からまとまって出土しない点によるものであろう。従ってこの原因を考えるに当たって、次の可能性を指摘できる。

- ① 現在までに発掘調査されていない地点に、該期の遺跡が存在する。
- ② 該期の人々はその前後の時代に比べ、著しく遺物（土器類）を生産・消費しなかった。
- ③ 該期の人々は清須周辺には全く居住していなかった。
- ④ 遺物の年代観が誤っている。

ここでは以上4点のうち具体的にどれであるかについて解答する用意を持ち合わせていない。しかし、この時期を境に陶器⁽⁴⁾・土器⁽⁵⁾・漆器⁽⁶⁾などの生活道具に関しても著しい変化を見せており、これに対応して清須城下町が成立していることを考え合わせてみても、この問題は城郭・城下町研究には欠かせない論点・課題であると言えよう。（鈴木正貴）

- 註 (1) 佐藤公保 (1989) 「清須周辺の中世集落」『清須—織豊期の城と都市—研究報告編』。
- (2) 註(1)文献と同じ。
- (3) 城ヶ谷和広 (1991) 「結語」『土田遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集。
- (4) 無釉の灰釉系陶器を主体とした供膳形態の土器様相から、天目茶碗等の施釉陶器を主体とした土器様相へと変化している。
- (5) 尾張における土師器皿は15世紀代を境にロクロ成形の土師器皿が多量に見られるようになる。佐藤公保 (1987) 「中世土師器研究ノート (2)」『年報昭和61年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センターによる。また、土師器鍋・釜は、いわゆる伊勢型鍋等の器種構成から15世紀後半頃に新たに羽付鍋・内耳鍋・釜を主体とした尾張型煮炊具群が成立している。鈴木正貴 (1994) 「戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム4』による。
- (6) 中世前期等の漆器資料が僅少であるため、明確な変化の様相は知り得ないが、おそらく15世紀後半頃に高台の高い椀と高台の低い椀のセットが成立したと思われる。鈴木正貴 (1992) 「清洲城下町から出土した漆器について」『朝日西遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集による。

第4表 古代瓦出土地点一覧表

五条橋地区61A区 — 2点	御園地区63R区 — 1点
五条橋地区62C区 — 1点	本町地区89B区 — 3点
五条橋地区90B区 — 1点	南部地区61D区 — 1点
五条橋地区63C区 — 2点	南部地区91B区 — 1点

第Ⅲ章 城下町期の遺構

第1節 概 要

A 遺構の整理方針

今回の調査で検出された遺構は全部で4800基以上の数を数え、このうち半数以上は城下町期に属するものと考えられる。この膨大な遺構の整理に当たっては、①遺構一覧表の作成、②遺構出土遺物の有無と時期の確認、③遺構図の作成の手順を経た。しかし、第Ⅰ章第3節で記述した通り、遺構面や遺構自体が矛盾したり、発掘調査当時の遺構の年代観も完全ではない場合が多かった。また、遺構内出土遺物による検討も、その遺物の年代観が遺構の何を反映しているか、あるいは混入の可能性はないかといった問題がある。こういった諸条件から、遺構の時期の認定には困難な場合が多く、不明瞭なものも存在するのが現状である。

このような現状を踏まえ、城下町期の遺構図（特に巻末図版の遺構全体図）の作成に当たっては次のような操作を経て遺構図を作成している。このため、年報等で紹介された遺構図と異なる場合も多々存在するので了承されたい。

- ① 原則として宿場町期の遺構面は除去した。
- ② 城下町期の遺構面で検出された宿場町期以降の遺構のうち明確に該期と判定されたものは除去した。但し、遺構の規模が深く大きい場合、それに切られる遺構の表現が不明確になる時は掲載した。
- ③ 巻末遺構図の上面と下面は便宜的なもので、調査当時のものではない。まして本来の遺構面に沿った形である保証もない。調査区に応じて複数の遺構面を合わせた場合も存在する。
- ④ 隣同士の調査区で遺構が合わない等の場合には、調査担当者と検討・協議の上、遺構の一部を削除・変更した。

この結果、宿場町期の遺構が多数記載されることとなり、『城下町編』として位置づけた本書の遺構図には適切ではない部分も存在する。遺構番号も宿場町期の遺構と区別なく振り直している。従って、本書の巻末遺構図は城下町期の遺構のみでない。

遺構番号については、地区毎に通番を振り直している。遺構の種別は次の通りの原則を用いる。

- SA（柵列）—— 礎石・ピットまたは土坑が一行に並ぶものをさす。
- SB（建物）—— 掘立柱建物・礎石建物等をさす（柵列を除く）。
- SD（溝）—— 細長い形状をした・もしくはそれと考えられる穴をさす。
- SE（井戸）—— 湧水層まで掘削し、井戸側が存在・存在したと推定されるものをさす。
- SK（土坑）—— 径が40cm以上の方形・円形などの形態をした穴をさす。
- SX（その他）—— 形態が特殊なものをさす。
- NR（自然流路）—— 自然に形成されたと思われる水流のある溝をさす。
- P（ピット）—— 径が最大40cm未満の穴をさす。

B 遺構の種類と概要

城下町期の遺構には、溝・建物・井戸・土坑・ピットなどがある。このうち、溝は形態と検出状況から堀（幅15m以上の溝）・畝状遺構（小規模の溝が並列するもの）・溝（それ以外）と区分した。また、建物は掘立柱建物と礎石建物の二者があるが、後者は根石を持つ掘立柱建物を誤って検出した場合も考えられよう。また、小規模な土坑やピットが多数重なりあって集中し、掘立柱建物の存在が予想される場合（推定が困難である場合には無理に復元しなかった）もある。井戸は、大半が井戸側に結桶を使用したものであるが、中には石を組んで構築されたものもある。結桶の井戸もほとんどは上部の施設や井戸側は遺存してなく、最下層の井戸側まで残らないものも存在する。

こうした様々な遺構群は、当然のことながら、個別に存在しているものではなく、相互に関わり合いながら構築されたものである。今回の調査で検出された遺構群はほとんどが人間が居住した屋敷に伴う遺構群である。こうした区画（屋敷）という遺構群の集合体の遺構については、第V章で記述するので、ここでは個別の遺構単体についての概要とその一部の事例を紹介する。

C 遺構の時期と変遷

これまで、城下町期の遺構の時期は天正14年（1586）を境に大きく2期に区分されてきた。これは名古屋環状2号線建設関連の発掘調査で、最大1mに及ぶ整地層を時期区分の鍵層として設定されたものである。その後、この整地層は遺跡の特定地区のみの現象であることが判明し、また、細分案も提示されたりしたが、遺構構成や遺物の点からみれば、大筋では変更されてこなかったのである。各時期の遺物と遺構の概要は次の通りである。⁽¹⁾

前期——瀬戸美濃窯編年の古瀬戸後期末～大窯Ⅲ期の陶器を指標とし、ヨコナデする非ロクロ成形の土師器皿が出土する。巨大な2つの方形区画を中心に武家屋敷や市場などが広がっている。

後期——瀬戸美濃窯産の長石釉の製品・向付の出現を指標とし、ヨコナデのない非ロクロ成形の土師器皿が出土する。本丸を中心に三重の巨大な堀で城下町を囲む「総構え」の段階である。

こうした研究史を踏まえ、今回検出された遺構の時期を大きく3期に区分する。時期区分と時期の認定に際しては、①遺構面の把握、②遺構の切り合い関係、③遺構出土遺物の年代を参考にすが、広範囲の調査区を包括した細区分の検討を行うには、③遺構出土資料の分析が最も有効な手段であると思われる。そして検討の結果、遺構内出土資料の時期毎のまとまりを重点に置くと、

I期——瀬戸美濃窯編年の古瀬戸後期末～大窯第1段階（これまでの前期前半に対応）

II期——瀬戸美濃窯編年の大窯第2段階～大窯第3段階（これまでの前期後半に対応）

III期——瀬戸美濃窯編年の大窯第4段階～大窯第5段階（これまでの後期に対応）

と区分するのが妥当と思われる。なお、各時期を各々2小期に細分したが、それを含めた遺物の変遷の詳細は『清洲城下町遺跡V』（1995刊行予定）に記述したい。（鈴木正貴）

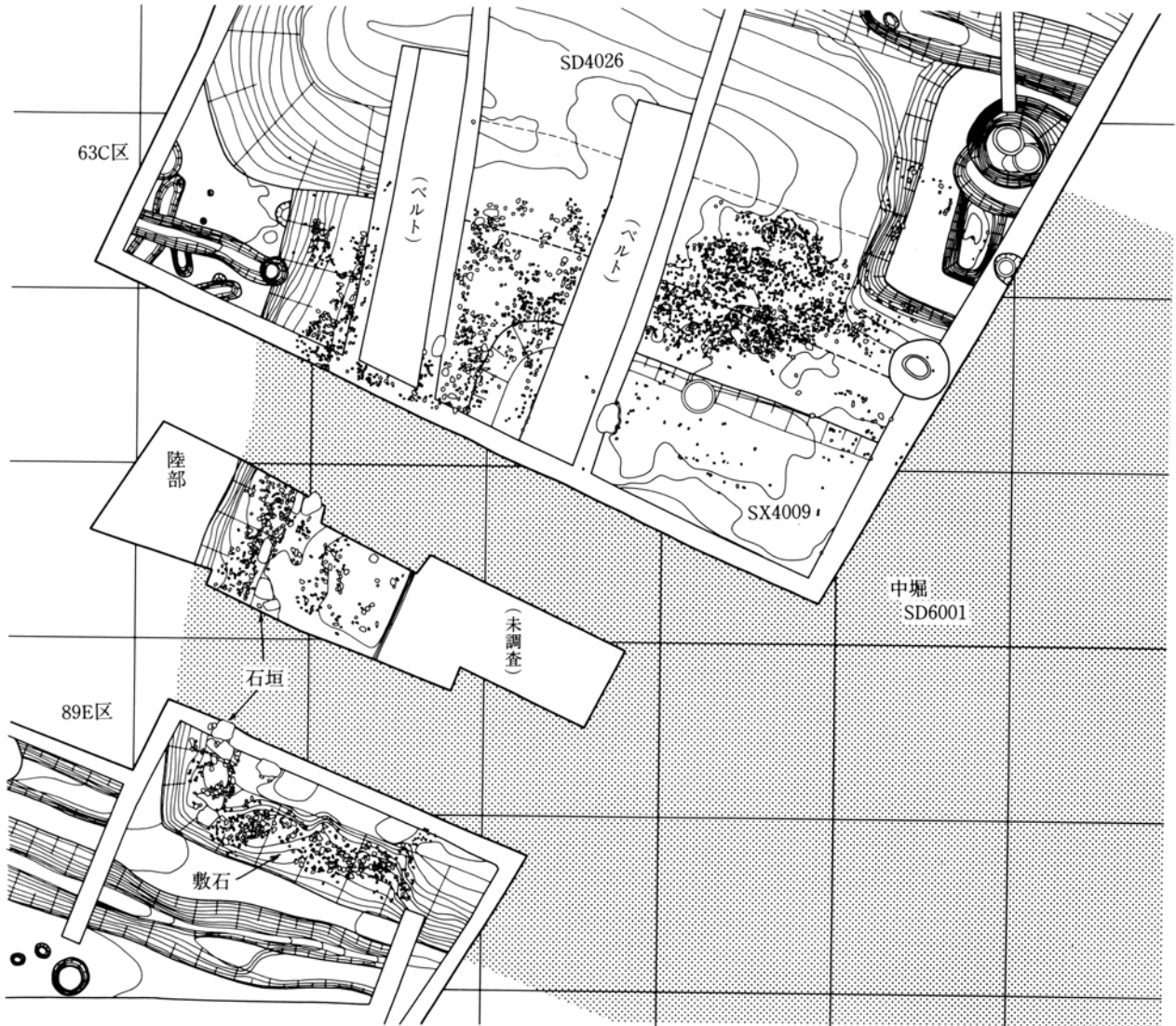
註 (1) 梅本博志（1988）「清須城下町」『清須—織豊期の城と都市—資料編』をまとめた。

(2) 藤澤良祐（1985）「瀬戸大窯の編年的研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』による。

第2節 中堀 (SD6001)

A 概要

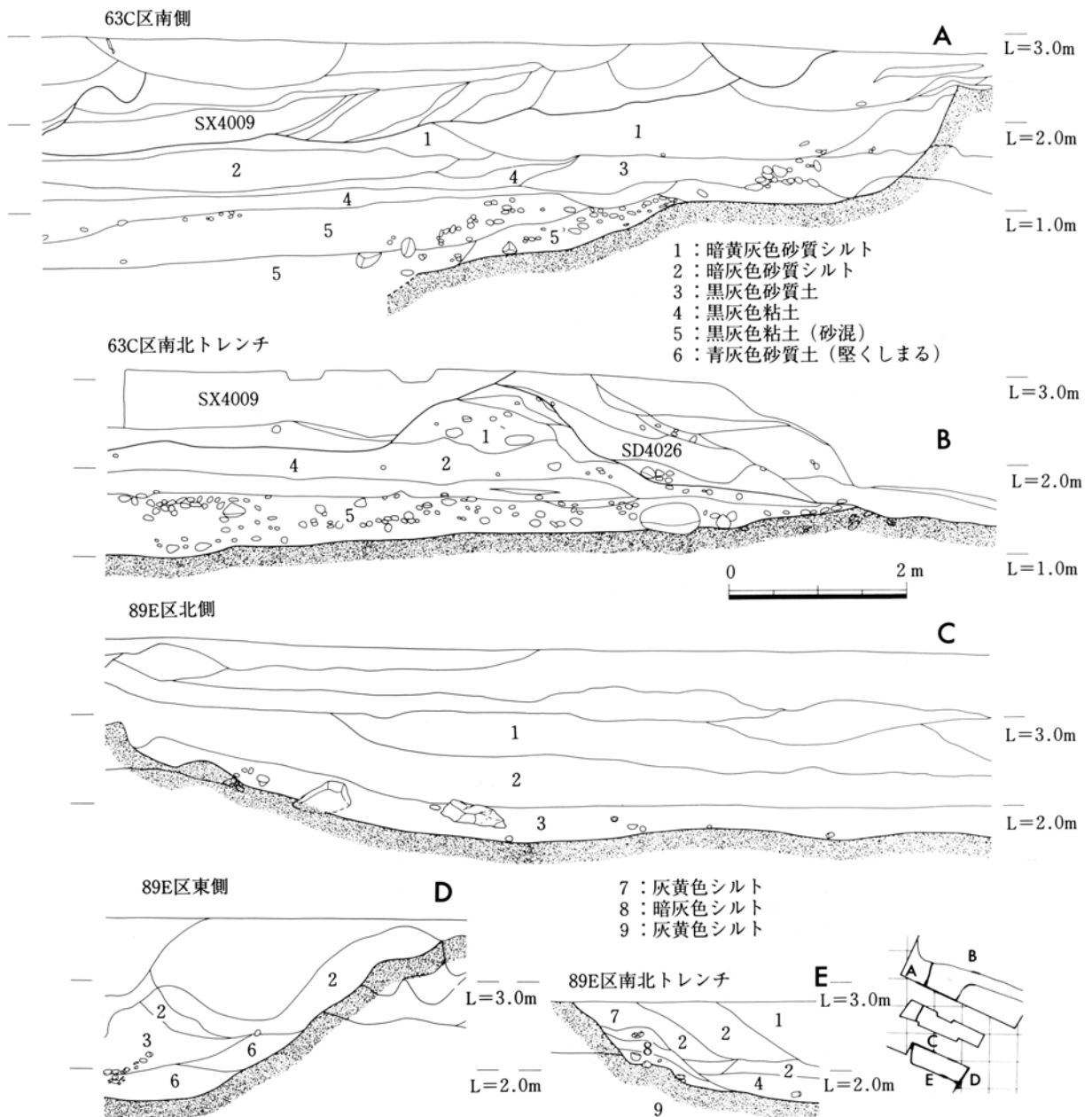
63C区南半部と89E区の北半部で検出された N66° Wのほぼ東西方向に走る溝である。東方向は調査区外に伸び、西方向は途中で収束している。調査区設定の限界や宿場町期の井戸により一部不明な点が残されるが、南肩と西肩は比較的良好な状況で検出できた。しかし、北肩は宿場町期の巨大な遺構SD4026等によって既に破壊されており、本来の状況を把握することはできなかった。従って、SD6001の幅については、最小19m・最大31mの範囲の数値であると言えない。深さは63C区の検出面から2.21m、89E区の検出面から1.89mを測り、最下層の標高は約0.5mである。堀肩の斜面には石垣や敷石の護岸施設が施されている。西肩には最大1m規模の巨石を用いた石垣が設置されていた。但し1段のみを検出したに過ぎず、上部は既に破壊されていたと思われる。一方、南肩では拳大の大きさの石が斜面に敷き並べられた状態で出土している。破壊されていた北肩の前面の底には同じく拳大の石が多数散乱しており、北肩にも南肩と同様の敷石が敷かれていたと考えられる。



第52図 中堀SD6001全体図 (S=1:200)

溝の埋土は後世の攪乱をかなり受けたと考えられ、南北両肩に敷かれた敷石の石材が多数混入している。中には石垣に使用されたと想定される巨石が数個落ち込んでいた。土層堆積は、最下層で黒灰色粘土が主体となり、上位にいくにつれて斑土が多くなっている。最下層が地下水の湧水層に達していること、ラミナなど水流の痕跡が観察されないこと、明らかに五条川と接続していないことなどを考慮すると、この溝は滞水状況を呈していたものといえよう。

SD6001は、SD4030を切るのみで、その他の遺構を切っていない。また、SD6001の北側の地点には整地層が認められ、その下層の一部は城下町期Ⅲ期のものと考えられる。この整地層はSD6001の南部には看取されないことから、SD6001掘削時に施された土塁の痕跡の可能性もある。整地層の直下には天正地震による噴砂が堆積しており（第Ⅰ章第3節）、このことからSD6001の掘削年代は天正14年以降（城下町期Ⅲ期）と考えられる。



第53図 中堀SD6001土層断面図 (S=1:75)

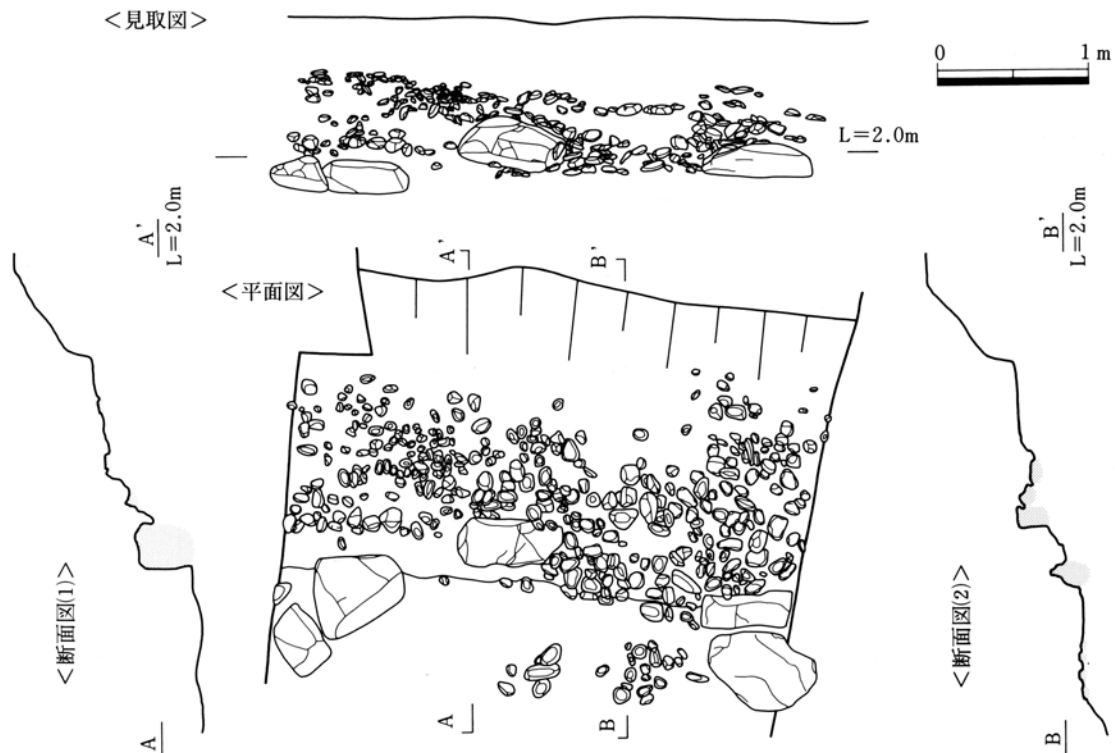
B 石垣

SD6001には、西肩に石垣・南肩に敷石が施されており、位置によって護岸施設が作り分けられている。なお、堀底にも石材が散乱しており、敷石を施した可能性がある。しかし、巨石による構築物はなかったと思われる。

西肩の石垣は1段のみを確認し、89E区の南調査区（第55図）で5個の巨石・89E区の北調査区（第54図）で4個の巨石が出土した。89E区の南調査区の石垣の前面に同様の巨石が1個崩落しており、本来は2段以上存在したことが推定できる。おそらくSD6001廃絶時に石垣上部は抜き取られ、他の用途に転用されたと考えられる。石材は濃飛流紋岩の切石を用い、比較的平らな面を東の表面に向けて配置している。石材には特定の加工痕や刻印は認められなかった。調査時の事情により、裏込め石の状況に関する詳細な調査が不能であったが、裏込め石は存在したと思われる。なお、石垣を支える胴木や杭列などの補強施設は全く存在しなかった。

南肩の敷石は、拳大の自然石を多量に用いて斜面に1段敷き並べている。敷石の範囲は西肩石垣の前面から検出された部分全域に及び、石垣と敷石はセットで設置されたものと考えられる。敷石にはベース（砂層）とは異なるシルトが伴っており、石を並べる際に粘土等を用いて突き固めた可能性がある。敷石に用いられた石材の大半は濃飛流紋岩の自然石であり、おそらく木曾川上流域から運ばれたものと思われる。

石垣の構築年代については、直接知り得る資料が存在しない。敷石の構築年代については、石を突き固めた土層中から銅緑釉を掛けた天目茶碗など大窯第5段階の遺物が出土している。石垣と敷石を同時に構築したと考えれば、これらは17世紀初頭に築造されたものと考えたい。なお、石垣と敷石の設営がSD6001掘削と同時に行われたか、少し遅れるのかについては詳らかでない。



第54図 中堀SD6001石垣実測図(1)



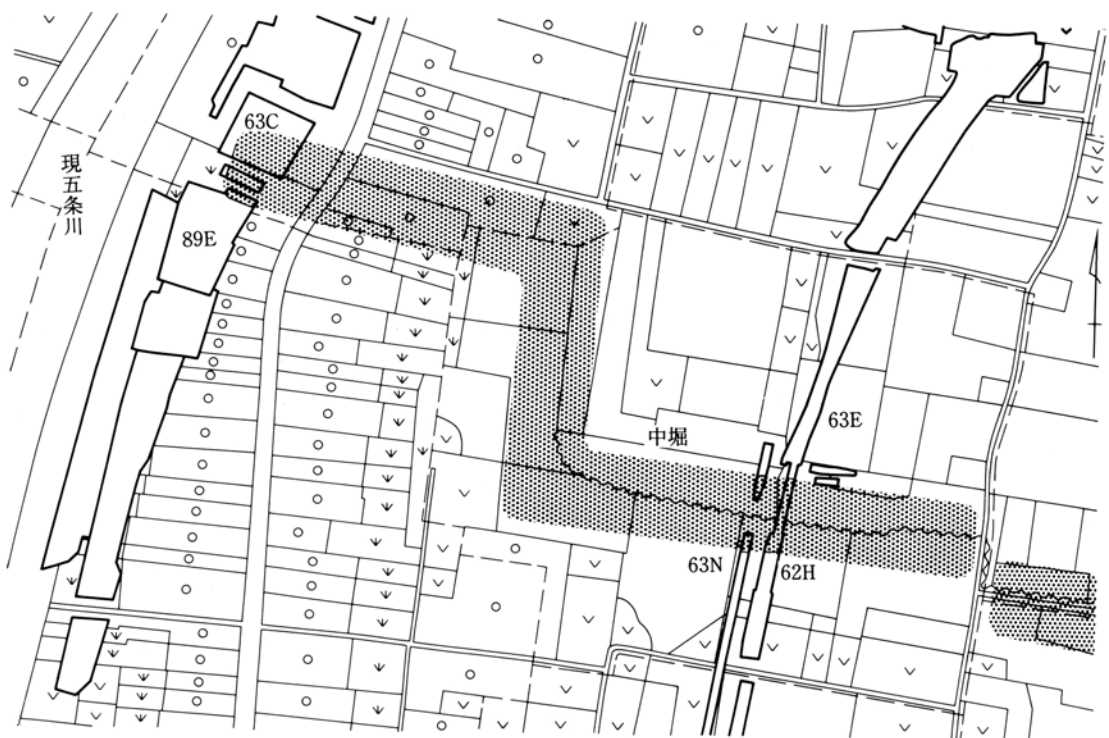
第55図 中堀SD6001石垣実測図(2)

C 中堀 (SD6001) の廃絶

SD6001の廃絶年代については、埋土中に含まれる遺物を検討することで考察できる。これによると、遺物の混入の可能性が全く捨てきれないものの、17世紀後半から18世紀前半の資料が一定量出土していることが分かり（第57図）、この結果、SD6001が最終的に埋没するのは17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる。

従来、17世紀初頭の「清須越し」以降の清須の状況は、城下町の移転により大部分の堀や区画溝は埋め立てられ、痕跡をとどめるに過ぎない状況であったと考えられてきた。しかし、今回のこのデータは、堀の埋め立てなどは完全に実施されたものではなく、部分的に廃城以降にも機能していたことを示している。また、名古屋市蓬左文庫所蔵の『春日井郡清須村古城絵図』に見られる堀の推定位置の記載方法には、①「田」あるいは「畑」と注記されたものと、②「水堀」と記載されたものと、③無注記のまま記載されたもの（SD6001検出地点はこれに当たる）の3者があり、これは絵図作成当時の状況の差を示すものと考えられる。このような事例から堀の埋没年代については地点によって異なる可能性があり、単純な廃絶経過を経たものではないことが言える。

更に、SD6001を破壊して作られた18世紀前半に位置づけられるSD4026・SX4009は、その規模は巨大でありSD6001を掘り直したものとも考えられる。その意味でSD4026・SX4009は、何等かの形でSD6001を意識して掘削されており、SD6001の存在はかなり後世まで意味を持っていたものと思われる。



第56図 中堀SD6001の復元図（一部、S=1:2500、地籍図より編集）

D 中堀の復元

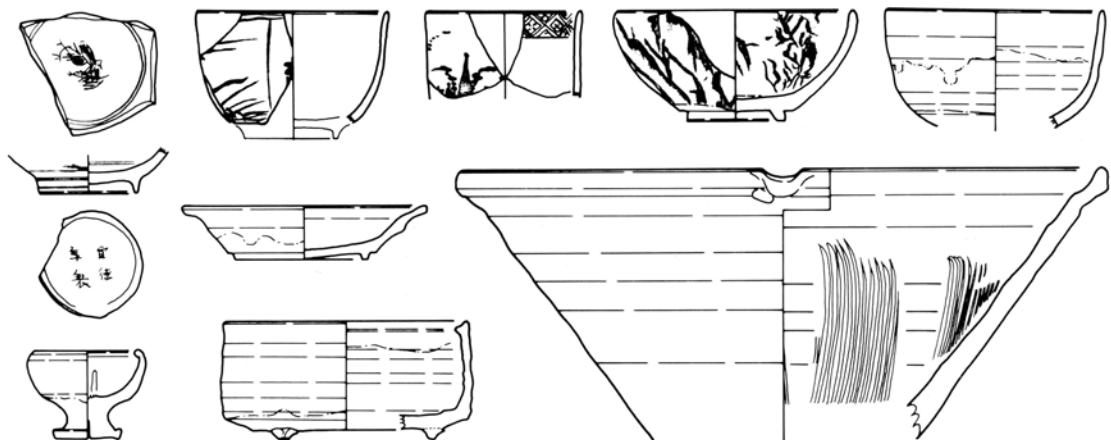
SD6001は、今回の調査では幅20m以上を測る最も規模の大きい溝である。これまでこの規模の溝は城下町期Ⅲ期の清須城絵構えの堀と推定されてきた。SD6001の場合も、『春日井郡清須村古城絵図』にも見られ、これまでの復元的研究に登場する「中堀」の一部であることが確定的である。「中堀」の調査事例は、県道清洲新川線拡幅工事に伴う調査でSD137⁽¹⁾を、名古屋環状2号線建設に伴う調査でSD52⁽²⁾を確認し、今回で3例目である。しかし、この2例はいずれも護岸施設を伴わない素掘りの溝であり、護岸施設を持つSD6001とは構造が明らかに異なっている。この点を踏まえ、「中堀」の五条川右岸南部地区の復元を試みたい(第56図)。

五条川右岸南部を東西に走る「中堀」は、2ヶ所(SD137・SD6001)で確認されている。検出された位置関係は直線的にはつながらず、この2者の中で屈曲していると思われる。この屈曲は『春日井郡清須村古城絵図』に表現され、地籍図による分析でも肯首できる。この「中堀」はSD6001で確認されたように、五条川に接する地点で終り、河川の流路とは接続しない。つまり五条川とSD6001の間に土橋状に通路(道路)を設置したものと換言できよう。本町地区の遺構配置を検討すると、土橋状に掘り残した地点の延長上に道路が走っていたと考えられ、これが宮迄道(旧美濃街道)と推定される。この街道に面して「中堀」が終っている地点でのみ石垣や敷石が確認されていることから、これらの護岸施設は、①街道に面した部分を特に嚴重に防御した施設、②同じく櫓などの防御施設に伴う補強地業、③街道に面した表部分のシンボリックな装飾などの用途が考えられよう。この意味でこれまで検出された幅広で堀底が湿地状の堀(通常的な堀)とは異なる特異性が認められる。なお、この復元案は、現美濃街道を生かした千田嘉博氏の堀の復元⁽³⁾とは微妙に異なっている。(鈴木正貴)

註 (1) 鈴木正貴編(1990)『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集。

(2) 小澤一弘編(1992)『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集。

(3) 千田嘉博(1989)「清須城とその城下町—地籍図による復元的考察—」『清須—織豊期の城と都市—研究報告編』



第57図 中堀SD6001出土遺物(宿場町期)
(この遺物は例示にすぎない。詳細は『清洲城下町遺跡Ⅴ』による。)

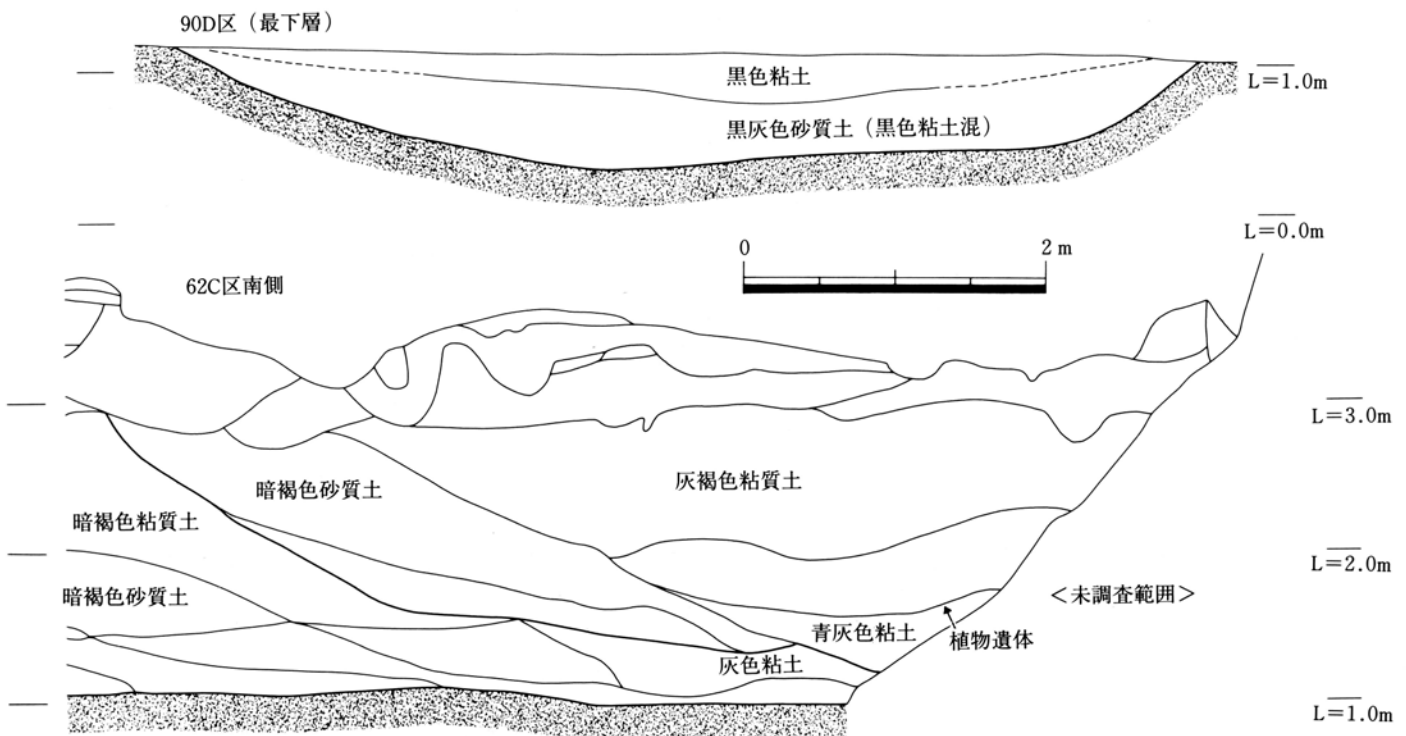
第3節 旧五条川 (NR4001)

A 概要

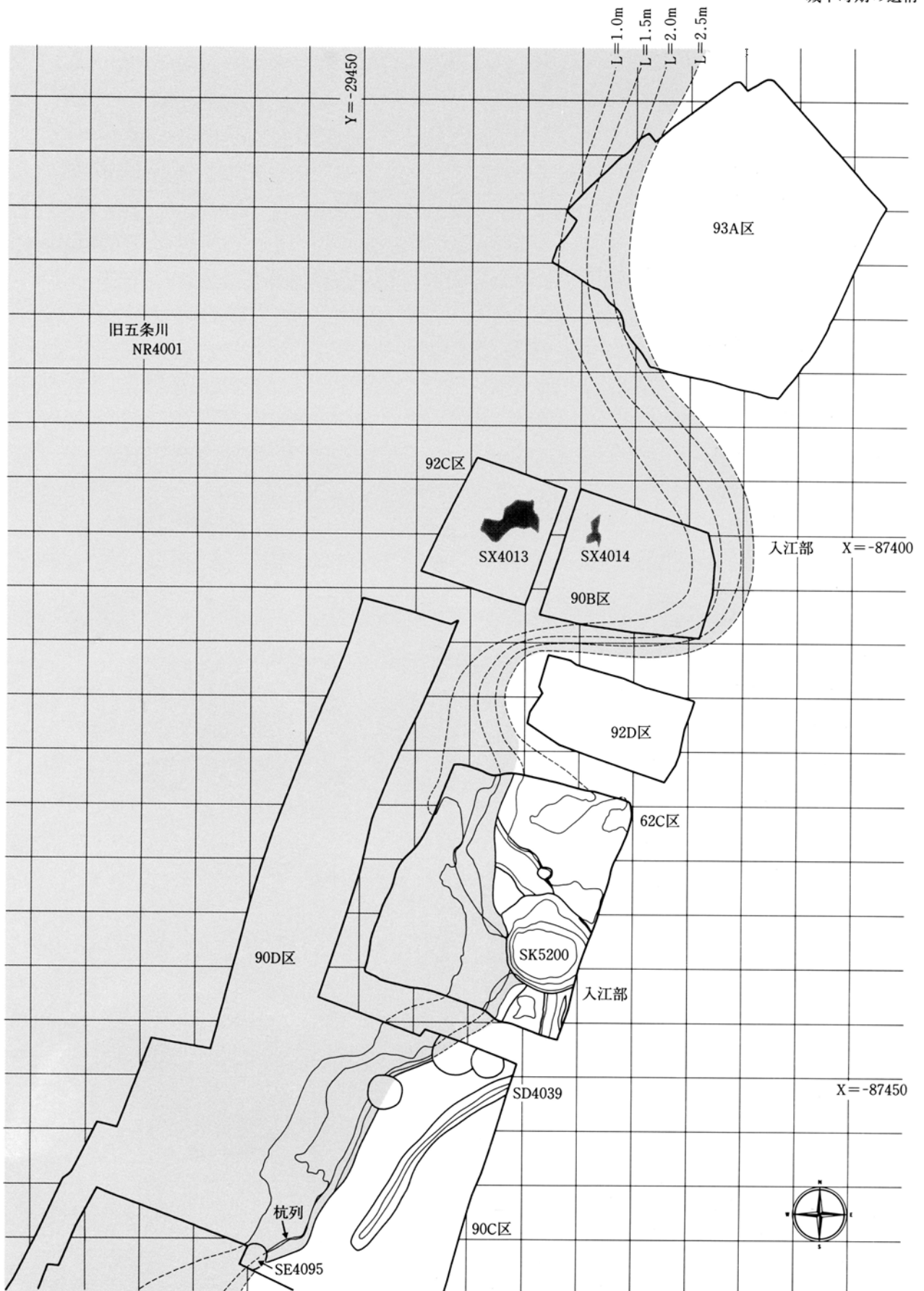
93A区から63C区までの広範囲にわたって検出された南北方向に走る自然流路（埋積河跡沼）である。東肩のみを検出し、一部で流路の最下層を確認した。調査期間が治水対策上限定され、かつ狭い調査区で5 m以上も沖積地を掘削する調査上の困難も手伝って、最下層まで完全な形で調査できない場合があった。従って、NR4001の遺構図には断面図等から推定した部分が含まれている（第59図）。

NR4001は複雑に蛇行していたと考えられ、93A区・92D区では舌状に堤防部が伸び、90B区・62C区では流路が入江状に入り込んでいる。92C区と90B区では入江部のほぼ中央に木材や竹材で構築された施設（SX4013・SX4014）が存在する。また、62C区では入江状に入り込んだ最奥部に巨大な滞水状の土坑SK5200が構築されている。NR4001は、90C・D区で西へ曲がって行き、63C区では僅かに流路の肩を確認したのみである。90C・D区で検出された東肩の更に東には、およそ3～5 mの間隔で溝SD4039が並走している。溝SD4039は途中で収束してNR4001への出入り口を形成している。その南のNR4001の東肩部に井戸SE4095が設けられている。また、SE4095の北東部のNR4001の肩部に杭列が存在する。この杭列は護岸施設の残欠であった可能性がある。

90D区では、黒色粘土層を充填した最下層部が三日月状に検出され、これがある時期の旧五条川の本流部と思われる。NR4001の埋土は、90D区で下層から①砂混じりの青灰色粘土層、②植物遺体を含有する黒灰色粘土層、③青灰色粘土層、④灰色粘土層あるいはシルト層の順で堆積し、NR4001の堆積物の層厚は3 m以上に達する。これらの堆積物は東から西に向かって蓄積したもので、NR4001は検出部分から徐々に西に移動し、最終的には現在の五条川的位置に落ち着いたものと考えられる。



第58図 旧五条川NR4001土層断面図



第59図 旧五条川NR4001全体図 (S=1:500 破線は復元・推定線)

NR4001の年代は、90D区で各層位毎に遺物の分析が行われ、瀬戸美濃窯編年の古瀬戸後期第4段階末から大窯第1段階の遺物が主体を占めており、「永正五年」の紀年銘卒塔婆も伴出している。NR4001の初現年代は確定できないが、埋積の開始は埋土出土遺物の最古の遺物群である古瀬戸後期第4段階末になると思われ、15世紀後葉と推定できる。また、NR4001埋没後に掘削された土坑SK4496などからは大窯第1段階の良好な一括遺物が出土しており、16世紀前葉にある程度の埋積が完了したものと考えられる。従って、この3m以上の堆積はおよそ半世紀のうちに急速になされたものであり、おそらく15世紀後葉にNR4001の上流部で何等かの環境の変化が起こり、NR4001の流れが変化したためこのような現象が起きたものと推定できる。

16世紀中葉以降は、調査区の範囲には自然流路は存在せず、現五条川の位置に河川は流れていたと考えられよう。但し、埋積後の数十年間は極めて不安定な地盤であったと推定され、該期の遺構はほとんど存在しない。このことは、天正地震の際にはNR4001のあった部分で激しく液状化現象を生じ、170㎡の砂が噴出していること、この砂で覆われた1586年の生活面には足跡が多数検出されていることから裏付けられよう（第61図）。

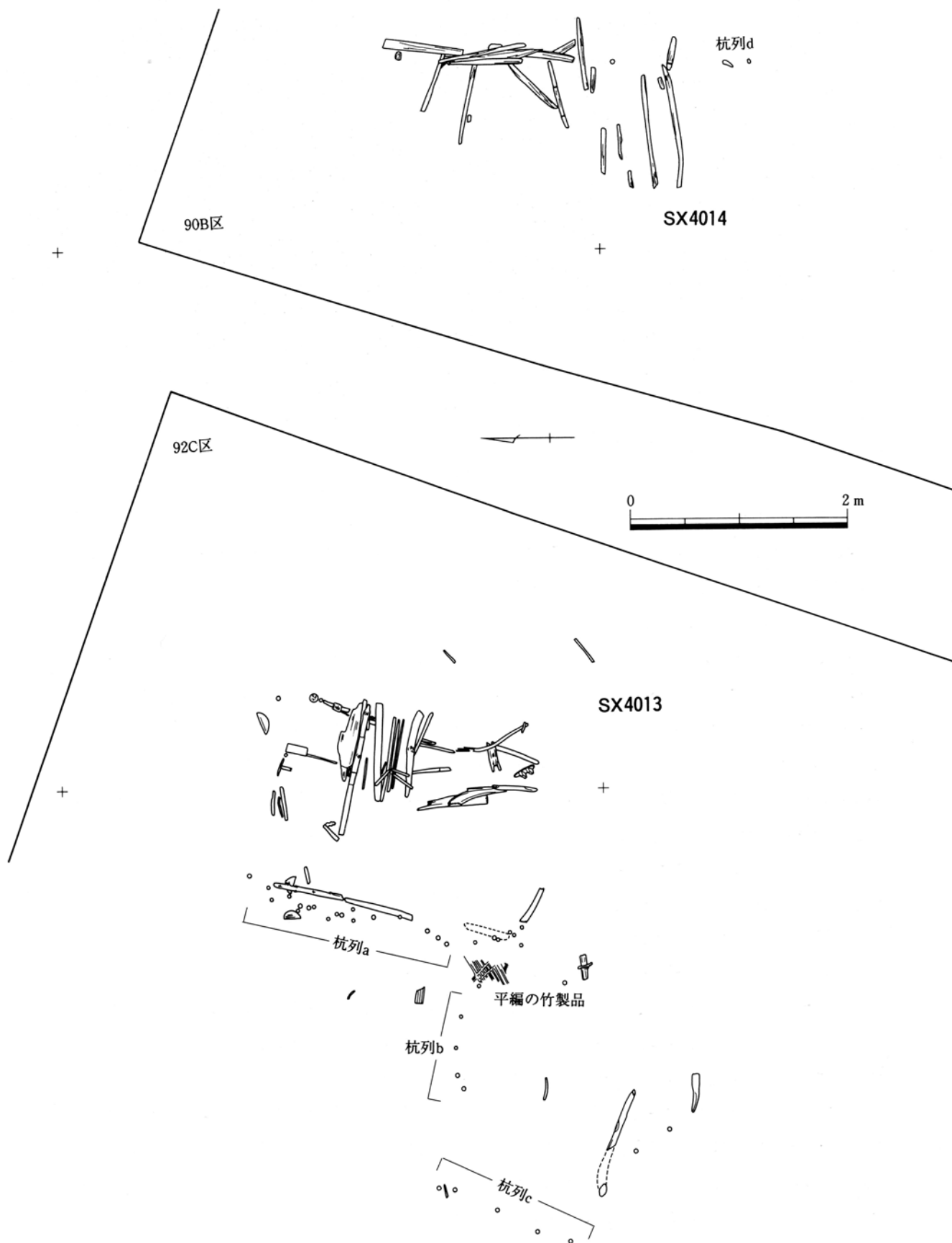
B 木製構築物 (SX4013・SX4014)

SX4013・SX4014は、NR4001の北入江部の下層に所在する木材と竹材を用いて作られた施設である（第60図）。92C区と90B区の2調査区で検出され、この施設自体は各々の調査区外に広がらないが、その位置から考えると無関係に存在するのではなく一対の遺構群と考えられよう。

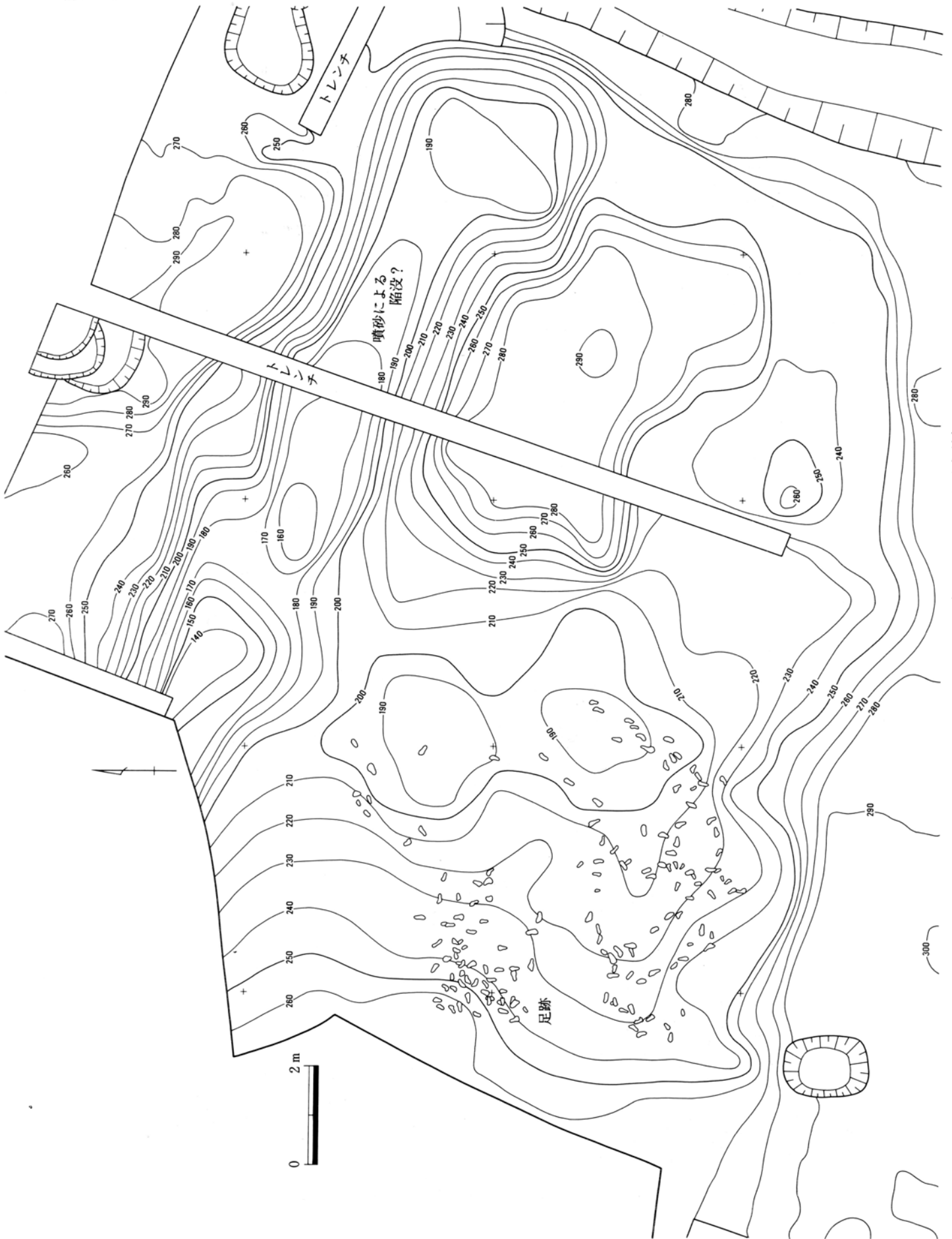
SX4013は、92C区東部で検出された杭列と横木によって構成されたもので、標高1.5m前後に所在する。杭列は南北方向に2列・東西方向に1列あるが、全体として見た場合、鍵の手状に折れ曲がった平面配置をしている。東寄りに存在する南北方向の杭列aは25本の杭を用い、杭列に接して東に横木を3本並べて設置している。その南端部から西へ5本の杭を打った杭列bが伸び、杭列aと杭列bの間に竹を平網みにした製品が出土している。杭列bの西端部から南へ杭5本を用いた杭列cが展開し、この杭列cの南端部から折り返して東へ横木が据えられている。杭列aの東には1m程離れた地点で様々な形状の横木や竹材が配列されていた。ほぞ加工を施した材も見られたが組み込まれたものではなく、何等かの頑丈な建築遺構が本来の形をとどめて埋没したものと考えるのが難しい。この他に下駄・卒塔婆・曲物桶などが出土している。

SX4014は、90B区の西部の標高1.5m前後で検出された構築物である。南北方向に配列された杭列1列（杭列d）と横木10本以上で作られている。杭列dは7本以上の杭で作られ、その上位に乗る形で横木が4本据えられている。この南北方向の配列から西に向かって横木がほぼ等間隔で7本並ぶ形で設置されたものと考えられる。杭や横木はどれも組加工で接合されていなかった。

SX4013・SX4014を併せて考えると、杭列aと杭列dが対応し長方形の空間を設定し、その内部に横木を東西方向に配列した構造をしている。これらは極めて脆弱な構造であることから、五条川の橋脚等の構築物とは考えられない。設置された地点を考慮すると、五条川の流れを一部せき止めて編物製品（笠）を配置した川漁のための施設の可能性が考えられる。



第60図 SX4013・SX4014実測図



第61図 旧五条川NR4001埋積後の状況（90D区・天正地震直前）コンタの数値はcm単位

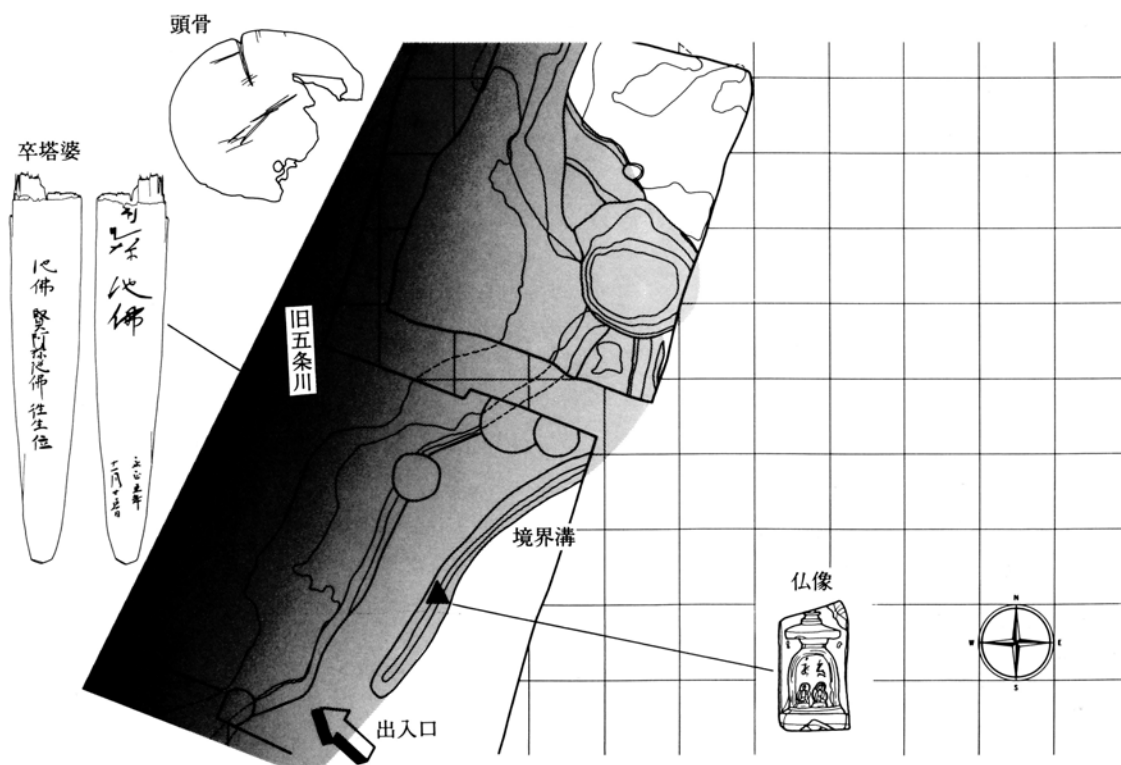
C 河原の異空間

NR4001からは瀬戸美濃窯産の陶器類をはじめ、多種多様な遺物が出土している。この詳細については後述するが、この中で、多量の日常道具類に混じって他の遺構・地区とは異なる宗教的・祭祀的遺物群を紹介し、この遺構の特異性を明らかにしたい。

宗教的・祭祀的遺物は多岐に及ぶが、最も多くしかも顕著な事例は卒塔婆である。その文言から浄土系・法華宗系など多様な形式が認められる。柿経も妙法蓮華経（法華経）や金剛般若経を书写したものがみつまっている。獣骨・人骨も多数出土し、無数の刃傷が加えられた頭骨も存在する。この他、墨書土師器皿・穿孔土師器皿・刻書土師器皿・羽子板状木製品なども見られる。また、土師器皿・花瓶・香炉などが比較的多く出土することも注目に値する。更に、SD4039からは十三仏像が出土している。こうした特殊な遺物はNR4001から少し離れると急激に減少していることも付記しておく。

このような出土状況から、NR4001の特異性はSD4039を境界にして内側の空間に展開していたと考えられる。中世人の河川に対する認識は、彼岸と此岸・現世と冥界の境界部に相当すると考えられていたと思われる。その意味で、こうした遺物群が出土したことは、NR4001とその河川敷で宗教的行為が行われていた証左となろう。また、多量の陶器や木製品などが出土する現象や何等かの施設を河川敷に設営したことなどを考えると、五条川を利用した物資の交流が、この地点でかなり行われたと推定できよう。異論も多々認められるが、ここでは川港の様相もあったと想定したい。

こうした事例は、清須城下町という都市の内部に川港と祭祀空間の両面性を持った「異空間」が含有されていたことを示しており、興味深い。（鈴木正貴）



第62図 旧五条川NR4001概念図 (S=1:500)

第4節 溝

A 概要

溝は大小様々な規模のものがほぼ全調査区にわたって発見されている。溝は素掘りの溝のみで、石組・しがらみ・杭列などの護岸施設を持たない。遺跡の地盤が軟弱であるため護岸施設を持たない急斜面を維持するのは困難であり、溝の断面形態はほとんどが逆台形・半円形となっている。溝の機能は、①排水機能、②用水機能、③区画の象徴機能、④防御機能などが考えられる。溝はこのうちある単独の目的で掘削されたものと特定されるものではなく、様々に用いられたものであろう。ここではまず溝の規模の分類を行う。

堀——幅15m以上の規模を持つ溝。大半は清須城総構えの堀に比定される（本章第2節参照）。

溝Ⅰ類——幅10m前後・深さ1m以上の規模を持つ溝。今回は検出されていない⁽¹⁾。

溝Ⅱ類——幅4～7m前後・深さ1m以下の規模を持つ溝。自然の落込み状になっている。

溝Ⅲ類——幅4～5m前後・深さ1m前後の規模を持つ溝。

溝Ⅳ類——幅1～2.5m前後・深さ50cm以上の規模を持つ溝。

溝Ⅴ類——幅1～2m前後・深さ50cm以下の規模を持つ溝。

溝Ⅵ類——幅1m以下の小規模な溝。

溝の規模の相違は、溝で区画される空間の性格を表現しているものと考えられる。例えば、区画内の性格が居住域と判明している場合、溝の規模が大きいほど区画の象徴機能や防御機能が増すことなどの理由から、溝の規模の相違は居住者の階層・ランクの違いが表現されていると推論できる。

また、清須城下町の復元的研究にとって溝の方位の問題も重要である。今回検出された溝の方位は地区毎に共通の方位が設定されていることが伺われる。

- ① 御園地区——N20°E及びこれと直交する方位を基本とする。
- ② 本丸地区——N30°Eの方位を基本とする。
- ③ 田中町地区——N20°E及びこれと直交する方位を基本とする。
- ④ 五条橋地区——N30°E及びこれと直交する方位を基本とする。
- ⑤ 本町地区——N10°E及びこれと直交する方位を基本とする。
- ⑥ 南部地区——N5°E及びこれと直交する方位を基本とする。

このような地区毎に方位が共通していることは、この地区の中で遺構配置（屋敷割）が統一的に設定され、全体性を持った構成となっていることが伺える。また、地区によって方位が若干異なっている点は、五条川の流路などの自然地形に大きく方位が左右されたことを物語っていると思われる。なお、こうした方位が何を起源としているかは重要な論点であるが、③田中町地区の方位が中世集落の基準方位と同一であることから起源が中世まで遡る可能性がある。また、城下町期の内で方位の変更が存在するか否かについては、旧五条川の埋積後に区画を新たに設定している場合の他は、積極的に方位の変更が行われたと認められる地点はない。以下、主要な溝について地区毎に詳説する。

B 御園地区

この地区の溝は自然流路とそれに伴うものの他は、時期不明の小規模な溝Ⅵ類のみである。

SD1002

89A区に所在する幅約5.0m・深さ1.7m以上の溝Ⅲ類で、NR1001の下層から検出された。NR1001が機能していた時期に同時に存在し、排水もしくは区画の意味を持っていたと思われる。

SD1003 (第63図)

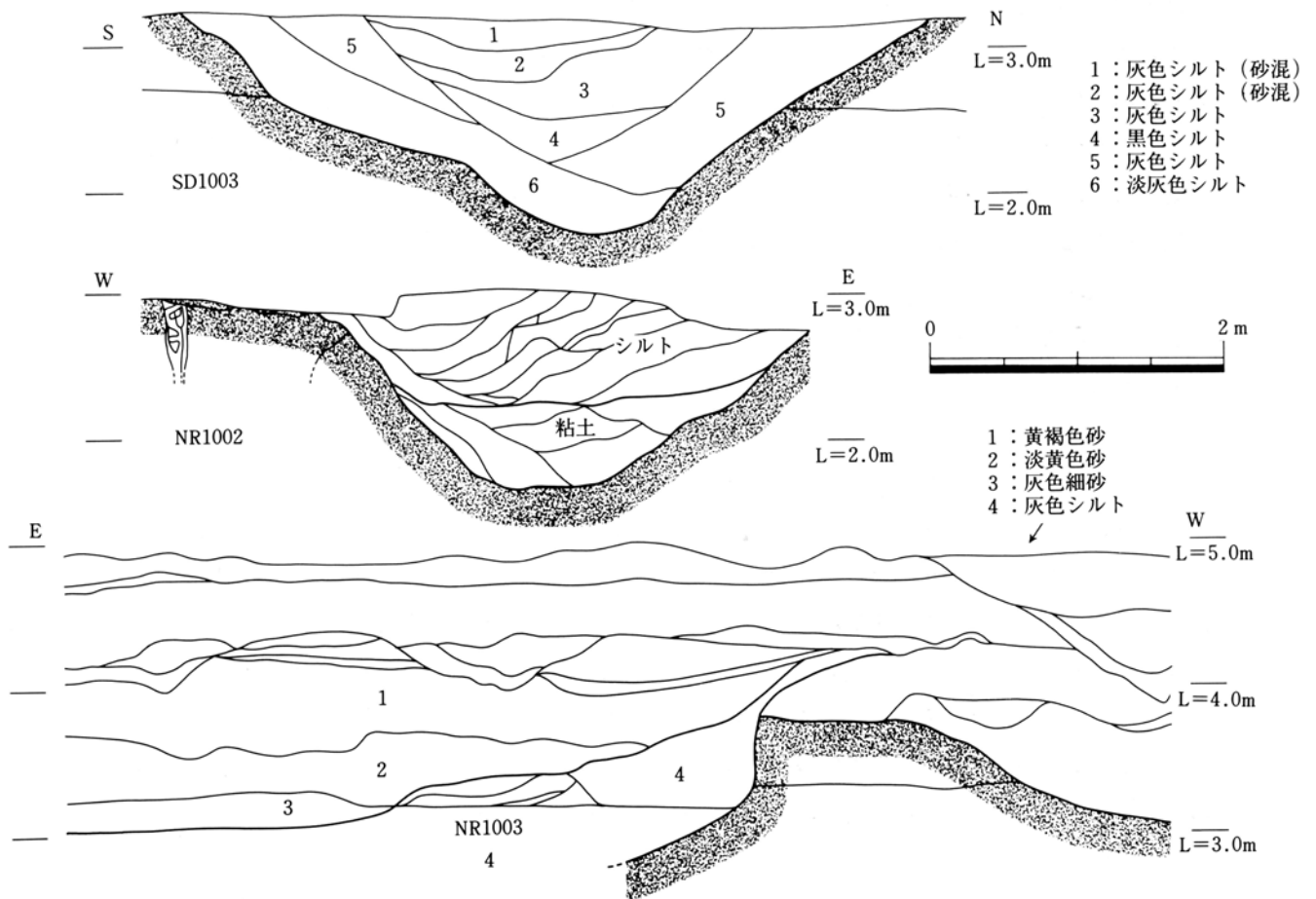
89A区に所在する幅約3.7m・深さ約1.6mの溝Ⅲ類である。埋土は灰色シルトで、西端部で礫群が出土した。礫は大半が自然礫で、護岸施設・石組構築物の石材等の可能性は薄い。方向はNR1001の南肩と平行して走っており、NR1001との境界を示す区画溝として位置づけられよう。城下町期Ⅲ期。

NR1002 (第63図)

63R区南半部で検出された溝(自然流路)である。溝の形態は不定形で部分的に浅いところがみられ、計画的に掘削されたものとは思われない(従ってここでは自然流路NRとした)。埋土は上層がシルト、下層が粘土であり、出土遺物から城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

NR1003 (第63図)

63R区南部で検出された溝(自然流路)で、NR1002の延長部の可能性がある。



第63図 溝土層断面図(1) 御園地区

C 本丸地区

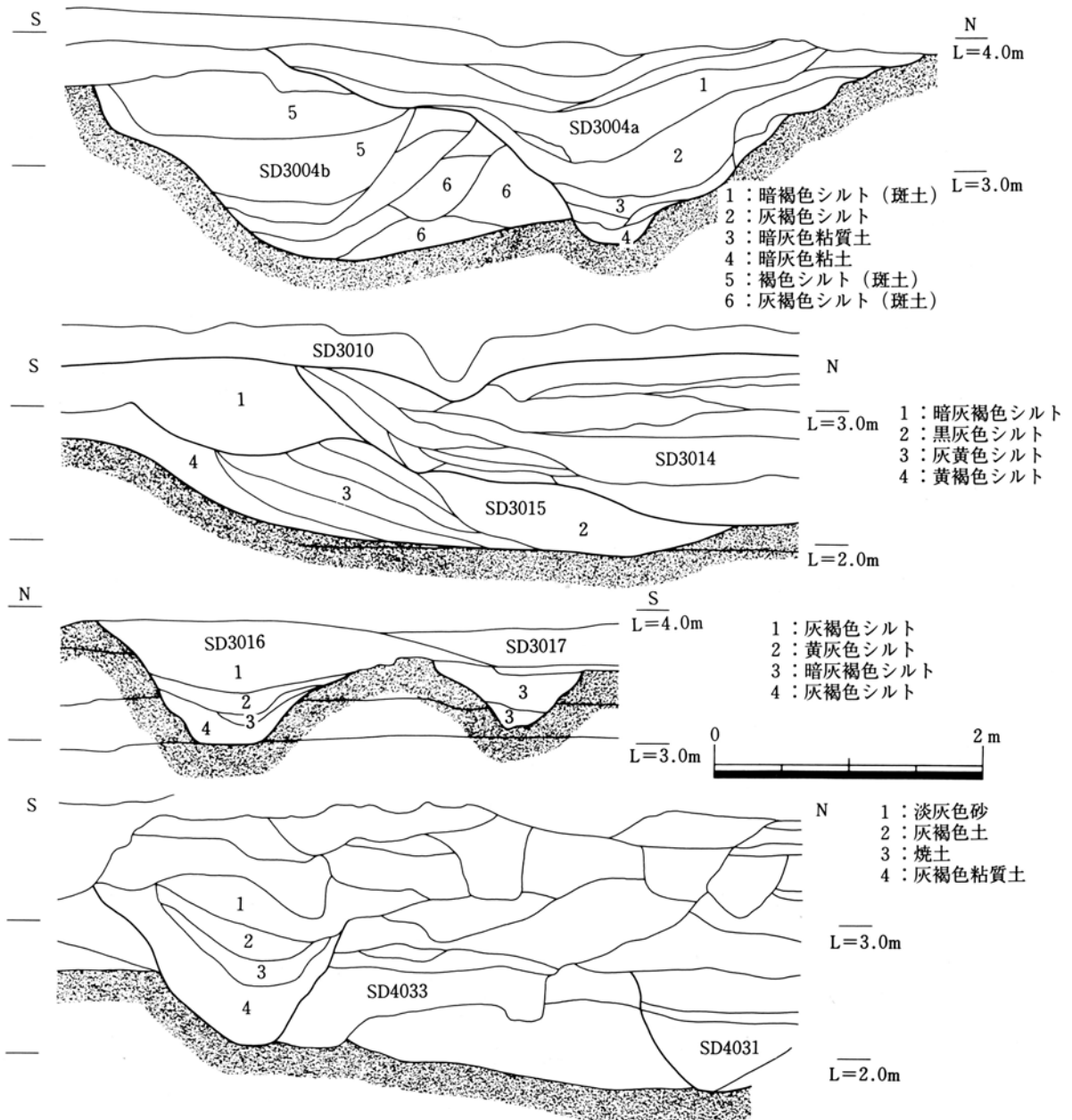
本丸地区では、調査区全体から溝状遺構が検出され、正確な規模や性格は把握できないものが多い。

SD2001～2003（図版5）

62A区全域で検出された溝で、3本の溝は切り合っている。方位はおよそN30°Eで、現五条川とは方位が若干異なるが、埋土が斑土を多量に含有しているため、五条川の堤防に関わって本丸構築・改修時に施されたものと考えたい。出土遺物からみると城下町期Ⅱ期となるが、詳細は不明。

SD2004（図版6）

62N区で検出された。上部は宿場町期の遺構で殆ど破壊されていた。北端部で礫群が検出されたが、溝埋土の比較的上部で発見されたため、これが本来の城郭に関わるものとは考えにくい。SD2001～2003と状況は酷似しているが、同一のものかは不明である。出土遺物から城下町期Ⅱ期。



第64図 溝土層断面図(2) 田中町地区・五条橋地区

D 田中町地区

この地区では、区画溝と推定される溝Ⅲ類を2条検出した他、小規模な溝も存在する。

SD3004 (第64図)

90A区に位置する東西方向の溝Ⅲ類で、2本の溝が切り合っている(北溝SD3004 a・南溝SD3004 b)。北溝SD3004 aは幅が約4.9m、南溝SD3004 bは約3.6mを測り、深さは共に1.5mである。南溝SD3004 bを埋積した後、北溝SD3004 aを掘削したものと考えられる。共に城下町期Ⅰ期。方位はN75° Wを測り、90A区の南に位置する道路に並行する。この道路との距離は約40mである。

SD3015 (第64図)

62G区に所在する東西方向の溝Ⅲ類で、北半部は宿場町期の溝SD3014に切られ正確な規模は不明である。掘り返しが認められ、上層には黒灰色シルト、下層には灰黄色シルトが堆積していた。最下層から卒塔婆が出土している。出土遺物から下層は城下町期Ⅰ期、上層はⅡ期に位置づけられる。この溝は93B区では検出されておらず、62G区と93B区の間で屈曲または収束していたと考えられる。

E 五条橋地区

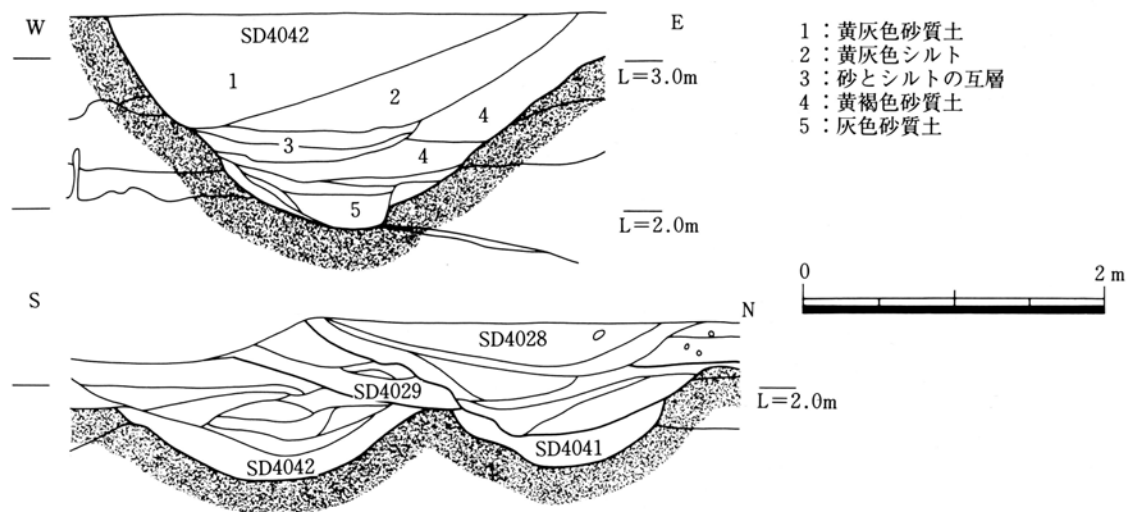
五条橋地区は、旧五条川が機能した時期(城下町期Ⅰ期)の溝Ⅲ類と、小規模な溝等が存在する。Ⅰ期に属する溝は不定形な平面形を呈し、自然地形に大きく影響されている。

SD4033 (第64図)

61A区北端部で検出された溝Ⅲ類である。方位はN49~60° Wを測り、SD4031と並行して走る。何度か掘り返された状態で埋土が堆積していた。出土遺物から城下町期Ⅰ期と考えられるが、最終的な廃絶時期は少し遅れる可能性がある。この地点は、城下町期Ⅰ期においては旧五条川NR4001に接近した自然堤防の縁端部に相当しており、溝の方位は旧五条川NR4001に向かっている。

SD4042 (第65図)

63C区の北東端部で検出された南北方向の溝Ⅳ類である。南部は中堀や宿場町期の遺構に切られ詳細は不明である。また北接する90C区では検出されず、溝の長さはそれほど長くはないと考えられる。



第65図 溝土層断面図(3) 五条橋地区

F 本町地区

この地区の溝は、中堀SD6001の方位に平行または直交するものが大半で、特に城下町期Ⅰ期・Ⅱ期の溝Ⅲ類は一定の規則的な間隔で配置されている。

SD6019 (第66図)

89E区の北部で検出された東西方向の溝Ⅲ類である。中堀SD6001の南約1mの地点で並行しているが、時期は出土遺物から城下町期Ⅰ期・Ⅱ期と考えられ、SD6001とは同時に存在しない。溝の断面形はV字となり、比較的急斜面を作っており、東西方向とも収束している。

SD6018 (第66図)

89E区の北部でSD6019の南に近接して検出された溝Ⅲ類である。SD6018とSD6019は平行しており時期も同じであるため、同時に存在したと考えられる。従ってSD6018とSD6019の間の幅約1mの空間は道路(通路)であった可能性を指摘できる。

SD6023

89Eの南部・91A区の北部で検出された溝Ⅲ類で、SD6018と平行している。幅は4～5mの規模で、断面形が半円形のややなだらかな形態で、SD6018とSD6019とは形態が異なる。東西両端共に調査区外に延びる。時期は城下町期Ⅰ期・Ⅱ期で、同時に存在するSD6018との溝心心間距離は約21mを測り、屋敷を区画する溝と断定できる。

SD6034 (第66図)

61B区の東端部で確認された南北方向に走る溝Ⅲ類である。SD6028と併走し、この間は道路であった可能性が高い。SE6027に切られることや出土遺物等から城下町期Ⅱ-1期に位置づけられる。

SD6048

89B区と91A区の中央部で検出された溝Ⅲ類で、東西両端共に調査区外に延びる。方位はN73°Wを測り、SD6023と平行している。SD6048は、天正地震以前の整地層に覆われていることと出土遺物からみて城下町期Ⅱ-1期まで機能していたと考えられる。断面形が半円形のややなだらかな形態で、埋土は暗褐色砂質土である。溝埋土が比較的軟弱であったため、天正地震の噴砂が溝埋土を複雑に貫いている。SD6023との溝心心間距離は約45mを測り、屋敷を区画する溝と推定できる。

SD6065 (第66図)

89B区に所在する平面形が「コ」の字状の溝である。東側は調査区外に延びる。溝の幅は約3.9m、深さは約1.1mで、「コ」の字で囲まれた空間は南北約3.5mを測る。囲まれた空間内にピット列が存在し、おそらく掘立柱建物が建っていたと考えられる。SE6037に切られることや出土遺物から城下町期Ⅱ期の溝と考えられよう。

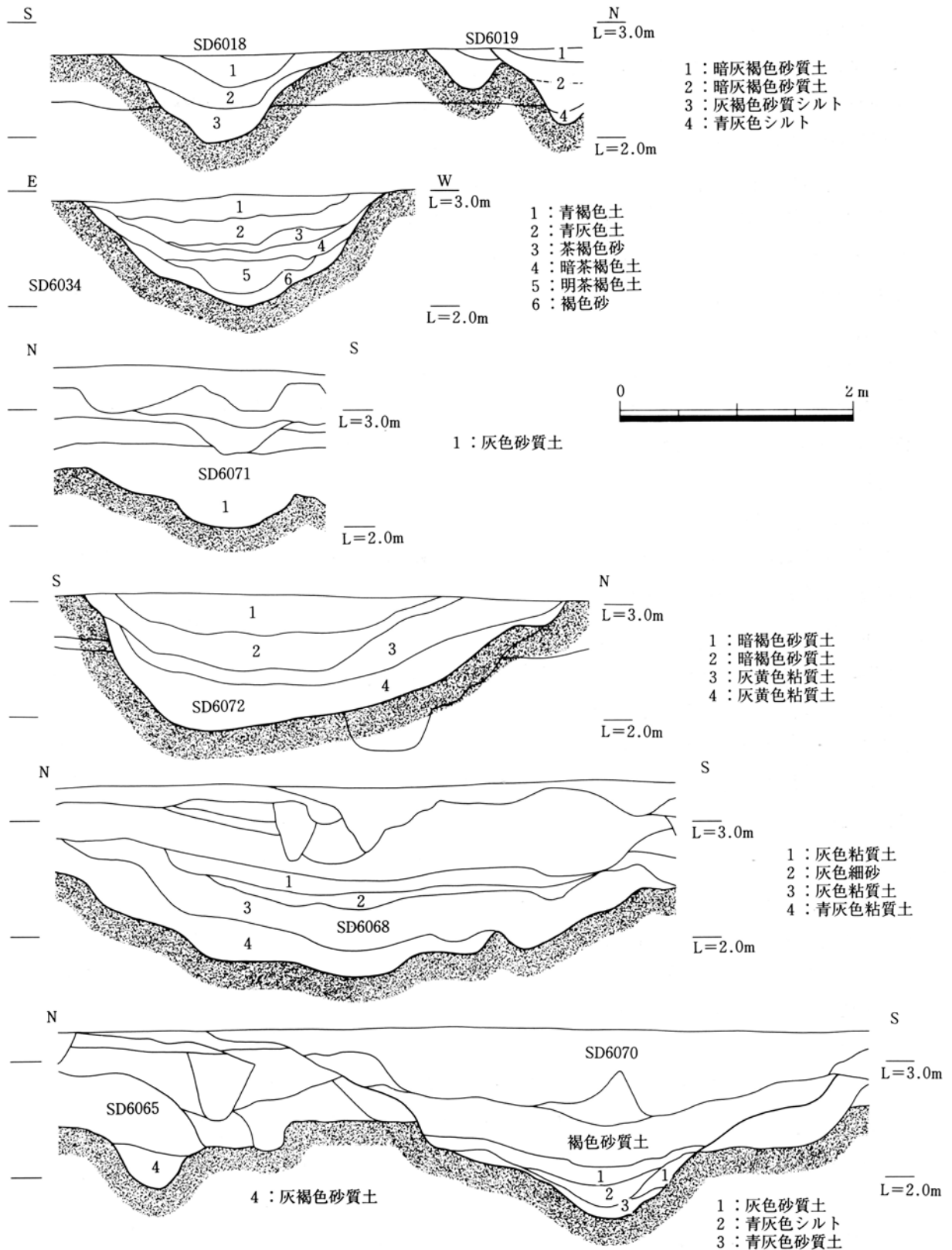
SD6068 (第66図)

89B区と91A区の南部で検出された溝Ⅲ類。東西両端共に調査区外に延び、SD6023と平行している。城下町期Ⅱ-2期の遺構SK6570に切れ、出土遺物から城下町期Ⅰ期が主体となっていたと考えられる。断面形が半円形で、SD6048との溝心心間距離は約45mを測り、屋敷を区画する溝と思われる。

SD6071 (第66図)

SD6068の南に並行する溝Ⅴ類で、東西両端共に調査区外に延びる。SD6068との溝心心間距離は約

5.0mを測り、この空間の一部に柵列SA6004がある。屋敷の区画溝に併走する柵列の雨落ち溝の可能性が高い。



第66図 溝土層断面図(4) 本町地区

G 南部地区

南部地区の溝は溝Ⅱ類・溝Ⅴ類・溝Ⅵ類が主体を占めているが、北部ではその限りではない。地盤が砂層であるために護岸施設を持たない深い溝を構築しにくい状況が、その主因であろう。

SD7002

89F区の中央部で検出された東西方向に走る溝Ⅲ類である。SD7002は直交する溝SD7001とともに出土遺物から城下町期Ⅲ期に位置づけられる。また、この溝からは木製立像が一体出土している。

SD7004 (第67図)

61C区で検出された南北方向の溝Ⅲ類である。幅は3.1m、深さ1.2mを測り、その方位はN10° Eである。出土遺物から城下町期Ⅲ-2期に属する。

SD7006・SD7007 (第67図)

61C区で検出された南北方向に併走する溝Ⅴ類である。共に、溝の断面形は逆台形で出土遺物から城下町期Ⅲ期に位置づけられる。SD7006とSD7007の間隔は約2mで、この空間は道路であった可能性がある。

SD7012 (第67図)

63S区で検出されたほぼ正確に南北方向に走る溝Ⅴ類である。これに平行して走る溝Ⅵ類にはSD7011・SD7013があり、直交する溝Ⅵ類にはSD7014・SD7021などがある。これらの溝群の性格は不明である。出土遺物からみて、時期は城下町期Ⅲ-1~2期に位置づけられる。

SD7015 (第67図)

63S区で検出された東西方向に走る溝Ⅱ類である。幅は約6.3m・深さは0.7mで、掘形はなだらかな緩斜面となっている。埋土は自然堆積物の他に斑土があり、溝としての機能よりも自然流路の落込みを整地したものと考えた方がよいかも知れない。埋土中の遺物は城下町期Ⅲ期に属する。

SD7023 (第65図)

63S区・89D区で検出された南北方向の溝で幅3.7mを測る。SD7012等とは規模や方位が微妙に異なり、性格も異なると推測される。SX7005を切る。出土遺物から城下町期Ⅲ期に相当する。検出された長さが53mを越えていることから、個別の屋敷割の溝と言うよりも道路の測溝と考えた方が妥当と思われる。

SD8005・SD8014 (第67図)

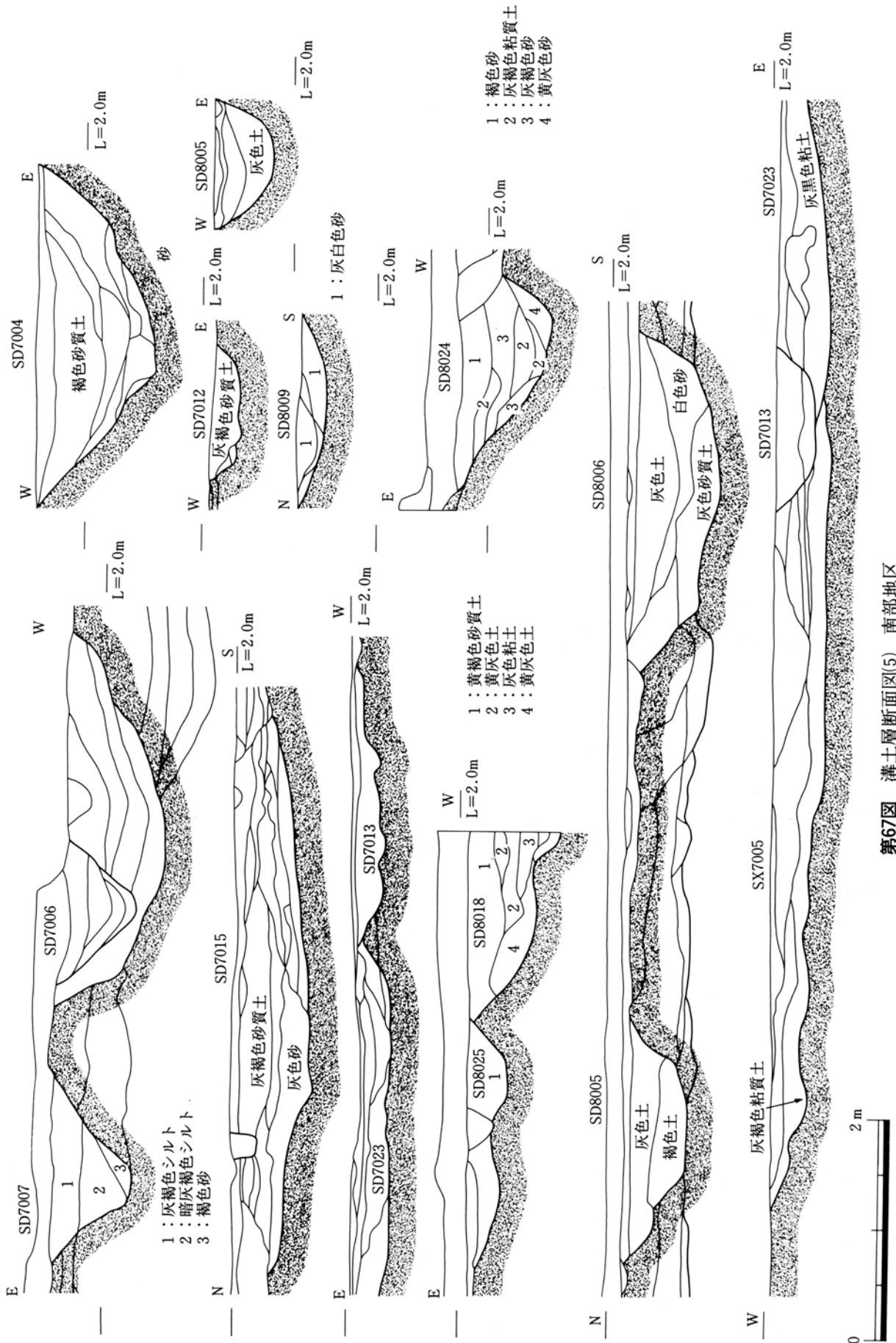
SD8005は62D区、SD8014は91C区のそれぞれ東端部で検出された南北方向の溝Ⅴ類である。両者はその位置関係から同一の溝であった可能性が高い。これらの溝に直交するような形でSD8005からSD8006・SD8009・SD8011・SD8013が西に向かって延びている。東西方向に走るSD8017も同様と思われる。出土遺物から城下町期Ⅲ期。

SD8009 (第67図)

62D区の南部で検出された溝Ⅴ類で、その方位はN85° Wを測る。SD8005・SE8002に切られ、西端部は途中で収束している。埋土は灰白色砂で極めて浅い掘形となっている。平行する溝SD8013との空間にはSB8001が存在する。出土遺物から城下町期Ⅲ期に属する。

SD8013

91C区の北端部に所在する東西方向の溝で、暗黄褐色シルトが充填されていた。出土遺物から城下



第67図 溝土層断面図(5) 南部地区

町期Ⅲ期に位置づけられる。

SD8017

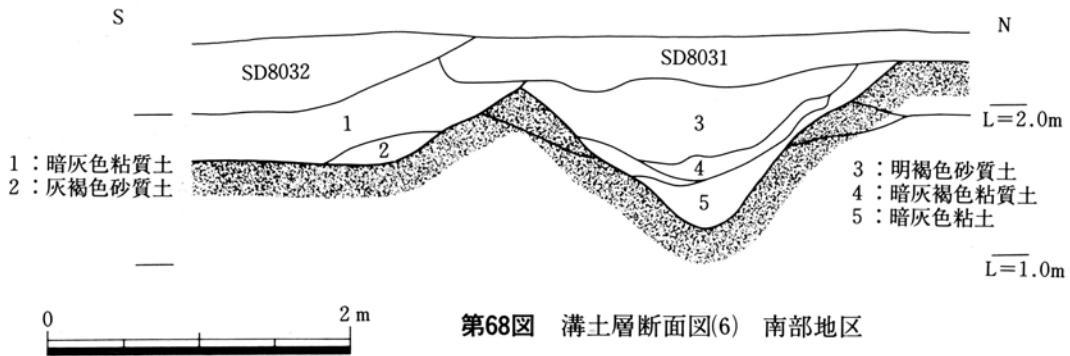
91C区の北部で検出された東西方向の溝Ⅴ類である。埋土は炭化物を多量に含む砂質土であり、ここから土師器鍋・釜が比較的多量に出土した。これらの遺物から城下町期Ⅲ期に属する。SD8013と平行しており、これらの溝に囲まれた空間は屋敷であったと考えられる。

SD8024・SD8028・SD8030（第67図）

62B区・90F区で検出された溝Ⅴ類である。SD8028とSD8030は同一の可能性があり、この間が入り口施設である可能性がある。方位は共にN15°Wを測り、この地区の基本方位N5°Eとは異なる。切り合い関係から、N15°Wの溝はN5°Eの溝よりも新しいといえる。SD8028の埋土は褐色砂質土で、遺物から城下町期Ⅲ-2期に位置づけられる。SD8024とSD8028の間隔は約5mを測る。仮にこの空間が道路であるとする幅約4間となり、主要幹線である可能性がある。

SD8031・SD8032（第68図・図版41）

SD8024・SD8028・SD8030に直交する方位の溝Ⅴ類で併走している。90F区の南部で検出された。SD8030等には接続しない。SD8031とSD8032の間隔は約1mを測るが、西端部ではSD8032の溝幅が広がりやや接近している。SD8031は断面形がV字形となっている。いずれも城下町期に属する。



第68図 溝土層断面図(6) 南部地区

H 小結（区画設定への予察）

本遺跡で検出された溝の特徴としては、次の3点が指摘されよう。

- ① 大半の溝にはいくつかの規格性（方位と規模）が認められ、平面形は直線的である。
- ② 大半の溝は同時期に一定の間隔で設定されている。
- ③ 非直線的な溝はそれ以外の要因で形態が規定されており、小規模な溝を除けば不規則な溝はない。

これらの事象は、溝はある計画性・規則性をもとに設定されていることを示している。即ち溝には各々有機的なつながりが存在し、溝構築の目的が単なる用排水のためだけではなく、空間を囲んで境界を設定することにあつたと推定できる。こうした溝で区画された空間の構造については第V章で検討するが、ここではその前提として区画（空間）設定の概況についてまとめておきたい。

① 御園地区

直線的に空間を区画する溝は63R区で検出された小規模な溝のみであるが、これは時期が特定できない。従ってこの地区の区画設定はそのほかの遺構から実施するより手段はない。

② 本丸地区

調査区が狭小であるため、空間設定は実施し得ない。

③ 田中町地区

東西方向の溝Ⅲ類が2条検出されている。清洲町教育委員会の成果と諸資料を考え合わせると、城下町期Ⅰ期・Ⅱ期の複数の区画を設定できる。しかし、Ⅲ期の区画は認定しがたい状況である。

④ 五条橋地区

城下町期Ⅰ期とⅡ期以降で状況が異なる。Ⅰ期では旧五条川NR4001に強く影響された不定形の溝があり、方形の区画は成立していない。一方、Ⅱ期以降はいくつかの区画が成立するようであるが、明確なものは存在しない。特にNR4001の上面では、特別な区画は存在しない。

⑤ 本町地区

城下町期Ⅱ-1期と城下町期Ⅱ-2期の間で空間構成が異なる。前者は溝Ⅲ類で区画された一定規模の空間が設定され、後者になると溝が廃絶され溝による明確な区画はほとんど検出されなくなる。

⑥ 南部地区

溝Ⅱ類が埋没された後、溝Ⅴ類等による区画が設定される。溝Ⅱ類による区画は存在しないと思われる。溝Ⅴ類は、間隔が狭く交差する地点がみられるものの、ほとんどは長く直線的に検出されるものと、一定の間隔で平行するものの二者があり、溝Ⅴ類による区画は概して細長いものが多い。

このようにみていくと、溝の間隔（区画の広さ）にいくつかのパターンが看取できる。溝の間隔にはA：間隔が1m前後となる場合・B：間隔が2m前後となる場合・C：間隔が5m前後となる場合・D：間隔が10m前後となる場合・E：間隔が20m前後となる場合・F：間隔が40～50m前後となる場合・G：その他と区分できよう。（鈴木正貴）

註 (1) 梅本博志編（1987）『清洲城下町遺跡Ⅰ』清洲町教育委員会のSD01等がある。

(2) 鈴木正貴（1990）「C期の遺構」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集。

第5節 建 物

A 概要

建物に関しては、当然のことながら、上部遺構は遺存せず下部の基礎地業の痕跡のみが検出されている。こうした建物遺構は、①本来存在していても検出遺構として存在しない場合、②遺構が遺存していても検出できない場合、③ピットや礎石を検出し得ても複雑に切りあって認定し得ない場合があり、こうした場合には建物は遺存しないことになってしまう。従って、本遺跡で建物を考える場合には、こうした遺構検出が困難である点を踏まえた上で考察する必要がある。なお、本書では建物と柵列を便宜上区分して報告しているが、柵列の中には建物の一部を誤認したのものがあるかも知れないことを付記しておく。

今回の調査で検出された建物遺構は、土台・基礎地業の構造によって次のように区分できる。

礎石建物———柱の基礎に石材を用いたもの。

礎石建物A類———扁平な自然石を1個使用して礎石としたもの。

礎石建物B類———複数の自然石を用いて礎石としたもの。

掘立柱建物———柱の基礎部分に柱穴を掘削して柱を埋めたもの。

掘立柱建物A類———素掘りの柱穴で、柱穴には何も設置しないもの。

掘立柱建物B類———素掘りの柱穴で、柱穴に根石を設置したもの

以上の区分の他に今回の調査では、石列・土間状の砂利敷・版築状の堆積を伴っている場合がある。ただし、本遺跡では方形竪穴状の建物・塼列建物・地下室等は検出されていない。

また、この区分が本来の建物構造を示していたとは限らないことを注意しておく必要がある。例えば、遺構面を掘り下げた時に掘立柱建物B類の建物が礎石建物として検出される場合もあり得るからである。ここでは検出された状況を重視し、混乱を避けるため本来の建物構造の分類は実施しない。

建物の分布状況であるが、これは遺構の遺存状況に大きく左右される。しかし、そのことを差し引いても、礎石建物が発見される地区は本町地区に限定され、根石を伴う掘立柱建物B類も五条橋地区・本町地区に集中していることは注目に値する。以下に地区別の概要を記述する。

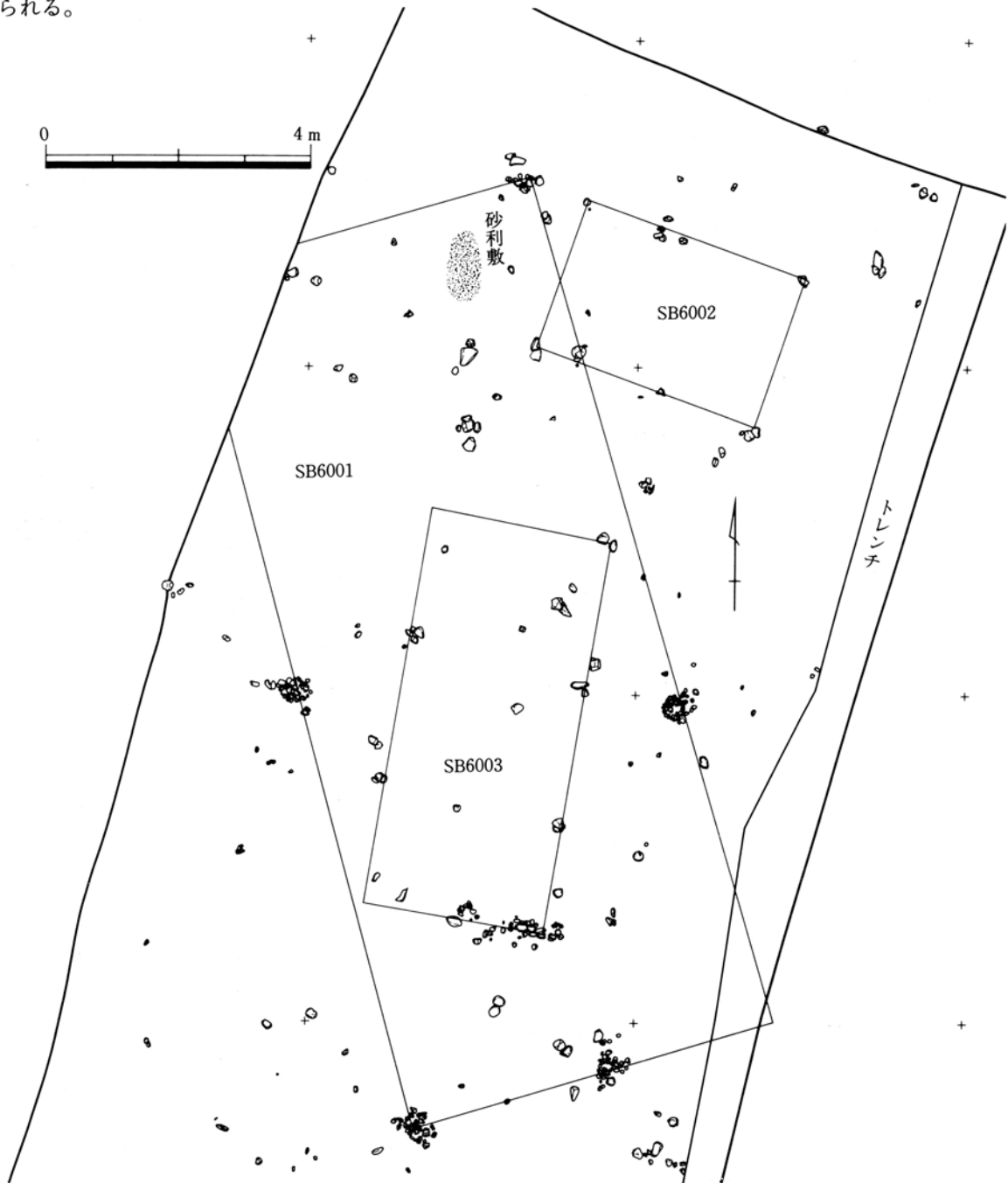
- ① 御園地区———柱穴が複雑に切り合い詳細は不明であるが、掘立柱建物A類のみである。
- ② 本丸地区———建物遺構は存在しない。建物は調査区の西部に展開するであろう。
- ③ 田中町地区———掘立柱建物A類のみ。建物の広がり判明しないものばかりである。
- ④ 五条橋地区———掘立柱建物A類・B類が存在する。柱穴が複雑に切り合い詳細は不明。
- ⑤ 本町地区———礎石建物・掘立柱建物全種が存在する。時期毎に様相が異なるようである。城下町期Ⅱ－1期以前は掘立柱建物A類・B類が展開している。Ⅱ－2期には礎石建物A類が建てられるようになる。そして城下町期Ⅲ期には、礎石建物A類・B類が混在している。
- ⑥ 南部地区———掘立柱建物A類のみ。柱穴のつながりが直線的でないものが多い。

B 礎石建物

礎石建物は本町地区に限定されている。なお、検出された建物の礎石が滅失している場合も考えられ、柱間等の構造は不明瞭な場合が多い。ここでは個別に事例紹介を行う。

SB6002 (第69図)

91A区北部で検出された桁行2間×梁行1間の東西棟礎石建物B類である。使用された石材は拳大から人頭大の大きさの自然石で、遺存していた状況では脆弱な様相を呈している。本来はもう少し多くの石材を用いて根石状にし、その上に礎石・柱を建てたものであろう。規模は3.50m×2.43m、主軸方位はN70°Wである。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから城下町期Ⅲ期に位置づけられる。



第69図 礎石建物実測図(1)

SB6003 (第69図)

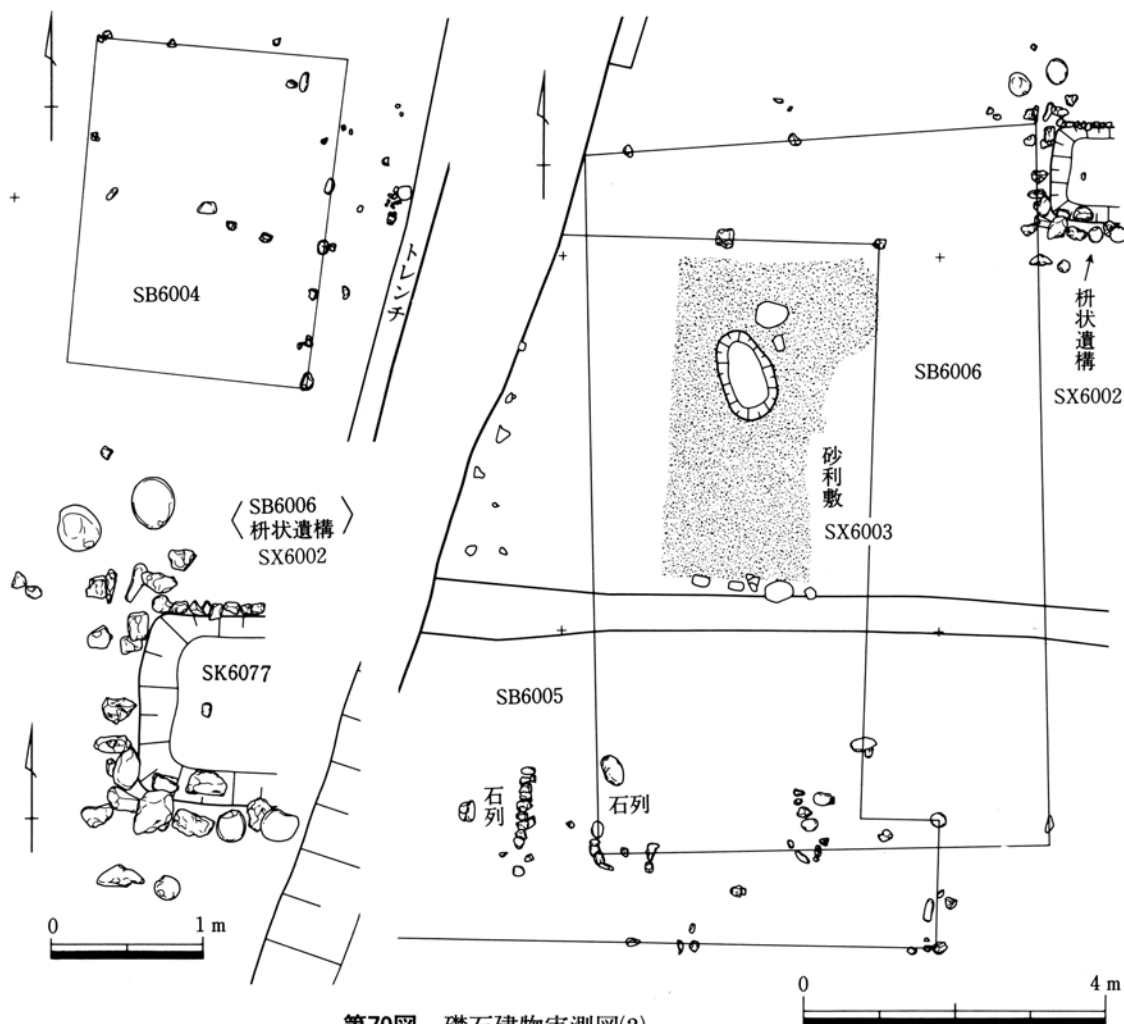
91A区北部で検出された桁行3間×梁行1間の南北棟礎石建物B類である。使用された石材はSB6002と同様である。規模は6.06m×2.76m、主軸方位はN12°Eである。南北方向の柱間距離は、北から2.00m・2.06m・2.00mを測る。建物南面の東部に拳大前後の石材を使用した石列が存在する。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

SB6001 (第69図)

91A区北部で検出された桁行3間以上×梁行2間の礎石建物B類である。礎石は拳大前後の石材を数十個用いて根石としたもので、5基検出した。これらを同一の建物の礎石と仮定して考慮すると13.36m×5.68mの規模の建物となり、主軸方位はN16°Wを測る。他の建物に比べ規模がやや大きく、方位も他の溝や建物の方位と異なっている。北東隅の一角に砂利敷が存在する。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから、城下町期Ⅲ期以降に位置づけられる。

SB6004 (第70図)

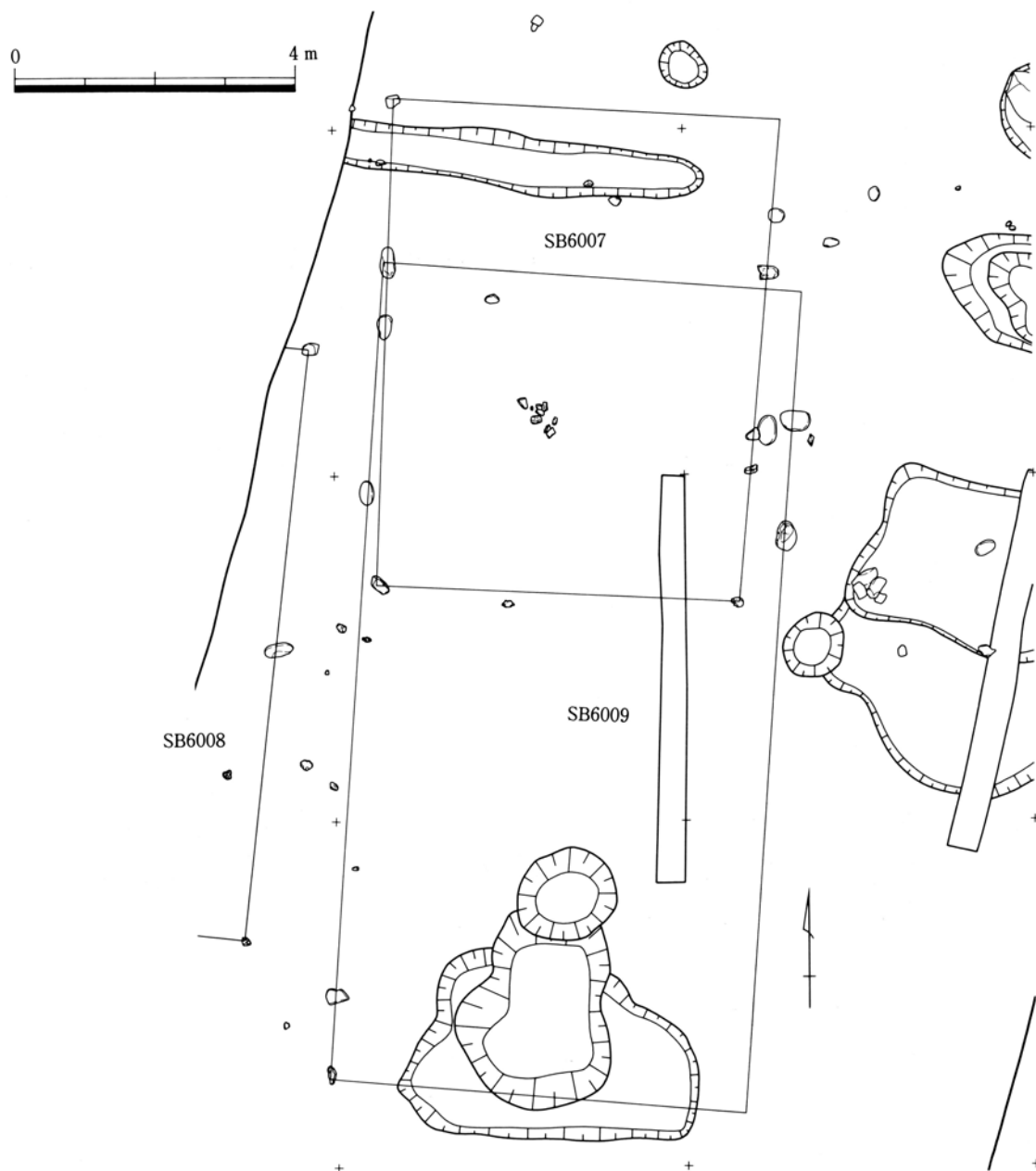
91A区北部で検出された桁行3間以上×梁行2間の礎石建物A類である。礎石は西面と南面は遺存しないが、他の部分では人頭大の石材を用いて狭い間隔で並べている。礎石の一部は束柱となっていたかも知れない。規模は4.42m×3.32mを測る。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから城下町期Ⅲ期以降に位置づけられる。



第70図 礎石建物実測図(2)

SB6006 (第70図)

91A区中央部で検出された桁行3間以上×梁行2間の礎石建物B類である。礎石は拳大から人頭大の大きさの自然石を用いるが、遺存していた状況では脆弱な様相を呈している。規模は9.82m×6.18mを測るが、石材の配置からさらに西側に伸びていく可能性がある。建物の北東隅には「コ」の字状に石材を配置した枅状遺構が存在し、その内側にはやや灰色のシルトが堆積していた。中央部には4.2m×3.2mの長方形の範囲で砂利が敷かれていた。この砂利敷の南端部には人頭大の礫が一行に並べられ建物内を区画している。南西端部では「L」字状に配列した拳大の石材が対になって残存していた。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから、城下町期Ⅲ期以降に位置づけられる。



第71図 礎石建物実測図(3)

SB6005 (第70図)

91A区中央部で検出された礎石建物B類?である。規模は桁行9.54m×梁行7.82mを測り、南東部に張り出し部を持っている。柱間構造の詳細は不明である。天正地震の噴砂に覆われた遺構面に建築されており、城下町期Ⅱ-2期の建物と考えられる。このSB6005が廃絶された後にSB6006が建てられたものと考えられる。

SB6007 (第71図)

91A区中央部で検出された桁行3間×梁行2間?の南北棟礎石建物A類である。礎石は拳大から人頭大の大きさの自然石を用いるが、平坦面を上に向ける工夫は顕著ではない。規模は7.06m×5.54m、主軸方位はN3°Eを測る。西面の柱間距離は北から約2.4m・約4.2mを測り、北面に幅約2.4mの庇を持つ構造と考えられる。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから城下町期Ⅲ期以降に位置づけられる。

SB6008 (第71図)

91A区西端部で東面の礎石列のみが検出された礎石建物A類である。人頭大の偏平な自然石を用いた礎石が3基検出され、柱間距離は南から約4.3m・約4.2mを測る。この礎石列の西に建物が展開すると考えられるが建物構造は不明である。天正地震の噴砂に覆われた遺構面に建築されており、城下町期Ⅱ-2期の建物と考えられる。

SB6009 (第71図)

91A区中央部で検出された礎石建物A類である。礎石はかなり本来の状況よりも抜き取られた可能性が高く、柱間構造は復元し得ない。規模は11.95m×6.03mを測り、北東隅・南東隅の礎石は遺存しない。残存している礎石は偏平な自然石を選択し、平坦面を上に向けて柱を建て易くしている。東面の礎石列の内側に同様の礎石が1基残存していることから、北東隅の部分には「L」字状にクランクした部分が存在した可能性が考えられる。天正地震の噴砂に覆われており、城下町期Ⅱ-2期の建物である。

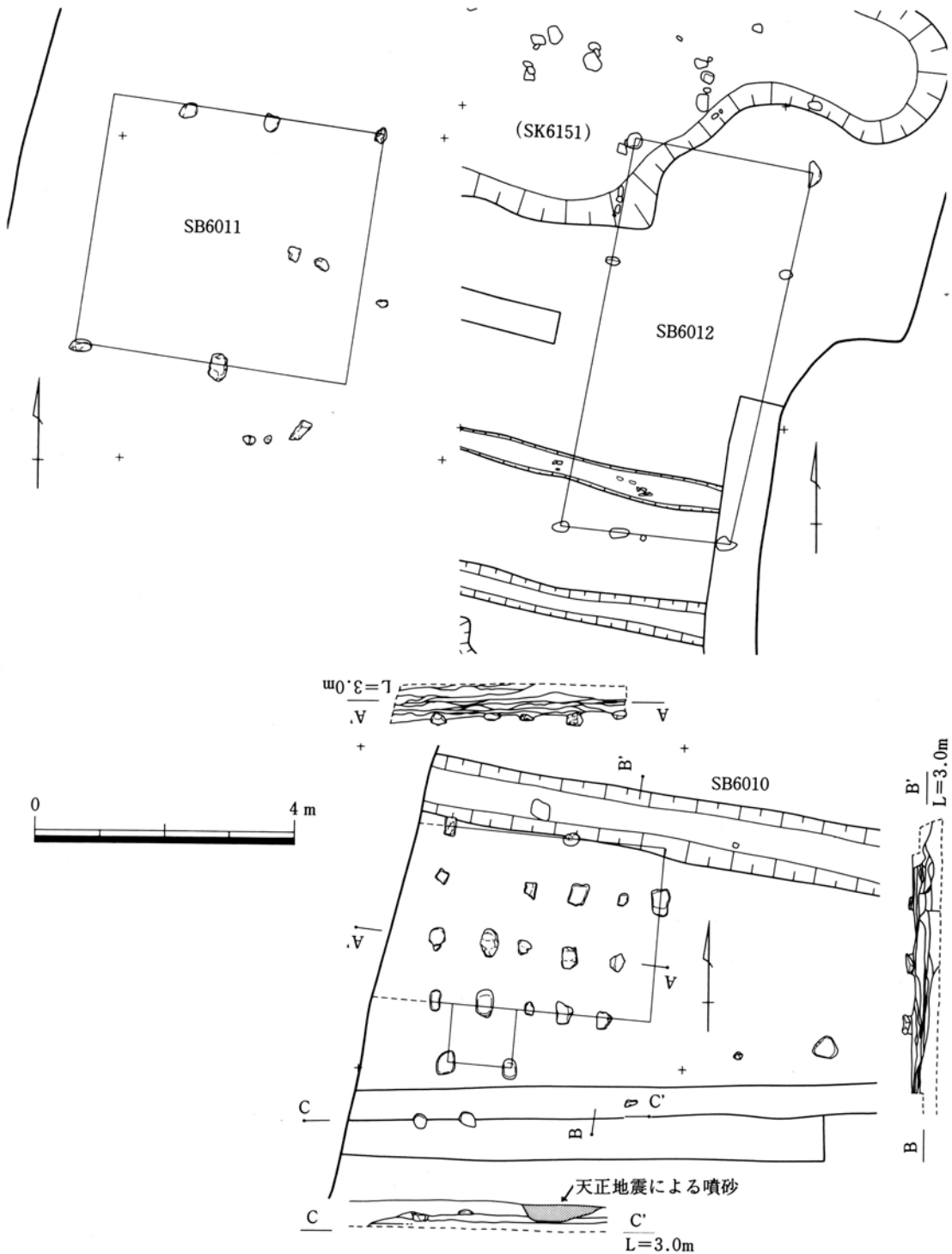
SB6010 (第72図)

91A区南部で検出された桁行5間以上×梁行3間の東西棟礎石建物A類である。北面はSD6012によって一部破壊され溝の中に石材が崩落していた。南東隅部では礎石が遺存しなかった。また西部は全体の状況からみてさらに調査区外に延びる可能性がある。礎石は偏平な自然石を選択し平坦面を上に向けている。礎石は総柱状に配置され、やや大きな礎石とやや小さな礎石を東列から交互に西に向かって並べている。小さな礎石は東柱として機能していたと考えられる。規模は3.64m以上×3.42mで、柱間距離は南北方向約1.1m、東西方向約0.7mの等間隔で配置されている。南面には礎石を更に2個用いて幅1.0m・奥行0.85mの出入り口状の施設を作っている。更にその前にも礎石状の石材が散乱していたが、建物との関係は不明である。また南面の礎石列の東延長線上約2.7mの地点に礎石が1基残存していたが、これも性格不明である。礎石下の地業は黄褐色シルトなどを用いて版築状に突き固めたものと思われ、この部分が10~20cm程度周囲よりも高くなっている。この地業の面が天正地震の噴砂に覆われており、城下町期Ⅱ-2期の建物と考えられる。

SB6011 (第72図)

91A区南部で検出された桁行3間×梁行1間の東西棟礎石建物A類である。規模は4.14m×3.90m

を測り、北面の柱間距離は西から約1.2m・約1.2m・約1.7mを測り、南面の柱間距離は西から約2.2m・約1.9mを測る。偏平な自然石材を用いて礎石を作っており、北西隅と南東隅の礎石は遺存しない。礎石の一部には砥石を転用したものも認められる。天正地震後の整地層の上面で検出されたことから、城下町期Ⅲ期以降に位置づけられる。



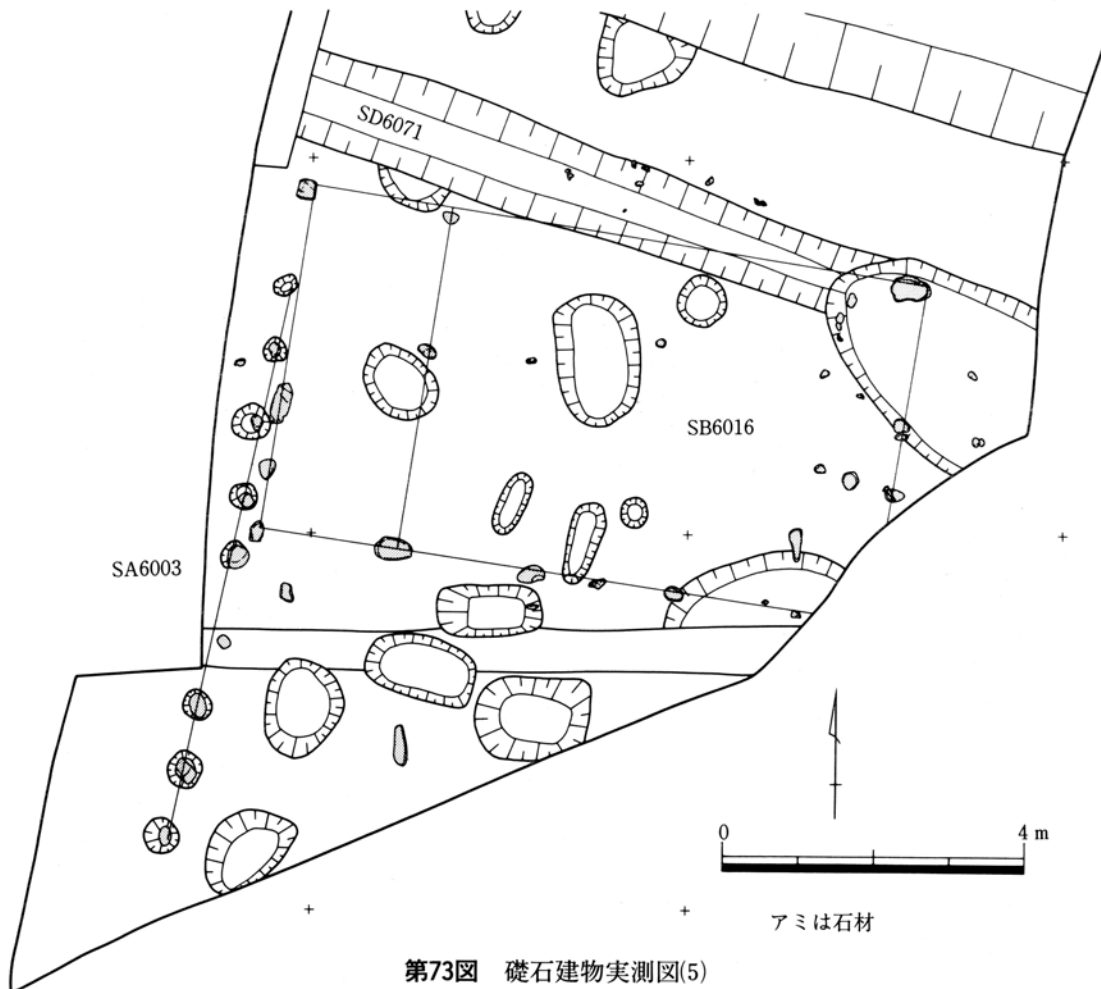
第72図 礎石建物実測図(4)

SB6012 (第72図)

91A区南部で検出された桁行2間×梁行2間の南北棟礎石建物A類である。規模は6.14m×2.80mを測り、南北方向の柱間距離は北から約1.6m・約4.5m、東西方向の柱間距離は西から約0.8m・約2.0mである。それほど偏平ではない石材を用いて作っている。SK6151が廃絶した後に構築された建物で城下町期Ⅲ期以降である。

SB6016 (第73図)

91A区南部で検出された桁行4間×梁行3間の東西棟礎石建物A類である。南東隅の礎石は調査区外に伸びている。規模は8.25m×4.62mを測り、南北方向の柱間距離は北から約1.9m・約0.9m・約1.8m、東西方向の柱間距離は西から約1.8m・約1.8m・約1.8m・約2.8mである。礎石は偏平な自然石を選択し平坦面を上に向けている。天正地震の噴砂に覆われていること、城下町期Ⅱ-1期のSD6071の埋没後に建てられていることなどから、城下町期Ⅱ-2期の建物と考えられる。



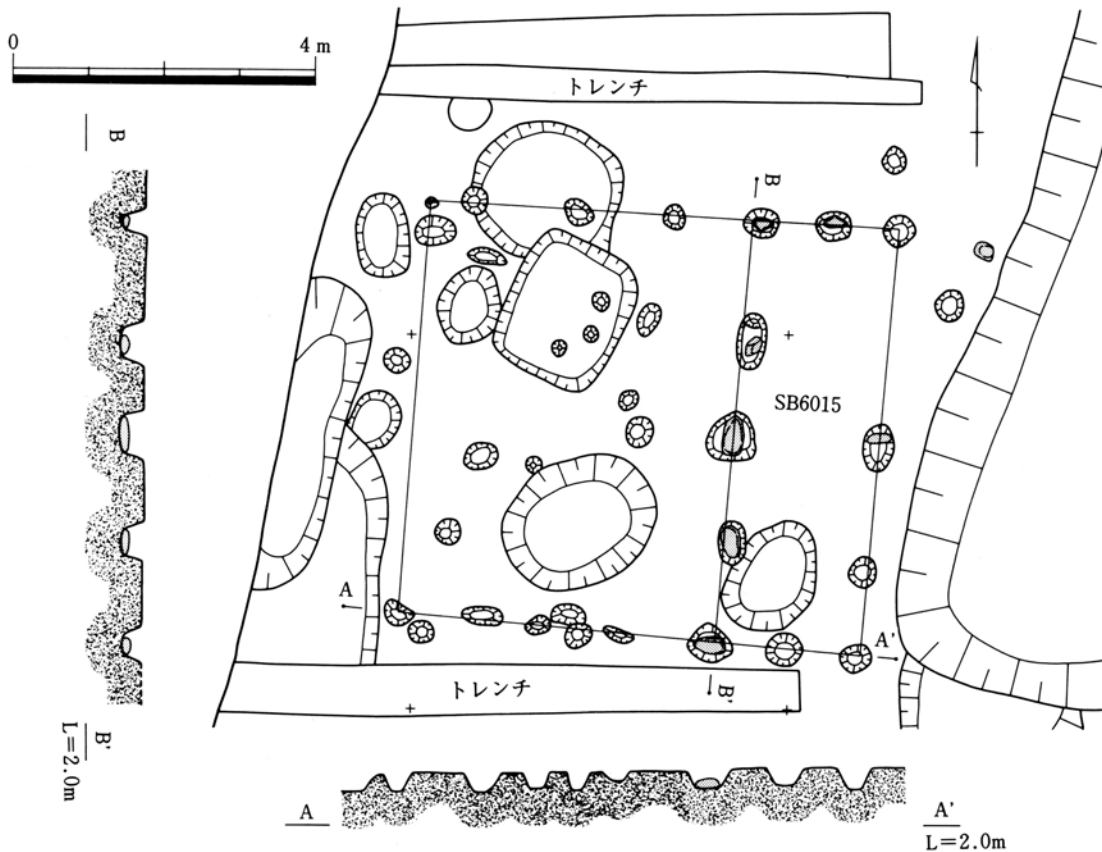
第73図 礎石建物実測図(5)

C 掘立柱建物

掘立柱建物は全地区に存在したものと考えられる。但し、前述の通り、今回提示したものは良好な形で検出されたものだけに限っており、これ以外に多数の建物が存在した可能性があることにも注意しておく必要がある。ここでは、まず復元可能な建物の個別事例を紹介し、その後、建物の存在が想定されるけれども柱穴が密集して復元が困難である地点の概況を報告する。

SB6015 (第74図)

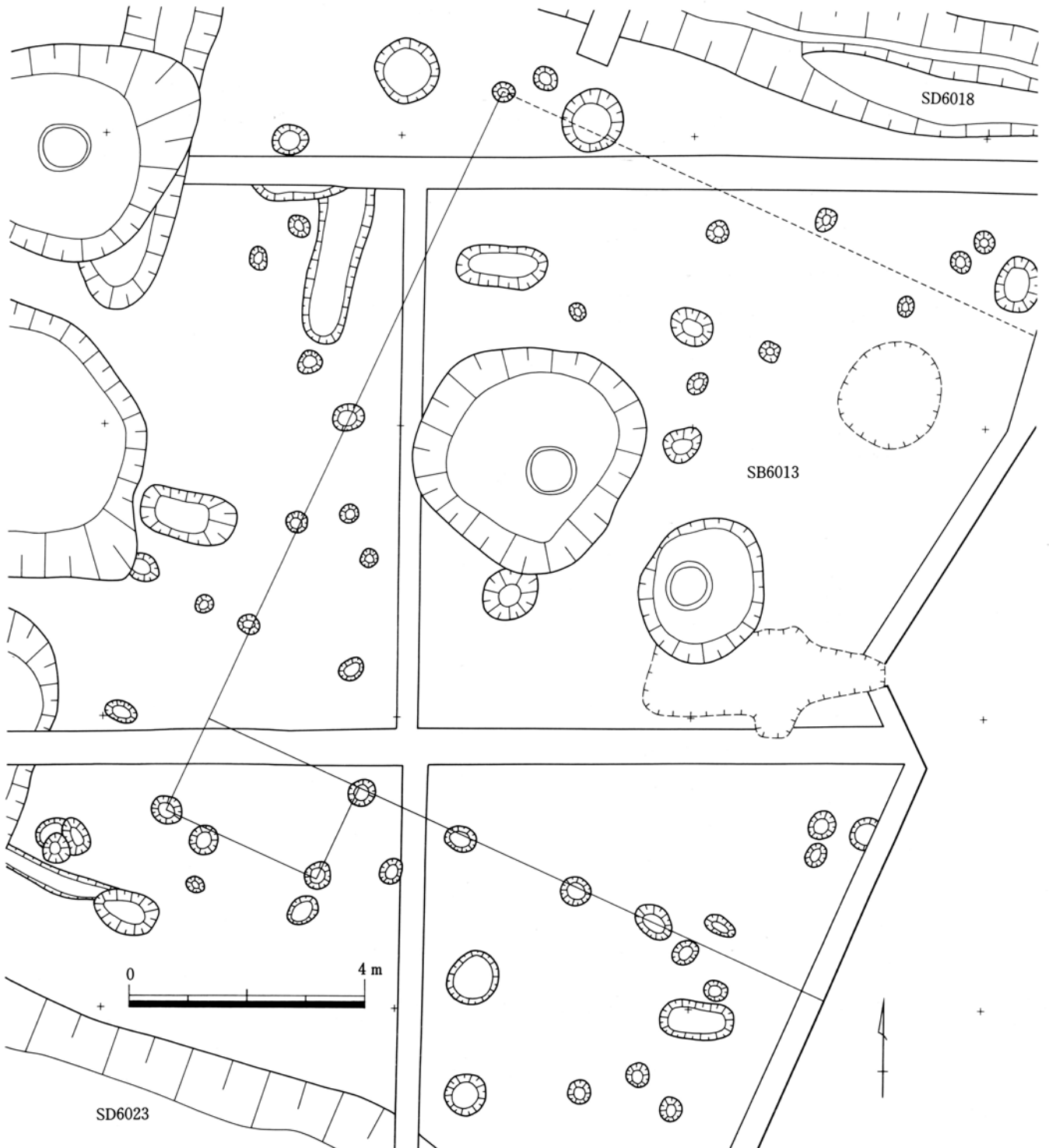
91A区中央部で検出された桁行6間×梁行4間の東西棟掘立柱建物B類である。この建物を構成する柱穴群は直径0.3m～0.6mの規模であるが、北西端の柱穴は規模が小さい。また、西面の柱穴は大半が検出されなかったことから、建物西部は既に一部削平されていた可能性がある。建物規模は桁行6.22m×梁行5.73mを測る。南北方向の柱間距離は北から約1.7m・約1.2m・約1.3m・約1.4m、北面の東西方向の柱間距離は西から約0.6m・約1.3m・約1.3m・約1.3m・約1.0m・約0.8mである。東面から西へ2列目にも柱穴が計5基存在し、中には扁平な自然石を使用した根石が設置されている。この他の柱穴にも一部同様の根石が存在しているが、建物西部の柱穴には根石を持つものは存在しない。主軸の方位はN75°Wである。城下町期Ⅱ-2期の整地層の下面で検出されたことから、城下町期Ⅰ期～Ⅱ-1期の建物と考えられる。



第74図 掘立柱建物実測図(1) アミは石材

SB6013 (第75図)

89E区で検出された桁行5間以上×梁行6間の東西棟掘立柱建物A類である。SD6018とSD6023で囲まれた空間全面に所在し、東側は調査区外に広がるものと推定される。南面の西端に1間×1間(3.05m×1.80m)の庇が接続している。柱穴の一部には調査時のトレンチで削平された部分が存在するが、北面の柱穴列は遺存状況が不良であり、柱間構成などは不明である。南面の東西方向の柱間距離は西から約3.0m・約1.9m・約2.1m・約1.5m・約2.7m以上である。西面の庇との境界部分の

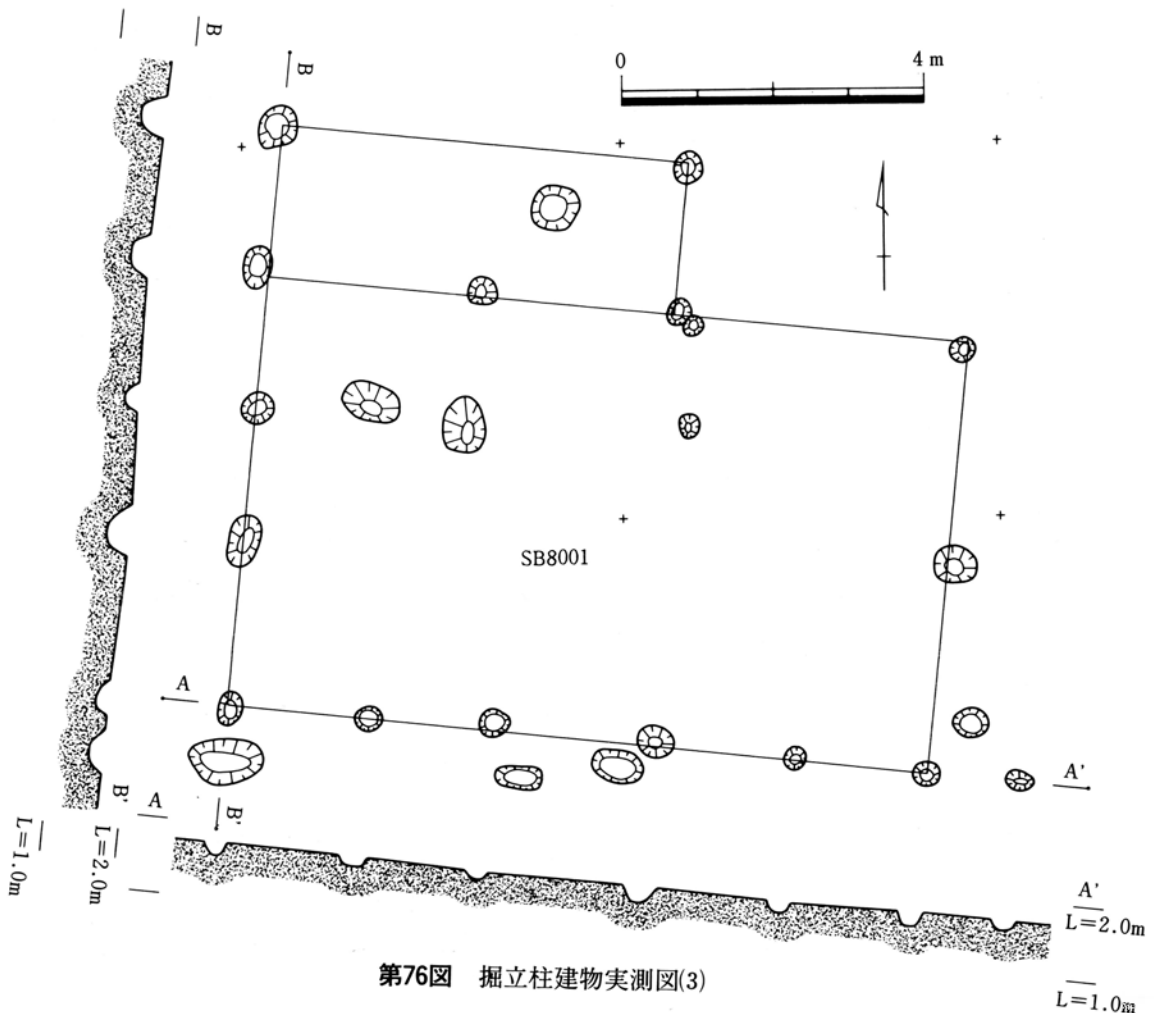


第75図 掘立柱建物実測図(2)

柱穴は存在せずまた一部の柱穴は検出できなかったため、西面の柱間の正確な距離は測定できないが、推定1.8m・2.0m・2.0m・推定2.0m・推定2.0m・推定2.0mとなるであろう。外周部分以外にも柱穴が存在しているが、間仕切り等の詳細な内部構造は詳らかにし得ない。柱穴には根石などの施設は全く存在しない。主軸方位はおおよそN25° Eを測り、SD6018とSD6023の方位とほぼ平行する。検出面の検討・遺構配置の状況・柱穴内出土遺物の分析から城下町期Ⅰ期～Ⅱ-1期の建物と考えられる。従って、建物内部分で検出された井戸などの遺構は同時に存在したものではない。建物面積がこれまで検出された中でも特に広大なものであり、主屋と考えられよう。

SB8001 (第76図)

SB8001は62D区の南部で検出された東西棟掘立柱建物A類である。桁行5間×梁行3間の身舎の北面に2間×1間の庇が取り付けられる。南北方向の溝SD8005・東西方向の溝SD8009・SD8011によって囲まれた空間内に建物は所在する。南面の柱間距離は西から約3.0m・約1.9m・約2.1m・約1.5m・約2.7m、西面の柱間距離は北から約2.1m・約1.5m・約2.7mである。北面庇部分の内側に庇とほぼ同じ規模の間仕切りが存在する。また、西面前面には柵列が存在し、これも庇となる可能性がある。西面の柱間は3間であるのに対し、対する東面の柱間は2間となっている。柱穴には根石は全く存在しない。遺構配置の状況と柱穴内出土遺物から、城下町期Ⅲ期の建物と推定できる。



第76図 掘立柱建物実測図(3)

SB6014 (第77図)

91A区中央部で検出された桁行3間×梁行2間の南北棟掘立柱建物A類である。桁行4.05m×梁行3.69mの規模を持ち、北西隅の柱穴は遺存しない。南北方向の柱間距離は北から約1.3m・約1.4m・約1.3m、北面の東西方向の柱間距離は西から約2.0m・約1.8mである。主軸方位はN20°Eを測り、柱穴には根石を全く持たない。城下町期Ⅱ-2期の整地層の下面で検出されたことや柱穴内の出土遺物などから、城下町期Ⅰ期～Ⅱ-1期の建物と考えられる。

63R区柱穴群

63R区の中央部に小規模な土坑群が密集する地点が存在する。土坑群の埋土は検出面の地盤である炭化物混じりのシルト層の斑土で、土坑プランの確定は困難であった。根石と考えられる石群があり建物の存在が予想されたが、詳細は確定できなかった。仮に建物が存在したとすれば、時期は土坑内出土遺物から城下町期Ⅲ期に属するであろう。

61A区柱穴群

61A区全域に小規模な土坑・ピット群が集中している。特に、調査区南部には東西方向に配列しているピット列が存在し、柵列として機能したかあるいはこれを中心として北部に展開した建物が存在したと考えられよう。

62C区柱穴群

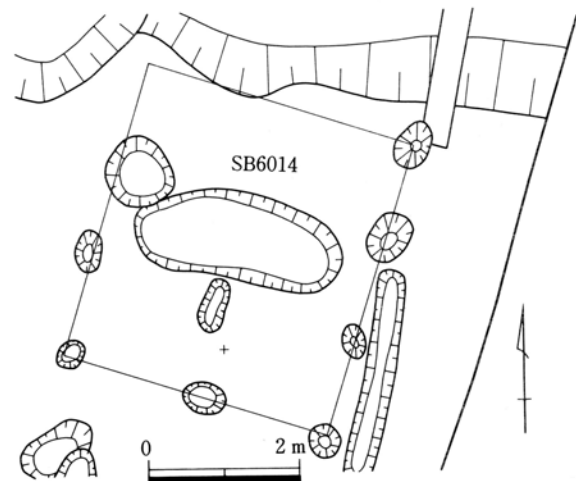
62C区の第2遺構検出面で検出された土坑群に列となった一群が存在する。規模と構造は詳らかでない。柱穴には根石やその他の構造物は存在しない。旧五条川NR4001が埋積した後に構築されていることから城下町期Ⅱ期以降と考えられる。

91B区柱穴群

91B区の南半部に展開する土坑群である。黄褐色シルト層上面で検出され、一部に自然石を用いた根石が存在している。また、礎石も一部に存在するが、これはおそらく柱穴内に残された根石が検出されたものと考えられよう。時期は柱穴内出土遺物などから城下町期Ⅲ期に比定できる。

90Fa区柱穴群

90Fa区の西半部で検出されたピット群である。SD8028とSD8031によって囲まれた空間に展開している。柱穴に根石は持たないが、配置や構造は不明である。時期は柱穴内出土遺物などから城下町期Ⅲ期と考えられる。



第77図 掘立柱建物実測図(4)

D 小結（建物遺構の復元と今後の展開）

冒頭で記述したように、地区によって建物遺構の基礎構造が異なっている。この基礎構造の相違が上屋構造にどの様に反映されてくるかは不明である。しかし、礎石建物にしても掘立柱建物にしても、地盤の軟弱な土地条件でありながらその基礎構造は比較的脆弱な感がある。例えば掘立柱建物の場合には、柱穴の規模は直径50cm前後と小規模であり、巨大な柱を持つ建物は想定しにくい。また、礎石建物についても、礎石は直径50cm前後の自然石を用いたものが最大で、この程度の遺構が本遺跡の建物の中で最も安定した基礎構造と思われる。こうした事象は、遺構の残存状況の影響も考えられようが、次のような要因が考えられよう。

- ① 城郭の主体部や上位クラスの居住者の屋敷を検出していないこと。
- ② 石材の入手が地理上困難なため、石材を用いた強固な建築物を遺跡全体には作り得なかったこと。
- ③ 名古屋城へ移転の際に、建物の基礎構造の部材までも運搬されたこと。

また、建物面積については、検出状況があいまいであるため詳細には論じられない。しかし、建物遺構の周囲が同時期の溝などで囲まれたものについては、その面積（建坪）を確定できる。この手法によれば、今回検出された中で89E区で検出されたSB6013が最大規模を持ち、SB8001などの倍以上に及ぶ。この結果は当然であるが、区画の規模に明らかに比例しているものであり、逆に換言すれば、建物遺構が検出できなくても、区画の面積で建物規模もある程度は想定が可能になると言えるのではないであろうか。こうした推測は事実と反する場合があります危険であるが、遺構の遺存状況が不良な遺跡の場合には、ある程度は許容される推測と考えたい。

（鈴木正貴）

第6節 柵列

A 概要

柵列は、建物と同様、上部遺構は残存せず基礎地業の痕跡が遺存していた。遺構検出の困難な点は前節で記述した通りであるが、ここで報告する事例の中には建物の一部を柵列と誤認したケースもあるかもしれない。従って、この前提を踏まえた上で柵列の報告をしたい。

柵列は建物と同様、基礎地業・土台の形態から次のように区分できる。

礎石柵列———柱の基礎に石材を使用したもの。

礎石柵列A類———偏平な自然石を1個用いて礎石としたもの。

(礎石柵列B類———複数の自然石を用いて礎石としたもの。)

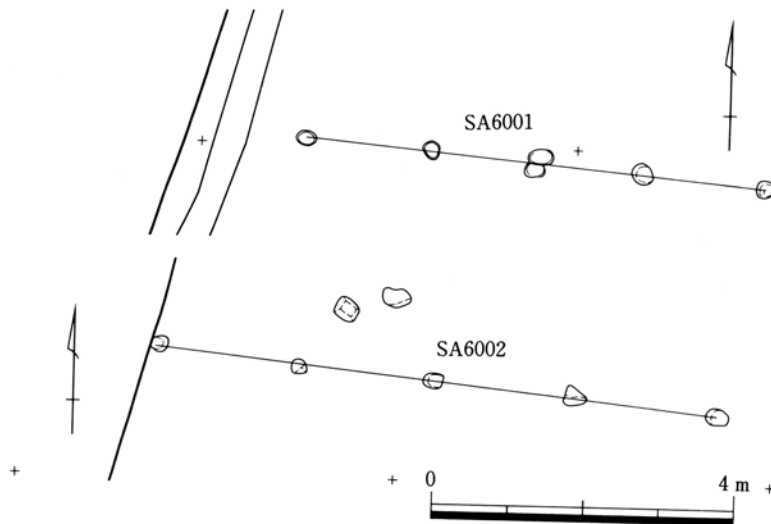
掘立柱柵列———柱の基礎部分に柱穴を掘削して柱を埋設したもの。

掘立柱柵列A類———素掘りの柱穴で、柱穴には何も設置しないもの。

掘立柱柵列B類———素掘りの柱穴で、柱穴に根石を設置したもの。

今回の調査で検出されたものは上記の分類の範囲に納まり、築地等のような版築を伴うものや石列等の構造を伴うものは存在しなかった。なお、掘立柱柵列A類の中には、90D区NR4001肩部で検出された杭列のように、杭列として僅かに上部遺構が残存している例も見られる。また、礎石柵列B類は検出されなかった。調査区の制約は存在するが、検出長は8mを超えるものはなく、比較的短いものが多い。従って、柵列のみを用いて空間を全て囲むといった状況は想定しにくい。

柵列の地区別の様相は、基本的には建物(第5節)と同様の状況であるが、御園地区・南部地区には、確実に柵列となる遺構は検出されなかった。



第78図 礎石柵列実測図

B 礎石柵列

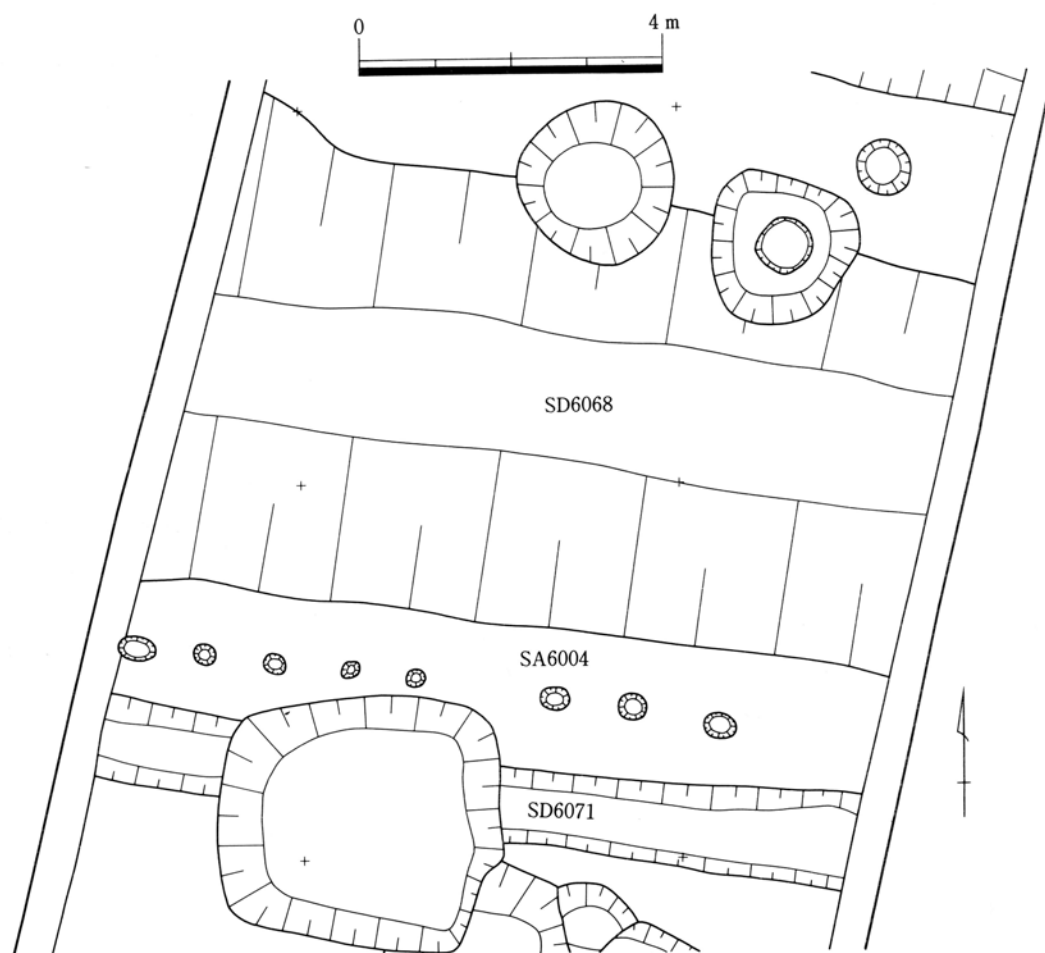
ここでは良好な状態で検出された礎石柵列のみを報告する。ここで記述する柵列は全て本町地区の礎石柵列A類に分類されるものである。

SA6001 (第78図)

91A区の中央部に所在する礎石柵列A類で、4間分(長さ6.2m)検出された。柱間距離は西から約1.7m・約1.4m・約1.4m・約1.7m、主軸の方位はN85°Wを測る。中央の礎石は2個で構成されていて、左右対象の形態をなしている。天正地震の噴砂で覆われた遺構面で検出されたことから、城下町期Ⅱ-2期に位置づけられる。

SA6002 (第78図)

91A区の中央部に存在する4間分(長さ7.5m)の礎石柵列A類である。柱間距離は西から約1.9m・約1.8m・約1.9m・約1.9mを測り、ほぼ1間(1.8m)間隔となっている。主軸の方位はN85°Wを測り、SA6001と平行している。天正地震の噴砂で覆われた遺構面で検出されたことから、城下町期Ⅱ-2期に位置づけられる。



第79図 掘立柱柵列実測図(1)

C 掘立柱柵列

ここでは良好な状態で検出された掘立柱柵列のみを報告する。

SA4001 (第80図)

61A区の南部に所在する5間分(長さ4.3m)の東西方向に走る掘立柱柵列A類である。東西両端は調査区外へ伸びる可能性がある。柱間距離は西から約0.8m・約0.8m・約1.0m・約0.9m・約0.8mを測り、おおよそ半間(0.9m)を基準として設定されているようである。出土遺物等から城下町期Ⅰ期に位置づけられ、廃絶後はSD4015が掘削されている。

SA6004 (第79図)

89B区の南部に存在する7間分(長さ7.9m)の掘立柱柵列A類である。西側は更に調査区外へ伸びる可能性がある。柱間距離は西から約0.9m・約0.9m・約1.0m・約0.9m・約2.0m・約1.0m・約1.2mを測り、半間(0.9m)を基準として設定されている。主軸の方位はN83°Wを測り、SD6068とSD6071の間に平行して走っている。このように明らかにSD6068に伴っているという位置関係から、SD6068と同時期(城下町期Ⅰ期を主体として城下町期Ⅱ-1期まで)と考えられる。

SA6003 (第73図)

91A区の南部に位置する8間分(長さ7.6m)の礎石柵列A類である。柱間距離はほとんどが約0.9mとなっており、主軸の方位はN12°Eを測る。柱穴には扁平な石材を用いた根石が設置されている。調査区の西端部で検出されたことから、調査区外に柱穴が伸びて建物になる可能性も残されている。SB6016の遺構面の下層から検出されたことから、時期は城下町期Ⅰ期~Ⅱ-1期と推定できる。

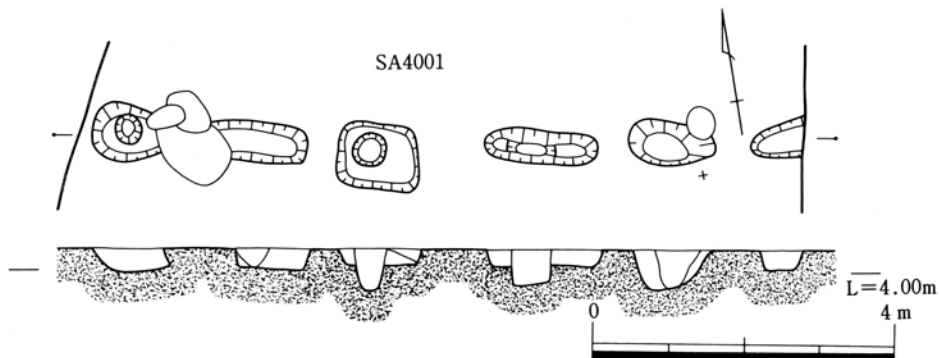
D 小結

柵列は周囲の遺構との関係から3つのパターンが存在する。

- ① 単独で存在するタイプ (SA6001・SA6002・SA6003)
- ② 溝に平行して存在するタイプ (SA6004)
- ③ 溝の内部に組み込まれて存在するタイプ (今回の調査では検出されていない⁽¹⁾)

このうち①は柵列のみで空間を分けた簡便な区画施設、②と③は溝とセットで防衛性・境界性を高めた区画施設と考えられよう。(鈴木正貴)

註 (1) 鈴木正貴編(1990)『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集所収のSA102等がある。



第80図 掘立柱柵列実測図(2)

第7節 井 戸

A 概要

井戸は、溝と同様、清洲城下町遺跡では比較的検出が容易な遺構であるが、下部構造のみを検出し上部構造は復元し得ない。また、掘り直されて重複する場合や遺構面の認定が困難な場合は、調査手順を誤ったり、時期の認定が難しいことがある。

本遺跡に所在する井戸は、地盤が軟弱であるため、ほとんどが内部構造物を持っていたと考えられる。従って、井戸は内部構造物から次のように分類できる。（なお、井戸の各部の名称は様々な呼び方が存在するが、通常は下位から水溜・井戸側・井桁と称している。⁽¹⁾）

結桶井戸——内部構造物に結桶状に板材を結び合わせた井戸側を設置したもの。

結桶井戸Ⅰ類——高さが1 m以上の井戸側を用いた井戸で、検出面からの深さは2 mを越える。

結桶井戸Ⅱ類——高さが80cm前後の井戸側を用いた井戸で、検出面からの深さは2 mを越える。

結桶井戸Ⅲ類——高さが80cm前後の井戸側を用いた井戸で、検出面からの深さは2 m以下である。

石組井戸——内部構造物の一部に石組を用いたもの。

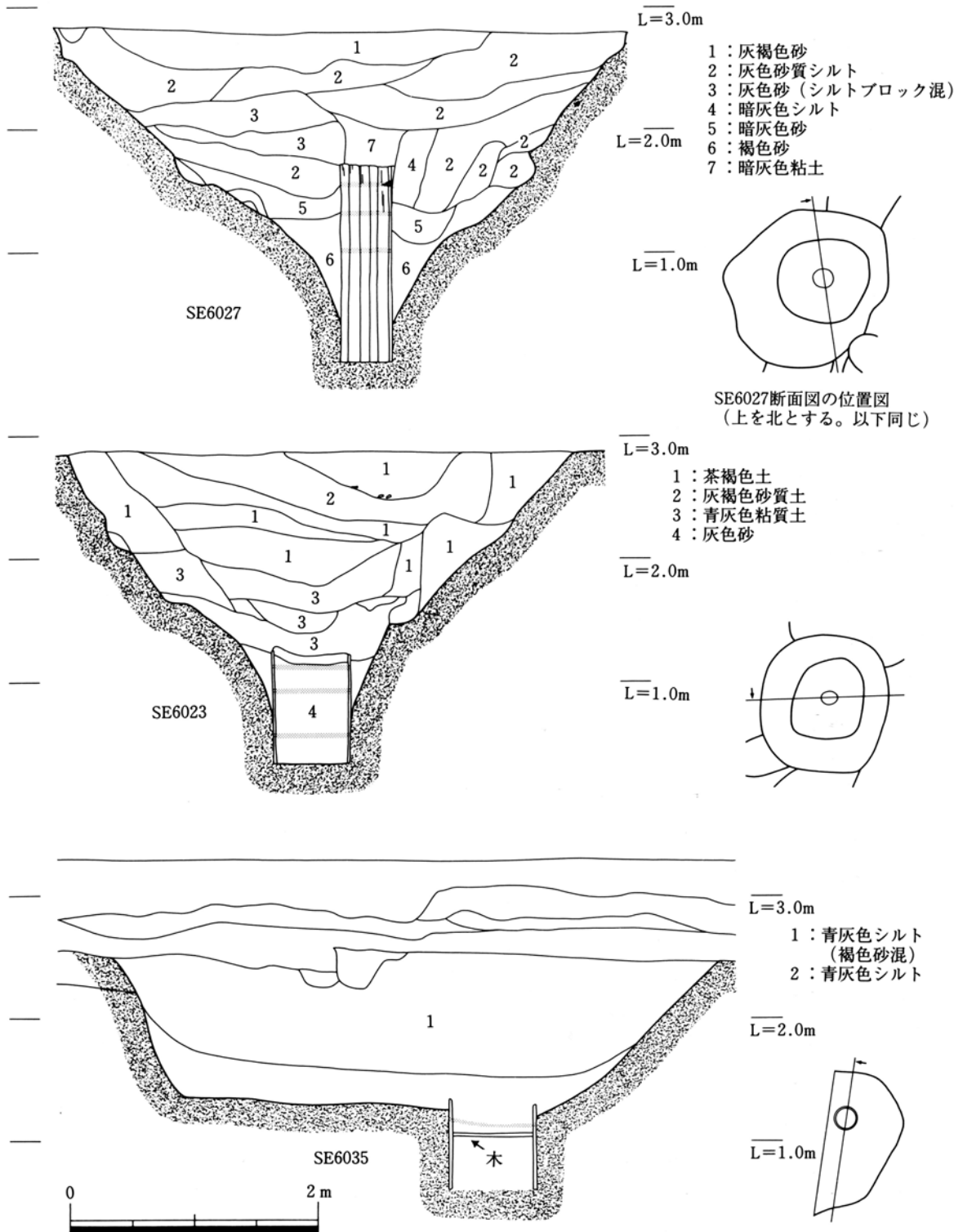
無構造物井戸——内部構造物が遺存しないもの。内部構造物が撤去されたものである。

井戸の構造の相違は、時期的な差や地形的な差によって生じていると考えられる。時期的な差については、城下町期以前では曲物桶を内部施設に使用し、城下町期以降は結桶井戸が主体となっている。⁽²⁾ 城下町期の範囲内における時期的な変遷は明確ではないが、石組井戸が城下町期Ⅲ－2期に位置づけられることから石組井戸は比較的新しいものかもしれない。結桶井戸の形態差は、井戸の設置された地点を反映していると思われる。すなわち、湧水層が検出面から比較的浅い南部地区は結桶井戸Ⅲ類が展開しており、その他の田中町地区・五条橋地区・本町地区では結桶井戸Ⅰ類・Ⅱ類となっている。⁽³⁾ また、結桶井戸Ⅰ類・Ⅱ類の差は居住者の性格の差が表現されているという指摘が存在する。

次に、井戸の構築から廃絶までを順に検討してみる。

- ① 井戸の構築 井戸の構築の手順は次のように復元できる。
 - a 平面形が2～5 mの円形または楕円形、断面形が2～5段の階段状の土坑を掘削する。
 - b 内部構造物（井戸側）を設置する。土層断面観察から最下段下半部を湧水層に突き刺している。
 - c 井戸側周囲を埋め立てる。従って、この裏込め土は斑土となっている。
- ② 井戸の使用 井戸の使用状況に関する調査結果はほとんど存在しないが、一部に井戸の最下層に砂の噴出を防ぐための竹製の編物が設置されていたものがある。
- ③ 井戸の廃絶 井戸の廃絶の理由については明確にはし得ないが、水量の減少（井戸枯れ）や屋敷の移転などが考えられる。井戸の廃絶の手法は次の3者がある。
 - a 結桶抜き取り a タイプ——井戸側の周囲の土壌ごと結桶を除去したもの。
（遺存する井戸構造物の直上面から上は、一般の土坑と同様な堆積状況である。）
 - b 結桶抜き取り b タイプ——周囲の土壌を除去せずに、結桶を抜き取ったもの。
（裏込め部と井戸側内部の堆積状況が異なっている。）
 - c 埋め立てタイプ——結桶を抜き取らず、石材・瓦・斑土を埋め立てるもの。

なお、井戸の廃絶に当たっては、特定の宗教的行為が行われる場合が予想されるが、完形の土器類が出土する場合は、特に存在しない。（息抜きのための竹筒や刃物等は遺存しない。）



第81図 井戸土層断面図(1)

B 結桶井戸

結桶井戸は、本遺跡から出土した城下町期に属する井戸の大半を占めている。

SE1001

63R区の中央部で検出された井戸で、上部は攪乱によって破壊されていた。最下層に結桶の下部が遺存しており、結桶井戸Ⅰ類かⅡ類と思われる。時期は城下町期Ⅲ期と考えられる。

SE1002 (第85図)

63R区の中央部に所在する結桶井戸Ⅱ類である。掘形の断面形は階段状となり、井戸側は西端寄りに設置されている。井戸側部の最下層に結桶が1段遺存している。出土遺物から城下町期Ⅲ期に属する。

SE3002

90A区の中央部東端で検出された井戸で、大半は調査区外に所在する。平面プランは長径5m以上のほぼ円形になると思われるが、井戸側の構造については確認できなかった。

SE4001 (第83図)

63B区の南部で検出された結桶井戸Ⅱ類である。東半部は調査区外に位置するが、最下層に結桶が1段残存していた。掘形は平面形が長径3.2mの楕円形を呈し、断面形は1段の段差を持っている。裏込め部分と井戸側内の堆積状況が異なることから、井戸廃絶時に上部の結桶が引き抜かれたと思われる。時期は城下町期Ⅲ期に属する。

SE4078

63B区の中央部に所在する結桶井戸Ⅱ類である。遺構検出面のレベルから井戸枠内の部分に人頭大の自然石が詰め込まれた状態で出土し、この石群は最下層まで連綿と遺存していた。これらは井戸廃絶時に投棄されたものと解釈できる。最下層には高さが約80cmの結桶が1段残存していた。出土遺物から城下町期Ⅱ-2期に位置づけられる。

SE4082

61A区の中央部東端に存在する結桶井戸Ⅱ類である。井戸側として結桶が3段残存していた。出土遺物から城下町期Ⅱ-2期に位置づけられる。ほぼ同時期の城下町期Ⅱ期に位置づけられるSE4080・SE4081を切って掘削されたことと、SE4080・SE4081に極めて接近した地点に設置されていること等から、旧来存在した井戸を埋めて掘り直した井戸と考えられよう。

SE4084 (第84図)

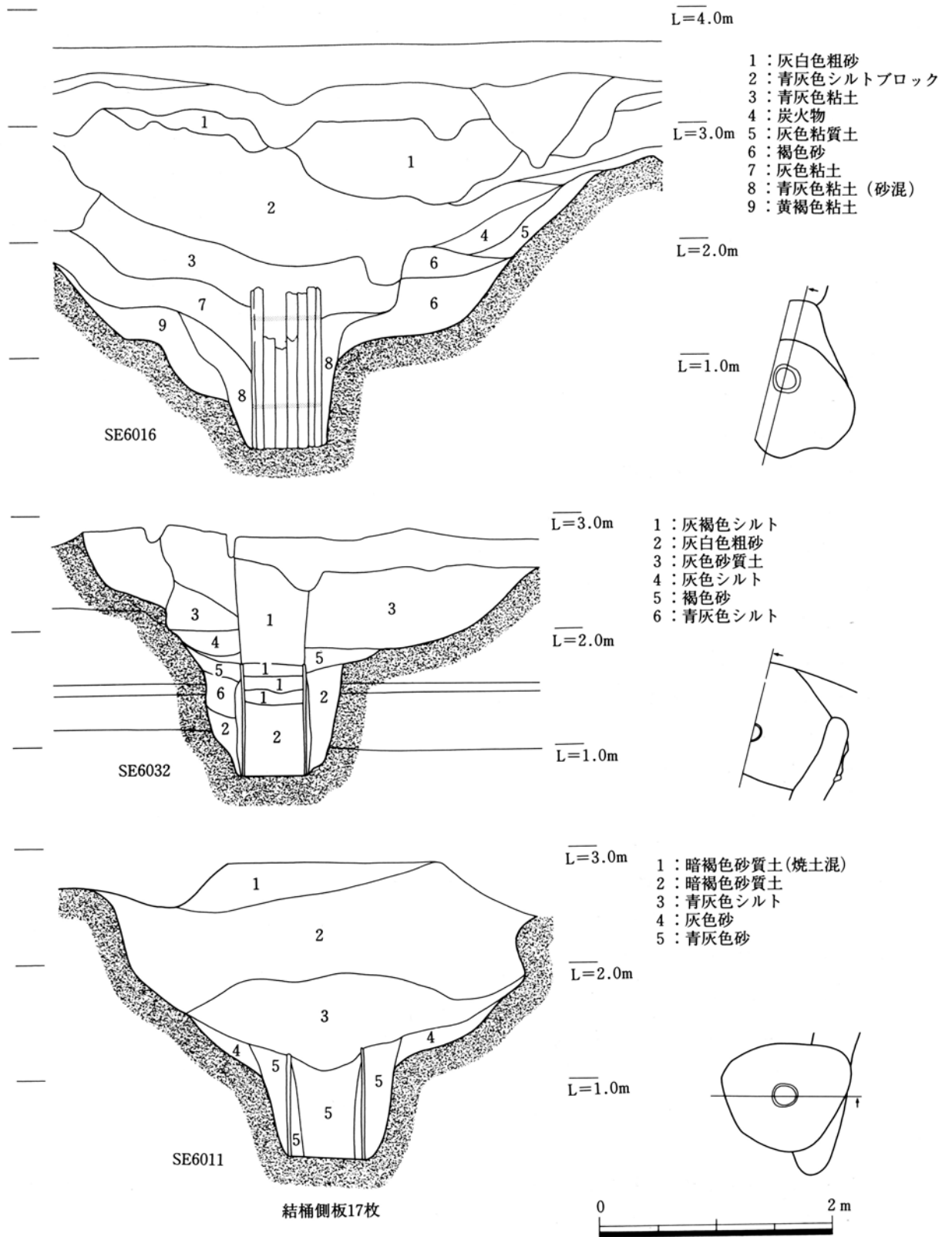
61A区の中央部東端に存在する結桶井戸Ⅱ類で東端部が調査区外に位置する。掘形は短径3.79mの楕円形を呈し、平面全体を一気にほぼ湧水層まで掘削している。最下層に結桶が1段残存していたが、結桶の遺存状況は不良である。出土遺物から城下町期Ⅰ期に位置づけられる。

SE4019

90B区で検出された結桶井戸Ⅱ類で、SK4467に切られる。SE4018と接近して設定されていることから前後関係は不明であるが掘り直されたものと考えられる。内部施設として井戸側の結桶が2段残存しており、旧五条川NR4001埋積後に掘削されたことや出土遺物から城下町期Ⅱ期と考えられる。

SE4025

90B区で検出された結桶井戸Ⅱ類である。井戸側内の部分には人頭大の自然石が数十個投棄されて



第82図 井戸土層断面図(2)

いた。掘形は直径が3 m以上のほぼ円形の平面プランを持ち、井戸側として結桶が埋設されていた。旧五条川NR4001埋積後に掘削されたことや出土遺物から城下町期Ⅱ期と考えられる。

SE4095

90C区の南端部に所在する結桶井戸Ⅲ類である。掘形は直径が2 m強のほぼ円形の平面プランを持ち、結桶が1段遺存していた。時期は出土遺物から城下町期Ⅰ期に属する。この井戸は旧五条川NR4001の屈曲部の肩部に位置していることからNR4001との関係が注目される。

SE4066 (写真)

63C区北端部に位置する結桶井戸Ⅱ類で、内部施設としての結桶が良好な形で1段残存していた。掘形の側面に天正地震の噴砂の広がっている状況が確認され(写真)、城下町期Ⅲ期と考えられる。

SE6010 (第83図)

89E区の北西端部で検出された結桶井戸Ⅱ類である。掘形の平面規模は調査区外に広がっているため不明であるが、井戸側の結桶が1段遺存していた。遺存する結桶の上部は斑土が厚く堆積していることから結桶抜き取りaタイプの井戸の廃絶が実施されたといえる。埋土中からは多数の土師器皿が出土しており、これらから時期は城下町期Ⅱ-2期に位置づけられる。

SE6011 (第82図)

89E区の中央部に所在する結桶井戸Ⅱ類で、掘形の断面形は3段階階段状になっている。上部の井戸側施設は裏込め土も含めて撤去されていた。城下町期Ⅱ-1期の遺構SD6020を切り、出土遺物の分析から城下町期Ⅲ期の時期と推定される。

SE6014 (第84図)

89E区の中央部に位置する井戸で、上部の井戸側施設は土壌ごと撤去されていた。最下層に井戸側の結桶が1段残存しており、その規模から結桶井戸Ⅱ類である。掘形の断面形は最下段の結桶部のみが狭く掘削された状態になっている。出土遺物の分析から城下町期Ⅰ期と考えられる。

SE6016 (第82図)

89E区の中央部で検出された井戸で、直径約4 mの円形プランを持っている。結桶が1段残存しており、結桶の高さが1 mを越えること等から結桶井戸Ⅰ類と言える。掘形の断面形は階段状となり、結桶上部は斑土が横方向に平行な堆積をしている。出土遺物から城下町期Ⅱ-2期と考えられる。

SE6027 (第81図)

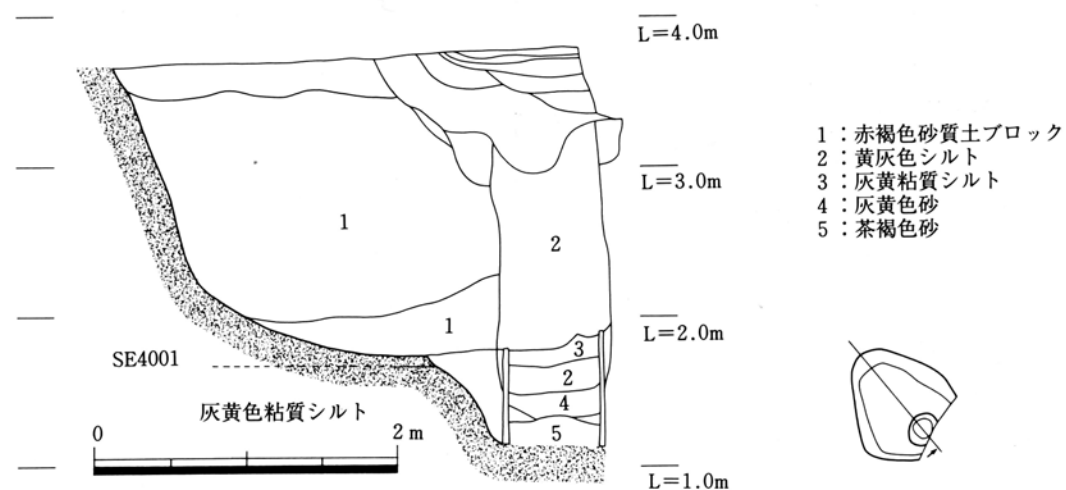
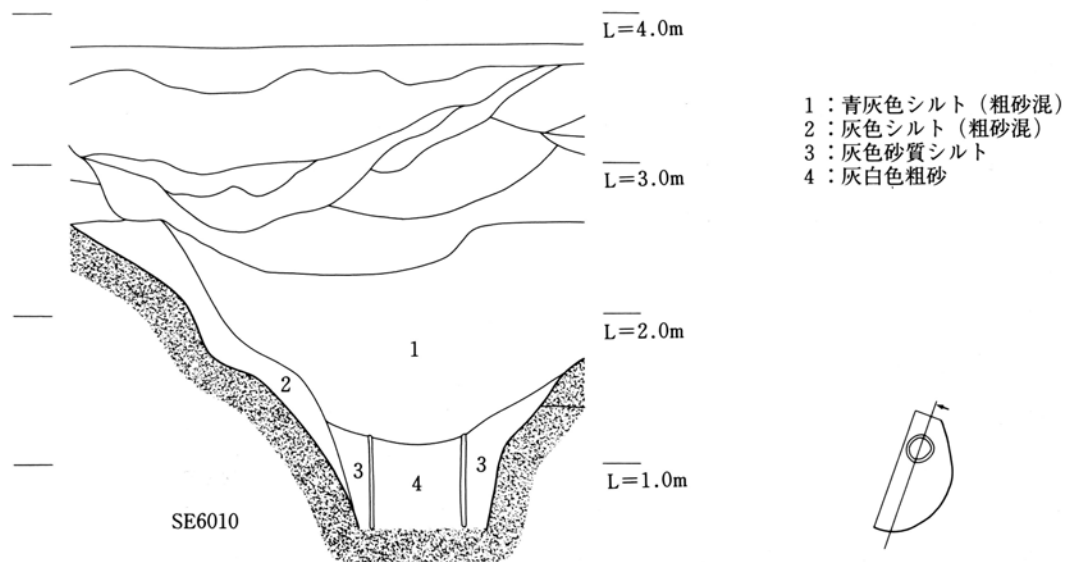
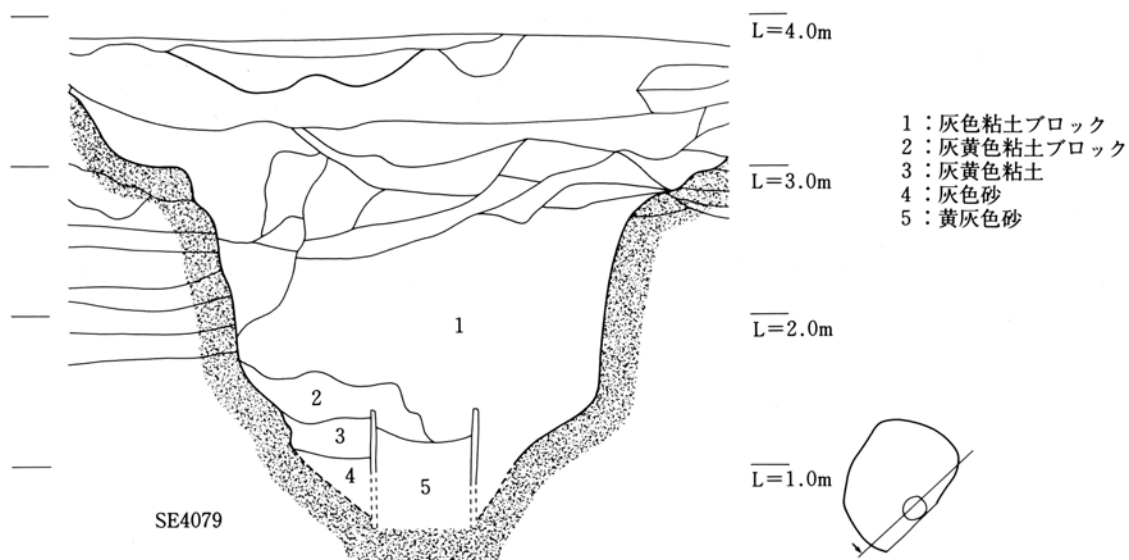
61B区の東端部で検出された結桶井戸Ⅰ類である。掘形は長径5.84 mを測る楕円形で、井戸側の結桶が1段残存していた。SD6034を切っている。出土遺物の検討から宿場町期に降る可能性が残されるが、おそらく城下町期Ⅲ期の井戸であるだろう。

SE7001・SE7002・SE7003・SE7004・SE7005・SE7006・SE7007 (第86・87図)

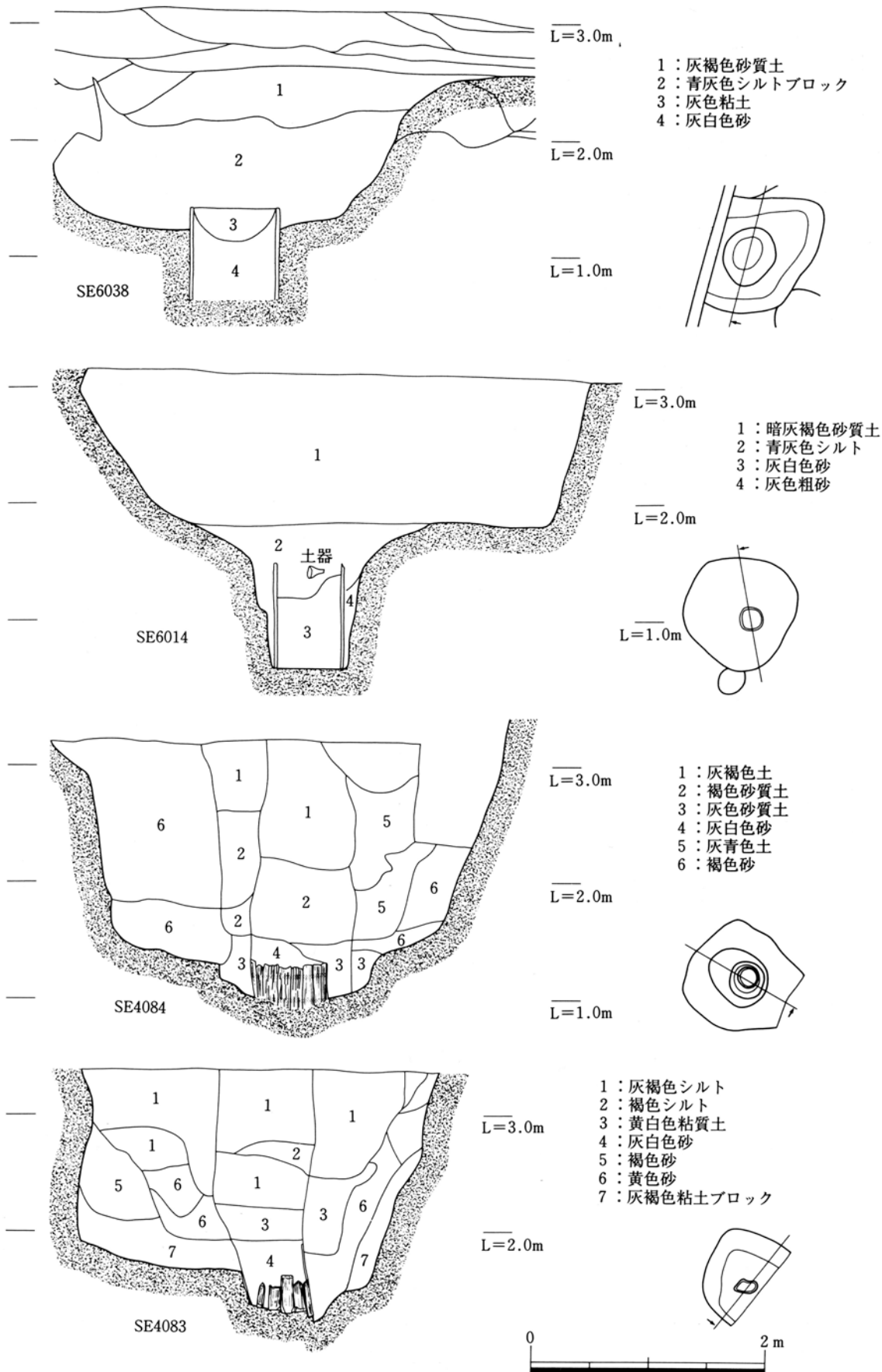
89F区で検出された井戸群である。上部の構造が宿場町期の堤防建設等で削平され遺存状況は不良である。最下層に結桶が1段残存している結桶井戸Ⅱ類である。

SE8002 (第85図)

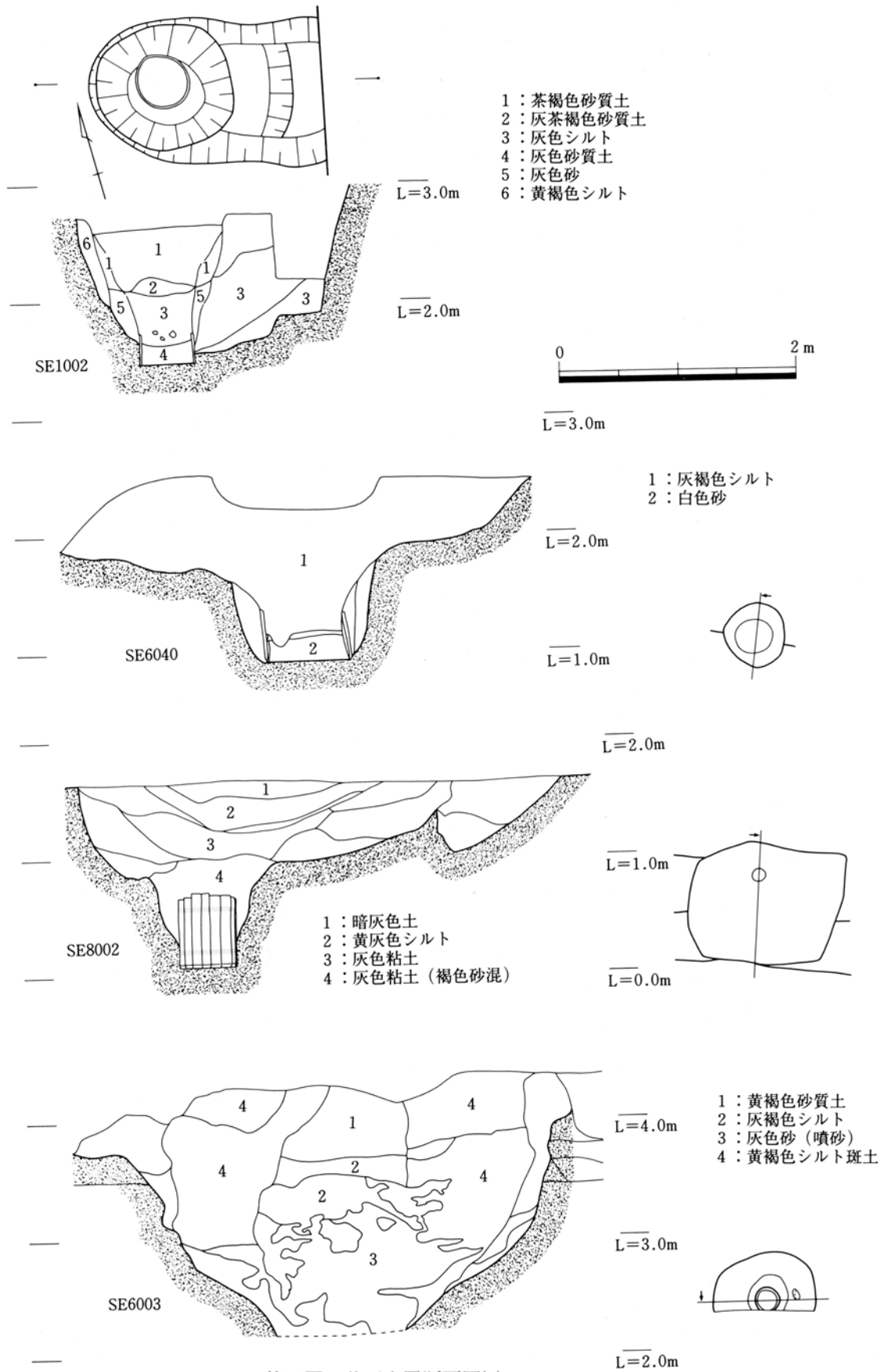
62D区の中央部に所在する結桶井戸Ⅲ類である。掘形の平面プランは長軸6 m弱の隅丸方形を呈しており、その北端部に井戸側が設定されている。結桶は1段遺存しており、下半部は湧水層の砂層に突き刺して設置されている。SD8009を切っている。出土遺物から城下町期Ⅲ期に属する。



第83図 井戸土層断面図(3)



第84図 井戸土層断面図(4)



第85図 井戸土層断面図(5)

SE8005 (写真図版)

91C区の北半部に位置する結桶井戸Ⅲ類である。最下層に結桶が1段遺存し、その上層には拳大から人頭大の自然石が多量に投棄されていた。上段の井戸側を土壌ごと撤去した後に礫を埋めて廃絶したものである。出土遺物から城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

C 石組井戸

石組井戸は、清洲城下町遺跡では今回の調査で初めて検出された例外的なもので、1基のみ存在する。

SE7012 (第87図)

61D区で検出された石組井戸である。掘形は1.96m×1.75mのはほぼ円形の平面プランを持ち、断面形は階段状になる。井戸側施設としては上部に石組、下部に結桶を設置している。上部の石組はやや角張った人頭大の石材を円形に積み重ねたもので、石材の平坦面を井戸側の内側に向けて高さ1.5m程積み上げている。裏込め部分は比較的小形の石材と斑土で埋められている。下部の結桶は1段存在している。内部施設の抜取りなどは行われていない。出土遺物の検討から城下町期Ⅲ-2期と考えられる。

D 無構造物井戸

無構造物井戸と仮称したものは、井戸側が廃絶時や後世の攪乱によって破壊され内部構造物が全く遺存しないものであり、本来はほとんどが結桶井戸であったと推測されるものである。

SE4094

62C区の北東部で検出された無構造物井戸であるが、おそらく結桶が内部施設として存在した結桶井戸Ⅲ類と思われる。出土遺物はないが検出面の検討からNR4001と同時期と考えることができる。

SE6003 (第85図)

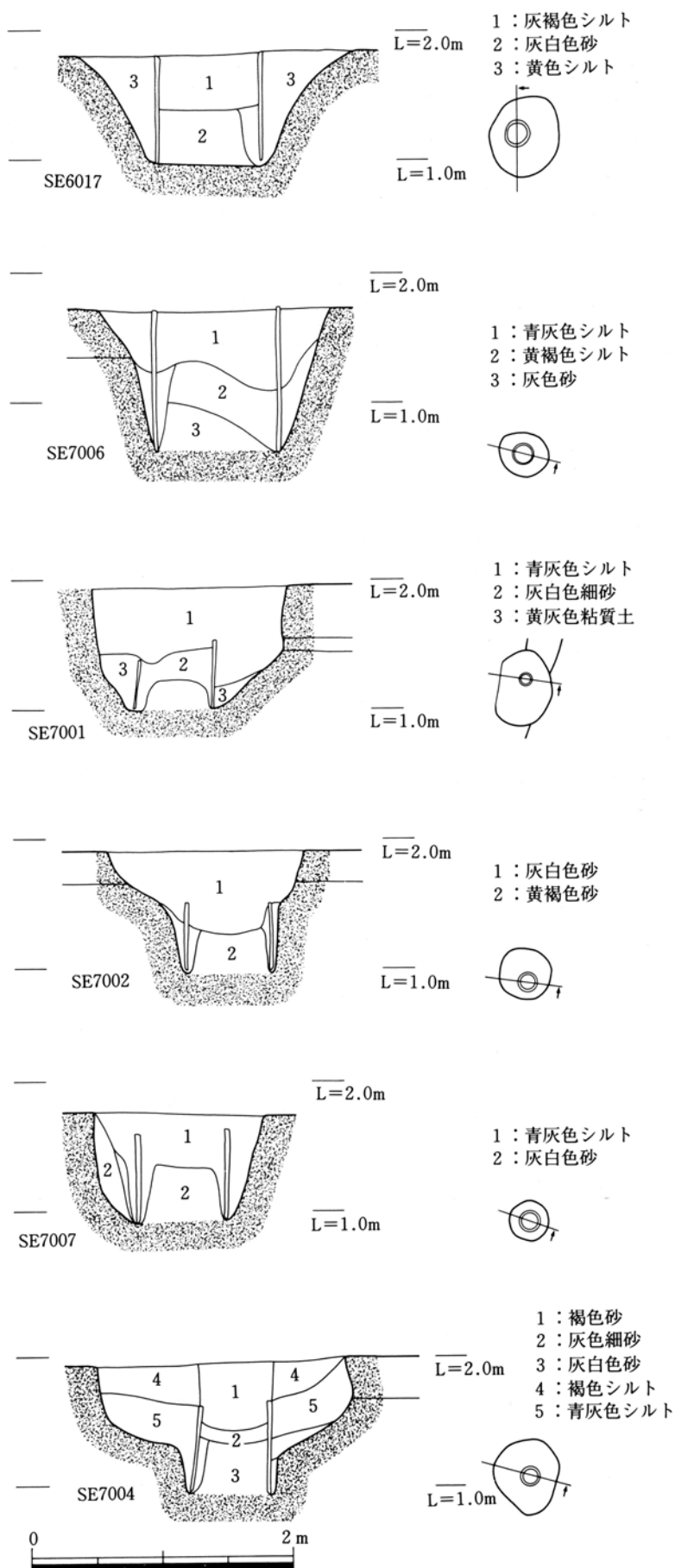
91A区の中央部に位置する無構造物井戸であるが、おそらく結桶の井戸側が取り除かれたものと考えられる。土層断面観察によると、地震の影響で埋土が攪斑されており詳細な堆積状況は不明である。出土遺物から城下町期Ⅱ-2期の井戸と考えられよう。

SE8001・SE8003 (第87図)

62D区で検出された無構造物井戸である。平面プランが直径約2m、深さ約1mの小規模な掘形を持っていることから、結桶井戸Ⅲ類の結桶が完全に抜き取られたものと推定できる。城下町期Ⅲ期。

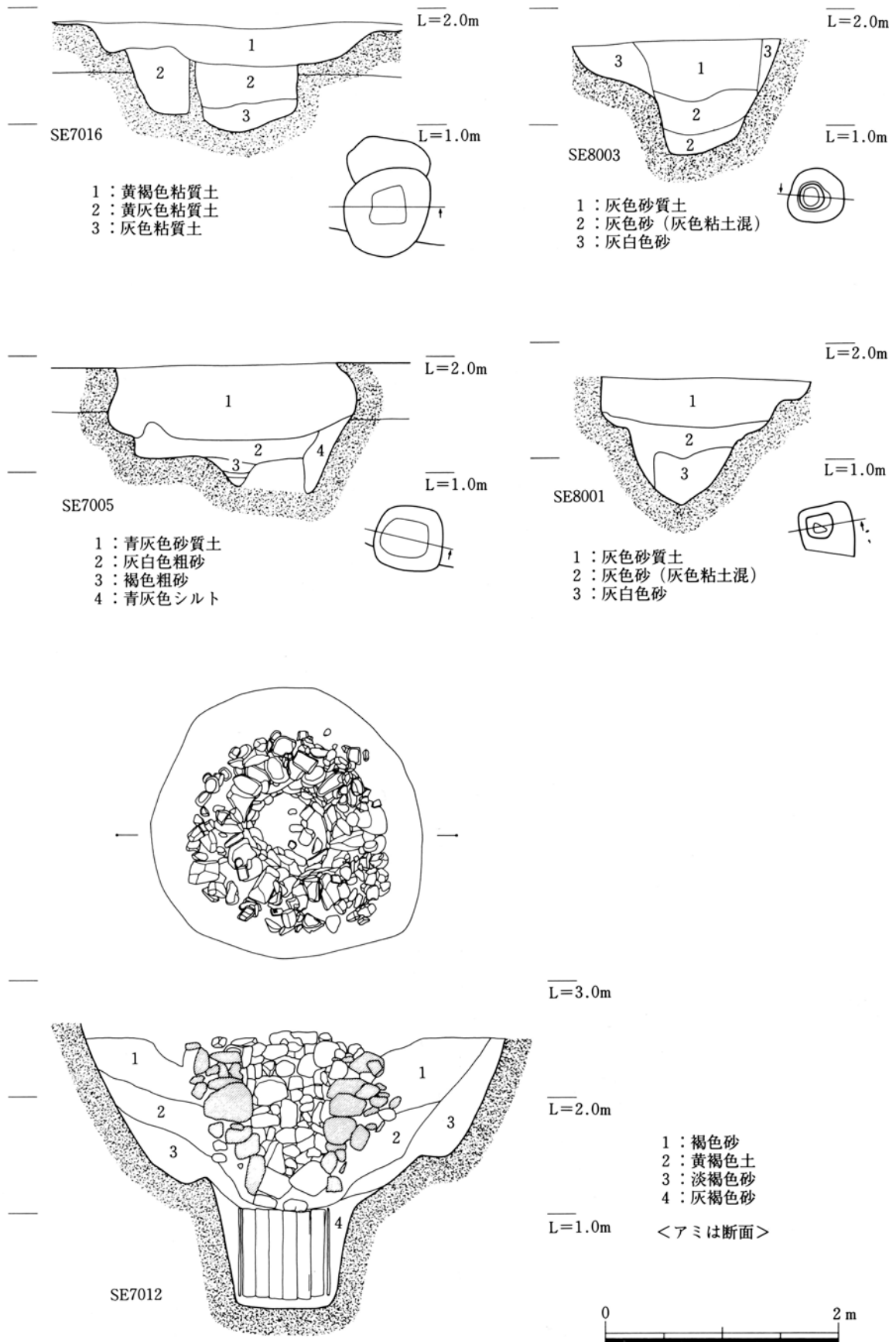
(鈴木正貴)

- 註 (1) 宇野隆夫(1989)「井戸考」『古代と中世の歴史と社会』真陽社
(2) 長島広(1986)「朝日西遺跡の井戸について」『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
(3) 鈴木正貴(1989)「清洲城下町遺跡出土井戸桶に関する考察」『年報昭和63年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
(4) 森勇一・鈴木正貴(1989)「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」『活断層研究7』



第86図 井戸土層断面図(6)

遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	内 部 構 造	時 期
SE4082	残2.47	残1.30	結桶井戸Ⅱ類 (結桶3段残存)	城Ⅱ
SE4083	残3.33	残2.65	結桶井戸Ⅰ類 (結桶)	城Ⅲ
SE4084	残4.20	3.79	結桶井戸 (結桶1段残存)	城Ⅰ
SE4091	残*1.69	残1.44	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅰ
SE4092	残2.12	残1.09	結桶井戸Ⅱ類 (結桶2段残存)	城Ⅲ
SE4093	2.51	残2.02	結桶井戸Ⅱ類 (結桶3段残存)	城Ⅱ
SE4094	残1.70	残0.77	無構築物井戸	
SE4095	残2.18	残1.99	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城Ⅰ
SE6001	3.50	3.27	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ-2
SE6002	2.54	2.21	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6003	*3.84	残2.16	無構築物井戸 (結桶抜取aタイプ)	城Ⅱ-2
SE6004	3.17	残2.92	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2
SE6005	3.15	2.86	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6006	残4.24	残3.66	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6007	3.87	2.64	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	
SE6008	3.49	2.87	無構築物井戸	城Ⅲ
SE6009	5.44	4.75	結桶井戸Ⅱ類 (結桶2段残存) が3基あり	城Ⅲ-(2)
SE6010	残*3.51	残1.59	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2
SE6011	4.46	3.75	結桶井戸Ⅰ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ?
SE6012	1.53	1.50	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6013	6.51	5.20	結桶井戸Ⅱ類 (結桶2段残存) が2基あり	城Ⅲ
SE6014	*4.37	3.91	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅰ-2
SE6015	3.09	2.37	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6016	4.11	残3.15	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2
SE6017	2.55	2.16	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2~
SE6018	3.16	2.96	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6019	4.00	3.83	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城
SE6020	5.76	推4.10	無構築物井戸 (結桶抜取aタイプ)	城Ⅱ-1
SE6021	残3.03	残2.03	結桶井戸Ⅰ類	
SE6022	残4.28	残2.94	無構築物井戸 (結桶抜取aタイプ)	城Ⅱ-2~
SE6023	4.68	残4.52	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	宿?
SE6024	?	?	結桶井戸Ⅰ類	
SE6025	残3.03	2.62	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6026	2.86	2.52	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ
SE6027	5.84	残4.53	結桶井戸Ⅰ類 (結桶1段残存)	宿?
SE6028	5.94	3.74	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6029	1.51	1.44	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	
SE6030	2.32	2.03	無構築物井戸 (石材埋め立て)	城Ⅲ
SE6031	残5.58	残4.16	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6032	残*3.92	残3.44	結桶井戸 (結桶1段残存)	
SE6033	残3.94	残0.70	結桶井戸 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6034	推3.99	推3.04	結桶井戸Ⅰ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2
SE6035	残4.91	残2.61	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2~Ⅲ
SE6036	4.01	3.81	無構築物井戸	城Ⅱ
SE6037	3.22	2.74	結桶井戸 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6038	残5.15	残3.56	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅱ-2
SE6039	3.62	2.89	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	城Ⅱ-2
SE6040	*4.00	2.05	結桶井戸Ⅱ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE6041	2.11	2.03	無構築物井戸	
SE6042	残4.07	残3.46	無構築物井戸	城
SE6043	残5.20	残1.95	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	城Ⅱ-2
SE6044	2.10	2.05	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	城Ⅲ
SE6045	2.91	2.06	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	
SE6046	1.93	1.44	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	城
SE7001	*2.50	残1.66	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	
SE7002	1.67	1.65	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	
SE7003	残2.07	残1.29	無構築物井戸	
SE7004	2.32	2.04	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	
SE7005	2.60	2.60	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	
SE7006	*1.78	1.36	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	
SE7007	*1.30	1.22	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	
SE7008	1.76	1.54	結桶井戸?	城Ⅲ
SE7009	1.84	1.72	?	城Ⅲ
SE7010	0.86	0.73	無構築物井戸	城Ⅲ
SE7011	残*2.88	残1.81	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE7012	1.96	1.75	石組井戸	城Ⅲ-2
SE7013	残4.74	残3.43	結桶井戸Ⅲ類 ((結桶1段残存)	城Ⅲ
SE7014	残1.85	残1.17	無構築物井戸	城Ⅲ
SE7015	2.43	2.10	無構築物井戸 (結桶抜取aタイプ)	城(I?)
SE7016	3.41	2.88	無構築物井戸 (結桶抜取bタイプ)	城Ⅰ
SE7017	残4.87	残4.02	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城
SE7018	2.68	2.64	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE7019	2.80	2.27	無構築物井戸	城Ⅱ-2
SE7020	1.89	1.61	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE8001	2.05	1.93	無構築物井戸	城Ⅲ
SE8002	5.94	4.72	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存)	城Ⅲ
SE8003	残1.82	1.81	無構築物井戸	城Ⅲ
SE8004	残*3.28	残0.35	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存, 石材埋め立て)	城Ⅰ-2
SE8005	1.72	1.29	結桶井戸Ⅲ類 (結桶1段残存, 石材埋め立て)	城Ⅲ

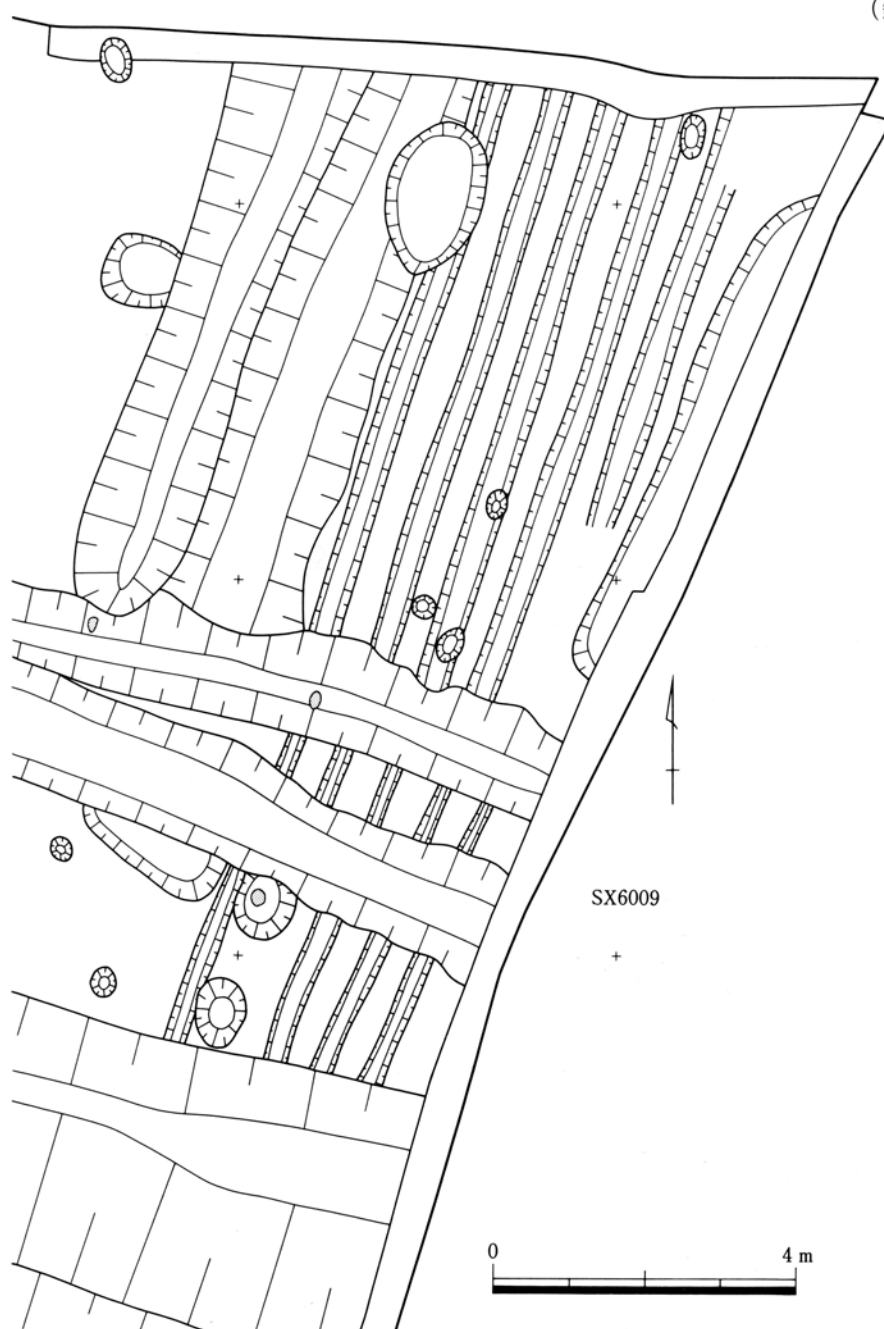


第87図 井戸土層断面図(7)

第8節 畝状遺構

小規模な溝が数条平行して走る遺構群を畝状遺構として報告する。該期の畝状遺構は、89B区の北東部で検出されたもの1例(SX6009)のみである。SX6009はSD6041・SD6042・SD66043・SD6044・SD6045の5条の溝で構成される。いずれの溝も幅40~50cm、深さ20cm前後を測り、長さ13.5m程が検出された。溝と溝の間隔は50~70cmで、方位はおよそN20°Eを測る。ベースは黄褐色シルト、溝埋土は暗黄褐色シルトであった。SD6047・SD6048・SD6051に切られており、城下町期I期以前と考えられる。周囲の状況から畑である可能性が強いが、目に見える植生痕等は確認できなかった。

(鈴木正貴)



第88図 畝状遺構実測図

第9節 土 坑

A 概要

土坑はほぼ全調査区で様々な形態のものが検出されている。本遺跡で検出された遺構の中では数量的に最も多いのであるが、大半の場合はその性格が詳らかではない。ここでは土坑を形態から次のように区分し、各々について特徴的な事例を取り上げて報告・検討を実施したい。

土坑Ⅰ類——比較的小規模で、平面プランが円形または楕円形を基準とした形態となるもの。

長径が5 m以下（1～3 mが標準的な規模）で、不定形となる場合もある。

土坑Ⅱ類——比較的大規模で、平面プランが円形または楕円形を基準とした形態となるもの。

長径が5 m以上で、平面形が不定形となる場合もある。

土坑Ⅲ類——比較的大規模で、平面プランが方形または長方形を基準とした形態となるもの。

上記の分類の内、土坑Ⅰ類が数量的には最も多く全調査区に互って検出されており、更に細分が可能と思われる。土坑Ⅱ類は数量的に少ないが、調査区による偏りは認められない。一方、土坑Ⅲ類は南部地区に多く検出される傾向がある。こうした各土坑分布の差異が、地形の相違によるものか、あるいは地点の性格の相違によるものかは今後の課題と言えよう。

B 土坑Ⅰ類

土坑Ⅰ類は本遺跡で多量に発見された遺構である。ここでは特徴的な事例を取り上げる。

SK3029（写真図版）

62G区の南半部で確認された土坑で、SD3016に切られる。正確な規模は不明であるが、平面形は楕円形であったと推定される。中から多量の土師器皿が出土しており、城下町期Ⅰ期に属する。

SK6216

91A区・89E区で検出された比較的浅い土坑である。埋土には炭化物が充填されていた。

SK6168（写真図版）

89B区の中央部に所在する0.83 m×0.65 mのほぼ円形の平面プランを持つ浅い土坑である。土坑内には城下町期の平瓦の破片が十数枚並んだ状態で埋設されていた。

SK6639

89C区で検出された土坑で、ここからは多数の土師器皿が出土している。

SX7002

89F区で確認された2.20 m×1.86 mの楕円形の平面プランを持つ土坑で、中から柿経が出土している。出土遺物から城下町期Ⅲ期に属する。

SK7204

91B区の南半部で検出された土坑で、内部に土師器釜が埋納されていた。出土遺物から城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

SK8074

91C区の中央部に位置する土坑で、区画溝SD8017に切られている。埋土には炭化物が充填されており、土師器鍋・釜が多量に出土した。SD8005・SD8013・SD8017によって囲まれた空間の片隅に所在

すること等から、廃棄土坑と考えられる。出土遺物から城下町期Ⅲ－1期に位置づけられる。

SK8087

91C区の中央部に所在する長径3.1m以上×短径1.9m以上の不定形の土坑であり、SD8018埋没後に掘削されていた。土坑の中から人骨などが出土した。共伴遺物は存在しない。

C 土坑Ⅱ類

SK4499

90B区の南部に位置する土坑で炭化物や焼土が比較的多量に入っていた。長径が5.72mの楕円形(隅丸方形)で壁面が比較的直立していた。貯蔵施設の可能性も考えられよう。

SK5200 (第58図)

62C区に所在し、旧五条川NR4001に接続する土坑である。直径8～10m前後のほぼ円形の平面プランを持ち、最下層は湧水層まで達していた。多量の木製品なども出土した。城下町期Ⅰ期に属する。

SK6143・SK6146

91A区中央部に位置する土坑で、平面規模はそれぞれ7.60m×4.82m以上、6.75m×5.15mである。埋土は褐色砂質土で、出土遺物はきわめて少ない。

SK6151

91A区南部に所在する土坑である。長径11.88m×短径10.47mの不定形の平面プランを持ち、深さは0.85mを測るが、実際には複数の土坑が複雑に切り合い、結果として巨大な土坑SK6151となっているようである。土坑からは多量の遺物や炭化物が投棄されており、ゴミ穴として何回か掘削したものと考えられよう。天正地震直後に造成された整地層の上面から掘削されたこと・SK6151埋没後SB6012が築造されたこと・出土遺物の検討等から城下町期Ⅲ－1期に位置づけられる。

SK6570

91A区南部に位置する土坑で、SK6151の下層から検出された。平面規模は長径11.70m×短径10.03mを測る不定形の巨大な土坑で、深さは1.24mである。SK6151と同様、複数の土坑が複雑に切り合っており、多量の遺物や炭化物が投棄されており、何度か掘削が行われたものと考えられよう。天正地震直前の地表面(噴砂に覆われた遺構面)から掘削されたこと・SK6151が上位に存在し、そのあいだの一部に天正地震による噴砂が挟まれていること・出土遺物の検討等から城下町期Ⅱ－2期に位置づけられる。従って、SK6151とSK6570は天正地震(1586年)を挟んで相前後する年代が付与できる一括資料となっている。

SK7327

91B区の南端部に位置する一辺が9m以上の土坑である。平面形は西端部に張り出しを持つ洋梨形を呈する。炭化物とシルトが互層となって堆積し、多数の遺物が出土した。これらの遺物から城下町期Ⅲ期に属する。

SK8076 (第89図)

91C区の中央部の西端で検出された隅丸長方形の平面プランを持つ土坑である。ここからは土器類の他に、拳大の自然石や微細な骨片等が散乱した状態で出土している。出土遺物から城下町期Ⅲ－2期に属する。

D 土坑Ⅲ類

SK7029 (写真図版)

61C区・61D区で検出された大規模な方形土坑で、西部をSD7005で切られている。SD7004・SD7006・SD7007を切って掘削されていた。長径17.36m×短径7.47m以上の規模を持ち、深さは1.59mを測る。最下層で湧水が見られた。出土遺物から城下町期Ⅲ－2期に属する。性格は詳らかではないが、1620年に現在地に移転された「久証寺」建築に伴う遺構である可能性が指摘できる。また、ここからは鑄造に伴う遺物群も認められる。

SX8001 (第90図)

62D区・63D区にまたがって検出された巨大な土坑で、西部と北部は更に調査区外に広がっている。深さも1.4m以上を測り、最下層は湧水層に達していた。埋土は黒色粘土層・白色砂層・黄褐色シルト層が互層となって堆積していた。中からは瀬戸美濃窯産の陶器類をはじめ、土師器皿や骨片や円礫等が出土している。出土状況は礫・土師器皿は南部に集中するのに対し、陶器類は全体に互って出土している傾向がある。出土遺物から城下町期Ⅲ－2期と考えられる。

SX8003

62D区の南西部に所在する長径11.48mの方形土坑である。深さは1m弱を測り、底(床面)には小規模な溝が数条平行して走っていた。この土坑の埋積後にSB8001等が構築されていた。出土遺物から城下町期Ⅲ期に所属する遺構である。

(鈴木正貴)

註 (1) 梅本博志ほか(1987)「清洲城下町遺跡」『年報昭和61年度』(財愛知県埋蔵文化財センターによる。)



第89図 土坑実測図(1)



第90図 土坑実測図(2)

第10節 整地層

A 概要

城下町期の遺構の中には、盛土・整地を行った後に構築されたものがある。清洲城下町遺跡の整地層は、名古屋環状2号線建設関連の調査区で発見された中堀・内堀に伴うものが初例⁽¹⁾であった。この整地層は、厚さが最大1mを越えこの前後で前期と後期の時期区分を実施した点で極めて重要な成果であった。しかし、この整地層の意義を強調する余り、本遺跡において普遍的な存在であるかのごとく誤解される場合も見られた。整地層は戦国時代から近世初期の都市建設の研究において重要な視点となっている⁽²⁾ことも考慮して、ここでは節を改めて設定し整理しておきたい。なお、ここで言う整地はある程度広範囲に互って展開したものを指し、小規模な遺構を埋積した事例等は除外する。

清洲城下町遺跡では必ずしも全域に整地・盛土が実施されていたわけではなく、部分的に認められる存在である。また、時期によってもその状況が異なる場合もある。本遺跡で認められた整地層は、その周囲の状況から次のように区分できる。

整地層Ⅰ類——堀の掘削に伴って実施された整地・盛土。土塁の残欠部分もこれに該当する。

整地層Ⅱ類——低湿地などの居住不可能な地点を居住可能な地盤に変更するための整地・盛土。

整地層Ⅲ類——地震・火災・水害等の災害に伴って施された整地。

整地層Ⅳ類——前代の遺構（屋敷）等を廃絶して別の遺構（屋敷）等を建築する際に行われた整地。

これらの整地層がどのように分布しているか、以下に地区毎に状況をまとめる。

B 御園地区

御園地区の整地層は、89A区北半部でNR1001を整地した事例が存在するのみである。そのほかの地点（63R区・89A区南半部）では整地層は認められなかった。

NR1001整地層

この整地はNR1001をシルトや粘土で埋めて行われた。NR1001内の出土遺物の検討から城下町期Ⅲ期に実施されたと考えられ、その目的は居住可能な空間を拡大することにあつたと思われる。整地層Ⅱ類。但し、整地層上面の遺構はほとんど検出されず、整地後の状況は明確ではない。

C 本丸地区

本丸地区の整地層は、溝状遺構を埋積した事例が存在するものの、果してこれがどのような背景で整地されたものかは明らかではない。SD2001～SD2004の埋土はシルトの斑土となっており、一気に埋め立てたものと判断できよう。

D 田中町地区

田中町地区には整地層は存在しない。

E 五条橋地区

五条橋地区の整地層は、①旧五条川NR4001に伴うもの・②61A区等に展開する焼土層・③63C区北

半部の中堀SD6001に伴うものがあるが、いずれも整地層の全体像を明確に把握できない。

NR4001整地層

NR4001の埋積の大部分は河川による堆積物で行われているが、部分的に人為的な盛土と思われる層序が認められた。90B区断面観察によれば、標高3.5m～4.0mの範囲で斑土や砂等が互層に堆積して突き固められていた。互層の中位から掘り込まれた遺構も存在し、何度かに互って整地が繰り返されたことが判明している。各々の詳細な時期は特定し得ないが、城下町期Ⅱ期からⅢ期にかけて行われたものと考えられ、居住域の拡大を図った整地層Ⅱ類に属する事例と思われる。

焼土層

61A区・93A区・90B区・92E区で確認された標高約4.0mのレベルに所在する整地層である。黄褐色シルトの斑土に焼土ブロックが多量に混入した堆積物で構成され、層厚は最大20cmを測る。焼土層とはいえ、当時の地盤が直接被熱されたものではなく、その後地均しを実施したものと考えられる（整地層Ⅲ類）。この焼土層は別の調査区でも検出されており、城下町期Ⅱ期に位置づけられよう。

63C区整地層

63C区の北半部に展開する整地層で標高2.0mの高さから堆積している。整地層直下に天正地震の噴砂が広がっており、城下町期Ⅲ－1期に位置づけられる。この整地層の広がりや層厚等は明らかではない。中堀SD6001の掘削に伴ってそこから搬出された土壌を盛った可能性があり、整地層Ⅰ類に属するものと考えられよう。また、出土状況は不明であるが90C区の南東端部の壁面が調査時に崩落した際に瓦がまとまって出土しており、この整地層に関係する資料の可能性が考えられる。

F 本町地区

本町地区の整地層は広範囲に行われたと思われ、城下町期の整地層は2層確認された。

本町地区整地層Ⅰ層

この整地層は、91A区で顕著な形で確認され、おそらく61B区・89B区・89E区にも存在したと推定されている。地山のシルト層上面からシルト斑土を使用して層厚30cm以上整地し、またSD6023・SD6048・SD6068等の主要な遺構を埋め立てている。整地層直上面には礎石建物等が構築され、天正地震による噴砂で覆われていた。城下町期Ⅱ－2期（この中でも比較的後期）に位置づけられる。区画溝を廃絶して改めて建物等を建築していることから、整地層Ⅳ類に分類できよう。

本町地区整地層Ⅱ層

この整地層も、91A区で顕著な形で確認され、おそらく61B区・89B区・89E区にも存在したと推定されている。本町地区整地層Ⅰ層の上面に整地され、この層の間に天正地震による噴砂の層が展開している。従って城下町期Ⅲ－1期に位置づけられる。この整地層はシルト斑土と砂を用いて実施されている。整地後は、整地前と同様に、礎石建物や井戸が構築されており、遺構の展開状況は整地前後と余り変更は認められない。従って整地層Ⅲ類に比定できよう。

G 南部地区

南部地区の整地層は、地山となる砂層の落込み部分にシルト斑土・砂質土を盛って整地したものが存在する。溝Ⅱ類などがこれに該当するものである。整地層以前ではほとんど遺構が展開しない場合

が多く、整地がなされた後に井戸や区画溝が設営されていることから、この地区の大半の整地層が整地層Ⅱ類に属するものである。

SX7005

89D区の中央部に所在する不定形の土坑であるが、掘形は極めて浅く自然に形成された落込み（凹地）であったと思われる。これを灰色シルト斑土で埋積した後、SD7013やSE7015を掘削している。出土遺物からみて城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

H 小結

以上の結果とこれまで報告された成果をまとめると次のように整理される。

整地層Ⅰ類——総構えの堀に接する地点で、沼沢地を埋め内側に盛土を行っている。城下町期Ⅲ期。

（『清洲城下町遺跡Ⅱ』SD39・SD52・『朝日西遺跡』SD222・『本書』SD6001）

整地層Ⅱ類——遺跡の北部・南部の地山が砂地となる地点で顕著に認められる。城下町期Ⅲ期。

（『本書』NR1001整地層・南部地区）

また、旧五条川河岸部でもこの事例がある。城下町期Ⅰ期～Ⅱ期。

（『本書』NR4001整地層）

整地層Ⅲ類——遺跡の中央部付近で顕著に認められる。時期的には偏りが認められない。

（『清洲城下町遺跡Ⅲ』焼土層・『本書』五条橋地区・本町地区整地層Ⅱ層）

整地層Ⅳ類——遺跡の中央部で顕著に認められ、区画溝を埋積するが多い。城下町期Ⅱ～Ⅱ期。

（『清洲城下町遺跡』63F・63K区・『本書』本町地区整地層Ⅰ層）

このような結果をもとに、整地層のあり方から遺跡の画期を考えると、次のようにまとめられる。

画期A——城下町期Ⅰ～Ⅱ期。

整地層Ⅱ類によって旧五条川河岸部で居住域を拡大した。

画期B——城下町期Ⅱ～Ⅱ期。

整地層Ⅳ類によって以前の空間構成を廃絶し新たな遺構展開を実施した。

遺跡の中央部（田中町地区・本町地区）に見られる。

画期C——城下町期Ⅲ～Ⅰ期。

整地層Ⅰ類・整地層Ⅱ類によって新たな区画意識の創出と居住域の拡大を図った。

遺跡の周縁部（御園地区・南部地区・朝日西地区）に顕著である。

- 註 (1) 梅本博志(1986)「清洲城下町遺跡」『年報昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
(2) 前川要(1991)「地割論—近世城下町成立期における盛土整地の意義—」『関西近世考古学研究Ⅰ』
(3) 鈴木正貴他編(1994)『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集

第Ⅳ章 城下町期の遺物

第1節 出土遺物の概要と分析方法

A 遺物の概要と整理方針

今回の調査で出土した城下町期の遺物は数十万点（27ℓ入コンテナで約1000箱）を数え、内容も種類も多岐に亙る。こうした膨大な遺物を報告するに当たり、全出土遺物の図化による資料紹介が理想であると思われるが現実的ではない。かといって、代表的な遺物の資料紹介に留まった報告のあり方も、その背後に膨大な未掲載資料がある点で問題がないわけではない。

専門的な物資の生産者・生産集団が登場し、この物資を消費地に運搬して利用する形の生活が行われるようになった城下町期のような時代を考古学的に検討する際には、生産・輸送・消費という3つの要素に対する観点を持って行われるべきものであろう。従って、基本的には大消費地遺跡としての性格を持つ清洲城下町遺跡の出土遺物の検討に当たっては、各時期・各地点において、どの生産地の、どの製品が、どれくらいの量で、どのように使用され、どのように廃棄されたかが問題となる。ここでは、このような問題意識を背景に、出土遺物の分類と各々の出土量の提示を試みた。（なお、2年間の整理期間を確保しながらも、残念ながら全出土資料の数量化は果たし得ず、一部未分析のままこの報告に至ったことをあらかじめ断っておく。）

上記の分析目的を達するため、整理に当たっては大まかに次の手順を踏んだ。

- ① 遺物を材質（陶磁器・土器、瓦、木製品、石製品、金属製品、ガラス製品、自然遺体）で区分する。
- ② 遺物を大時期区分（城下町期以前・城下町期・宿場町期）に区分する。

（但し石製品、金属製品等のような編年的研究が存在しない、またはその位置づけが流動的な製品については遺構の時期区分によった。従って、選別が完全とは断定できない。）

- ③ 遺物をあらかじめ設定した分類別にカウントする。
- ④ カウントと同時に、一括性の高い遺構出土資料を抽出し、図化する。
- ⑤ また、それ以外の遺物の中で資料的に特殊なものを抽出し、図化する。

このような経過を経て得られた成果を、以下の3点に集約して遺物の報告としたい。

- a 編年や時期別組成等を問題点に据えた一括資料の紹介（本章第2節）。
- b 出土量が少量であるものの、出土したことに意味を持つ資料の紹介（本章第3節）。
- c 地点別の遺物組成の問題をにらんだ出土量の把握（本節および本章第3節）。

B 分析の方法

今回の整理作業で用いた資料操作の過程を示す。

① 遺物の図化

整理担当の調査研究員が、資料の多様性を表現することを念頭におきつつ掲載図版の分量を考慮して必要と認めた遺物を抽出し、整理補助員がこれを図化（実測）した。大量に出土した同一分類の資料については割愛する等したため、抽出が恣意的になったことは否めない。図化図面は調査研究員が原則として点検を行ったが、一部はその限りでない。製図作業（トレース）も大半は整理補助員が行った。

② 遺物のカウント

今回実施した遺物のカウントは、調査区別の様相の差異を明確にするために行っている。従って、材質・産地別で遺存状況や分類等が相違するためその方法が異なる場合が生じたが、目的は数値自体よりも他との比較であることを強調しておきたい。以下に材質・産地別に分析の方法を提示する。

a 陶磁器・土器類（瓦を除く）のカウント

陶磁器・土器類のカウントは、破片数（接合前）と口縁残存率（12分の1単位）を求めることにした。このため、以下の手順を経て実施した。なお、分類の詳細は項目を改めて記載する（本節第D項）。

第1手順 データの収集

整理担当の調査研究員が設定した分類案をもとに、主に整理補助員が遺物のデータを記録用紙に記入した。実施に当たり一定期間の整理補助員の勉強会を経て行い、作業途中で生じた問題点はその都度改善・変更した。データ収集の対象と記入方法は以下の通りである。

- ・遺物収納袋（遺構・グリッド別）毎に簡単に接合作業を実施した後、口縁部の有無で区分する。
- ・口縁部を有するものは、接合後の破片1点につき1データずつ記入した。
- ・口縁部を持たないものも、基本的には破片1点につき1データ設定した。

（ただし、煩雑となる場合には全く同一のデータ内容を持つ破片を合計して1データとしている。）

- ・長辺が1cm以下の小破片は、原則として分析対象から除外した（本節第C項を参照）。

第2手順 データの入力

整理担当の調査研究員がパーソナルコンピューターを用いて表計算ソフトに入力した。入力と同時に記録用紙の校正・点検も行った。調査区別にファイルを作成し、1ファイルに500データ以下を入力した。

第3手順 データの集計

入力されたデータを用紙に打ち出し再校正を行った後、設定した集計項目に則りパーソナルコンピューターによる計算作業を実施した。計算は1ファイル毎に行い、これらのデータを集積して編集した。

1 データの内容の詳細

データ収集における1データの内容は、①調査区、②グリッド、③遺構番号、④材質・産地、⑤器類、⑥器種、⑦器形（口縁部）、⑧器形（底部）、⑨釉薬、⑩口縁部残存率、⑪口径、⑫使用痕、⑬破片数、⑭備考の14項目である。このうち④材質・産地、⑤器類、⑥器種、⑦器形（口縁部）、⑧器形（底部）、⑨釉薬、⑫使用痕は設定された分類案の記号を記入する。また、⑬破片数は接合前の破片の総数を数値で記入し、⑭備考は特記事項を言葉で記入した。

ここで、⑩口縁部残存率と⑪口径の算定方法について更に詳述する。今回の分析で実施した口縁部計測法は、口径の算定も同時に行う形で、以下の手順を経ている。

- ・対象資料は、口縁部を持つもの全てであるが、鈴・形代・陶丸・鍾・トチン等は計測不能とした（破片数のみで表現している）。

- ・単位は、口縁部が完存した場合を1として遺存している口縁部の割合を12分の1単位で計測した。

小破片の資料化も試みたため、12分の1以下を切り上げて算定している。つまり具体的には、12分の

0より大きく12分の1以下の破片を1、12分の11より大きく12分の12以下の破片を12としたのである。

・計測器具は、直径を1cm単位ずつ拡大した同心円とその中心から放射状に12等分した直線（角度は30°づつ）を、白または透明の用紙に印刷したものを計測器として用意する。

・計測方法は、接合作業を実施した後の口縁部残存資料を1点ずつ、計測器具に口縁部を当てて、口縁部の曲線と同心円の曲線が重なる部分を捜し出す。丁度重ならない場合はより近似した曲線を求め、求めた同心円の直径が口径（mm単位は四捨五入）となる。また、口縁部の長さが、その口径の位置で放射状に12等分された区画の何個分に相当するか切り上げて算定すると、これが口縁部残存率の数値となる。

・口径の算定が困難な小破片の場合は、口径不明とした。口縁部がゆがんでいる場合は、ゆがんでいなかった場合を想定して平均値を求めた。平面形が方形の場合は一辺を4分の1に換算して計算した。注口を持つ製品は口縁部が2ヶ所存在するが、注口の口縁部は計測から除外した。

b 瓦のカウント

瓦は分類別に破片数と重量を算定した。個体数算定の方法には他に、端面の長さの計測や四隅のカウント等が考えられるが、量的に少なくしかも小破片が多いこと等からこれらの方法は採用しなかった。具体的な方法は以下の通りである。

遺物収納ビニール袋（調査区・遺構・グリッド別）毎に各分類の重量と破片数を記録用紙に記入した。分類の項目は器種・調整痕・使用痕である。器種は丸瓦・平瓦・棧瓦・その他と区分した。調整痕は銀化・コビキA・コビキB・タタキの有無を記号化して記入した。使用痕は陶磁器・土器類と同曲物桶や木胎漆器碗等が、様々な状況で粉々に破損した場合には、資料のまとまりを1点と算定することとした。

c 木製品のカウント

木製品は分類別に破片数を算定した。木製品は、種類が豊富で遺存状況が特殊であることから破片数のみにとどめた。具体的な方法と基準は、以下の通りである。

遺物1点につき調査区・遺構・グリッド・器種・分量等を記入した。木製容器については、本来は陶磁器・土器類と同様に口縁部計測法による数値を算定したいところであるが、概して口縁部の遺存状況が不良であるためそれは困難であった。むしろ体部以下が完存するケースが多く、遺存個体数が求める個体数と余り変わらない数値と考えられる。従って、出土した時点では明らかに1個体であった曲物桶や木胎漆器碗等が、様々な状況で粉々に破損した場合には、資料のまとまりを1点と算定することとした。

d 石製品のカウント

石製品は分類別に破片数を求めた。この方法を採用した理由は、大半の石製品は小破片に破損するケースが少ないからである。

具体的な方法は、遺物1点につき調査区・遺構・グリッド・器種・材質等を記録用紙に記入し、その後、調査区別・遺構別に集計した。

e 金属製品のカウント

金属製品は破損せず、ほぼ完存する場合が多いため、分類別に破片数を求めた。

具体的な方法は、遺物1点につき調査区・遺構・グリッド・器種・材質・法量等を記録用紙に記入し、その後、調査区別・遺構別に集計した。

f 自然遺体のカウント

自然遺体は、分類別に破片数と部位の同定可能な範囲における完存の個数を求めた。

具体的な方法は、調査区・遺構・グリッド別に各分類の個数（破片数）を記入した。分類は種・部位の2項目を設け、個数は破片数と完存の個数を記載した。

C 分析の問題点

上記の資料操作における問題点と算定した数値の信憑性について検討する。

数値の信憑性に対する問題点として、①遺物採集時のサンプリングエラーの問題、②分類体系と識別の問題、③計測方法の信憑性の問題が挙げられる。

① 遺物採集時のサンプリングエラーの問題

本遺跡の発掘調査は、第I章でみたように、遺物のカウントを前提とした遺物の取り上げ方をしていない。前項で長辺が1cm以下の小破片は原則として分析対象から除外したのは、主にこの点を考慮したためである。

② 分類と識別の問題

産地同定や器種分類等は、研究の進捗や担当者の目的・技量に大きく左右される。また、実際の作業は複数の整理補助員によっていることから、分類の統一性や適用の妥当性が問われる。万人に分かる分類の明確な基準と目的を如何にして作成するかが、こうした研究方法の成否を占うであろう。

③ 計測方法の信憑性の問題

破片数・口縁部残存率は本来の個体数ではない。従って、計測方法が異なれば数値は変動する。これは、口縁部計測法分析でもその具体的な方法によっては同じ資料を用いても数値が異なってしまうことがある⁽¹⁾ことに顕著に示される。我々は求められた数値はあくまで相対的な数値であることを認識しなければならない。

以上のように、今回の資料とカウントによる分析方法には、その結果の妥当性に対して否定的な要因が多数存在する。しかし、これらの誤差は今回取り扱う調査区全てに同じように存在すると考えられることから、相対的な検討（比較）についてはある程度許容されよう。また絶対的な数量の問題についても桁が異なるような差異が認められる場合には、その差は有意なものと判断できる。

D 陶磁器・土器類の分類

清洲城下町遺跡から出土した陶磁器・土器類を6つの分類のランク（材質産地・器類・器種・器形（口縁部）・器形（底部）・釉薬）で区分した。なお、この区分は、小破片の遺物も可能な限り資料化する目的で設定されており、遺存状態が良好な資料をもとに作成されたこれまでの分類とは若干異なる⁽²⁾。例えば、瓶と壺は本来器類として分類したい所であるが、小破片では区分が困難であり器類不

明となる。しかし、小破片であっても厚さや釉の掛かり方から碗や皿とは明確に区分できるのであり、この点を重視して、大形製品といった器類を設定している。以下にその概要を記す。

① 材質・産地

胎土と焼成技法から陶磁器・土器類は以下の7類に区分する。

- 1 瀬戸美濃窯産陶器——白色の胎土を基本とする瀬戸・美濃の窯で生産されたと思われる陶器。
- 2 土師器——黄褐色の胎土を基本とする素焼きの土器。
- 3 瓦器——白色の胎土を基本とし、表面をいぶして作られた土器。
- 4 常滑窯産陶器——黒灰色または褐色の粗い胎土を基本とする常滑窯で生産された陶器。
- 5 唐津窯産陶器——黒灰色または褐色の胎土を基本とする唐津窯で生産された陶器。
- 6 中国窯産陶磁器——白色のきめの細かい胎土を基本とした磁器・稀に陶器をさす。
- 7 その他——楽・信楽・越前・備前・朝鮮・タイ等の産地の製品や産地不明のもの。

この類については別途の一覧表を作成した。

② 器類

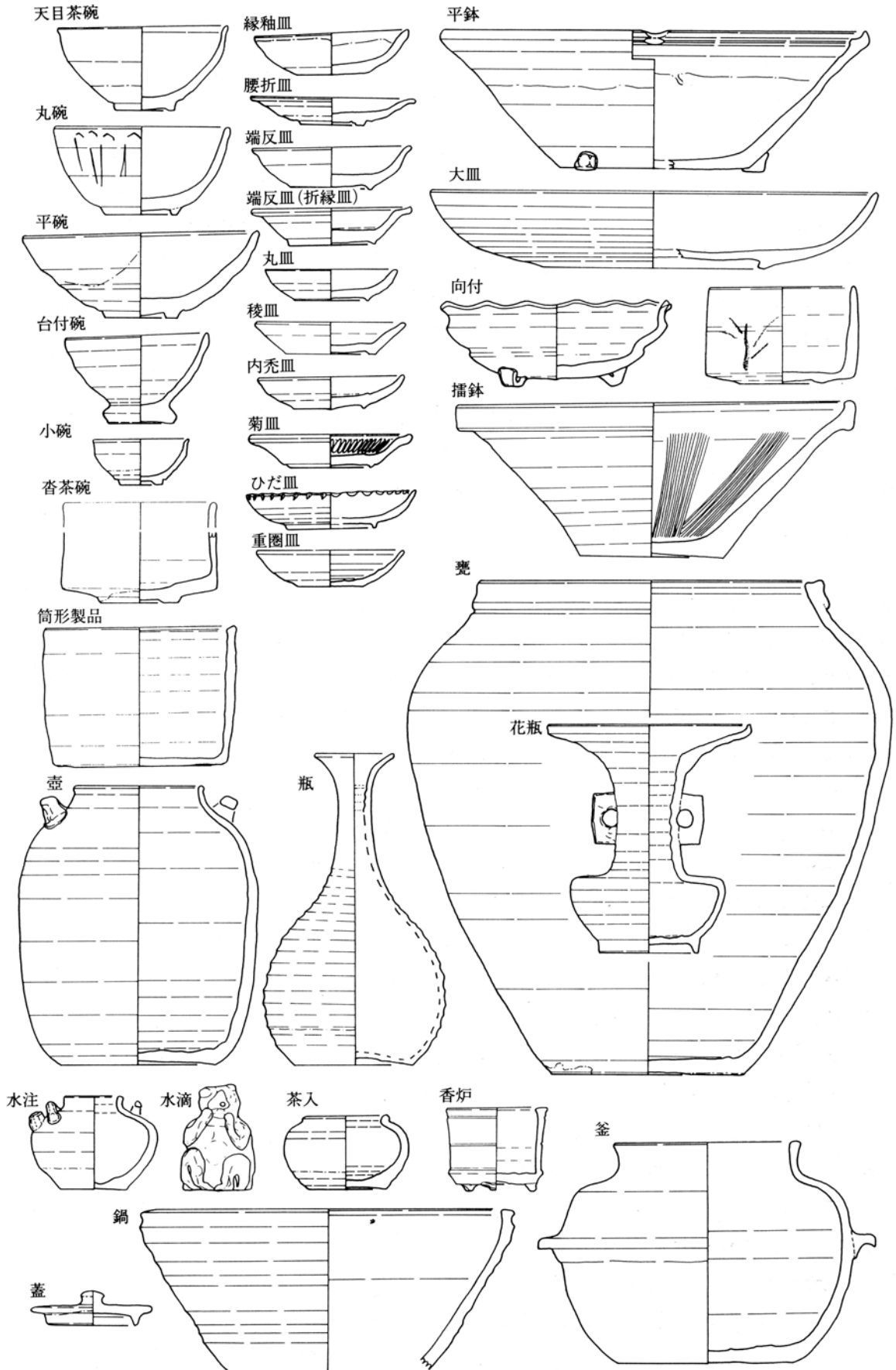
分量と全体のプロポーシヨンのみで陶磁器・土器類全体を区分すると、a 碗類（小形で口径と器高が類似）、b 皿類（小形で器高が浅い）、c 鉢類（大形で逆ハの字状に開く）、d 大壺類（大形で体部が袋形になる）、e 大瓶類（大形で口径が小さい）、f 筒形製品類（体部が筒状に直立）、g 小壺類（小形で体部が袋形になる）、h 小瓶類（小形で口径が小さい）に区分できる。但し、この区分はd 大壺類とe 大瓶類とf 筒形製品類の分類等が、小破片では困難である。また、清洲城下町遺跡の遺物で主体となっている播鉢や鍋がこの分類では抽出できなくなる恐れがある。このような理由から、本来の器類という分類の原則からはやや逸脱するが、以下の10類に区分することにした。

- 1 碗——口径10cm前後、器高7cm前後の小形容器。
- 2 皿——口径10cm前後、器高2cm前後の浅い小形容器。
- 3 浅鉢——口径25cm前後で逆ハの字状に開くものと向付と呼ばれる小鉢状のものを一括。
- 4 播鉢——内面に播目を持つ口径25cm前後で逆ハの字状に開く大形容器。
- 5 大形製品——筒形・袋形の形状をし、底径が10cm以上の容器。
- 6 小形製品——袋形の形状をし、底径が10cm以下の容器。
- 7 香炉——筒形の容器に脚がついたもの。
- 8 鍋・釜——煮沸・煮炊に使用されたと思われる浅鉢・大形製品を特に区分する。
- 9 その他——蓋・煙管・鈴・形代・陶丸・錘等上記の分類に当てはまらないもの。
- 10 不明——器類が不明となるもの。

器種・器形——各々の産地・材質や器類によって個別に細分類している。出土量が少ない器類については個別の細区分を行っていないものもある。ここでは主要な産地・材質と器類についてのみ内容を記述し、実際に実施した分類案のうち一部を割愛した。

瀬戸美濃窯産陶器碗（1：1）

- 1 天目茶碗——高台を削り出し逆ハの字状に開き、口縁部が屈曲する碗。
口縁部1類——口縁部が短くくびれる。
口縁部2類——口縁部が直立し口唇部が玉縁状になる。



第91図 瀬戸美濃窯産陶器器種分類 (S=1/4)

口縁部 3 類——口縁部が直立してやや外反する。

口縁部 4 類——口縁部が大きくくびれ、S 字状になる。

口縁部 5 類——口縁部がややくびれ直立する。

口縁部 6 類——口縁部の直立部分の高さが高い。

底部 1 類——高台幅が広い輪高台で、体部下半部に錆釉（化粧掛け）を施したもの。

底部 2 類——高台幅が狭い輪高台で、体部下半部に錆釉（化粧掛け）を施したもの。

底部 3 類——高台が内反高台で、体部下半部に錆釉（化粧掛け）を施したもの。

底部 4 類——高台が輪高台で、錆釉（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。

底部 5 類——高台が内反高台で、錆釉（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。

底部 6 類——高台が高い輪高台で、錆釉（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。

2 丸碗——高台を削り出し腰が張る形で開き、口縁部が直立する碗。

口縁部 1 類——口縁部が直立し、体部外面に剣先状の蓮弁紋が施されたもの。

口縁部 2 類——口縁部が直立し、体部外面に直線状の蓮弁紋が施されたもの。

口縁部 3 類——口縁部がやや外反するもの。

口縁部 4 類——口縁部が直立し、体部外面に蓮弁紋等が施されないもの。

3 平碗——高台を削り出し体部から口縁部にかけて逆ハの字状に開く碗。

4 台付碗——底部は広く台状に外に作られ逆ハの字状に開く碗。仏供とも呼ばれる。

底部 1 類——外に広げられた底部の台の下に高台を作るもの。

底部 2 類——外に広げられた底部の台の下に高台がないもの。

底部 3 類——外に広げられた底部の台が退化してなくなったもの。

5 小碗——口径が 8 cm 以下の碗。

口縁部 1 類——口縁部がくびれるもの。天目茶碗の小形製品。

口縁部 2 類——体部から口縁部にかけて大きく外反するもの。小杯。

口縁部 3 類——口縁部が直立するもの。丸碗の小形製品。

6 杓茶碗——腰が著しく張り、一般にロクロ引きしない碗。

瀬戸美濃窯産陶器皿（1：2）

1 縁釉皿——口縁端部のみに釉薬が掛かる皿。

口縁部 1 類——内面に卸目がなく、口縁部が直立または内彎するもの。

口縁部 2 類——内面に卸目がなく、口縁部が外反するもの。

口縁部 3 類——内面に卸目があり、一般に口縁端部に面を持つもの。いわゆる卸皿。

2 腰折皿——高台を削り出して口縁部にかけて強く外反するもの。体部外面下半は露胎となる。

3 端反皿——内面全体に釉薬が掛かり、口縁部が外反する皿。

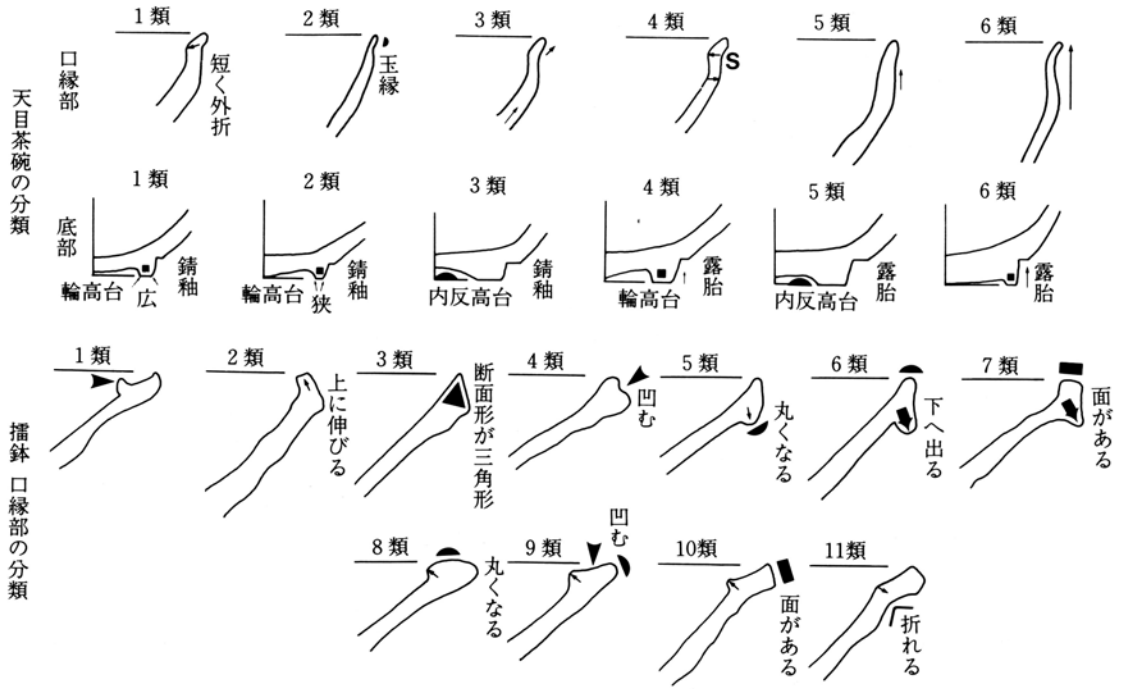
口縁部 1 類——体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部が僅かに外反する通常の端反皿。

口縁部 2 類——口縁部は外方へ強く屈曲し、端部で上方に短く立ち上がる折縁皿。

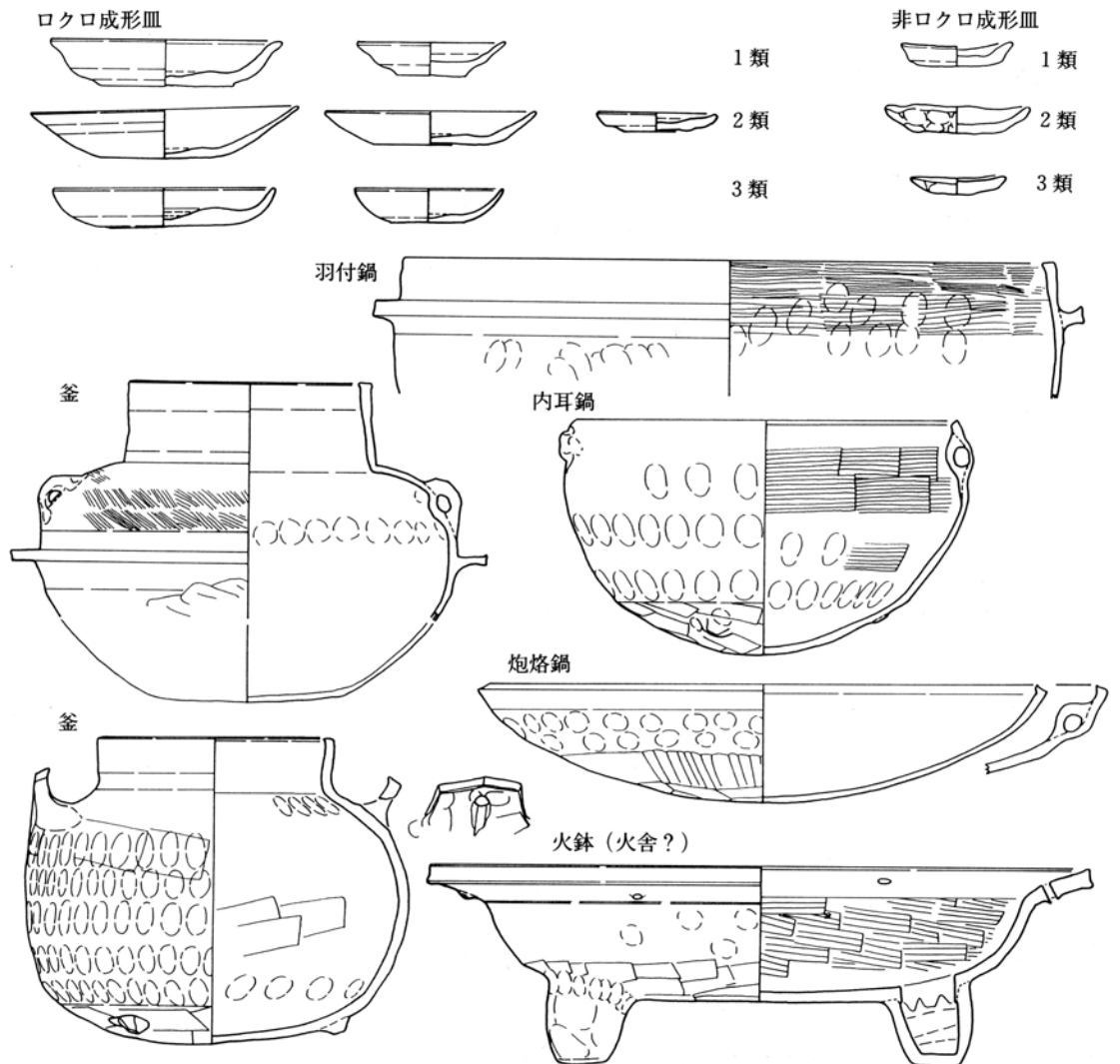
4 丸皿——内面全体に釉薬が掛かり、体部は丸みを持って立ち上がり、内彎する皿。

5 稜皿——体部は高台から直線的に開いて立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する皿。

6 内禿皿——内面中央（見込み部）に釉薬を掛けない皿。（但し、菊皿を除く。）



第92図 天目茶碗・搗鉢器形分類



第93図 土師器器種分類 (S=1/4)

口縁部1類——体部が丸みを持って立ち上がり内彎するもの。

口縁部2類——体部は丸みを持って立ち上がり口縁部が僅かに外反するもの。

口縁部3類——口縁部は外方へ強く屈曲し、端部で上方に短く立ち上がる折縁のもの。

7 菊皿———菊花状に作りをなしている皿。

口縁部1類——花卉表現に丸ノミを使用し、内面全体に釉葉が掛かり、内彎するもの。

口縁部2類——花卉表現に丸ノミを使用し、内面中央に釉葉が掛からない、内彎するもの。

口縁部3類——花卉表現に丸ノミ、内面全体に釉葉が掛かり、口縁部が折縁となるもの。

口縁部4類——花卉表現に丸ノミ、内面中央に釉葉が掛からない、口縁部が折縁となるもの。

口縁部5類——花卉表現が型打ちで、口縁端部まで花卉表現されるもの。

8 稜花皿———口縁部を外反させ花卉状に切り取るもので、通常内面に波状紋を描くもの。

9 ひだ皿———口縁部が外反し、口唇部をひだ状にした皿。

10 重圈皿———内面に凹線または凸線の同心円紋または螺旋状紋がつく皿。

口縁部1類——内面に凹線の螺旋状紋が付き、口縁端部が内彎するもの。

口縁部2類——内面に凹線の螺旋状紋が付き、口縁端部が直線状に伸びるもの。

口縁部3類——内面に凸線の同心円紋が間隔広く付くもの。

口縁部4類——内面に凸線の同心円紋が間隔狭く付くもの。

11 挟み皿———平底で釉葉を掛けずに焼き締まった皿。

皿全体について底部を以下のように分類した。

底部1類——平底。高台を持たないもの。

底部2類——付高台。平底に粘土紐をつけて高台とするもの。

底部3類——削り出し高台。高台内外を削り取って高台とするもの。

底部4類——碁笥底。高台内を削り取って高台の形態とするもの。

瀬戸美濃窯産陶器浅鉢（1：3）

1 平鉢———体部が逆ハの字状に開きやや深い鉢。

2 大皿———体部が逆ハの字状に開き、底径が大きく浅い鉢。

3 向付———体部が直立したり、平面形が円形にならない、小形の鉢を総称する。

上記の碗・皿・平鉢・大皿に当てはまらない口が開く小容器。

瀬戸美濃窯産陶器搦鉢（1：4）

器種の区分は存在しない。

口縁部1類——口縁部の内側に突帯が巡るもの。

口縁部2類——口縁端部を内側に屈曲させ、上方に伸ばしたもの。

口縁部3類——口縁端部に面を持ち、断面形が三角形になるもの。

口縁部4類——口縁端部に凹線状のへこみが巡るもの。

口縁部5類——口縁端部を外側に折り返し、玉縁状に丸くなるもの。

口縁部6類——口縁端部を外側に折り返して縁帯を作り、上端部が丸まっているもの。

口縁部7類——口縁端部を外側に折り返して縁帯を作り、上端部が平らな面となるもの。

口縁部8類——口縁部に内傾するやや幅広な平坦面を持ち、その平坦面が丸みを持つもの。

- 口縁部9類——口縁部に内傾するやや幅広な平坦面を持ち、その平坦面がへこむもの。
 口縁部10類——口縁部の内傾する平坦面直下に段を持ち、上端部が平らな面を持つもの。
 口縁部11類——口縁部の内傾する平坦面直下に段を持たず、屈曲する形態となったもの。

瀬戸美濃窯産陶器大形製品（1：5）

- 1 筒形製品——円筒状の体部を有する鉢。
 - 口縁部1類——口縁端部が丸く納まるもの。
 - 口縁部2類——口縁端部に平らな面があるもの。
 - 口縁部3類——口縁端部の内側がやや張るもの。
 - 口縁部4類——体部外面にタガの文様を模倣した突帯がつくもの。
 - 口縁部5類——口縁部が外に折れるもの。
 - 口縁部6類——口縁端部の外側がやや張るもの。
- 2 壺——体部が袋状の形態をなし、口径がやや大きい大形製品。
 - 口縁部1類——口縁部が外側に丸く突出するもの。通常四個の耳がつく。
 - 口縁部2類——口縁部が外側に張り出し口縁上端部が平らなもの。通常双耳壺となる。
 - 口縁部3類——口縁端部が直立するもの。通常双耳壺となる。
 - 口縁部4類——口縁端部に内傾する面を持つもの。通常双耳壺となる。
- 3 瓶——体部が袋状の形態をなし、口径が小さい大形製品。徳利。
 - 口縁部1類——口縁部が外側にラッパ状に開くもの。
 - 口縁部2類——口縁部が受け口状になるもの。
 - 口縁部3類——口縁部が受け口状になり、端部が直立して伸びるもの。
 - 口縁部4類——双耳瓶となるもの。
- 4 花瓶——体部が袋状の形態をなし、口縁部がラッパ状に大きく開くもの。
- 5 甕——体部が袋状の形態をなし、口径が大きい大形製品。

瀬戸美濃窯産陶器小形製品（1：6）

- 1 水注——体部が袋状の形態をなし、注口と双耳を持つ小形製品。
- 2 水滴——体部が袋状の形態をなし、注口を持つ小形製品。耳は存在しない。
- 3 茶入——体部が袋状の形態をなし、注口と双耳を持たない小形製品。

瀬戸美濃窯産陶器香炉（1：7）

器種の区分は存在しない。

- 口縁部1類——体部が一旦内側に屈曲するもの。いわゆる袴腰型。
- 口縁部2類——体部が直立し口縁部が内側に張り、外面に沈線による文様がないもの。
- 口縁部3類——体部が直立し口縁部が内側に張り、外面に沈線による文様があるもの。

瀬戸美濃窯産陶器鍋・釜（1：8）

- 1 釜——体部が袋状の形態をなすもの。
- 2 鍋——体部が鉢状に開くもの。

土師器皿（2：2）

- 1 ロクロ成形——底部に回転糸切りの痕跡が残存するもの。ロクロ（回転台）成形。

口縁部1類——口縁部が外反するもの。

口縁部2類——口縁部が直線的に伸びるもの。

口縁部3類——口縁部が内彎するもの。

2 非ロクロ成形—底部に回転糸切りの痕跡が残存しないもの。手づくね・内型成形。

口縁部1類——口縁部の外面にヨコナデを施して体部を作るもの。

口縁部2類——口縁部の外面にユビオサエして体部を作るもの。

口縁部3類——体部を立ち上げないもの。ヨコナデを施さないもの。

土師器鍋・釜（2：8）

1 羽付鍋——半球型の鉢で鐏があるもの。

2 内耳鍋——半球型の鉢で鐏がなく、内耳が付くもの。

3 炮烙鍋——極めて浅い鉢の形状をしたもの。

4 釜——口が狭められた袋状の壺の形状をしたもの。

釜は耳の形態と鐏の有無で細分が可能である。これらの要素を底部の器形に重複する形で

記入したが、本来的には適切な記入方法ではないと思われる。

底部1類——紐状の粘土を縦方向に張り付けた耳を持つもの。

底部2類——五角形の粘土板を張り付けて穿孔した耳を付けたもの。

底部3類——鐏を持つもの。

底部4類——鐏を持たないもの。

瓦器大形製品（3：5）

1 風炉——体部に窓を有する大形製品。

2 火鉢——体部に窓を持たない大形製品。

常滑窯産陶器大形製品（4：5）

1 甕——体部が袋状の形態をなし、口径が大きい大形製品。

2 壺——体部が袋状の形態をなし、口径がやや大きい大形製品。

釉薬

1 灰釉

2 鉄釉

3 長石釉

4 銅緑釉

5 無釉——焼き締めた無釉製品や土師器・瓦器もこれに該当する。

6 錆釉

7 黄瀬戸釉——緑釉のタンパンが存在するものとし、他は灰釉と取り扱う。

8 その他

この他にこの項目には中国製磁器について3分類、常滑窯産陶器に2分類を追加した。

9 青磁

10 白磁

11 青花

- 12 焼締——常滑窯産陶器の内、堅緻に焼き締まった黒灰色の胎土を持つ真焼の製品。
 13 赤物——常滑窯産陶器の内、焼きが若干甘く赤褐色の胎土を持つ製品。

使用痕

- 1 完形——全く破損していないもの。ゴミとして廃棄されなかったものと思われる。
 2 口欠——口縁端部のみが細かく欠けているまたは摩滅しているもの。
 3 穿孔——焼成後に孔を設けているもの。
 4 摩滅——容器の内部が摩滅しているもの。摺る行為が行われたと思われる。
 5 被熱——焦げて黒色化しているもの。火を利用した用途が考えられる。
 6 煤付着——煤が付着するもの。煮沸・煮炊に利用されたと推定できる。
 7 タール付着——口縁部にタールが付着したもの。灯明としての利用が想定される。
 8 鋳物付着——金属などが溶解した物質（スラッグ等）が付着したもの。
 9 墨書——墨による文字・記号・絵画が記されたもの。
 10 刻書——刻み込んで文字・記号・絵画が記されたもの。
 11 加工円盤——小破片を用いて円盤状に加工したもの。
 12 漆継ぎ——破断面に漆が付着したもの。破損した製品を漆で接合した痕跡である。
 13 不良製品——本来の製品が失敗したもの。

E 小結

以上の方法・分類によるデータ収集の労力と成果について簡単にまとめる。

所要時間と労力

先述した通り、今回の調査で出土した城下町期の全遺物のデータを取ることは不手際もあってできなかった。データ収集に動員した整理補助員は1日平均4人（実働時間1日約6時間）で、約150日間の作業を実施した。この結果、データ収集を完了した遺物の箱数は約500箱である。平均して1日1人で1箱弱を処理する計算となる。また、データ入力の作業量は調査研究員が1人で1日約2時間で約150日を要している。

成果

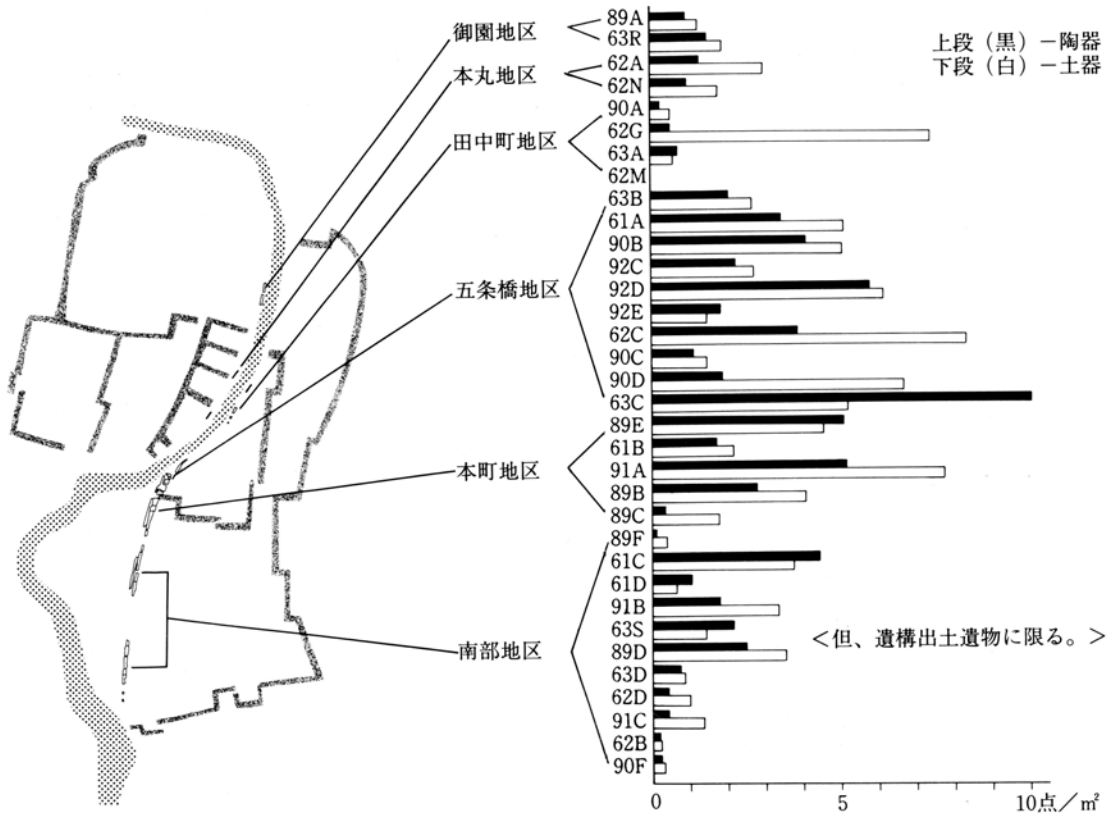
上記の方法・分類によるデータ収集の結果は、各々の項目の組合せによって多様な成果をもたらすものと思われる。例えば、灯明に使用された皿の法量との関係（使用痕7を検索して口径別出土量を算定）とか、加工円盤の素材別分布状況（使用痕11を検索して材質産地別出土量を算定）等が考えられよう。本書はこの多岐に互った成果を整理し終わることなく、ほんの一部を示したに過ぎない形で刊行に至ったが、今後様々な形で成果を提示したく思っている。（鈴木正貴）

註 (1) 川井啓介（1994）「遺物計測法に関する一考察」『室遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集。

(2) この時期の陶器を図書分類のように複数のレベルを組み合わせて記号化したものに井上喜久夫氏の分類がある。これは遺存状態が良好な資料をもとに作成された生産地側の立場から見た分類であり、本遺跡の分析に当たっては不都合な点が多かった。井上喜久夫（1989）「近世城館跡の陶磁ノート(5)」『研究紀要』愛知県陶磁資料館。また、消費地遺跡の立場からカウントを目的とした分類が、遠藤才文氏によって行わ

れている。遠藤才文（1993）「陶磁器類の分類と概要」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集。これは大分類項目に用途を設定している点に問題があると思われる。具体的な事例として皿を取り上げると、供膳具と調理具と灯火具との区分が出土状況や微細な形態等によって変動する可能性がある。従って、まず形による区分をした後に、使用痕等の分析を経た上で用途を考えるのが基本的な手順であろう。ただ、本報告でもこの点は完全に克服できていない。

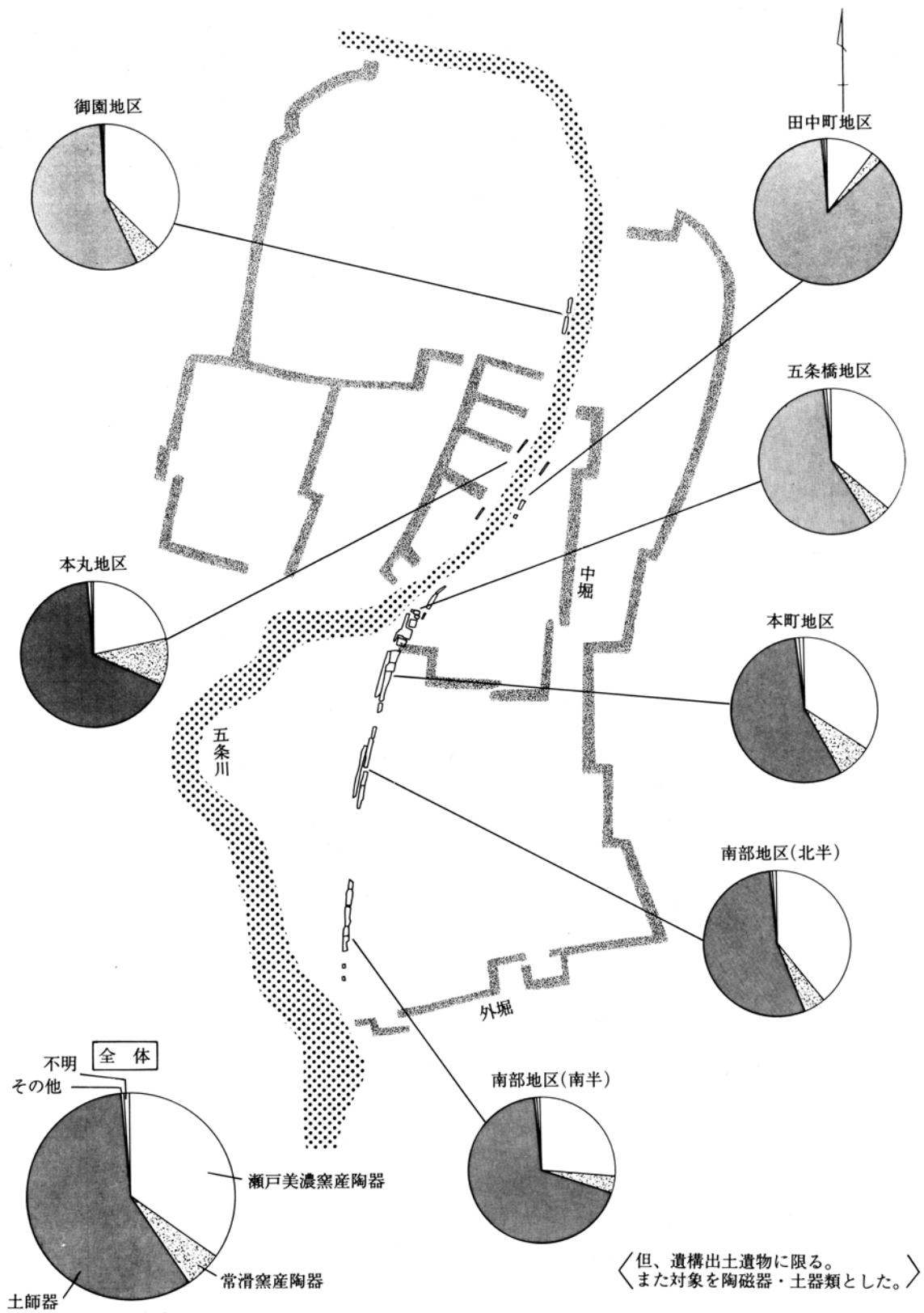
(3) 加納俊介氏は3階級（器類・器種・器形）からなる分類大系を提示した。加納俊介（1981）「弥生土器研究のための覚書 比田井氏の論文に接して」『考古学基礎論3』などによる。



第94図 調査区別 1㎡当たりの遺物出土量一覧（破片数）

註 以下の遺物実測図番号の右隣に付けられた記号は、産地・材質の略号である。

- | | |
|-------------|------------|
| 瀬——瀬戸美濃窯産陶器 | 朝——朝鮮窯産陶磁器 |
| 土——土師器 | 青——中国窯産青磁 |
| 凡 瓦——瓦器 | 白——中国窯産白磁 |
| 常——常滑窯産陶器 | 花——中国窯産青花 |
| 例 信——信楽窯産陶器 | 木——木製品 |
| 楽——楽窯産陶器 | 竹——竹製品 |
| 備——備前窯産陶器 | 石——石製品 |
| 唐——唐津窯産陶器 | 鉄——鉄製品 |
| | 銅——銅製品 |



第95図 地区別産地材質組成一覧

第2節 遺構出土一括資料

A NR4001出土遺物

NR4001出土遺物の内、特に天正地震による噴砂に覆われた堆積物から出土したと認定される90D区の出土資料をここで取り上げる。NR4001は下層から①砂混じりの青灰色粘土層、②植物遺体を含有する黒灰色粘土層、③青灰色粘土層、④灰色粘土層あるいはシルト層の順で堆積しているが、既に、これらの層毎に①層を5群、②層を4群、③層を3群、④層を2群、④層以上を1群（1群はNR4001出土資料ではない）として各々の陶磁器類を数量的に分析し一定の成果を得ている⁽¹⁾。また、木胎漆器についても資料を提示し、編年や紋様構成の分析が行われている⁽²⁾。今回の報告書作成に当たり、前回整理のために設定した範囲を広げ、また接合作業を層位を越えて実施した⁽⁴⁾。この結果、各層の間で接合される場合が多くみられることとなった。従って、図化資料は先の層による区分を踏襲したものの、数量的分析はその合計で表示することとした。

5群（砂混じりの青灰色粘土層出土遺物）（第96図 83～97）

木胎漆器碗・土師器皿・木製下駄等があり、陶器類はほとんど出土しなかった。83は宝珠紋等を組み合わせた紋様構成B類の漆器碗A類である。土師器皿は体部が直線的に伸びるロクロ成形のものとヨコナデを施した非ロクロ成形のものがある。95は木製の刃物の形代の鞘部と思われる。2枚の材を用いて作り、表面に厚く黒色漆が塗布されている。96・97は十字型に板材を組み合わせた製品で板の先端4ヶ所に孔が1個ずつ穿たれている。この上部に曲物桶などの容器を載せて吊した運搬具と想定される。93は一木から歯部を繰り出した連歯下駄で、表面に笹紋が焼印されている。

4群（植物遺体を含有する黒灰色粘土層出土遺物）（第97～101図 98～231）

碗・皿・鉢・下駄・木筒類等が多数出土した。

碗は瀬戸美濃産陶器天目茶碗・丸碗、木胎漆器碗、木器碗等があり、木胎漆器碗が量的に多い。漆器碗は高台が高い碗A類・高台が低い碗B類・法量が小さい碗C類がある。木器碗（105）は体部にロクロ目が強く残り、底部中央に碗を固定するために付けられたと思われる切れ込みがある。高台は碁笥底状に削り出し、表面には薄く黒色の付着物が塗布されていた。

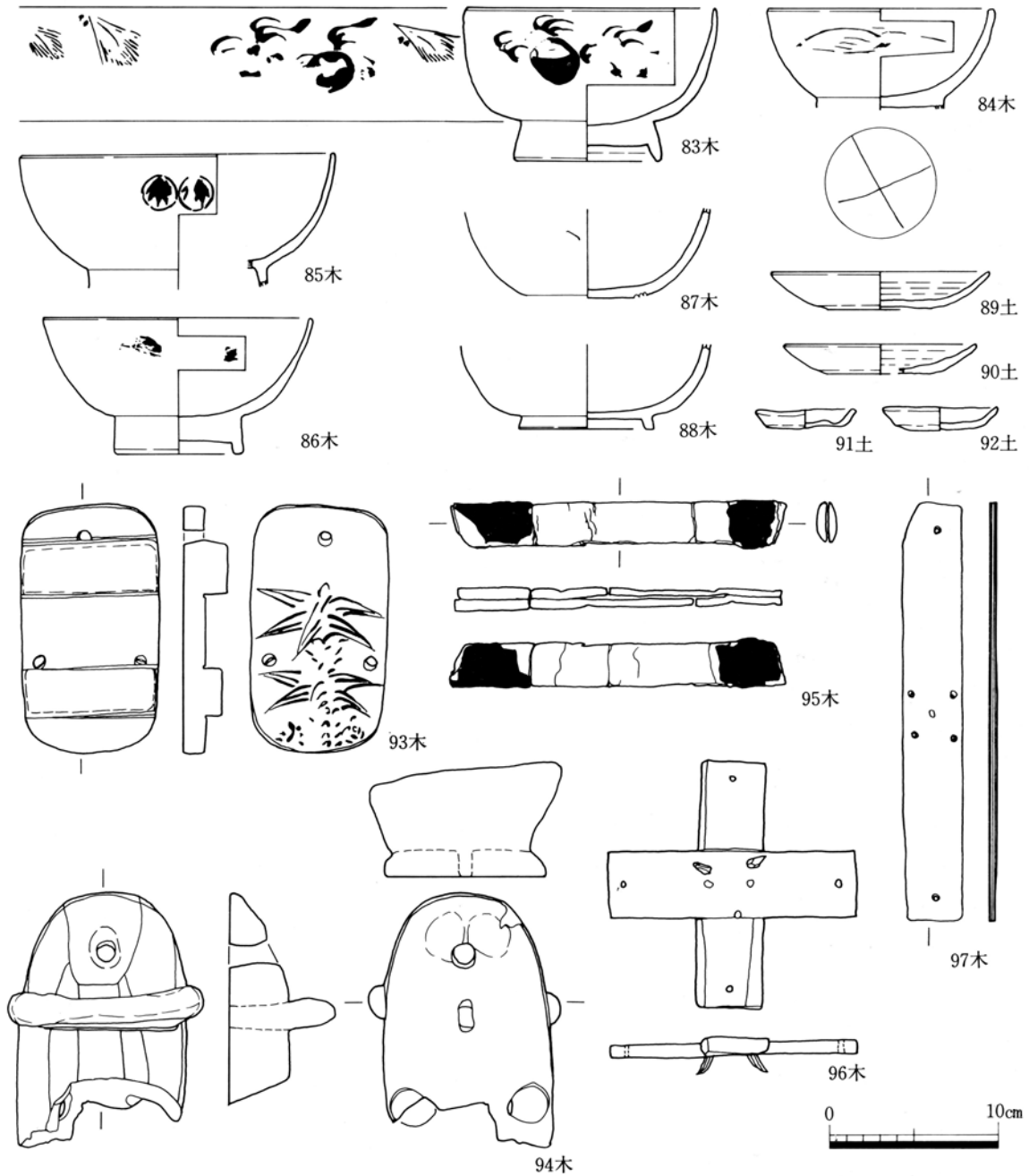
皿は瀬戸美濃産陶器縁釉皿・重圈皿、土師器皿、木胎漆器皿がある。縁釉皿・重圈皿は窖窯後期末に位置づけられる。土師器皿は体部が直線的に伸びるロクロ成形のもの（134・135）とヨコナデを施した非ロクロ成形のもの（136～138）がある。木胎漆器皿は内外面に赤色漆が塗布されたもの（139）と外面に黒色漆が塗布されたもの（140～144）がある。

碗・皿を除く容器には瀬戸美濃産陶器挿鉢・平鉢・花瓶、木製曲物桶・折敷、土師器鍋・釜がある。挿鉢は口縁部1類と2類が存在する。曲物桶は小形のもの和大形で柄杓が破損したものがある。後者（151）は柄の先端を固定するための孔が開いている。折敷の底板は正方形の角が切断された不定八角形の板の両端部に孔が2個ずつ穿たれているもの（149・150）が多い。この他に厚手の不定八角形木板の中央に孔を設け節を持つ竹を差し込んだ製品（146）がある。竹材の口縁部が焦げていることから、灯明具か線香立てと思われる。

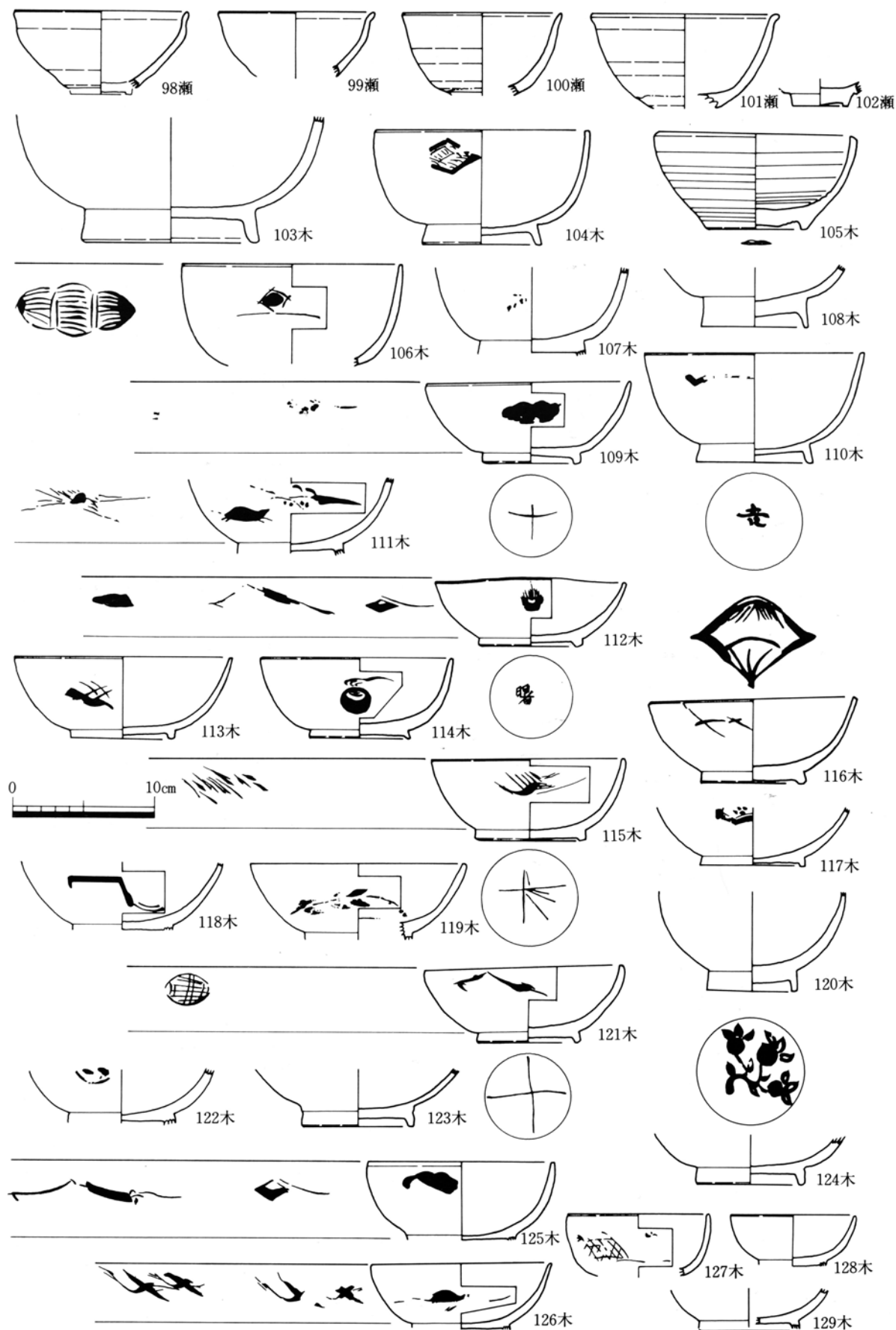
この他の生活道具類として各種の木製品がある。箸は断面形が多角形状の粗く削り取ったものであり、長さは約22cmのものが多い。篋類は片刃の切匙が存在し、柄部に孔を持つもの（161）と持たな

いもの(162)がある。166は竹製の扇の骨であり、5本分が遺存していた。

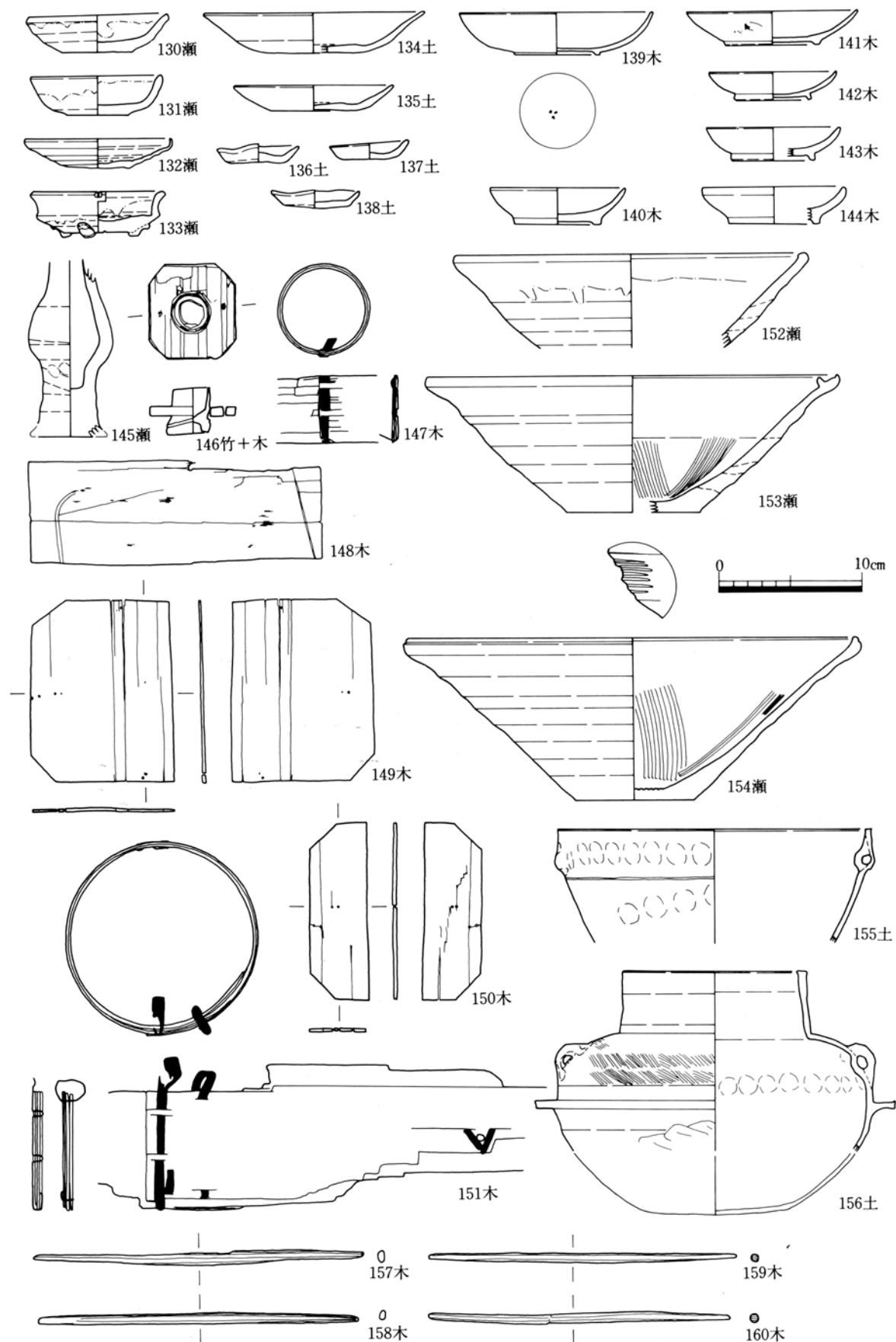
下駄は複数の材を用いて台部と歯部を別々に作る差歯下駄(179)と一木から台部と歯部を繰り出した連歯下駄(178・180・181)が存在する。連歯下駄は大小2者の規模が認められ、歯部の下端面はよく摩滅している。



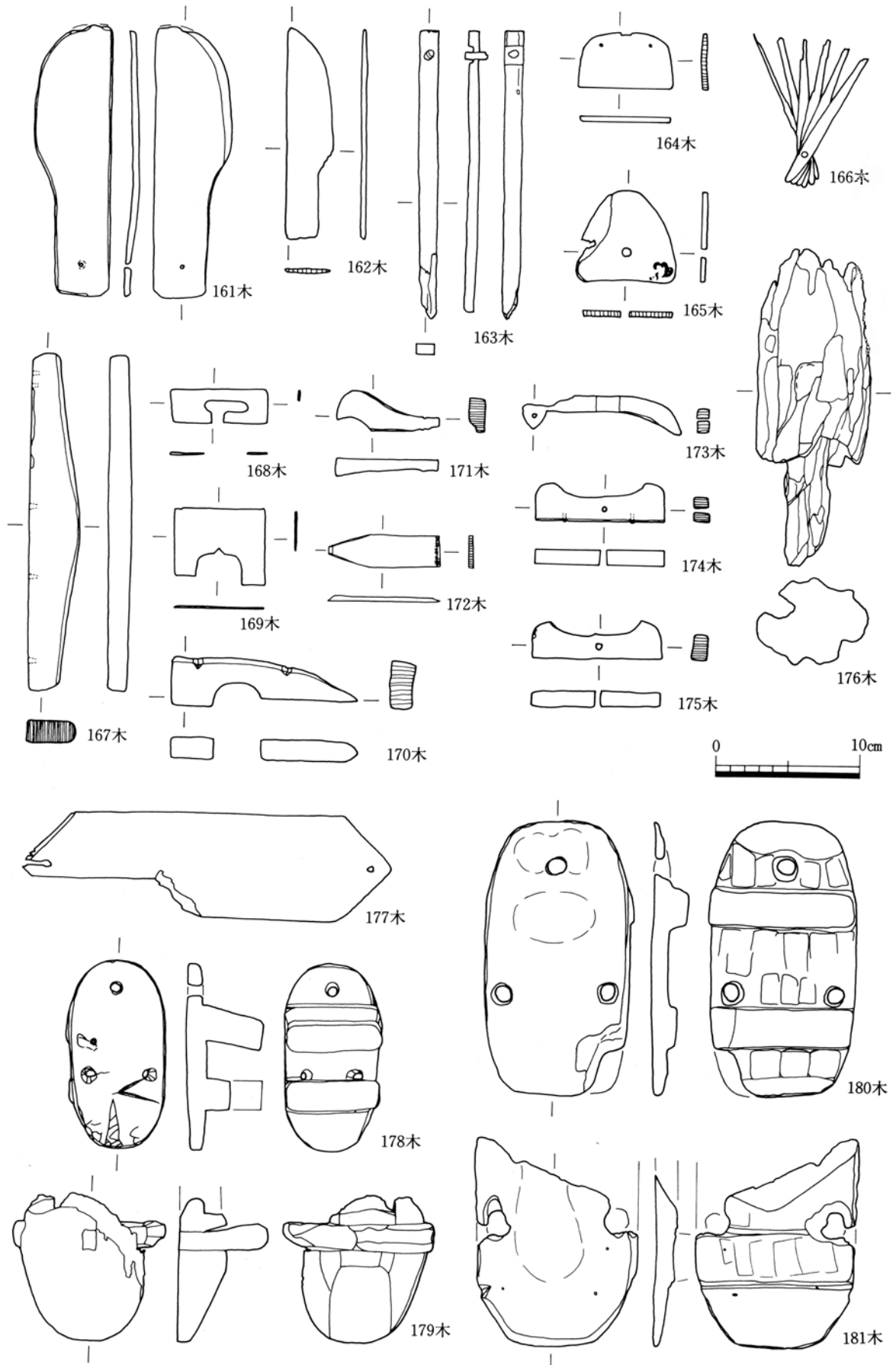
第96図 遺物実測図 NR40015群



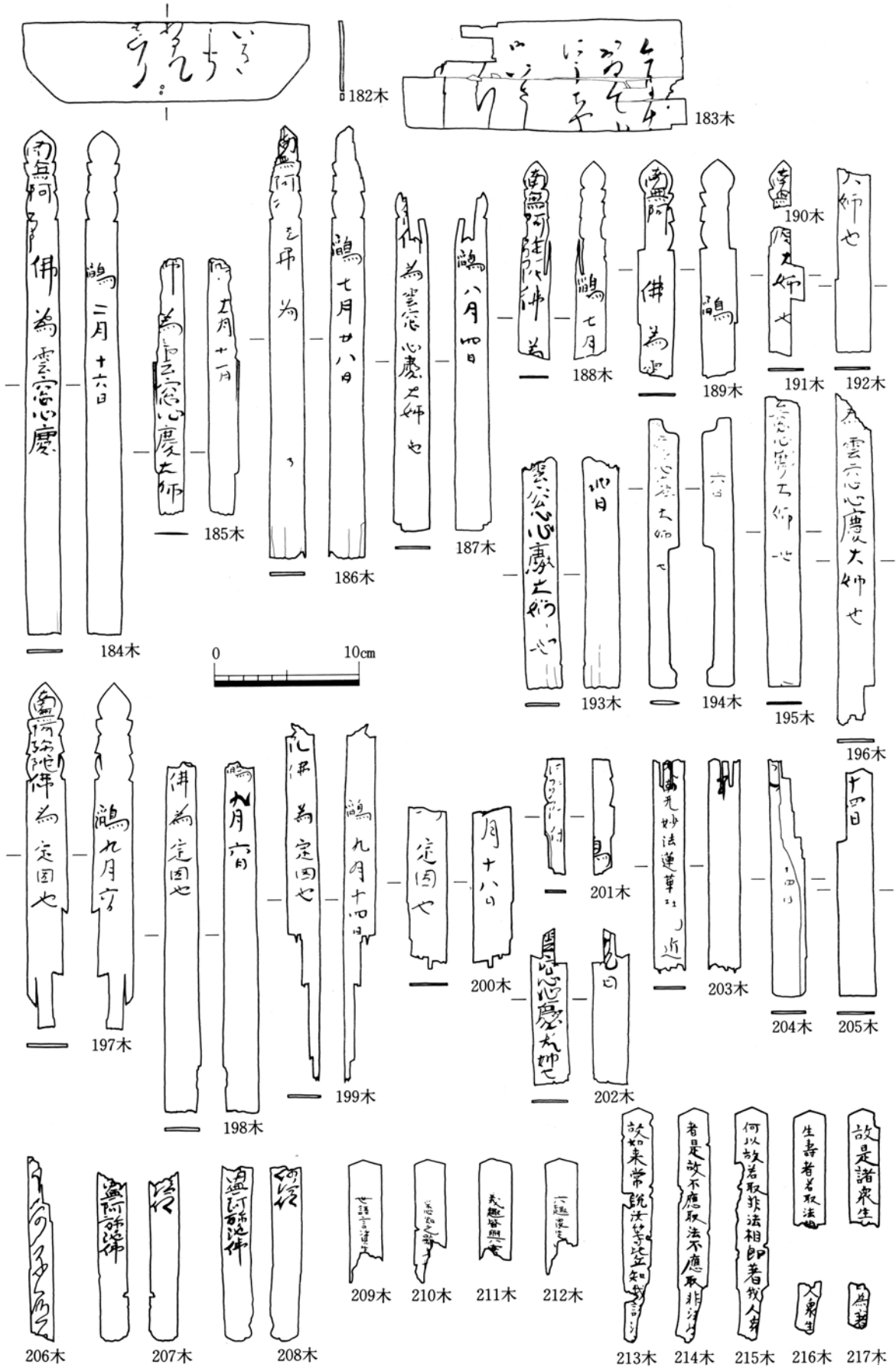
第97図 遺物実測図 NR4001 4 群(1)



第98図 遺物実測図 NR4001 4 群(2)



第99図 遺物実測図 NR40014群(3)



第100図 遺物実測図 NR4001 4群(4)

4群は木簡類が多量に存在する。大半は供養等に用いられた卒塔婆・柿経であるが、一部に折敷の底板に記した消息文と思われるものも存在する。

卒塔婆は規模・形態・文言から4類に分類できる。

卒塔婆Ⅰ類——長さ30cm弱、幅1.3cm前後、厚さ0.2cm前後の大きさを頭部を五輪塔形に作り、表面に「南無阿弥陀仏 為(戒名)也」、裏面に「鶇(日付)」という書式で文言が記されたもの。

今回の事例(184~205)では、戒名には「雲窓心慶大姉」と「定因」の2者があり、各々に数本ずつ作成されている。同じ戒名の卒塔婆については日付がほぼ7日おきに付けられており、供養のための七本塔婆と考えられる。なお、同戒名・同日付の卒塔婆が2本存在する場合もある。

卒塔婆Ⅱ類——長さ40cm以上、幅5.0cm以上を測るものを一括してⅡ類とする。

218・219はやや厚手の板材を用いて頭部を五輪塔形に作っており、五輪部には梵字を記している。その下に経文・戒名等が記されたものであろう。220は両面に「南無阿弥陀仏」等の経文を記し、尖らせた下端部には年月日(「永正五年十一月廿五日」)が記載されている。

卒塔婆Ⅲ類——長さ40cm以上、幅5.0cm未満を測るものを一括してⅢ類とする(221~226)。

大半は頭部を五輪塔形に作り、五輪部には梵字、その下に経文・戒名等が記され、微細な部分の書式には異同が見られる。221の表面には「南無阿弥陀仏」の意の梵字、裏面には「𑖀(バン)」が記されている。

卒塔婆Ⅳ類——長さ40cm未満、幅5.0cm未満を測るものを一括してⅣ類とする(228~231)。

頭部を五輪塔形に作り、卒塔婆Ⅲ類と同様の文言が記されたと思われるが、詳細は不明である。

また、柿経は非常に薄い柁目板に経文等を記したものである。文言から以下の3類に分類できる。

柿経Ⅰ類——両面に「南無阿弥陀仏」を記したもの。

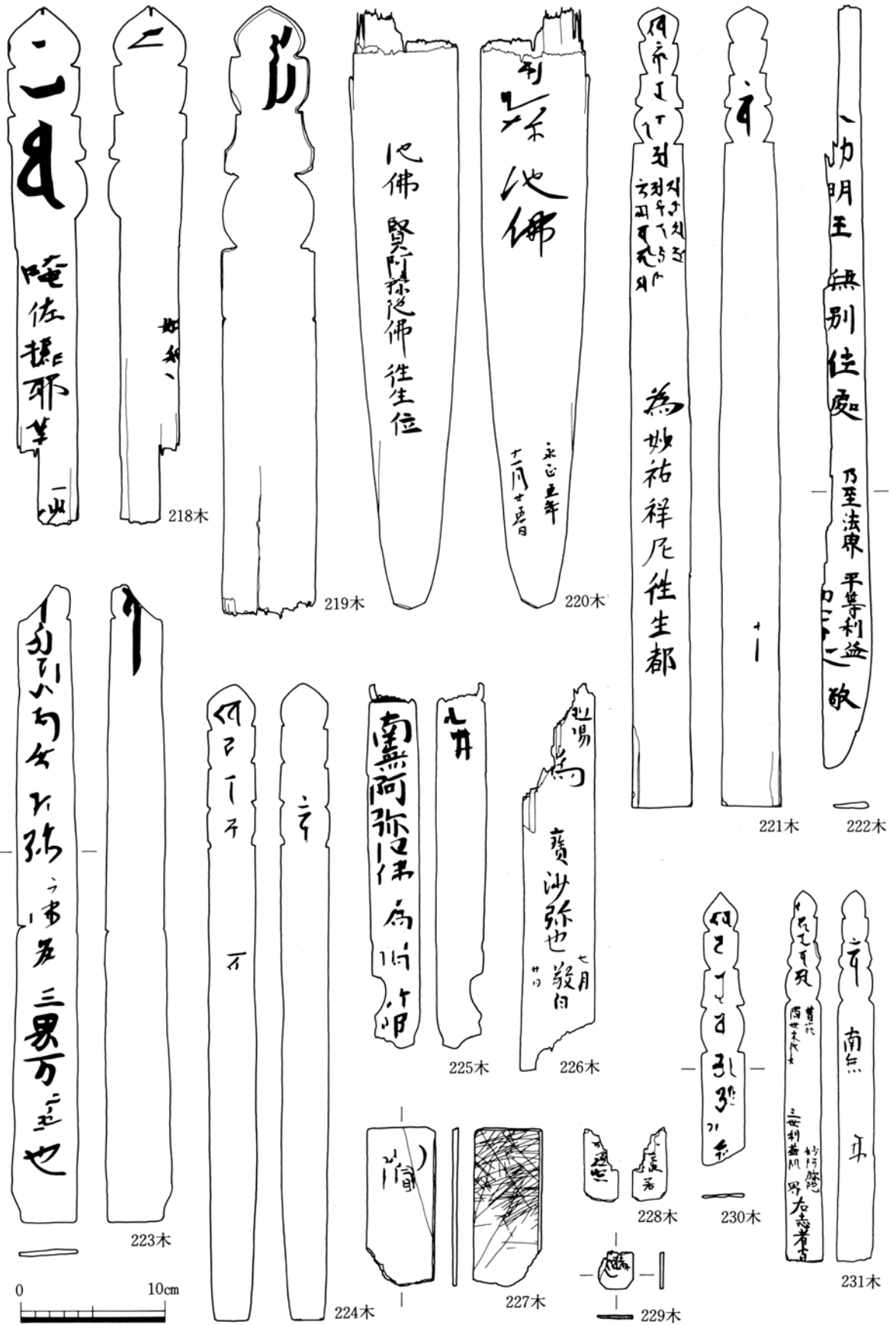
柿経Ⅱ類——片面に『妙法蓮華経(法華経)』を記したもの。

柿経Ⅲ類——片面に『金剛般若経』を記したもの。

柿経Ⅰ類(206~208)の頭部の形態は欠損し不明であるが、下端部は短冊形となっている。片面に「南無阿弥陀仏」が楷書で繰り返し記載され、その裏面には「南無阿弥陀仏」が草書で記されている。柿経Ⅱ類と柿経Ⅲ類は頭部を圭頭状に加工している。経文同定の結果、柿経Ⅱ類(209~212)はこれまで清洲城下町遺跡から出土した柿経と同様の書式で記載されていたと思われる。また、柿経Ⅲ類(213~217)は経文が原則として1本に16字ずつ書写されていたと考えられる。これらの詳細な出土状態は不明であるが、各類毎に数枚が束となっていたと推定される。

墨書が記された折敷の底板は2点存在する。182は方形の板材の角が落とされた不定八角形の底板であり、半分以上が欠損している。また、183も破損が著しく形態は不明である。墨書は木目に対して直交する形で縦方向に記されるが、その意味は不明である。書き出し部分(「今月」)や文末表現(「候」)等から消息(手紙類)の可能性はある。

木簡類にはこの他に小破片で性格が不明なものもある。227は墨書面の裏面に微細な刃物痕が残存している。



第101図 遺物実測図 NR4001 4 群(5)

第7表 NR4001出土木簡积文一覧表

- | | |
|---|---------------------------------|
| 183・「今月十〔
おみて□〔
にうち〔
御いきし〔
□恐々〔 | 203・〕南無妙法蓮華経〔
・〕 𑖀 〔 |
| 184・「南無阿弥陀仏 為雲窓心慶 〔 | 204・〕 十四日 〔 |
| ・「 鵜 七月十六日 〕 | 205・〕 十四日 〔 |
| 185・〕 仏 為雲窓心慶大姉 〔 | 206・〕 無阿弥陀仏 〔 |
| ・ 鵜 七月□十一日 〕 | 207・〕 南無阿弥陀仏 〔 |
| 186・「南無阿□□仏 為 〔 | ・〕 弥陀仏 〕 |
| ・「 鵜 七月廿八日 〕 | 208・〕 南無阿弥陀仏 〕 |
| 187・〕 仏 為雲窓心慶大姉也 〕 | 〕 弥陀仏 〕 |
| ・ 鵜 八月四日 〕 | 209～ 217の积文は復元したものを別冊付表に掲載した。 |
| 188・「南無阿弥陀仏 為 〔 | 218・「 𑖀 唵 佐□邪 〔 |
| ・「 鵜 七月 〔 | ・「□ 〔 |
| 189・「南無阿□□仏 為雲 〔 | 219・「□ |
| ・「 鵜 〔 | 220・〕 陀仏 賢阿弥陀仏 往生位 〕 |
| 190・「南無 〔 | ・〕 阿弥陀仏 永正五年 |
| 191・〕 慶大姉也 〔 | 十一月廿五日 〕 |
| 192・〕 大姉也 〕 | 221・ □□□□□ |
| 193・〕 雲窓心慶大姉也 〕 | 〔 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 □□□□□ 為妙祐祥尼往生都 〕 |
| ・〕 四日 〕 | □□□□□ |
| 194・〕 雲窓心慶大姉也 〕 | ・「 𑖀 〕 |
| ・〕 六日 〕 | 222・〕 不動明王 無別往処 乃至法界 平等利益 敬 |
| 195・〕 雲窓心慶大姉也 〕 | 〕 □□□□ 〔 〕 |
| 196・〕 為雲窓心慶大姉也 〕 | 223・〕 𑖀 𑖀 □ 南無阿弥陀仏 為三界万□也 〕 |
| 197・「南無阿弥陀仏 為定因也 〕 | ・〕 □ 〕 |
| ・ 鵜 九月六日 〕 | 224・「 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 □ 〔 〕 |
| 198・〕 仏 為定因也 〕 | ・「 𑖀 〕 |
| ・ 鵜 九月六日 〕 | 225・〕 南無阿弥陀仏 為□□ 〔 〕 |
| 199・〕 □仏 為定因也 〕 | ・「□ 〕 |
| ・ 鵜 九月十四日 〕 | 226・〕 □ 七月 |
| 200・〕 定因也 〕 | 為 俊慶沙弥也 敬白 |
| ・〕 月十八日 〕 | 廿日 〕 |
| 201・〕 阿弥陀仏 〔 | 227・「□ 〕 |
| ・ 鵜 〔 | 228・「□ 〕 |
| 202・〕 雲窓心慶大姉也 〔 | ・「□ 〕 |
| ・〕 □□日 〔 | 229・「□ 〕 |
| | 230・「 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 □ 〔 |
| | 231・「 𑖀 𑖀 𑖀 𑖀 □□ 〔 〕 妙阿弥陀 右志者 〔 |
| | 独世 〔 〕 三世利益□界 |
| | ・「 𑖀 南無□□□仏 〔 |

3群（青灰色粘土層出土遺物）（第102・103図 232～270）

遺物の大半は、瀬戸美濃窯産陶器と土師器が占めている。椀は瀬戸美濃窯産陶器と木胎漆器があり、前者は化粧掛けを施した天目茶碗・台付碗・平碗が存在する。皿は瀬戸美濃窯産陶器と土師器があり、前者は縁軸皿・腰折皿・端反皿・丸皿がある。ロクロ成形の土師器皿は体部が直線的に伸びるものが多く、特に口径が8cm前後の皿（249）の半数は口縁部にタールが付着している。非ロクロ成形の土師器皿は体部にヨコナデを強く施したもの（251～252）が多数を占めるが、体部を指オサエのみで成形したもの（250）も見られる。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は口縁部の形態が2～5類に属するものがある。このうち258は口縁端部を内側に屈曲させ上方に伸ばした2類に属するが、端面の角度が平坦になっており、口縁部8類へ変化する過渡的な形態と思われる。

釜は瀬戸美濃窯産陶器と土師器のものがある。陶器の釜（264）は全面に錆釉を塗布し、肩部に耳を設置しないものである。土師器の釜（267・268）は焼成が良好でやや瓦質化していた。鍋は土師器の羽付鍋・内耳鍋が出土し、陶器鍋・炮烙鍋は存在しない。羽付鍋（269・270）は体部が直立し、鏝を張り付けている。内耳鍋は体部がやや丸みを帯び、体部外面に浅い沈線が巡るもの（266）も見られる。鍋の外面上半部は指オサエ、内面上半部は微細なヨコハケが施され、外面全体に煤が付着している。

石製品には平面形が不定形の硯（263）が存在し、凹部に墨痕が残存している。下駄（261）は連歯下駄の台部で、歯を差し込むためのほぞ孔は2個ずつ存在する。

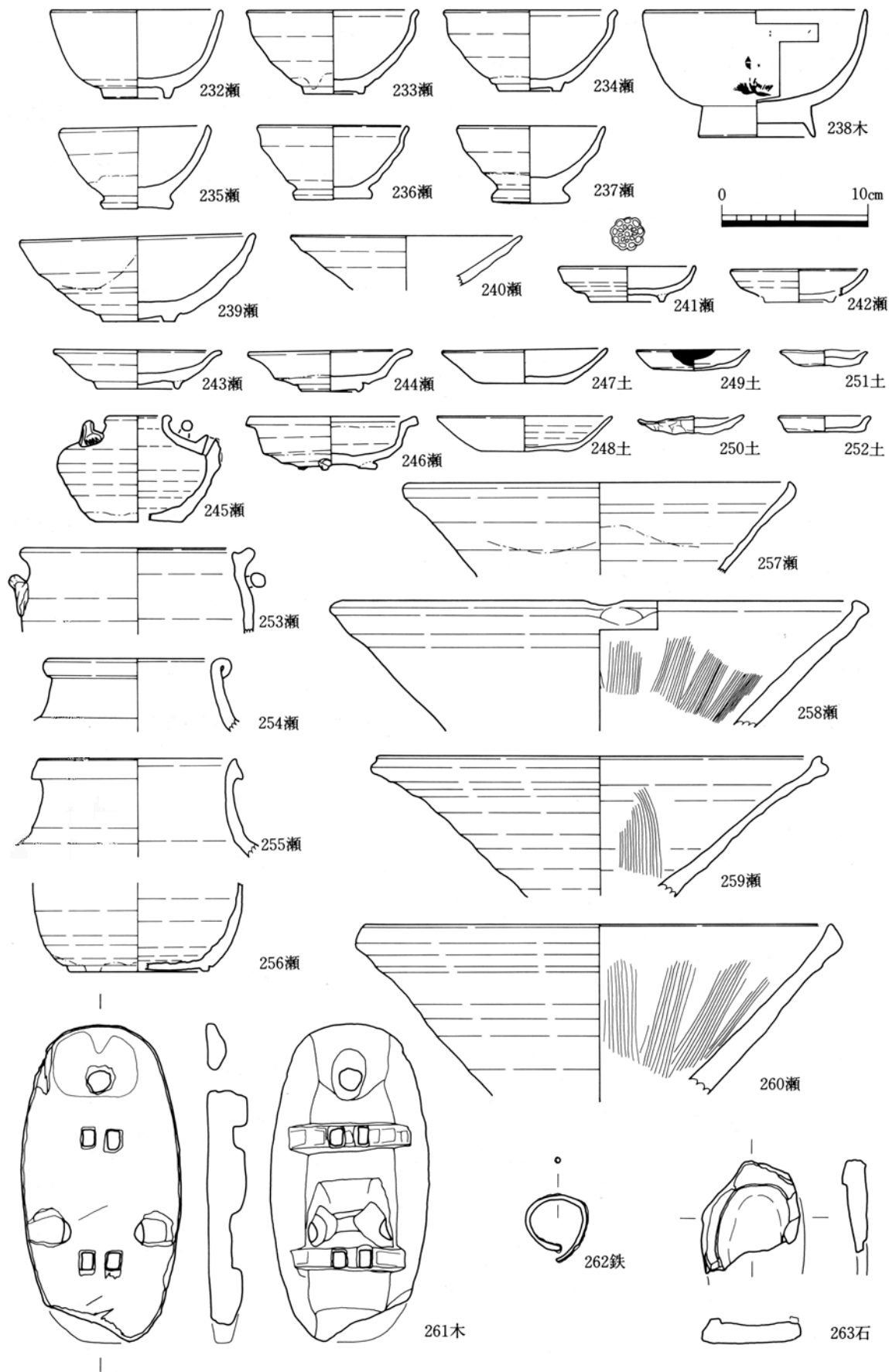
2群（灰色粘土層あるいはシルト層出土遺物）（第104～106図 271～367）

遺物の大半は陶磁器と土師器が占め、器種もバラエティーに富んでいる。

椀は瀬戸美濃窯産陶器と中国窯産磁器が存在する。瀬戸美濃窯産陶器碗は口縁部1類・2類の天目

第8表 NR4001出土遺物集計表（但し90D区のみ）

種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	1237	931	瀬戸美濃・天目茶碗	164	187	土師器・皿	3279	3351
土師器	5008	3879	瀬戸美濃・丸碗	48	40	土師器・大形製品	0	0
瓦器	1	0	瀬戸美濃・平碗	9	12	土師器・小形製品	1	0
常滑窯産陶器	189	12	瀬戸美濃・台付碗	18	45	土師器・鍋釜	1728	528
信楽窯産陶器	3	3	瀬戸美濃・小碗	0	0	土師器・その他	0	0
楽楽産陶器	0	0	瀬戸美濃・香茶碗	0	0	土師器・不明	0	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・椀茶碗	48	108	土師器・皿ロクロ成形	2779	1420
備前窯産陶器	1	0	瀬戸美濃・腰折皿	35	46	土師器・皿ロクロⅠ類	72	100
唐津窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・灰軸端反皿	90	106	土師器・皿ロクロⅡ類	1110	1238
朝鮮窯産陶磁器	2	0	瀬戸美濃・鉄軸端反皿	0	0	土師器・皿ロクロⅢ類	54	82
中国窯産陶磁器	27	26	瀬戸美濃・折縁皿	0	0	土師器・皿非ロクロ成形	500	1931
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石軸端反皿	0	0	土師器・皿非ロクロⅠ類	473	1871
瓦	2	—	瀬戸美濃・端反皿	92	106	土師器・皿非ロクロⅡ類	12	56
壁土・錆型など	78	—	瀬戸美濃・灰軸丸皿	10	11	土師器・皿非ロクロⅢ類	2	4
木製品	3266	—	瀬戸美濃・鉄軸丸皿	0	0	土師器・羽付鍋	25	21
石製品	17	—	瀬戸美濃・長石軸丸皿	0	0	土師器・内耳鍋	657	465
金属製品	48	—	瀬戸美濃・丸皿	10	11	土師器・炮烙鍋	1	1
金属製品（鉄製品）	7	—	瀬戸美濃・椀皿	0	0	土師器・釜	67	40
金属製品（銅製品）	41	—	瀬戸美濃・内壳皿	0	0	常滑・真焼製品	178	12
自然遺物（骨等）	494	—	瀬戸美濃・菊皿	0	0	常滑・赤物製品	11	0
その他	35	—	瀬戸美濃・稜花皿	1	2	中国・青磁	11	10
総数	10408	4851	瀬戸美濃・ひだ皿	1	1	中国・白磁	9	9
			瀬戸美濃・重圍皿	100	109	中国・青花	7	7
			瀬戸美濃・挟み皿	1	0	瀬戸美濃・播鉢1類	2	2
			瀬戸美濃・平鉢	31	24	瀬戸美濃・播鉢2類	56	56
			瀬戸美濃・大皿	0	0	瀬戸美濃・播鉢3類	17	21
			瀬戸美濃・向付	1	0	瀬戸美濃・播鉢4類	20	21
			瀬戸美濃・筒形製品	8	10	瀬戸美濃・播鉢5類	9	12
			瀬戸美濃・壺類	41	28	瀬戸美濃・播鉢6類	5	6
			瀬戸美濃・瓶類	2	0	瀬戸美濃・播鉢7類	0	0
			瀬戸美濃・花瓶類	4	2	瀬戸美濃・播鉢8類	11	14
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	1	1
			瀬戸美濃・水注類	2	4	瀬戸美濃・播鉢10類	0	0
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・播鉢11類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	6	4	瀬戸美濃・播鉢その他	0	0



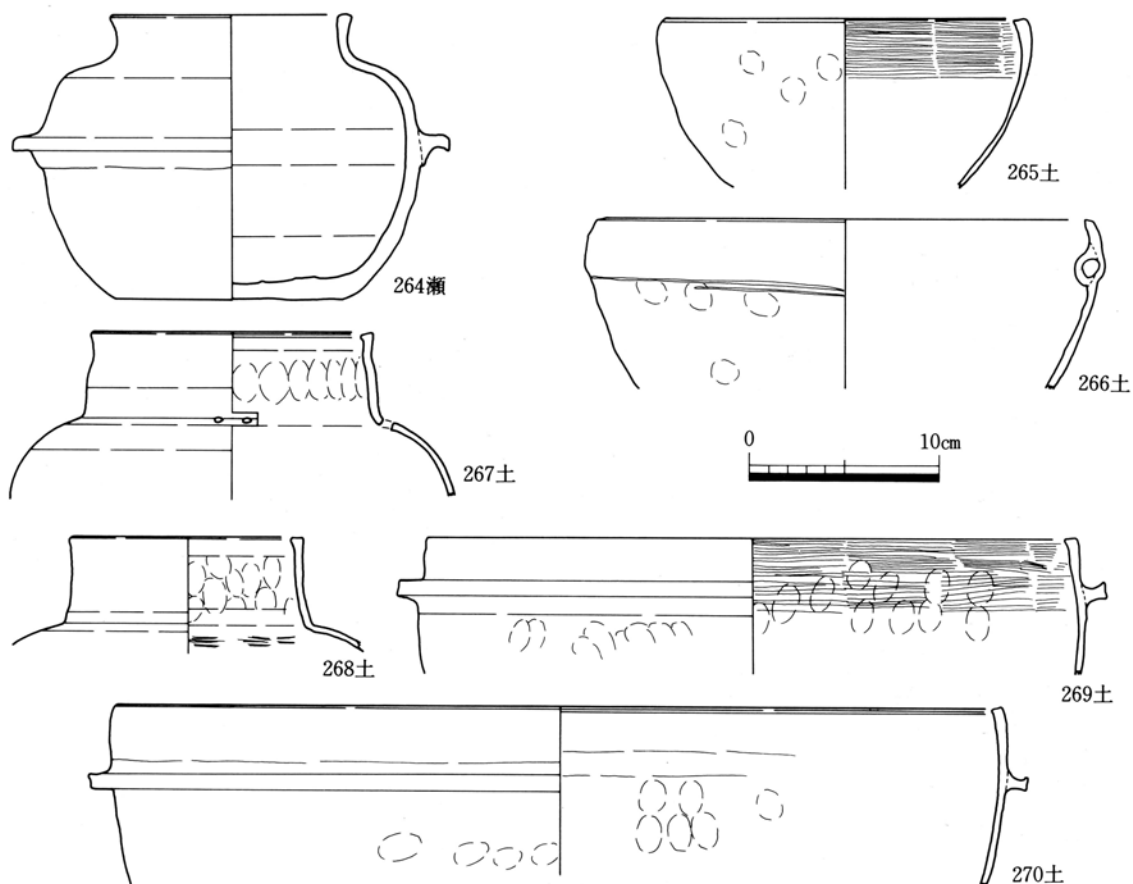
第102図 遺物実測図 NR4001 3群(1)

茶碗・台付碗・剣先状の蓮弁紋を施した灰釉丸碗がある。中国窯産磁器碗は龍泉窯産と見られる青磁蓮弁紋碗と青花碗がある。

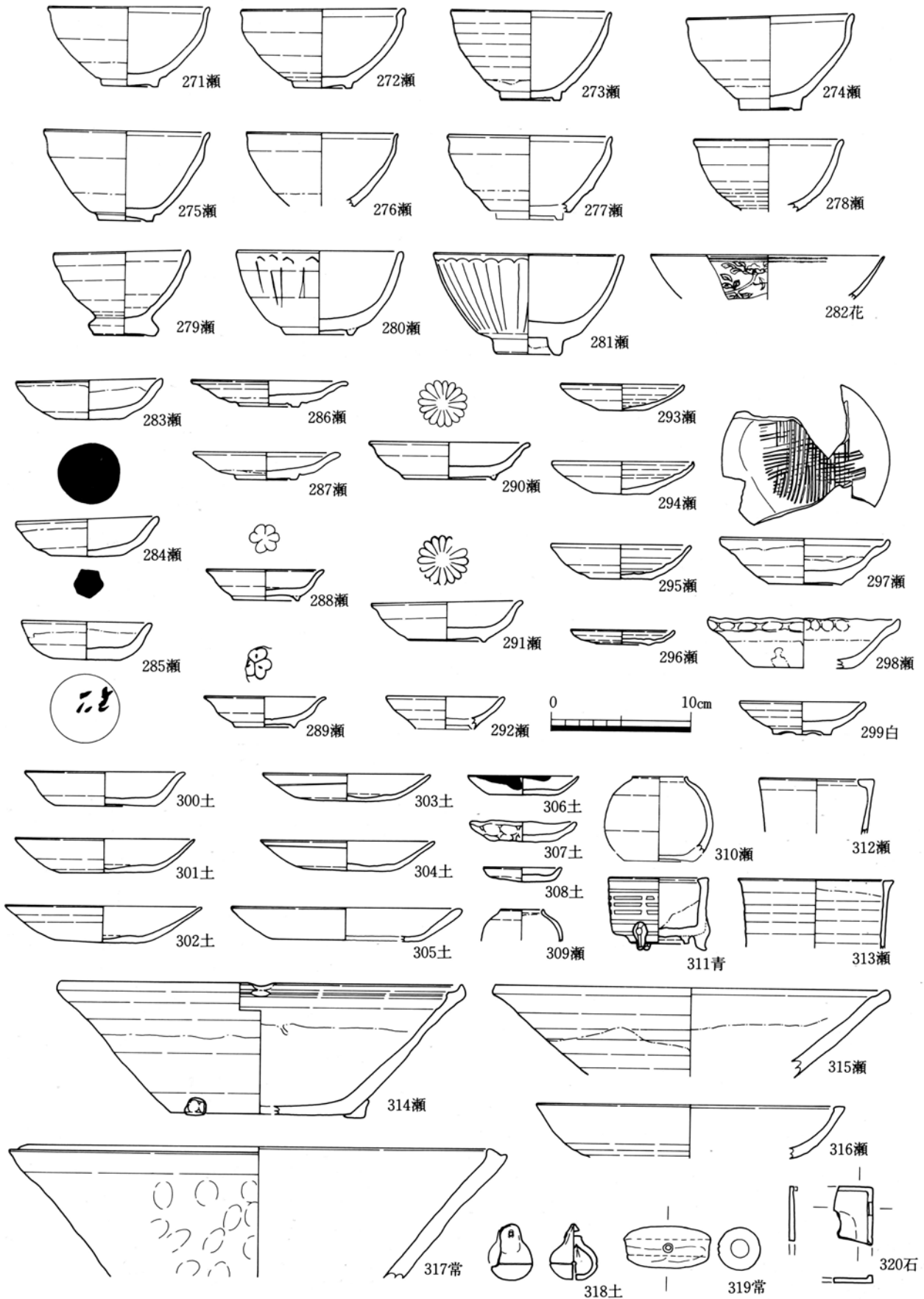
皿は瀬戸美濃窯産陶器、土師器、中国窯産磁器が存在する。瀬戸美濃窯産陶器皿は縁釉皿・腰折皿・端反皿・丸皿・重圈皿がある。284は灰釉縁釉皿で、見込み部と底部が墨書で円形に塗り潰されている。285は底部に「法カ」と墨書されたものである。重圈皿（293～295）は灰釉系陶器碗の系譜を引いたものと考えられる内面に螺旋状の凹線が巡るものである。また、灰釉系陶器皿の系譜を引く均質な胎土を持つ極めて浅い皿（296）も存在する。297は縁釉卸皿、298は縁釉折縁深皿で口縁部がひだ状になっている。土師器の皿は3群と同様の形態であるものが多いが、ロクロ成形の皿の中には、体部上方に浅い沈線が巡るもの（303・304）と底部からやや外反するもの（300）がある。また、口縁部を肥厚させる非ロクロ成形土師器皿（305）も存在する。中国窯産磁器皿には白磁の割高台皿（299）がある。

鉢は瀬戸美濃窯産陶器と常滑窯産陶器が存在し、この内瀬戸美濃窯産陶器の平鉢の割合が多い。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は口縁部の形態が2～5類・8類に属するものがある。瀬戸美濃窯産陶器の大形製品には、筒形製品、壺、瓶、甕等がある。筒形製品には口縁部を外側に折り返し縁帯を作る鉄釉を掛けたもの（329～333）と、口縁部端面を内側に傾斜させた無釉のもの（匣鉢：336）がある。壺は古瀬戸の灰釉四耳壺（339）と口縁部を僅かにくびれさせた鉄釉の双耳壺（334・335）がある。鍋・釜は瀬戸美濃窯産陶器と土師器があるが、土師器鍋が圧倒的多数を占めている。

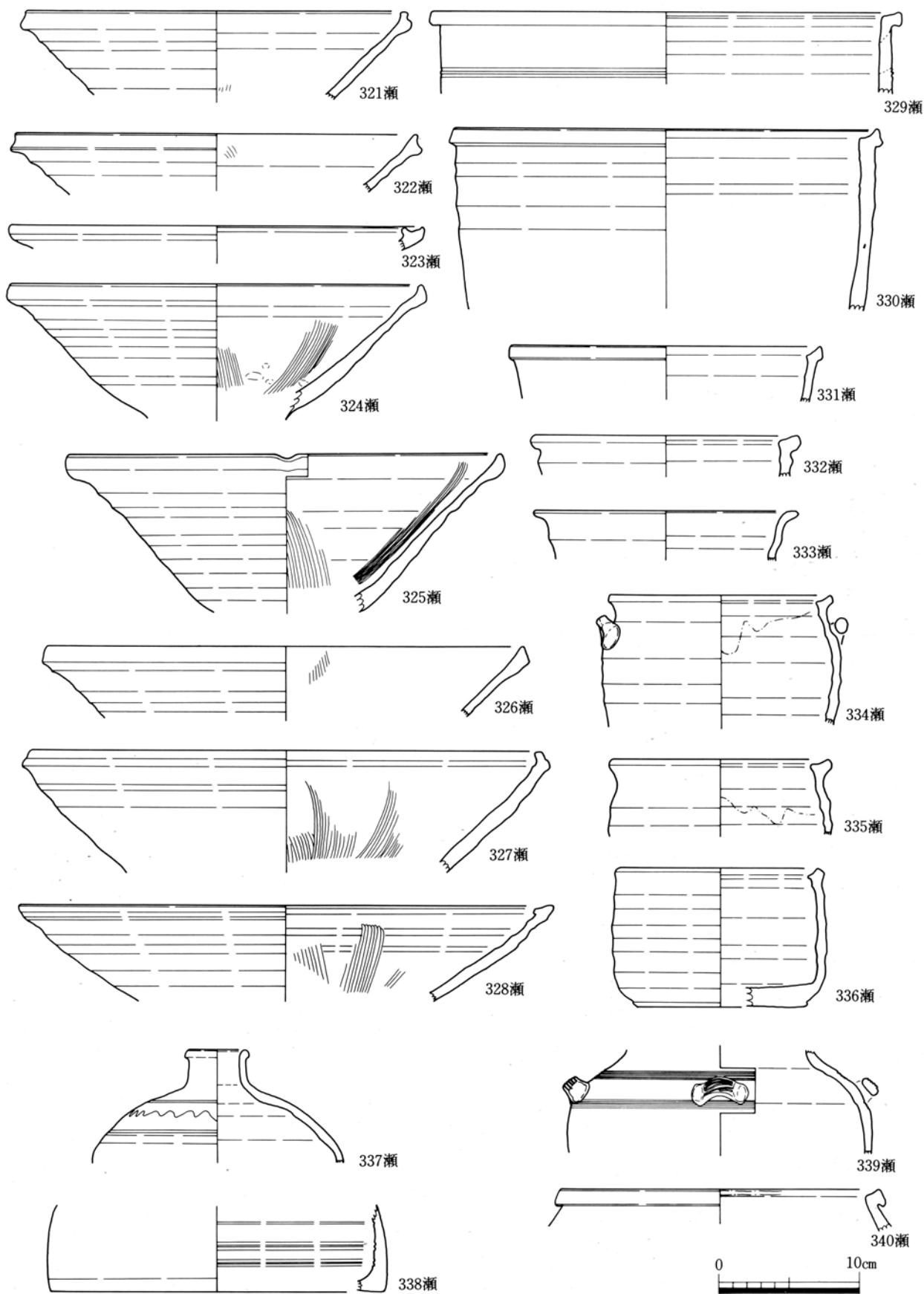
この他に石製五輪塔（366）、砥石（360～362）、碁石（364・365）、数珠（367）等がある。



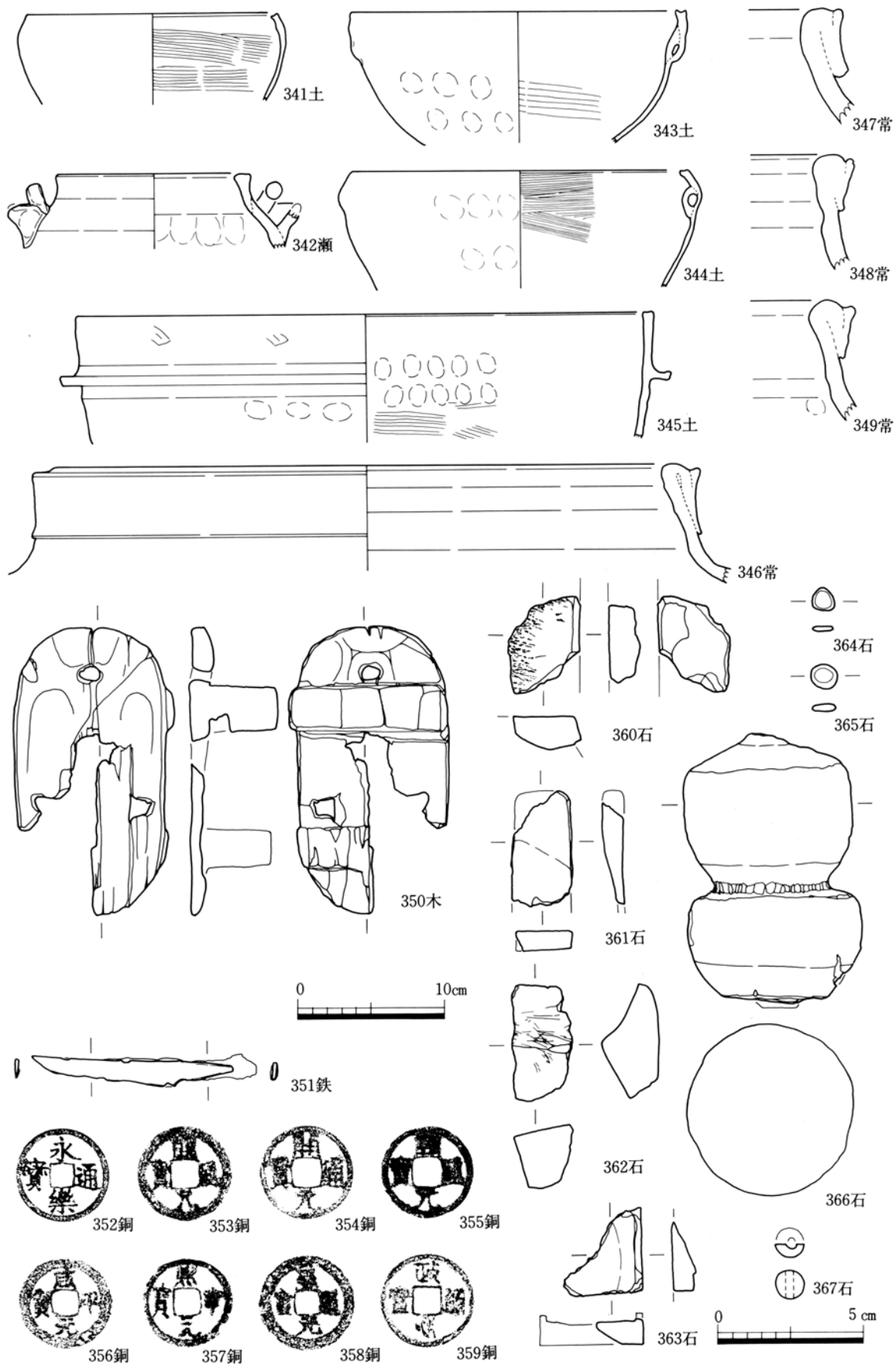
第103図 遺物実測図 NR4001 3群(2)



第104図 遺物実測図 NR4001 2群(1)



第105図 遺物実測図 NR4001 2群(2)



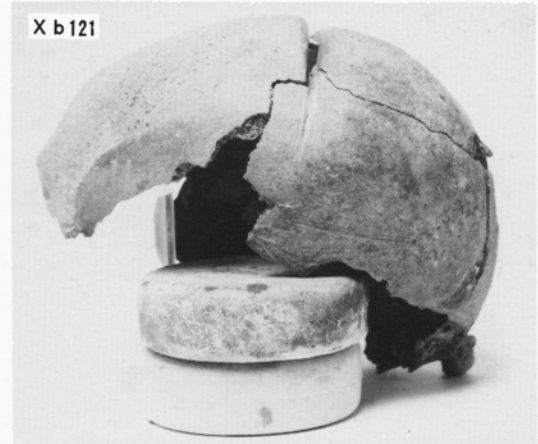
第106図 遺物実測図 NR4001 2群(3)

(352~359はS=2:3, 367はS=1:2)

また、NR4001からは多量の自然遺体が出土している(第9表)。この中で、加工痕のある人骨について取り上げる(下写真)。この頭骨は成人のものと思われ、表面全体に大小様々な刃傷が存在する。これらの刃傷は白骨化した後に加えられ、頭頂部に横方向に切断しようとした大きな傷と、それに直交する角度で無数の細かな傷が存在している。刃傷を設けた意味については不明である。

第9表 NR4001出土自然遺体一覧表

Table with 10 columns: 遺体種別, 部位1, 部位2, 左右, 個数, 備考, 登録番号. It lists various skeletal remains including skulls, ribcages, and long bones with their locations and identification numbers.



左側頭面



頭頂面



右側頭面

B SD4033出土遺物（第107図 368～385）

SD4033は61A区に所在する区画溝で何度かの掘り返しが認められた。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器、中国窯産磁器、石製品等が出土し、木製品は遺存しなかった。

瀬戸美濃窯産陶器には碗、皿、播鉢を始めとする多様な器種が認められるが、この中でも鍋・釜類の出土が他に比べて多い傾向がある。375・376は薄い茶色の錆釉を施した陶器釜で、375は耳を横方向に付け、376は耳を縦方向に付着させている。共に耳部の外側に覆いが存在する。376は口縁部を外側に折り返し縁帯状に作っている。377・378は釜と同じく薄い茶色の錆釉を施した陶器鍋で、内耳は遺存しなかった。379は瀬戸美濃窯産陶器甕で、器壁が比較的厚く口縁端面が内側に傾斜している。香炉（373）は袴腰形の器形で鉄釉が施されている。

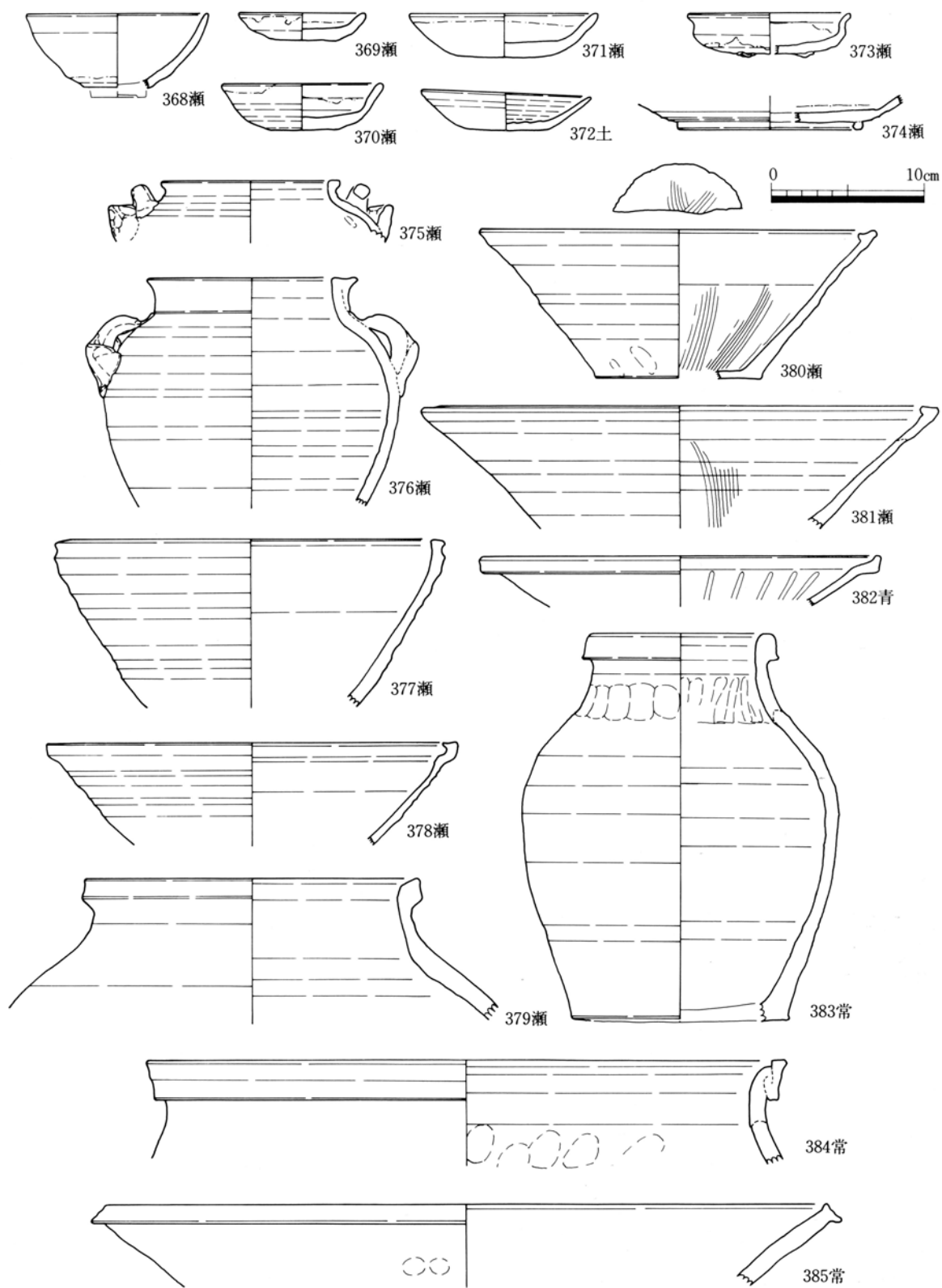
常滑窯産陶器には壺、甕、鉢が存在する。壺（383）は口縁部を外側に折り返して縁帯を作るもので、上半部に自然釉が掛かっている。甕（384）はN字状口縁が体部と付着した口縁部形態を呈している。鉢（385）は逆ハの字状に開き、口縁端面は強く面を作っている。内面に摺目等は認められない。

中国窯産磁器には龍泉窯系の青磁大皿（盤・382）がある。口縁部を折縁に屈曲させ、体部内面を菊花紋状にしている。

瀬戸美濃窯産陶器皿では灰釉縁釉皿（369～371）と腰折皿（374）が、瀬戸美濃窯産陶器播鉢では口縁部1類（380）と2類（381）が各々出土していることから、この遺物群は城下町期Ⅰ－1期に属すると考えられる。

第10表 SD4033出土遺物集計表

種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	177	115	瀬戸美濃・天目茶碗	10	1	土師器・皿	381	248
土師器	396	253	瀬戸美濃・丸碗	1	2	土師器・大形製品	0	0
瓦器	2	0	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・小形製品	0	0
常滑窯産陶器	53	17	瀬戸美濃・台付碗	0	0	土師器・鍋釜	15	5
信楽窯産陶器 ⁰	0	0	瀬戸美濃・小碗	0	0	土師器・その他	0	0
楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・香茶碗	0	0	土師器・不明	0	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・縁釉皿	19	37	土師器・皿口クロ成形	360	180
備前窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・腰折皿	0	0	土師器・皿口クロⅠ類	5	6
唐津窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・灰釉端反皿	2	4	土師器・皿口クロⅡ類	121	163
朝鮮窯産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	0	0	土師器・皿口クロⅢ類	9	11
中国窯産陶磁器	8	6	瀬戸美濃・折縁皿	0	0	土師器・皿非口クロ成形	21	68
産地不明陶磁器 ⁰	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	0	0	土師器・皿非口クロⅠ類	21	68
瓦	0	—	瀬戸美濃・端反皿	2	4	土師器・皿非口クロⅡ類	0	0
壁土・錆型など	0	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	1	1	土師器・皿非口クロⅢ類	0	0
木製品	0	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	0	0	土師器・羽付鍋	1	0
石製品	0	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	0	0	土師器・内耳鍋	6	5
金属製品	2	—	瀬戸美濃・丸皿	1	1	土師器・炮烙鍋	0	0
金属製品（鉄製品）	0	—	瀬戸美濃・椀皿	0	0	土師器・釜	0	0
金属製品（銅製品）	1	—	瀬戸美濃・内禿皿	0	0	常滑・真焼製品	53	17
自然遺物（骨等）	10	—	瀬戸美濃・菊皿	0	0	常滑・赤物製品	0	0
その他	3	—	瀬戸美濃・桜花皿	0	0	中国・青磁	8	6
総数	652	391	瀬戸美濃・ひだ皿	0	0	中国・白磁	0	0
			瀬戸美濃・重圍皿	24	20	中国・青花	0	0
			瀬戸美濃・扶み皿	0	0	瀬戸美濃・播鉢1類	10	3
			瀬戸美濃・平鉢	10	8	瀬戸美濃・播鉢2類	8	11
			瀬戸美濃・大皿	2	0	瀬戸美濃・播鉢3類	0	0
			瀬戸美濃・向付	0	0	瀬戸美濃・播鉢4類	0	0
			瀬戸美濃・筒形製品	0	0	瀬戸美濃・播鉢5類	0	0
			瀬戸美濃・壺類	2	4	瀬戸美濃・播鉢6類	0	0
			瀬戸美濃・瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢7類	0	0
			瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢8類	7	6
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	0	0
			瀬戸美濃・水注類	0	0	瀬戸美濃・播鉢10類	0	0
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・播鉢11類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	0	0	瀬戸美濃・播鉢その他	0	0
瀬戸美濃・碗	13	3	瀬戸美濃・大皿	2	0	瀬戸美濃・播鉢1類	10	3
瀬戸美濃・皿	51	62	瀬戸美濃・向付	0	0	瀬戸美濃・播鉢2類	8	11
瀬戸美濃・浅鉢	14	18	瀬戸美濃・筒形製品	0	0	瀬戸美濃・播鉢3類	0	0
瀬戸美濃・播鉢	56	20	瀬戸美濃・壺類	2	4	瀬戸美濃・播鉢4類	0	0
瀬戸美濃・大形製品	27	4	瀬戸美濃・瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢5類	0	0
瀬戸美濃・小形製品	0	0	瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢6類	0	0
瀬戸美濃・香炉	4	8	瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢7類	0	0
瀬戸美濃・鍋	11	10	瀬戸美濃・水注類	0	0	瀬戸美濃・播鉢8類	7	6
瀬戸美濃・その他	0	0	瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	0	0
瀬戸美濃・不明	1	0	瀬戸美濃・茶入類	0	0	瀬戸美濃・播鉢10類	0	0
						瀬戸美濃・播鉢11類	0	0
						瀬戸美濃・播鉢その他	0	0



第107図 遺物実測図 SD4033

C SK3029 (第108図 386~403)

SK3029は62G区の南部に所在する土坑であり、ここから瀬戸美濃窯産陶器や土師器等が出土した。特に土師器皿は極めて多量に出土しており、この一括資料の特徴となっている。

瀬戸美濃窯産陶器は台付碗、水注、花瓶等がある。水注(399)は底部が焼成後穿孔されていた。花瓶(401)は高台を持ち、頸部が長く伸び、口縁部にかけてやや外側に屈曲するものである。

土師器皿は底部に回転糸切り痕を残すロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。ロクロ成形のものは法量、体部と口縁部の形状から以下の4類に区分できる。

ロクロ成形1類——体部が直線的に開き回転ナデ痕が細かく残存するもの。口径は12cm前後(386~389)。

ロクロ成形2類——体部と口縁部を強くナデて外反させるもの。口径は11~18cm(390・391)。

ロクロ成形3類——体部と口縁部の2ヶ所をナデたもの。口径は6~10cm(392・393)。

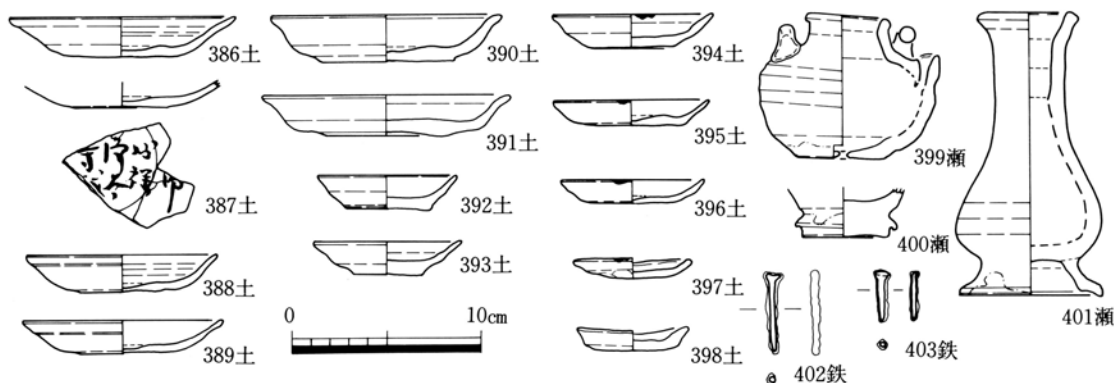
ロクロ成形4類——口縁部を内彎させるもの。口径は7~8cmに分布する(394~396)。

非ロクロ成形 ——体部に横方向のナデを施したもの。口径は5~6cmに分布する(397・398)。

これらの出土割合を口縁部計測法で算定する(第109図)と、ロクロ成形1類4%、ロクロ成形2類17%、ロクロ成形3類28%、ロクロ成形4類29%、非ロクロ成形22%となる。また、口縁部にタールが付着したものはロクロ成形4類が大部分を占め、その他のタイプの土師器皿には余り認められない。また、墨書が記されたものもあり、387は底部外面に「□師 沙弥 浄土 □」と記されているロクロ成形1類である。

第11表 SK3029出土遺物集計表

種 別	破 片	口 縁	種 別	破 片	口 縁	種 別	破 片	口 縁
瀬戸美濃窯産陶器	27	31	瀬戸美濃・天目茶碗	3	2	土師器・皿	2086	1281
土師器	2088	1281	瀬戸美濃・丸碗	0	0	土師器・大形製品	0	0
瓦器	2	0	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・小形製品	2	0
常滑窯産陶器	2	0	瀬戸美濃・台付碗	0	0	土師器・錆釜	0	0
信楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・小碗	0	0	土師器・その他	0	0
楽楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・香茶碗	0	0	土師器・不明	0	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・緑釉皿	0	0	土師器・皿ロクロ成形	1997	1044
備前窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・腰折皿	0	0	土師器・皿ロクロⅠ類	194	214
唐津窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・灰軸端反皿	0	0	土師器・皿ロクロⅡ類	521	496
朝鮮産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・鉄軸端反皿	0	0	土師器・皿ロクロⅢ類	154	256
中国産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・折縁皿	0	0	土師器・皿非ロクロ成形	89	237
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石軸端反皿	0	0	土師器・皿非ロクロⅠ類	79	214
瓦	0	—	瀬戸美濃・端反皿	0	0	土師器・皿非ロクロⅡ類	8	17
壁土・鋳型など	0	—	瀬戸美濃・鉄軸丸皿	0	0	土師器・皿非ロクロⅢ類	2	6
木製品	0	—	瀬戸美濃・鉄軸丸皿	0	0	土師器・羽付鍋	0	0
石製品	1	—	瀬戸美濃・長石軸丸皿	0	0	土師器・内耳鍋	0	0
金属製品	5	—	瀬戸美濃・丸皿	0	0	土師器・炮烙鍋	0	0
金属製品(鉄製品)	4	—	瀬戸美濃・稜皿	0	0	土師器・釜	0	0
金属製品(銅製品)	1	—	瀬戸美濃・内壳皿	0	0	常滑・真焼製品	2	0
自然遺物(骨等)	0	—	瀬戸美濃・菊皿	0	0	常滑・赤物製品	0	0
その他	0	—	瀬戸美濃・稜花皿	0	0	中国・青磁	0	0
総数	2130	1312	瀬戸美濃・ひだ皿	0	0	中国・白磁	0	0
			瀬戸美濃・重圈皿	1	0	中国・青花	0	0
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	瀬戸美濃・搦鉢1類	0	0
			瀬戸美濃・平鉢	0	0	瀬戸美濃・搦鉢2類	0	0
			瀬戸美濃・大皿	0	0	瀬戸美濃・搦鉢3類	0	0
			瀬戸美濃・向付	0	0	瀬戸美濃・搦鉢4類	0	0
			瀬戸美濃・筒形製品	0	0	瀬戸美濃・搦鉢5類	2	2
			瀬戸美濃・壺類	2	0	瀬戸美濃・搦鉢6類	0	0
			瀬戸美濃・瓶類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢7類	0	0
			瀬戸美濃・花瓶類	2	12	瀬戸美濃・搦鉢8類	0	0
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢9類	0	0
			瀬戸美濃・水注類	1	12	瀬戸美濃・搦鉢10類	0	0
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢11類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢その他	0	0

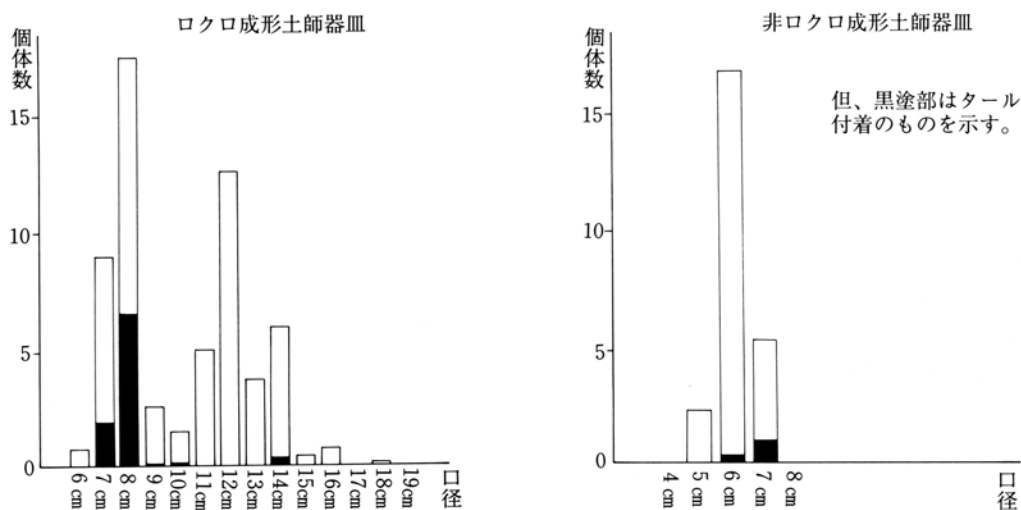


第108図 遺物実測図 SK3029

第12表 SK3029出土土師器皿口径別分布表

ロク口成形					非ロク口成形	
口径	全体	端反	直線	内彎	口径	全体
5cm	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3cm	0(0)
6cm	9(0)	3類 (4(0) 3(0) 20(2))	3類 または 4類 (5(0) 34(0) 66(28))	4類 (71(20) 124(49))	4cm	0(0)
7cm	108(23)				5cm	22(0)
8cm	210(79)				6cm	163(3)
9cm	31(1)	2類 (8(0) 3(2) 14(0) 38(0) 24(0) 31(0) 3(0) 5(0))	1類 (18(0) 14(0) 19(0) 103(0) 21(0) 37(4) 2(0) 4(0))	0(0)	7cm	51(0)
10cm	18(2)				8cm	0(0)
11cm	60(0)				9cm	0(0)
12cm	151(0)				10cm	0(0)
13cm	45(0)				11cm	0(0)
14cm	71(4)				12cm	0(0)
15cm	5(0)				13cm	0(0)
16cm	9(0)				14cm	0(0)
17cm	0(0)				15cm	0(0)
18cm	2(0)				16cm	0(0)
19cm	0(0)	17cm	0(0)			
20cm	0(0)	18cm	0(0)			
		19cm	0(0)			
		20cm	0(0)			

() はタール付着の口縁数、数値は口縁残存率で単位は12分の1



第109図 SK3029出土土師器皿 口径分布図 (口縁部計測法で算定)

D SD6068出土遺物（第110図 404～432）

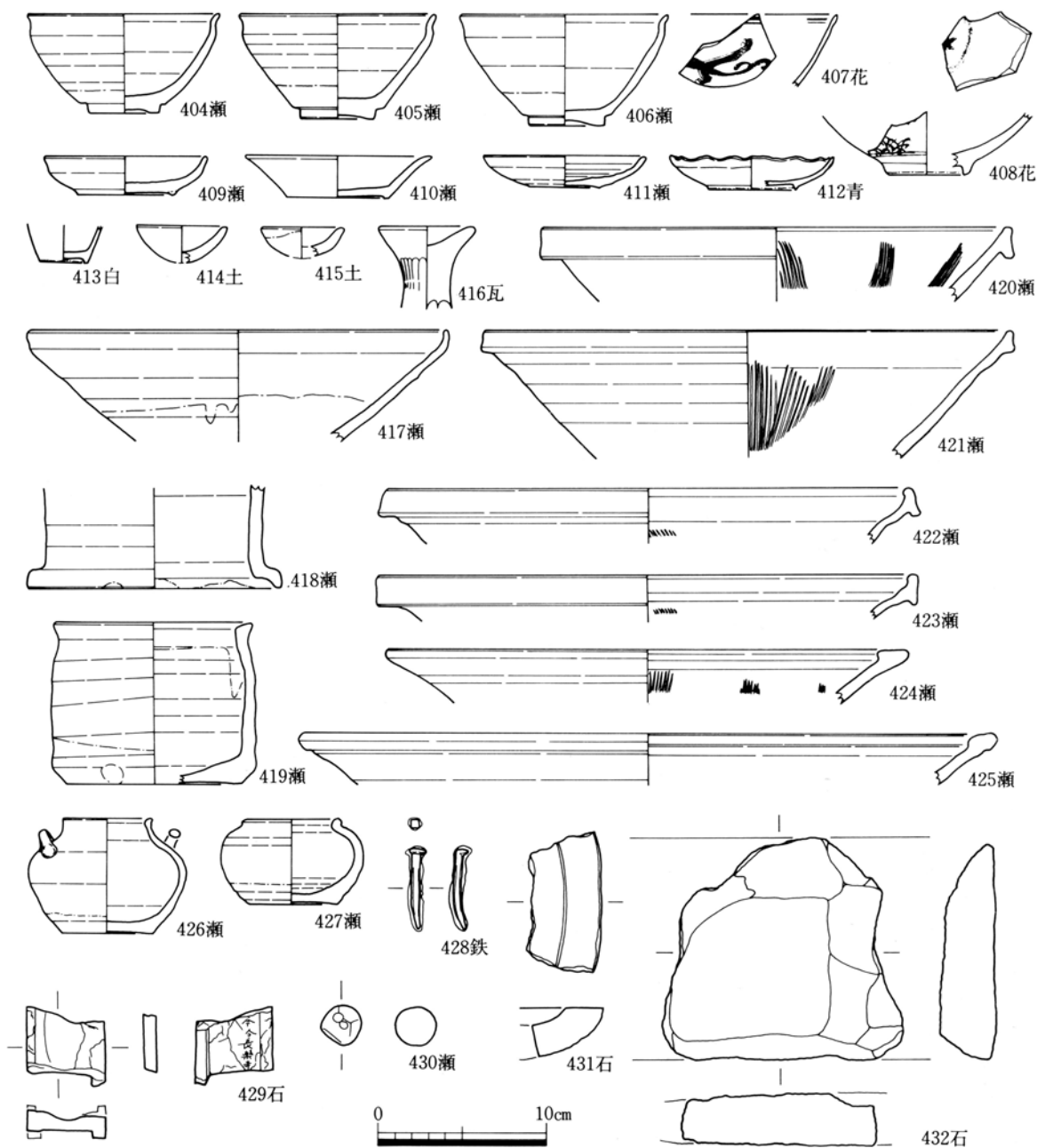
SD6068は91A区に所在するSK6570に切られる区画溝である。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、土師器、中国窯産磁器、石製品、金属製品が出土し、木製品は遺存しなかった。瀬戸美濃窯産陶器の年代観から城下町期Ⅱ-1～2期（16世紀第3四半期）に属する資料である。

椀は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗・中国窯産青花碗があり、前者は錆釉を施した内反高台（底部形3類）のもの（404・406）が多い。皿は土師器の他、瀬戸美濃窯産陶器の灰釉丸皿（409）、稜皿（410）、重圈皿（411）がある。412は底部外面に白磁釉が施された中国窯産の青磁皿である。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は口縁部の形態が5・6・8・9類のものがある。瀬戸美濃窯産陶器の大形製品には無釉の筒形製品（419）と花瓶等の脚部（418）が存在する。同じく小形製品には双耳が付いた水注（426）と茶入（427）があり、いずれも口縁端部を丸めている。

この他に鋳物工具としてのトリベ、瓦器、陶丸、硯、砥石、茶臼等も見られる。トリベ（414・415）の内面には銅が溶解した付着物が見られる。瓦器（416）は杯状の形態を呈し下半部が欠損している。口縁部にタールが多量に付着していることから瓦灯下部の杯部と推定される。硯（429）は裏面に線刻で「今長楽寺」と記されている。砥石（432）は砂岩製の大型のもので荒砥として使用されたものであろう。茶臼（431）は下臼の受け皿部が出土した。

第13表 SD6068出土遺物集計表

種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	456	182	瀬戸美濃・天目茶碗	89	51	土師器・皿	864	1079
土師器	1222	1155	瀬戸美濃・丸碗	3	6	土師器・大形製品	1	0
瓦器	1	0	瀬戸美濃・平碗	2	2	土師器・小形製品	0	0
常滑窯産陶器	39	0	瀬戸美濃・台付碗	3	0	土師器・鍋釜	356	76
信楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・小碗	1	4	土師器・その他	1	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・沓茶碗	0	0	土師器・不明	0	0
備前窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・緑釉皿	15	16	土師器・皿ロクロ成形	626	185
唐津窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・腰折皿	2	2	土師器・皿ロクロⅠ類	4	3
朝鮮窯産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・灰釉端反皿	6	8	土師器・皿ロクロⅡ類	116	141
中国窯産陶磁器	18	6	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	0	0	土師器・皿ロクロⅢ類	11	19
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・折縁皿	0	0	土師器・皿非ロクロ成形	238	894
瓦	0	—	瀬戸美濃・長石釉端反皿	0	0	土師器・皿非ロクロⅠ類	175	672
壁土・鋳型など	10	—	瀬戸美濃・端反皿	6	8	土師器・皿非ロクロⅡ類	24	131
木製品	0	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	4	4	土師器・皿非ロクロⅢ類	32	87
石製品	5	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	0	0	土師器・羽付鍋	148	12
金属製品	2	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	0	0	土師器・内耳鍋	50	53
金属製品（鉄製品）	1	—	瀬戸美濃・丸皿	4	4	土師器・炮烙鍋	0	0
金属製品（銅製品）	1	—	瀬戸美濃・稜皿	1	0	土師器・釜	17	8
自然遺物（骨等）	2	—	瀬戸美濃・内壳皿	0	0	常滑・真焼製品	33	0
その他	2	—	瀬戸美濃・菊皿	0	0	常滑・赤物製品	6	0
総数	1759	1343	瀬戸美濃・棧花皿	0	0	中国・青磁	10	6
			瀬戸美濃・ひだ皿	0	0	中国・白磁	2	0
			瀬戸美濃・重圈皿	23	27	中国・青花	6	0
			瀬戸美濃・扶皿	0	0	瀬戸美濃・播鉢1類	0	0
			瀬戸美濃・平鉢	5	4	瀬戸美濃・播鉢2類	6	6
			瀬戸美濃・大皿	3	2	瀬戸美濃・播鉢3類	0	0
			瀬戸美濃・向付	1	0	瀬戸美濃・播鉢4類	7	6
			瀬戸美濃・筒形製品	4	5	瀬戸美濃・播鉢5類	6	5
			瀬戸美濃・壺類	6	4	瀬戸美濃・播鉢6類	8	8
			瀬戸美濃・瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢7類	1	2
			瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢8類	2	2
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	0	0
			瀬戸美濃・水注類	1	0	瀬戸美濃・播鉢10類	0	0
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・播鉢11類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	2	3	瀬戸美濃・播鉢その他	0	0



第110図 遺物実測図 SD6068

E SK6570出土遺物 (第111~112図 433~498)

SK6570は91A区に所在する巨大な廃棄土坑と考えられ、SK6151に切られ、SK6068を切っている。SK6570とSK6151の間層には天正地震による噴砂が認められ、1586年以前の絶対年代が付与できる。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、土師器、中国窯産磁器、瓦、石製品、金属製品等が出土し、木製品は遺存しなかった。瀬戸美濃窯産陶器の年代観から城下町期Ⅱ-2期に属する資料である。

碗は瀬戸美濃窯産陶器の天目茶碗、丸碗、小碗が存在する。天目茶碗はほとんどが化粧掛けを施さず口縁部が短くくびれるものである。

皿は瀬戸美濃窯産陶器の丸皿、内禿皿、折縁皿、重圏皿と土師器皿と中国窯産青花皿がある。462は瀬戸美濃窯産陶器の焼き締めたタイプのひだ皿で、胎土は暗褐色を呈しており堅緻である。463も同種の焼成で体部が内彎する大きめの皿である。中国窯産青花皿は皿Ⅱ類（端反皿）の他に口縁部が内彎する青花皿Ⅲ類（459）がある。

浅鉢類には瀬戸美濃窯産陶器の焼き締めたタイプの大皿（473・479）が存在し、底部は碁笥底状に作る。479はやや焼成不良で赤褐色の胎土を持ち、口縁部にタールが付着する。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は口縁部形態が6・7・9類のものである。

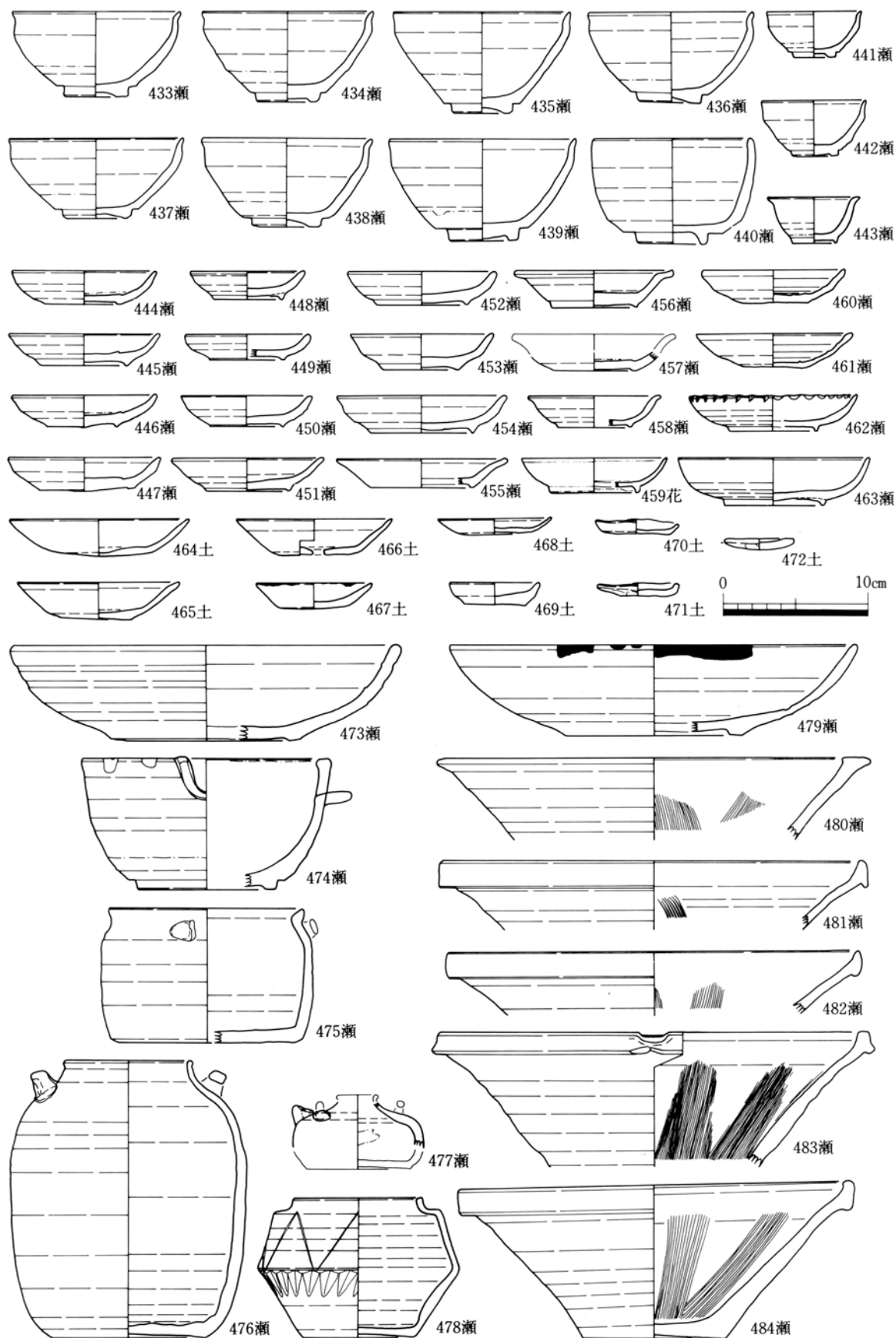
壺は瀬戸美濃窯産陶器の焼き締めた製品があり、双耳のつくもの（476）と体部が算盤玉形の形状をなすもの（478）がある。後者は体部上部に線刻が施され、おそらく備前窯の製品を瀬戸美濃の陶工が模倣したものと考えられる。瓶（485～489）は瀬戸美濃窯産陶器の舟徳利形のものが多い。

特殊な製品として瀬戸美濃窯産陶器狛犬（498）が挙げられる。円筒状の胴体に足や顔面が取り付けられ、紫褐色の鉄釉を掛けている阿形の狛犬である。台部、右後足、両前足、尾が欠損している。なお、この狛犬は、愛知県西尾市久麻久神社所蔵の狛犬と形態や製作技法が極めて類似していることから、同一工人集団による製品の可能性が考えられる。

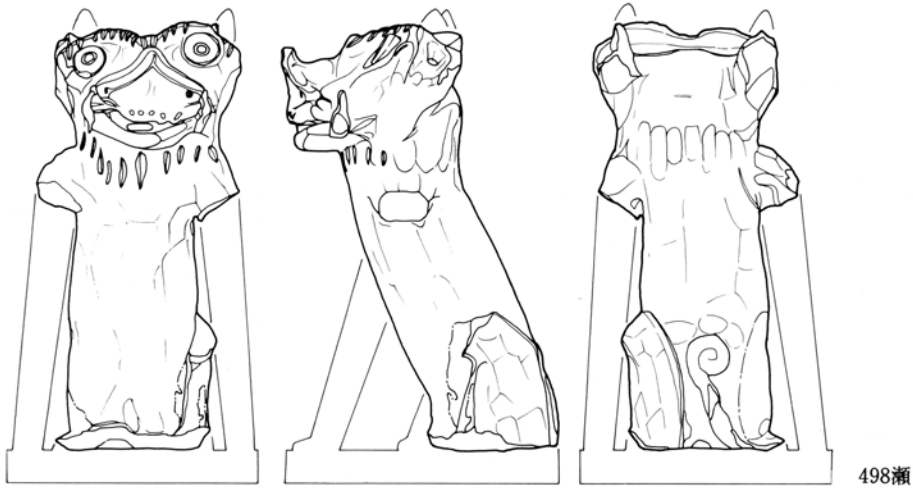
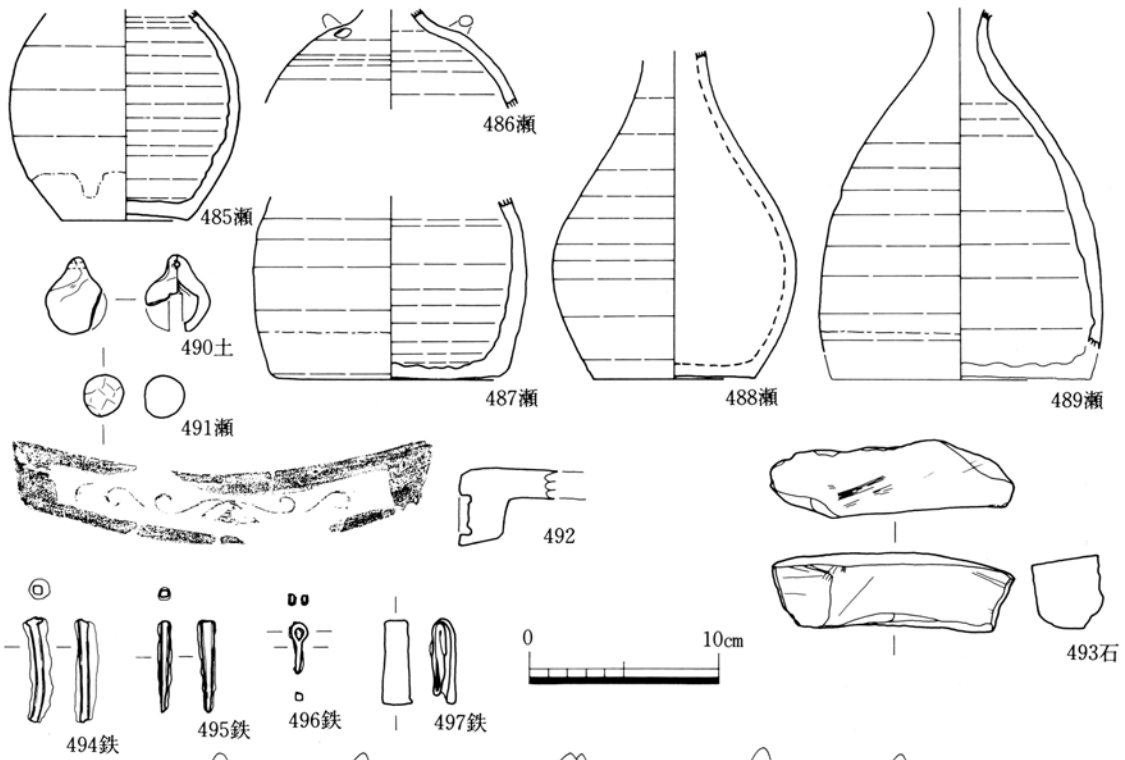
この他に瓦が数点出土している。このうち、均整唐草紋軒平瓦（Ⅱd類：492）が1点出土している。中心飾りに松葉状の紋様を置き、上向き、下向き、下向きの唐草を配する。唐草はすべて巻き込み、細くシャープである。天正14年以前に清須城（城下町）でも瓦が出土していることは既に確認され、軒瓦の紋様についてもある程度推測されているが、明確に時期が判定できる遺構・層位から出土した軒瓦の事例は今回が初例である。

第14表 SK6570出土遺物集計表

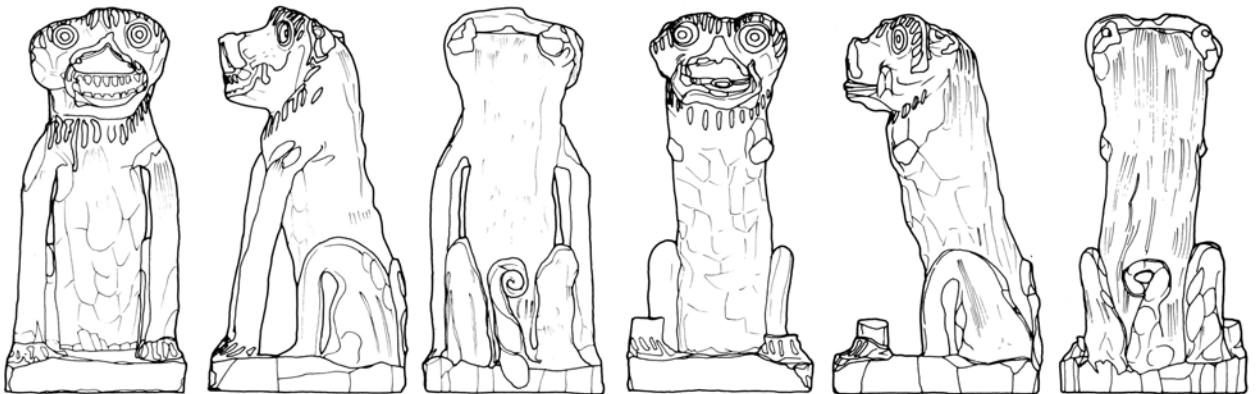
種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	463	471	瀬戸美濃・天目茶碗	88	107	土師器・皿	1254	716
土師器	1759	843	瀬戸美濃・丸碗	7	18	土師器・大形製品	3	1
瓦器	0	0	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・小形製品	0	0
常滑窯産陶器	29	2	瀬戸美濃・台付碗	0	0	土師器・鍋釜	500	126
信楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・小碗	7	19	土師器・その他	2	0
楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・沓茶碗	0	0	土師器・不明	0	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・緑釉皿	2	0	土師器・皿口クロ成形	1171	455
備前窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・腰折皿	0	0	土師器・皿口クロⅠ類	0	0
唐津窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・灰釉端反皿	7	13	土師器・皿口クロⅡ類	316	425
朝鮮窯産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	0	0	土師器・皿口クロⅢ類	17	28
中国窯産陶磁器	24	25	瀬戸美濃・折縁皿	1	11	土師器・皿非口クロ成形	83	261
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	0	0	土師器・皿非口クロⅠ類	57	193
瓦	15	—	瀬戸美濃・端反皿	8	24	土師器・皿非口クロⅡ類	0	0
埴土・埴型など	0	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	25	108	土師器・皿非口クロⅢ類	25	68
木製品	0	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	1	1	土師器・羽付鍋	1	0
石製品	3	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	0	0	土師器・内耳鍋	110	91
金属製品	33	—	瀬戸美濃・丸皿	31	121	土師器・炮烙鍋	11	10
金属製品（鉄製品）	31	—	瀬戸美濃・稜皿	3	6	土師器・釜	59	24
金属製品（銅製品）	2	—	瀬戸美濃・内禿皿	9	41	常滑・真焼製品	19	1
自然遺物（骨等）	16	—	瀬戸美濃・菊皿	0	0	常滑・赤物製品	10	1
その他	10	—	瀬戸美濃・稜花皿	0	0	中国・青磁	2	0
総数	2352	1341	瀬戸美濃・ひだ皿	6	9	中国・白磁	12	7
			瀬戸美濃・重圏皿	40	41	中国・青花	10	18
			瀬戸美濃・扶皿	0	0	瀬戸美濃・播鉢Ⅰ類	0	0
			瀬戸美濃・平鉢	3	2	瀬戸美濃・播鉢Ⅱ類	3	3
			瀬戸美濃・大皿	14	11	瀬戸美濃・播鉢Ⅲ類	0	0
			瀬戸美濃・向付	2	2	瀬戸美濃・播鉢Ⅳ類	2	2
			瀬戸美濃・筒形製品	8	5	瀬戸美濃・播鉢Ⅴ類	2	3
			瀬戸美濃・壺類	52	17	瀬戸美濃・播鉢Ⅵ類	5	8
			瀬戸美濃・瓶類	27	3	瀬戸美濃・播鉢Ⅶ類	5	14
			瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・播鉢Ⅷ類	1	2
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢Ⅸ類	1	1
			瀬戸美濃・水注類	3	0	瀬戸美濃・播鉢Ⅹ類	3	4
			瀬戸美濃・水筒類	0	0	瀬戸美濃・播鉢Ⅺ類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	0	0	瀬戸美濃・播鉢その他	0	0
瀬戸美濃・碗	102	144						
瀬戸美濃・皿	121	243						
瀬戸美濃・浅鉢	19	15						
瀬戸美濃・播鉢	74	40						
瀬戸美濃・大形製品	133	25						
瀬戸美濃・小形製品	7	0						
瀬戸美濃・香炉	1	0						
瀬戸美濃・鍋	1	1						
瀬戸美濃・その他	5	3						
瀬戸美濃・不明	0	0						



第111図 遺物実測図 SK6570(1)



<参考>愛知県西尾市久麻久神社所蔵狛犬



呷形

呵形

第112図 遺物実測図 SK6570(2)

F SK6151出土遺物（第113～118図 499～639）

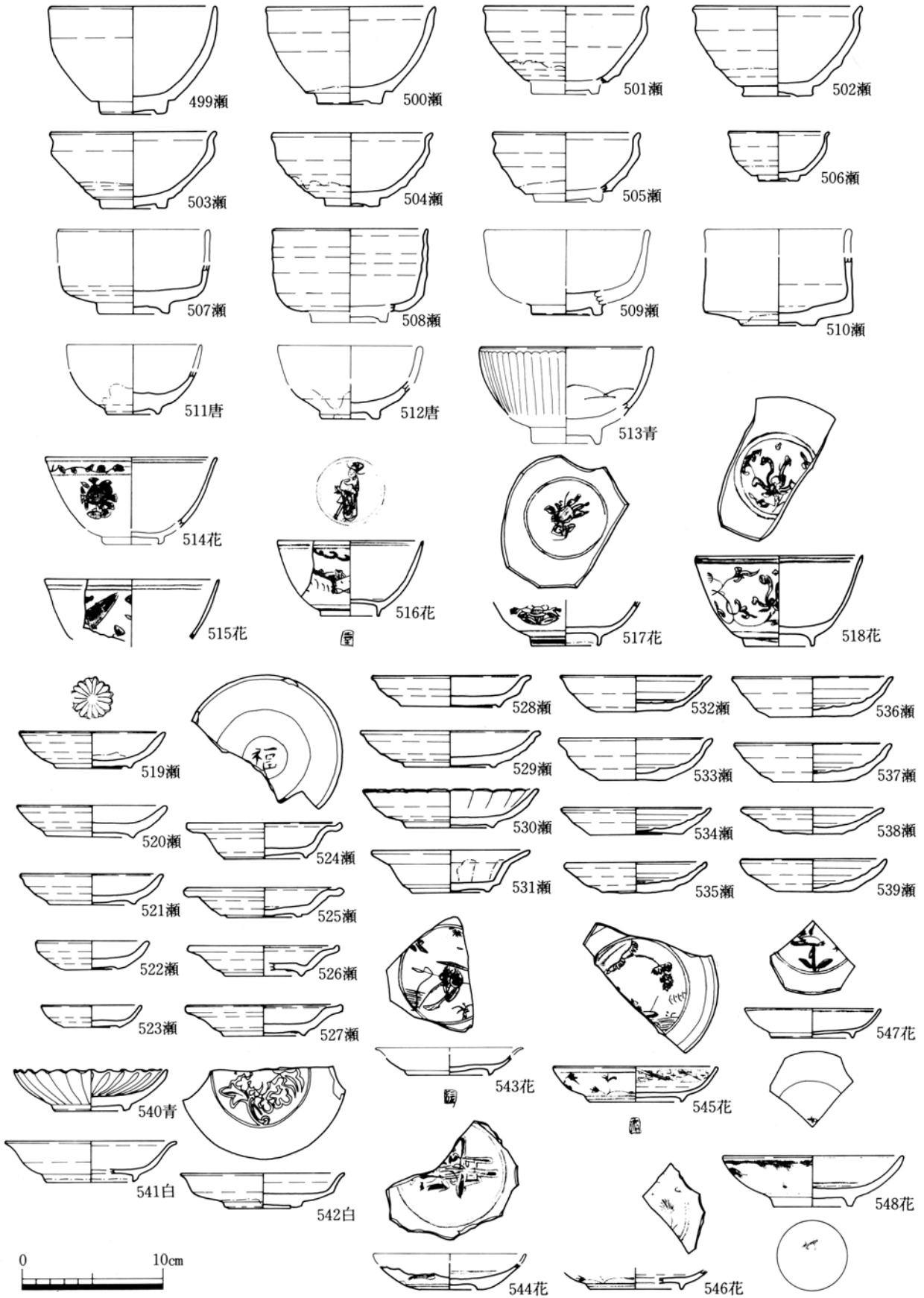
SK6151は91A区に所在する巨大な廃棄土坑と考えられ、SK6570とSD6068を切っている。SK6151は天正地震による噴砂層の上位から掘削されていることから、1586年以降の絶対年代が付与できる。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、唐津窯産陶器、土師器、中国窯産磁器、瓦、石製品、金属製品等が出土し、木製品は遺存しなかった。瀬戸美濃窯産陶器では長石釉を施した製品が見られること等から、城下町期Ⅲ-1期に属する資料と考えられる。

碗は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗・丸碗・沓茶碗・小碗、唐津窯産陶器灰釉碗、中国窯産青磁蓮弁紋碗・青花碗が存在する。天目茶碗はほとんどが化粧掛けを施さないもので、510は黒色の鉄釉を施したいわゆる瀬戸黒の沓茶碗である。中国窯産青花碗は碗Ⅲ類と碗Ⅳ類が主体を占める。

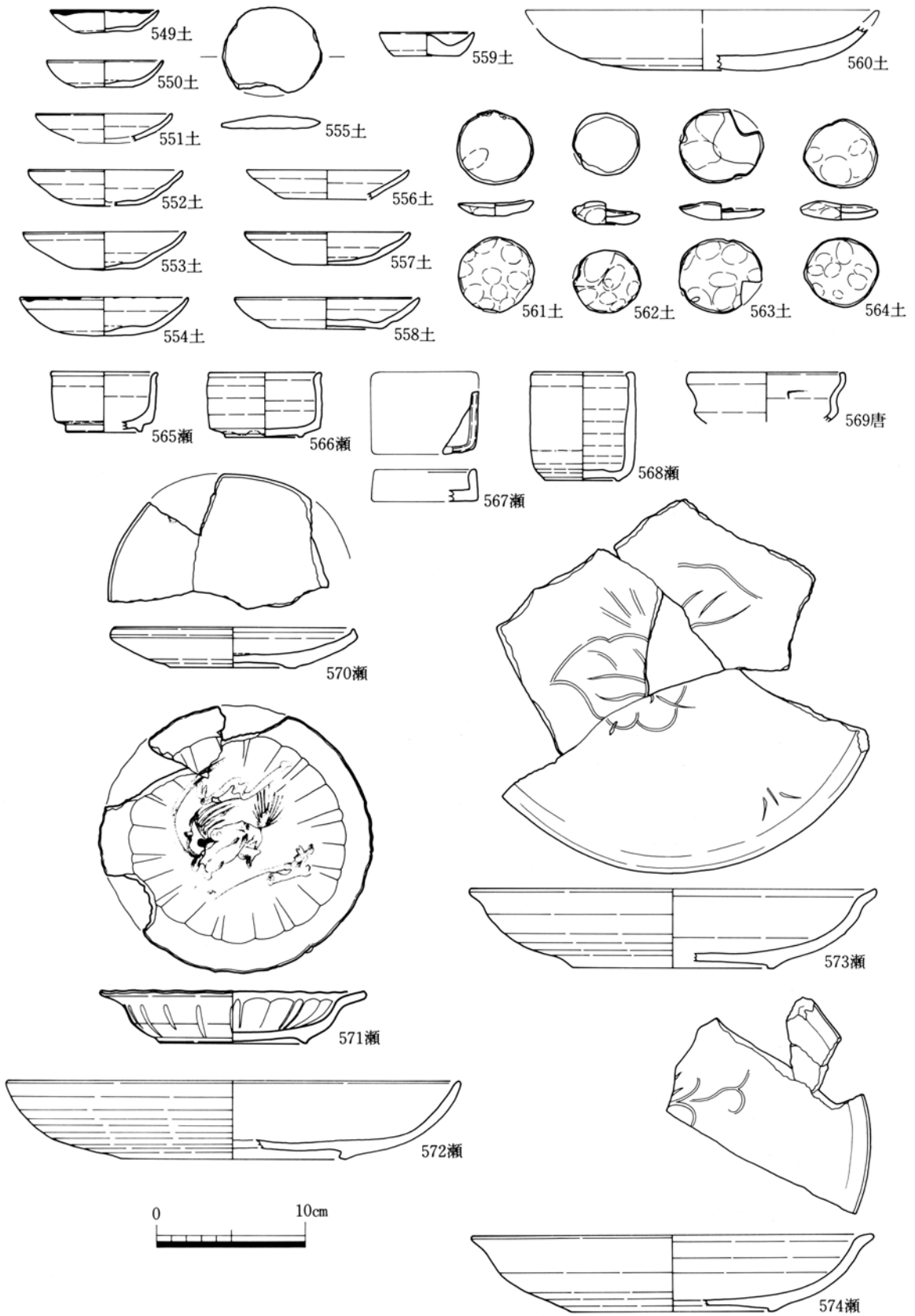
皿は瀬戸美濃窯産陶器端反皿・丸皿・折縁皿・重圈皿、中国窯産青磁皿・白磁皿・青花皿、土師器皿等が存在する。531は体部が途中で大きく屈曲する鉄釉折縁皿で、内面に菊花状に灰釉を流し掛けられている。重圈皿は堅緻に焼き締めたものが多数を占めるが、薄い錆釉を施したものも見られる。540は口縁部を波状にする中国窯産青磁菊皿、541は中国窯産白磁端反皿、542は内面にレリーフで紋様を施した白磁皿で、クリーム色の滑らかな胎土を持っている。中国窯産青花皿は皿Ⅲ類が主体を占めるが、胎土が陶質の粗製青花皿Ⅸ類（548）も見られるようになる。土師器皿はロクロ成形の皿と非ロクロ成形の皿がある。ロクロ成形の土師器皿は量目がバラエティーに富んでおり、口径が20cm近くに及ぶもの（560）も存在する。非ロクロ成形の土師器皿は横ナデを全く施さないもの（561～564）である。555は表裏両面に回転糸切り痕が残存する円盤状の土師器である。

第15表 SK6151出土遺物集計表

種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	743	658	瀬戸美濃・天目茶碗	114	89	土師器・碗	0	0
土師器	2213	1843	瀬戸美濃・丸碗	14	14	土師器・皿	1504	1542
瓦器	1	0	瀬戸美濃・平碗	2	2	土師器・大形製品	3	2
常滑窯産陶器	46	4	瀬戸美濃・台付碗	3	8	土師器・小形製品	0	0
信楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・小碗	5	14	土師器・鍋釜	704	299
楽窯産陶器	1	0	瀬戸美濃・沓茶碗	2	1	土師器・その他	2	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・縁釉皿	4	3	土師器・不明	0	0
備前窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・腰折皿	1	0	土師器・皿ロクロ成形	1406	1024
唐津窯産陶器	11	4	瀬戸美濃・灰釉端反皿	4	6	土師器・皿ロクロⅠ類	5	8
朝鮮窯産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	2	2	土師器・皿非ロクロⅡ類	270	373
中国窯産陶磁器	55	67	瀬戸美濃・折縁皿	9	16	土師器・皿ロクロⅢ類	406	632
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	19	42	土師器・皿非ロクロ成形	98	518
瓦	18	—	瀬戸美濃・端反皿	34	66	土師器・皿非ロクロⅠ類	23	79
壁土・鋳型など	166	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	37	75	土師器・皿非ロクロⅡ類	1	3
木製品	0	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	3	7	土師器・皿非ロクロⅢ類	73	436
石製品	22	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	0	0	土師器・羽付鍋	2	2
金属製品	121	—	瀬戸美濃・丸皿	40	82	土師器・内耳鍋	144	83
金属製品（鉄製品）	106	—	瀬戸美濃・稜皿	5	15	土師器・炮烙鍋	244	133
金属製品（銅製品）	15	—	瀬戸美濃・内禿皿	9	31	土師器・釜	204	79
自然遺物（骨等）	0	—	瀬戸美濃・菊皿	2	8	常滑・真焼製品	32	1
その他	0	0	瀬戸美濃・稜花皿	0	0	常滑・赤物製品	14	3
総数	3397	2576	瀬戸美濃・ひだ皿	2	2	中国・青磁	6	15
			瀬戸美濃・重圈皿	86	162	中国・白磁	18	14
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	中国・青花	31	38
			瀬戸美濃・平鉢	2	4	瀬戸美濃・搦鉢1類	0	0
			瀬戸美濃・大皿	22	18	瀬戸美濃・搦鉢2類	4	4
			瀬戸美濃・向付	24	18	瀬戸美濃・搦鉢3類	3	3
			瀬戸美濃・筒形製品	17	33	瀬戸美濃・搦鉢4類	1	1
			瀬戸美濃・壺類	3	1	瀬戸美濃・搦鉢5類	3	3
			瀬戸美濃・瓶類	10	0	瀬戸美濃・搦鉢6類	9	10
			瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢7類	23	28
			瀬戸美濃・甕類	12	5	瀬戸美濃・搦鉢8類	3	3
			瀬戸美濃・水注類	1	3	瀬戸美濃・搦鉢9類	1	1
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢10類	7	7
			瀬戸美濃・茶入類	3	7	瀬戸美濃・搦鉢11類	7	8

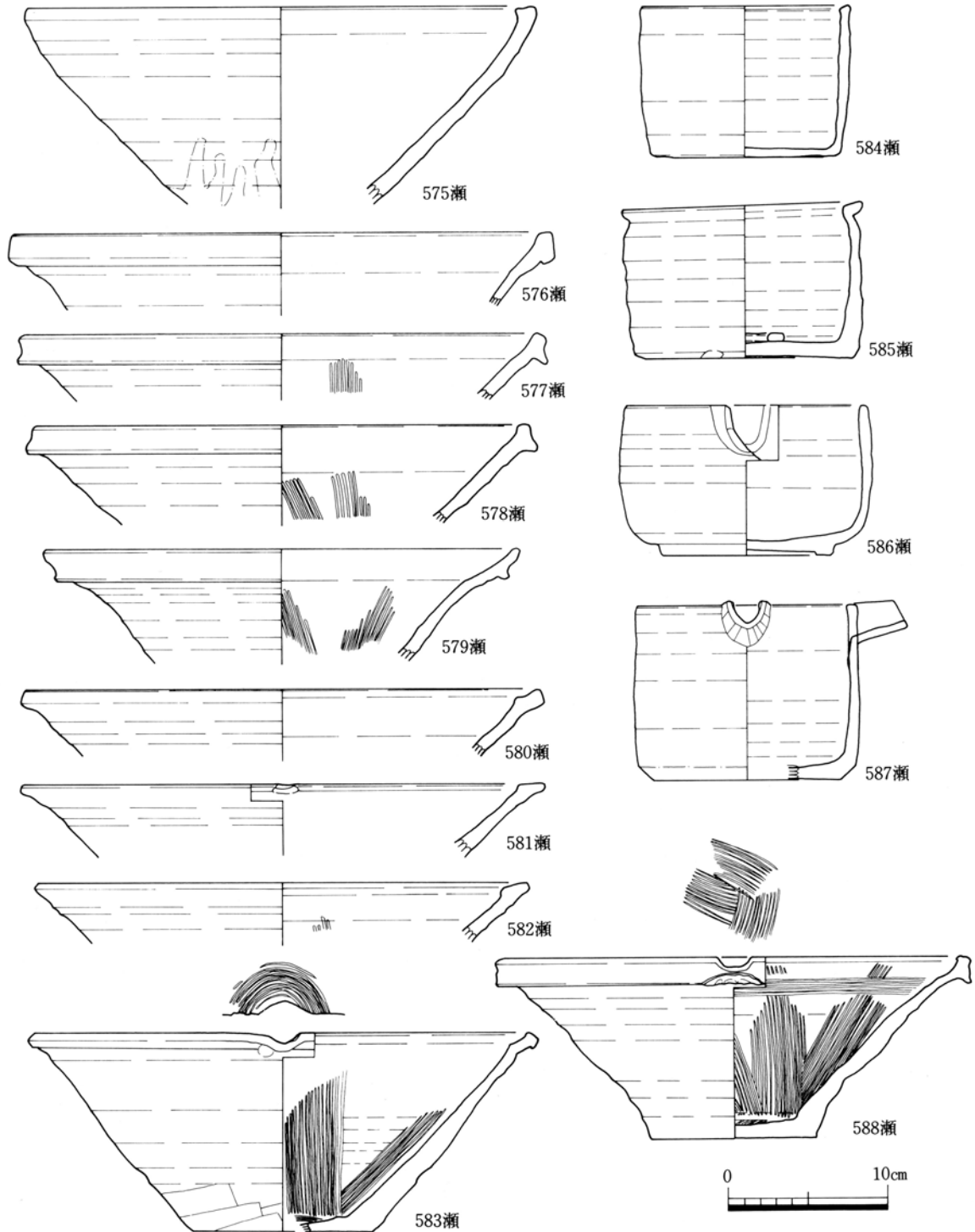


第113図 遺物実測図 SK6151(1)



第114図 遺物実測図 SK6151(2)

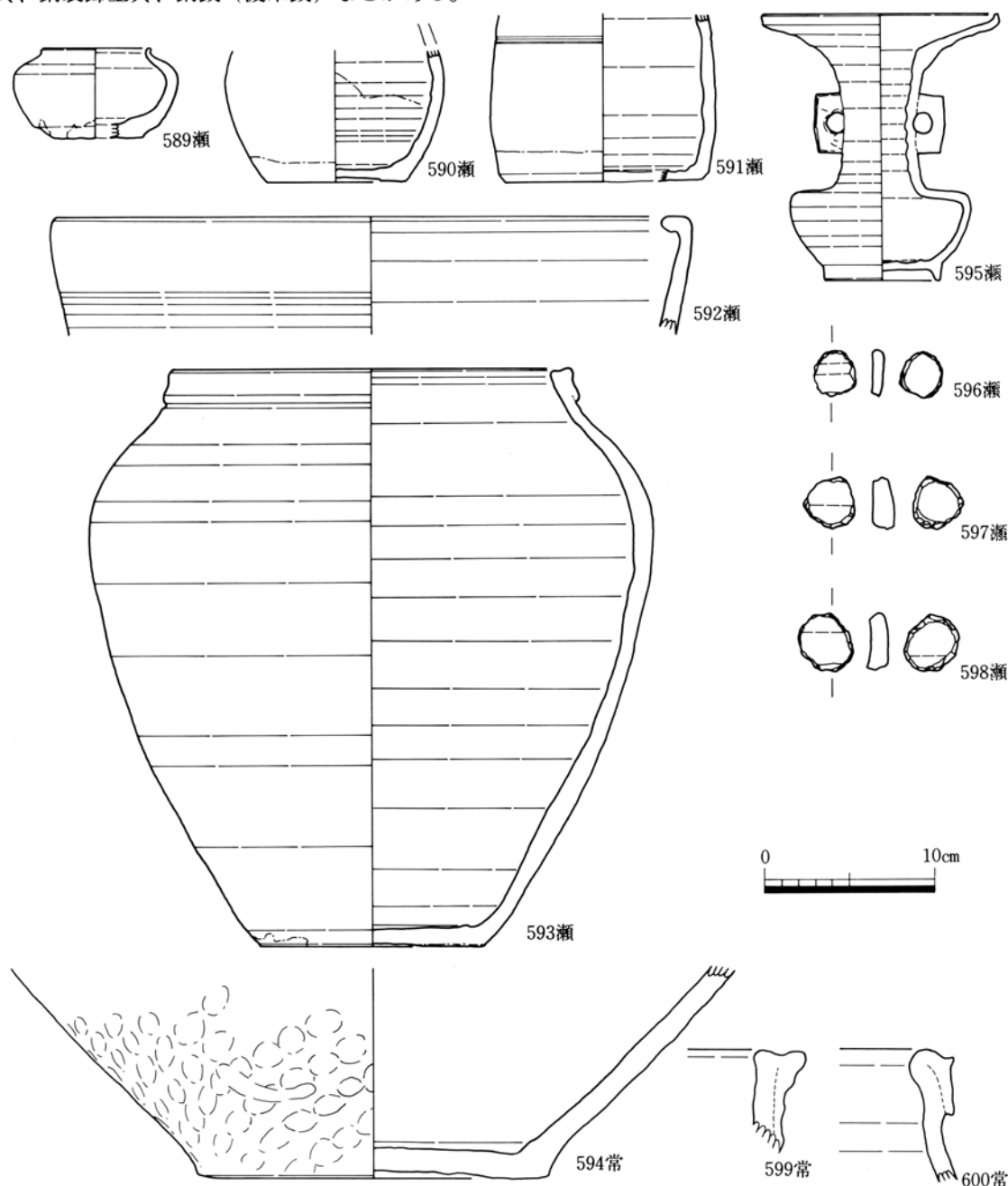
浅鉢類は瀬戸美濃窯産陶器大皿と向付がある。大皿は長石釉または灰釉に銅緑釉とタンパンを施したいわゆる黄瀬戸のものがある。571は長石釉大皿で内面に獅子の鉄絵紋様が描かれている。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は口縁部形態が6・7・9・10類のものである。筒形製品は鉄釉を施したものと焼き締めて堅緻に仕上げたものがある。花瓶は口縁部がラッパ状に開く瀬戸美濃窯産陶器(595)があるが、本遺構からは体部のみが出土した(上半部は約100m離れた地点から出土している)。甕は瀬戸美濃窯産陶器と常滑窯産陶器が存在する。前者は暗紫色の鉄釉を施し、口縁部を折り返して縁帯を作っている。後者は焼き締めて暗褐色の胎土を持つ真焼のものと同褐色の胎土を持つ赤物のものがある。



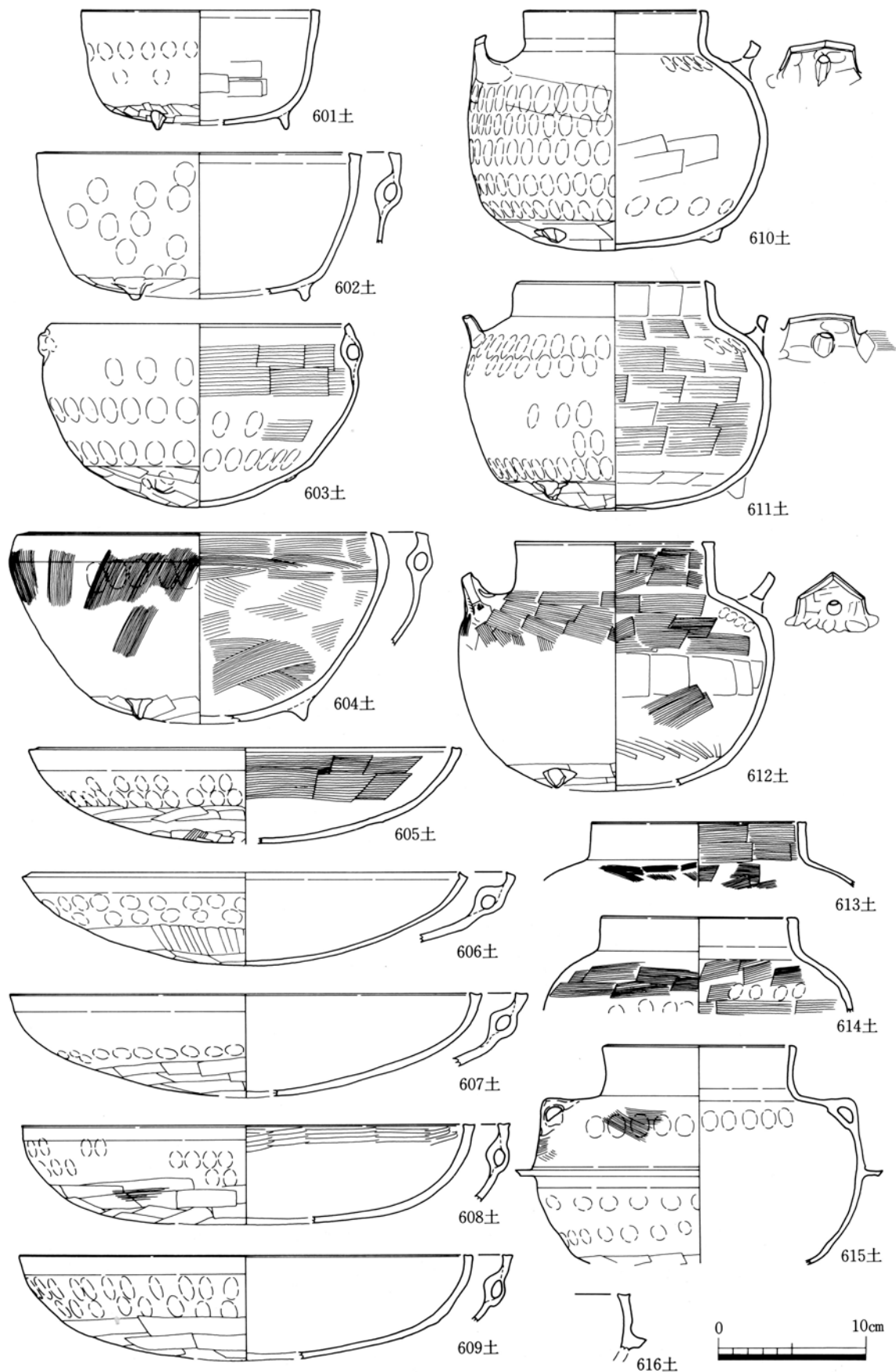
第115図 遺物実測図 SK6151(3)

鍋・釜類は土師器のみが存在し、羽付鍋（616）は極めて少ない。内耳鍋は口径に大小が認められる。形態も体部が僅かに開きながら直線的に伸びるタイプ（601・602）と口縁部にかけて内彎するタイプ（603・604）の二者がある。炮烙鍋（605～609）は体部が丸みを持ち、口縁部にかけては逆ハの字状に開くものである。耳は通常、口縁部に近い位置で二等辺三角形の配置で3ヶ所付けられる。内面底部にはハケ等の調整痕が認められず、外面に指オサエやヘラケズリが認められることから内型を用いて作成された物と考えられる。釜は紐状の粘土を縦方向に張り付けた耳を持つもの（615）と、五角形の粘土板を張り付けた耳を持つもの（610～612）があるが、後者の方が多くみられる。

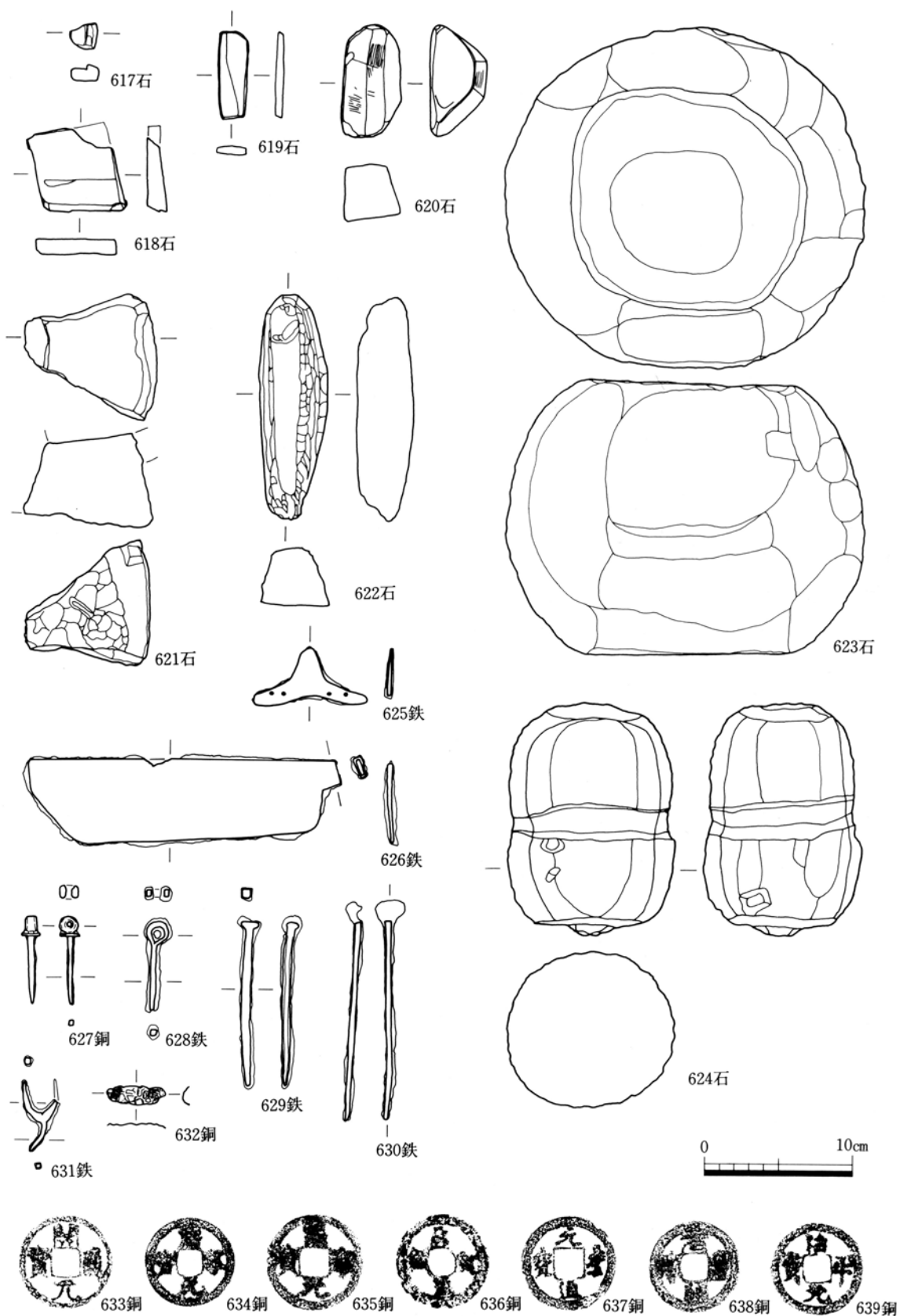
石製品は砥石、茶臼、墓塔類、バンドコ、火打石等がある。砥石は扁平な薄板状のものと多角柱状のものがある。金属製品は鉄製火打金、鉄製刃物、鉄製二股刺突具、鉄製釘、鉄製留金具、銅製留金具、銅製飾金具、銅銭（渡来銭）などがある。



第116図 遺物実測図 SK6151(4)



第117図 遺物実測図 SK6151(5)



第118図 遺物実測図 SK6151(6) (633~639はS=2:3)

G SX7005出土遺物（第119～121図 640～730）

SX7005は89D区に所在する不定形の土坑で、自然に形成された落込みを整地したものと考えられ、SD7023・SE7015等に切られている。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、楽窯産陶器、唐津窯産陶器、土師器、中国窯産磁器、瓦、石製品、金属製品等が出土し、木製品は遺存しなかった。瀬戸美濃窯産陶器の長石釉製品があること等から、城下町期Ⅲ-1～2期に属する資料と考えられる。

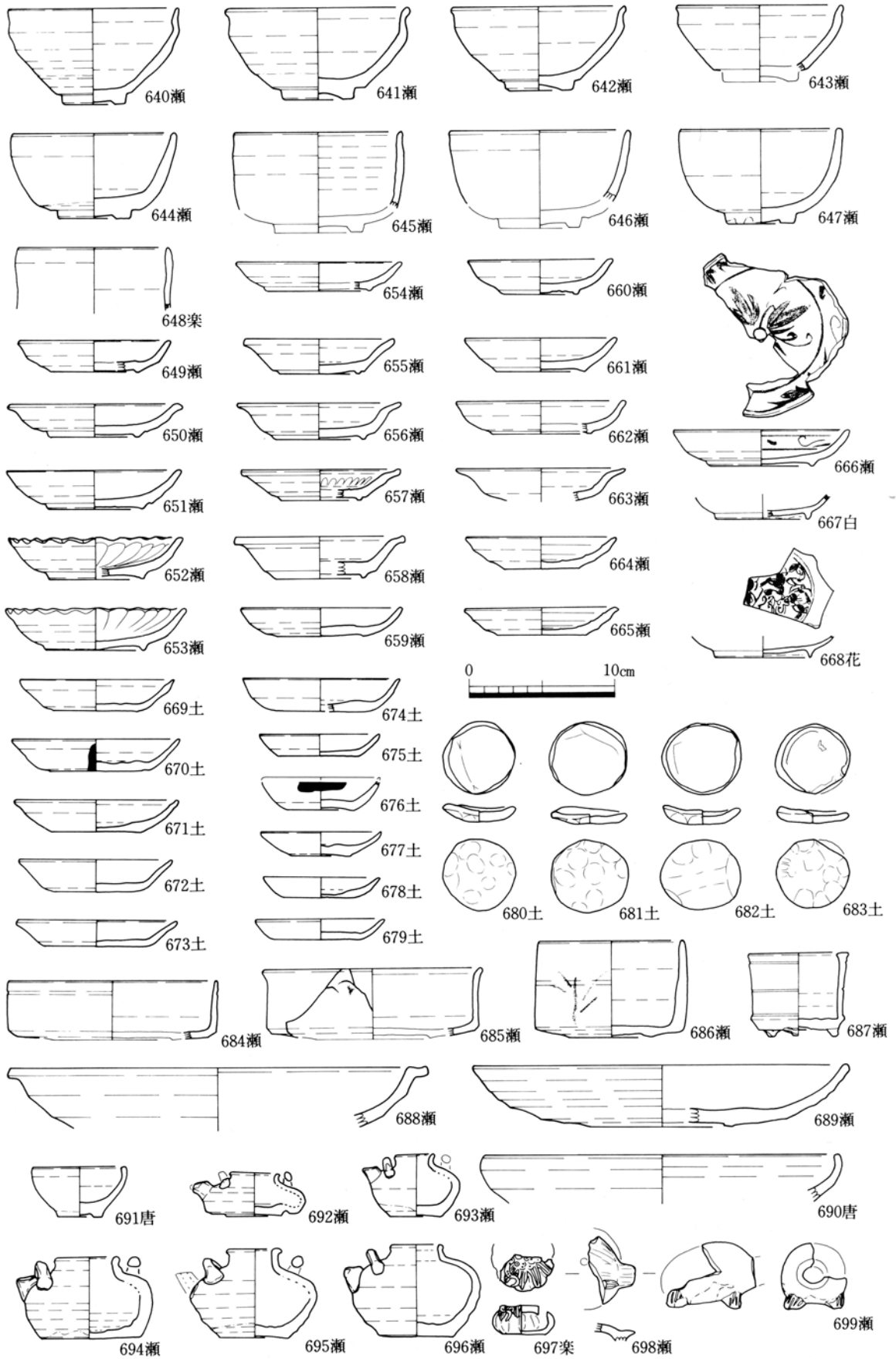
碗は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗・丸碗・小碗、楽窯産陶器碗等が存在し、他の遺構に比べ丸碗の割合が高い傾向が読み取れる。648は楽窯産の軟質陶器碗で黒色の釉を塗布したいわゆる黒楽茶碗である。

皿は瀬戸美濃窯産陶器端反皿・丸皿・内禿皿・菊皿・重圏皿、中国窯産青花皿、土師器皿等が存在する。652・653は口縁部まで菊花紋様が伸びる長石釉菊皿である。内面に鉄絵を描いた長石釉丸皿（666）もある。重圏皿は堅緻に焼き締めたものの他に、焼き締めず錆釉を施したものが一定量みられる。中国窯産磁器の皿は白磁端反皿（667）と青花皿が認められるがSK6151に比べると量的に少ない。668は外面に鉄釉が塗布された黄彩青花皿（バタビアンウェア）である。土師器皿はロクロ成形の皿と非ロクロ成形の皿がある。ロクロ成形の土師器皿は、体部が丸みを帯び口縁部をつまんで僅かに外折するもの（669～673）と、体部を内彎させ口縁部が上へ伸びるもの（674～679）がある。法量は小さいものが主体を占めている。非ロクロ成形土師器皿（680～683）は横ナデを全く施さないものである。

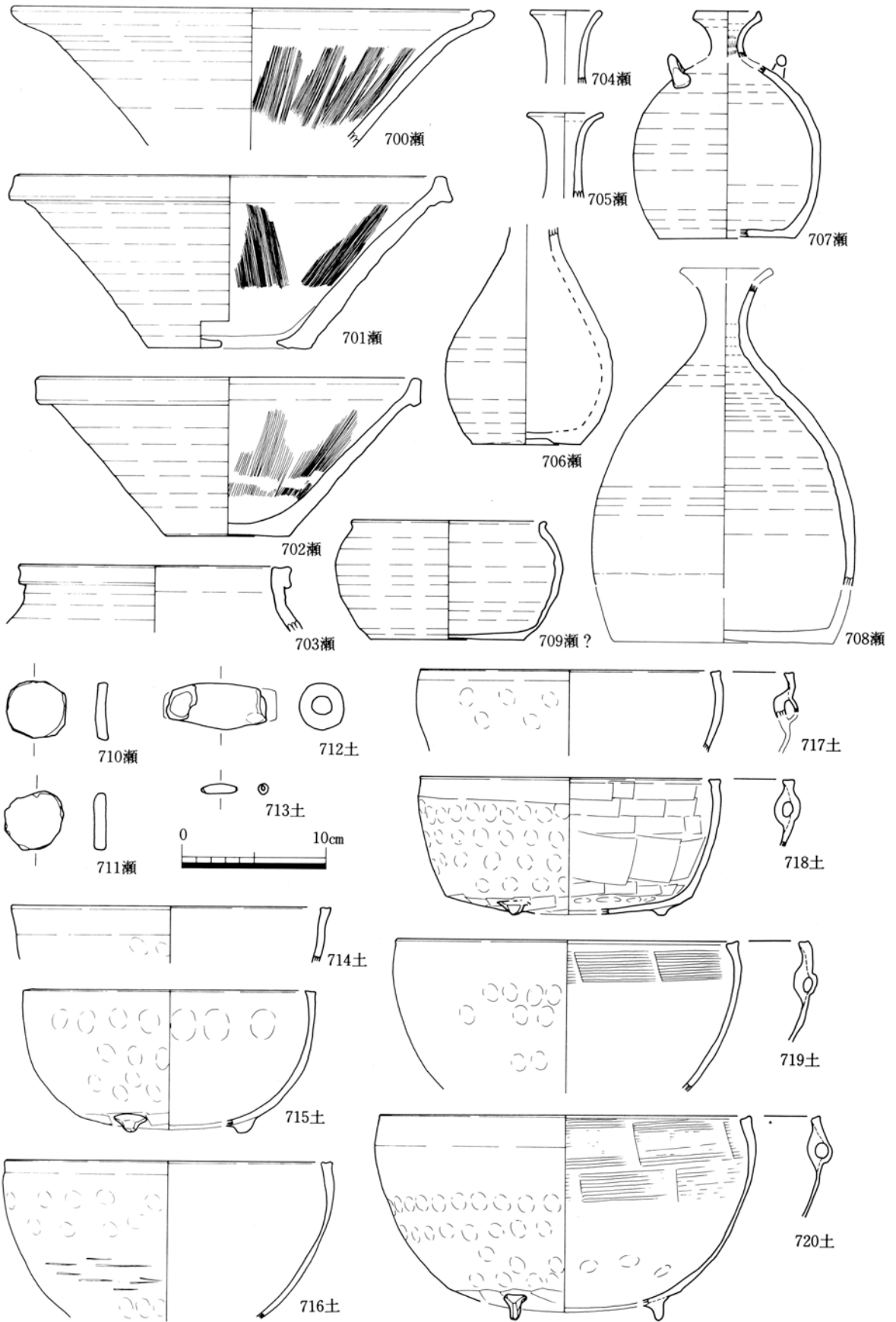
浅鉢は瀬戸美濃窯産陶器大皿と向付がある。大皿には鉄釉を掛けたものと焼き締めたものがあり、向付には黄瀬戸と長石釉のものがある。684・685は体部が直立する黄瀬戸向付で底部は基筒底となっている。686は長石釉向付で外面に草紋が3ヶ所に描かれている。

第16表 SX7005出土遺物集計表

種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	628	564	瀬戸美濃・天目茶碗	68	42	土師器・碗	0	0
土師器	1848	908	瀬戸美濃・丸碗	34	33	土師器・皿	561	580
瓦器	2	0	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・大形製品	7	7
常滑窯産陶器	93	33	瀬戸美濃・台付碗	0	0	土師器・小形製品	1	4
信楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・小碗	9	15	土師器・鍋釜	1276	317
楽窯産陶器	2	7	瀬戸美濃・香茶碗	0	0	土師器・その他	3	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・緑釉皿	1	2	土師器・不明	0	0
備前窯産陶器	1	0	瀬戸美濃・腰折皿	0	0	土師器・皿ロクロ成形	515	259
唐津窯産陶器	3	7	瀬戸美濃・灰釉端反皿	16	31	土師器・皿ロクロⅠ類	8	12
朝鮮窯産陶磁器	0	0	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	0	0	土師器・皿ロクロⅡ類	165	237
中国窯産陶磁器	30	0	瀬戸美濃・折縁皿	3	6	土師器・皿ロクロⅢ類	8	10
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	27	55	土師器・皿非ロクロ成形	46	321
瓦	10	—	瀬戸美濃・端反皿	46	92	土師器・皿非ロクロⅠ類	0	0
壁土・鑄型など	1	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	9	14	土師器・皿非ロクロⅡ類	0	0
木製品	0	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	2	5	土師器・皿非ロクロⅢ類	46	321
石製品	5	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	25	56	土師器・羽付鍋	1	0
金属製品	0	—	瀬戸美濃・丸皿	36	75	土師器・内耳鍋	235	168
金属製品（鉄製品）	0	—	瀬戸美濃・棧皿	2	4	土師器・炮烙鍋	3	3
金属製品（銅製品）	0	—	瀬戸美濃・内禿皿	1	2	土師器・釜	311	146
自然遺物（骨等）	1	—	瀬戸美濃・菊皿	15	24	常滑・真焼製品	40	24
その他	0	—	瀬戸美濃・棧花皿	0	0	常滑・赤物製品	53	9
総数	2624	1529	瀬戸美濃・ひだ皿	3	4	中国・青磁	1	0
			瀬戸美濃・重圏皿	34	64	中国・白磁	15	7
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	中国・青花	14	3
			瀬戸美濃・平鉢	1	1	瀬戸美濃・搦鉢1類	0	0
			瀬戸美濃・大皿	18	7	瀬戸美濃・搦鉢2類	0	0
			瀬戸美濃・向付	21	24	瀬戸美濃・搦鉢3類	0	0
			瀬戸美濃・筒形製品	4	5	瀬戸美濃・搦鉢4類	0	0
			瀬戸美濃・壺類	6	20	瀬戸美濃・搦鉢5類	0	0
			瀬戸美濃・瓶類	17	27	瀬戸美濃・搦鉢6類	5	5
			瀬戸美濃・花瓶類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢7類	14	21
			瀬戸美濃・甕類	1	3	瀬戸美濃・搦鉢8類	3	3
			瀬戸美濃・水注類	8	52	瀬戸美濃・搦鉢9類	1	2
			瀬戸美濃・水滴類	6	0	瀬戸美濃・搦鉢10類	9	10
			瀬戸美濃・茶入類	0	0	瀬戸美濃・搦鉢11類	6	5



第119図 遺物実測図 SX7005(1)

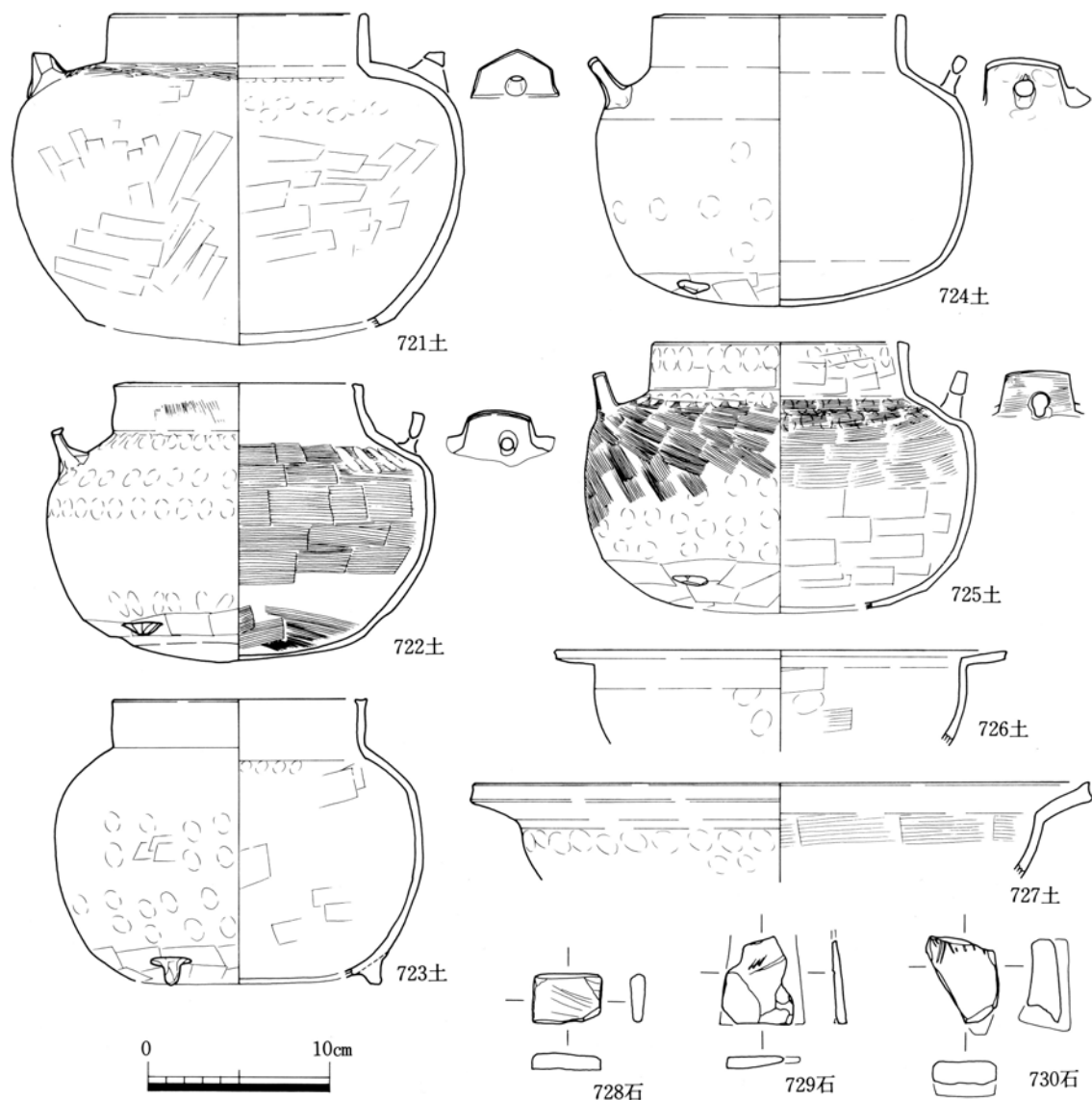


第120図 遺物実測図 SX7005(2)

瀬戸美濃窯産陶器挿鉢は口縁部形態が7類と10類のものが多い。瀬戸美濃窯産陶器の大形製品は壺、瓶、甕があるが、筒形製品はあまりなく、瓶の割合が多いのが特徴である。瓶は口縁部がラッパ状に開く鉄釉を施したもの(704~705)と、口縁端部を上へつまみ上げ堅緻に焼き締めた双耳瓶(707)がある。また、壺には口径が大きい焼き締めた短頸壺(709)が存在するが、産地は確定できない。

瀬戸美濃窯産陶器の小形製品は比較的多く存在し、水注と水滴がある。水注(692~696)は底部に回転糸切り痕が残存しているが、この切り離しが乱雑に行われたものが多い。698は水鳥、699は動物を象った水滴で銅緑釉が施されている。また、楽窯産陶器の水滴(697)も認められる。

鍋・釜は土師器のもののみである。羽付鍋はなく、内耳鍋と釜が主体を占める。内耳鍋(714~720)はやや桶形を呈し、法量は二者が認められる。釜(721~725)は耳が五角形の粘土板で作られた製品である。この他に体部が横に屈曲し広がる火鉢(726・727)や土錘(712・713)が若干量存在する。



第121図 遺物実測図 SX7005(3)

H SD7023出土遺物（第122～126図 731～877）

SD7023は63S区と89D区にまたがって存在する溝で、SX7005等を切っている。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、楽窯産陶器、信楽窯産陶器、備前窯産陶器、唐津窯産陶器、土師器、朝鮮窯産磁器、中国窯産磁器、瓦、石製品、金属製品等が出土し、木製品は遺存しなかった。瀬戸美濃窯産陶器の長石釉製品があること等から、城下町期Ⅲ－1～2期に属する資料と考えられる。

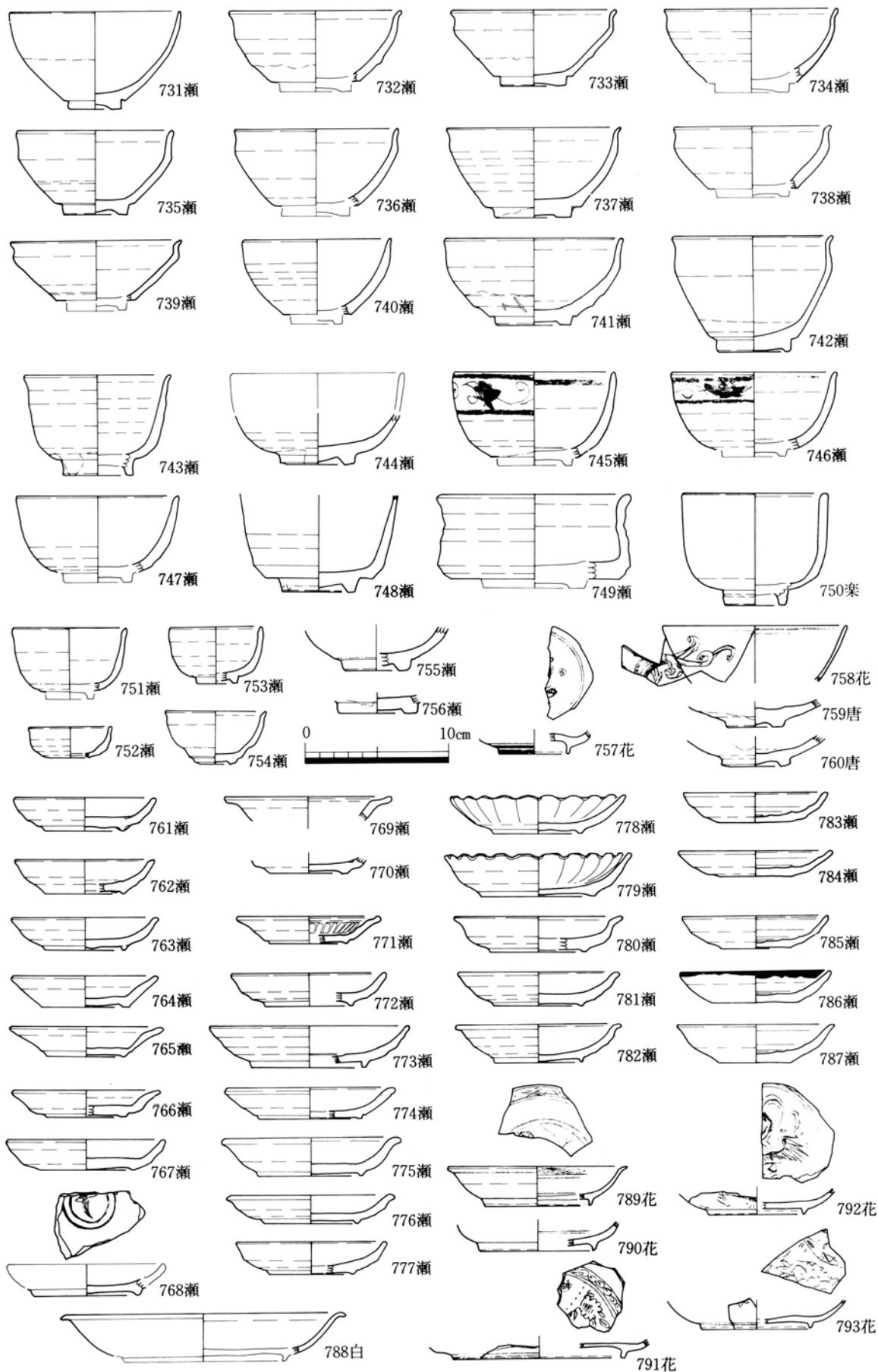
椀は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗・丸碗・小碗・沓茶碗、唐津窯産陶器碗等が存在する。天目茶碗は外面下半部に錆釉を掛けられないものが多く、737のように露胎部を中心に黒色漆を塗布したものも見られる。なお、この碗の底部内面（見込み）には微細な傷が同心円状に多数残存している。また、唐津窯産陶器碗は、底部のみが遺存し胎土目の痕跡が認められる。

皿は瀬戸美濃窯産陶器端反皿・丸皿・内禿皿・菊皿・重圈皿、中国窯産白磁皿・青花皿、土師器皿等が存在する。全体の中では土師器皿が最も多いが、瀬戸美濃窯産陶器の中で限ってみれば長石釉を施した皿と削り出し高台の灰釉丸皿が多いのが特徴と言えよう。中国窯産磁器の皿は白磁端反皿と青花皿が認められる。土師器皿はロクロ成形の皿と非ロクロ成形の皿があり、後者の方が多い。非ロクロ成形の土師器皿は横ナデを全く施さないものである。

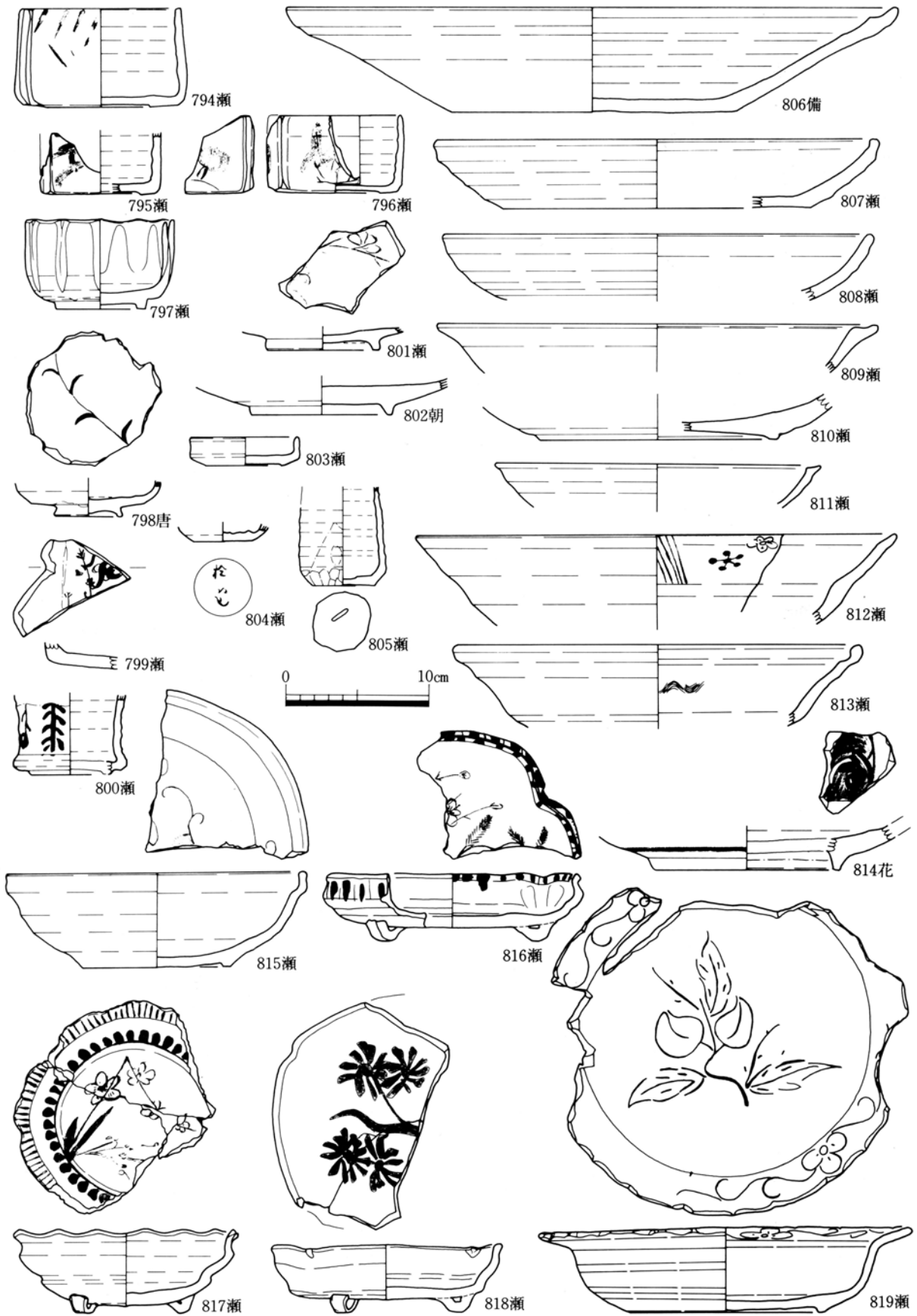
鉢は瀬戸美濃窯産陶器大皿・向付、備前窯産陶器大皿、唐津窯産陶器向付、朝鮮窯産磁器大皿、中国窯産磁器大皿等があり、多様である。瀬戸美濃窯産陶器向付には様々な種類がある。794～796は四方筒形向付で外面に鉄絵紋様が施されている。797は灰釉の椀形の製品で体部がひだ状になっている。799は銅緑釉と長石釉を掛け分け鉄絵を描いている。805は筒形を呈し、底部を乱雑にヘラケズリ

第17表 SD7023出土遺物集計表

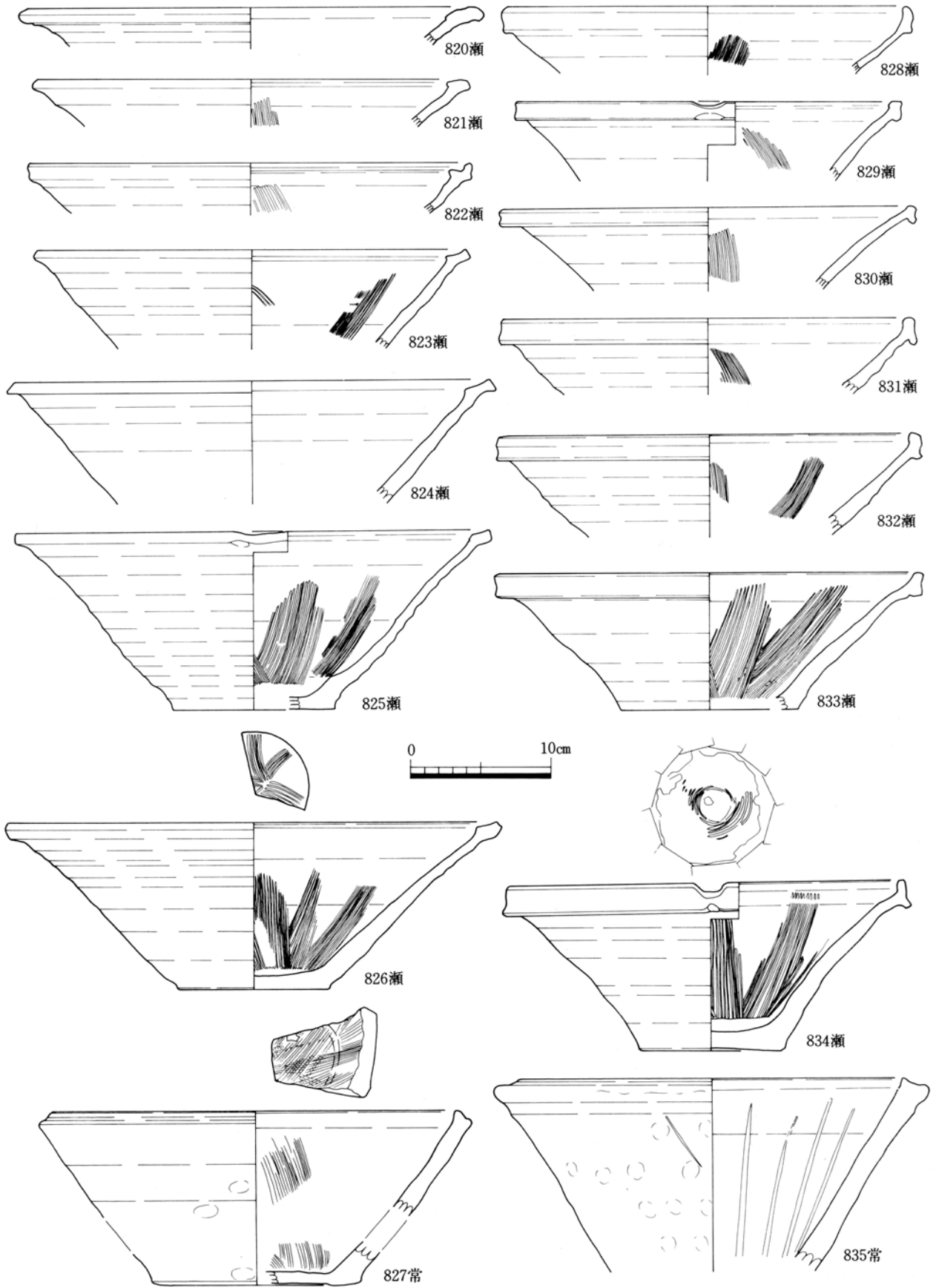
種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	1685	1044	瀬戸美濃・天目茶碗	239	183	土師器・碗	0	0
土師器	1779	1038	瀬戸美濃・丸碗	59	66	土師器・皿	556	687
瓦器	13	8	瀬戸美濃・平碗	2	1	土師器・大形製品	10	0
常滑窯産陶器	251	21	瀬戸美濃・台付碗	2	2	土師器・小形製品	0	0
信楽窯産陶器	2	0	瀬戸美濃・小碗	11	17	土師器・鍋釜	1209	351
楽窯産陶器	1	1	瀬戸美濃・沓茶碗	7	3	土師器・その他	1	0
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・緑釉皿	3	4	土師器・不明	3	0
備前窯産陶器	5	0	瀬戸美濃・腰折皿	10	11	土師器・皿ロクロ成形	468	201
唐津窯産陶器	2	0	瀬戸美濃・灰釉端反皿	12	19	土師器・皿ロクロⅠ類	2	3
朝鮮窯産陶磁器	1	0	瀬戸美濃・鉄軸端反皿	1	1	土師器・皿ロクロⅡ類	90	126
中国窯産陶磁器	17	8	瀬戸美濃・折縁皿	7	12	土師器・皿ロクロⅢ類	36	64
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	45	75	土師器・皿非ロクロ成形	88	486
瓦	25	—	瀬戸美濃・端反皿	65	107	土師器・皿非ロクロⅠ類	0	0
壁土・鋳型など	14	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	38	70	土師器・皿非ロクロⅡ類	0	0
木製品	1	—	瀬戸美濃・鉄軸丸皿	4	5	土師器・皿非ロクロⅢ類	88	486
石製品	7	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	28	42	土師器・羽付鍋	0	0
金属製品	7	—	瀬戸美濃・丸皿	70	117	土師器・内耳鍋	247	206
金属製品（鉄製品）	1	—	瀬戸美濃・椀皿	5	19	土師器・炮烙鍋	19	19
金属製品（銅製品）	6	—	瀬戸美濃・内禿皿	15	14	土師器・釜	165	122
自然遺物（骨等）	10	—	瀬戸美濃・菊皿	23	25	常滑・真焼製品	108	9
その他	0	—	瀬戸美濃・桜花皿	0	0	常滑・赤物製品	143	12
総数	3820	2120	瀬戸美濃・ひだ皿	3	7	中国・青磁	2	2
			瀬戸美濃・重圈皿	80	78	中国・白磁	6	2
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	中国・青花	9	4
			瀬戸美濃・平鉢	9	3	瀬戸美濃・播鉢1類	0	0
			瀬戸美濃・大皿	50	22	瀬戸美濃・播鉢2類	8	9
			瀬戸美濃・向付	74	34	瀬戸美濃・播鉢3類	0	0
			瀬戸美濃・浅鉢	140	59	瀬戸美濃・播鉢4類	4	4
			瀬戸美濃・播鉢	521	187	瀬戸美濃・播鉢5類	3	4
			瀬戸美濃・大形製品	218	57	瀬戸美濃・播鉢6類	36	39
			瀬戸美濃・小形製品	15	34	瀬戸美濃・播鉢7類	45	50
			瀬戸美濃・香炉	2	3	瀬戸美濃・播鉢8類	4	5
			瀬戸美濃・鍋	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	11	11
			瀬戸美濃・その他	14	25	瀬戸美濃・播鉢10類	49	53
			瀬戸美濃・不明	18	0	瀬戸美濃・播鉢11類	8	6



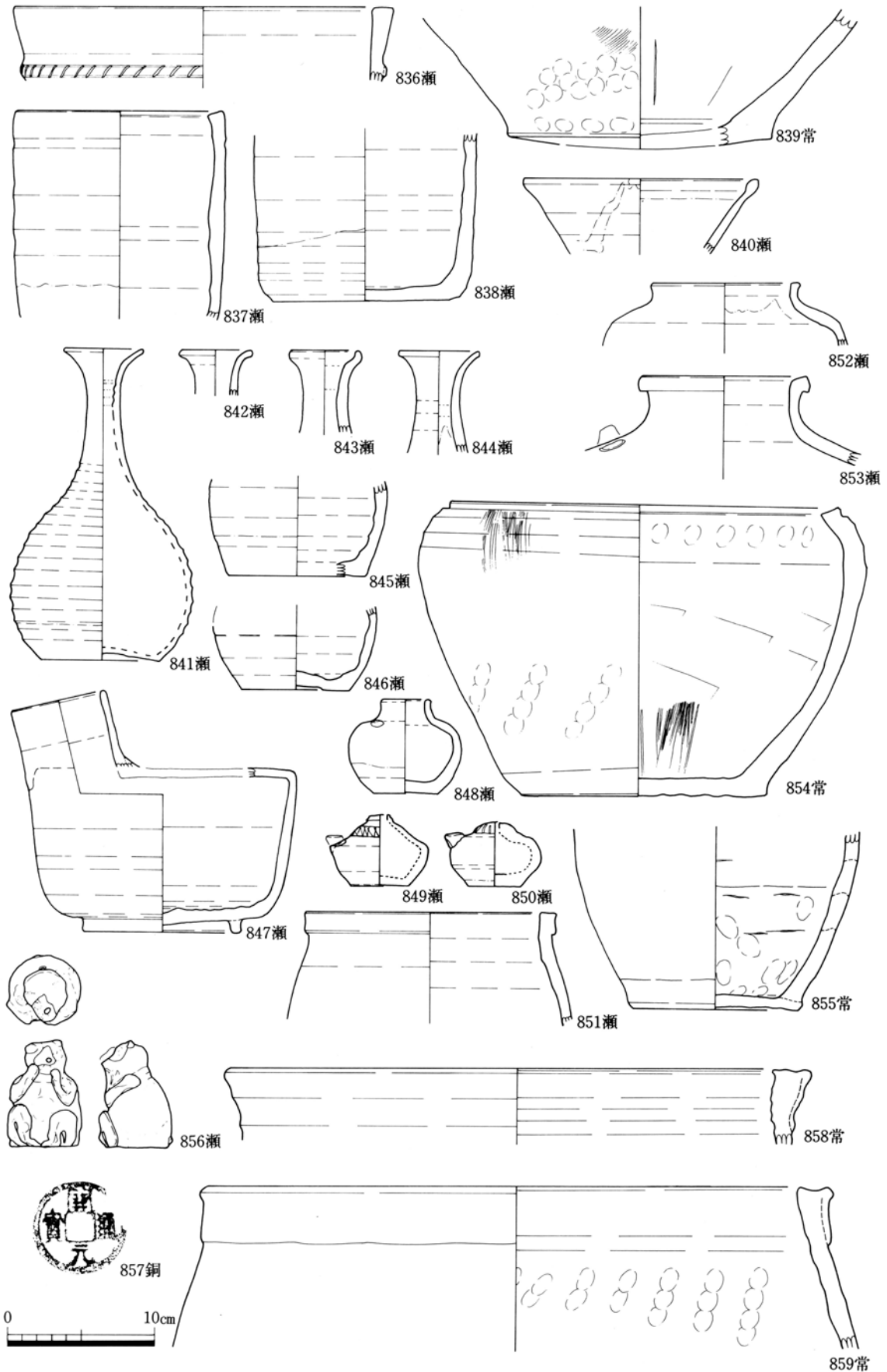
第122図 遺物実測図 SD7023(1)



第123図 遺物実測図 SD7023(2)



第124図 遺物実測図 SD7023(3)



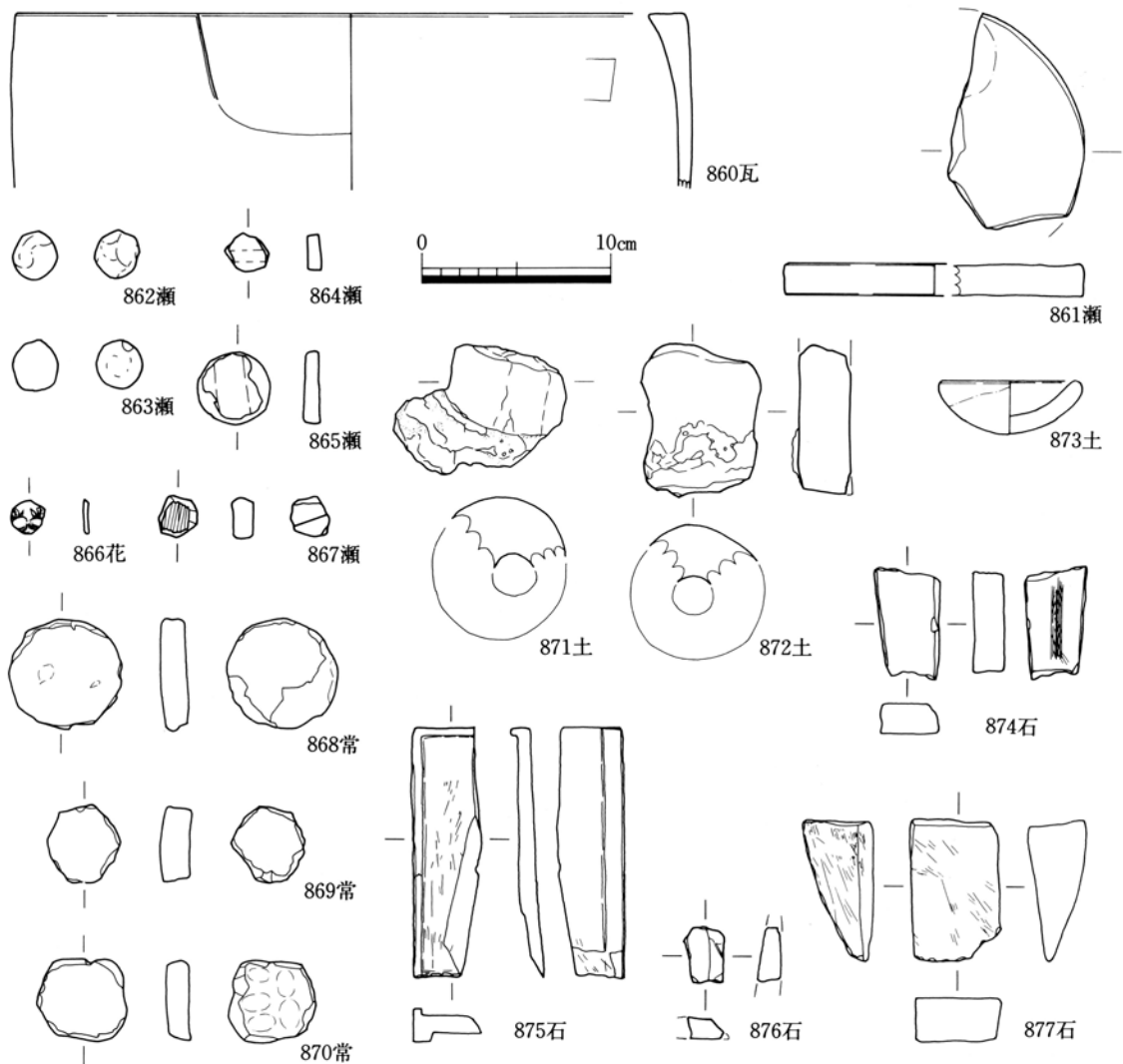
第125図 遺物実測図 SD7023(4) (857はS=2:3)

され、刻書が記されている。815は線刻で草花紋を描きクリーム色の釉薬（灰釉？）が施されている。818は表面の発色が褐色を呈したいわゆる鳴海織部風の製品で、内面に鉄絵が描かれている。812は灰白色の長石釉に黒色の鉄絵を施したものである。この他、備前窯産陶器大皿（806）は体部下半部がヘラケズリされ、口縁部内側に突帯が巡っており、中国窯産磁器大皿（814）は粗製の胎土を持つものである。

播鉢は、瀬戸美濃窯産陶器の他に常滑窯産陶器も若干量見られる。前者は口縁部形態が6・7・10類のものが多い。後者は極めて細かいハケ目状の播目を持つもの（827）と丹波窯等でよく見られる太めの櫛目を一本づつ施したもの（一本引き：835）の二者がある。

大形製品には瀬戸美濃窯産陶器の筒形製品・壺・瓶・甕、常滑窯産陶器の壺・甕等がある。854は常滑窯産陶器の無頸壺で表面を指オサエやハケ目調整が行われている。847は頸部が側面に付いた瘦瓶状の製品である。大形製品の内、口縁部がラッパ状に開く鉄釉を施した瓶が比較的多い。

この他に、瀬戸美濃窯産陶器の円盤（窯道具：861）や表面が黄白色を呈した瓦器風炉（860）等がある。加工円盤（862～870）は多様な製品を転用している。



第126図 遺物実測図 SD7023(5)

Ⅰ SK7029出土遺物（第127～136図 878～1121）

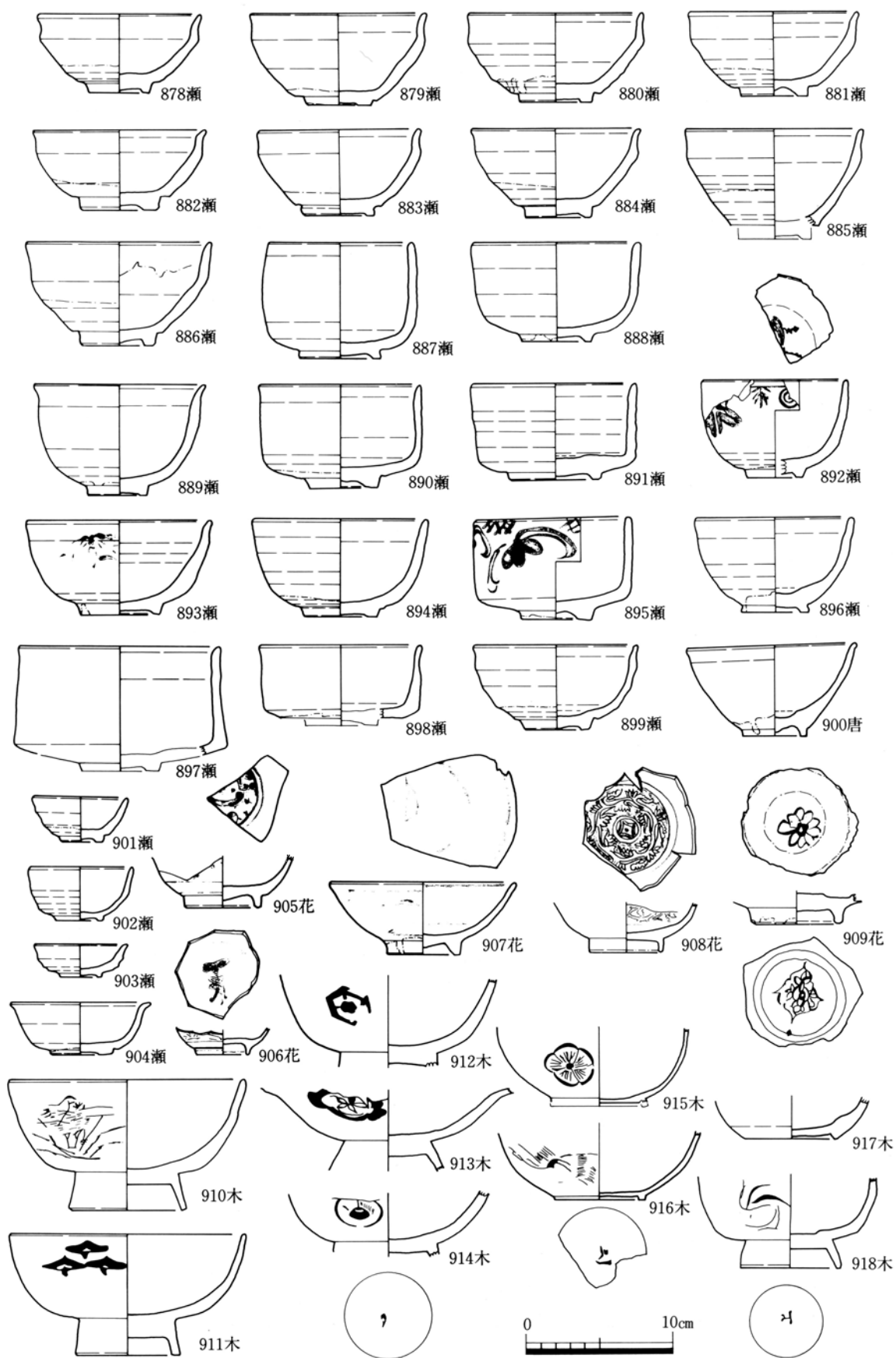
SK7029は61C区と61D区にまたがって所在する土坑である。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、信楽窯産陶器、備前窯産陶器、唐津窯産陶器、土師器、朝鮮窯産陶器、中国窯産磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品等の多量の遺物が出土した。この一括資料は铸造に関わる遺物も多量に見られる点が特徴でもある。時期的には、城下町期Ⅲ－Ⅱ期に属すると考えられる。

椀は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（878～886）・丸碗（887～896・899）・小碗（901～904）・杳茶碗（897・898）、唐津窯産陶器碗、中国窯産青花碗、木胎漆器椀、木器椀等が存在する。これまでの遺構に比べ陶器丸碗の比率が高くなっている。唐津窯産陶器碗（900）は天目茶碗の形態をしている。中国窯産青花碗は粗製のもの（907・909）が多く、中には底部外面の露胎部に紋様を描いたもの（909）もある。木胎漆器椀は椀A類と椀B類があり、椀A類の高台内の削りが深い。木器椀はNR4001出土遺物4群の椀と同様に、底部は碁笥底の形態となっており、体部にロクロを引いた痕跡がよく残っている。

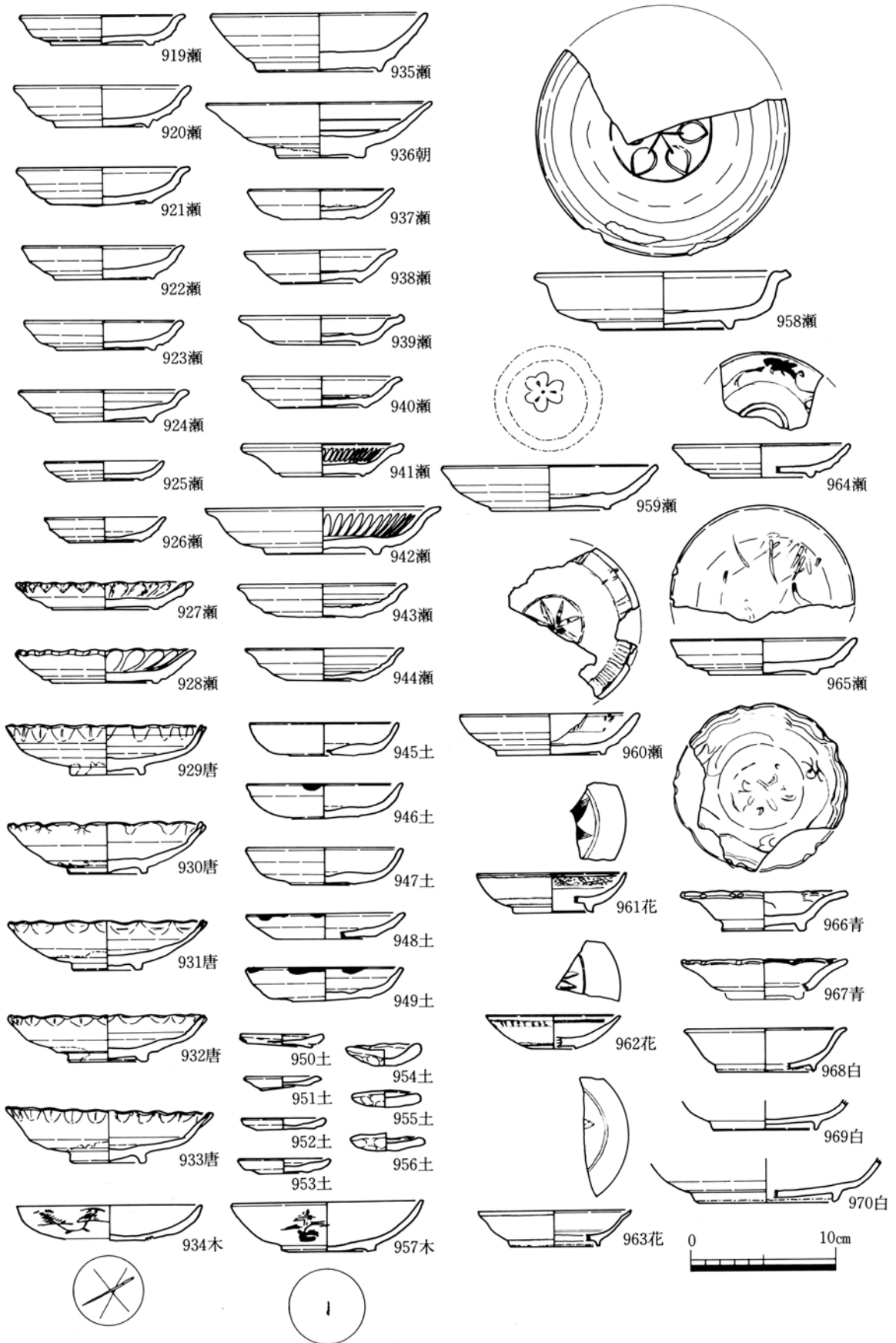
皿は瀬戸美濃窯産陶器端反皿・丸皿・内禿皿・菊皿・重圈皿、唐津窯産陶器ひだ皿、中国窯産青磁皿・白磁皿・青花皿、土師器皿、木胎漆器皿等が存在する。全体の中ではやはり土師器皿が最も多く、瀬戸美濃窯産陶器皿がこれに次いでいる。瀬戸美濃窯産陶器の中では、長石釉を施した皿と削り出し高台の灰釉丸皿が多い。唐津窯産陶器ひだ皿（929～933）は同様の形態で数枚がまとまって存在している。表面は鈍いクリーム色の長石釉が薄く塗布されている。中国窯産磁器の皿は青磁稜花皿（966・967）、白磁端反皿（968～970）、粗製の青花皿Ⅰ類（962）・Ⅲ類（961）が認められる。

第18表 SK7029出土遺物集計表

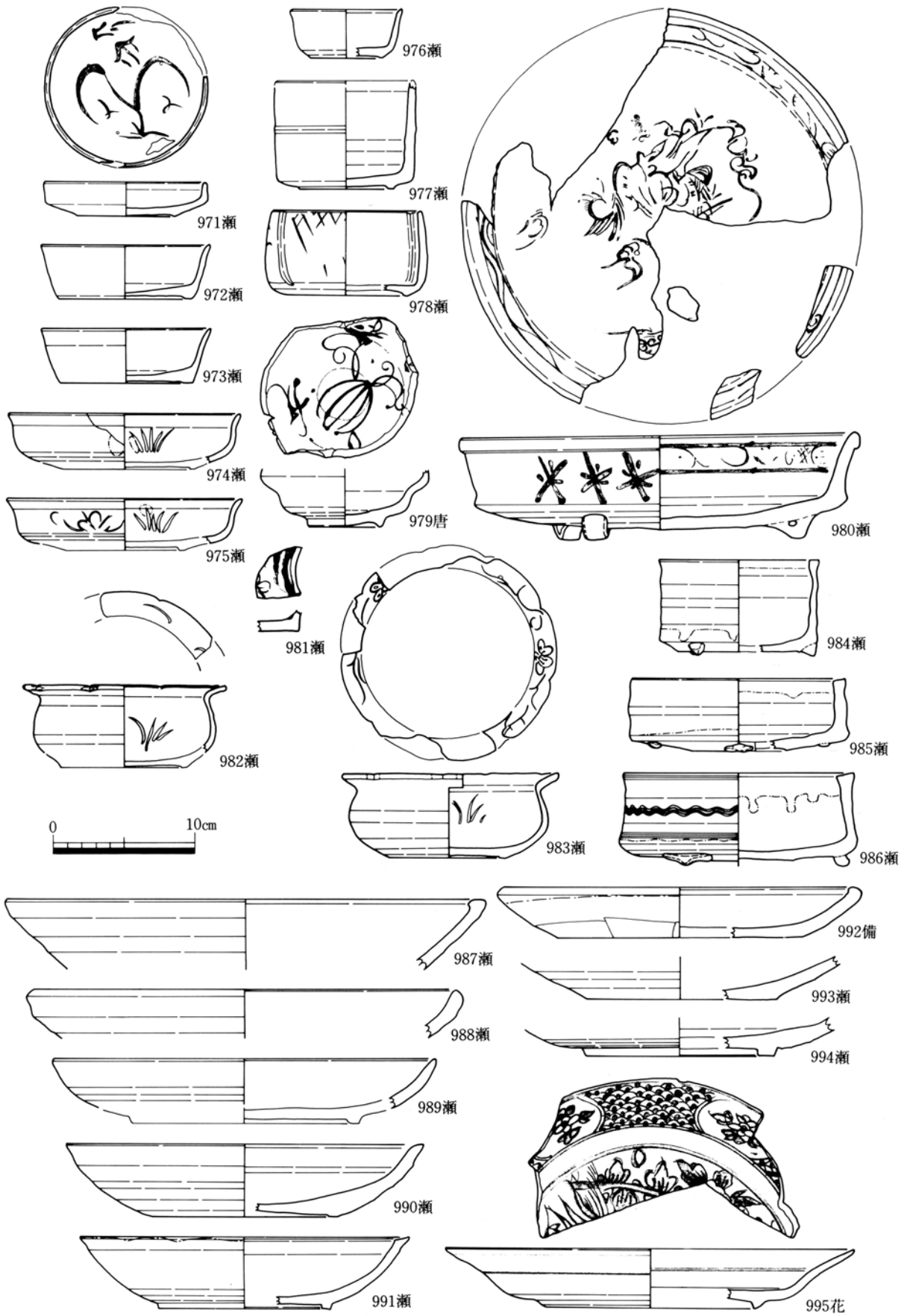
種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	2257	1588	瀬戸美濃・天目茶碗	386	233	土師器・碗	2	0
土師器	2201	1593	瀬戸美濃・丸碗	138	138	土師器・皿	1115	1285
瓦器	3	0	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・大形製品	63	31
常滑窯産陶器	259	33	瀬戸美濃・台付碗	0	0	土師器・小形製品	1	0
信楽窯産陶器	2	2	瀬戸美濃・小碗	15	36	土師器・鍋釜	1009	276
楽窯産陶器	1	0	瀬戸美濃・杳茶碗	13	16	土師器・その他	9	1
丹波窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・縁釉皿	3	3	土師器・不明	2	0
備前窯産陶器	9	2	瀬戸美濃・腰折皿	2	5	土師器・皿ロクロ成形	1030	620
唐津窯産陶器	63	71	瀬戸美濃・灰釉端反皿	10	9	土師器・皿ロクロⅠ類	10	16
朝鮮窯産陶磁器	3	1	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	7	9	土師器・皿ロクロⅡ類	264	525
中国窯産陶磁器	68	51	瀬戸美濃・折縁皿	15	26	土師器・皿ロクロⅢ類	47	75
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	93	173	土師器・皿非ロクロ成形	85	665
瓦	153	—	瀬戸美濃・端反皿	125	217	土師器・皿非ロクロⅠ類	2	8
埴土・銚型など	88	—	瀬戸美濃・灰釉丸皿	69	113	土師器・皿非ロクロⅡ類	0	0
木製品	262	—	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	7	16	土師器・皿非ロクロⅢ類	83	657
石製品	29	—	瀬戸美濃・長石釉丸皿	77	156	土師器・羽付鍋	0	0
金属製品	46	—	瀬戸美濃・丸皿	154	288	土師器・内耳鍋	126	101
金属製品（鉄製品）	39	—	瀬戸美濃・稜皿	4	8	土師器・炮烙鍋	128	73
金属製品（銅製品）	7	—	瀬戸美濃・内禿皿	38	75	土師器・釜	328	88
自然遺物（骨等）	32	—	瀬戸美濃・菊皿	25	32	常滑・真焼製品	149	25
その他	6	0	瀬戸美濃・稜花皿	0	0	常滑・赤物製品	110	6
総数	5482	3339	瀬戸美濃・ひだ皿	8	10	中国・青磁	9	13
			瀬戸美濃・重圈皿	113	146	中国・白磁	39	15
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	中国・青花	20	23
			瀬戸美濃・平鉢	9	5	瀬戸美濃・擂鉢Ⅰ類	0	0
			瀬戸美濃・大皿	31	23	瀬戸美濃・擂鉢Ⅱ類	0	0
			瀬戸美濃・向付	132	97	瀬戸美濃・擂鉢Ⅲ類	1	1
			瀬戸美濃・筒形製品	17	11	瀬戸美濃・擂鉢Ⅳ類	0	0
			瀬戸美濃・壺類	28	8	瀬戸美濃・擂鉢Ⅴ類	0	0
			瀬戸美濃・瓶類	17	3	瀬戸美濃・擂鉢Ⅵ類	25	29
			瀬戸美濃・花瓶類	4	5	瀬戸美濃・擂鉢Ⅶ類	27	30
			瀬戸美濃・甕類	2	4	瀬戸美濃・擂鉢Ⅷ類	7	7
			瀬戸美濃・水注類	1	6	瀬戸美濃・擂鉢Ⅸ類	5	6
			瀬戸美濃・水滴類	0	0	瀬戸美濃・擂鉢Ⅹ類	34	41
			瀬戸美濃・茶人類	18	26	瀬戸美濃・擂鉢Ⅺ類	12	12



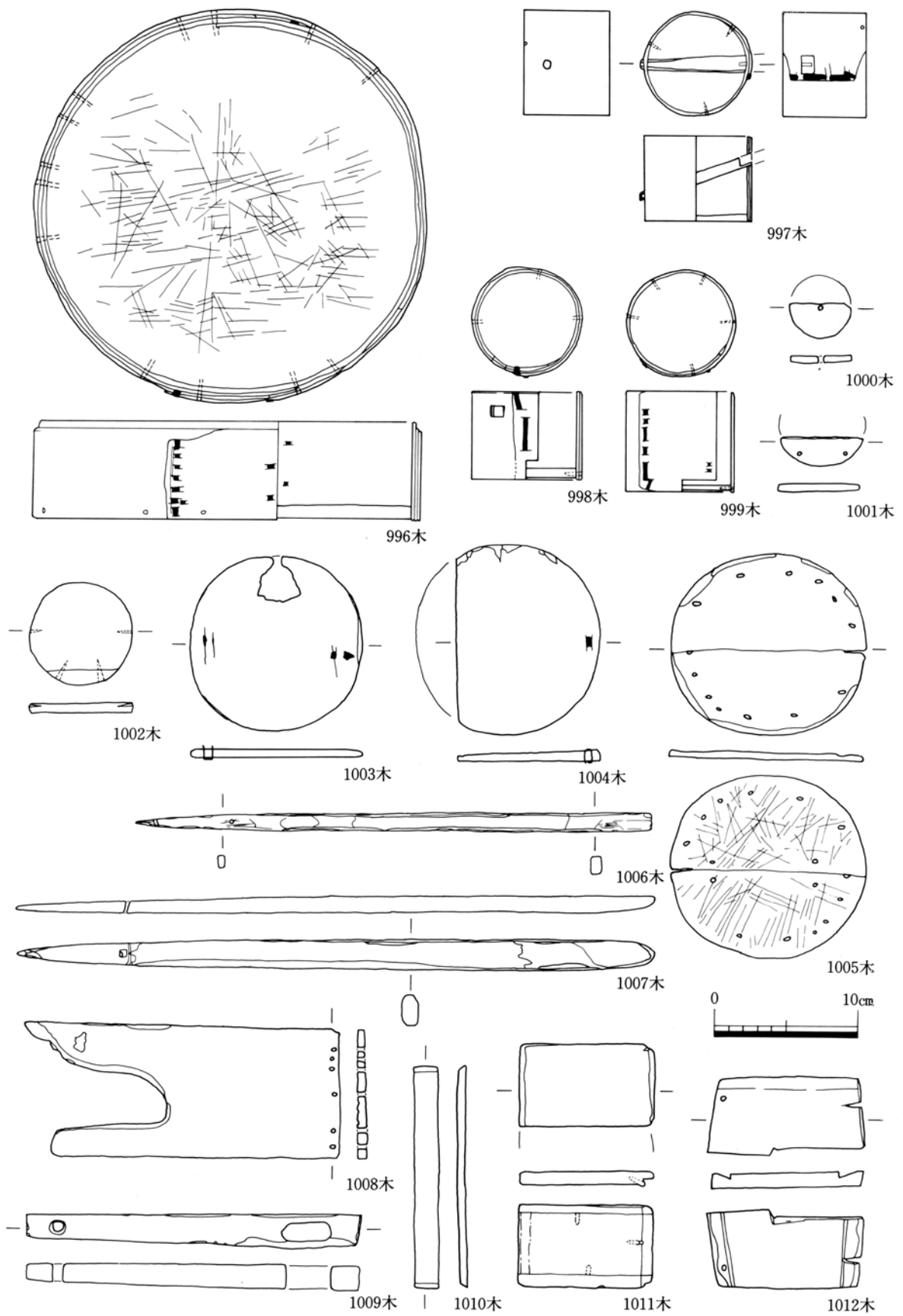
第127図 遺物実測図 SK7029(1)



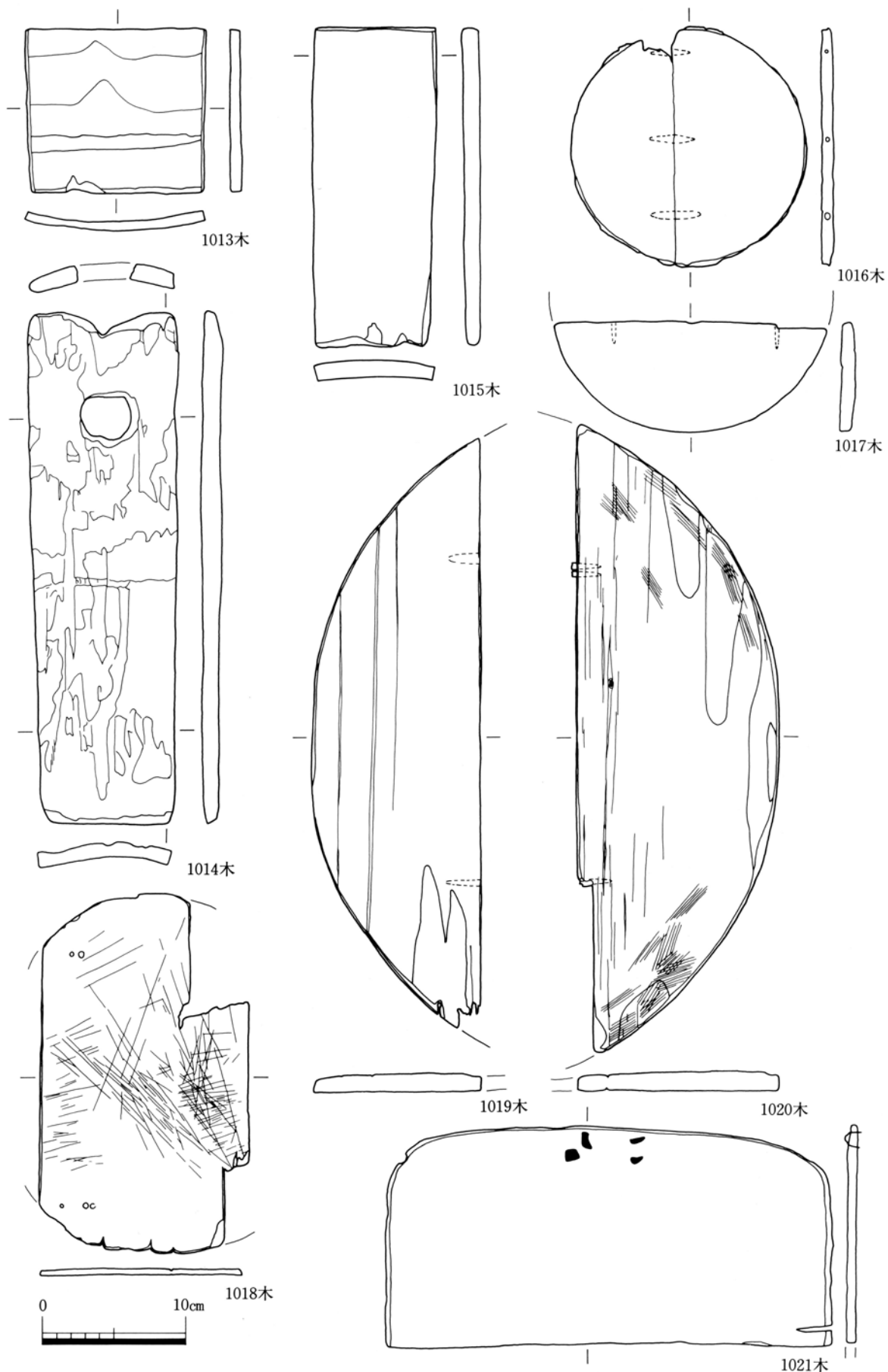
第128図 遺物実測図 SK7029(2)



第129図 遺物実測図 SK7029(3)



第130図 遺物実測図 SK7029(4)



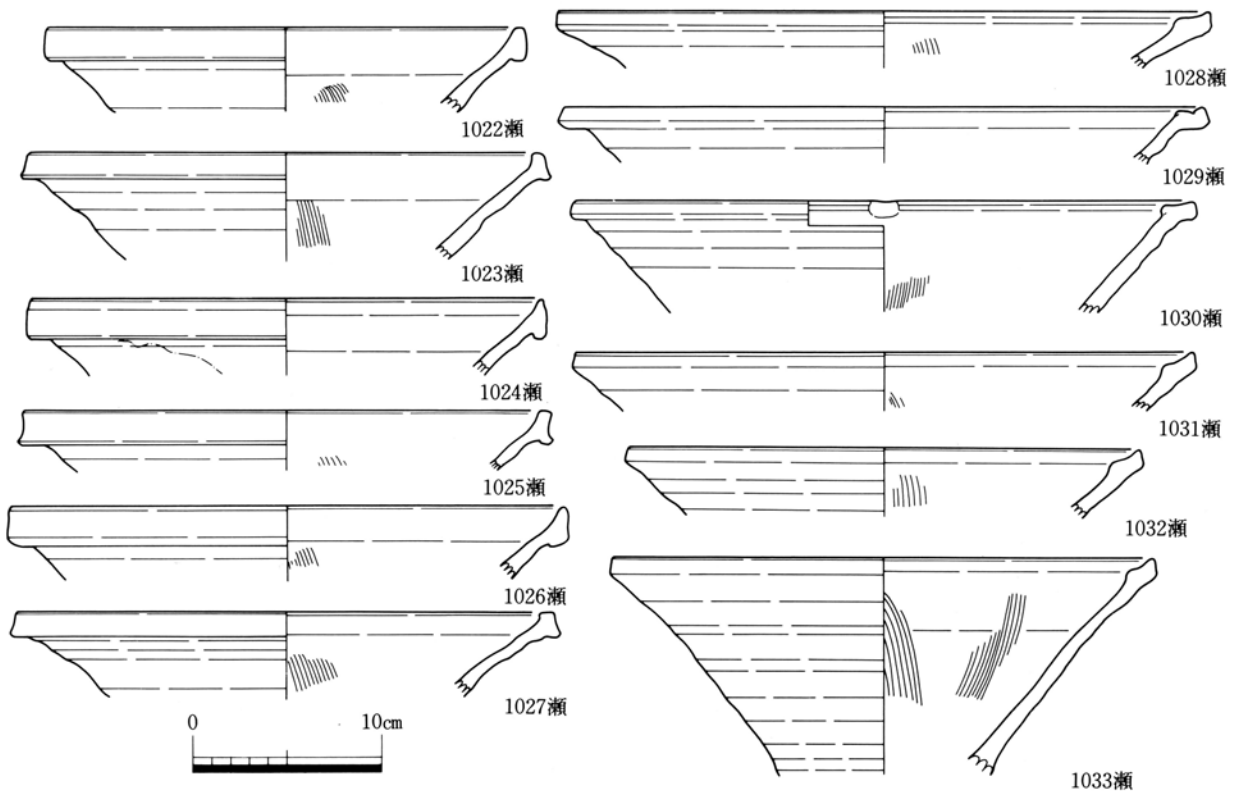
第131図 遺物実測図 SK7029(5)

土師器皿はロクロ成形の皿と非ロクロ成形の皿があり、前者は口縁部がやや内彎する a 類 (945～949) と体部が著しく短く器高も低い b 類 (950～953) に分類できる。非ロクロ成形の土師器皿は横ナデを全く施さないもの (954～956) であり、ロクロ成形土師器皿 b 類はこれを模倣したものと考えられる。木胎漆器皿 (934・957) は高台内に刻書が施されている。器形は浅く薄い形態で、紋様は草花紋が主体となっている。

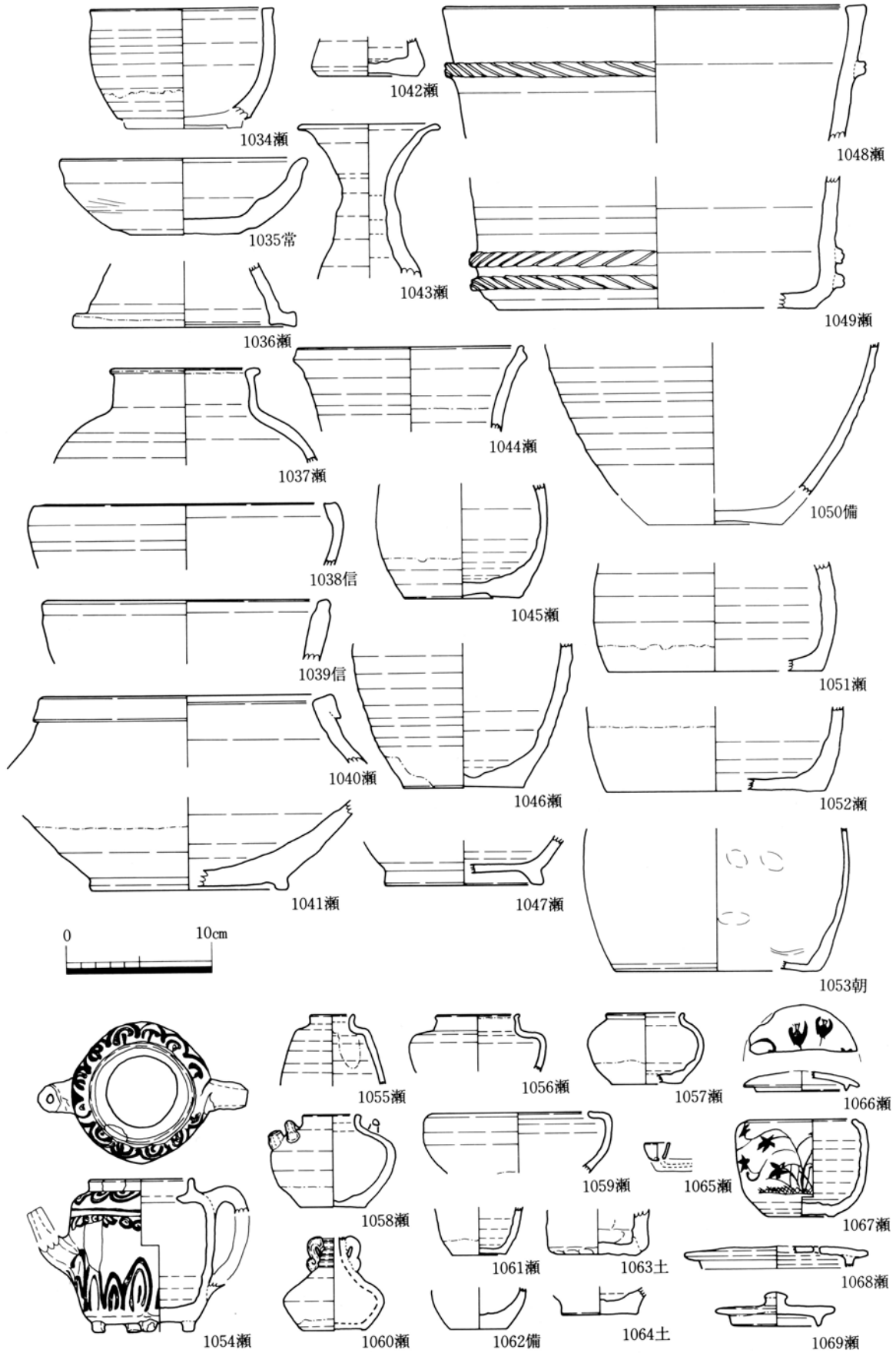
浅鉢は瀬戸美濃窯産陶器大皿・向付、備前窯産陶器大皿 (992)、唐津窯産陶器向付 (979)、中国窯産青花大皿 (995) 等がある。瀬戸美濃窯産陶器向付には、四方筒形向付 (978) の他に黄瀬戸釉の向付 (974・975・982・983) 等がある。また、瀬戸美濃窯産陶器挿鉢は口縁部形態が 6・7・10・11 類のものが多い。

大形製品には瀬戸美濃窯産陶器の筒形製品・壺・瓶・花瓶・甕、信楽窯産陶器の筒形製品、常滑窯産陶器の甕、備前窯産陶器壺 (1050)、朝鮮窯産陶器瓶 (1053) 等がある。また、木製品では曲物桶、結桶、釣瓶、箱物等がある。1048・1049は瀬戸美濃窯産陶器の筒形製品 (緒桶) であり、同一個体と思われる。1036は花瓶の脚部の可能性が高い。信楽窯産陶器の筒形製品 (1038・1039) は口縁端部をつまんでいる。

木製曲物桶は口径によって 4 類に区分できる。A 類 (996) は約 28cm を測る大形で器高が低いもので、一重巻の側板を 2 枚重ね、その間に幅が狭い薄板を差し込んでいる。B 類は底板の直径が約 12cm を測るものである。C 類は口径が約 7cm を測り側板は一重巻で作られたもので、中には柄杓に用いられたもの (997・998) もある。D 類 (1000) は底板の直径が約 4cm を測るものである。また、1011は小箱の底板、1012は釣瓶の側板である。木製結桶は底板と側板が別々で出土しており、法量もまちまちである。



第132図 遺物実測図 SK7029(6)



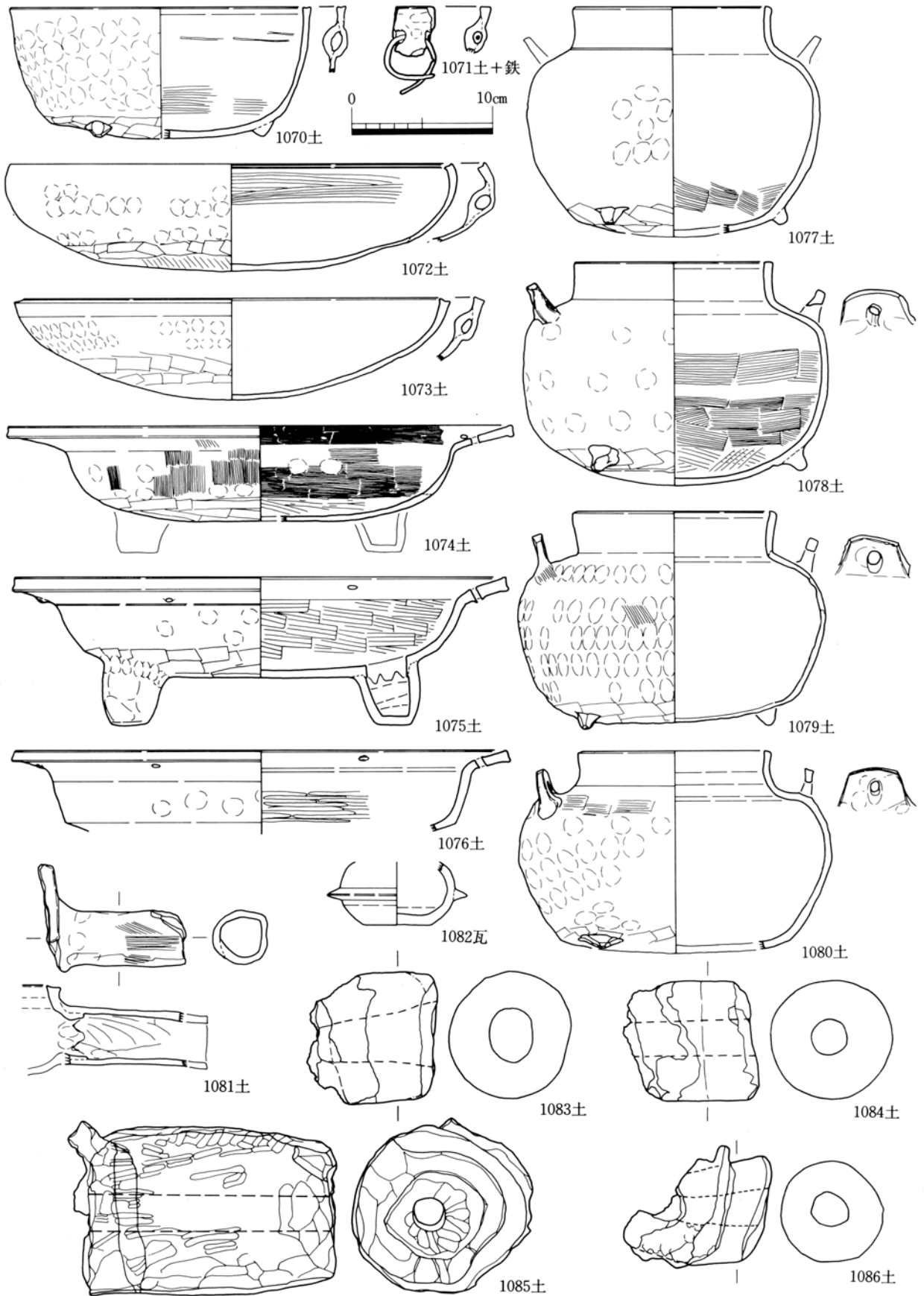
第133図 遺物実測図 SK7029(7)

小形製品には瀬戸美濃窯産陶器の茶入（1055～1057・1059）・水注（1058）・小瓶（1060・1061）・蓋（1066・1068・1069）・煙管、備前窯産陶器小瓶（1062）、土師器壺（1064）、焼塩壺（1063）等がある。1059は瀬戸美濃窯産陶器の鉄釉無頸壺、1054は瀬戸美濃窯産陶器の長石釉鉄絵汁次である。また、1065は瀬戸美濃窯産陶器の銅緑釉を施した煙管雁首の一部である。

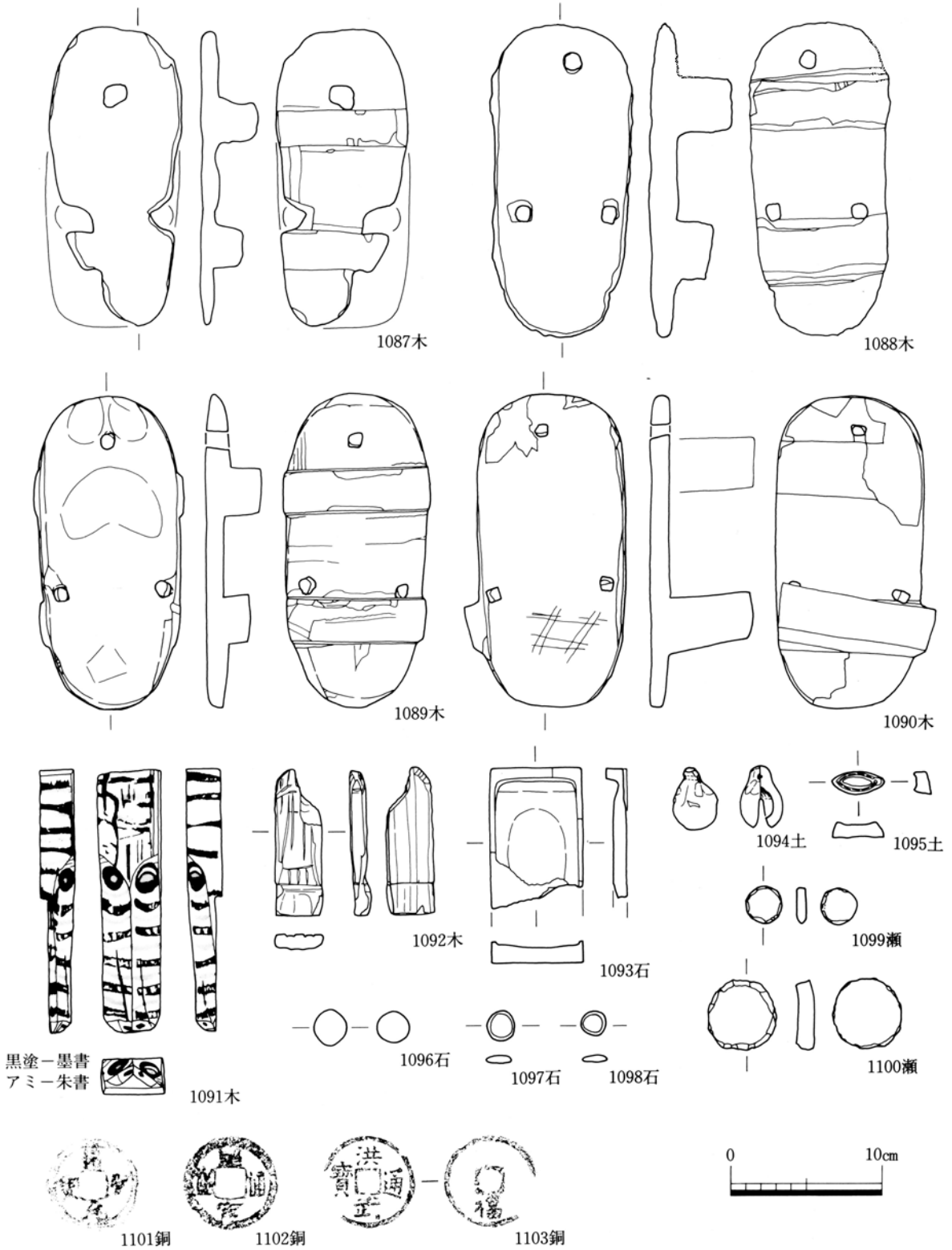
鍋・釜は大半は土師器のもので、一部に瓦器がある。土師器の煮炊具には、羽付鍋は全くなく、内耳鍋と炮烙鍋と釜が主体を占める。土師器内耳鍋（1070・1071）は桶形を呈している。なお、1071は土師器内耳鍋の耳部に鉄製針金が付いている。土師器炮烙鍋は口縁部が逆ハの字状に開くタイプ（1073）と内側に内傾するタイプ（1072）がある。土師器釜（1077～1080）の耳は五角形の粘土板で作られたものでやや直立している。一方、瓦器には小形の鏝付釜（1082）が1点出土しており、実用品とは思われない。この他に、体部が横に屈曲し広がる土師器火鉢（1074～1076）がある。これは中空の脚が3つ付き、口縁部付近にいくつか孔が穿たれていた。内面に横ハケ、外面上部に指オサエ、同じく下部にヘラケズリが施される。1081は土師器の取手部で、おそらく炮烙鍋形の容器を本体とする火のしの柄部と思われる。

鑄造に関わる遺物としては、土製羽口、砥石、鉄滓や鉄製品等があげられる。土製羽口（1083～1086）は外径が7cm～12cmの大きさの円筒形で一方の端部にスラグが付着している。スラグが付着した周辺部は高熱を受けて灰色に変色した部分がみられ、炉本体に対して斜めに付けられたと考えられる。砥石は砂岩を用いた荒砥と凝灰岩を用いた仕上げ砥の二者がある。前者は多角柱状のもの（1107）と端部が広がるバチ形のもの（1110・1111）と板状のもの（1109・1112）に分けられる。また鑄造に関わる鉄製品として、鉄製延板、鉄製円柱状塊、鉄製工具等がある。鉄製延板（1116）は端部が斜めに切断されており、鉄製円柱状塊（1115）は下端部がやや広がる円錐形となっている。1117はバチ形の鉄板の先端に薄い円柱が両面に張り付いたハンマー形の製品である。

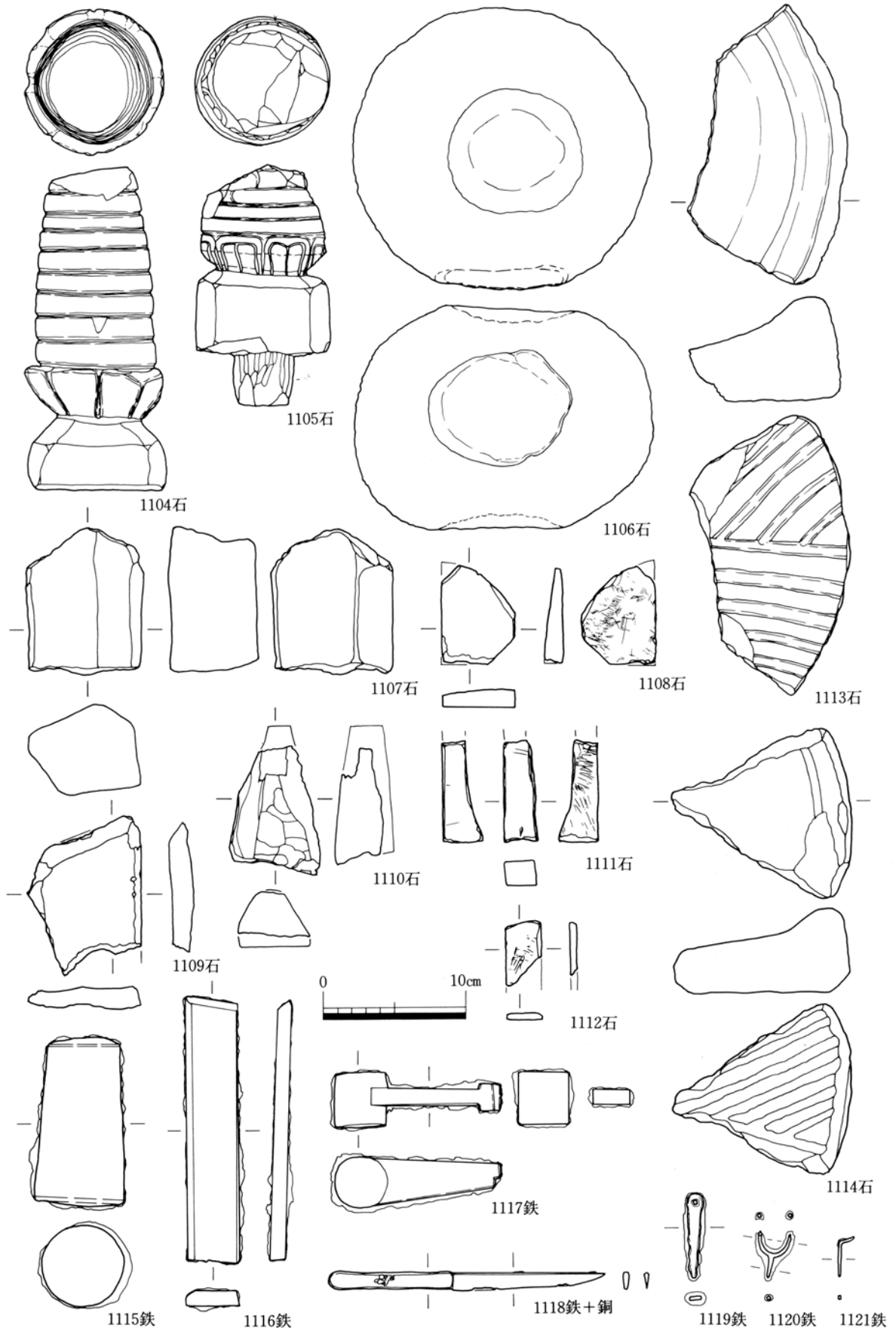
その他の遺物には土製鈴（1094）、木製下駄（1087～1090）、木製形代、石製硯（1093）、石製墓塔類（1104～1106）、石臼（1113・1114）、銅銭等がある。木製下駄は大半が一木作りの連齒下駄である。木製形代には、龍頭の上半部（1091）と人物立像（1092）がある。前者は細長い板を削り取って墨書（図中の黒塗りつぶし部分）・朱彩（図中の網部分）で紋様を描いたものである。後者は細長い板材を彫刻した人物像で頭部が欠損している。これは、体部の衣の形態が89F区から出土した木製人物立像（本書1593参照）と類似しており、僅かに朱彩の痕跡が残存している。小形の像であることから持仏の可能性も考えられる。



第134図 遺物実測図 SK7029(8)



第135図 遺物実測図 SK7029(9) (1101~1103はS=2:3)



第136図 遺物実測図 SK7029(10)

J SD6001出土遺物（第137～140図 1122～1204）

SD6001は63C区と89E区にまたがって位置する中堀である。ここからは瀬戸美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、信楽窯産陶器、備前窯産陶器、丹波窯産陶器、土師器、朝鮮窯産陶器、中国窯産磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品等が出土した。瀬戸美濃窯産陶器の長石釉製品があること等から、城下町期Ⅲ-1～2期に属する資料と考えられる。

椀は瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗・丸碗・小碗、木胎漆器椀等が存在する。天目茶碗は外面下半部に錆釉を掛けないものが多い。皿は瀬戸美濃窯産陶器端反皿・丸皿・菊皿・重圈皿、中国窯産青磁皿・白磁皿・青花皿、土師器皿等が存在する。瀬戸美濃窯産陶器皿の中には口縁部内側に突帯を巡らし、つまみを持つ灯明皿（1143）が認められる。

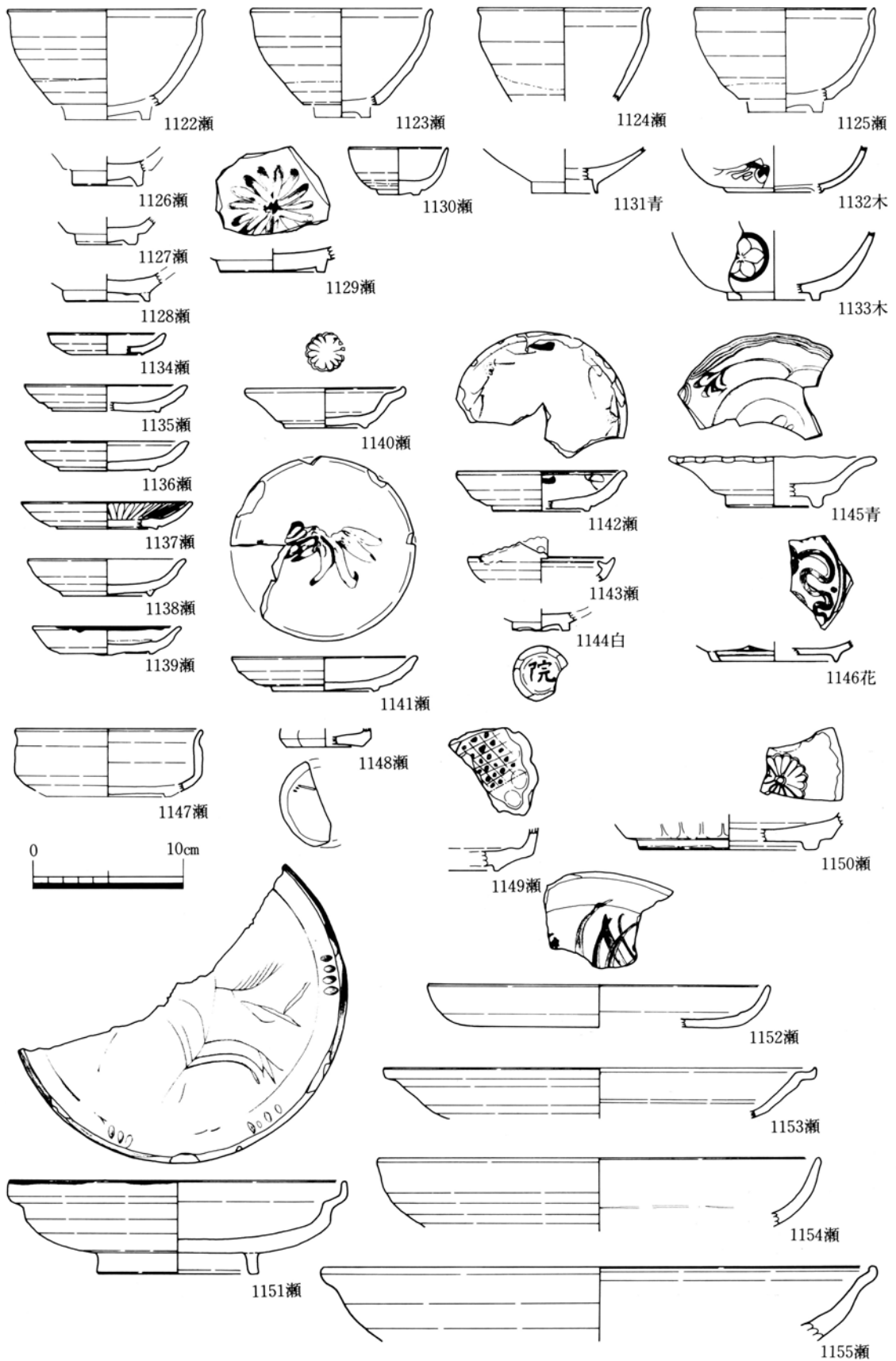
浅鉢は瀬戸美濃窯産陶器大皿・向付等があり、銅緑釉を施した向付（1149）も存在する。瀬戸美濃窯産陶器播鉢は、口縁部形態が6・7・10・11類のものがある。木製曲物桶（1171）は柄杓の一部で柄を固定するための器具が側板内面に縦じられている。

瓦類は丸瓦、軒丸瓦、平瓦、軒平瓦、飾瓦等がある。丸瓦の内面にはコビキAのもの（1188）とコビキBのもの（1187）が存在する。軒瓦は小破片が多く紋様分析は困難であった。

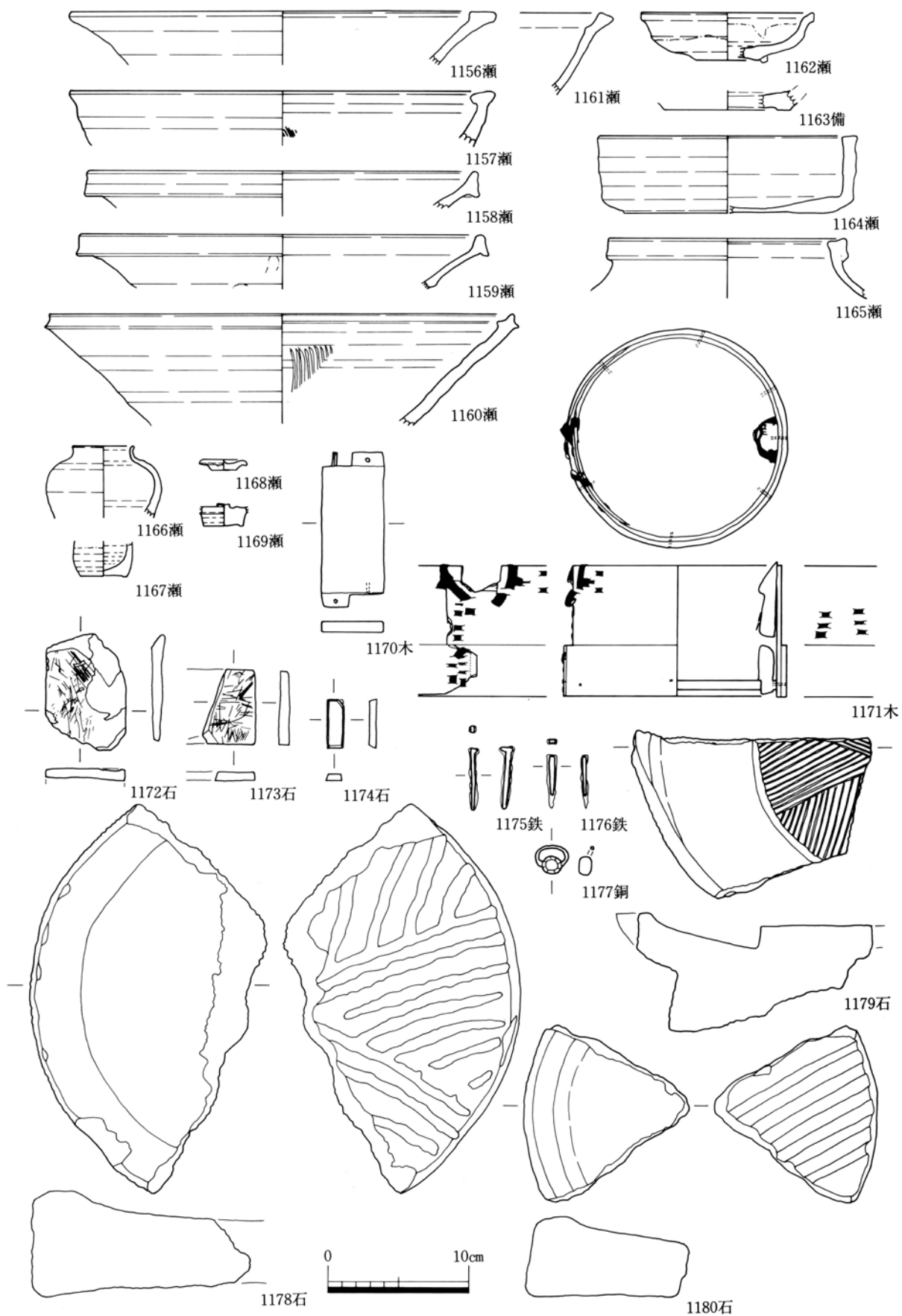
この他に、石製墓塔類が多量に出土している。墓塔類は五輪塔の空風輪（1195～1199）、空輪（1200）、火輪（1201）、水輪（1202～1204）があり、五輪塔の地輪や宝篋印塔等は見られなかった。石材はいずれも花崗岩である。

第19表 SD6001出土遺物集計表

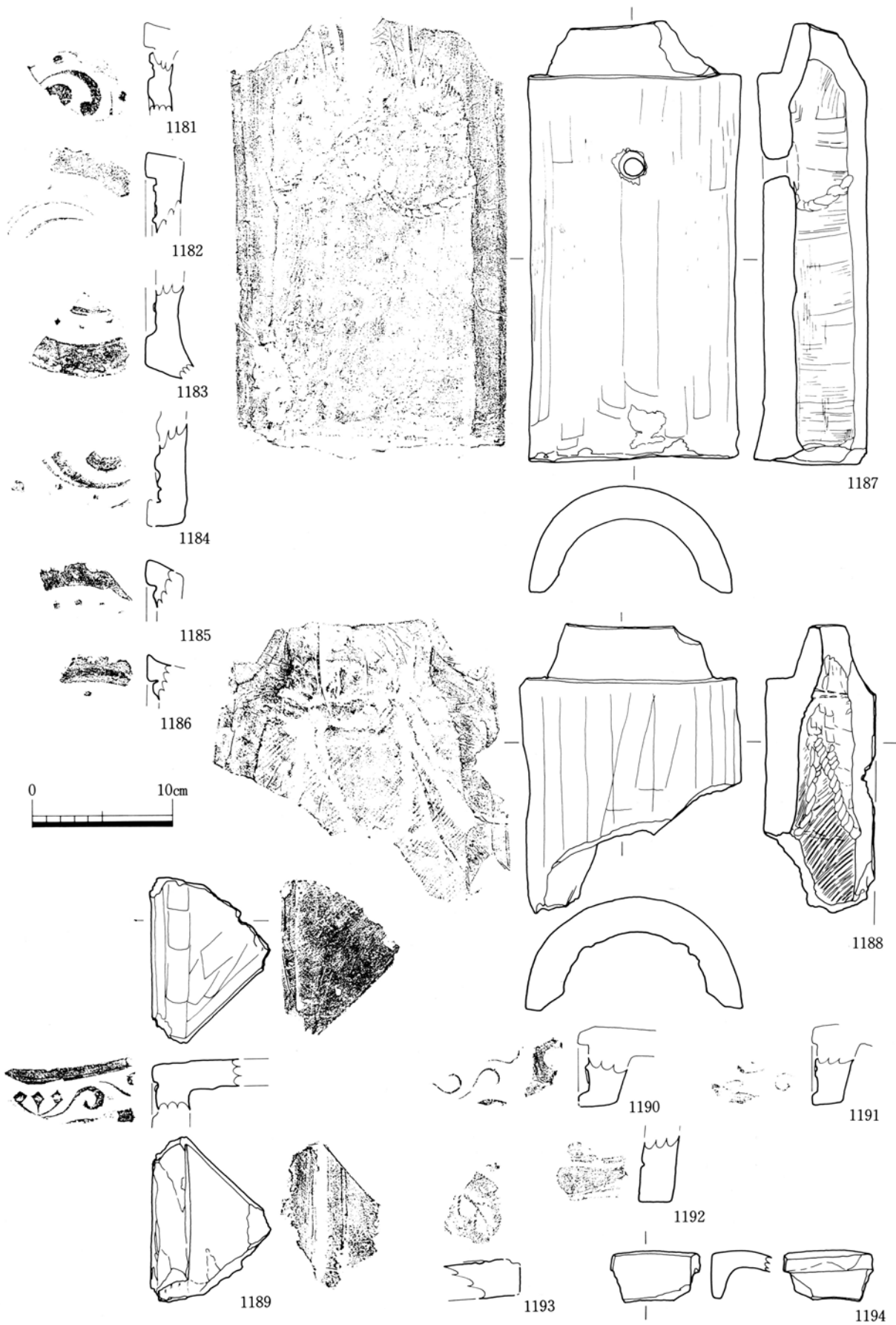
種別	破片	口縁	種別	破片	口縁	種別	破片	口縁
瀬戸美濃窯産陶器	2313	942	瀬戸美濃・天目茶碗	336	137	土師器・碗	0	0
土師器	736	508	瀬戸美濃・丸碗	74	49	土師器・皿	368	384
瓦器	19	2	瀬戸美濃・平碗	0	0	土師器・大形製品	0	0
常滑窯産陶器	938	60	瀬戸美濃・台付碗	7	0	土師器・小形製品	0	0
信楽窯産陶器	1	0	瀬戸美濃・小碗	5	6	土師器・鍋釜	363	123
楽窯産陶器	0	0	瀬戸美濃・沓茶碗	0	0	土師器・その他	2	1
丹波窯産陶器	2	0	瀬戸美濃・緑釉皿	23	25	土師器・不明	3	0
備前窯産陶器	5	0	瀬戸美濃・腰折皿	12	21	土師器・皿口クロ成形	288	61
唐津窯産陶器	4	0	瀬戸美濃・灰釉端反皿	39	53	土師器・皿口クロⅠ類	0	0
朝鮮窯産陶磁器	1	0	瀬戸美濃・鉄釉端反皿	1	1	土師器・皿口クロⅡ類	55	60
中国窯産陶磁器	50	32	瀬戸美濃・折縁皿	12	16	土師器・皿口クロⅢ類	1	1
産地不明陶磁器	0	0	瀬戸美濃・長石釉端反皿	58	70	土師器・皿非口クロ成形	80	323
瓦	?	-	瀬戸美濃・端反皿	110	140	土師器・皿非口クロⅠ類	48	186
埴土・埴型など	10	-	瀬戸美濃・灰釉丸皿	50	75	土師器・皿非口クロⅡ類	1	1
木製品	45	-	瀬戸美濃・鉄釉丸皿	8	11	土師器・皿非口クロⅢ類	29	136
石製品	36	-	瀬戸美濃・長石釉丸皿	34	61	土師器・羽付鍋	5	3
金属製品	8	-	瀬戸美濃・丸皿	92	147	土師器・内耳鍋	58	61
金属製品（鉄製品）	4	-	瀬戸美濃・棧皿	7	9	土師器・炮烙鍋	25	29
金属製品（銅製品）	3	-	瀬戸美濃・内壳皿	14	3	土師器・釜	18	19
自然遺物（骨等）	76	-	瀬戸美濃・菊皿	8	7	常滑・真焼製品	296	35
その他	3	-	瀬戸美濃・棧花皿	2	2	常滑・赤物製品	642	25
総数	4247 + α	1544	瀬戸美濃・ひだ皿	2	2	中国・青磁	16	15
			瀬戸美濃・重圈皿	100	92	中国・白磁	4	4
			瀬戸美濃・挟み皿	0	0	中国・青花	30	13
			瀬戸美濃・平鉢	17	13	瀬戸美濃・播鉢1類	1	1
			瀬戸美濃・大皿	42	27	瀬戸美濃・播鉢2類	25	27
			瀬戸美濃・向付	52	18	瀬戸美濃・播鉢3類	23	24
			瀬戸美濃・筒形製品	22	24	瀬戸美濃・播鉢4類	7	9
			瀬戸美濃・壺類	11	17	瀬戸美濃・播鉢5類	4	4
			瀬戸美濃・瓶類	13	9	瀬戸美濃・播鉢6類	30	35
			瀬戸美濃・花瓶類	3	0	瀬戸美濃・播鉢7類	7	7
			瀬戸美濃・甕類	0	0	瀬戸美濃・播鉢8類	18	20
			瀬戸美濃・水注類	0	0	瀬戸美濃・播鉢9類	11	11
			瀬戸美濃・水清類	2	0	瀬戸美濃・播鉢10類	0	0
			瀬戸美濃・茶入類	2	0	瀬戸美濃・播鉢11類	22	22



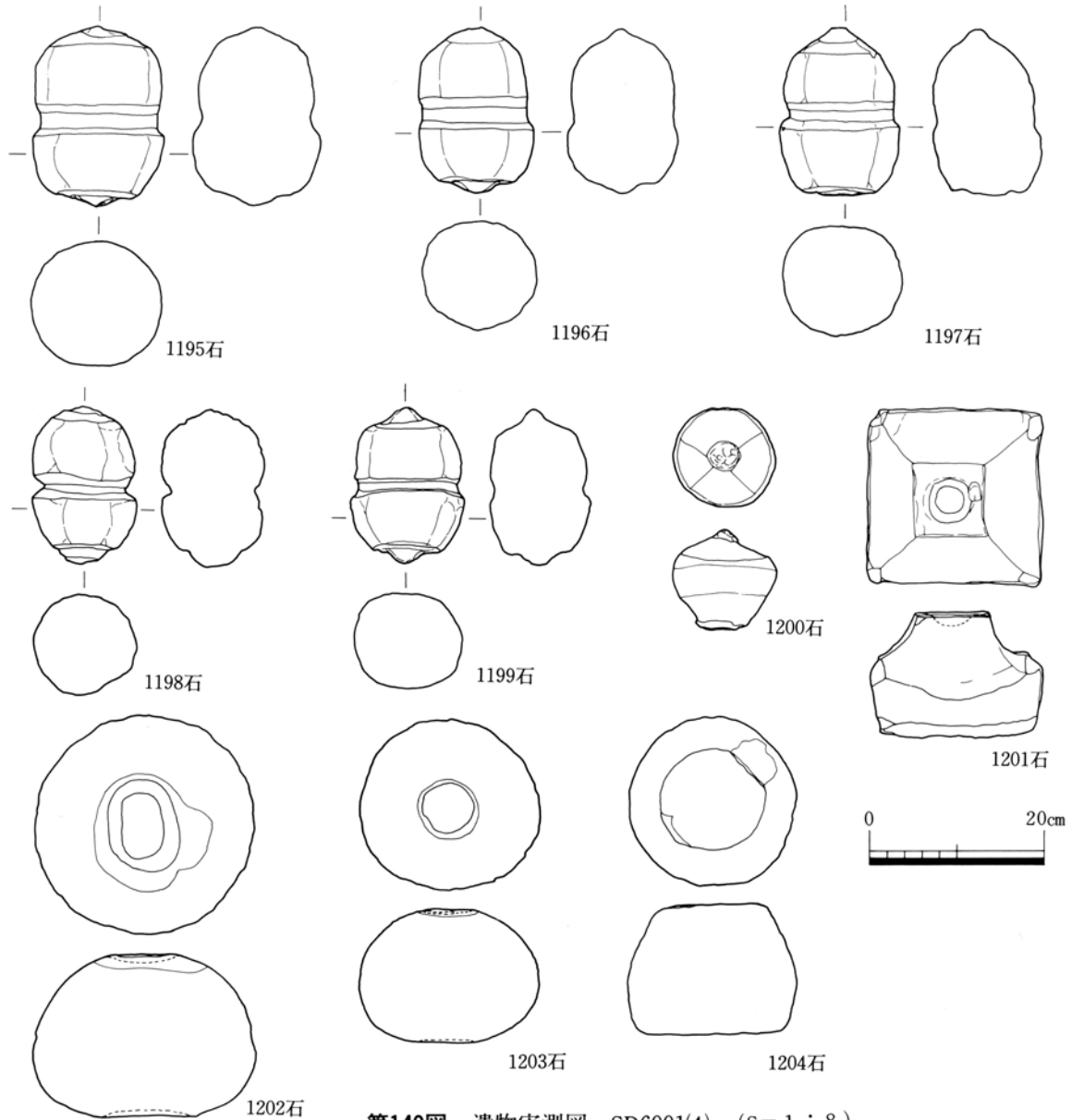
第137図 遺物実測図 SD6001(1)



第138図 遺物実測図 SD6001(2)



第139図 遺物実測図 SD6001(3)



第140図 遺物実測図 SD6001(4) (S=1:8)

- 註 (1) 鈴木正貴 (1991) 「天正地震下層の出土遺物」『年報平成2年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター。
 (2) 鈴木正貴 (1992) 「朝日西遺跡関連出土木製品材質同定」『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集。この報文では、旧五条川・旧五条川灰黒粘土・旧五条川最下層といった調査時のラベルに記載された出土地点をそのまま表記して資料紹介をした。今回は各資料がどの層から出土したかを検討した上であらためて資料紹介をしている。
 (3) 鈴木正貴 (1992) 「清須城下町から出土した漆器について」『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集。木胎漆器の形態分類や紋様構成はここで記載された表記を用いる。
 (4) 1991年に紹介した資料の取り上げた範囲は、NR4001のうちの200㎡に当たる。今回は90D区で検出されたNR4001の範囲を取り上げる。但し、本来検出されたNR4001は更に複数の調査区にまたがる遺構であるが、整理作業の制約上限定して行わざるを得なかった。
 (5) 前掲註(3)と同じ。
 (6) 瀬戸美濃窯産陶器の大窯編年は藤澤良祐の説により、次の文献にその大概がまとめられている。藤澤良祐 (1993) 『瀬戸市史 陶磁史編四』。
 (7) 久保常晴 (1941) 「烏八臼の研究」『考古学雑誌31-1』。
 (8) 西尾市教育委員会より資料の実見・実測に際して便宜を図って頂いた。
 (9) 瓦の分類は鈴木とよ江の提示した分類を使用する。鈴木とよ江 (1992) 「瓦」『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集。
 (10) 註(1)の文献と同じ。
 (11) 加藤理文 (1993) 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会

第3節 遺構外出土資料

本節では、前節で取り扱わなかった出土遺物の中で注目すべき資料を産地・材質別に記述する。それと共に各産地・材質別に遺物の出土状況や清洲城下町遺跡における特徴を考察し、編年的研究等に寄与できる点を指摘したい。なお、城下町期及びその前後の時期に生産活動が行われていた志戸呂・初山窯産陶器、越前・加賀・珠洲窯産陶器、越中瀬戸窯産陶器等は確認できなかった。

A 瀬戸美濃窯産陶器（第141図 1205～1236）

清洲城下町遺跡では多量の陶磁器類が出土しているが、この中で瀬戸美濃窯産陶器は、土師器に次いで最も出土量が多くなっている。主要器種の分類は第1節で検討した通りであるが、これ以外にも特殊な形態がある。先ず、以下にその一部を例示する。

特殊製品

碗類には、焼き締めの小碗（1206）や銅緑釉を塗布した筒形碗（1207）がある。後者は体部の内外面にスタンプで非常に小さな円紋が多数押印されている。また、筒形製品に通有にみられる形態の片口が付いた鉄釉碗（1208）も存在する。

皿類には、小皿（1209・1210）と灯明皿（1211）等がある。1209は碁笥底の小皿、1210は口縁部が大きく外反する小皿である。灯明皿は口縁部が内傾し、つまみを持っている。また、1212は灰釉輪弁皿で、口縁部内面に波状紋が刻まれている。

浅鉢類には、体部は逆ハの字状に開き、口縁部が直立する全面に鉄釉を施した平鉢（1236）や体部が直立する大形の向付（1235）がある。後者は鎊釉を塗布したもので、焼き上がりがありあまり良好ではなく、表面が荒れている。

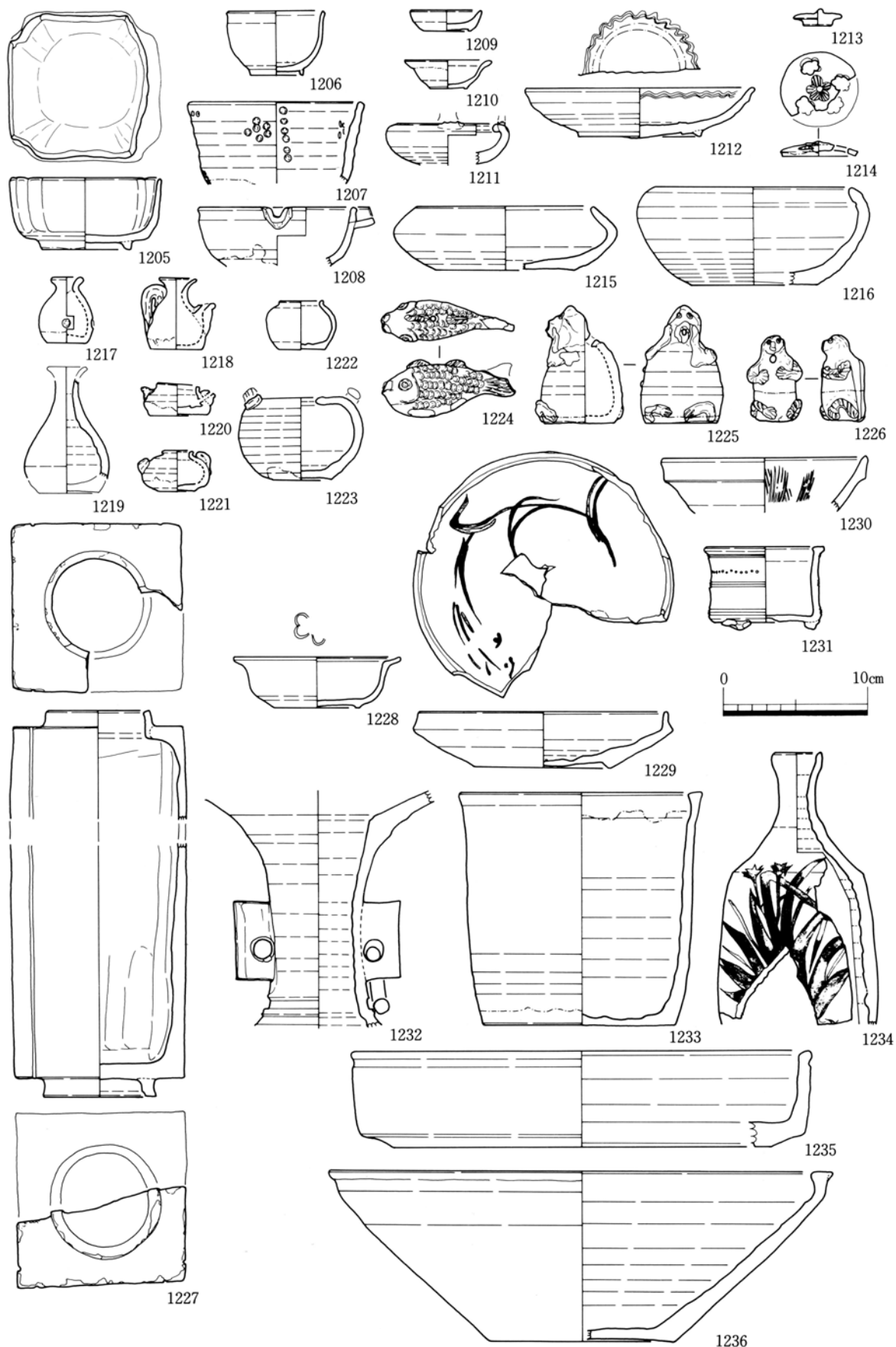
播鉢は大半が口径20cm以上の大形のものであるが、口径が約14cmの小形のもの（1230）も存在する。1230の口縁部の形態は6類に属し、餌播に相当する器種と思われる。

大形製品には、黄褐色の鉄釉を塗布した筒形製品（建水1233）、黄瀬戸釉に鉄絵を施した受け口状口縁の瓶（1234）、大形の花瓶（1232）、体部が四角柱状の花生（1227）などがある。1227は4枚の粘土板を張り合わせて成形し、高台部と口縁部は円形に形作っている。

小形製品には、小壺、小瓶、水滴等がある。1223は鉄釉小壺の完形品で中に骨片が埋納されていた。水滴には水注が小形になったもの（1220・1221）と動物や魚類等を形作ったもの（1224～1226）の2者がある。動物を形作った水滴には、猿をモチーフにしたものが多数を占め、次いで水鳥等がある。

香炉は、ほとんどが主要器種分類に該当するものであり、特殊器形は余りない。1231は無釉の焼き締めた製品で、体部にスタンプで非常に小さな円紋が多数押印されている。

その他の製品として蓋がある。蓋は底部に糸切り痕が残存する落し蓋状のもの（1213）が多い。また、長石釉を施した4つの孔を持つ香合の蓋（1214）も見られる。蓋以外にも陶製の犬（形代：1481・1482）もあるが、これは形態が土製の犬と類似したものである。



第141図 遺物実測図 瀬戸美濃窯産陶器

分析

次に清洲城下町遺跡における瀬戸美濃窯産陶器全体の出土状況を器種別・時期別に検討してみる。
 なお、瀬戸美濃窯産陶器の編年は基本的には藤澤良祐⁽¹⁾の説を用いる。

まず、調査区別の器類構成について検討する(第143図①)。各調査区とも破片数で器類別割合を算定すると、おおよそ碗類2割、皿類3割、浅鉢類1割以下、播鉢類2.5割、大形製品2割となっている。これを調査区別に見た場合に特異な様相を呈するのは、89A区(碗類と皿類が多い。)、本丸地区(碗類と皿類が少ない。)、62G区(碗類と皿類が少ない。)、90F区(小形製品が多い。)等があげられる。清須城下町の中心部に供膳具が少なく、周縁部に供膳具が多い傾向が読み取れる。

碗の中での器種構成を検討する(第143図②)と、ほとんどの調査区で天目茶碗の占める割合が高いことが判明するが、62N区・62G区といった遺跡の中心部では天目茶碗の占める割合が比較的低い。

次に播鉢の口縁部形態について考察する。藤澤の瀬戸美濃窯産陶器の編年によれば、播鉢は大きく2類に区分されており、各時期ごとに各々の形態的特徴が述べられている。これを今回の分類と対応させると、おおよそ次のようにまとめられる。なお、この対応関係は厳密な意味では一致しておらず、あくまで目安であることを付記しておく。

藤澤編年・窯後期末段階——口縁部形態1類・2類

藤澤編年・大窯第1段階——口縁部形態3類・4類

藤澤編年・大窯第2段階——口縁部形態5類・8類

藤澤編年・大窯第3段階——口縁部形態6類・9類

藤澤編年・大窯第4段階——口縁部形態7類・10類

藤澤編年・大窯第5段階——口縁部形態11類・(7類)

これを換言すれば、播鉢の口縁部は2類→3類→4類→5類→6類→7類という変化の過程(藤澤分類の播鉢Ⅰ類)と、(1類・2類)→8類→9類→10類→11類という変化の過程(藤澤分類の播鉢Ⅱ類)が想定できる。以上の分析を踏まえ、播鉢の口縁部形態別の出土量の割合を時期順に配列して、調査区ごとに帯グラフを作成する(第142図)。これによると次の3点が指摘できる。

①清須城下町の中心部(本丸地区・田中町地区・五条橋地区)では比較的古い形態のものが多く、藤澤編年の大窯第4段階以降に該当するものは少ない。

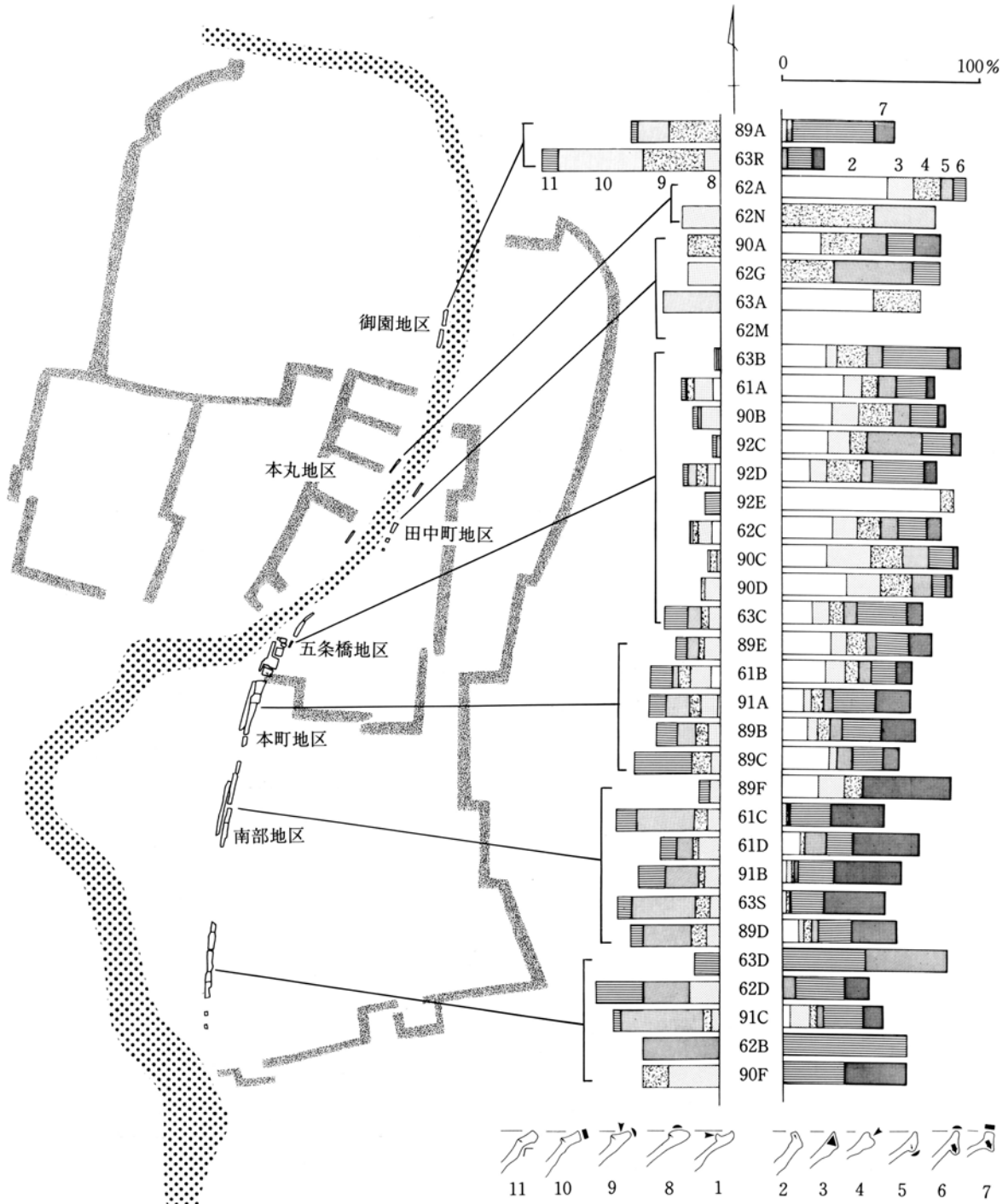
②本町地区は古いものから新しいものまで、比較的均等に出土している。

③清須城下町の周縁部(御園地区・南部地区)では比較的新しい形態のものが多く、藤澤編年の大窯第3段階以前に該当するものは少ない。

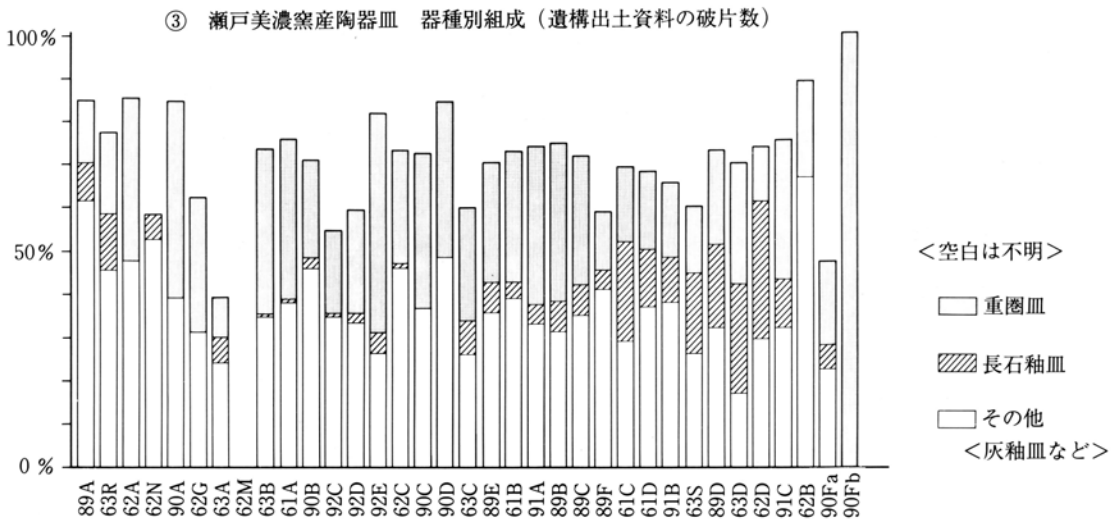
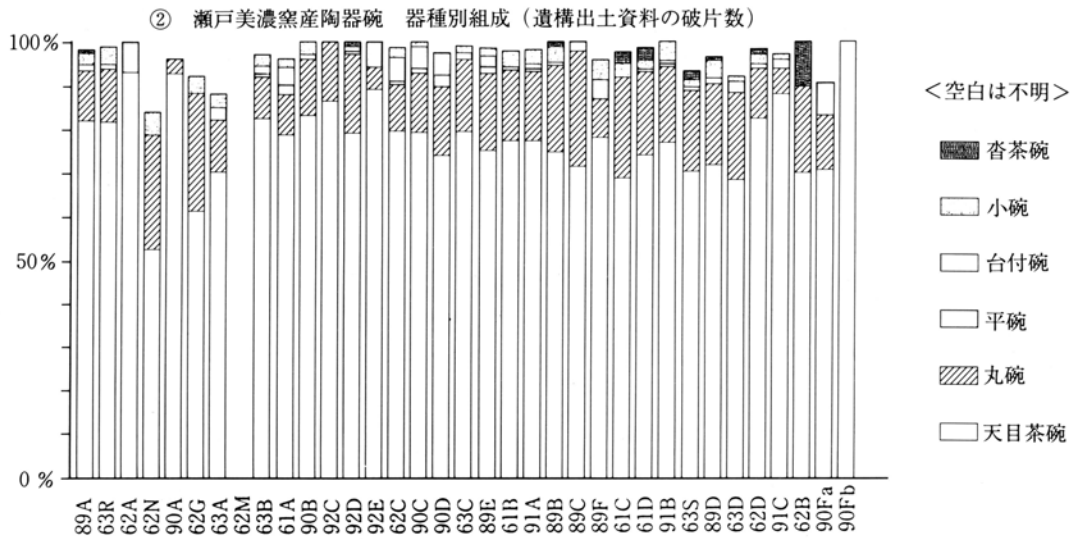
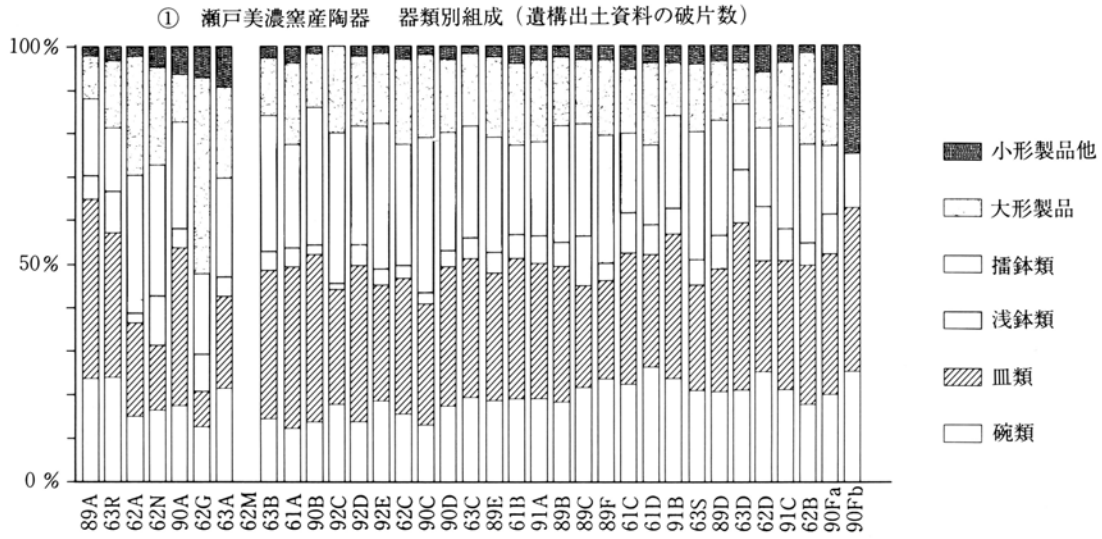
瀬戸美濃窯産の播鉢は尾張地域の戦国時代の遺跡からは確実に一定量が出土する遺物で、消耗が激しく時期別変化も認識し易い点から、各遺跡・各地点の存続期間を数量的に検討するには適している。今回の検討では、播鉢の出土状況(即ち日常生活の活動状況)は古い段階は清須城下町の中心部に多いが、次第に周縁部に拡大しドーナツ化現象を起こしていることが明らかになった。(鈴木正貴)

註 (1) 藤澤良祐(1993)『瀬戸市史 陶磁史編四』

口縁部の形態別に出土量の割合を口縁部計測法で算出した。



第142図 調査区別 瀬戸美濃窯産播鉢出土分布図



第143図 瀬戸美濃窯産陶器の器種組成図

B 常滑窯産陶器（第144図 1237～1243）

今回の調査で遺構から出土した常滑窯産陶器は破片数で9000点弱を数える。常滑窯産陶器は黒灰色の胎土を持つ焼き締め陶器の「真焼」と、明褐色の胎土を持つやや焼きが甘い「赤物」に区分され、前者が約45%を占めている。ただし、体部の破片では近世の常滑窯産陶器と区分が困難であり、城下町期と宿場町期の区分は共伴資料によって判断した場合が多いので、確定的な数値ではない。器種には甕、平鉢、播鉢、筒形製品、壺等の大形製品があり、甕が多数を占める。甕については遺構一括資料で幾つか紹介しているので、ここでは先ず播鉢、筒形製品、壺の事例を紹介する。

播鉢は内面に一本引きの播目が施されるもので、1237・1238は見込み部中央から放射状に口縁部に向けて播目が伸びている。口縁端部は強くナデられ、角は丸められている。

筒形製品は口径が12cm前後の小形の製品で、1241は口縁部内面がひだ状になっている。

1239は口縁部外面を強くナデた無頸壺で「赤物」製品である。

なお、91A区から出土したほぼ完形の甕について触れる。1243はSB6010の南東部に据え付けられて遺存したもので、地震によって破壊されていた。淡褐色の胎土を持つ「赤物」で、口縁部の形態は張り付いた縁帯に2段強めのヨコナデを施し、口縁上端部が凹むものである。

分析

常滑窯産陶器の編年的研究は赤羽一郎⁽¹⁾・中野晴久⁽²⁾の両氏によって進められてきた。ただし、これらは中世窯としての常滑窯産陶器を題材とした感が強く、16世紀を中心とした編年については大枠は提示されたものの未だ混沌とした状態であると言わざるを得ない。一方、江戸遺跡群の調査の進展により、江戸時代の常滑窯産陶器の編年的研究も一部で見られるようになっている。

さて城下町期の各期の常滑窯産陶器の状況を検討してみる。

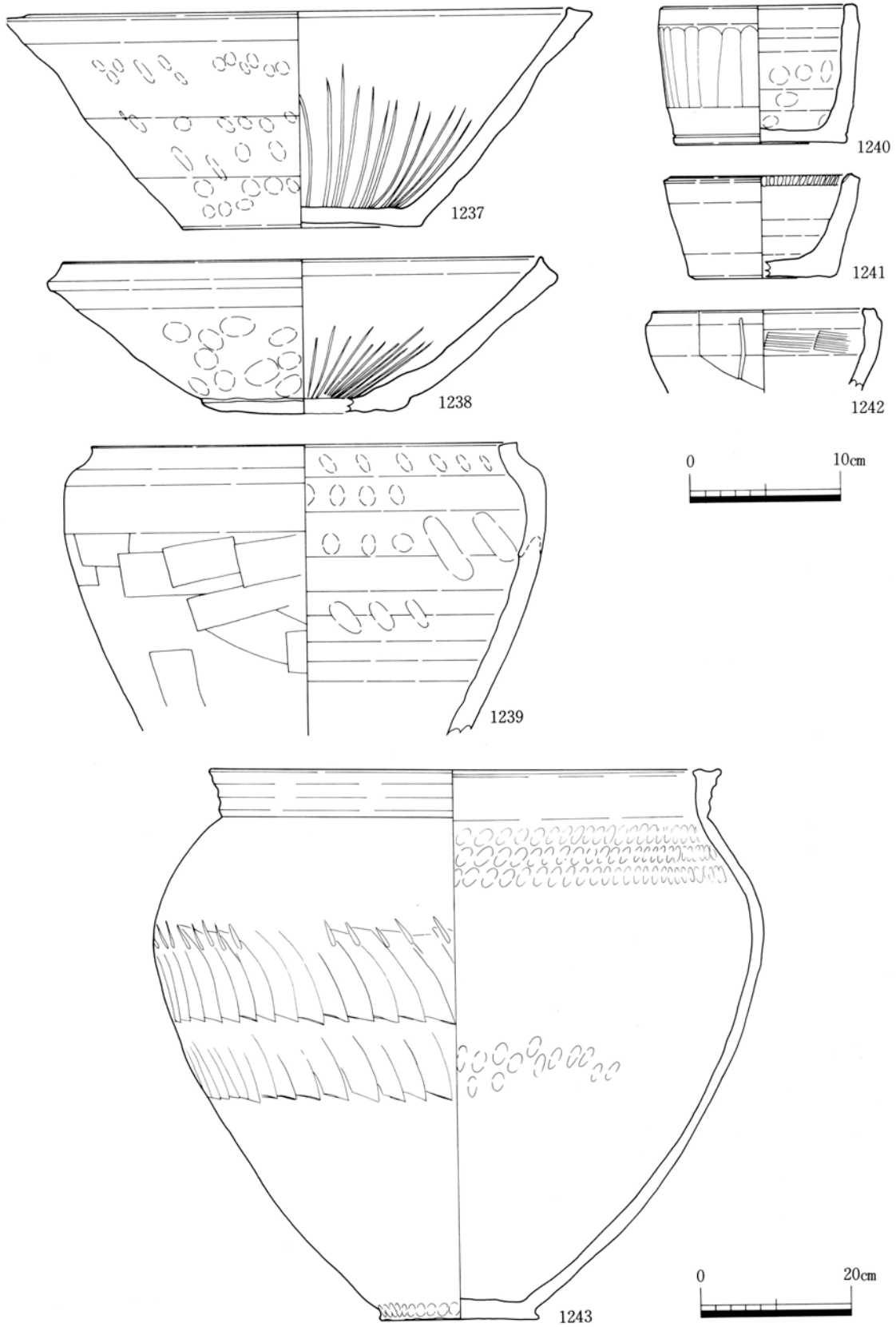
城下町期Ⅰ期（15世紀末～16世紀前葉）——甕、平鉢、壺の器種が認められる。甕の口縁部はN字状の縁帯が頸部に張り付いており、縁帯の面が幅広にヨコナデされている。口縁上端部は丸くなり、張り付いた縁帯との間に段がある。平鉢は口縁上端に面があり、その断面形は方形に角張っている。「真焼」の割合が8割以上を占めている。

城下町期Ⅱ期（16世紀中葉～16世紀後葉）——甕、平鉢、壺等の器種が認められる。甕の口縁部は縁帯に2段のヨコナデを施し、口縁上端部が平坦になる形態である。平鉢は口縁上端に面があるが、端部が丸みを持っている。「真焼」の割合が5割～7割を占めている。

城下町期Ⅲ期（16世紀末～17世紀前葉）——甕、（平鉢）、播鉢、筒形製品、壺等の器種が認められる。甕の口縁部は縁帯に2段強めのヨコナデを施し、口縁上端部が凹む。平鉢の内面に一本引きの播目が施される。「真焼」の割合が3割以下となっている。（鈴木正貴）

註 (1) 赤羽一郎（1984）『考古学ライブラリー-23常滑焼-中世窯の様相-』等による。

(2) 中野晴久（1986）「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』等による。



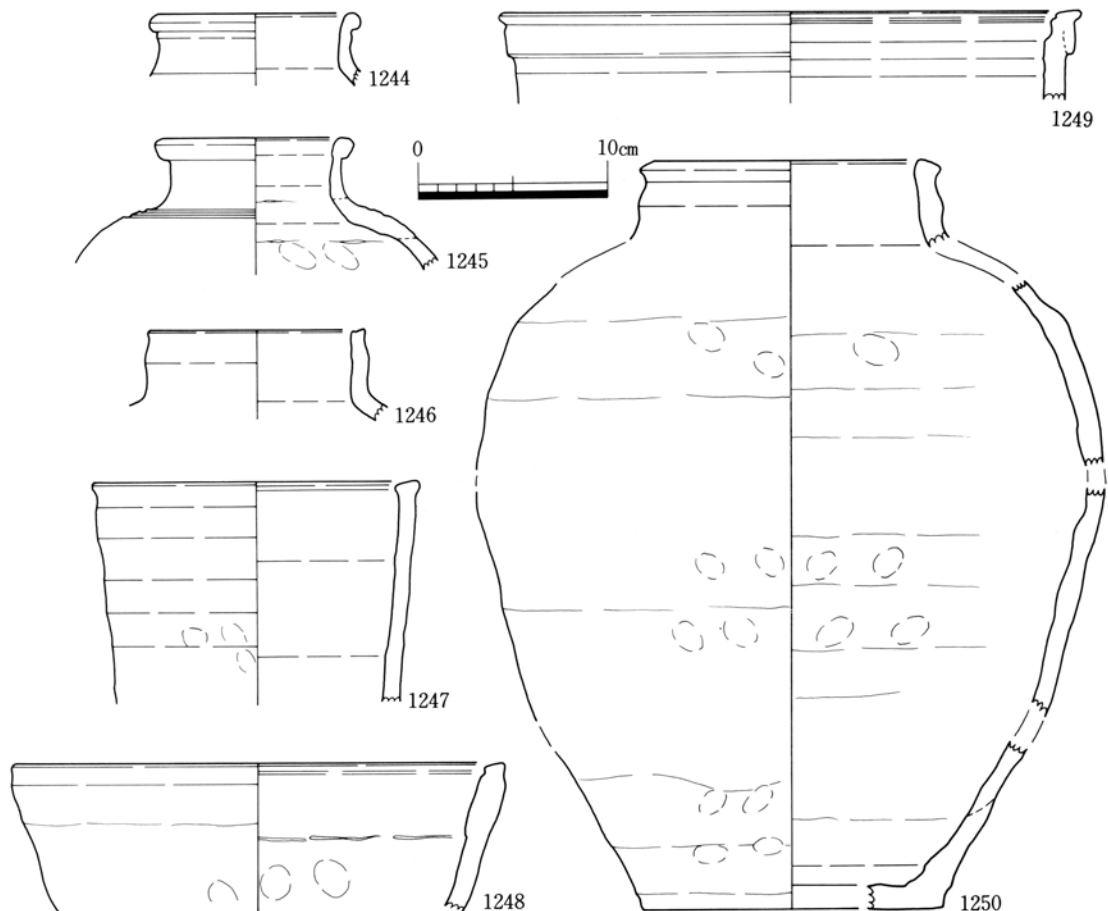
第144図 遺物実測図 常滑窯産陶器

C 信楽窯産陶器 (第145・146図 1244~1256)

今回の調査で出土した信楽窯産陶器は破片数で100点以上を数える。胎土は長石を多量に含む白色を呈するものが多く、黒色の胎土がサンドイッチ状に挟まれるものも存在する。自然釉が掛かることはあるが、基本的には無釉の製品である。なお「伊賀焼」については、伊賀窯と信楽窯が近在すること、16世紀中葉以前においては伊賀と信楽の区分に疑問があること等の理由から一括して信楽窯産陶器とした⁽¹⁾。器種には甕、大皿、播鉢、筒形製品、壺等の大形製品があるが、小破片が多いため器種の確定が難しいものも多い。口縁部計測法で各器種の割合を算定すると壺と筒形製品が多数を占め、以下播鉢、大皿、甕の順で出土している。

壺は口縁部を折り返して丸めたものと口縁部が直立したままのものがある。1244・1245は前者の壺で焼成が良好で表面は薄い褐色を呈している。1250は口縁端部が少し丸められた壺で黒色の粘土をサンドイッチ状に挟んだ胎土を持つ。1246は口縁端部を切り離した形態になるもので白色の均質な胎土を持っている。

筒形製品(建水・水指)は破片数で8点出土している。1247は口縁端部に面を持つ表面が褐色となったものである。これは観音寺城跡に類似品が見られ、16世紀中頃に位置づけられる。1248は黒色の粘土を挟んだ胎土を持つ口縁部がやや厚く膨らむもので、やや逆ハの字状に開く。



第145図 遺物実測図 信楽窯産陶器(1)

甕(1249)は口縁部を外側に折り返して肉厚の縁帯を作るもので、内側を強くナデて段差を形作っている。口縁部には自然釉が掛かっており、松澤編年Ⅵ期(16世紀前葉)に位置づけられる。⁽²⁾

播鉢は内面に一単位数条の櫛目が施されるものである。口縁部の形態で2類に区分され、外側に折れて端面に沈線が巡るもの(1253・1255)は松澤編年Ⅵ期(16世紀前葉～16世紀中葉)に、折縁の口縁部が受け口状に段を持つもの(1254)はⅦ期(16世紀後葉)に各々属する。1252は播鉢の底部で、内面が非常に摩滅している。

大皿(1256)は体部がやや内彎しながら逆ハの字状に開く形態で、表面が褐色となっている。

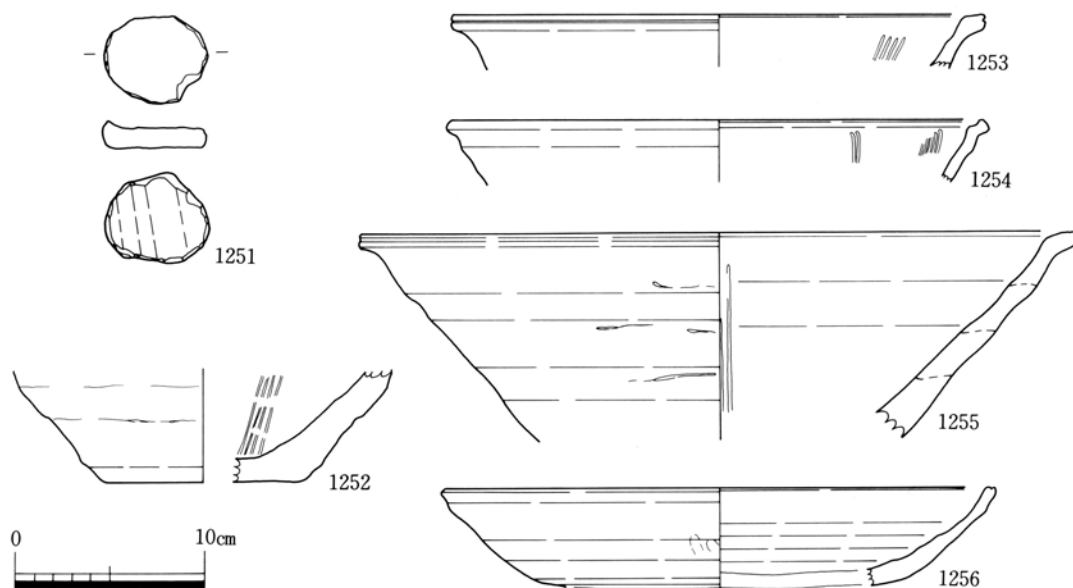
分析

信楽窯産陶器の編年的研究は松澤修等によって進められている。これによれば、開窯期から江戸時代前半までの信楽窯産陶器の様相を10期に区分されている。⁽²⁾清洲城下町遺跡から出土した信楽窯産陶器はⅥ期・Ⅶ期のものが主体で、年代的には16世紀前葉から16世紀末に位置づけられる製品である。中には15世紀代に遡る資料も存在する。器種構成もいわゆる茶陶と呼ばれる建水等の製品ばかりではなく、甕や播鉢等も出土している点は注目に値する。

調査地区別の出土傾向に関しては、御園・本丸両地区では全く出土しないのに対し、田中町地区以南ではほぼ一定の割合で出土していることが窺える。このことから、信楽窯産陶器が特定階層に強く好まれた製品とは考えにくい。(鈴木正貴)

註(1) 秋田裕毅(1989)「信楽焼の流通と伊賀焼きについて」『実測図集成Ⅲ—県外出土の信楽焼と窯跡出土遺物—』滋賀県立近江風土記の丘資料館

(2) 松澤修(1989)「信楽焼の編年について」『中世の信楽—その実像と編年を探る—』滋賀県立近江風土記の丘資料館



第146図 遺物実測図 信楽窯産陶器(2)

D 楽窯産陶器（第147図 1257～1267）

今回の調査で出土した楽窯産陶器は破片数で約100点を数える。胎土は白色の砂粒を含有する暗褐色を呈するもので、表面には鉛釉が施されている赤色系軟質施釉陶器である。黒色に発色するいわゆる「黒楽」、表面が赤褐色となるいわゆる「赤楽」と、白色の粘土を用いて白化粧したものの三者が存在する。器種組成は大半が碗で僅かに水滴が認められ、皿や大形製品は全く存在しない。

黒色の釉を施した「黒楽」は碗のみが存在する。1257は体部が直立し口縁部がやや内傾するものであり、釉が剥落した後に黒色漆が塗布されていた。1258は「黒楽」の碗の底部である。

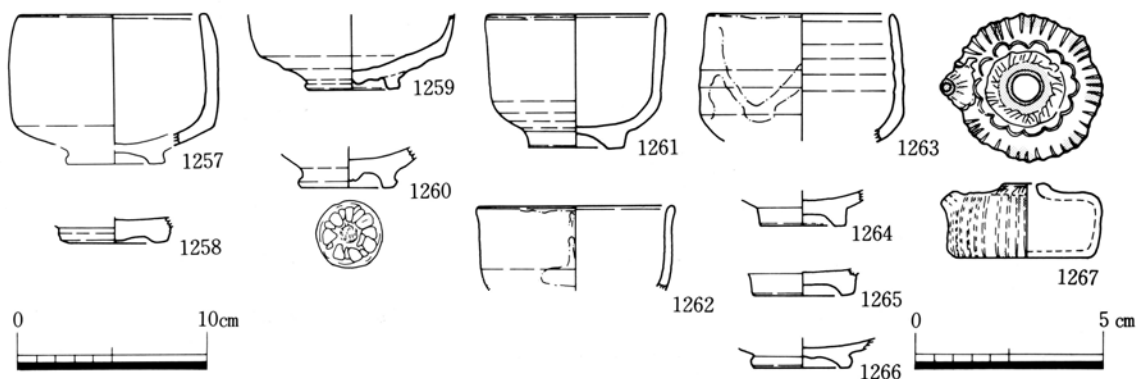
褐色の釉を施した「赤楽」も碗のみが存在する。1259は見込み部がやや凹む茶溜りが存在し、体部は途中で屈曲して直立するものである。1260は高台裏の部分に棒状工具で押した痕跡が認められる。

外面に白色の粘土を薄く掛けその上に鉛釉が施された掛け分けの筒形碗（1261～1266）が数点存在する。これらは高台の作りが丁寧なクロコ成形による製品で、内面が黒色を呈しており、底部が淡褐色をするものも認められる。外面は白化粧の上に緑彩を僅かに流し掛けたものが多い。

また、碗の他に水滴が2点存在する。NR1002（1267）とSX7005（697）から1点ずつ出土した。1267は口縁部と注口部が白色の粘土を用いて花形に造形された水滴である。最大径3.0cm、器高2.0cmの極めて小形の製品で、肩部から体部にかけて線刻で花形に加工されている。全面に鉛釉が施され、肩部の花弁部に緑色に発色した部分が斑点状に存在する。SX7005から出土した697は、形態や規模が1267と類似しているが、1267よりも焼成が良好で口縁部と注口部の文様が異なっている。

地区別に楽窯産陶器の出土量を見ると、本丸・田中町の両地区では全く出土せず、御園地区では他の地区に比べ突出して多種多量の製品が出土する傾向が認められる。時期的には城下町期Ⅲ期以降に出現すると思われる、Ⅲ－2期に盛行するようである。施釉軟質陶器の研究は1990年に一定の成果を得ている⁽¹⁾。これによれば天正年間に「掛け分けの筒碗」が出現し、慶長年間まで盛行していたとされるが、本遺跡の事例はこの説と矛盾しない。出土分布を見る限り、使用階層が武士等の上層階級に限定されず、商職人居住域でも一定量の出土を見る。このことから清須城下町全体の特質として楽窯産陶器の出土分布を捉えることは可能だが、遺跡内の階層差を反映しているかは疑問である。（鈴木正貴）

註 (1) 堀内明博（1990）「京都－（添付資料）」『近世都市遺跡出土の施釉軟質陶器－楽とその周辺－』関西近世考古学研究会による。



第147図 遺物実測図 楽窯産陶器（1267のみ S=1：2）

E 備前窯産陶器（第148・149図 1268～1299）

今回の調査で出土した備前窯産陶器は破片数で約200点を数える。いずれも、胎土は赤褐色を呈する焼き締め陶器であり、無釉の製品である。器種は小碗、大皿、播鉢、瓶、壺、花生、小瓶、土錘等が認められる。播鉢が最も多く出土し、次いで大皿、瓶が多く存在している。

小碗（小杯：1268）は1点確認された。高台を削り出し、体部は彎曲しながら直立する形態である。

大皿（盤）は破片数で32点確認されている（1286～1290）。体部は逆ハの字状に開き、口縁端部を上方へつまみ上げる形態で、体部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。底部と体部の下半部の外面にはヘラケズリで器面が調整されている。口径は27cmと30cmぐらいのものが多く、それよりも大きいものも数点存在する。1286は重ね焼きの最上段に置かれた製品である。

播鉢は（1291～1299）口縁部の縁帯が幅広く厚く作られたもので、内面に施された櫛目は斜め上方にはね上げている。底部と体部下端部の外面はヘラケズリ調整され、縁帯には2条程度の沈線が存在する。縁帯直下には重ね焼きの痕跡が巡っており、口縁部を大きく歪めて片口を作っているものがある。口縁部の形態は微細にみれば、次の3類に区分できる。Ⅰ類（1292・1295～1299）は口縁部が比較的厚く上端部に面が存在しているものである。Ⅱ類（1293）は口縁部が比較的厚く上端部が丸くなるものである。Ⅲ類（1291・1294）は口縁部が比較的薄くなり、結果として口縁部が逆くの字に折れ曲がる形態となるものである。Ⅰ類は城下町期Ⅲ－1期に、Ⅲ類はⅢ－2期に各々多くみられるようである。

瓶（徳利）は破片数で16点確認されている。完形の遺物は存在しない。瓶の口縁部は形態から3類に区分できる。Ⅰ類は非常に薄作りで僅かに受け口状となるもの（1269）、Ⅱ類は口縁部が厚手に作られ、口唇部に縁帯状に面をもつもの（1270・1272）、そしてⅢ類はⅡ類と同様であるがやや受け口状になったもの（1271）である。体部の形状は平底で船徳利形となっている。また、1285は底部に窯印の刻書「三角に十」が施されたもので、肩部に重ね焼きの痕跡が残存している。底部の成形は大部分はヘラケズリによる平底であるが、SD6001から出土した瓶（1163）は蛇ノ目高台状になっており、上手の製品である。

壺はSK7023から体部のみが1点（1050）出土している。

筒形製品は口径が比較的小さい花生になるもの（1280）と口縁部がやや内傾した水指（1281）になるものが存在する。前者は薄く成形されており、体部は直立しそのまま口縁端部に至るものである。

小瓶（1273～1277）は破片数で12点出土している。体部下半部はヘラケズリされ、底部は平底である。1273は体部を大きく凹ませたもので、この底部には刻書が記されている。

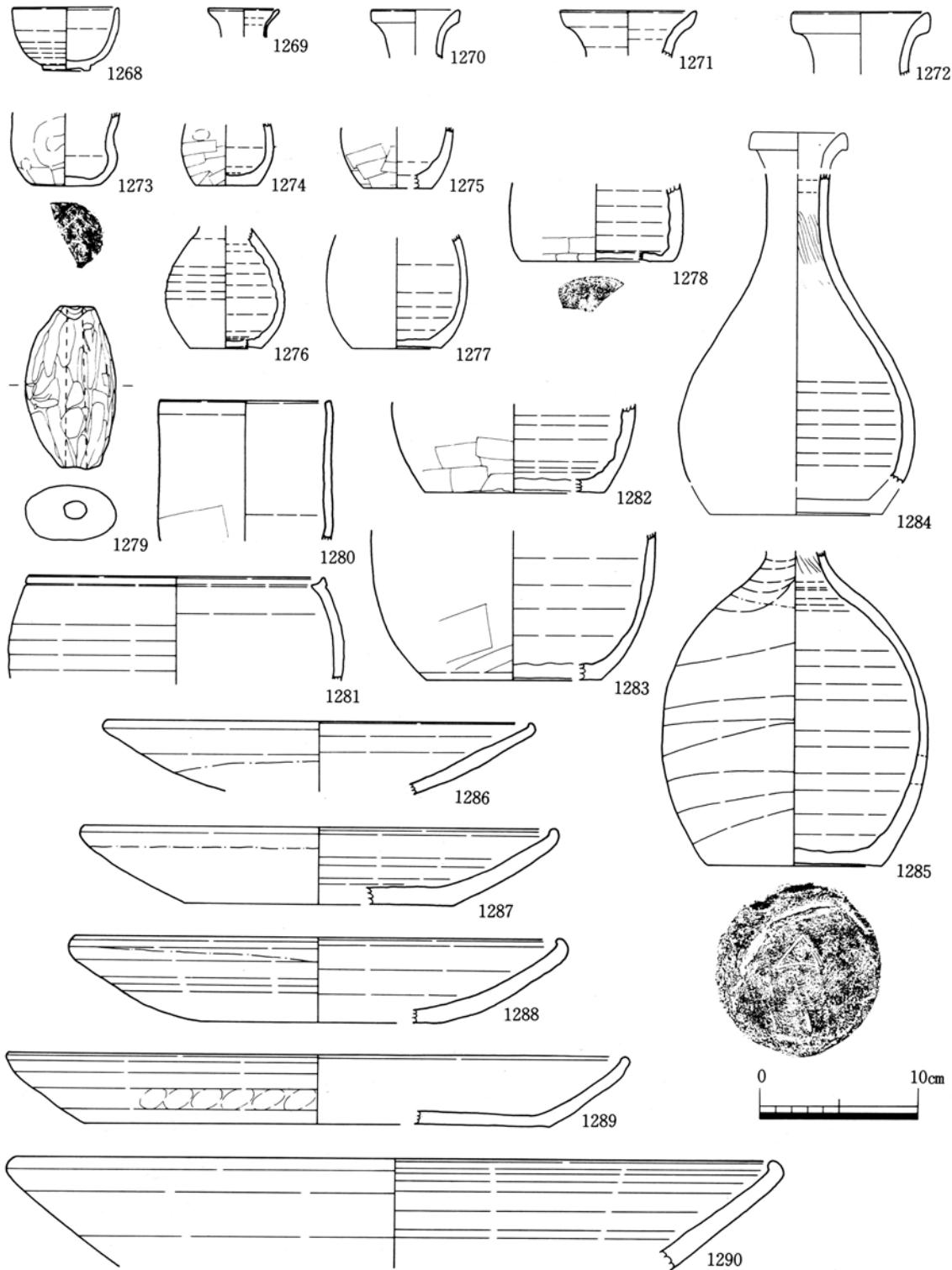
この他に特殊な製品として土錘があげられる。断面形が楕円形で表面は粗くヘラケズリされている。このような製品は他に類例がみられないものである。

備前窯産陶器の編年的研究は間壁忠彦・伊藤晃等によって進められ、中世備前焼は5期に区分されている。⁽¹⁾清洲城下町遺跡から出土した備前窯産陶器はV期のもののみで、年代的には16世紀後葉から17世紀初頭に位置づけられる製品である。出土地点も城下町期Ⅲ期に属する遺構から出土するのみで城下町期Ⅰ期・Ⅱ期に属する備前窯産陶器は存在しない。

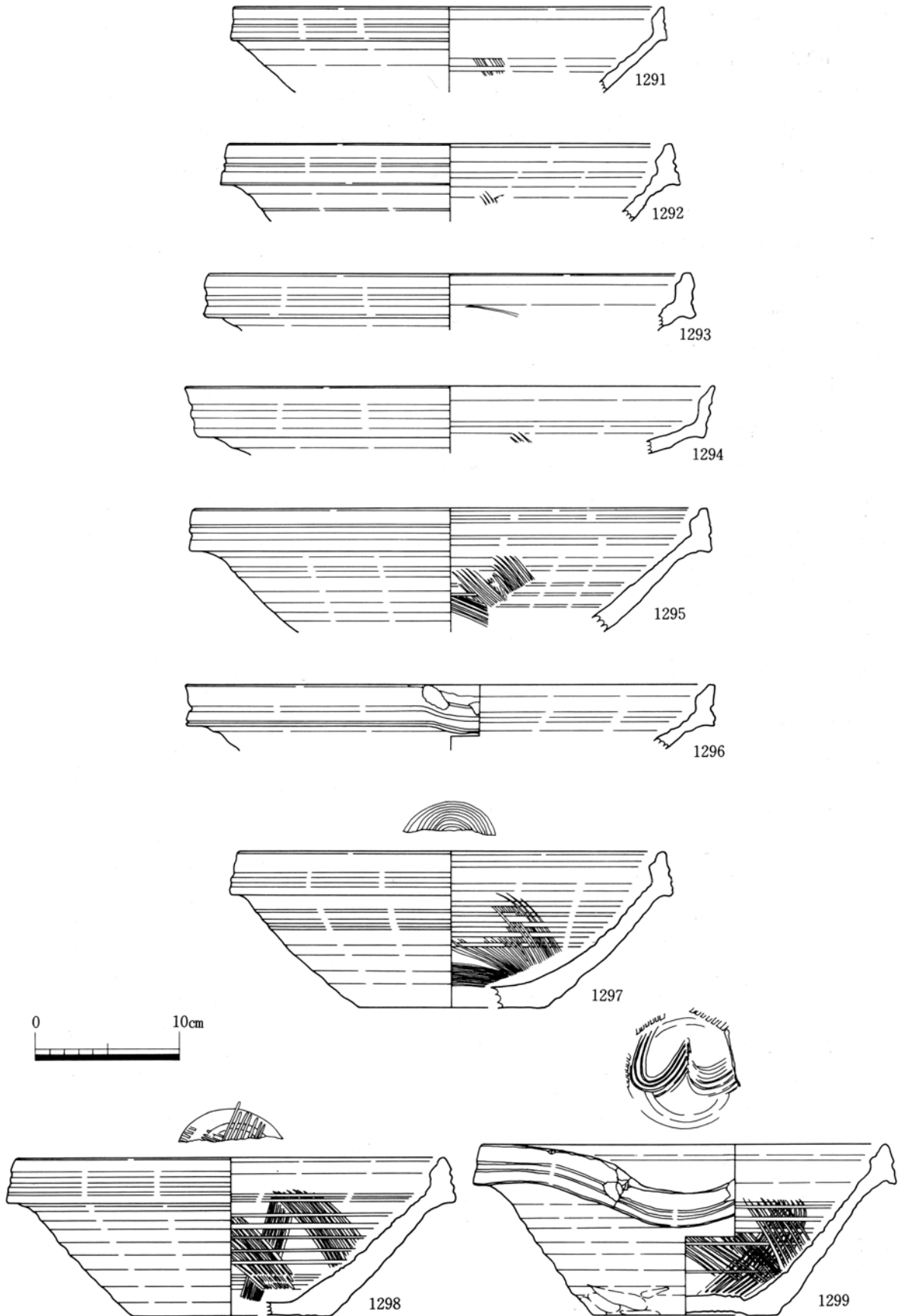
器種構成は播鉢、大皿、瓶等の日常雑器的な製品が多く、備前窯産陶器の代表的器種である大甕が全く存在しない。甕は常滑窯産陶器で充当されていたと考えられる。調査地区別の出土傾向は、御園

・本丸・田中町地区では全く出土しないのに対し、本町地区以南でやや多く出土していることが判明した。この結果は各地点の存続期間に左右されたものと考えられよう。(鈴木正貴)

註 (1) 間壁忠彦 (1991) 『考古学ライブラリー-60備前焼』、伊藤晃 (1985) 「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会等による。



第148図 遺物実測図 備前窯産陶器(1)



第149図 遺物実測図 備前窯産陶器(2)

F 丹波窯産陶器（第150図 1300～1303）

今回の調査で出土した丹波窯産陶器は破片数で10点を数える。胎土は暗灰褐色を呈する無釉陶器であり、比較的重い胎土（a類）と比較的軽い胎土（b類）がある。器種は大皿、瓶、壺（甕）の大形の製品が認められる。出土点数が限定されているため、器種別出土量の多少は詳らかにし得ない。

壺は2点出土した。1301aは口縁部が少し外折しながら開くもので、端部をつまみあげないタイプである。慶長年間に位置づけられる資料と思われる。1303は壺の底部で肩部に自然釉が掛かっている。共に胎土は重いa類である。また、壺か甕と思われる底部の破片（1301b）が1点出土している。

瓶（1302）は89E区から出土した。体部は器壁が厚く紐作りであり、口縁部はラッパ状に開く。口縁端部は縁帯状に面を持ち、体部中央に重ね焼きの痕跡が残存している。胎土は比較的軽いb類の胎土であり、17世紀初頭に位置づけられよう。

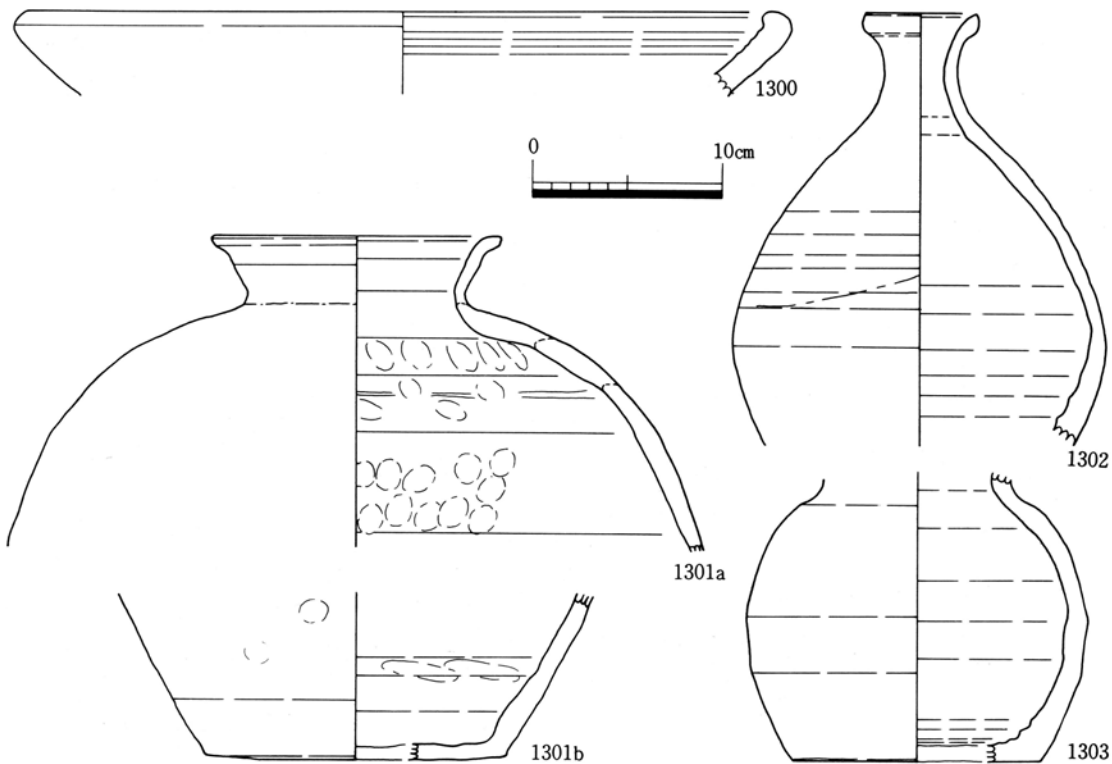
大皿（1300）は器壁が極めて厚いa類の胎土で、口縁端部を上方へつまみ上げている。

丹波窯産陶器の編年的研究は、檜崎彰一によって平安時代後期から桃山時代までを6期に区分した案が提示されている⁽¹⁾。また播鉢といった特定器種の変遷案もいくつか存在する⁽²⁾。清洲城下町遺跡から出土した丹波窯産陶器はV期～VI期に属するものと思われ、年代的には16世紀後半から17世紀初頭に位置づけられる製品である。これまでの調査では鳶口壺が1点確認されている⁽³⁾のみで、本遺跡では例外的な存在であったと思われる。 （鈴木正貴）

註 (1) 檜崎彰一（1977）「丹波」『日本陶磁全集11』中央公論社。

(2) 長谷川真（1985）「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会等がある。

(3) 小澤一弘編（1992）『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集。



第150図 遺物実測図 丹波窯産陶器

G 唐津窯産陶器 (第151図 1304~1312)

唐津窯産陶器は、遺構から出土した破片数で200点以上を数え、今回の調査で出土した総数は優に300点を越える。胎土は暗灰褐色から褐色を呈し、主として暗緑色に発色する灰釉を塗布した施釉陶器である。鉄絵を施すものも存在する。器種は碗、皿、大皿(盤)等の製品が認められ、大形製品は存在しない。器種別の出土量は、碗と皿類が多く、その他の器種は殆どない傾向が窺える。

碗は丸碗、天目茶碗、筒形碗、小碗の4者が存在する。いずれも外面の下半部には釉を施さず、露胎部の表面は紫褐色に変色しているものである。1304~1306は丸碗で、1304と1305は口縁部をややつまんで直立させたもの、1306は逆ハの字状に開いたものである。天目茶碗はSK7029から出土した事例(900)が存在する。1307は口縁部が直立する小碗、1308は小形の筒形碗である。

皿は丸皿とひだ皿が存在する。大半は内面と高台部に胎土目積みと思われる目積みの痕跡が残存し、その痕跡は摩滅している。1309・1310は口縁端部が上方へ短く伸びる。1311は口縁部を大きく歪めたひだ皿、1312は内面に鉄絵を施した焼成不良の皿である。なお、灰白色の発色をした長石釉?のひだ皿のセットがSK7029から出土している(929~933)。

1313は、ここでは唐津窯産陶器の大皿(盤)としたが、産地はなお確定できない。逆ハの字状に開いた体部から口縁部にかけて直立したのち外折して口縁端部を厚く丸める形態である。

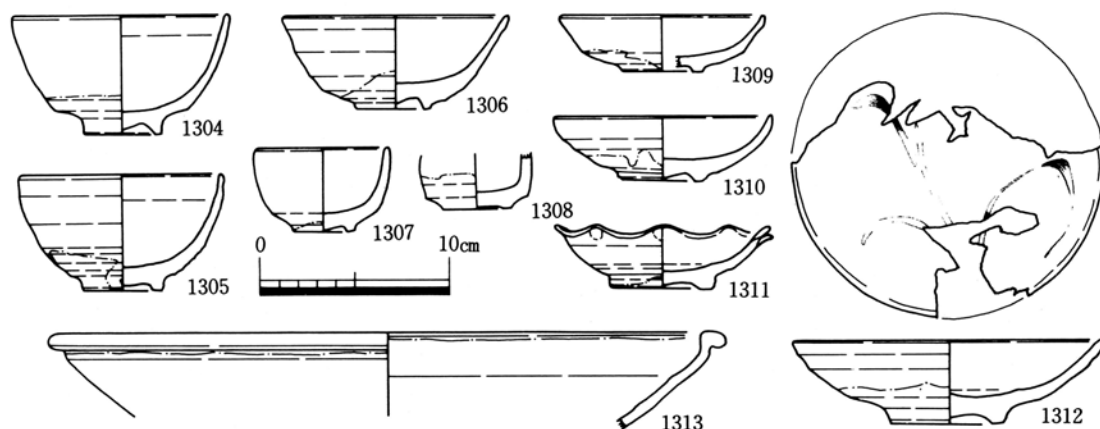
唐津窯産陶器(肥前窯産陶磁器)の研究は大橋康二等によって進められ、陶器の変遷を5期に区分している⁽¹⁾。また、消費地遺跡における唐津窯産陶器等の出現を近世への画期と捉える見方もあり⁽²⁾、城下町期の研究に重要な位置を占めている。

清洲城下町遺跡から出土した唐津窯産陶器は大橋編年のⅠ期に属するものと思われ、城下町期Ⅲ期に属する遺構から出土している。調査地区別の出土分布状況もこうした状況を反映している。ただし、城下町期Ⅲ期に唐津窯産陶器が見られるとは言え、その出土比率は西日本の状況と比べ著しく少ない。

(鈴木正貴)

註 (1) 大橋康二(1989)『考古学ライブラリー-55肥前陶磁』を主として参考にした。

(2) 鈴木重治(1989)「中世から近世への画期-陶磁考古学の視点から-」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会。



第151図 遺物実測図 唐津窯産陶器

H 朝鮮窯産陶磁器（第152図 1314～1324）

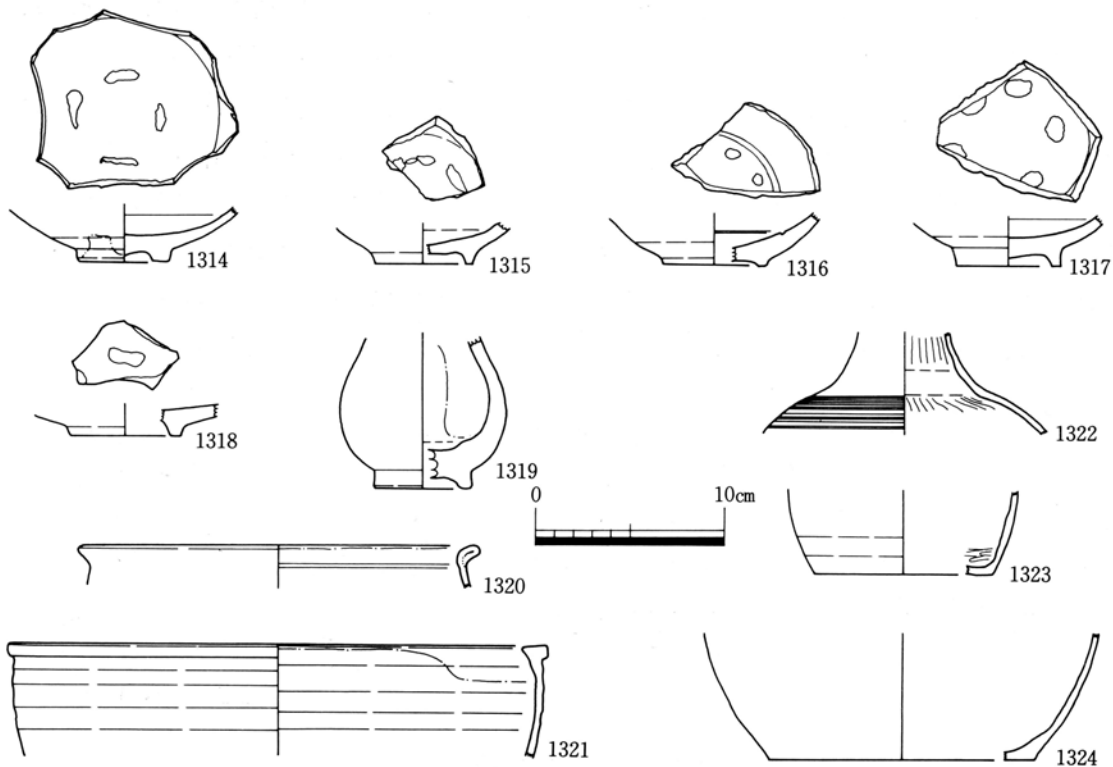
朝鮮窯産陶磁器は、遺構から出土した破片数で30点弱を数える。陶器は暗褐色から黒褐色の胎土で透明な釉が塗布されており、磁器は白色の均質な胎土を持つものである。陶器の器種は碗、筒形製品、瓶（徳利）等の製品が認められ、磁器の器種は白磁鉢、白磁瓶がある。器種別の出土量は、碗類と瓶類が多く、その他の器種は少ない傾向がある。

碗は見込み部と高台裏に砂目積みの痕跡が残存するものである。1315～1318は碗の底部で透明釉が施されている。1314は白磁の堅手鉢の底部で砂目積みの痕跡が4ヶ所残存する。1319は白磁小瓶で器壁が比較的厚く高台を持つ。1322～1324は透明釉を施した陶器瓶（いわゆる雑釉徳利）で非常に薄作りである。内面にタタキの痕跡が残存している。1320と1321も前述の陶器瓶と同様の焼き上がりの鉢である。1320は口縁部を外側に折り返しくの字状に屈曲させた非常に薄作りの製品である。1321は胎土が明褐色を呈したもので、口縁上端部に面が存在する。

遺跡出土の朝鮮窯産陶磁器は堀内明博と稲垣正宏によって精力的に研究されている。⁽¹⁾これによれば15世紀～17世紀の期間を4期に区分している。清洲城下町遺跡から出土した朝鮮窯産陶磁器は、このうちⅠ期（15世紀初頭～16世紀初頭）、Ⅱ期（16世紀前半～後半）、Ⅲ期（16世紀末～17世紀初頭）に属する。Ⅰ期に該当する遺物としては粉青沙器碗⁽²⁾がある。Ⅱ期に該当する遺物としては陶器の碗、筒形製品、瓶等の製品が認められ、Ⅲ期では白磁の堅手鉢等が存在する。出土量の割合は少ないが、特に全国的な出土傾向とは異ならないと思われる。（鈴木正貴）

註 (1) 堀内明博・稲垣正宏（1990）「出土朝鮮王朝陶磁の検討」『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』。

(2) 鈴木正貴編（1994）「清洲城下町遺跡Ⅲ 第三章 遺物」『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集に事例がある。



第152図 遺物実測図 朝鮮窯産陶磁器

I 中国窯産青磁（第153・154図 1325～1354）

中国窯産の陶磁器には青磁・白磁・青白磁・青花・五彩等が認められる。ここでは青磁・白磁・青花については各々項目を設けて記述を進めたい。なお、底部外面に青花を施した青磁・白磁の製品は各々青磁・白磁の範疇に含める。また、五彩（色絵）は上絵付を施した製品で、内面が青花となるものが認められるが、五彩の分類に含めておく。

中国窯産青磁は遺構から出土した破片数で300点を数え、遺構外の資料を含めた青磁の総破片数は500点を越えると思われる。青磁は大半は龍泉窯産（系）の製品で、胎土は白色から灰色で、緑色の青磁釉が塗布されている。この他に胎土が黄褐色の陶質の胎土で、釉が灰色を帯びてくすんだ発色を呈している粗製のものがあり、これらは比較的南方の生産地が想定されるものである。器種は碗、皿、大皿（盤）、香炉等があり、量的には碗と皿の占める割合が高い。

1325～1334は62G区から出土した中国窯産青磁であり、全て龍泉窯産（系）のものと思われる。1325は片切彫の蓮弁紋碗で、1326はこれと同一個体の底部の可能性もある。1327・1328は見込み部に片切彫の花紋を施した碗、1330は内禿の碗で、共に高台内は露胎となっている。1332・1333は見込み部が輪禿となった厚手の皿であり、図示した以外にも6点存在する。また、1331は見込み部が段状に高くなった薄手の皿である。1334は大皿（盤）で口縁部が折縁となり端部をつまみ上げている。

1335～1354は各調査区から出土した青磁の一部である。

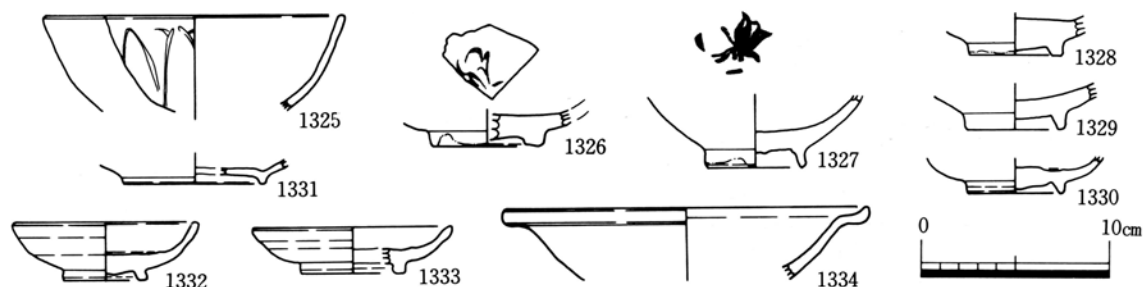
碗 1337は蓮弁紋碗の底部で見込み部に紋様が施される。1338は無紋の碗で高台内は蛇ノ目釉剥ぎがされている。碗は上田分類⁽¹⁾の碗B 2類、B 3類、B 4類、E類が比較的多く認められる。

皿 皿は稜花皿・端反皿・丸皿・蓮弁紋皿・菊皿などが存在する。

1339・1340は龍泉窯産（系）の稜花皿で、1339は体部内面に魚紋、1340は内面に「福」字紋が各々施されている。これらは15世紀後半に位置づけられる遺物である。但し、青磁稜花皿は城下町期Ⅲ期の遺構からも一定量出土している（SK7029の966・967、SD6001の1145等）点は興味深い。

1341～1343は端反皿で、灰白色の均質な胎土を持つ厚手のもの（1341）、薄手のもの（1342）、淡褐色の陶質の胎土をもつもの（1343）がある。1341は高台の断面形が逆台形に近い形態となり、内外面共に全面に施釉されている。1342は白磁の端反皿と同様の形態で高台裏が鋭く削り取られている。底部外面は白磁釉が塗布されている。1343は高台裏が露胎となっている。共存遺物の確実な資料が存在しないため不確定的であるが、粗製の青磁皿は城下町期Ⅲ期に出現するものとみられる。

1344は口縁部が内彎する丸皿で灰色の緻密な胎土を持つ。灰白色の発色をする釉が塗布され、釉に



第153図 遺物実測図 中国窯産青磁(1)

は貫入が認められる。16世紀後半に見られる器形である。1345は龍泉窯産（系）の片切彫り蓮弁紋皿で、高台裏は露胎となっている。90B区のNR4001の堆積層から出土したもので、遺物自身の年代は14世紀末から15世紀初めと考えられる。

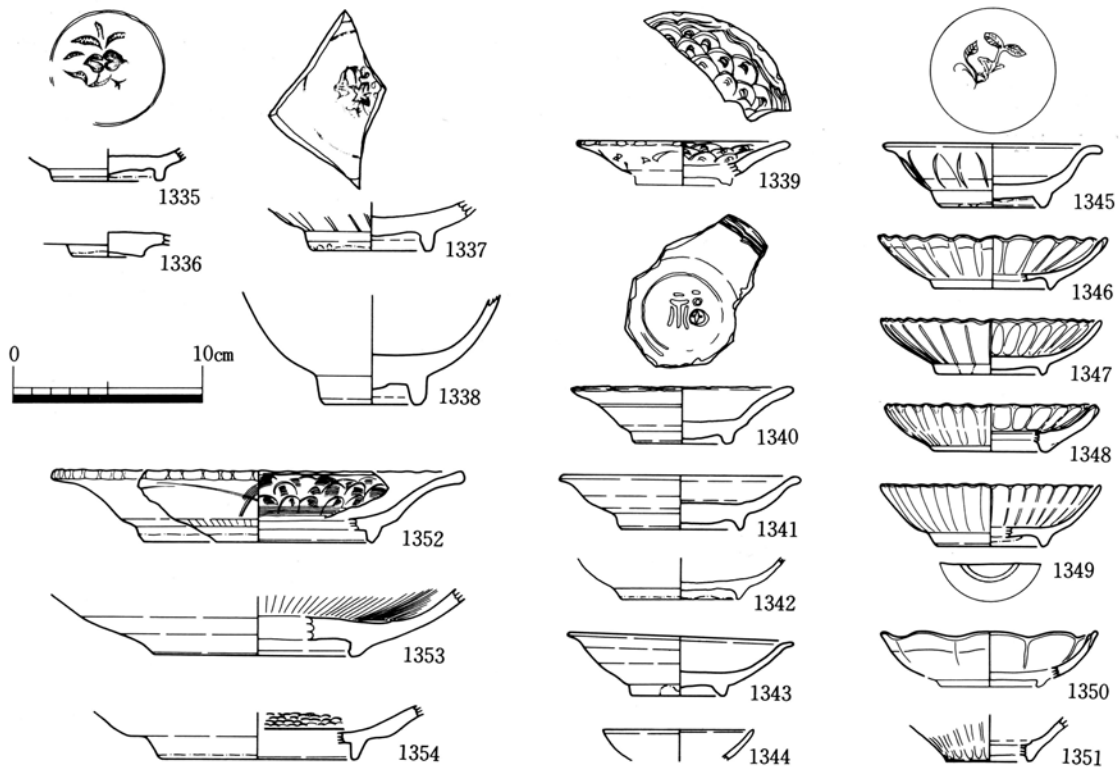
1346～1351は菊皿であり、高台断面形が逆台形になるものと高台裏がえぐり取られるものがある。1347・1348は前者の皿で高台裏は露胎となっている。1348は基筒底風の高台成形を呈し、16世紀中葉の遺物と考えられる。1347は外面の菊花を線彫りで描いており、破断面には漆継ぎの痕跡が認められる。1346・1349は後者の皿で16世紀前葉から中葉の遺物と見られる。1346の高台内は白磁釉が、1349の高台内は青花が各々施されている。1350は花卉が大まかなものである。灰白色の発色をした釉が施され貫入が認められる。1351は丸ノミ彫り状の花弁が外面に高台下から施された皿で、胎土がやや陶質である。1346に類似した皿がSD6048から出土していることから城下町期Ⅱ－1期には菊皿は存在していたことが分かる。

大皿（盤） 大皿は体部内面に鱗紋を施したものと菊花紋を施したものがある。前者が15世紀代、後者が15世紀後半から16世紀にかけての遺物である。1353・1354は城下町期Ⅲ期以降の遺構から出土しており、一定期間伝世されたものと考えられる。1352は底部が蛇ノ目釉剥ぎされている。

香炉 香炉はNR4001から算木手の筒形の香炉が認められ、15世紀後半に位置づけられる。

全体として、城下町期の古い段階の遺物が多量に出土する調査区に多く、特に田中町地区と五条橋地区では多様な器種が認められる。本町地区では菊皿が比較的多いのも特徴的である。（鈴木正貴）

註 (1) 上田秀夫 (1982) 「14から16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No. 2』等による。



第154図 遺物実測図 中国窯産青磁(2)

J 中国窯産白磁 (第155図 1355~1369)

中国窯産白磁⁽¹⁾は遺構から出土した破片数で550点を越え、今回出土した全白磁の破片数は更に増加すると思われる。胎土は基本的に白色から灰色で、白色に発色する釉が塗布されている。器種は小碗(小杯)、皿等があるが、圧倒的に皿の占める割合が高い。

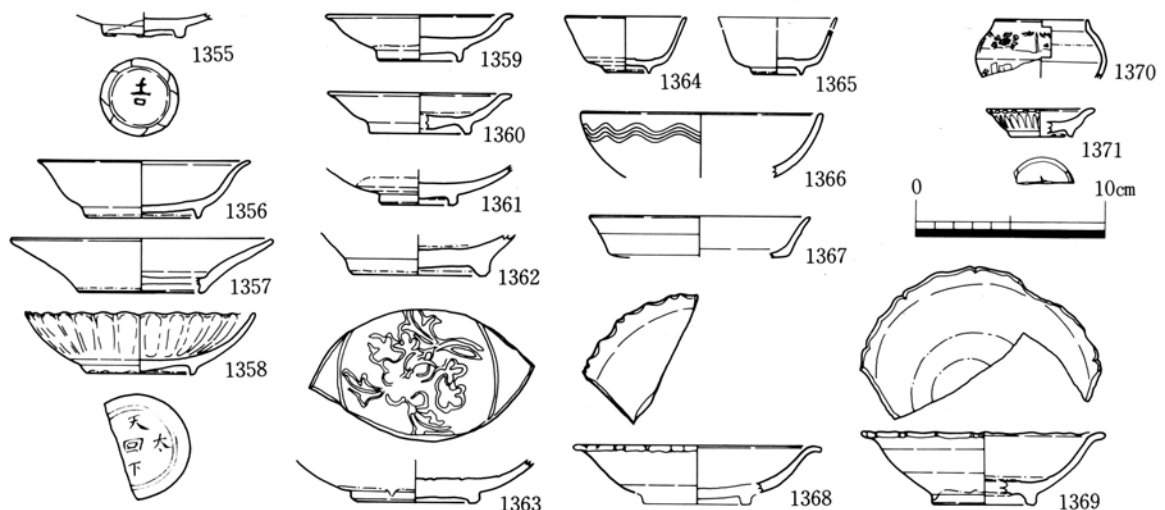
皿は割高台皿・端反皿・稜皿・菊皿・稜花皿等の多様な器種が認められる。

1355・1361は高台の断面形が方形となる割高台の皿で、1355は底部外面に「吉」と朱書されている。この種の皿はNR4001等の城下町期Ⅰ期の遺構から出土する機会が多く、本遺跡では15世紀末から16世紀前葉に位置づけられよう。1356は口縁部が外反する端反皿で、城下町期Ⅰ期～Ⅲ期まで見られる比較的多く存在するタイプである。1357は高台から一気に外反させる稜皿である。1358は菊皿で底部外面に青花で「天下太(平)」と記されている。1359・1360は高台の断面形が方形となる内面輪禿の皿で口縁部を外に屈曲させている。1362は内面輪禿の皿と思われるが、器壁が厚い。高台端部は焼成後に摩滅されていた。16世紀後半の中国南方の製品か?。1363はクリーム色の滑らかな胎土に乳白色の釉を塗布した白磁皿で内面に陰刻紋が施される。14世紀末から15世紀初頭の遺物であるが、伝世されたものであろう。1366は外面に波状紋を施したもので16世紀中葉～後葉に属する。1368・1369は内面輪禿の稜花皿で、高台の断面形が方形となっている。16世紀初頭の製品である。

小杯(1364・1365)は内面が輪禿となるもので、体部は直線的に伸び口縁部を僅かに外反させている。胎土は白色の精良なものである。16世紀前葉～中葉に位置づけられる遺物である。

全調査区を通じて白磁の中では端反皿が目立ち、そのほかの器種は五条橋地区と本町地区に比較的多くみられるようである。器種構成の変遷については、出土地点の年代が把握できる資料が少ないので確定的ではないが、城下町期Ⅰ期には割高台皿・端反皿が主体となり、Ⅱ期に割高台皿が減少し、Ⅲ期には全体的に出土量が減少している。(鈴木正貴)

註 (1) 白磁の分類は次の文献を参考にした。森田勉(1982)「14から16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No. 2』



第155図 遺物実測図 中国窯産白磁

K 中国窯産青花（第156～162図 1372～1434）

今回の調査で出土した青花の破片数は2141点である。これらのうち遺構内から出土し、時期が推定できるものは789点にすぎないが、本遺跡の性格上、調査区ごとに比較検討し得るものとして出土した全ての青花について分類を試みた。

青花の分類方法

器種は、碗、皿、小坏、鉢、瓶、香炉、合子があり、碗と皿については大きさによって碗、小碗、皿、大皿に器種分類する。数点しか出土していない鉢、瓶、香炉、合子を除く他の器種については器形と文様構成の組み合わせによって分類する従来の方法⁽¹⁾を用いて細分を行う。

文様構成の表現方法は、まず、口縁部と胴部の文様に記号を、見込みと高台内の文様には各文様に番号を設定し、外面文様は記号の大文字、内面文様は記号の小文字、見込みと高台内の文様には各々の番号を組み合わせ、高台内の字款に枠が有るものについては、方形枠は□、円形は○、二重円形には◎をつけて表す。また、文様が確認できないものや、はっきり認識できないものについては、確認できない施文部位を*印で表すこととする。なお、各文様の表現については、既に報告・研究されているものを参考⁽²⁾にする。

また、胎土が陶質で灰白色や黄白色である、いわゆる粗製の一群として捉えられているもの⁽³⁾も存在するが、これらについては「粗○類」として表すこととする。

碗の分類

碗の基本的な分類基準は、口縁部と底部の形態の複合である。しかし、出土した遺物には口縁部から底部にかけて残存する良好な資料が少なくほとんどが破片である。従って、分類作業を行う際、特徴的な口縁部や底部の形態のみでの分類が中心となり、従来の研究で文様構成と器形の関係がすでに固定されているもの⁽⁴⁾に関しては、文様構成から器形を特定したものをあることを付記しておく。

以下、各器形ごとの分類について述べる。本文中の（ ）内は、設定した記号・番号を表す。

碗Ⅰ類：見込みが高台内でくぼみ、緩やかに広がりながら口縁部へのびる胴をもつ、いわゆる「蓮子碗」である。

文様構成は、外面口縁部に波濤文、胴部に芭蕉葉文（A）を、見込みには蓮花文（11）または法螺貝（30）を描くもの、外面胴部に梵字らしき文字（C）を描くもの、胴部の三方に草花文を描き、その周囲は唐草文の略化と思われるような丸を三つつないだ紋様でうめる（三丸草花文、D）を、見込みにも同文様（21）を描くもの、胴部に唐草文、腰部には蓮弁帯（E 1）をもち、見込みには花文（10）を描くものがあり、文様構成の種類は少ないようである。

碗Ⅱ類：口縁部から底部にかけての形態を知り得る破片はないが、底部の形が平坦で広い見込みをもち、高台は高く、畳付の釉を平らに削り取るという特徴をもつものがあり、それをこの類とする。

文様構成は、見込みの中心に花をおき、その周囲に蓮弁帯をめぐらす蓮弁帯文（32）がある。この類は、小野氏の碗D群にあたるもので、このことから口縁部が直立し、外面口縁部に波濤文、胴部にアラバスク文様（F）をもつ破片もⅡ類とした。1378は腰部から直線的に広く立ち上がる胴部をもち外面口縁部に波濤文を描く。

碗Ⅲ類：高台内が見込み部分に盛り上がるいわゆる「饅頭心」の碗である。腰部から丸く立ち上

がり、直立する口縁をもつ。

文様構成は、高台内に字款を染付するという特徴をもつ。外面胴部の文様については、例えば、同じ「山水人物」を表すにしても、絵柄は各々異なっており、見込みや高台内の文様との組み合わせにもいろいろなパターンがあることから、文様構成はかなり多様化されているといえる。

碗Ⅲ類は、底部形態が分類の大きな要因となるが、底部が残存しない破片については、碗Ⅱ類同様小野氏の碗E群の文様構成を参考にして、外面胴部に如意雲・飛馬（G4）を描くもの、外面胴部に暗花文（H）、内面口縁部に菱格子帯文（I）を描くものについてもⅢ類とした。

碗Ⅳ類：見込み、高台内ともに平坦で、口縁部は直口のもの。

文様構成は、外面口縁部に唐草文を胴部三方に草花文（K）を描くもの、外面口縁部、胴部は無文で、口縁部内面に蓮花水禽文（L）を、見込みにも同文様（24）を描くもの等がある。

碗Ⅴ類：口縁部が僅かに外反し、端部をつまみあげるもの。底部の形は平坦である。

文様構成としては、外面胴部に蛟龍（N）を描き、見込みには瑞果文（12）を描く。

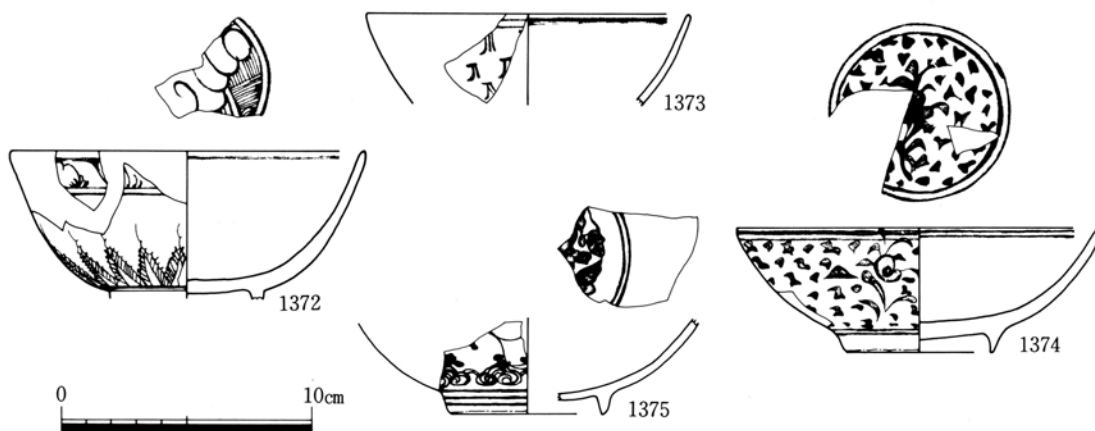
碗Ⅵ類：口縁部が外反する端反りの碗。底部まで残存するものがないので、口縁部形態のみで分類する。①緩やかに大きく外反するもの、②口縁端部が短く外反するもの、③強く屈曲するものなどがある。

碗Ⅶ類：いわゆる芙蓉手の碗。口縁部の小片が数点みとめられる。

碗Ⅷ類：高台内の中心部分が厚く、断面は台形状になる。施釉方法としては、①全面施釉の後高台畳付けの釉を掻き取るもの、②高台から高台内にかけて露胎のもの、③釉を取らずに焼成され砂が付着しているものなどがある。この類は、粗製の一群として捉えられるものである。

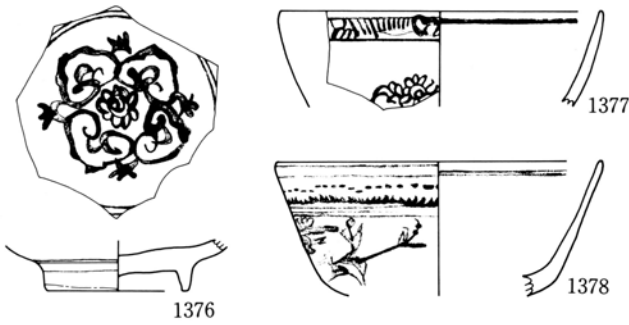
1391は釉調に光沢はなく乳白色で焼成不良のものと思われるが、文様の波濤文、芭蕉葉文ともに簡略化されており、後述する皿Ⅰ類に同じ文様構成をもつ粗製の皿がある。

碗Ⅰ類

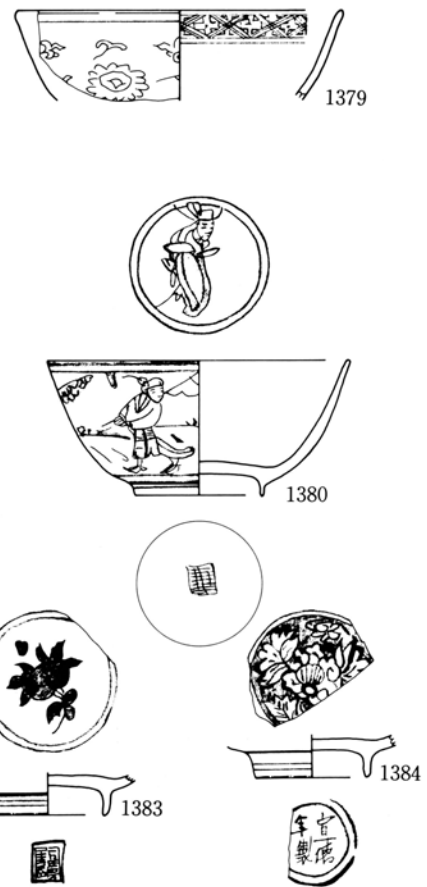


第156図 遺物実測図 中国窯産青花(1) (碗Ⅰ類・碗粗Ⅰ類)

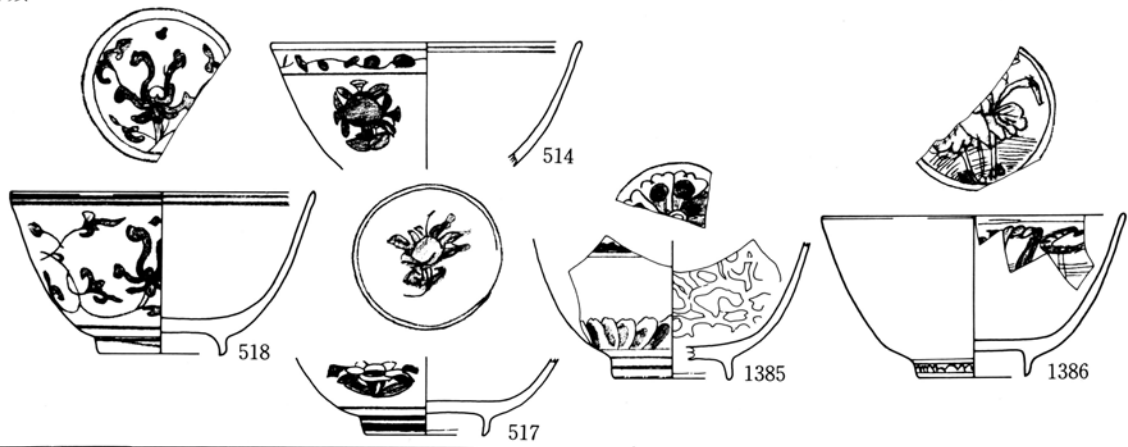
碗Ⅱ類



碗Ⅲ類



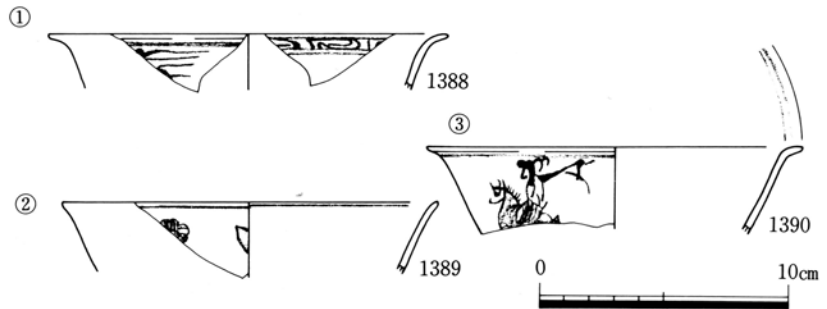
碗Ⅳ類



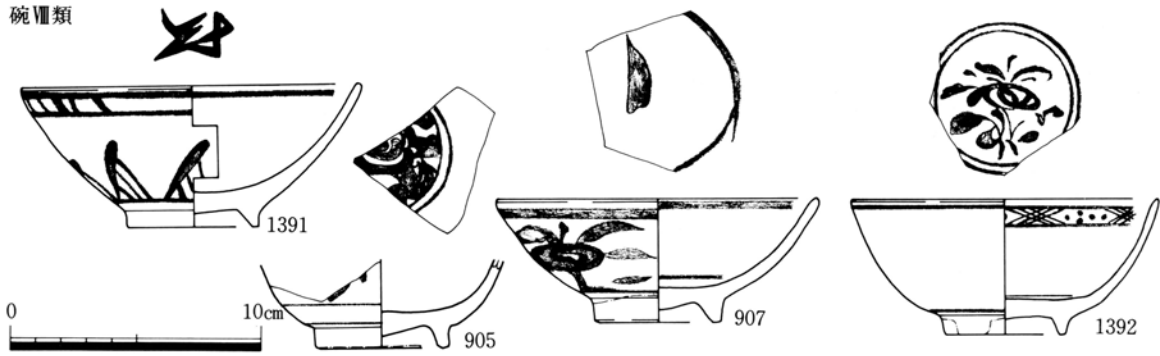
碗Ⅴ類



碗Ⅵ類



第157図 遺物実測図 中国窯産青花(2) (碗Ⅱ類~碗Ⅵ類)



第158図 遺物実測図 中国窯産青花(3) (碗粗Ⅷ類)

第20表 遺物観察表 (中国窯産青花碗)

図版番号	器形	外 面			内 面			見 込 み	高 台 内	遺 構 番 号			
		口縁部	胴 部	腰 部	口 縁 部	胴 部	腰 部						
1372	I	A	波濤文	芭蕉葉文	界線	b	界線	なし	界線	30法螺貝	01なし	92D検出 I	
1373		C	界線	梵字文		b	界線	なし				SD4026Ⅲ	
1374		D	界線	三丸草花文	界線	b	界線	なし	界線	21三丸草花文	01なし	89B検出	
1375		E1		唐草文	蓮弁帯			なし	界線	10花文	01なし	62C検出Ⅲ	
1376	II				界線			界線		22蓮弁帯文	01なし	62C検出Ⅲ	
1377		F	波濤文	アラベスク		b	界線	なし				SK6151	
1378			波濤文	?		b	界線	なし				89B検出Ⅱ	
1379	III	H	界線	暗花文	界線	i	菱格子文	なし				SD4026 I	
1380		G1	界線	山水人物	界線	b	界線	なし	界線	43人物	?□	89E検出Ⅱ	
1381		G2	界線	風景動物	界線	b	界線	なし	界線	23如意雲	58萬福攸同	89B検出Ⅱ	
1382		G3	界線	風景花文	界線	b	界線	なし	界線	12瑞果文	58萬福攸同○	61C検出Ⅳ	
1383					界線				界線	12瑞果文	57富貴佳器□	91A攪乱	
1384				界線				界線	13牡丹文	59宣徳年製○	SD4026Ⅲ		
518	IV	J1	界線	花唐草文	界線	b	界線	なし	界線	06花唐草文	01なし	SK6151	
514		K	唐草文	草花文	界線	b	界線	なし				SK6151	
517		K		草花文	界線				界線	12瑞果文	01なし	SK6151	
1385		E2	雲状文	なし	蓮弁帯	h		陰刻	界線	11蓮花文	01なし	63B表土	
1386		M1	なし	なし	なし	l	蓮花水禽文	なし	界線	24蓮花水禽文	01なし	SK6253	
1387	V	N	界線	蚊龍	なし	b	界線	なし	界線	12瑞果文	01なし	89B検出Ⅱ	
1388	VI①		界線	?		o	雷文帯	なし				SK5005	
1389		②	P1	界線	花文		b	界線	なし				SE4029
1390			③	界線	?		b	界線	なし				SK4006
1391	Ⅶ	A	波濤文	芭蕉葉文	界線	b	界線	なし	界線	11蓮花文	00無軸	SD6023	
905			?		界線			なし	界線	10花文	01なし	SK7029	
907		P2	界線	瑞果文	界線	b	界線	なし	界線	?	00無軸	SK7029	
1392			B	界線	なし	界線	i	菱格子帯	なし	界線	12瑞果文	00無軸	91BSX01

皿の分類

皿の破片は全破片数のうち61.6%を占め、最も多い器種となっている。皿の分類においては、口縁形態と高台の有無を基準とした。

皿Ⅰ類：いわゆる「碁笥底」で、直口またはやや内彎する口縁部をもつ皿。

文様構成は、外面口縁部に波濤文、胴部に芭蕉葉文(A)、内面胴部は無文または蓮花文(P)を、見込みには、蓮花文(11)や花鳥文(14)を描くもの、外面胴部に文字らしき字文(C1)を、見込みには「宝福寿」等の吉祥文(25)を描くもの、外面は無文(M1)で見込みの中心部には鉄釉を施しまわりに文様(魚形花鳥文、26)を描くものなどがある。1396は胴部に蓮弁状の文様(P)をもち、見込みには蛟龍(31)を描く。1397は高台内の削り幅が広い「碁笥底」である。1398は他の「碁笥底」と形態的にやや異なり、内反り風に僅かに削りがみられ、見込みには十字花文(27)が描かれ、特殊

なものであると考えられる。1399は粗製の皿で各文様がかなり略されている。962は口縁部に波濤文、胴部は無文（A1）の文様構成である。

皿Ⅱ類：高台を有し、口縁部が外反する端反りの皿。高台は面取り状に斜めに削られている。

文様構成は、外面胴部に牡丹唐草文（J2）を、見込みには、十字花文（27）や玉取獅子（28）が描かれるものが多く、内面腰部に蓮花文（P）を描くものもある。外面に渦状の唐草文（J3）を、内面胴部から見込みにかけて如意頭文の中に梵字文（29）を描く文様の皿も若干ある。また、外面胴部は無文（M1）で、内面口縁部に菱格子帯文（I）をもつもの、外面無文で、見込みに花文？を描くものがある。

皿Ⅲ類：高台を有し、口縁部が内彎する皿。高台内には削りの痕跡である斜めの細線が見られ、畳付部分は数回釉が掻き取られることによって、断面が丸くなるものや、高台内に強く内傾するものがある。

文様構成は高台内に字款が染付されるものが多く、文様の種類は豊富である。

皿Ⅳ類：口縁が鐔状になるいわゆる「鐔皿」である。

文様構成の種類は少なく、1411に見られるような文様をもつものが多い。

皿Ⅴ類：体部から口縁部に向かって緩やかにのびるいわゆる「稜皿」の類である。

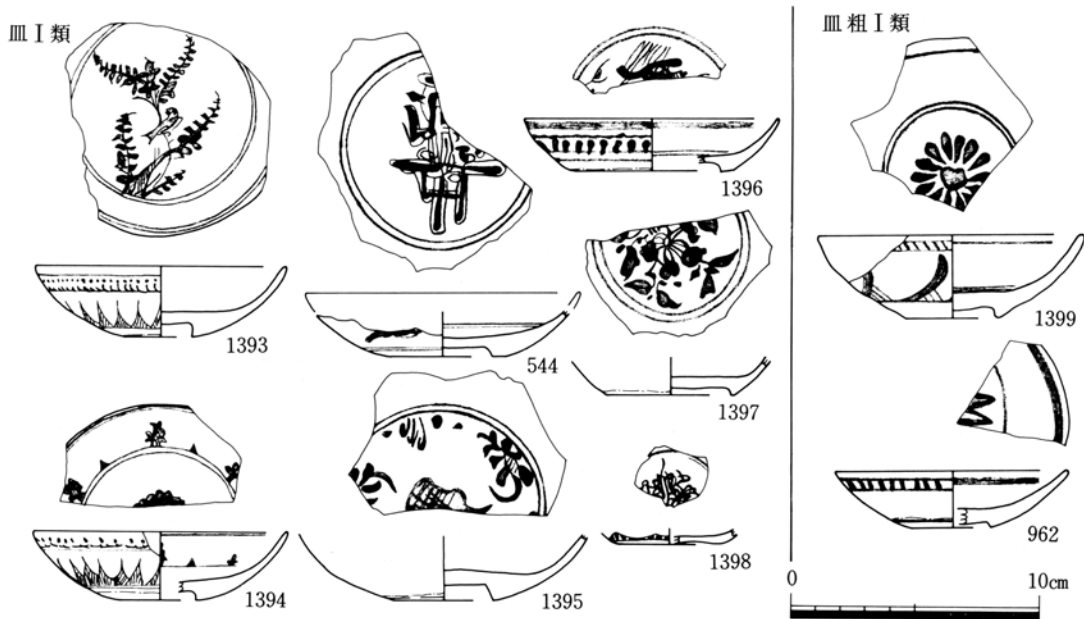
皿Ⅵ類：口縁部を僅かにつまみ花状にする「稜花皿」の類である。

皿Ⅶ類：口縁部が緩やかに外反し、さらに端部をつまみ上げる皿。

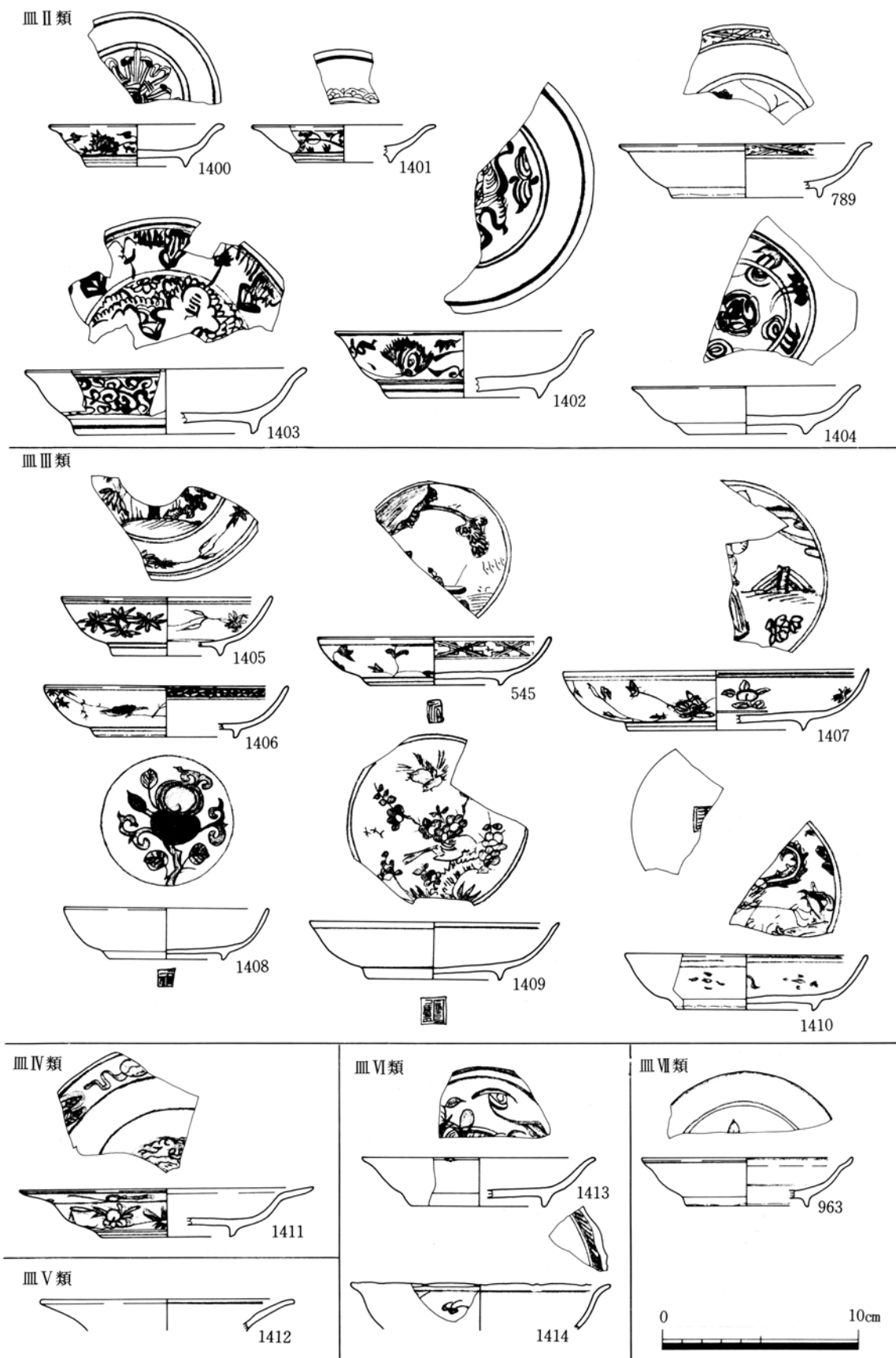
皿Ⅷ類：内面胴部に菊花状の彫り込みをもつ「菊皿」の類。1415は外面に青磁釉が施されている。1416は胎土が灰白色で釉は厚めに施されている粗製の皿である。

皿Ⅸ類：高台を有し、口縁部が内彎するという形態はⅢ類と同じであるが、高台中心部付近の器壁が厚く、高台の断面形が長方形や台形になる粗製の一群として捉えられるものである。

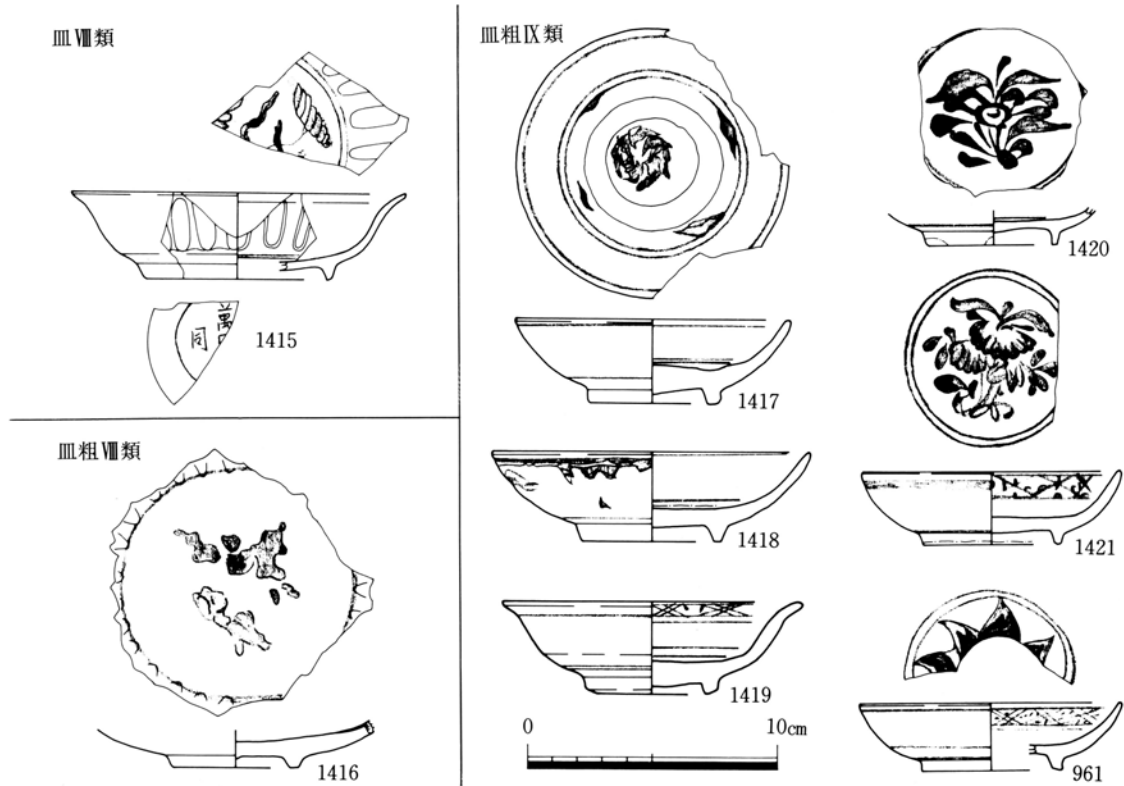
文様構成は、見込みに略化された瑞果文（12）を描くものが多く、見込み部分に環状に釉を施さない（輪無釉、02）皿もある。



第159図 遺物実測図 中国窯産青花(4) (皿Ⅰ類)



第160図 遺物実測図 中国窯産青花(5) (皿 II類～皿 VII類)



第161図 遺物実測図 中国窯産青花(6) (皿Ⅶ類・皿Ⅷ類)

第21表 遺物観察表 (中国窯産青花Ⅲ)

図版番号	器形	外			内			見込み	高台内	遺構番号		
		口縁部	胴部	腰部	口縁部	胴部	腰部					
1393	I	A	波濤文	芭蕉葉文	界線	b	界線	なし	界線	14花鳥文	01なし	SK7165
1394		A	波濤文	芭蕉葉文	界線	p	界線	蓮花文	界線	11蓮花文	01なし	89Aトレンチ6
544		C1		字文	界線			なし	界線	25吉祥文	01なし	SK6151
1395		M1		なし	なし			なし	界線	26魚形花鳥文	01なし	91A検出Ⅱ
1396		P	界線	蓮花文	界線	b	界線	なし	界線	31蛟龍	01なし	63CSD20
1397				なし	なし			なし	界線	12瑞果文	01なし	89B検出Ⅱ
1398									界線	27十字花文	00無軸	90Fb検出Ⅰ
1399	粗Ⅰ	A	波濤文	芭蕉葉文	界線	b	界線	なし*	界線	11蓮花文	00無軸	61A検出Ⅱ
962		A1	波濤文	なし	界線	b	界線	なし	界線	11蓮花文	00無軸	SK7029
1400	Ⅱ	J2	界線	牡丹唐草文	界線	b	界線	なし	界線	27十字花文	01なし	89C検出Ⅱ
1401		J2	界線	牡丹唐草文	界線	e	界線	なし	蓮弁帯		SE4078	
1402		J2	界線	牡丹唐草文	界線	b	界線	なし	界線	28玉取獅子	01なし	SK6422
1403		J3	界線	渦唐草文	界線	r	界線	如意頭文と梵字	界線	29如意頭文と梵字	01なし	61A検出Ⅳ
789		B	界線	なし	界線	i	菱格子帯	なし	界線	?		SD7023
1404		M1	なし	なし	なし	m	なし	なし	界線	花文?		91B検出Ⅰ
1405	Ⅲ	S	界線	花枝文	界線	s	界線	花枝文	界線	15花樹		(91ASK164)
1406		S1	界線	花鳥折枝	界線	t	蝶文	なし	界線			(89BSD16)
545		J	界線	唐草文	界線	i	菱格子帯	なし	界線	44太公望	52福□	SK6151
1407		J1	界線	花唐草文	界線	p2	界線	瑞果文	界線	42山水人物	*□	62C検出Ⅰ
1408		M1	なし	なし	なし	m	なし	なし	界線	12瑞果文	52福□	SD6055
1409		B	界線	なし	界線	b	界線	なし	界線	14花鳥文	57富貴佳器□	89B検出Ⅱ
1410		V	界線	如意雲	界線	v	界線	如意雲	界線	38鳳凰	01なし	90C攪乱
1411	Ⅳ	P2	界線	瑞果文	界線	p2	界線	瑞果文	界線			(61CSX01)
1412	V		なし	なし		b	界線	なし				92D検出Ⅰ
1413	Ⅵ	M1	なし	なし	なし	m	なし	なし	界線	?		92D検出Ⅰ
1414			界線	?		b	界線	なし				SE4078
963	Ⅶ	B	界線	なし	なし	b	界線	なし	界線	?		SK7029
1415	Ⅷ			青磁		m1	なし	なし	界線	?	58萬**同○	89E検出Ⅱ
1416	粗Ⅶ				なし			なし	界線	?		92C検出Ⅰ
1417	粗Ⅷ	B	界線	なし	界線	b	界線	なし	界線	02輪無軸	00無軸	91A検出Ⅱ
1418		B	界線	なし	界線	b	界線	なし	界線	02輪無軸	00無軸	SK6151
1419		B	界線	なし	界線	i	菱格子帯	なし	界線	01なし	01なし	89C検出Ⅰ
1420					界線				界線	12瑞果文	00無軸	61Dトレンチ3
1421		B	界線	なし	界線	i	菱格子帯	なし	界線	12瑞果文	01なし	91A表土
961		B	界線	なし	界線	i	菱格子帯	なし	界線	11蓮花文	00無軸	SK7029

小碗の分類

口径が10cm未満、器高が5cm未満の碗を小碗とする。

小碗Ⅰ類：底部は平坦で、口縁部は直口する碗。

小碗Ⅱ類：見込み内に底部が盛り上がる「饅頭心」の碗。

小碗Ⅲ類：口縁部が外反する碗。

小碗Ⅳ類：底部は平坦で、腰部が直線的に立ち上がり、口縁直口の碗。

大皿の分類

大皿Ⅰ類：口縁が鐙状になる「鐙皿」の類。この類とした大皿はすべて粗製の皿で、995のように内面口縁部に鱗状の文様の中を区画しその中に瑞果文(W)を描くもの、口縁部に花枝文を描くものなどが代表的な絵柄である。

大皿Ⅱ類：口縁は直口で体部が内彎する大皿。

大皿Ⅲ類：口縁部が緩やかに外反する大皿。

1426は精製の皿の破片で、大きさ、器形ともに不明であるが、見込みに牡丹を高台内には二重円形枠の中に「*明年造」の字款が染付されている。16世紀ごろのかなりの上物と思われる。

小坏の分類

小坏Ⅰ類：底部が「碁笥底」で、口縁直口のもの。

小坏Ⅱ類：高台を有し、口縁部が外反するもの。

小坏Ⅲ類：高台を有し、口縁直口のもの。

瓶

1432は元染付である。15世紀前半に明の骨董品として招来したものと思われる。

香炉

数点出土しているが、器形の特徴を述べられるほどのものはない。1433は口縁端部に鉄釉が施されている。

合子

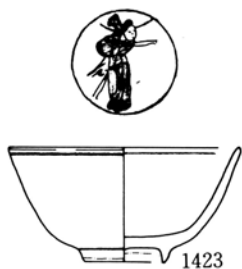
3点出土しているがいずれも同じ文様をもち、区画の中に八宝文を描くいわゆる「宝づくし」で、新しい時期のものと思われる。

特殊なものとして、89D区SD7023からバタビアンウェアとよばれる外面に鉄釉を施した皿が1点出土している。また小片で図化できなかったが、元染付と思われる大皿?の破片が認められる。

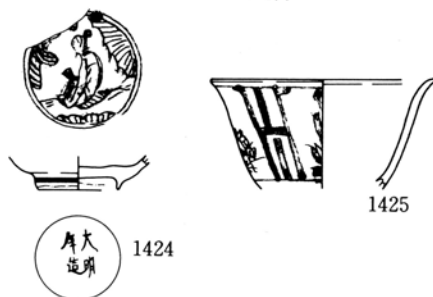
小碗Ⅰ類



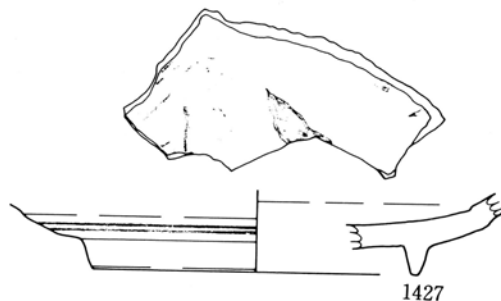
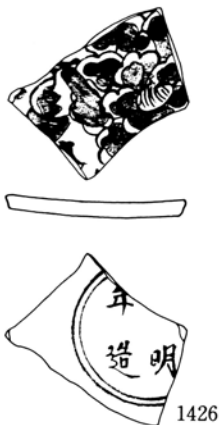
小碗Ⅱ類



小碗Ⅲ類



大皿Ⅰ類



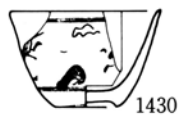
大皿Ⅲ類



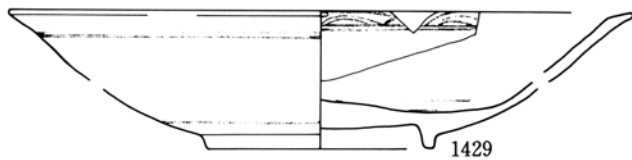
大皿Ⅱ類



小坏Ⅰ類



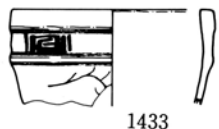
小坏Ⅱ類



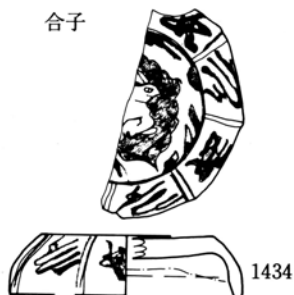
瓶



香炉



合子



第162図 遺物実測図 中国窯産青花(7) (小碗・大皿・小坏・瓶・香炉・合子)

小結

上記の分類による各調査区ごとの集計を第22表に示した。それをもとに、各調査区における器種組成を帯グラフで表し、そのうち碗・皿については各器形の占める割合を円グラフに表した(第163図)。

それによって次のようなことが言える。

①61A区・92C区・92D区は碗・皿ともにⅠ類・Ⅱ類の占める割合が多く、62C区においては皿のⅠ類・Ⅱ類の占める割合が多い。

②63C区・89E区・91A区・89B区・89C区・89F区・61C区・91B区は碗Ⅲ類・Ⅳ類が多く、皿については皿Ⅱ類・Ⅲ類の占める割合が多い。

③粗製の碗・皿・大皿は61C区 9.8%・89B区 9.2%・89E区 6.3%・91B区 5.7%・63C区 6.5%・91A区 4.1%の割合を占め、②の特徴をもつ調査区において比較的多く出土していると言える。

今回分類した青花は従来の分類⁽⁵⁾では、碗Ⅰ類が小野氏のC群、碗Ⅱ類がD群、碗Ⅲ類がE群、皿Ⅰ類がC群、皿Ⅱ類がB群、皿Ⅲ類がE群、皿Ⅳ類がF群にあたる。また、碗Ⅳ類が森氏のⅣ類、碗Ⅴ類がⅢb類、碗Ⅶ類がⅥ類、碗Ⅷ類がⅡ類にあたる。端反りの碗である碗Ⅵ類については明確に対応させられないが、森氏の碗Ⅲa類にあたるものが含まれている。粗製の碗・皿については、鈴木氏がG群とし、上田氏の分類ではB群とされているものである。

今回の報告では青花の分類を試みたが、破片を器形に分類できなかったものも多い。本遺跡の遺構の時期は、出土する瀬戸美濃窯産陶器から推定されており、層位的に時期を推定できる遺構は少ない。同じ器形であっても時期が異なるとされている端反りの碗や端反りの皿については時期を考察するまでに至らなかった。今後、時期の推定できる各遺構の青花の器種構成、または青磁、白磁などの他の中国窯産磁器を考慮し16世紀後半から17世紀初頭にかけての青花の変遷についてさらに検討していきたい。(岡田智子)

註(1) 小野正敏(1982)「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会、北野隆亮(1990)「15・16世紀の貿易陶磁器—1980年代の編年研究を中心として」『貿易陶磁研究No. 10』日本貿易陶磁研究会による。

(2) 註(1)と同じ。上田秀夫(1983)「根来寺第Ⅲ地区出土の元染付とその他の中国陶磁」『貿易陶磁研究No. 3』日本貿易陶磁研究会、佐久間貴士(1987)「大阪城惣構と下層遺構出土の陶磁器」『貿易陶磁研究No. 7』日本貿易陶磁研究会、村上勇(1987)「鳥根県富田城関連遺跡群出土の陶磁」『貿易陶磁研究No. 7』日本貿易陶磁研究会、鈴木秀典他(1988)『大坂城跡Ⅲ』(財)大阪市文化財協会、三杉隆敏・榎原昭二(1989)『陶磁器染付文様事典』を参考にした。

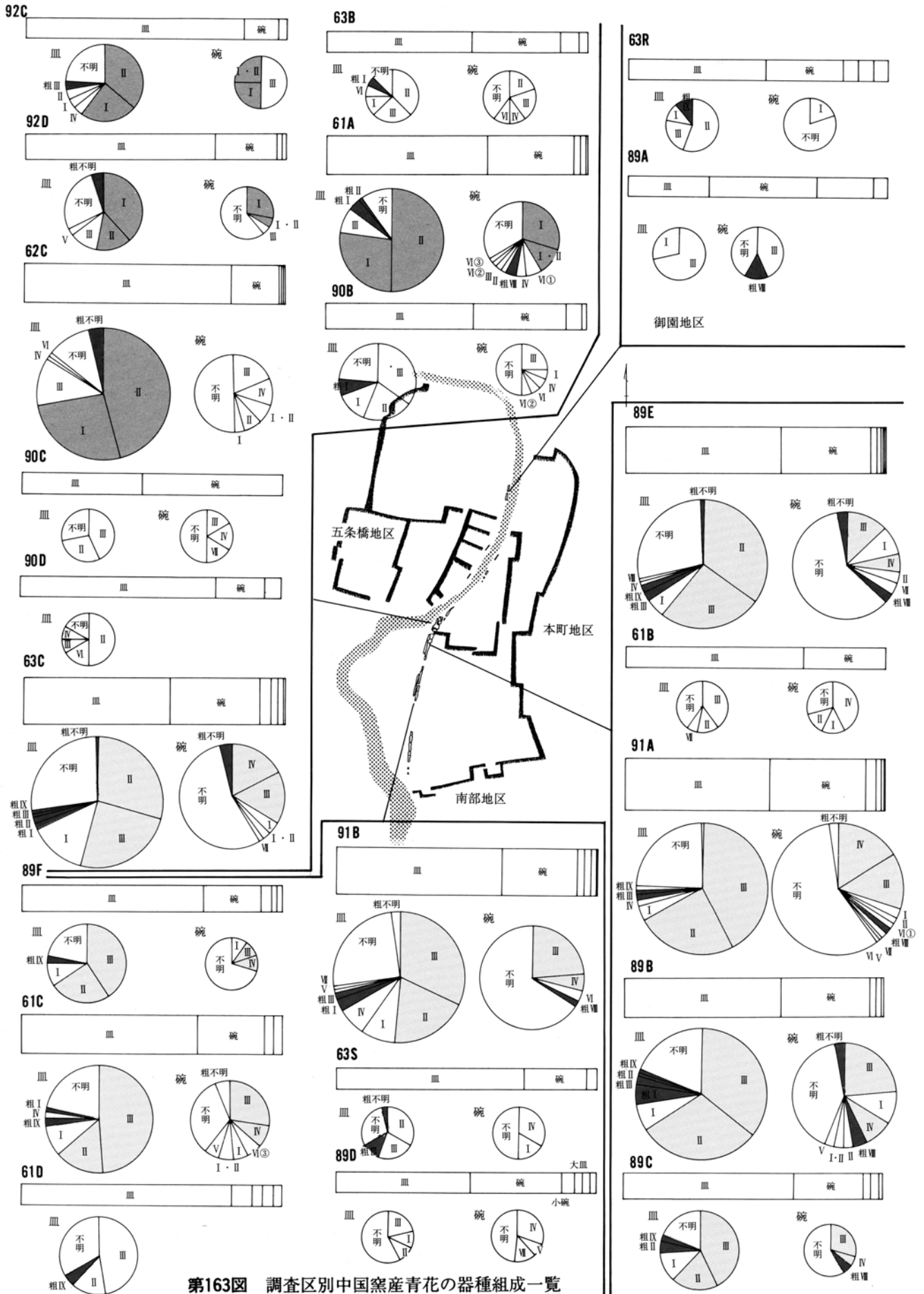
(3) 上田秀夫(1991)「16世紀から17世紀前半における中国染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会、森毅(1992)「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究第九』(財)大阪市文化財協会による。

(4) 註(1)と同じ。

(5) 註(1)、註(3)と同じ。

なお、『資料編』には調査区別文様構成組成表と遺構内出土の青花観察表があるので、参照されたい。

清洲城下町遺跡Ⅳ



第163図 調査区別中国窯産青花の器種組成一覽

第23表 外面文様・内面文様 記号表

	口縁部	胴部	腰部
A	波濤文	芭蕉葉文	界線
A1	波濤文	なし	界線
B	界線	なし	界線
B1	界線	なし	なし
B2	界線	蓮弁帯	界線
C	界線	梵字文	界線
C1	界線	字文	界線
D	界線	三丸草花文	界線
E	界線	なし	蓮弁帯
E1	界線	唐草文	蓮弁帯
E2	雲状文	なし	蓮弁帯
E3	界線	花文	蓮弁帯
F	波濤文	アラベスク文	
G	界線	風景	界線
G1	界線	風景(人物)	界線
G2	界線	風景(花文)	界線
G3	界線	風景(動物)	界線
G4	界線	風景(如意雲・飛鳥)	界線
H	界線	暗花文	界線
I	菱格子帯文	なし	界線
I1	菱格子帯文	なし	半円帯文
J	界線	唐草文	界線
J1	界線	花唐草文	界線
J2	界線	牡丹唐草文	界線
J3	界線	渦唐草文	界線
K	唐草文	草花文	界線
L	蓮花水禽文	なし	なし
M	なし	なし	界線
M1	なし	なし	なし
N	界線	蛟龍	界線
O	雷文帯	なし	界線
O1	雷文帯	唐草文	界線
P	界線	蓮花文	界線
P1	界線	花文	界線
P2	界線	瑞果文	界線
P3	界線	花蝶文	界線
P4	界線	POINT文	界線
P5	界線	蝶果文	界線
Q	三角帯文	鶴	界線
R	界線	如意頭文と梵字	
S	界線	花枝文	界線
S1	界線	花鳥折枝文	界線
T	蝶文	なし	界線
U	界線	リボン状文	界線
V	界線	如意雲	界線
W	鱗文	なし	界線
X	界線	なし	三角帯文

第24表 見込み・高台内文様 番号表

00	無釉	20	梵字文	40	風景
01	なし	21	三丸草花文	41	山水
01	輪無釉	22	蓮弁帯文	42	山水人物
03	暗花文	23	如意雲	43	人物
04		24	蓮花水禽文	44	太公望
05	唐草文	25	吉祥文	45	山水略
06	花唐草文	26	魚形花鳥文	46	
07	牡丹唐草文	27	十字花文	47	
08	大明化年*	28	玉取獅子	48	SK7029出土
09	楽(?)字	29	如意頭文と梵字	49	63R区出土
10	花文	30	法螺貝	50	天下太平
11	蓮花文	31	蛟龍	51	大明年造
12	瑞果文	32	蟹	52	福
13	牡丹文	33	獅子	53	寿
14	花鳥文	34	鹿	54	洪武年造
15	花樹文	35	兎	55	長命富貴
16	花樹鳥文	36	なまず	56	永保長春
17	菊花文	37	鳳凰	57	富貴佳器
18	花束文	38		58	萬福偃同
19		39		59	宣徳年製



第164図 中国窯産青花の文様

L その他の中国窯産製品（第155図 1370・1371・第165図 1435～1438）

青磁・白磁・青花を除く中国窯産の陶磁器として青白磁・五彩・瑠璃釉皿等が認められる。これらは青磁・白磁・青花に比べ出土点数が少なく、本遺跡では例外的な存在であったと思われる。

中国窯産青白磁は遺構から出土した破片数で10点を数える。器種は小壺と小皿が存在する。1370は外面に草花紋がレリーフされた青白磁小壺であり、1371は外面に花卉が施された小皿（紅皿）で、底部の露胎部に赤色の付着物が存在する。

中国窯産五彩は白磁（青花）に上絵付を施したもので、御園地区と南部地区で各々碗が出土した。1435は見込み部が盛り上がる「饅頭心」の碗で内面に青花で紋様が施されている。青花碗Ⅲ類に相当する器形である。1436は口縁部が外反し、体部外面と内面見込み部に上絵付を施した碗である。

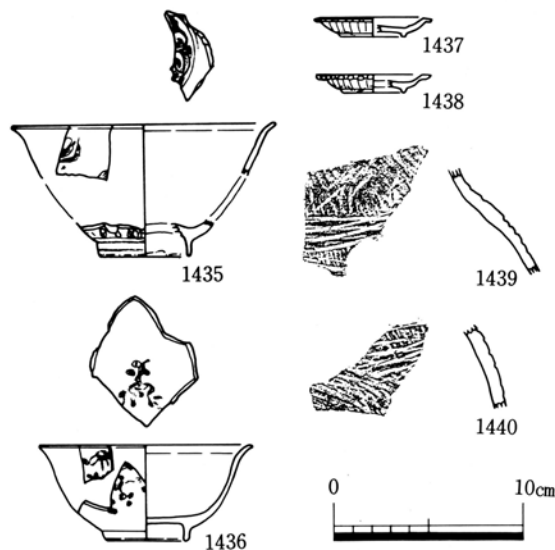
瑠璃釉皿（1437・1438）は、胎土が白色から黄白色を呈し、明青色の釉を施した小皿である。外面体部に蓮弁紋が施され、口縁部は屈曲して横に広がり上端が面を持っている。外面下半は露胎となっている。これらはいわゆる「交趾皿」と呼ばれる製品であり、産地は確定的ではないが、ここでは中国窯産と分類しておく。全部で7点確認されている。

青白磁・五彩・瑠璃釉皿の地区別出土状況は少量なので分析できないが、中心部よりも外縁部の方が目立つ傾向が窺える。また、時期的な問題であるが、各々、城下町期Ⅲ期の遺構から出土する事例が存在することと先の地区別出土傾向等から16世紀後半以降に見られるものと考えられる。

M タイ窯産陶器（第165図 1439・1440）

タイ窯産陶器には、ハンネラ壺と思われる体部の破片が89B区から2点出土した。砂粒を含有する黄灰色の胎土を持ち、外面にタタキの痕跡が残存しており、表面がやや黒色化している。全体の形状はこの破片では復元し得ない。

（鈴木正貴）

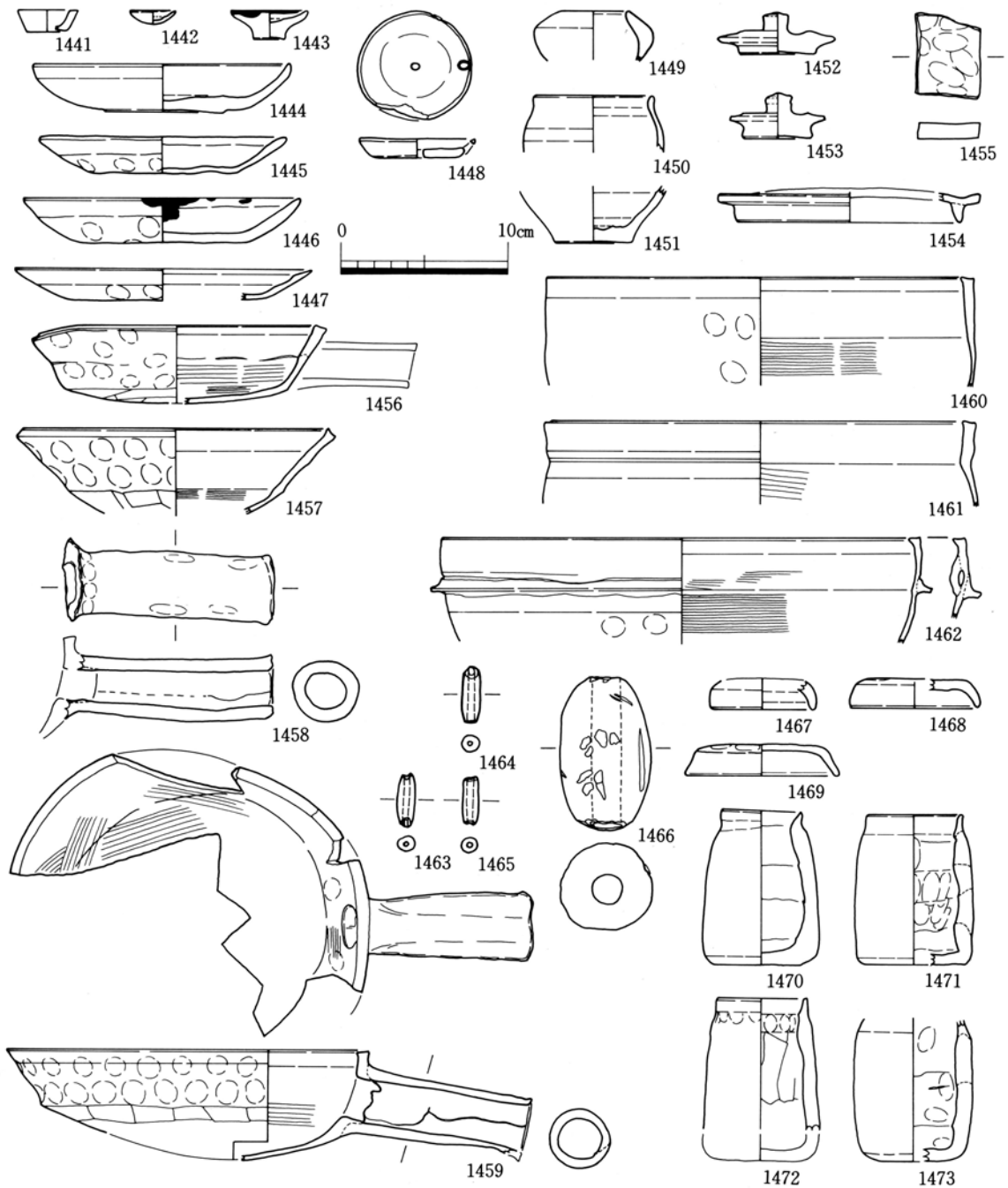


第165図 遺物実測図 中国窯・タイ窯産陶磁器

N 土師器 (第166～167図 1441～1485)

土師器は陶磁器・土器類全体の半数以上を占めるもので、主要な器種として皿と鍋・釜がある。この他に碗、火鉢（火舎）、小壺、焼塩壺、蓋、土錘、土鈴、形代（土犬）等が存在するが、出土量から見ると1割にも満たない。

土師器皿は成形技法で、外面底部に回転糸切り痕が残存する「ロクロ成形」と回転糸切り痕が残存しない「非ロクロ成形」に大きく区分される⁽¹⁾。前者は体部から口縁部の形状で更に区分が可能である。口縁部を強く外反させるものは城下町期Ⅰ期に属し、体部が内彎し口縁部が直立するタイプは城下町

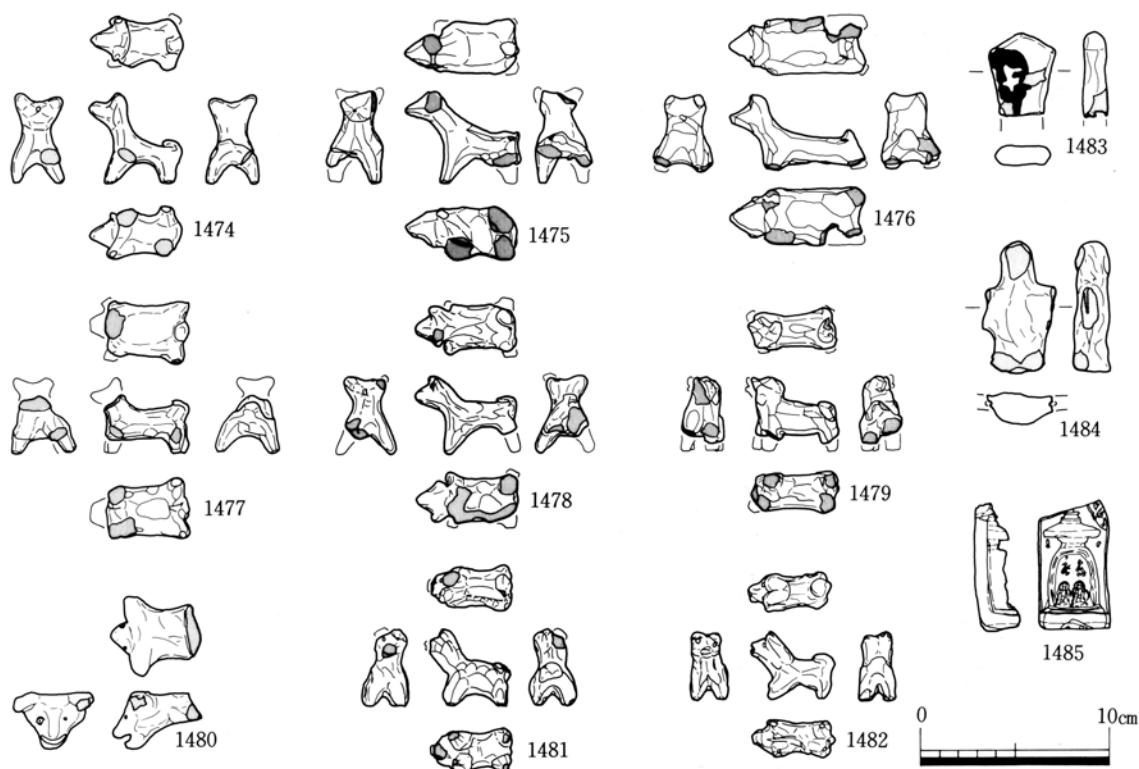


第166図 遺物実測図 土師器(1)

期Ⅲ期に属する。法量は出土地点によって異なるが、およそ3法量に区分される傾向があり、例外的に大きいものは本町地区と田中町地区に認められる。後者は体部の調整技法で細分できる。体部をヨコナデするものは城下町期Ⅰ期からⅡ期にみられ、ヨコナデが省略される形態のものは城下町期Ⅱ-2期に登場する。この種の皿は基本的に1法量であるが、穿孔される場合があり1448のように中央部と口縁部付近の2ヶ所に穿孔されるものもある。また、僅かではあるが、口縁部を肥厚させ、内面に幅広の回転ナデを施したものがある(1445~1447)。特殊なものとして口径約2cmの黒色の胎土の非ロクロ成形皿(1442)や、底部が突出した杯形のもの(1443)等がある。

壺(小壺)は底部に糸切り痕が残存する小壺と、手づくね成形の焼塩壺がある。前者は器壁が比較的厚く口縁部が内傾する無頸小壺(1449)と口縁部がややくびれる薄手の小壺(1450)がある。1451は壺の底部で平底である。この種の壺は出土傾向や時期は詳らかではない。一方、焼塩壺は手づくね成形の本体と蓋が出土している。1470~1473は輪積み成形で、口縁部が強くヨコナデされたものでよく被熱されている。蓋(1467~1469)は口縁部がヨコナデされている。

鍋・釜は皿に次いで多量に出土した。形態から羽付鍋、内耳鍋、炮烙鍋、釜に大きく区分されている。⁽²⁾内耳鍋は基本的に半球型の体部となる「尾張型」であるが、体部が一旦屈曲する「内湾型」に属するものも僅かに認められる(1460・1461)⁽³⁾。また、羽付の内耳鍋(1462)も存在する。また体部が屈曲して直立する本体に円筒形の柄を付着させた火のし状の製品(1456~1459)も城下町期Ⅲ期には一定量存在すると考えられる。なお、尾張型煮炊具群のⅠ期の開始は城下町期Ⅰ-1期、Ⅱ期の開始は城下町期Ⅱ-2期に対応すると思われる。



第167図 遺物実測図 土師器(2)

火鉢は、中空の三足が付いて口縁部が鐔状に横に開く火舎形のものである。鐔状の口縁部には多数の孔が穿たれたものも存在する。通常内面にススが少量付着する。

蓋は底部に回転糸切り痕が残存する落し蓋状のもの（1452・1453）と、口縁部下端面に返し状の突帯が付着するもの（1454）がある。前者は宝珠形つまみを持ち、おそらく底部に糸切り痕が残存する小壺に伴うものと考えられる。後者は表面がやや黒褐色化しており、時期を限定し得ない。

土錘は規模で2類に分類が可能である。61A区では長さ3.5cm（2.8cm～4.0cm）、重量3.1g（2.1g～4.0g）の小さな土錘（Ⅰ類）が数十点（1463～1465）と、長さ9.3cm、重量221.5gの大形の土錘（Ⅱ類）が1点（1466）出土している。前者は投網用または刺網用の、後者は刺網用の土錘と推測される⁽⁴⁾。旧五条川NR4001の付近（特に木製構築物SX4013・SX4014に隣接する調査区）で出土したことから、これらの土錘群は川漁に伴うものと考えられる。

土鈴（318・490・1094）は、城下町期Ⅰ期からⅢ期までの各時期に見られ、92D区では完形品の出土を見た。大半は上部が穿孔され、体部に一条の沈線が施されている。

形代には土犬、人形、泥塔等がある。土犬は形状から3類に区分できる。Ⅰ類（1474～1478）は鼻部が顔面全体から円錐状に伸び、目の表現が欠落しているものである。これらは頸部から体部にかけて比較的スマートで長く、尾部は背中に向けて折り曲げられている。Ⅱ類（1481～1482）は鼻部が丸みを帯びて僅かに口が表現され、刺突によって目も表わされているものである。これらは頸部が短く体部は丸みを帯びている。Ⅲ類は口を開けた状態を表現したもので頭部のみ（1480）が1点確認されている。目は墨書で丸を記して表現され、耳の穴も墨書されている。Ⅰ類とⅢ類は土師器の製品ばかりで、大半は頭部や脚部が欠損している。一方、Ⅱ類は自然釉が僅かに付着した陶器の製品と思われ、瀬戸美濃窯で製作された可能性も考えられよう。出土傾向であるが、御園地区・本町地区・南部地区に認められるのに対し、本丸に近い地区での出土例はほとんど見られない。また、時期的には大半は城下町期Ⅲ期に属するものと思われる。人形は、顔面と両手足が欠落したものが1点出土している（1484）。欠損した手部の両破断面には、上位から穿たれた穴の痕跡が残存していた。本来は両手の上に別製品が差し込まれていたと考えられ、衣の形状から特異な宗教的行為に用いられた可能性も考えられよう。泥塔（1485）は90C区のSD4039から出土した。底部に穴が1個存在し、厨子の中には二仏（阿閼如来・虚空蔵菩薩）が表現されている。十三仏の懸仏（7体）の内の上位から2体目の1体である。
(鈴木正貴)

註 (1) 佐藤公保（1986）「中世土師器研究ノート（1）」『年報昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター、佐藤公保（1987）「中世土師器研究ノート（2）」『年報昭和61年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター、鈴木正貴・尾野善裕・川井啓介（1993）『愛知県内出土の中世土師器皿—資料集』等による。

(2) 鈴木正貴（1994）「戦国時代の尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム4』による。

(3) 足立順司（1985）「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』による。

(4) 宮腰健司・古橋佳子（1991）「大淵遺跡出土の土錘について」『大淵遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集等を参考にした。

(5) 嶋谷和彦（1992）「織豊期の犬形土製品」『関西近世考古学研究Ⅰ』を参考にした。

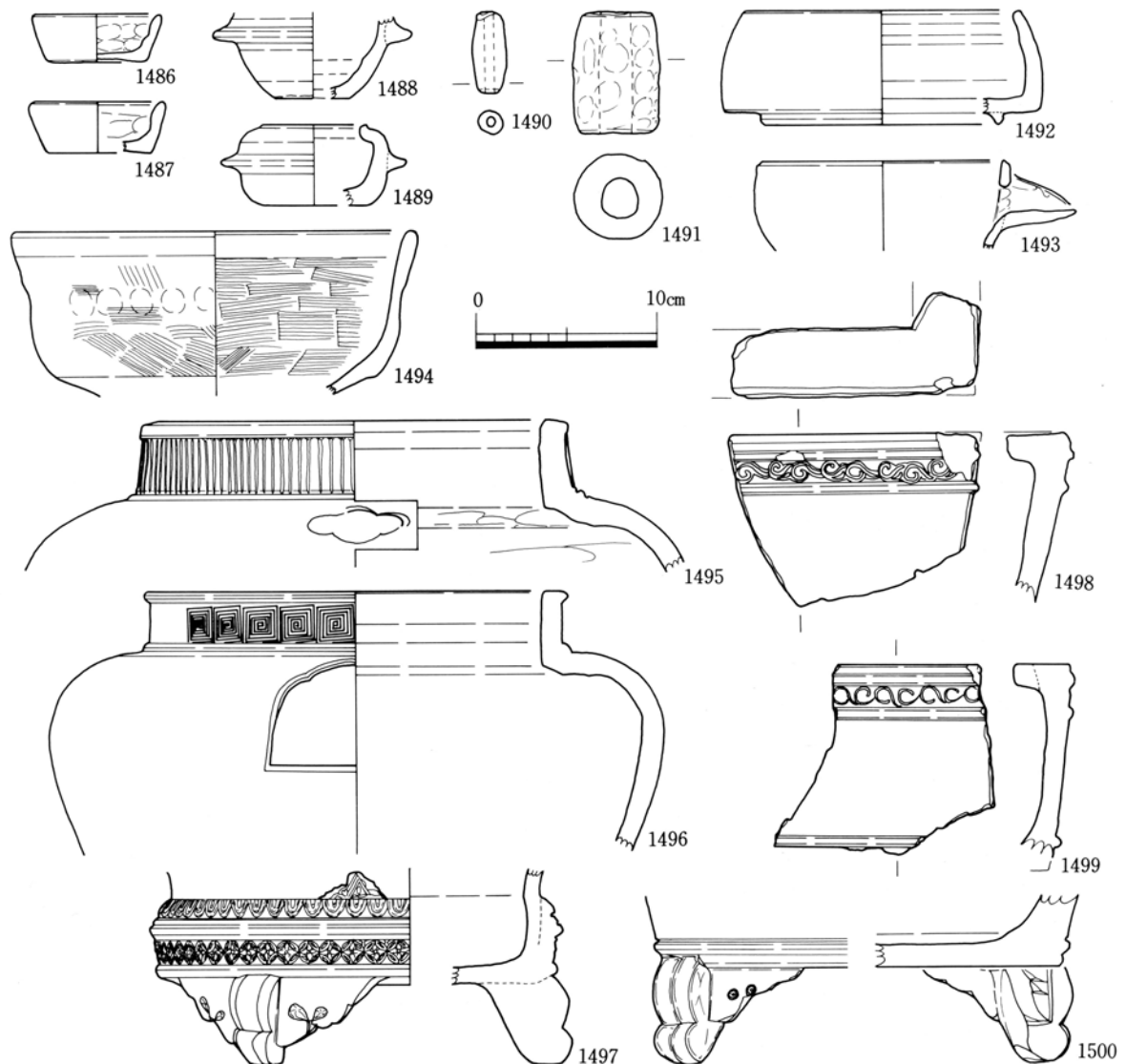
○ 瓦器 (第168図 1486~1500)

瓦器は胎土が灰色で表面が黒色に薫された製品を指し、その出土量は全焼物類の中で1%以下である。主要器種として火鉢と風炉があり、香炉、釜、土鍾等も認められるが、碗等の供膳具は存在しない。

火鉢(1498~1500)は平面形が長方形となる筒形の鉢(浅鉢形火鉢J型)で、口縁部が内側に屈曲する。四隅に猫脚が付き、体部の上位に2条の突帯とスタンプ紋が施され、下位にも突帯が付く。スタンプ紋は大半が唐草紋で、二重線のものの一重線のものがある。風炉(1495~1497)は体部に火窓がある壺形の製品(風炉B型)を指す。頸部の紋様には連子紋と雷紋があり、体部にも複数の紋様パターンが存在する。香炉(1492)は高台を持つ筒形で、体部は内傾する(香炉C型)。釜(1488・1489)はミニチュア製品で丁寧に成形される。土鍾は長さ4.5cm、重量14.2gのもの(1490)と、長さ7.0cm、重量182.1gのもの(1491)がある。その他に小形の筒形製品(1486・1487)、鉢形の煮炊具(1494)、火のし(1493)等が存在するが、これらは時期不明で宿場町期に属するものかも知れない。

なお、本遺跡ではこれまでに浅鉢形火鉢A型・D型、風炉A型・E型が出土している。(鈴木正貴)

註(1) 瓦器分類は次の文献を用いた。菅原正明(1989)「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』。



第168図 遺物実測図 瓦器

P その他の土器類（第169・170図 1501～1504）

上記の土器類の他に産地などが特定できないものや鑄造等に伴う製品等を、ここでは一括して取り扱うこととする。

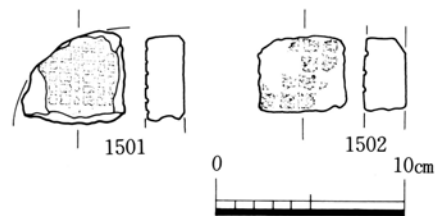
鑄造等に伴う製品として埴塙のトリベや羽口等が存在する。これらは一括資料の中ではSD6068（414・415）、SD7023（871～873）、SK7029（1083～1086）等で見られる。トリベは口径が5 cm前後を測り、底部は丸底である。砂粒の多い灰色の胎土で内面に金属性の付着物が存在している。羽口も同様の胎土で作られた厚い筒状の製品で一方の端面に金属スラグが付着している。トリベや羽口の地区別の出土量の傾向であるが、御園地区・五条橋地区・本町地区・南部地区で出土が確認されており、特に61C区・61D区では際だって出土量の多さが目立っている。金属製品の出土傾向等から見ても鑄造関係の遺構や施設が付近に存在したことが想定されよう。

この他に鑄造等に伴う製品として、鑄型の台に用いられたと考えられる遺物が2点存在する。1501は円盤状の製品の一部で、表面にはヘラ状工具で格子状に線書きされている。鏡の製作に使用されたものの可能性も考えられる。1502は方形に遺存した板状の土製品である。表面にヘラ状工具による格子が記されている。いずれもかなり被熱されていた。

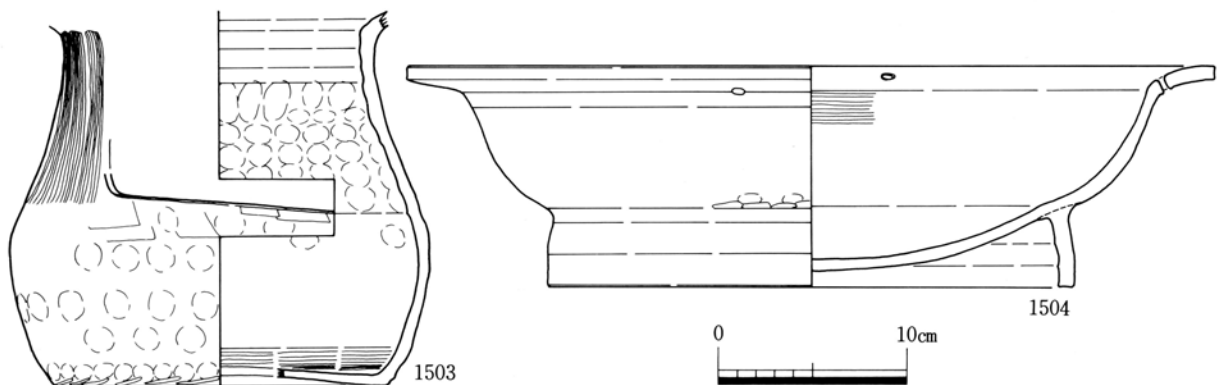
産地不明の陶器?として1503と1504を取り上げる。共に、白色の砂粒を含有するクリーム色の胎土を持つ無釉の製品で土師器に比べると焼成は良好である。1503は平底で、体部がS字状に緩やかにくびれながら直立し、口縁部にかけて外に屈曲している。体部の一部に大きな窓が開いており、風炉を思わせる。体部の調整は指オサエと縦方向のハケメである。1504は土師器の火鉢と類似しているが、中空の脚ではなく、高台が付いている点が異なる。鏝状に開いた口縁部には複数の孔が穿たれている。時期は特定できず、宿場町期の遺物の可能性も残されている。

今回は図示しなかったが、壁土と考えられる土製品も多数出土した。厚さは1～3 cm前後で格子状の紋様（木舞の痕跡か?）が表面に付いたものも認められる。大半は赤褐色に変色していることから、火災などの二次的な火を受けたものが多いと思われる。

（鈴木正貴）



第169図 遺物実測図 鑄造関連



第170図 遺物実測図 産地不明陶器

Q 墨書・刻書土器（第171・172図 1505～1537）

陶磁器・土器類の内、墨書または刻書が記されたものをここで取り上げる。

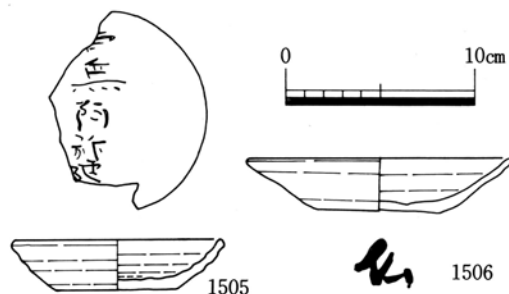
土器類の墨書は土師器皿に限定され、土師器鍋・釜や瓦器に墨書が記される事例は存在しない。土師器皿の墨書は大半は底部外面に記されるが、中には内面全体に記されるもの（1515・1516）や内外面両面に記されるもの（1513）も認められる。墨書の内容は宗教的な文言が記される場合が多く、「沙弥・浄土」（387）や「仏」（1506）等の仏教的な言辭、1515・1516のような呪術的文言、「神」と（1510）といった用語など多岐に亘る。また内容は不明であるが、絵画が描かれるものも見られる。

一方、陶磁器類の墨書は瀬戸美濃窯産の碗と皿が多く、僅かに瓶等の事例が存在する。瀬戸美濃窯産の陶器に墨書の事例が多いのは瀬戸美濃窯産陶器の出土量が多いためと考えられるが、器種が天目茶碗、台付碗、縁釉皿、腰折皿、重圈皿に集中している点は特徴的である。墨書される部位は大半が底部外面の露胎部であるが、天目茶碗の場合は体部下半の露胎部に記されていた。墨書の内容は①宗教的な文言、②地名的な表現、③記号的な表記に区分できる。①宗教的な文言としては、「御天神様」（1519）、「」音」（1526）、「妙」（1518）等がある。②地名的な表現としては「町」（1517）、「村」（1522：宿場町期に属する可能性もある）等があり、③記号的な表記としては「川」（1521・1523）、「十」（1524）、「〇」（1525・1528）等がある。

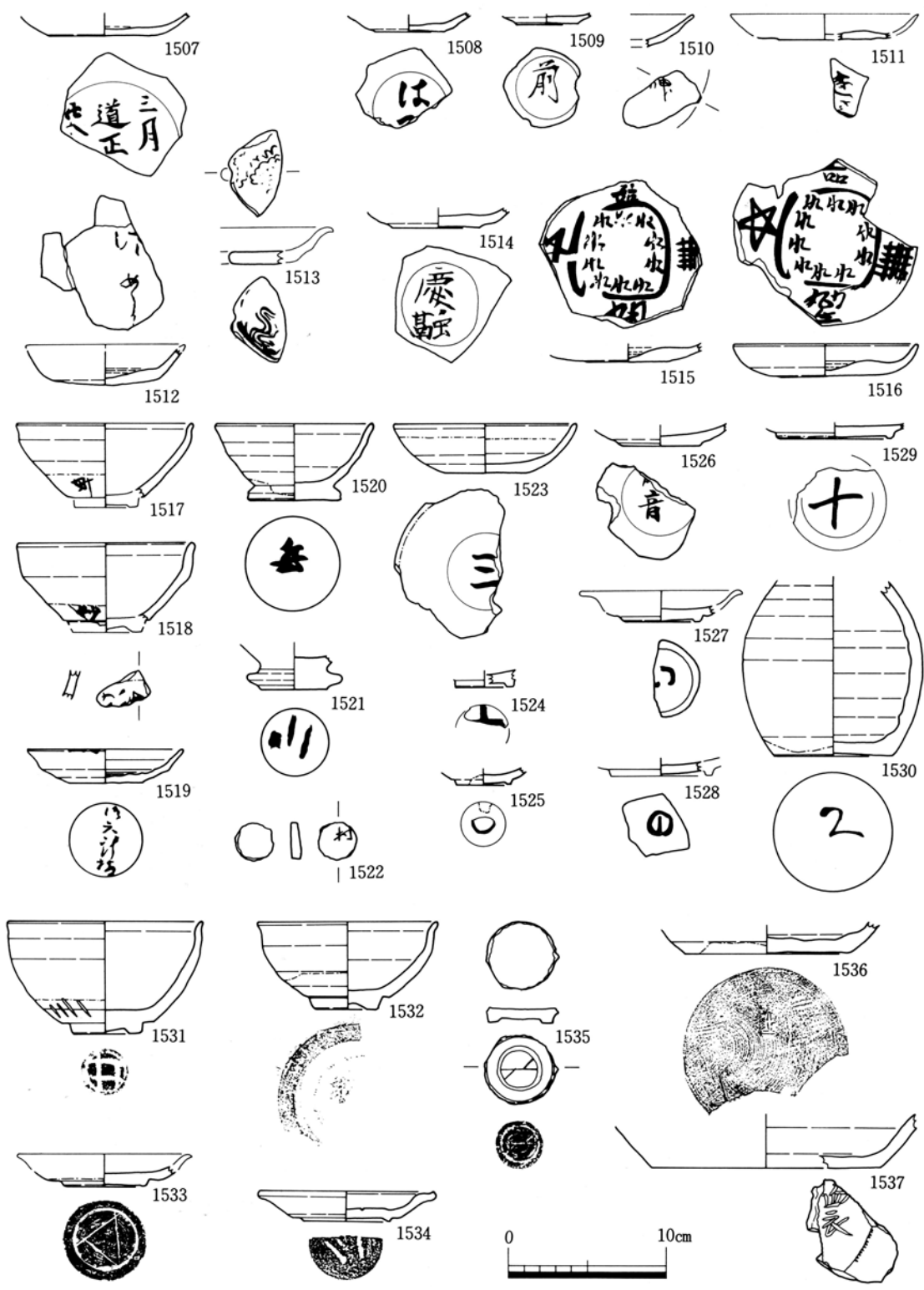
刻書は陶器類に多く見られ、土師器の皿に施されたものが僅かに1点存在する。陶器類の刻書は焼成前に記されたものと焼成後に記されたものの2者がある。前者は窯記号等として書かれたものと思われる、瀬戸美濃窯産の陶器壺に記された「（祖母）懐」（1537）と備前窯産陶器に施されたヘラ記号（1273・1278・1285）が見られる。後者は消費者側が記入した使用のための記号と考えられ、主として碗・皿類の底部外面に「井」、「△」等と記される事例が存在する。中には、天目茶碗の体部下半の露胎部に横向きに刻書された文字が数字分残存した例（1532）があるが、判読不能である。この高台部には「オ」と記されている。また、土師器皿の刻書例は焼成前に「南無阿弥陀」と記入されたもの（1505）がある。92C区から出土しており、おそらく旧五条川NR4001埋土中の遺物と思われる。

墨書または刻書が記されたものは、全体の陶磁器・土器類の中で占める割合は非常に少ない。地区による出土量の偏りは特に認められないが、宗教的な文言の墨書または刻書は旧五条川NR4001に多く認められる傾向がある。この傾向は墨書木製品（木簡）についても認められるものである。また、「町」の文字が記された碗が89B区で確認されたことは、清須城下町の構造を考える上での一資料になると思われる。

（鈴木正貴）



第171図 遺物実測図 墨書・刻書土器(1)

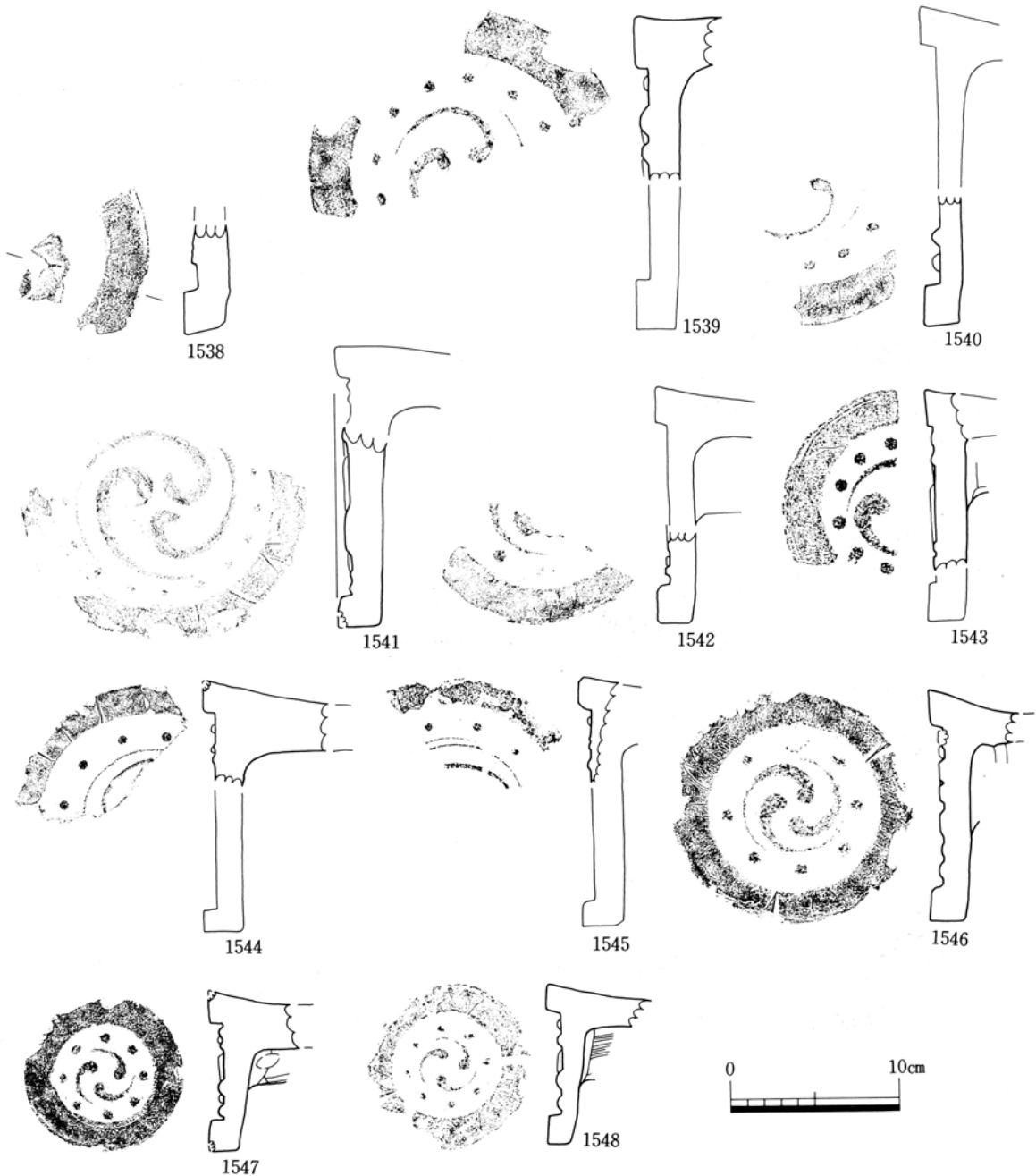


第172図 遺物実測図 墨書・刻書土器(2)

R 瓦 (第173~178図 1538~1574)

瓦はほぼ全調査区から出土している。器種は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、飾瓦、道具瓦（面戸瓦、輪違い瓦、鬨斗瓦）等が認められるが、出土量は名古屋環状2号線関連の清洲城下町遺跡の調査区に比べると、調査面積の割に非常に少ない。本項ではまず新出分類を中心とした軒瓦の資料紹介を行った後に、軒瓦以外の資料についても一括出土事例を中心に紹介することとする。なお、63C区・62C区・89B区は瓦全点を確認しておらず、数値は確定的ではない。また、軒瓦の紋様分類は小澤一弘⁽¹⁾、鈴木とよ江⁽²⁾によって行われている。ここでは鈴木分類に依拠して、これを補足する形で報告する。

軒丸瓦はこれまでに77点が確認され、Ⅰ類（Ⅰa類）、Ⅱa類（Ⅱa1~4類）、Ⅱb類（Ⅱb1類）、Ⅱc類、Ⅲ類、Ⅳ類が発見されている。このうちⅡa4類は今回の報告が初出である。



第173図 遺物実測図 瓦(1)

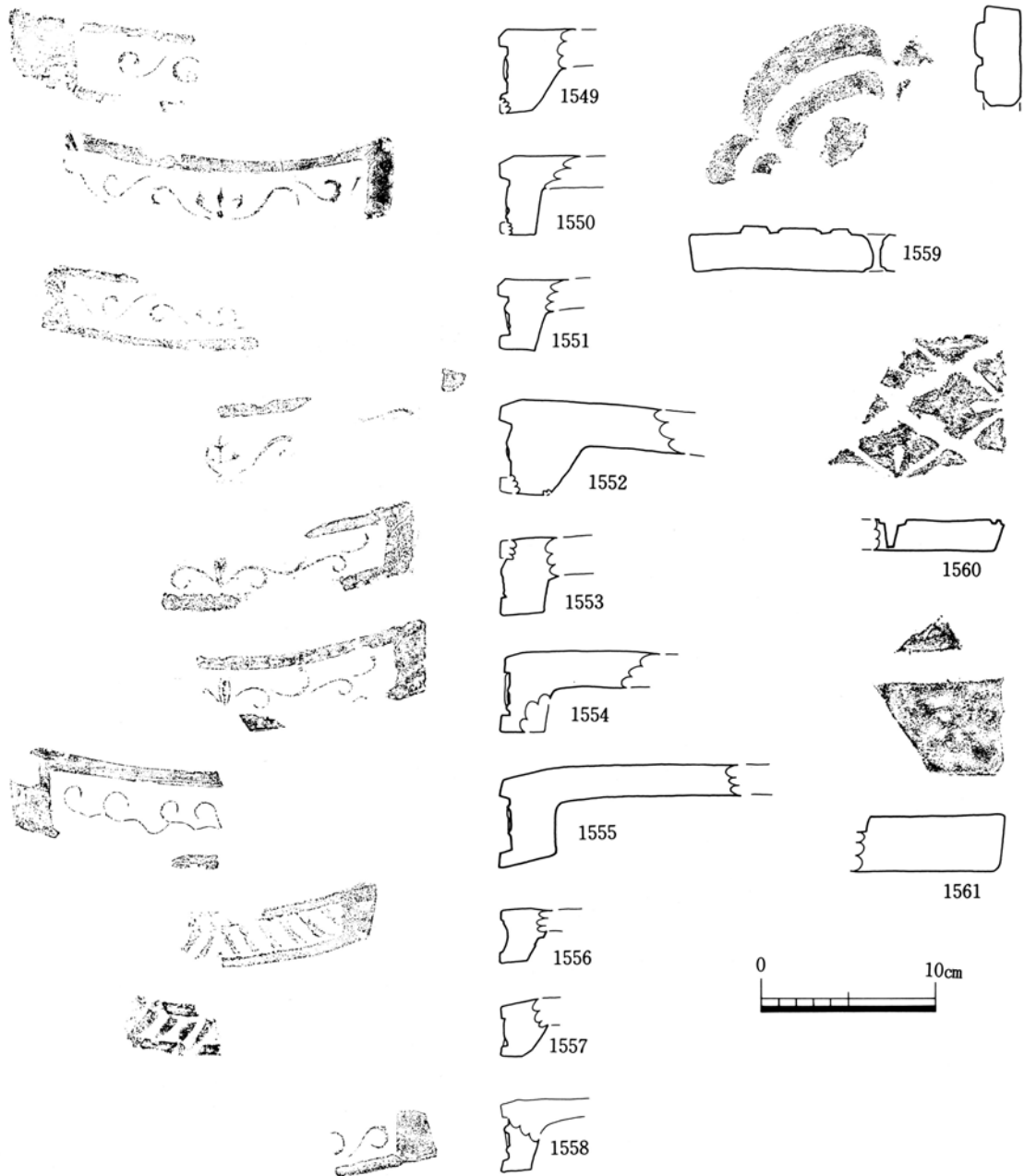
Ⅱ a 4類 (1544・1545) 瓦当径16cm内外のもので、内区の紋様は左巻三ツ巴紋で、巴の尾がⅡ a 1類よりも細長く伸び圈線を作るものと思われる。外区には推定12個の珠文を巡らす。

軒平瓦はこれまで41点が確認され、Ⅱ a類(Ⅱ a 2類)、Ⅱ b類、Ⅱ c類(Ⅱ c 1～3類)、Ⅱ d類、Ⅱ f類、Ⅳ類(Ⅳ b類)が見つかった。このうちⅡ f類が今回初めて確認されたものである。また、Ⅳ類は更に2類に区分が可能である。

Ⅱ f類 (1553・1554) 中心飾りに葉脈を持つ一つの子葉を置き、左右には下向き、上向き、下向き上向きの唐草を配する。

Ⅳ a類 (『清洲城下町遺跡Ⅱ』129頁56) ハの字状に左右とも5つの細い直線を配するものである。

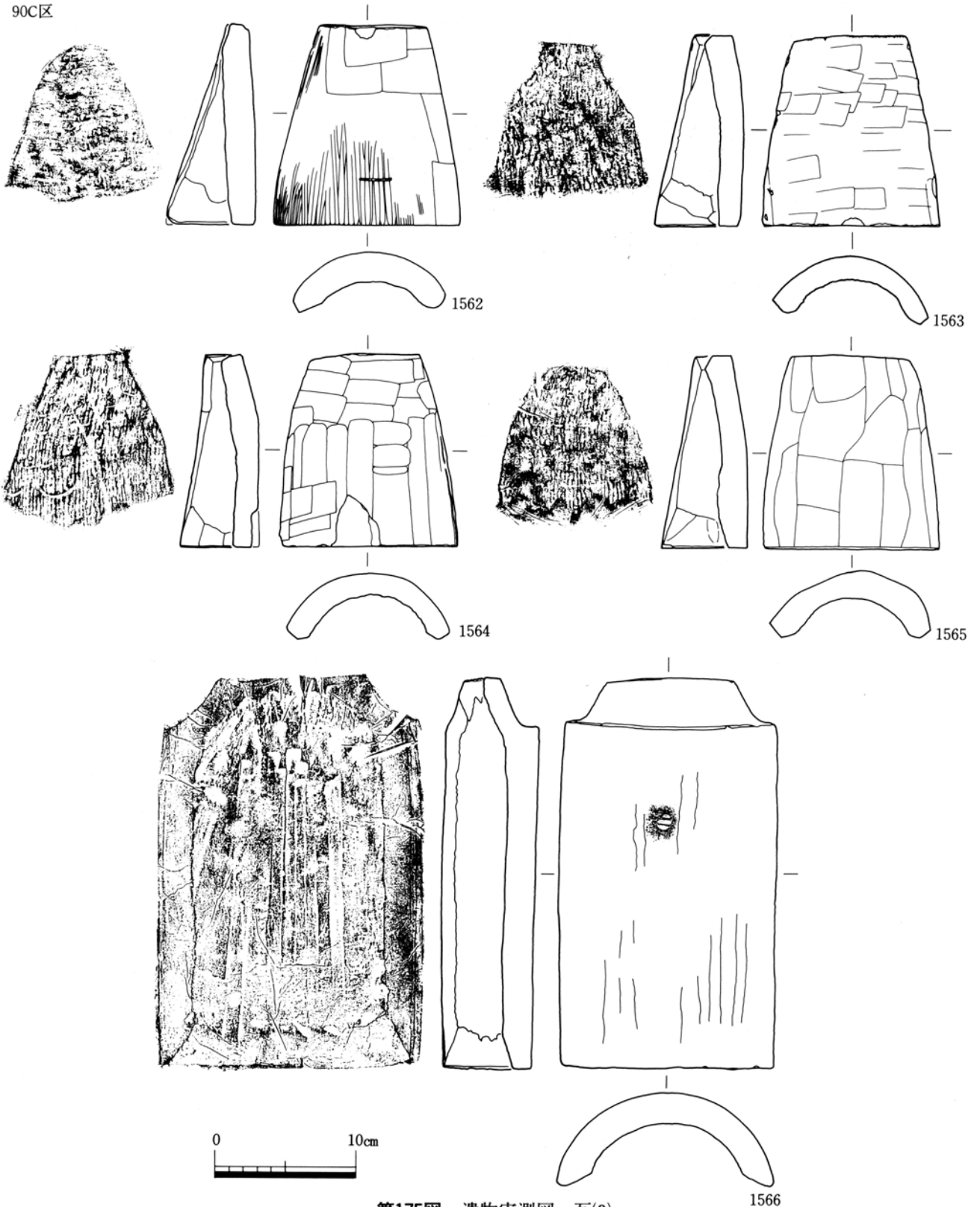
Ⅳ b類 (1556・1557) Ⅳ a類と同様の紋様構成であるが、幅広の直線を配するものである。



第174図 遺物実測図 瓦(2)

丸瓦、平瓦等の事例として90C区南東隅部から出土した一括資料と61A区出土資料を取り上げる。
 90C区南東隅部から出土した丸瓦、平瓦、輪違い瓦はほとんどが完形に近い形で出土している。輪
 違い瓦（1562～1565）は内面に縄目痕、コビキBが残存している。丸瓦はI類：内面にコビキBとタタ

90C区

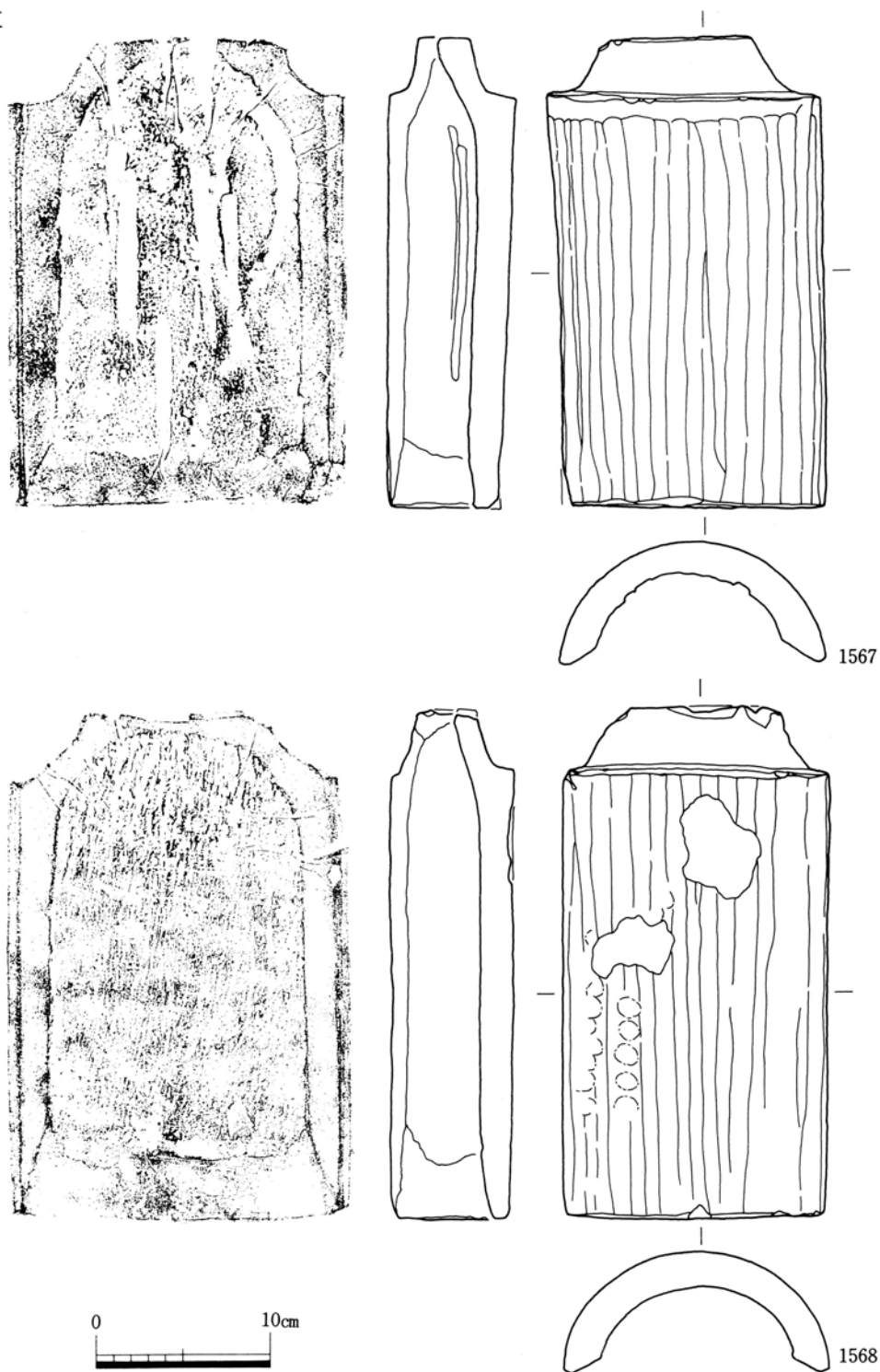


第175図 遺物実測図 瓦(3)

1566

キが残り、外面にスタンプ紋が1個押印されたもの(1566)、Ⅱ類：内面にコビキBとタタキが残るが外面にスタンプの無いもの(1567)、Ⅲ類：内面にタタキが認められず、コビキBのみが看取されるもの(1568)がある。平瓦はいくつかの大きさが認められ、長さが31.0cm(1569)、26.5cm(1570)、24.3cm(1571)となるものがある。上端面にスタンプが押印されたもの(1570)も認められる。61A区でも良好な形で平瓦と丸瓦が出土した。平瓦のうち長さが33.5cmを測るもの(1574)もある。

90C区

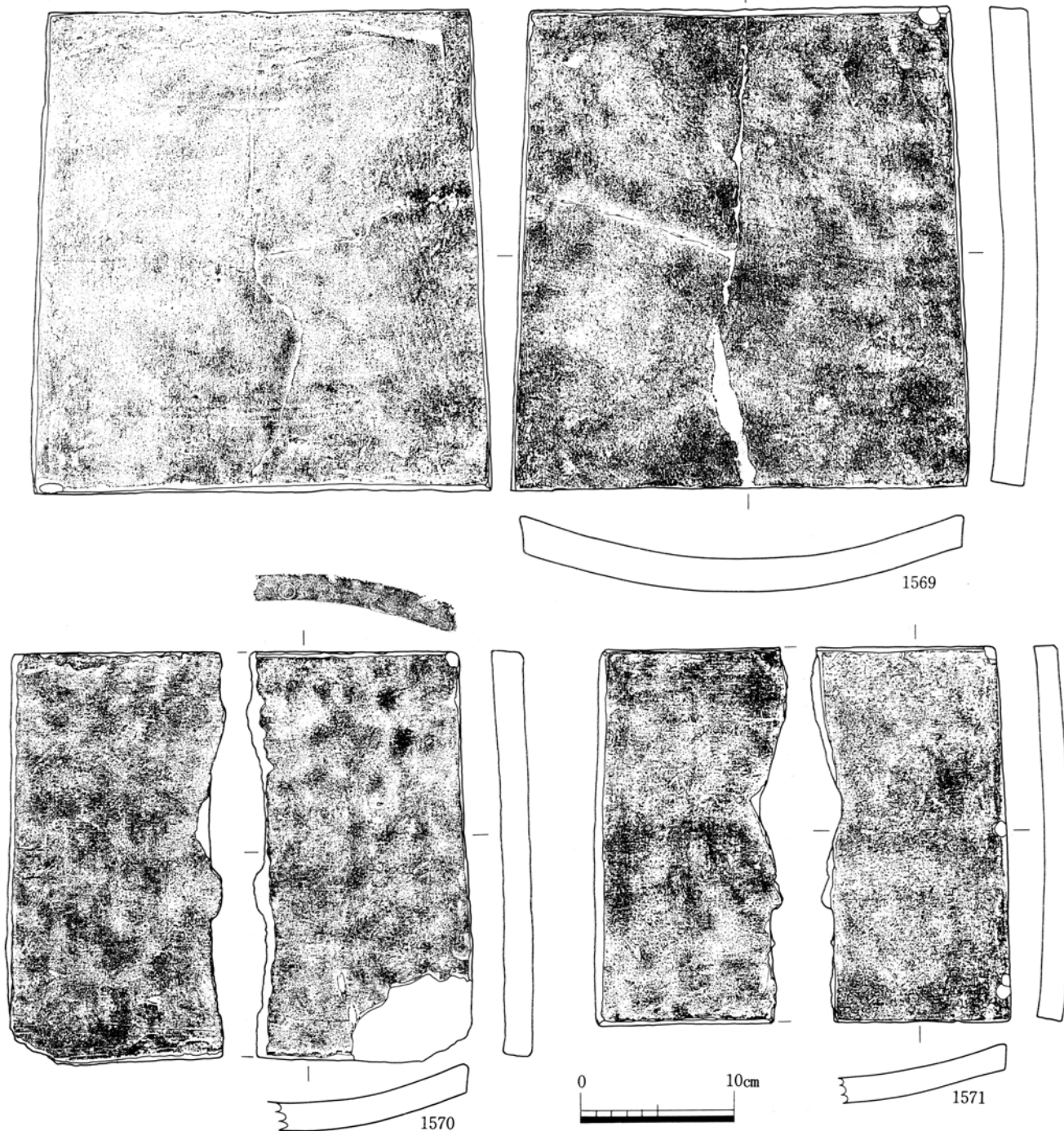


第176図 遺物実測図 瓦(4)

本遺跡の軒瓦の詳細な編年は困難な点が多く、今回の調査でも資料数は僅かであったが、その中でSK6570出土の軒平瓦Ⅱ d類(492)は1586年以前と確定できる資料である。また鈴木は瓦を3期に区分したが、今回の調査では1期の軒瓦はなく、2期は五条橋地区7点・本町地区4点出土し、3期では本丸地区3点・田中町地区1点・五条橋地区6点・本町地区9点・南部地区3点と出土範囲が拡大している。(鈴木正貴)

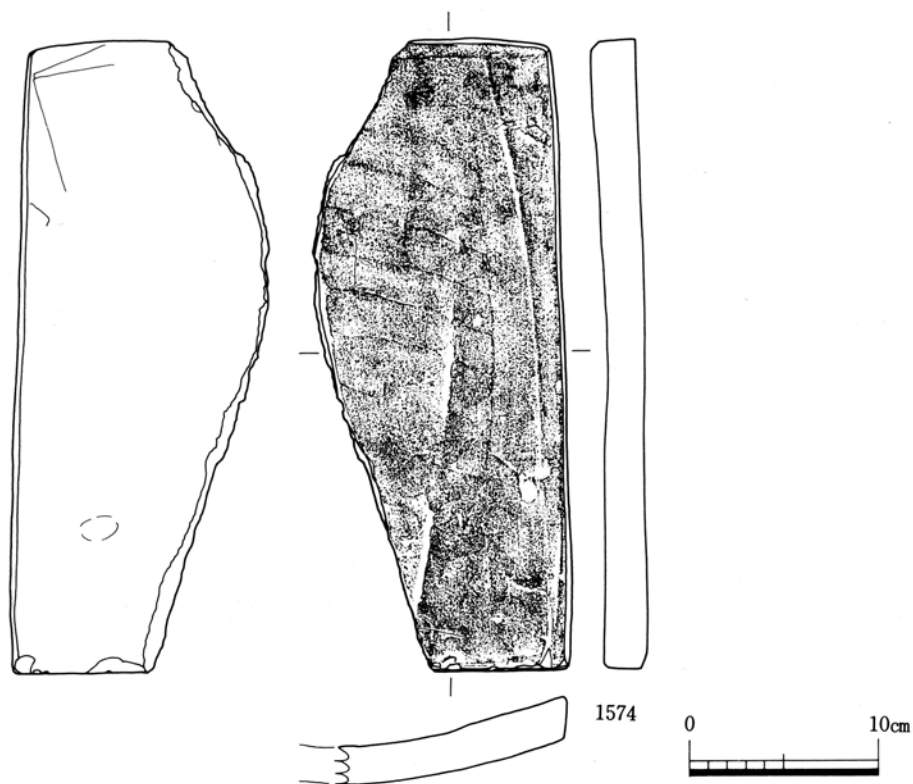
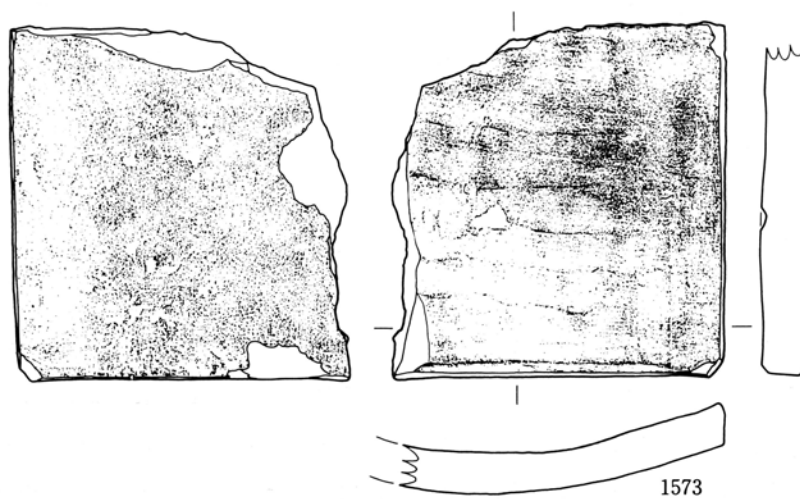
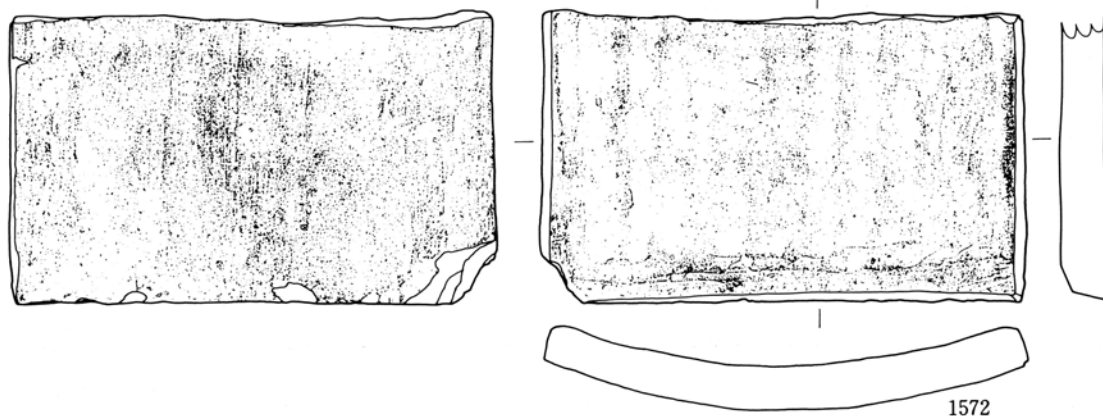
- 註 (1) 小澤一弘(1987)「清洲城下町出土の瓦について」『年報昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 (2) 鈴木とよ江(1992)「瓦」『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集

90C区



第177図 遺物実測図 瓦(5)

61A区



第178図 遺物実測図 瓦(6)

S 木製品 (第179~180図 1575~1596)

木製品は滞水状況を示す遺構・自然流路という限られた条件で出土する特徴がある。従って、調査区によって出土量が異なるのはこうした理由から起こる現象であり、地区別出土分布は分析できない。

木製品は多種多様な器種が存在し、用途から大きく容器と道具と木簡に分類できる。容器としては刳物(椀、皿、香合)、曲物(桶、柄杓、折敷)、結物(桶、井戸桶)、組物(釣瓶、箱)等がある。また道具類としては箸、篋、下駄等がある。木簡は文言によって卒塔婆、柿経、札類に区分される。

刳物のうち漆器類の分析は既に今回の資料(NR4001)を用いた考察があるが、その際に用いた資料以外にも城下町期Ⅲ期に属する木胎漆器椀が存在する。1583は63R区から出土した高台の高い椀で高台内が深く削り取られている。1584~1587は南部地区62D区から出土したもので、1585は体部外面に丸に左三ツ巴紋が描かれている。1587は杯形を呈し底部のみが残存している。62D区の一群は、器形及び家紋に類似する紋様が施されている点から、鈴木編年のⅡ期4段階(17世紀初~中頃)に所属すると考えられる。

道具類は多岐に亘り、用途が不明である加工材も多数存在する。1589は有段の栓、1590は傘の軸受け、1591は糸かせの杵木、1594は工具の柄部と考えられる。1595は大形の羽子板状の板材で、柄部に2ヶ所切れ込みがあり、皿部には釘が打たれた痕跡が残存している。1595は旧五条川から出土し、何等かの宗教的行為に使用された可能性が考えられる。

木簡類は卒塔婆が比較的多く見られる。特に旧五条川からは柿経と共に多数の卒塔婆が出土し、90D区の資料は前節で報告したのでここでは90D区以外の調査区から出土した資料を紹介する。1576~1579は90D区とは異なる様式で記載された卒塔婆で、62C区から出土した。92C区のNR4001からも1点出土した(1582)。また、その他の遺構では62G区SD3015から1点(1575)、89F区SD7002から1点(1581)ずつ出土している。前者の卒塔婆は幅広の板材を用いたもので、旧五条川から出土した様式とは異なる。

1575・「ㄗ 龍女成仏 普為□□

人天説法 □

1576・「卍 南無観世音菩薩」

・「仏法僧 大火所焼時我此土安穩」

1578・「卍 南無観世音菩薩」

・「仏法僧 応無所住而生其心 敬白」

1577・「卍 南無観世音菩薩

・「仏法僧 大火所焼時我此土安穩

1579・「卍 南無観世音菩薩

・「仏法僧 応無所住而生其心 敬白」

1580・「ㄗ ㄗ ㄗ ㄗ 卍 □南無阿弥陀仏□□」

・「ㄗ

1581・「ㄗ ㄗ ㄗ ㄗ 卍 [

・「ㄗ、

1582・「ㄗ ㄗ ㄗ ㄗ 卍 南無□□世仏已浄土有性無性齋成仏道為□道禅門也」

・「ㄗ 南無阿弥陀仏」

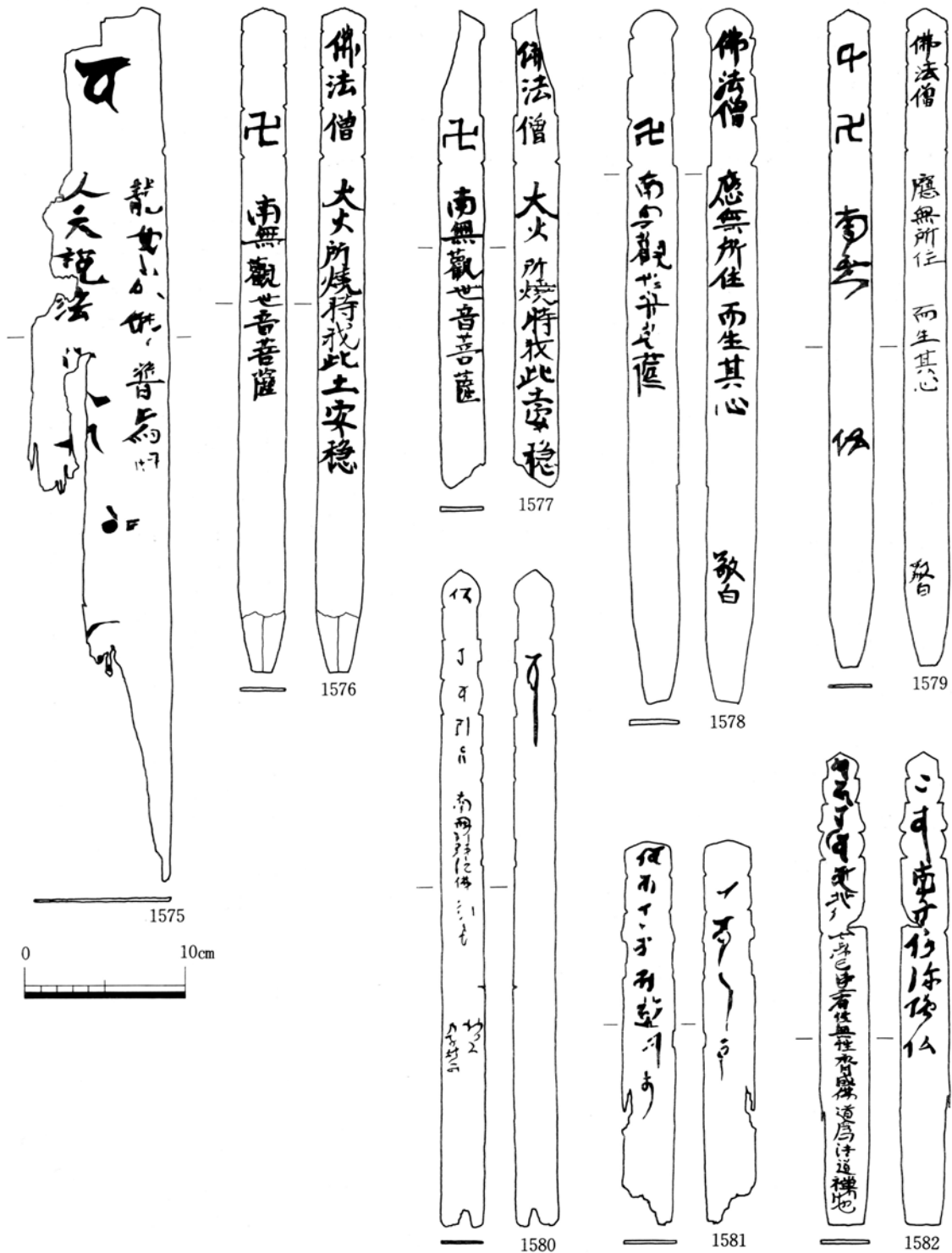
井戸側に使用された結桶状の筒形製品(井戸桶)は比較的遺存状況が良好なもので、宿場町期を含めて43点存在する。今回図示できなかったが、井戸桶については既に考察⁽²⁾が存在し、基本的に変更点は存在しない。城下町期に属する井戸桶はすべて割裂法による製板の後にチョウナ・ヤリガンナで整

形されている。また、側断面はカンナで丁寧に整形されている。

(鈴木正貴)

註 (1) 鈴木正貴 (1992) 「清須城下町から出土した漆器について」『朝日西遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

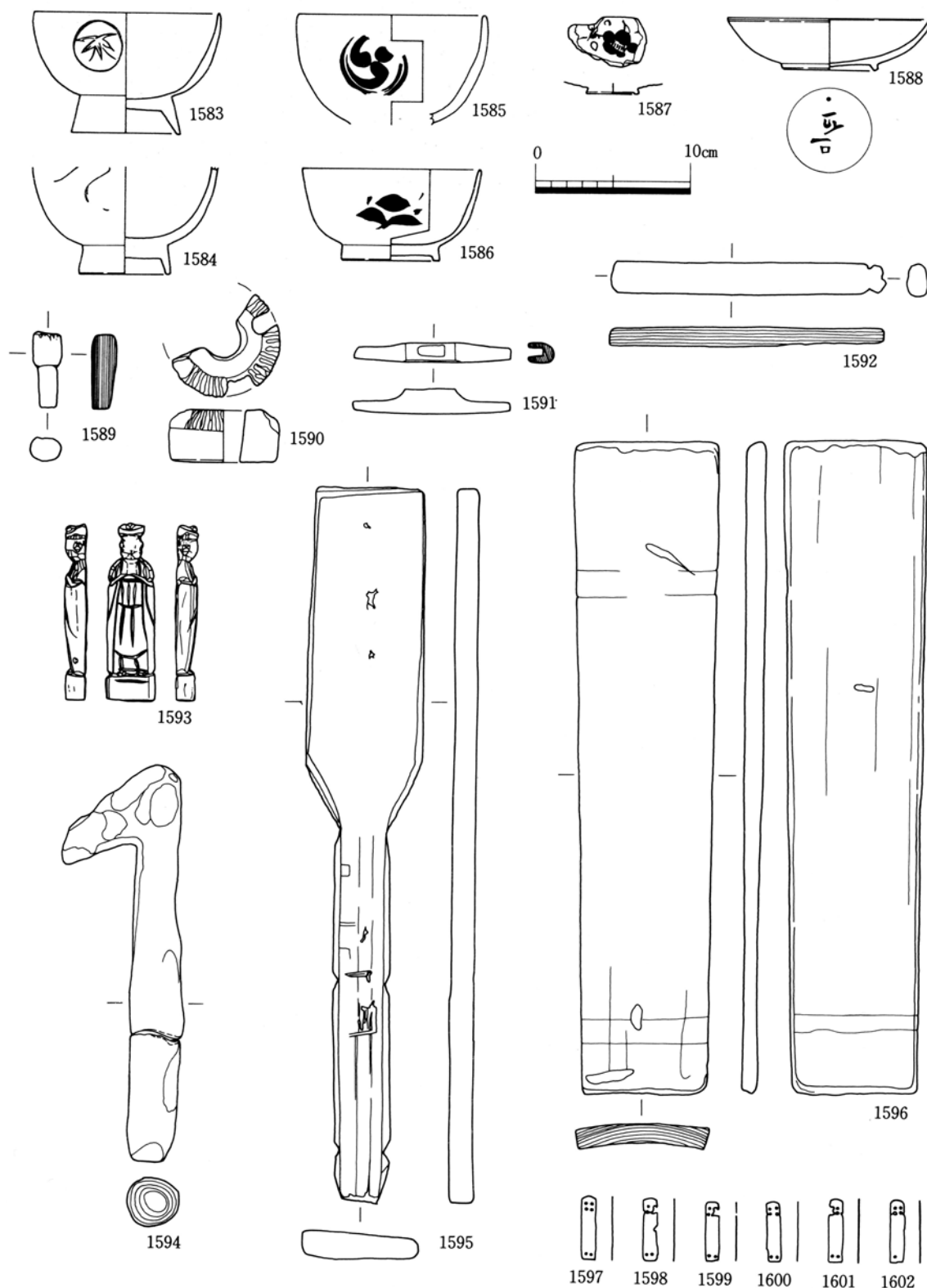
(2) 鈴木正貴 (1989) 「清洲城下町遺跡出土井戸桶に関する考察」『年報昭和63年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター



第179図 遺物実測図 木製品(1)

T 漆製品 (第180図 1597~1602)

漆製品は木胎製品が多く、一部に陶器に漆を塗布したもの等がある。また本体の材質が不明なものもあり、1597~1602は2列に孔が配列された漆膜である。これは小札の装飾が剥離したものと考えられ、91B区から600枚弱が一括して出土した。(鈴木正貴)

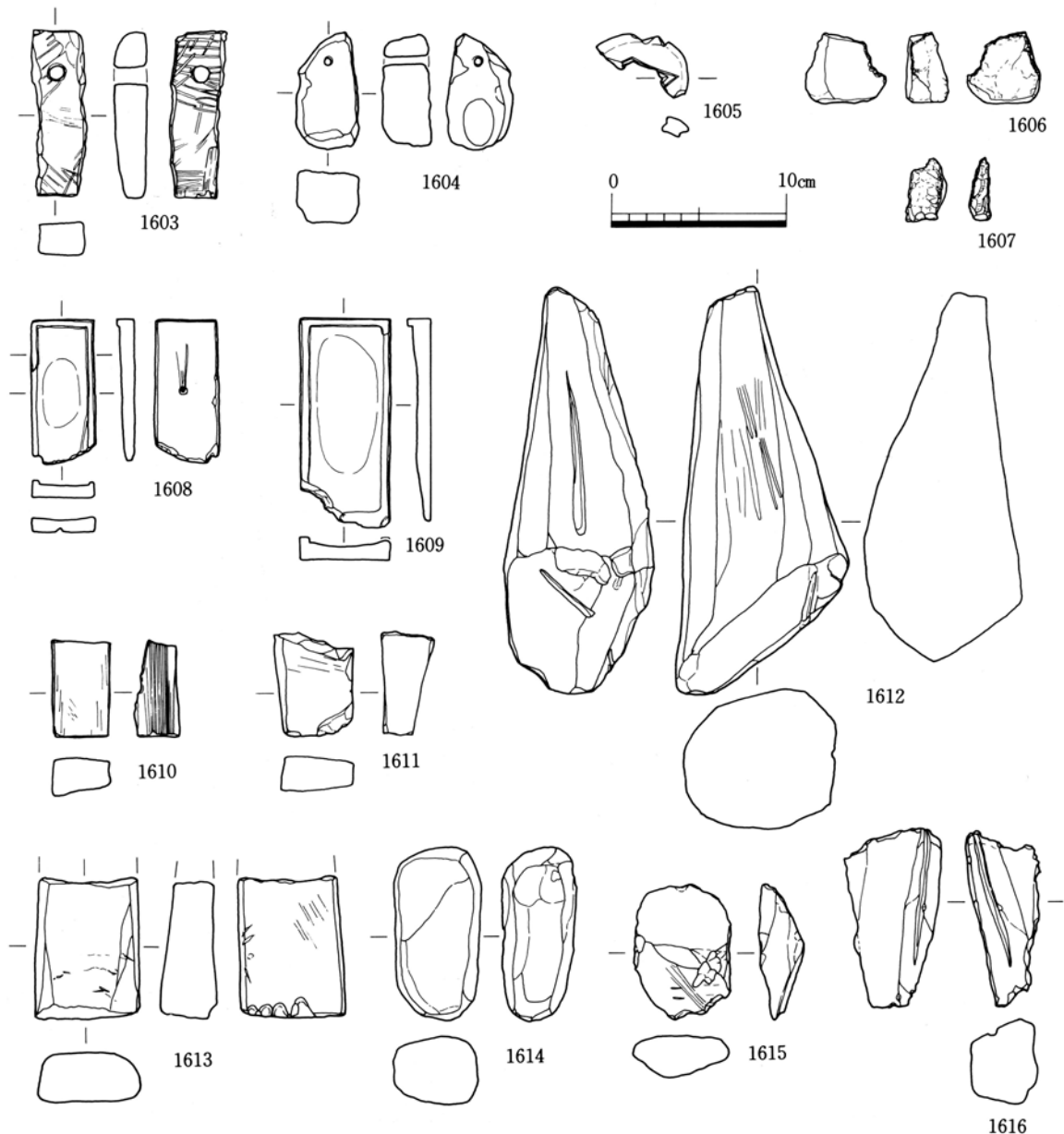


第180図 遺物実測図 木製品(2)・漆製品

U 石製品 (第181・182図 1603~1622)

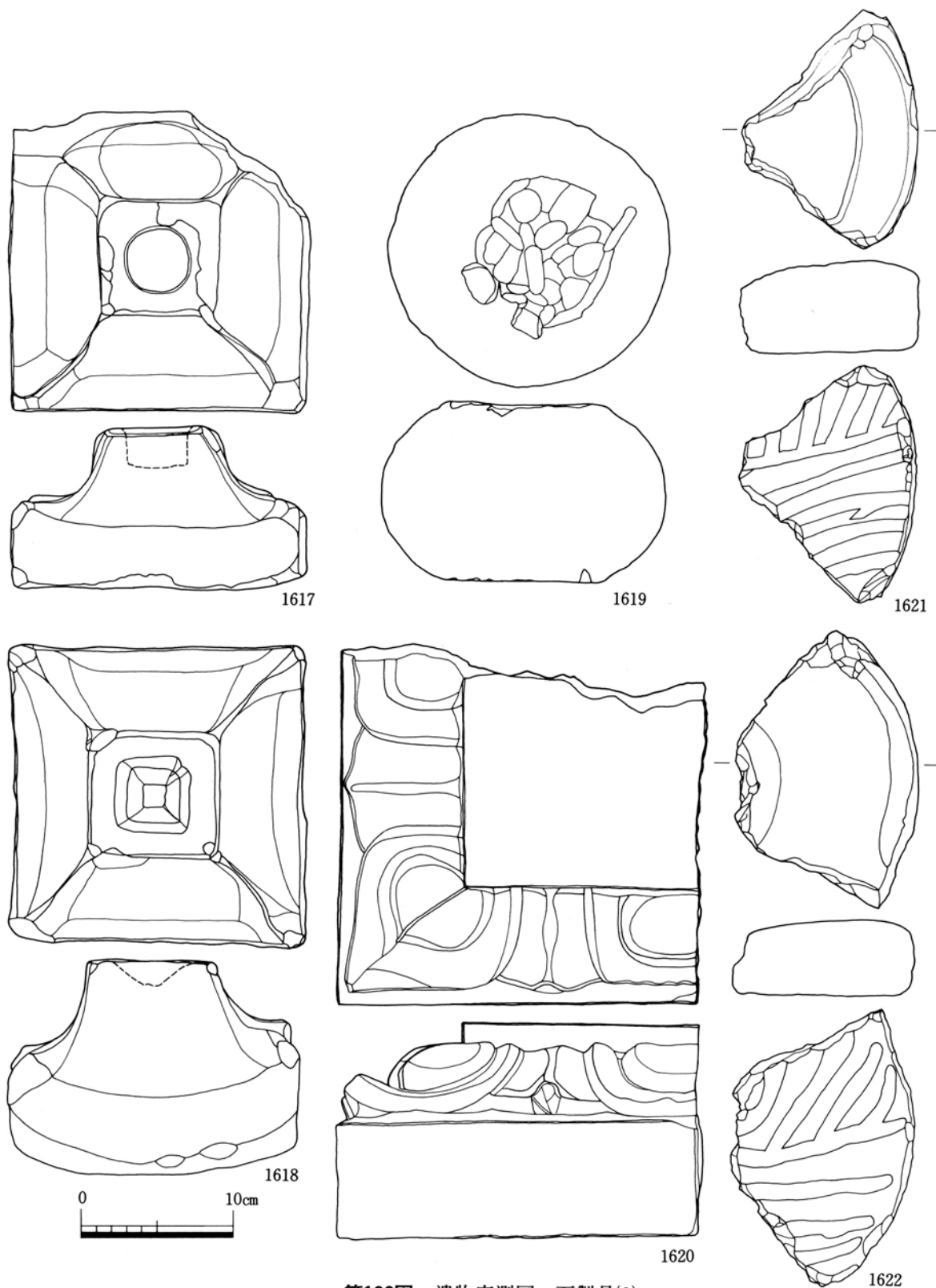
石製品はほぼ全調査区から出土し、合計で1039点が確認された。石臼、硯、砥石、火打ち石、石塔類、囲炉裏の緑石?等の多様な製品が存在する。この中で砥石が最も多く見られる。

砥石は石材によって荒砥、中砥、仕上げ砥に区分される。砂岩等が荒砥、凝灰岩等が仕上げ砥に対応すると思われる。前者は大形で形態に規格性が認められず、出土量も17点であり少ない。後者は形態と大きさで分類できる。Ⅰ類：小形の短冊形になったもの、Ⅱ類：小形の直方体になったもの(1610)、Ⅲ類：バチ形に下半部が広がった小形のもの(1611)、Ⅳ類：多角錐状の形態で複数の砥面が存在する大形のもの(1612・1616)、Ⅴ類：横断面が低い山形になるもの(1615)などがある。砥石には溝を持つもの(1612)や穴が穿たれたもの(1613)も存在する。地区別の分布状況であるが、本町地区で多量に出土しており、荒砥の比率は63R区と90F区が高い傾向がある。



第181図 遺物実測図 石製品(1)

1606・1607はチャートの火打ち石、1608・1609は小形の長方硯、1621・1622は挽臼の上臼である。
 1617～1620は五輪塔の一部で、1617・1618は火輪、1619は水輪、1620は地輪である。また1603は滑石製の有孔石板で数条の溝が切られ、石鍋を転用したものと考えられる。1604は軽石の有孔石板で浮き子の可能性がある。1605は笏谷石の小形バンドコの蓋である。
 (鈴木正貴)



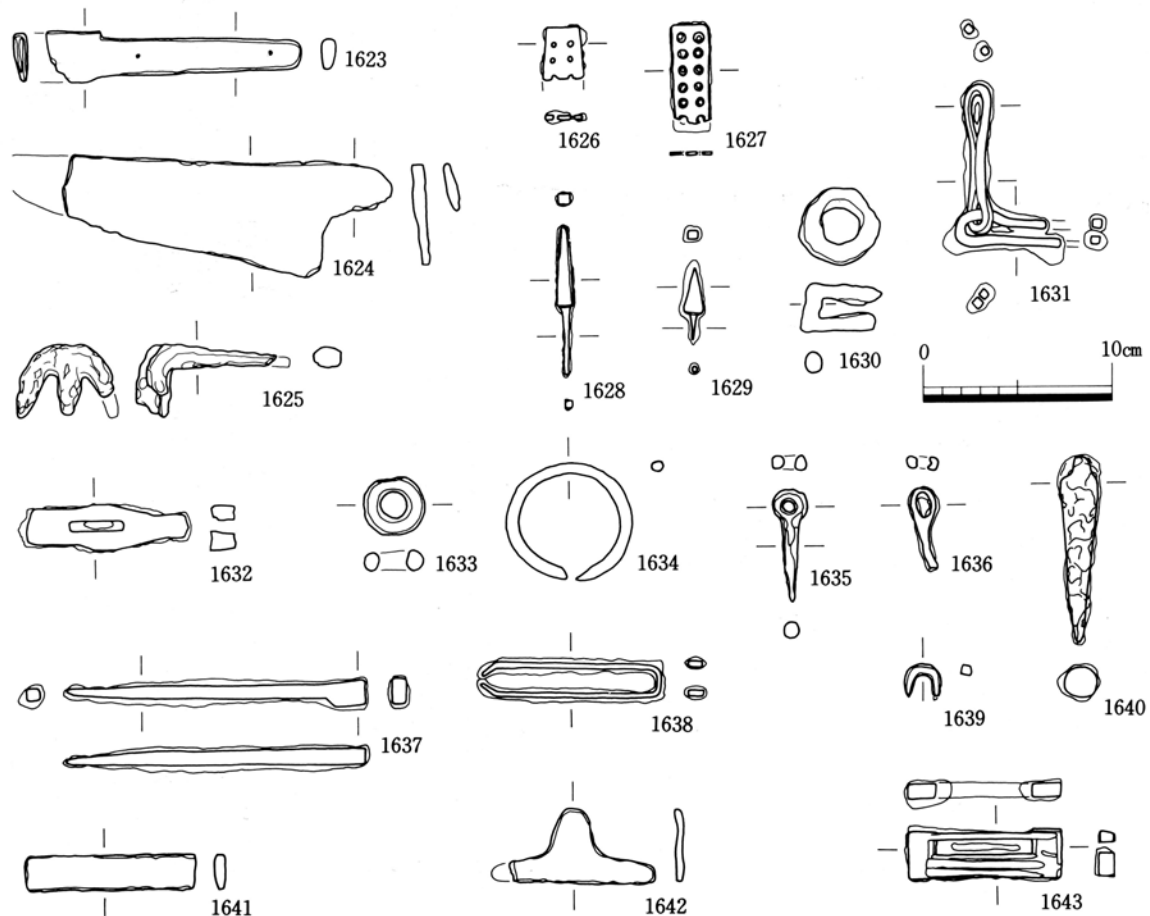
第182図 遺物実測図 石製品(2)

V 鉄製品 (第183図 1623~1643)

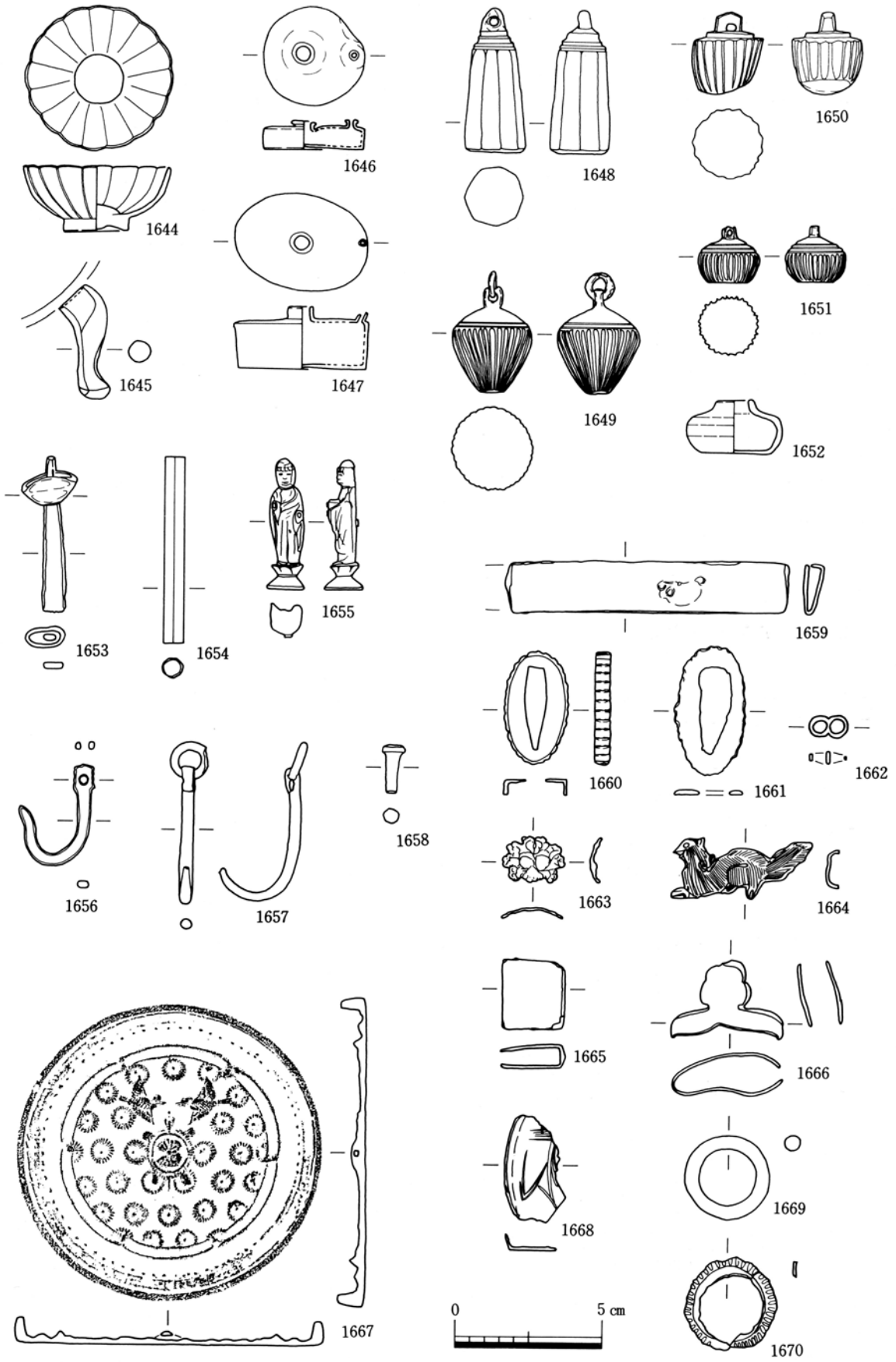
金属製品は材質によって鉄、銅、鉛等に区分される。ここでは材質毎に記述を進めるが、異なる材質を用いて一つの製品を作成したもの(木と鉄または銅と鉄で作られた刃物等)は主となる材質に含めている。

鉄製品には釘、鏝、鎌、留め金具、刃物類、小札、火打ち金等があり、用途不明の棒状製品や板状製品も多数存在する。出土点数は釘が最も多く、刃物類がこれに次ぐが、大形の製品や鍋・釜類は鋳直されたためかほとんど認められない。調査区別に出土状況を見ると、91A区等建物遺構が検出された地点で釘の出土量が多く、61C・61D区で工具類が多量の鉄滓と共によく見られる。

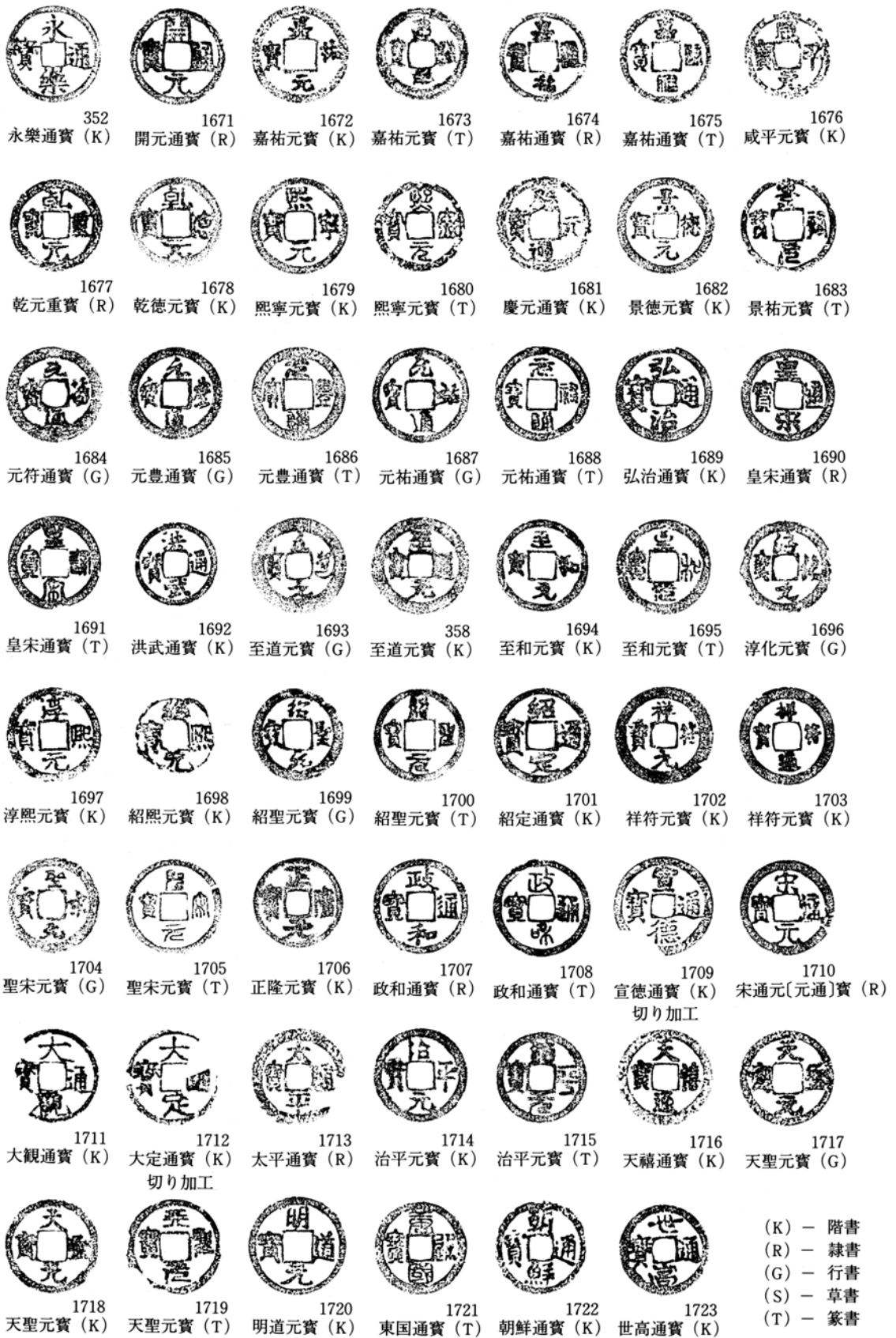
1623は刀の柄部と思われ刃部の断面を観察すると数回折り返して鍛造されたものと思われる。1624は包丁で一部欠損している。1626・1627は小札で孔が2列に並んで12個以上穿たれている。これよりも一回り規模の大きいものも存在する。1628・1629は有茎鎌で刃部は断面が方形である。1630・1631は用途不明であるが、馬具の可能性もある。1625は小形の三股製品、1632は金槌の頭部と考えられ、この他に工具としては図示できなかったが錐も存在する。1633・1634はリング状の製品、1635・1636は頭部がリング状になった留め金具である。1638は毛抜、1639は小形の鏝、1641は鉄製の刃物の柄部である。1642は火打ち金で逆T字状の形態を呈する無孔のもので、この他に有孔のもの、弧を描いて山形になるものがある。1643は方形の孔が開いた直方体で、X線観察の結果、内部は複雑な構造を呈しており、錠前の可能性がある。(鈴木正貴)



第183図 遺物実測図 鉄製品



第184図 遺物実測図 銅製品(1)



第185図 遺物実測図 銅製品(2)

W 銅製品 (第184~186図 1644~1729)

銅製品には銭貨、分銅、水滴、刃物の柄部、飾金具、鏡等がある。この中で銭貨が圧倒的に多く出土している。

1644は菊花状の鏡で見込み部が別材で高く盛り上がっている。建具の飾金具の可能性も考えられる。1645は猫脚形の脚部のみであるが、おそらく本体は香炉または火舎と考えられる。62G区から出土している。水滴 (1646・1647) は比較的偏平な円柱状の容器で、上面のほぼ中央に直立する口縁が、側面に接近したところに注口がある。1652は小形の壺である。

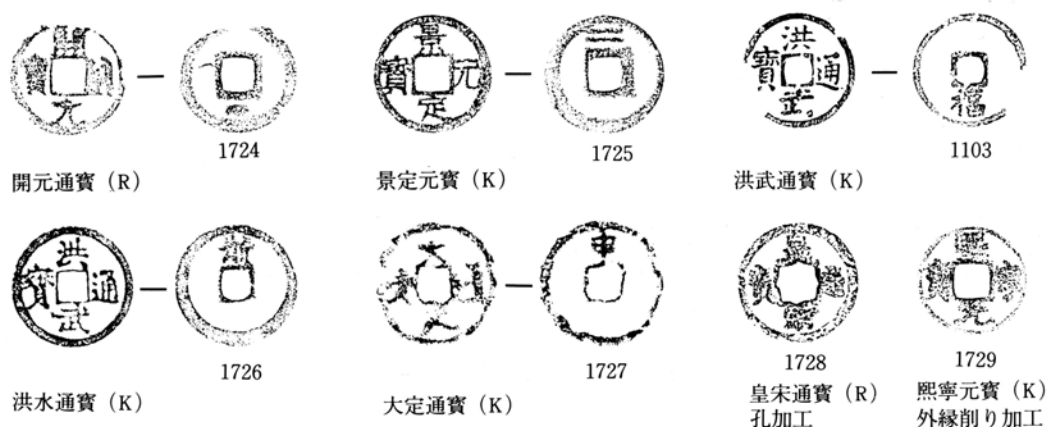
分銅は形態から以下のように区分できる。Ⅰ類は多角柱状の本体につまみが付くもの (1648)、Ⅱ類は菊花状にノミ彫りされた本体につまみが付くもので、比較的先端が尖りなで肩のもの (Ⅱ a類: 1649)、肩に段を持ち下端部が斜めに切断されたもの (Ⅱ b類: 1650)、肩に段が2段あり比較的偏平なもの (Ⅱ c類: 1651) に細分される。

1653は灯火台と思われ受け皿部が押圧されていた。1654は円筒状の製品で表面が金色に発色しているが、詳細な素材は未分析である。1655は小形の仏像で背面に突起が存在しており、別材に取り付けていた可能性が考えられる。飾金具は小形の製品が大半で、裏面に突起が付着している。植物紋 (1663)、動物紋 (1664) がレリーフされたものが多い。

銅製の刃物柄部は無紋のものや草花紋の装飾が施されるもの (1659) がある。全て鉄製の刃部が本体となっている。1660は刀のハバキで、側面が花形に加工されている。1661も同様の製品か?。1656・1657は掛金具で、1656は頭部に孔が開けられ、1657は頭部を折り曲げてリング状製品を付けている。1658は小形の鉞である。

1667は91A区から出土した菊花双雀鏡である。鈕は亀形に作られ、一重の圏線で外区と内区に区分されている。内区は全面に菊花紋が散りばめられ2羽の雀が表現されている。外区は多数の珠紋が帯状に施される。1668は薄手の銅板片で、紋様が施されている。鏡の可能性も考えられる。

銭貨は全体で約1000枚出土しているが、大半は中国銭であり僅かに朝鮮銭、琉球銭がある。ほとんどは裏面が無紋であるが一部に背紋があるものも見られる。調査区別の銭貨出土量を検討すると五条橋地区で多量に認められる傾向があり、旧五条川NR4001と銭貨の出土との関係が注目される。また、銭貨の一部を鋭利に切り取った切り加工 (切銭) や、孔または外縁部を削って変形させた二次的な加工が施されたものもみられる。 (鈴木正貴)



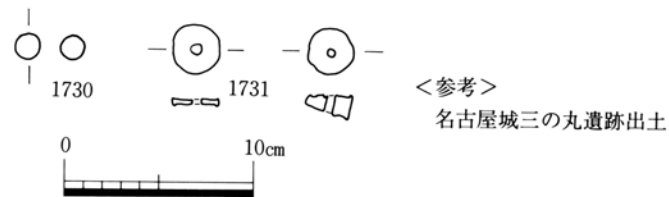
第186図 遺物実測図 銅製品(3)

X 鉛製品 (第187図 1730~1731)

鉛製品には鉄砲玉(1730)、銭貨の模造品または鋳型(1731)がある。出土量は極めて少ない。1731は銭貨に類似した形態である。なお、名古屋城三の丸遺跡からも類似の鉛製品がみられ、これは文字は判読できないが、銭の鋳型であった可能性も考えられる製品である(図参考)。

Y 自然遺体

自然遺体はほとんどの調査区から出土したが、90D区からは骨類が多量に出土し、63C区では多量の貝類が認められた(別表に一覧を掲載した)。このうち、骨類の中には人為的に傷を設けたものや一部分の骨が集中してしている場合も存在する。(鈴木正貴)



第187図 遺物実測図 鉛製品

第25表 主要遺構出土自然遺体一覧表 (NR4001を除く)

遺構番号	種別	部位 1	部位 2	左右	個数	備考	登録番号
S D 4033	不明				10		61A-X b-012
S D 6068	不明				2		91A-X b-029
S K 6570	ウマ?	歯片			16		91A-X b-027
S X 7005	不明				1	焼けている?	89D-X b-001
S D 7023	ウマ?	歯片			10		89D-X b-002
S K 7029	イヌ	肩甲骨	近位端~中間	右	1		61C-X b-010
S K 7029	イノシシ	中足骨?	近位端?		3		61C-X b-013
S K 7029	イノシシ?	中足骨	V?	左	1	完形	61C-X b-014
S K 7029	シカ	腫骨	近位端~中間	左	1		61C-X b-012
S K 7029	シカ	舟状立方骨		右	1	ほぼ完形	61C-X b-009
S K 7029	シカ	距骨		右	1	ほぼ完形	61C-X b-011
S K 7029	ネコ	肩甲骨	中間~遠位端		1		61D-X b-010
S K 7029	ネコ?	大腿骨		左	1	ほぼ完形・幼獣?	61D-X b-001
S K 7029	不明				3		61C-X b-008
S K 7029	不明				19		61C-X b-015
S D 6001	イヌ	上腕骨	中間~遠位端	右	1		63C-X b-017
S D 6001	ウマ	中肢骨(手OR足)	遠位端		1		63C-X b-012
S D 6001	ウマ?	橈骨		右	1	完形	63C-X b-013
S D 6001	カメ	大腿骨			1	完形	63C-X b-009
S D 6001	サザエ?				1		89E-X s-001
S D 6001	シカ	中足骨	遠位端	左	2		63C-X b-015
S D 6001	シカ	中手骨	近位端~中間	右	1		63C-X b-016
S D 6001	シカ?	上腕骨	中間~遠位端	右	1		63C-X b-014
S D 6001	不明				8		63C-X b-018
S D 6001	不明				27		89E-X b-006
S D 6001	不明				2		63C-X b-008
S D 6001	不明				30		63C-X b-003

第V章 城下町期の遺構配置

第1節 区画の設定と分析の方法

A 分析の方法

城下町期の遺構は、複数の遺構が複雑に相互に関わり合いながら存在しており、区画（屋敷等）という形でまとめることが可能である。この区画を認識する主要な要素は、区画の境界を設定する溝であると思われる（第Ⅲ章第4節）。また、基本的に一屋敷に井戸を1基設けたと仮定するならば、井戸の配置も区画設定の状況を復元する重要な手がかりとなる。これらをもとに復元された各区画（遺構の集合体）を一つの遺構として検討し性格を把握することは、遺跡の構造を理解する上で必要不可欠な作業であろう。このような視点に立ち、本章ではまず①調査区別に遺構の変遷を考察し、②各時期の区画の認定を行い、③遺物の分析を含めた区画の性格の把握に努めることとした。

B 分析の手順

①遺構の変遷を検討するためには、まず出土遺物から推定された各遺構の時期（第Ⅲ章第1節）をもとに、時期別（共時存在）の遺構図を作成する必要がある。この際に、出土遺物量が少ない遺構については遺物による時期の決定に不安定な要素が大きすぎるため、周囲の遺構配置や時期を再検討した上で修正したことがある。

②区画の認定は、同時期に存在する平行して走る溝を中心に行った。但し、遺構残存状況が必ずしも良好でない場合があるため、井戸等の遺構配置から推測を重ねた場合がある。

③区画の性格は、区画の面積・形態・内部構造・出土遺物の特徴をもとに検討した。区画の面積は即ち区画施設の間隔の問題（第Ⅲ章第4節）であり、形態は平面プランが問題となる。こうした様々な要素を区画毎に比較してその特徴を抽出するのである。

C 区画の概要

今回の調査で検出された区画は、面積と平面プランで次のように区分できる。

区画Ⅰ類——区画の幅が10m～15mを測る平面プランが長方形となるもの。

区画Ⅰa類——区画施設として溝が確認されたもの。

区画Ⅰb類——区画施設が確認されず、井戸の配置等から推測されたもの。

区画Ⅱ類——区画の幅が30m前後を測る方形または長方形の平面プランを持つもの。

区画Ⅲ類——区画の幅が45m前後を測るほぼ方形の平面プランを持つもの。

区画Ⅳ類——区画施設が非直線的な形態を為し、規格的な平面プランを持たないもの。

区画Ⅹ類——平行に走る区画施設が認定できず、調査区の範囲内では区画の認識のできないもの。

区画を以上のように分類して、以下に個別の区画の内容を記述したい。

（鈴木正貴）

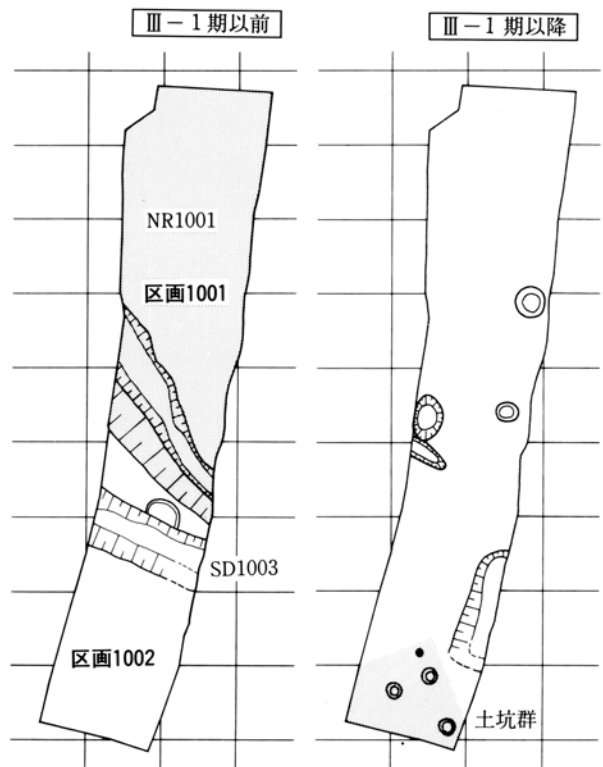
第2節 各調査区の遺構変遷 — 各区画の概要 —

A 89A区 (第188図)

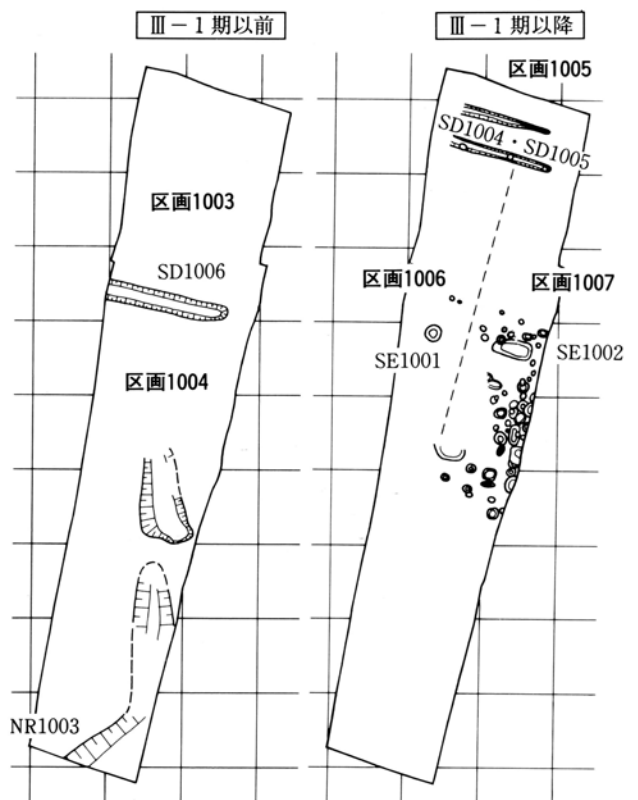
89A区では城下町期Ⅲ期の遺構が主体となり、Ⅲ-1期以前とⅢ-1期以降の2時期に遺構変遷が把握できる。Ⅲ-1期以前はNR1001が存在し、北半部は居住域として機能していない。NR1001に平行する形でSD1003が設定されており、この段階の区画施設として認定できる (SD1003以北を区画1001、以南を区画1002と規定する)。一方、Ⅲ-1期以降ではNR1001が埋立・整地され (整地層Ⅱ類) て居住可能範囲が拡大したが、明確な区画施設が存在しなくなる。89A区南端部に土坑の配列がみられ建物の存在が想定されるが、これ以外に井戸や建物が認められず、区画の認定が困難である (区画X類)。

区画1001 SD1003の北部の区画で、沼沢地等と思われ、居住域ではない。

区画1002 SD1003の南部の区画で、SD1003に対応する区画施設が検出されず、区画の規模は不明である。SD1003が溝Ⅲ類であることから、ある程度面積が広い区画が想定できるが、内部施設等も不明である。



第188図 遺構変遷図(1) 89A区 (S=1:500)



第189図 遺構変遷図(2) 63R区 (S=1:500)

B 63R区（第189図）

63R区は城下町期Ⅲ期が主体となる。この調査区の時期区分はⅢ－1期以前とⅢ－1期以降の2時期が設定できる。Ⅲ－1期以前はNR1003等が存在し、南半部は居住域として機能していない。区画施設としてSD1006が存在し、この溝を境に区画1003（北部）と区画1004（南部）が設定できる。Ⅲ－1期以降ではNR1002、NR1003、SD1006が埋積され、溝、井戸、土坑群が展開する。2条の溝V類で形成された道路状遺構によって南北に空間が区分されており、その溝に平行する形で井戸が2基並んでいる。この遺構配置からSD1004の北部を区画1005、SE1001を中心としたSD1005の南部の西半部を区画1006、SE1002を中心とした東半部を区画1007として考えたい。なお、区画1006と区画1007の区分には異論があることも付記しておく。

区画1003 城下町期Ⅲ－1期以前の区画で、区画内構造は不明である。区画1002と同一の区画である可能性がある（SD1003とSD1006の間隔は約35m）が、確定的ではない。

区画1004 城下町期Ⅲ－1期以前の区画で、NR1003があるため、居住域とは思われない。

区画1005 城下町期Ⅲ－1期以降の区画で、区画内構造は不明である。

区画1006 城下町期Ⅲ－1期以降の区画で、区画1007との境界施設は検出できなかった。SE1001を中心とした遺構展開が想定されるが、確定的ではない。

区画1007 城下町期Ⅲ－1期以降の区画で、区画内には多数の土坑と井戸が存在する。想像を逞しくしてSD1005と土坑群の間に建物の存在を仮定すれば、北から道路・建物・井戸・土坑(廃棄施設)といった構造を持つことになる。

C 本丸地区

本丸地区（62A区・62N区）は、調査区が狭小である上に遺構は溝状遺構のみが検出された状況で、区画の配置等を検討するには至らない地点である。出土遺物の時期別分布を検討すると、城下町期Ⅰ期からⅡ期にかけての遺物出土量が比較的多いことが判明している。播鉢の口縁部形態別の分析で言えば、2類から5類のものが多いためである。これらから城下町期Ⅰ期からある程度この地区に遺構の存在が予想されよう。また、Ⅲ期の遺物が比較的小さい理由については、この地点はⅢ期にはほぼ確実に本丸に相当したため日常生活空間としての機能が薄かったことが考えられる。こうした現象は、この地区の瓦の出土量が他の地区に比べ多量である点にも示されている。

D 90A区（第190図）

90A区は城下町期Ⅰ期からⅢ期まで連続と継続していたと考えられるが、特に城下町期Ⅰ期とⅡ期が中心となっている。この調査区の時期区分は城下町期Ⅰ期～Ⅱ期とⅢ期の2時期区分が可能で、前者はⅠ期とⅡ期に細分できる。城下町期Ⅰ期はSD3004が存在し、調査区を2区画（北部を区画3001、南部を区画3002）に分けている。城下町期Ⅱ期も同様に区画施設SD3004が掘り返されるが、Ⅰ期とは若干内部構造が異なっている。城下町期Ⅲ期ではSD3004が埋積され、新たに区画施設SD3008が設定された。従って、この溝の北部を区画3003、南部を区画3004と分けて考えた。

区画3001 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期まで機能した区画で、北端の区画施設は調査区外にあって、不明である。区画内の遺構として、SE3001とピットが存在している。区画の規模は南北方向で10m以上

を測り、かつ調査区の北端部でSE3001があることから、比較的大きな区画であったと想像できる。

区画3002 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期まで存在した区画である。南端はおそらく現在の道路部分ではないかと思われ、この仮定を用いれば区画の規模は南北方向で45m前後を測り、区画Ⅲ類に比定できる。城下町期Ⅰ期の区画内の遺構としてSE3002、Ⅱ期の遺構としてSE3003がある。また時期不明のピット群が井戸の北部に展開し、この部分に掘立柱建物が想定できる。

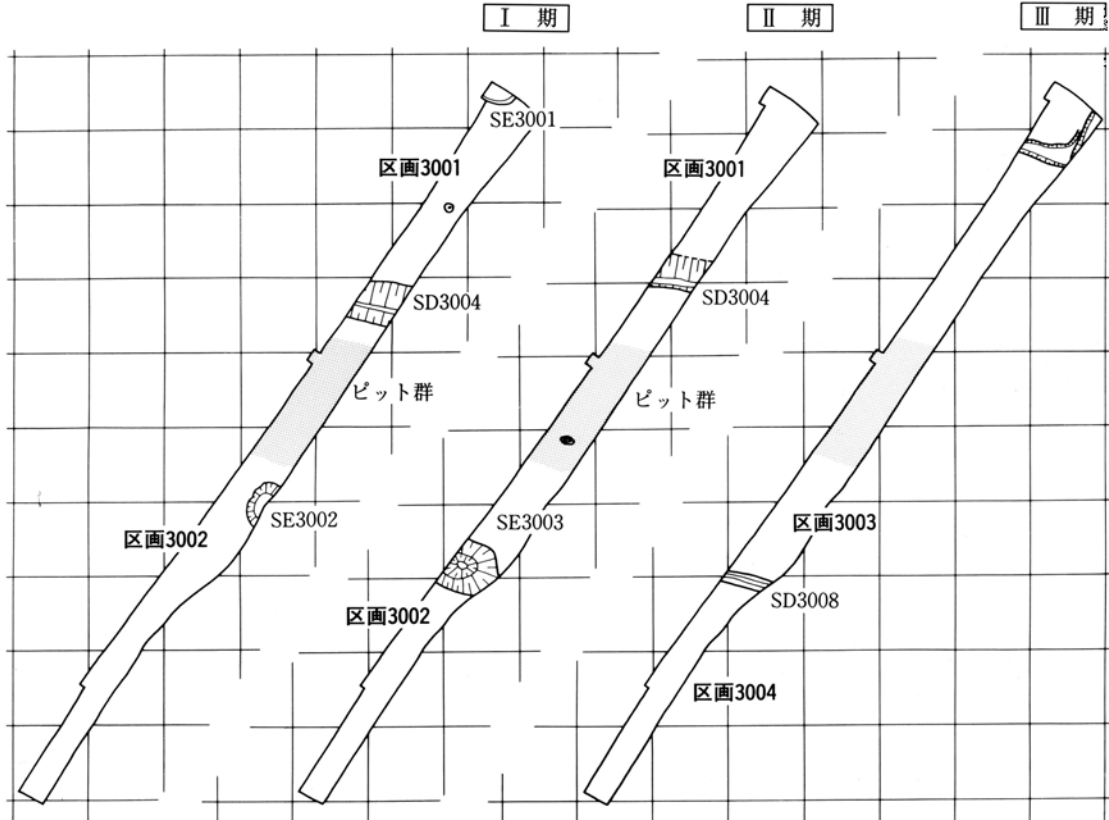
区画3003 城下町期Ⅲ期に機能した区画で、区画の規模は大きいが、区画内施設は不明な点が多い。該期の遺物の出土量が少ないことから、日常生活空間として機能していなかった可能性がある。

区画3004 城下町期Ⅲ期に機能した区画で、区画の規模・区画内構造は共に不明である。

E 62G区・62M区・63A区・93B区 (第191・192図)

田中町地区は城下町期Ⅰ期からⅢ期まで続いているが、中心となる時期はⅠ期とⅡ期である。この地区の時期区分は90A区と同様、城下町期Ⅰ期～Ⅱ期とⅢ期の2時期区分が可能である。城下町期Ⅰ期～Ⅱ期は区画施設としてSD3015とSD3021が存在し、SD3015以北を区画3005、SD3015とSD3021に囲まれる空間を区画3006、SD3021以南を区画3007とする。城下町期Ⅲ期になると、これらの区画施設が廃絶されたと考えられ、区画施設は特に遺存していない。

区画3005 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期に機能した区画であるが、区画内構造はSD3014による破壊のため不明である。



第190図 遺構変遷図(3) 90A区 (S=1:500)

区画3006 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期に機能した区画である。SD3015のすぐ南にSD3016とSK3029があり、土師器皿が多量に出土した。この他に区画内構造を推定する資料は存在しない。

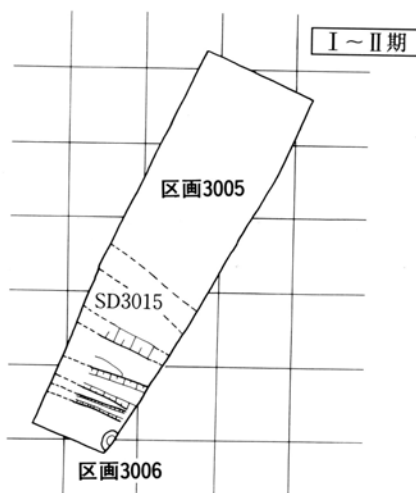
区画3007 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期に機能した区画であるが、SD3021以南は調査区外のため、構造等は全く不明である。

この調査区の検討に当たっては、既に報告された調査区についての状況を加え、地籍図等による地理学的な検討を参考にする必要があるのである。第192図は明治17年作成の『地籍図字全図』をもとにして、これまでの発掘調査区をあてはめて編集したものである。これを参考にしてこの地区の区画構成を考察してみる。

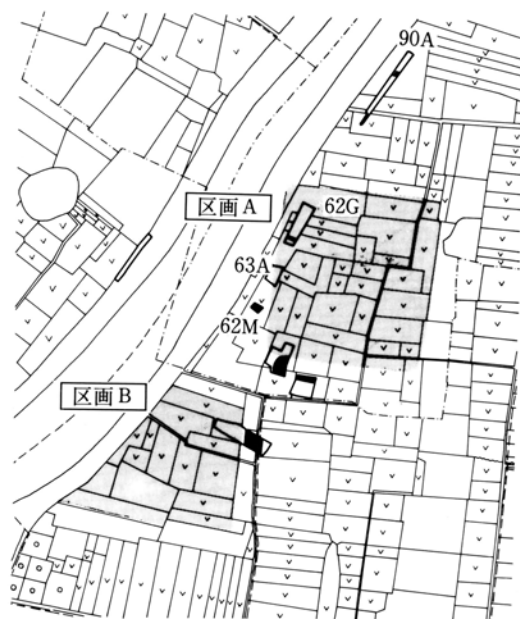
この地区の発掘調査による最大の成果は、幅が10mを越える規模の溝Ⅱ類が2ヶ所で検出されたこと（大和製本地点SD01⁽¹⁾とふれあい広場地点SD01⁽²⁾）である。この溝Ⅱ類は、地籍図と重ね合わせると、大和製本地点SD01は南北に細長い畑に対応しており、ふれあい広場地点SD01は若干位置がずれているものの東西に伸びる畑列に対応している。このことをもとに、溝Ⅱ類で囲まれた空間を復元すると区画Aと区画Bが想定され、今回の調査のうち62G区・62M区・63A区・93B区は区画Aの内部に属していることとなる。この結果、62M区のSD3021は、ふれあい広場地点SD01に対応する区画Aの区画施設の一部であった可能性も考えられよう。またSD3015は区画Aの区画内区画の施設であるといえる。

註 (1) 梅本博志編(1987)『清洲城下町遺跡Ⅰ』清洲町教育委員会

(2) 高橋信明(1988)「清洲城下町遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報3 昭和61年度』愛知県教育委員会・
(財)愛知県埋蔵文化財センター



第191図 遺構変遷図(4) 62G区
(S=1:500)



第192図 田中町地区遺構配置図
(S=1:5000)

F 63B区・61A区（第193図）

63B区・61A区は城下町期Ⅰ期からⅢ期まで継続しており、遺構展開は3期（Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）に区分が可能である。城下町期Ⅰ期では区画施設SD4031・SD4033・SA4001が存在しており、SD4031以北を区画4001、SD4033とSA4001に囲まれた空間を区画4002、SA4001以南を区画4003と設定できる。城下町期Ⅱ期では区画施設としてSD4015が存在するが、他に顕著な区画施設は認定できない。SD4015はSA4001の直上に構築され、区画施設の建て替えと考えられる。従って、SD4015以南は区画4003のままとし、SD4015以北の広大な空間を区画4004としておく。城下町期Ⅲ期では更に区画施設が不明瞭となり、区画の認定が困難である。この時期には井戸2基（SE4001・SE4083）が存在している。

上記のように遺構変遷を考察したが、一方では、各時期の遺構の中で井戸の配置は3期を通じて変更が少ない点を捉えると区画の設定変更が本当にあったのかという疑問が生じる。つまり、城下町期Ⅱ期・Ⅲ期においても、SD4033・SD4015廃絶後に簡便な区画施設に作り替えた可能性も残されているのである。ここでは前者の考えを採用するが、後者の説も指摘しておきたい。

区画4001 城下町期Ⅰ期に存在した区画で、区画の幅は30m以上を測る。区画内施設として調査区北東端部に土坑と南端部にピット群（掘立柱建物？）がある。区画Ⅲ類と分類できる。

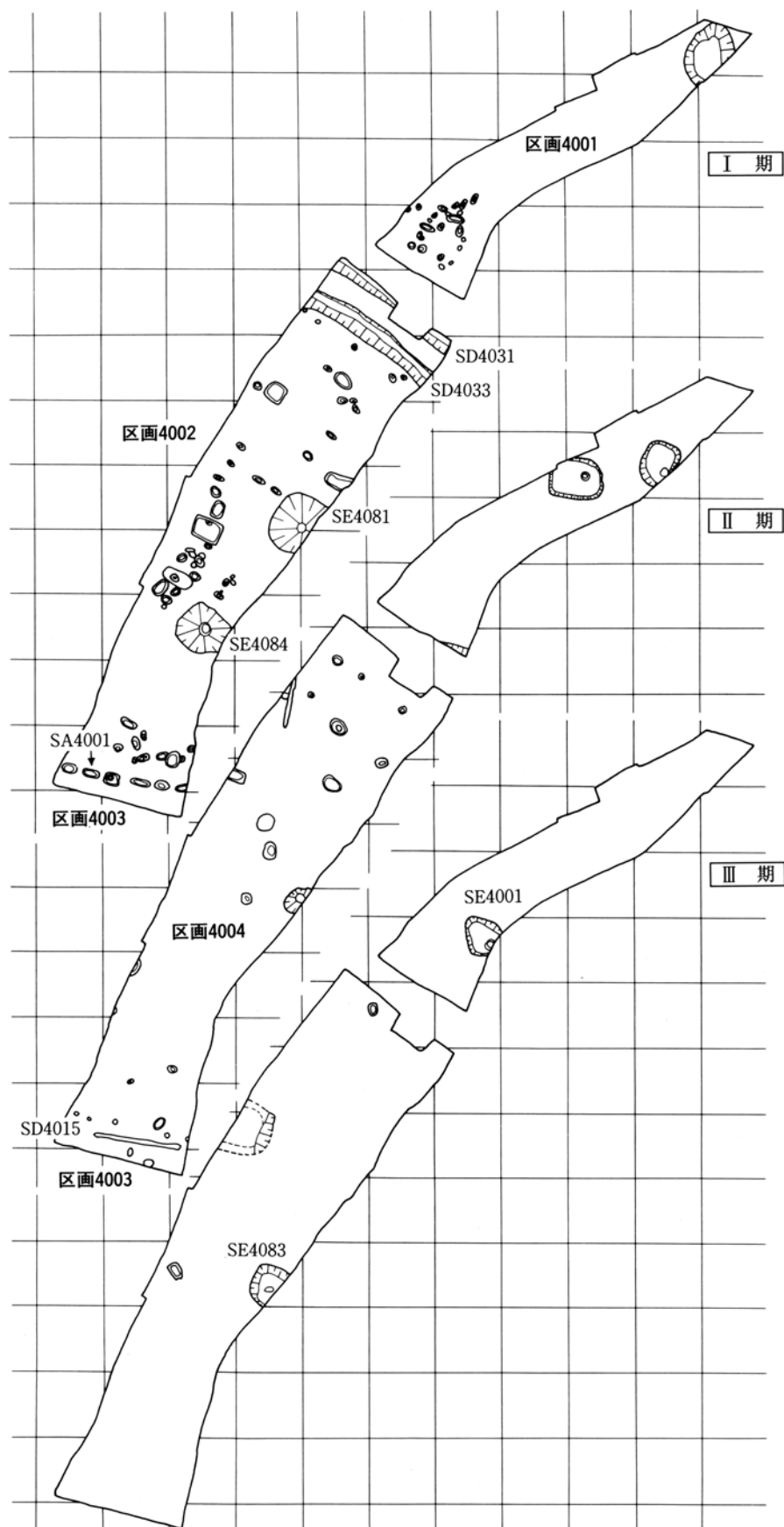
区画4002 城下町期Ⅰ期に存在した区画で、区画の幅は約30mを測る。区画内施設として中央部に井戸が2基（SE4081・SE4084）と土坑群（掘立柱建物？）がある。区画Ⅱ類。

区画4003 城下町期Ⅰ期～Ⅱ期に存在した区画であるが、区画の規模と構造は復元が困難である。なお、92E区ではこれに対応する区画施設は検出されていない。

区画4004 区画4001・区画4002を廃絶した後に設定された区画で、城下町期Ⅱ期に存在した。区画内施設として井戸3基（SE4078・SE4079・SE4082）とピット・土坑群が存在する。

G 93A区

93A区は城下町期Ⅰ期からⅢ期まで継続している。この調査区の遺構展開は3期（Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）に区分できるが、各時期の様相は不明瞭である。城下町期Ⅰ期では旧五条川NR4001が存在し、調査区全体が河川敷として機能していたと思われる。このため、区画施設や井戸等は存在せず、非居住域であったと推定される。城下町期Ⅱ期・Ⅲ期でも区画施設は認定できないが、63B区・61A区と同様、簡便な区画施設の存在は予想されよう。両時期とも遺構の中心は土坑であり、Ⅲ期には井戸SE4014が存在している。



第193図 遺構変遷図(5) 63B区・61A区 (S=1:500)

H 五条橋地区（90B区以南：第194図）

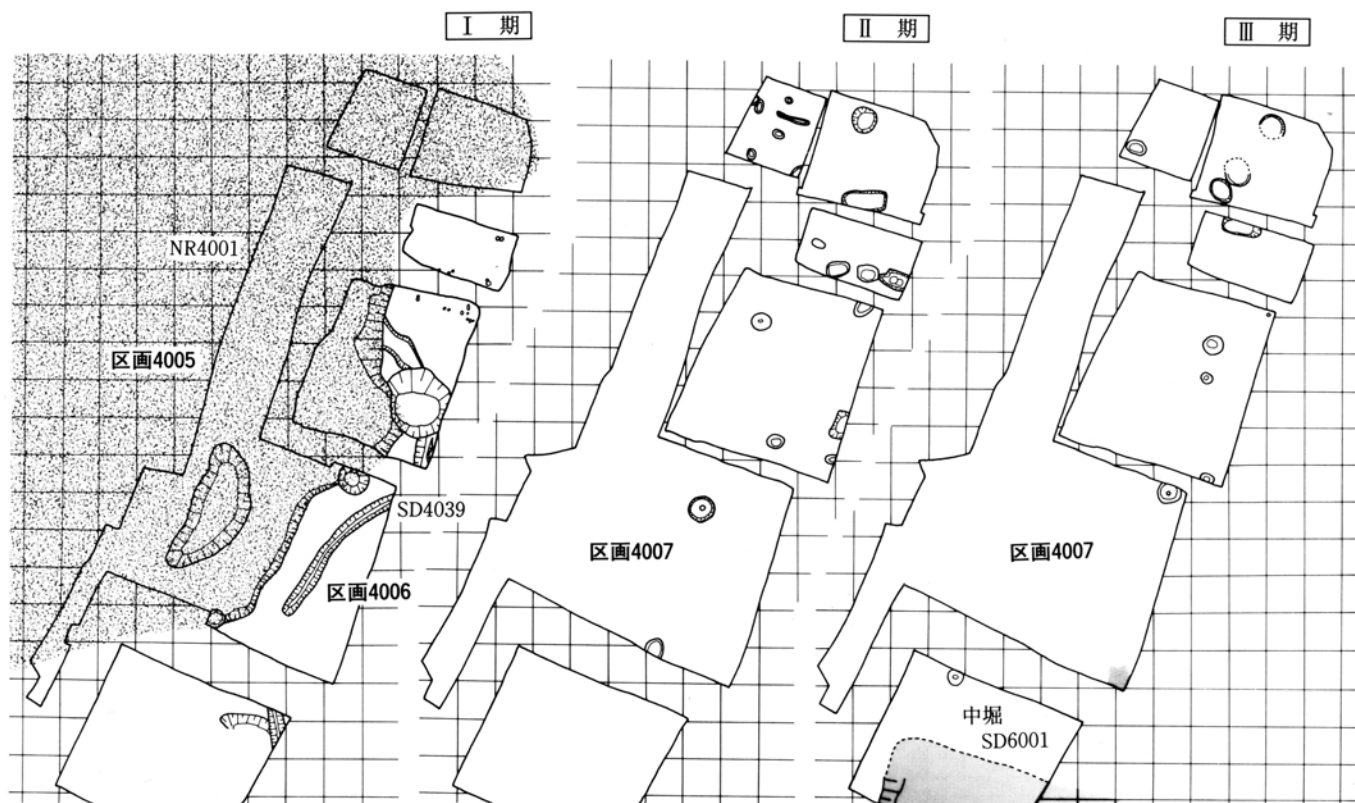
92D区・90B区・92E区以南の五条橋地区を一括して、遺構変遷と配置を考察する。この地区は城下町期Ⅰ期からⅢ期まで継続して機能しており、遺構展開は3期（Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）に区分できる。城下町期Ⅰ期では旧五条川NR4001・区画施設SD4039が存在し、ほぼ調査区全体が河川・河川敷に相当すると思われる。SD4039以西を区画4005・以东を区画4006として設定する。城下町期Ⅱ期は旧五条川NR4001がほとんど埋積した段階で、遺構には土坑や井戸等が存在する。ただ、明確な区画施設は認定されず、区画設定には至らなかった。城下町期Ⅲ期では区画施設として中堀SD6001が存在するものの、これ以外に区画施設は認められず、状況は不明である。遺構の中心は土坑と井戸であり、SD6001以北を区画4007と規定する。

遺物の時期別出土量を検討すると、城下町期Ⅰ期を最盛期とし、城下町期Ⅱ期からⅢ期にかけて減少する傾向が窺える。遺物から見ると城下町期Ⅲ期には日常的な生活の痕跡が希薄であるといえよう。

区画4005 城下町期Ⅰ期に存在した広大な区画で、内部の大半は旧五条川NR4001である。この区画からは宗教的色彩を帯びた遺物が多量に出土し、特異な空間として認識できる。

区画4006 城下町期Ⅰ期に機能した区画で、旧五条川NR4001の空間を区分するSD4039以东を示す。流路に合わせた不定形な区画平面プランであり、構造等は詳らかではない。

区画4007 城下町期Ⅱ期～Ⅲ期に存在した非常に広大な区画であるが、井戸等の配置からみて小規模な区画の集合体であった可能性も残されている。



第194図 遺構変遷図(6) 五条橋地区 (S=1:1000)

Ⅰ 本町地区 (第195・196図)

本町地区の調査区(89E区・61B区・91A区・89B区・89C区)は相互に接続しているため、これらを一括して遺構変遷を考察する。この地区では城下町期Ⅰ期からⅢ期まで連続して遺構が展開されていた。遺構変遷は大きく2期(Ⅰ-1期~Ⅱ-1期・Ⅱ-2期~Ⅲ期)に区分して考えられ、後者は更に2段階(Ⅱ-2期・Ⅲ期)に細分できる。

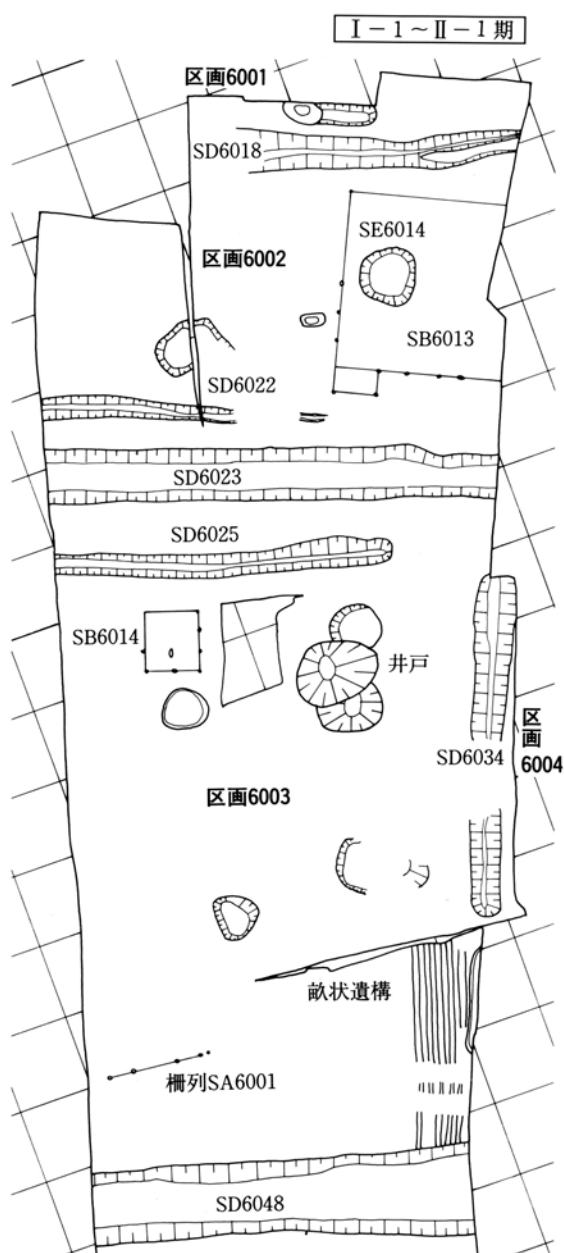
城下町期Ⅰ-1期~Ⅱ-1期では、区画施設SD6018・SD6023・SD6034・SD6048・SD6068等を中心に大きく6区画に分割されていた。溝の規模や方位、区画の規模などからみてこの時期では規格性の高い空間構成を形成していたと言えよう。SD6018以北を区画6001、SD6018とSD6023に挟まれた空間を区画6002、SD6023とSD6034とSD6048に囲まれた部分を区画6003、SD6034以东を区画6004、SD6048とSD6068に挟まれた空間を区画6005、そしてSD6068以南を区画6006とする。

城下町期Ⅱ-2期以降になると、前述の区画施設が全て廃絶され、新たな空間構成を創出している。この時期の遺構は井戸・礎石建物・土坑等があり、明確な区画施設は検出できなかった。ただし、井戸が南北に一列に配置されていることから、井戸1基に1区画が設定されたと仮定すれば、この地区には細長い長方形の区画が複数並んだ短冊型地割が展開していたと推論できる。この推論をもとにして、区画施設を持たない推定上の区画(範囲と規模を特定し得ない)を仮設定する(区画6007~区画6025)。

区画6001 城下町期Ⅰ-1期~Ⅱ-1期に存在した空間であるが、中堀SD6001によって破壊され詳細は不明である。区画4006と同一の空間か。

区画6002 城下町期Ⅰ-1期~Ⅱ-1期に存在した幅約20mを測る区画である。区画内施設としては調査区東寄りに掘立柱建物SB6013、SB6013内に位置する井戸SE6014、溝や土坑等がある。比較的規模の大きな建物が区画の半分を占め、その西部の空間に土坑とピット群(建物か?)が展開している。SD6023に接近して並走する溝SD6022とSD6023の間の空間は、道路か柵または築地状の施設の存在が予想される。

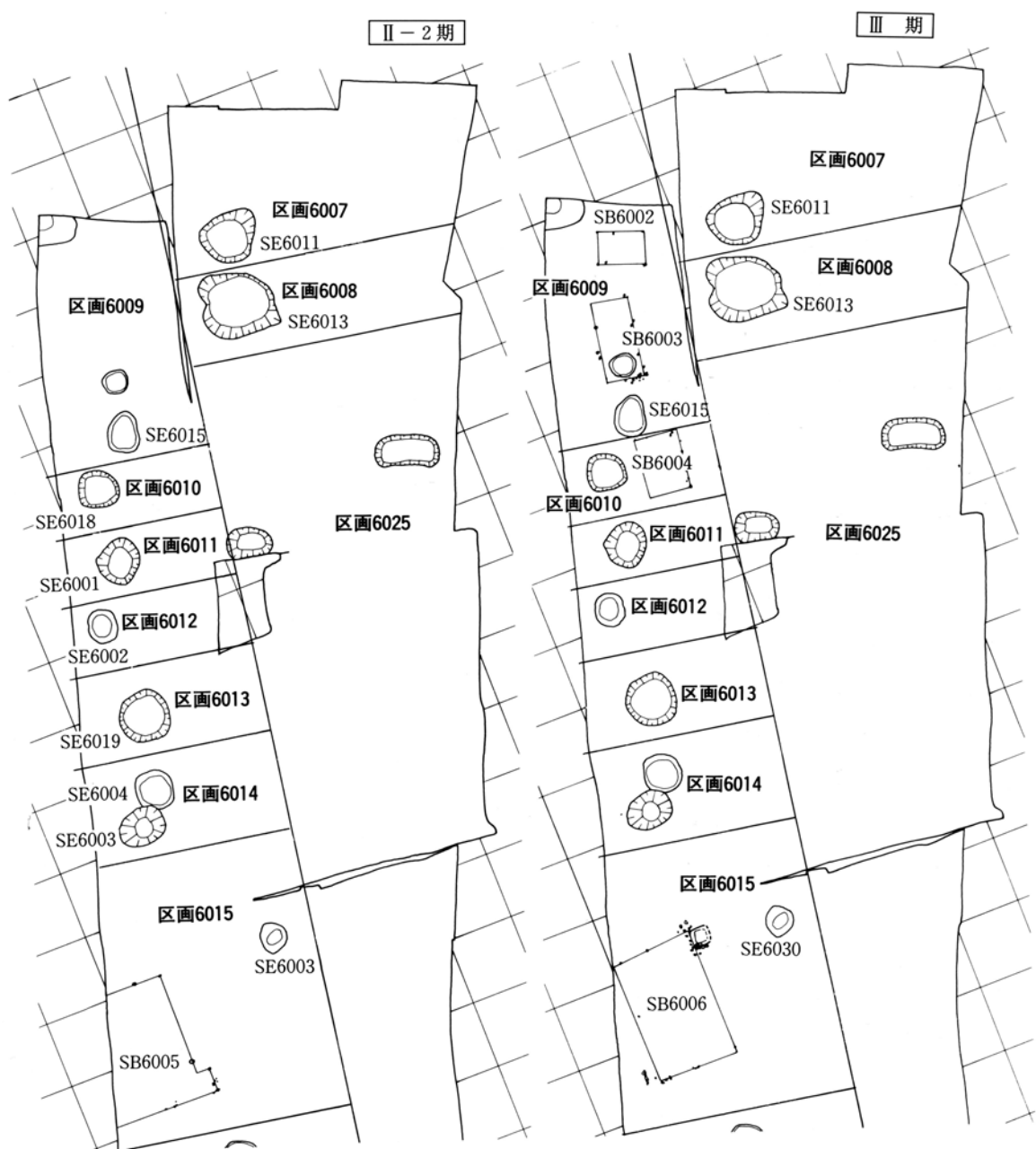
区画6003 城下町期Ⅰ-1期~Ⅱ-1期に存在した幅約45mを測る区画で、おそらく平面プランは方形を呈していたと思われる。区画内施設は



掘立柱建物SB6014、礎石柵列SA6001、井戸、畝状遺構がある。SB6014は小規模で小屋的存在と考えられ、主屋は検出できなかった。SD6023の付近にSD6025があり、途中で収束している。この部分が出入口となるかもしれない。井戸は区画の北東隅に何度か掘削され、畝状遺構（畑？）は南東隅に展開している。

区画6004 城下町期Ⅰ-Ⅰ期～Ⅱ-Ⅰ期に存在した区画であるが、大半は調査区外で詳細は不明。

区画6005 城下町期Ⅰ-Ⅰ期～Ⅱ-Ⅰ期に機能した幅約45mを測る区画で、おそらく平面プランは方形を呈していたと思われる。区画内施設は掘立柱建物SB6015、井戸SE6036、土坑等がある。SB6015以外にも建物は存在したと思われるが、検出できなかった。また、南東部にはコの字に屈曲したSD6065が存在し、区画6005内を区切る特異な空間が設定されている。



第195図 遺構変遷図(7) 本町地区北半部 (S=1:500)

区画6006 城下町期Ⅰ-1期～Ⅱ-1期に存在した区画で南端部の区画施設は遺存しなかった。幅40mを超える規模を持ち、区画内施設は土坑、溝、掘立柱柵列等がある。建物は検出できなかった。柵列SA6004とSD6071は区画施設SD6068を補強したものと考えられ、柵列SA6003は区画6006の西限を示すか区画内区画を示すものと言える。区画6003・区画6005・区画6006は同様の規模(規格)で設定されており、同一ランクの居住域と考えられる。

区画6007 SE6011を中心とした空間を区画6007と設定する。この区画はSE6011から東へ東西方向に長い空間が想定され、井戸以外の区画内施設は詳らかではない。城下町期Ⅱ-2期以降である。

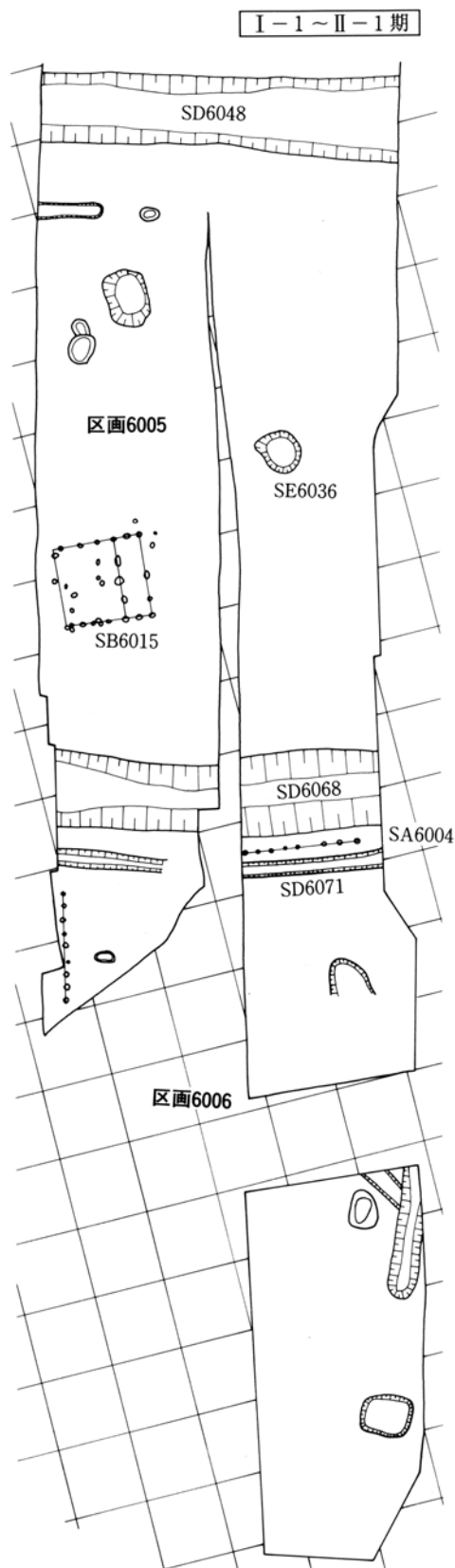
区画6008 SE6013を中心に区画6008を設定する。この区画もSE6013から東へ東西方向に長い空間が想定され、井戸以外の区画内施設は詳らかではない。時期は城下町期Ⅱ-2期以降である。

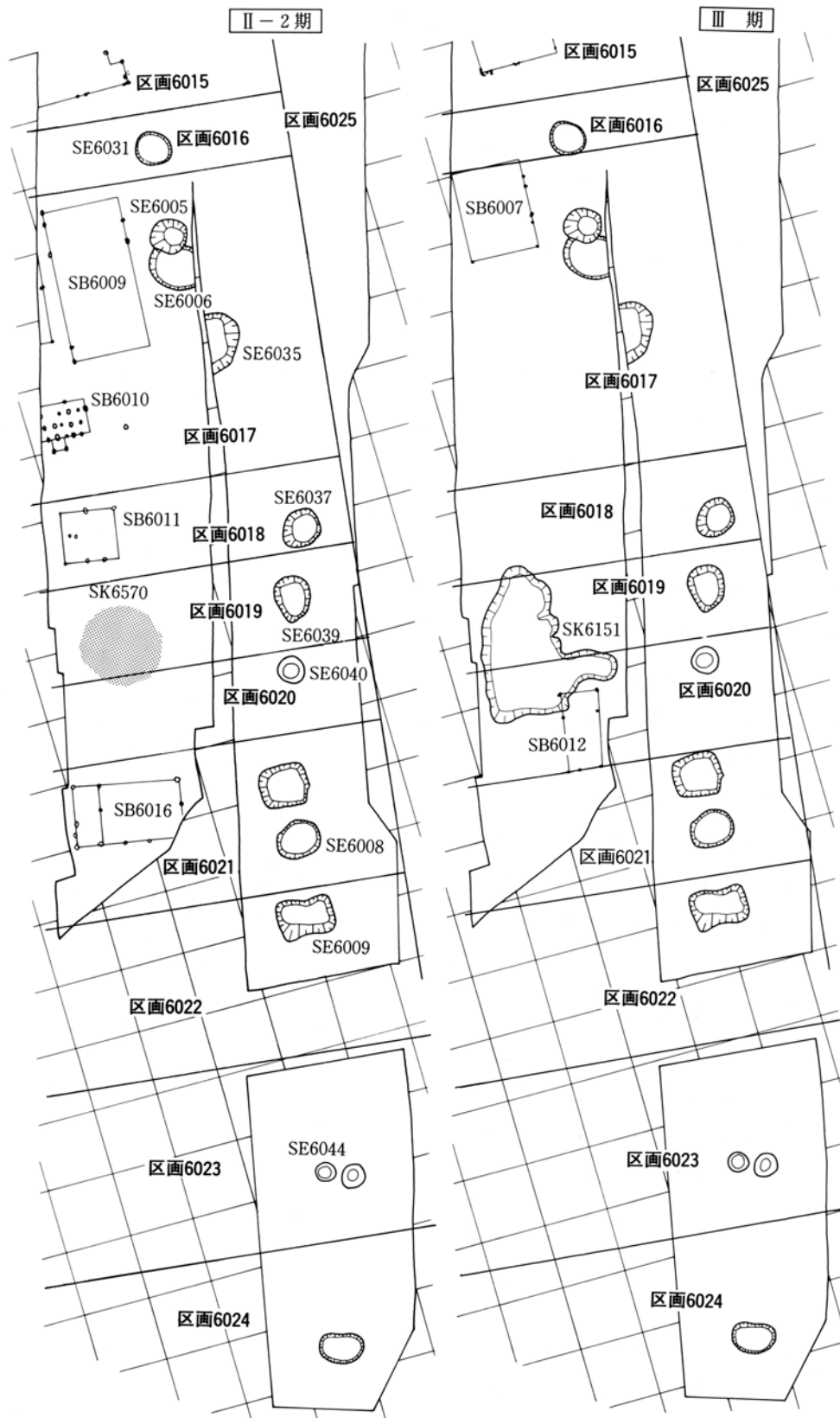
区画6009 SE6015を中心に北東に展開した空間を区画6009と定義する。この区画は城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期に属しており2小期に細分できる。城下町期Ⅱ-2期では建物等は検出されず、区画内構造は不明である。城下町期Ⅲ期では、井戸SE6015の他に礎石建物2基(SB6002・SB6003)があるが、後に礎石建物SB6001に建て替えられたものと思われる。南北方向に長い区画か一辺が20m程度の方形の区画が想定されよう。

区画6010 SE6018を中心とした空間を区画6010とする。この区画も城下町期Ⅱ-2期とⅢ期の2小期に細分できる。城下町期Ⅱ-2期ではSE6018のみが確認され、城下町期Ⅲ期では井戸の他に礎石建物が存在している。東西方向に伸びる幅5m前後の細長い区画が想定される。

区画6011 SE6001を中心に、おそらく幅5m前後の東西方向に細長い区画を区画6011とする。この区画は城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期に存在したと思われ、SE6001の東西に散在する石群が建物となる可能性がある。

区画6012 SE6002を中心に展開するおそらく幅5m前後の東西方向に細長い区画を区画6012とする。城下





第196図 遺構変遷図(8) 本町地区南半部 (S=1:500)

町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在したこの区画6012の内部構造は、SE6002の東に石群（礎石建物）と土坑が存在している。詳細は不明。

区画6013 SE6019を中心に存在する幅5m前後の東西方向に細長い区画を区画6013とする。この区画は城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在している。区画6013の内部構造は、井戸周辺に石群や土坑が散在しており、礎石建物の存在が想定される。

区画6014 SE6003・SE6004を中心に展開したと想定される区画を区画6014とする。この区画は城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在しており、井戸の切り合い関係から更に2小期に区分できる。区画6009から区画6014までの部分は、井戸が南北方向に配列していることから、東西方向に細長い区画が並ぶ短冊型地割を想定したが、区画6014よりも南ではこうした井戸の配置が途絶えることから異なるパターンの区画構成を成していたことが想定される。ここでは区画6014は幅5m前後の東西方向に細長い区画と仮定したい。区画6014の内部構造は、井戸周辺に石群や土坑が展開するのみである。

区画6015 井戸SE6030と礎石建物SB6005またはSB6006を中心に展開したと想定される区画を区画6015とする。区画6015の範囲は井戸の配列から見て、SE6030の南部からSE6031の北部までの幅約20mの空間を占めると判断されよう。この区画は城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に機能しており、2小期（Ⅱ－２期とⅢ期）に区分できる。城下町期Ⅱ－２期では礎石建物SB6005を主屋とし、主屋の東に井戸が存在する。城下町期Ⅲ期には建物がSB6006に建て替えられ、東北端部に石列が配置される。区画6010～区画6014とは明確に異なる空間が設定されていると言えよう。

区画6016 SE6031・SE6032を中心に展開した区画を区画6016とする。この区画は城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在しているが、時期の細分はできない。井戸以外の区画内構造も不明である。

区画6017 SE6005・SE6006と礎石建物を中心に展開した区画を区画6017と設定する。後述する区画6018の井戸とSE6005等との間隔が広い状況が区画6015と類似していることから、幅が20m以上の比較的広い空間を占める区画と思われる。城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に機能しており、建物の立て替え等から2小期（Ⅱ－２期とⅢ期）に区分できる。城下町期Ⅱ－２期では礎石建物A類のSB6008・SB6009・SB6010が存在し、その東部に井戸SE6006・SE6035が展開している。主屋はSB6009と考えられ、SB6010は区画の一角に建てられた祠？と思われる。城下町期Ⅲ期の段階は主屋がSB6007に建て替えられ、SB6010は消滅する。区画6015と同様、区画6017はこの時期の本町地区においては特異な区画であるといえよう。

区画6018 井戸SE6037を中心に展開した区画を区画6018とする。おそらく幅5m前後の東西方向に細長い区画であったと推定され、城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在している。城下町期Ⅱ－２期には礎石建物SB6011が建ち、井戸と建物のセットが確認できる。城下町期Ⅲ期では建物遺構は検出できなかった。

区画6019 井戸SE6039を中心に展開した区画を区画6019とするが、土坑SK6151・SK6570の存在から後述する区画6020と同一の区画であった可能性も考えられよう。井戸SE6039を中心に考慮した場合の区画6019は、おそらく幅5m前後の東西方向に細長い区画であったと推定され、城下町期Ⅱ－２期～Ⅲ期に存在している。

区画6020 井戸SE6040を中心に展開した区画を区画6020とするが、前述のSK6151・SK6570の存在から区画6019と同一であるとも考えられる。井戸SE6040を主体にした場合の区画6019は、おそら

く幅5m前後の東西方向に細長い区画であったと推定され、城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期に存在している。

区画6019と区画6020 区画6019と区画6020は両者を一体の区画として把握する考え方も存在する。この考え方に立って見た場合、東部に井戸が2基、西部に廃棄土坑等が展開するやや幅が広い区画が想定されよう。

区画6021 井戸SE6008を中心に展開した区画を区画6021とする。この区画以南では井戸の配列の間隔が約10mと広がっていることから、区画6021～区画6024はおそらく幅10m前後の東西方向に細長い区画であったと推定される。区画6021は城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期に存在しており、2小期(Ⅱ-2期・Ⅲ期)に区分できる。城下町期Ⅱ-2期では、井戸SE6008・礎石建物SB6016・規模の大きい土坑SK6593等がある。SB6016を主屋とし、その東に井戸が展開する構成である。城下町期Ⅲ期には、建物の建て替えが実施されたと思われるが、建物遺構は検出されなかった。なお、Ⅲ期になると区画6020と区画6021を分割する区画施設としてSD6016が存在している。

区画6022 井戸SE6009等を中心に展開した区画を区画6022とする。この区画もおそらく幅10m前後の東西方向に細長い区画であったと推定され、2小期に分けられる。城下町期Ⅱ-2期では井戸SE6043・土坑等があり、城下町期Ⅲ期では井戸が作り替えられSE6009が存在していたと考えられる。建物遺構は検出できず、空間構成の詳細な分析はできなかった。

区画6023 井戸SE6044・SE6045を中心に展開した幅10m前後の東西方向に細長い区画?を区画6023とする。この区画は城下町期Ⅲ期には確実に存在しているが、Ⅱ-2期に存在したかは定かではない。井戸を途中で作り替えられた点以外は、区画内構造とその変遷は不明である。

区画6024 SK6644を中心に展開した幅10m前後の東西方向に細長い区画?を区画6024と設定する。この区画は存続時期や構造は詳らかではないが、前後の区画のあり方からⅡ-2期～Ⅲ期に存在したものと推定できる。

区画6025 城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期に存在した、区画6008の南でありかつ区画6010～区画6017の東部に位置する空間を区画6025としておく。区画施設は特に検出されず、区画内部にも確実にこの時期に属する井戸等の遺構は検出されなかった。この区画(地点)の解釈については、広大な一つの区画になるのか、あるいは区画6010～区画6017のような細かい区画が存在するものの識別できないのかは判別が困難である。

J 89F区(第197図)

89F区(及び61C区北半部)は城下町期Ⅱ-2～Ⅲ期の遺構が主体となる。この調査区の時期区分は城下町期Ⅱ-2期・Ⅲ-1期・Ⅲ-2期の3期に区分できる。城下町期Ⅱ-2期は井戸等が存在するが、区画施設は存在しない。従って89F区全体を区画7001として記述を進める。城下町期Ⅲ-1期は区画施設SD7001が存在し、この溝を境界に区画7002(西部)と区画7003(東部)が設定できる。城下町期Ⅲ-2期ではSD7001を埋め立てた後に区画施設SD7002が構築され、この溝を境界に区画7004(北部)と区画7005(南部)が設定されている。この結果、89F区は比較的短期間のうちに区画構成の変更を2回実施していることになる。こうした状況は本町地区の遺構展開のあり方とは明確に異なるものである。

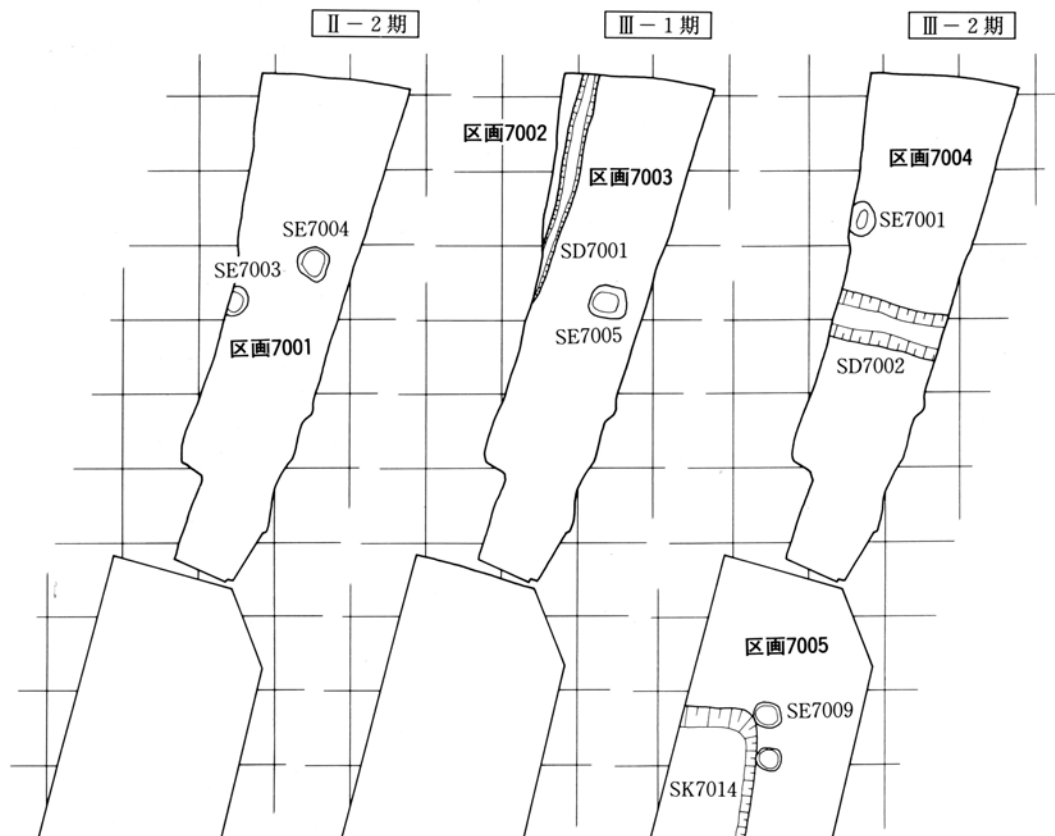
区画7001 城下町期Ⅱ－2期の区画で、井戸が2基（SE7003・SE7004）存在するのみで、区画施設や建物遺構等は確認されず、区画内構造の詳細は不明と言わざるを得ない。比較的広い空間を作っていたと思われる。

区画7002 城下町期Ⅲ－1期に存在した区画で、区画施設SD7001を検出したのみである。区画の本体は調査区外にあって構造等は不明である。

区画7003 城下町期Ⅲ－1期に所属する区画で、区画施設SD7001と井戸SE7005を検出した。井戸の周囲に点在するピット群もこの時期の遺構である可能性があり、建物の存在が予想される。区画の規模は比較的広大と思われる。

区画7004 城下町期Ⅲ－2期に機能した区画で、井戸SE7001を検出した。区画の規模や構造は推定が困難である。

区画7005 城下町期Ⅲ－2期の区画である。北限を区画施設SD7002とするが、南限に相当する区画が検出されておらず、このため区画の範囲は確定できない。61C区・61D区を含めた広大な区画として構造を考察すると、この区画には井戸SE7009・土坑SK7014等が存在する。特にSX7002からは柿経が出土しており、これは区画の性格を推定する資料となるだろう。



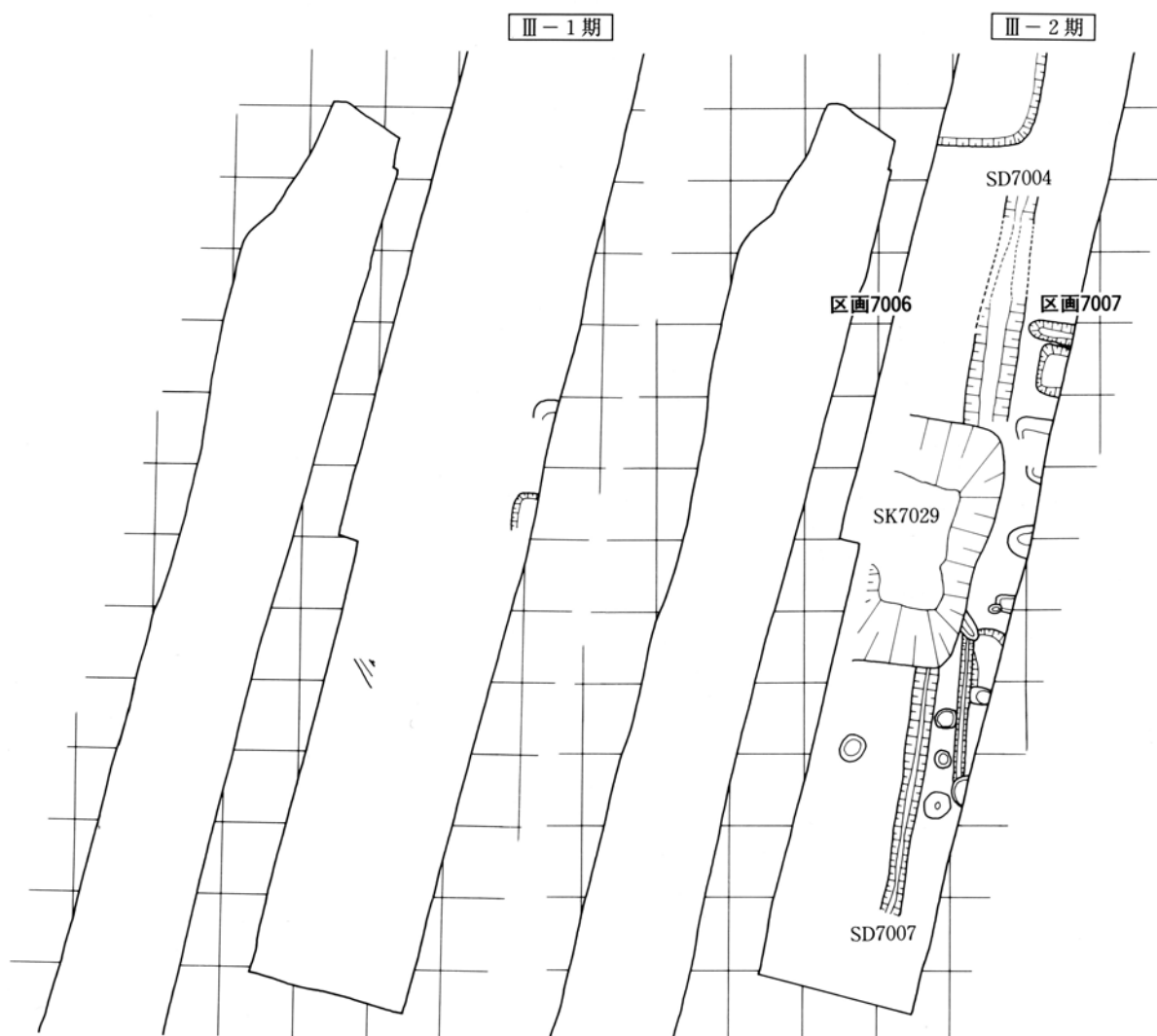
第197図 遺構変遷図(9) 89F区 (S=1:500)

K 61C区・61D区 (第198図)

61C区・61D区(及び91B区北半部)は城下町期Ⅲ期が主体となる。この調査区は城下町期Ⅲ-1期とⅢ-2期に区分できる。城下町期Ⅲ-1期では明確な区画施設は設定し得ず、遺構展開も復元できない。城下町期Ⅲ-2期では区画施設SD7004・SD7007等が存在し、これらの溝の東西で2区画(西部を区画7006・東部を区画7007とする)に区分が可能である。89F区と同様、各時期共に定型化した区画であったとは考えにくく、区画の類型化も困難である。

区画7006 城下町期Ⅲ-2期に機能した区画で、区画内構造は復元し得ない。区画施設SD7004・SD7007を廃絶した後に廃棄土坑SK7029が掘削されている。

区画7007 城下町期Ⅲ-2期に存在した区画で、区画内には土坑が多数展開している。但し、構造までは復元できない。



第198図 遺構変遷図(10) 61C区・61D区 (S=1:500)

L 63S区・89D区（第199図）

63S区・89D区（及び91B区北半部）は城下町期Ⅲ期が主体となる。この調査区は城下町期Ⅲ－1期以前とⅢ－2期に区分できる。城下町期Ⅲ－1期以前では明確な区画施設は存在せず、自然の落込み、井戸とピット群を検出した。居住域であったことは推定できるが、区画割を推定するには至らなかった。城下町期Ⅲ－2期までにはこの自然の落込みを埋め立てて、区画施設SD7023・SD7025等を構築している。この結果、63S区・89D区を3区画に区分が可能であるが、SD7023とSD7025に囲まれる空間には南北に並ぶ井戸群が存在していることから更に小区分が可能となる。ここでは、井戸に対応して想定される細長い長方形の区画を区画7008～区画7011・SD7023以東を区画7012・SD7025以南を区画7013とする。

区画7008 井戸SE7017を中心に、おそらく東西方向に細長い空間を区画7008と定義する。この区画は城下町期Ⅲ－2期に機能した区画で、この他に土坑等を検出した。区画施設は認められないが、SE7017とSE7018の間隔から、区画の幅は7m前後と思われる。区画内構成の詳細は不明である。

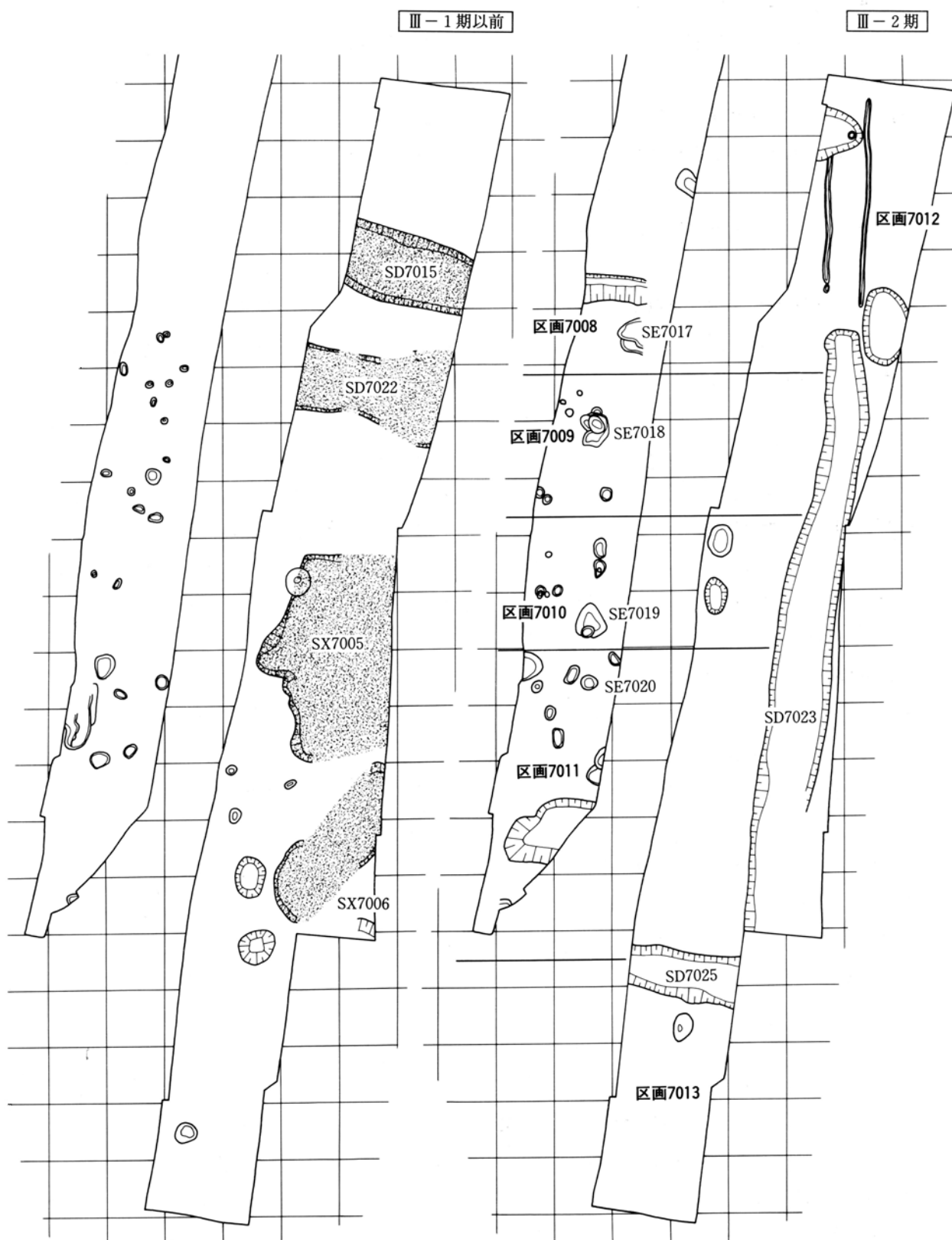
区画7009 井戸SE7018を中心に展開する空間を区画7009と定義する。この区画は城下町期Ⅲ－2期に機能した区画で、区画施設は認められない。SE7018やSE7019等の配置から、①南北幅20m前後の区画を考えるか、②SK7402付近の調査区外に井戸の存在を想定して東西方向に細長い空間を考えるか、2通りの説が考えられる。この区画には土坑や礎石等が検出されているが、区画内構成の詳細は不明である。

区画7010 井戸SE7019を中心に展開した空間を区画7010とした。この区画は東西方向に細長い空間が想定される。城下町期Ⅲ－2期に属するが区画内構成の詳細は不明である。

区画7011 井戸SE7020を中心に展開した空間を区画7011とした。この区画からSD7025までは井戸が検出されてなく、区画7011を一つの区画として位置付けるか、複数の区画が識別できない状況であるのかは不明である。城下町期Ⅲ－2期に属する。

区画7012 城下町期Ⅲ－2期に存在した区画であるが、主体部は調査区外に伸び、区画の様相は把握できない。

区画7013 城下町期Ⅲ－2期に機能した区画で、区画内の遺構として土坑などがある。区画の規模は比較的大きいと思われるが、構造は不明である。調査範囲内では井戸・建物は確認されていない。



第199図 遺構変遷図(1) 63S区・89D区 (S=1:500)

M 南部地区南半部（第200・201図）

南部地区南半部の調査区（63D区・62D区・91C区・62B区・90F区）は連続しているため、これらを一括して遺構変遷を考察する。この調査区は城下町期Ⅲ期が主体となり、2時期（城下町期Ⅲ－1期・Ⅲ－2期）に時期区分ができる。

城下町期Ⅲ－1期では区画施設SD8008、SD8010、SD8016、SD8025等が存在する。区画については、SD8008以北を区画8001、SD8008とSD8010の間を区画8002、SD8016以西を区画8003、SD8016以東を区画8004、SD8025で囲まれる部分を区画8005、SD8027とSD8029以南を区画8006と各々定義する。

城下町期Ⅲ－2期では区画施設SD8005、SD8006、SD8009、SD8013、SD8017、SD8024、SD8028、SD8030、SD8031、SD8032等が存在する。区画については、SD8005とSD8006で分けられる空間を区画8007、SD8005・SD8006・SD8009・SD8013・SD8017で囲まれる空間を区画8008～区画8010、SD8017とSD8024で区切られる空間を区画8011、SD8028とSD8030とSD8031で囲まれた部分を区画8012、SD8032以南を区画8013と各々定義する。なお、SD8024とSD8028・SD8030で細長く設定された空間は、ここでは道路SF8001としておきたい。

区画8001 城下町期Ⅲ－1期に存在した規模の大きい区画である。区画内施設は特に検出されていない。大形土坑SX8001によって大半の遺構は破壊された可能性がある。

区画8002 城下町期Ⅲ－1期に展開した区画で区画幅は約12mを測る。区画が設定される前に方形土坑SX8003が埋め立てられており、遺構の時期区分は更に細分が可能である。区画内施設は全く検出されなかった。

区画8003 城下町期Ⅲ－1期に機能した区画であるが、区画施設の方位等から一定の規格性を持った区画とは認定し難い。区画内施設はほとんど検出されなかった。

区画8004 区画8003と同様な状況である。広大な区画ではあるが、居住域とは認めにくい。

区画8005 L字に屈曲した溝で囲まれた区画で城下町期Ⅲ－1期に属する。区画内施設は不明。

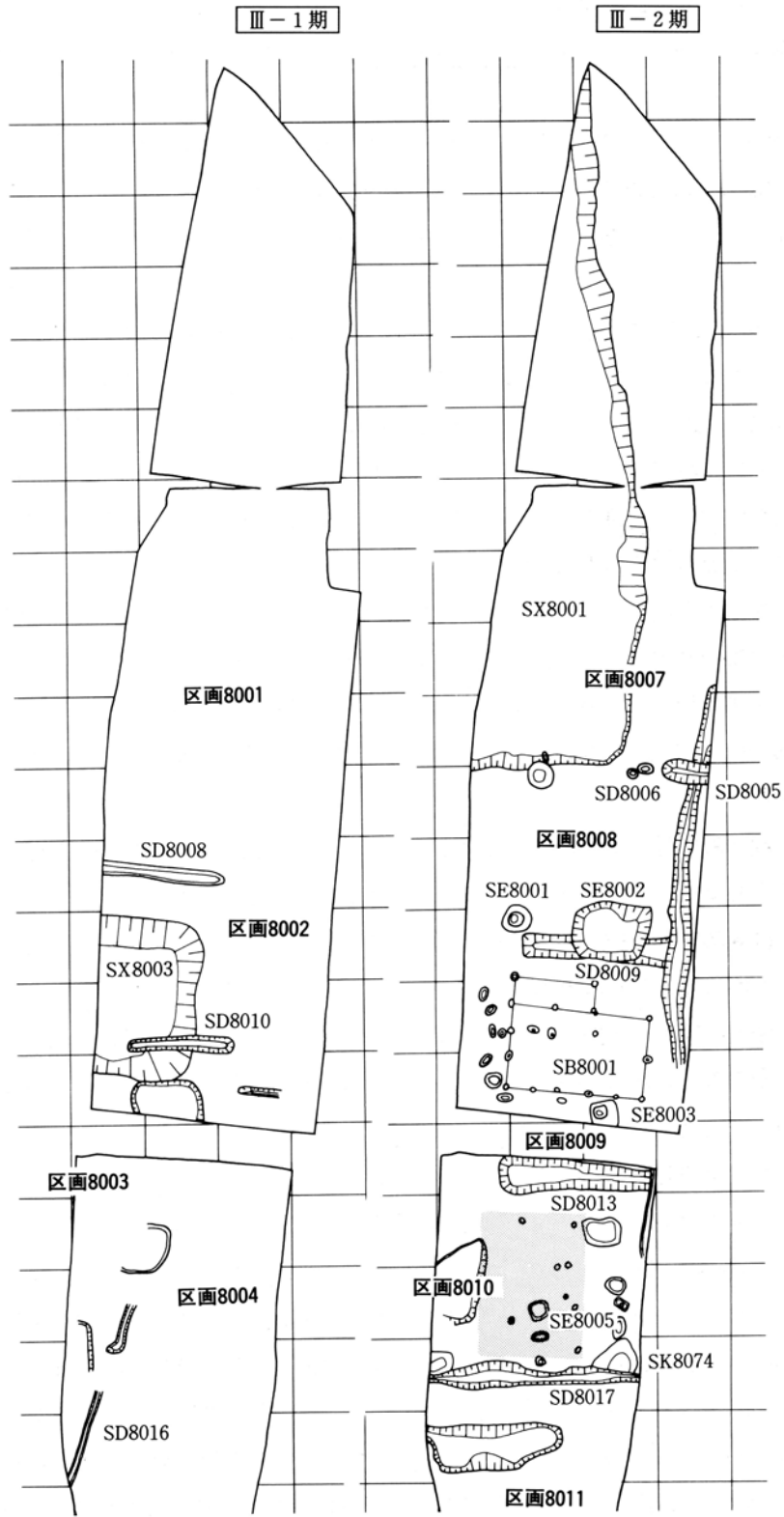
区画8006 城下町期Ⅲ－1期に機能した区画である。区画内にピット群が展開するため掘立柱建物の存在が想定できる。しかし、井戸は発見されておらず、遺物出土量も僅少であることから、この区画が長期にわたる生活空間であったとは考えにくい。

区画8007 城下町期Ⅲ－2期に存在した区画である。南北の幅は45m以上を測り、区画内には巨大な土坑SX8001が存在する。従って、この区画も居住空間としては認定し難い。

区画8008 城下町期Ⅲ－2期に展開した幅約12mの区画である。周囲はSD8005、SD8006、SD8009に囲まれ、内部には井戸SE8001・SE8002が存在する。SE8002はSD8009埋積後に設置されていたこと等から、時期の細分が可能で、おそらくSE8001廃絶後SE8002が作られたと思われる。

区画8009 城下町期Ⅲ－2期に機能した幅約16mの東西方向に長い区画である。区画の周囲はSD8005、SD8009、SD8013に囲まれており、内部には掘立柱建物SB8001や井戸SE8003が存在する。主屋と思われるSB8001は区画溝に接近して建てられ、井戸は建物の南に配置されている。

区画8010 城下町期Ⅲ－2期に存在した幅約13mの東西方向に長い区画である。周囲はSD80014 SD8013、SD8017に囲まれ、内部には井戸SE8004・SE8005とピット群(掘立柱建物?)が存在する。ピットの展開状況から調査区の中央に主屋が建ち、その東西両側に井戸が配置される空間構成を作っ



第200図 遺構変遷図(12) 63D区~91C区 (S=1:500)

ている。区画の南東隅には土師器鍋などを廃棄した土坑SK8074等が存在している。

区画8011 城下町期Ⅲ-2期に展開した区画である。SD8017以南では、区画8008~区画8010の小区画とは異なり、広い空間を持っている。小骨片を含有する土坑が展開することから、居住域というよりも墓域の可能性が高い。

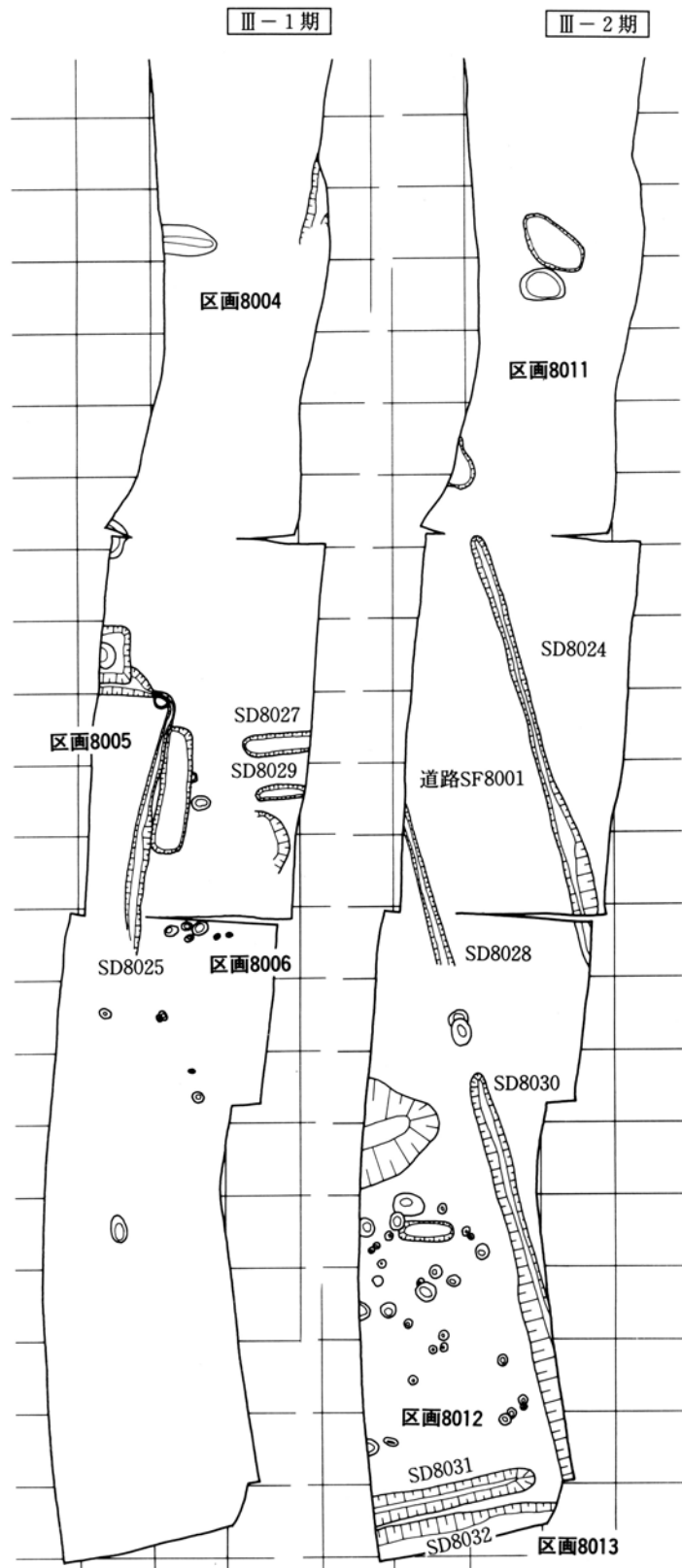
区画8012 城下町期Ⅲ-2期に機能した区画である。区画内には土坑が存在しており掘立柱建物の存在が予想される。井戸は検出されなかった。区画の平面プランは細長い長方形に復元しにくく、方形の区画を想定したい。区画の方位が他の地点と異なる点も特徴的である。この地点は字「槽」と呼ばれていることから、一般の屋敷とは相違する空間と思われる。

区画8013 城下町期Ⅲ-2期に存在した区画である。区画の主体が調査区外にあるため、区画内構成の復元は困難である。

N 90Fb区・90Fc区

90Fb区・90Fc区は城下町期Ⅲ期が主体となると思われるが、遺構・遺物が他に比べ少なく、区画の設定、区画内構成の分析は不可能である。このような状況から、おそらくこの地点は主たる居住域ではないことが推定できる。

(鈴木正貴)



第201図 遺構変遷図(13) 91C区~90F区 (S=1:500)

第3節 小 結

第1節では、面積と平面プランから区画の分類案を提示した。この分類案をもとに地区別の傾向を概観する。

A 御園地区

区画Ⅰb類と区画Ⅳ類が確認できたが、全体としては空間構成が自然地形等によって強く影響されている状況が認められる。居住域として本格的に機能したのも城下町期Ⅲ期以降の段階からであったと思われる。

B 本丸地区

区画の検討はできなかった。

C 田中町地区

今回の調査で比較的明確に確認されたのは、城下町期Ⅰ期・Ⅱ期に属する区画Ⅲ類である。これまでの研究成果から、この地区では更に規模の大きい区画が存在したことが判明しているが、この点については特に新たな知見は確認できなかった。

D 五条橋地区

城下町期Ⅰ期の区画Ⅱ類（北端部）と区画Ⅳ類（中央部以南）が確認されたものの、城下町期Ⅱ期以降は区画設定が困難であった（区画Ⅹ類）。この地区は、城下町期Ⅰ期・Ⅱ期では旧五条川NR4001に大きく影響を受けた地区と考えられる。また、城下町期Ⅲ期では中堀SD6001の規制も受けていたように思われ、出土遺物量の検討からみて非居住域であった可能性が指摘できる。あるいは、土塁や馬出し等の軍事施設が存在したかも知れない。

E 本町地区

城下町期Ⅰ期～Ⅱ-1期の区画Ⅱ類・区画Ⅲ類、城下町期Ⅱ-2期～Ⅲ期の区画Ⅰb類等が確認された。城下町期Ⅱ-2期の当初に大きな区画割・地割の改変（区画Ⅱ類・Ⅲ類から区画Ⅰ類へ）が実施された点が注目される。この区画Ⅰ類へ改変された地割は、天正地震以降の建て替えの際にも、引き続き継承されており、この地点の遺構展開の画期は城下町期Ⅱ-1期と城下町期Ⅱ-2期の間に設定できる。

F 南部地区北半部

城下町期Ⅲ期の区画が認められるが、類型化に耐え得る資料は少ない。南部で区画Ⅰb類が認められる。城下町期Ⅲ期に居住域（区画Ⅰ類）の拡張が実施されたと言えよう。

G 南部地区南半部

城下町期Ⅲ期の区画Ⅰa類・区画Ⅲ類?が混在する形で認められる。これは居住域と非居住域の混在を表しているとも考えられる。また、南端部では区画の認定が困難である(区画X類)。地形的条件の良好な部分で城下町期Ⅲ期に城下町の拡大が行われたと言えよう。

H まとめ

以上の分析から、各地区によって区画の展開のあり方や変動の時期(画期)が異なっていることが判明した。時期ごとにまとめ直すと次のように整理される。

城下町期Ⅰ期——田中町地区に一边が100m規模の区画、五条橋地区に旧五条川、本町地区に区画Ⅲ類(Ⅱ類)が展開し、その他の地点では遺構が存在しない(居住域ではない)。遺跡の中心部に規模の大きい区画が展開し、周縁部に向かって区画の規模が小さくなるようである。

城下町期Ⅱ-1期——城下町期Ⅰ期と同様である。五条橋地区で遺構展開が変化している。

城下町期Ⅱ-2期——田中町地区に一边が100m規模の区画、本町地区に区画Ⅰ類が展開し、南部地区や御園地区では遺構が存在しない。区画Ⅲ類と区画Ⅰ類の構成替えが実施されている。

城下町期Ⅲ期——田中町地区に一边が100m規模の区画?、御園・本町・南部地区に区画Ⅰ類が展開し、本町・南部地区の一部で区画Ⅲ類が点在している。本町・南部地区の区画Ⅲ類は居住性の高い空間であったとは考えにくい。

従来、天正14年(城下町期Ⅱ期とⅢ期の間)を清須城下町の大きな画期として認識されており、現時点でもこの画期は総構えが設定された段階として有効であると考えられる。しかし、城下町期Ⅱ-2期の状況を見ると顕著に示されるように、清須城下町全域を天正14年の画期のみで考察することについては、もはや無理が生じている。清須城下町の全体の区画構成と各区画の性格付けを再検討する段階に至っているといえよう。(鈴木正貴)

註 (1) 梅本博志(1989)「信長期における清須城下町の様相」『清須-織豊期の城と都市-研究報告編』東海埋蔵文化財研究会

結 語

本書の結語として、これまで報告した成果のまとめと今後に残された課題をまとめておきたい。

A 成果の概要とまとめ

今回の発掘調査で明らかとなった成果を箇条書にまとめる。

- 1 本遺跡は、戦国時代を中心とした遺跡として認識され、この評価は変わるところではないが、それ以前の古代から中世までの遺跡（小遺跡）も幾つか重なっていることがより一層明白となった。今回検出された遺跡の性格は居住域と墓域？と考えられよう。
- 2 戦国時代（城下町期）の遺構・遺物は多種多様であり、様相は複雑である。個別の遺構では建物・溝・井戸・土坑等が検出され、各々数類に分類が可能であった。この各分類毎に分布を検討すると、おおよそ地区毎に分布が異なる場合が多く認められた。こうした現象は、地形的な影響を受けたり、地点の性格を物語るものと考えられよう。
- 3 城下町期の遺物は多種多様な様相を見せ、出土量も膨大である（遺構から出土した陶磁器・土器類の破片数で15万点を越える）。ここでは、陶磁器類の産地の傾向についてまとめる。本遺跡には地元の瀬戸美濃窯を始めとして備前窯や唐津窯などの様々な生産地から器物が搬入されていたことが明らかとなった。こうした様々な地方から物資が運ばれたことは城下町期Ⅲ期以降に顕著に認められる現象で、運ばれた器種もある程度選択されていたことがいえよう。
- 4 城下町期の遺物出土量の分析結果から、各地区毎の特徴を見い出すことができた。今回は、土器器皿出土量の割合の分析等、その一部のみの紹介に留まってしまったが、遺跡・区画・遺構の性格を把握する上で遺物の出土割合の比較検討は極めて有意であると思われる。今後もこうした検討を更に押し進めていく必要があると考えられる。
- 5 城下町期の遺構は区画というまとまりで考察することができる。今回の調査で確認された区画は4類に分類できる。これらは地区・時期によって分布状況が異なっており、遺跡全体の構造は重層的であり、いくつかの段階で大きな変容が起きていることが判明した。
- 6 清須城下町（城下町期）の画期についてもいくつかの新たな知見が得られた。特に、地点によって遺構配置が変化する時期（画期）が異なることが明瞭になった点が注目される。今回の調査で確認された画期は、①城下町期Ⅰ期とⅡ期の境界、②城下町期Ⅱ-1期とⅡ-2期の境界、③城下町期Ⅱ-2期とⅢ期の境界、④城下町期Ⅲ-1期とⅢ-2期の境界という4つの段階があげられる。しかしながら、各画期の変化の様相は地点によって異なり、遺跡全体を包括する画期は「総構え」構築の③城下町期Ⅱ-2期とⅢ期の境界があげられる程度である。こうした複雑な現象は、清須城下町の歴史も一様で単純なものではなく、様々な段階を経て変容していったものと考えられよう。

B 今後の課題

今後の残された課題は、個別の遺構や遺物に関しては多岐に亘っているため、ここでは以下の2点に問題を絞ってまとめておきたい。

1 編年

今回の報告では、城下町期の時期区分を3期（6小期）に区分しながら、その具体的様相（遺物・遺構の編年）を掲載していない点が最大の問題である。本報告では、既に詳細な編年が確立している瀬戸美濃窯産陶器の編年に依拠してこれに対応する形で区分し、それと同時に土師器鍋・木胎漆器等の編年も重ねて検討してみた。従って、包括的に様々な遺物の変化が検討されていないのである。今後の課題である。

2 清須城下町の復元的考察

今回の報告では、区画の認定まで検討したが、その類型化と性格の推定までは行っていない。今後の作業としては、区画の性格を考察した後に城下町全体の構造を先の時期区分に併せて検討することが必要となるであろう。こうした作業を経て遺跡の評価を論ずることが可能となるであろう。

C まとめ

今回の膨大な資料を報告書としてまとめるに当たり、報告とは何をもって報告とするのかという点が常に問題となった。資料が膨大であること・発掘調査自体に矛盾が存在すること・整理報告作業に限界があること等を踏まえると、ただ単に客観的に記録することに終始するだけでは、作業上報告書作成が困難である。また仮にその膨大な資料の記録化が達成されたとしても、それで必ずしも遺跡の評価が広く認知されるとは思われないのである。我々は単なる記録化に留まらず、失われつつある遺跡の意義付けをどのように報告するかを意識しなければいけないと思われる。しかしながら、こうした思いとは裏腹に力量不足のため結果として中途半端な分析に留まらざるを得ず、また誤謬も多々存在すると思われる。大方のご叱正・ご教示を賜わりたく思い、また今後の研究の進化を期待したい。

（鈴木正貴）

索

項目	ページ
あ 赤物	131, 162, 198
赤楽	202
浅鉢	124, 128, 156, 193, 195
朝日遺跡	2, 13, 54
朝日西遺跡	2, 6, 7, 8, 38, 43, 46, 48, 56, 106, 118, 192, 240
足跡	47, 68, 70
雨落ち溝	77
荒砥	154, 184, 242
荒肌手	53
アラベスク文様	212
暗花文	213
い 鋳型	230, 248
伊賀焼	200, 201
異空間	71, 257, 259
井桁	98
石垣	37, 60, 61, 62, 65
石組井戸	38, 98, 106
石積み	31
石鍋	243
伊勢型鍋	53, 54, 56
市場	59
井戸	2, 8, 23, 32, 34, 35, 38, 39, 40, 43, 45, 46, 53, 58, 59, 60, 66, 92, 98, 99, 100, 102, 106, 117, 118, 250, 251, 252, 253, 255, 257, 258, 259, 262, 263, 264, 266, 268, 270, 274
井戸桶	106, 239, 240
糸かせ	239
井戸側	46, 58, 59, 98, 100, 102, 106,
犬山扇状地	9
鋳物	131, 154, 230
厩裏の緑石	242
岩倉城	18, 46, 47
う 魚形花鳥文	215
内禿皿	125, 126, 156, 166, 170, 176
内堀	31, 116
畝状遺構	59, 111, 259
馬出し	271
裏込め	37, 98, 100, 106
裏込め石	62
裏込め土	98, 102
漆継ぎ	131, 210
え 永正五年	68
H-72号窯式期	53
液状化	19, 21, 25, 27, 68
餌播	193
越前窯	124, 193
越中瀬戸窯	193
NN-32号窯式期	49
円盤	131, 159, 175, 230
緑釉皿	126, 134, 143, 145, 150, 231

引

項目	ページ
お 扇の骨	135
黄土	49
大形製品	124, 129, 130, 145, 154, 169, 175, 182, 193, 195, 198, 200, 202, 207
大窯	8, 59, 62, 68, 192, 195
緒桶	182
O-53号窯式期	53
大皿	128, 150, 156, 162, 166, 170, 175, 182, 188, 200, 201, 203, 206, 207, 209, 210, 212, 219, 221
O-10号窯式期	49
大手橋	31
折敷	134, 140, 239
織田信雄	21, 27, 29
折縁皿	126, 156, 159
「御天神様」	231
か 階層	72, 201, 202
回転糸切り痕	49, 51, 130, 152, 159, 169, 226, 228
戒名	140
灰釉系陶器	46, 47, 52, 53, 56, 145
花押	31
鏡	247
加賀窯	193
瓦器	124, 130, 131, 154, 175, 184, 229, 231
楽師	7
懸仏	228
加工円盤	131, 132, 175
傘	239
飾金具	163, 247
飾瓦	188, 233
花枝文	219
鏝	244
春日井郡清須村古城	2, 64, 65
絵図	
河川性堆積物	5
型打ち	128
形代	124, 134, 184, 193, 226, 228
堅手鉢	208
花鳥文	215
滑石	243
瓦灯	154
金槌	244
河畔砂丘	35
釜	80, 112, 113, 124, 130, 134, 143, 145, 150, 163, 169, 184, 226, 227, 229, 231, 244
窯印(窯記号)	203, 231
甕	49, 51, 52, 53, 129, 130, 145, 150, 162, 169, 175, 182, 198, 200, 201, 203, 206
唐草文	212, 213, 216, 229
ガラス製品	54, 120
ガラス玉	54

項目	ページ
唐津窯	124, 159, 166, 170, 176, 182, 207
軽石	243
川港	71
瓦	7, 31, 54, 56, 99, 117, 120, 121, 122, 155, 156, 159, 166, 170, 176, 188, 192, 233, 237, 252
川漁	68, 228
カンナ	240
観音寺城跡	200
き 菊皿	126, 128, 159, 166, 170, 176, 188, 209, 210, 211, 216
器形	121, 124, 130, 132, 150, 182, 212, 219, 221, 225
器種	49, 52, 56, 121, 122, 123, 124, 129, 132, 143, 150 , 193, 195, 198, 200, 201, 202, 203, 206, 207, 208 , 209, 210, 211, 212, 215, 221, 225, 226, 229, 231 , 233, 239, 274
黄瀬戸	7, 130, 162, 166, 182, 193
煙管	124, 184
木曾川	9, 62
基礎地業	83, 95
吉祥文	215
紀年銘瓦	7
基盤層	13, 14, 17, 21, 22
岐阜—宮線	26
旧五条川	17, 33, 34, 35, 66, 72, 75, 81, 93, 100, 102, 113, 116, 118, 192, 228, 231, 239, 247, 255, 257, 271
久証寺	38, 114
旧美濃街道	65
凝灰岩	184, 242
橋脚	68
経文	140
清洲公園	31
清須越し	5, 64
清洲宿	8
清洲宿場町	8, 30
清須城	2, 3, 5, 7, 8, 20, 23, 27, 29, 31, 34, 42, 65, 72, 156
『清須城懐古録』	5, 6
『清洲町史』	5, 6
錐	244
切匙	134
器類	121, 124, 126, 132, 195
銀化	122
均質手	53
近世	14, 29, 31, 116, 118, 198, 207
均整唐草紋軒平瓦	156
金属製品	54, 120, 123, 154, 155, 159, 163, 166, 170, 176, 188, 230, 244
金箔瓦	31
く 杭列	62, 66, 68, 95
区画	32, 36, 40, 43, 59, 64, 72, 73, 75, 76, 77, 81, 94,

項目	ページ
	97, 117, 118, 150, 154, 250, 251, 252, 253, 254, 2
	55, 257, 258, 259, 260, 262, 263, 264, 265, 266, 2
	68, 270, 271, 272, 274, 275
釘	163, 244
櫛描き紋	49
沓茶碗	126, 159, 170, 176
久麻久神社	156
黒染	166, 202
け K-14号窯式期	49
計測器	122
慶長年間	202, 206
下駄	68, 134, 135, 143, 184, 239
毛拔	244
花瓶	71, 129, 134, 152, 154, 162, 182, 193
建水	193, 200, 201
元染付	219, 221
県道清洲新川線	5, 14, 35, 65
こ 基石	145
口縁残存率	121, 122, 123
格子タタキ	54
洪水性堆積物	13, 14, 17
交趾皿	225
後背湿地	9
蛟龍	213, 215
香炉	71, 124, 129, 150, 193, 209, 210, 212, 219, 229, 247
小形製品	124, 129, 154, 169, 184, 193, 195
刻印	62, 182
刻書	71, 131, 175, 203, 231
虚空蔵菩薩	228
国府跡	18
柿経	8, 71, 112, 140, 239, 264
五彩	209, 225
小札	241, 244
腰折皿	126, 143, 145, 150, 231
五条川	2, 3, 9, 13, 14, 17, 29, 31, 32, 33, 35, 36, 38, 61, 65, 66, 68, 71, 72, 74
五条川遺跡	2
五条川の瀬替え	30, 36
五条橋地区	29, 30, 33, 56, 72, 75, 81, 83, 98, 116, 118, 195, 210, 211, 230, 237, 247, 257, 271, 272
古瀬戸	52, 59, 68, 145
古代	14, 17, 29, 30, 32, 42, 43, 44, 49, 52, 53, 54, 55, 56, 106, 274
個体数算定	122
骨片	47, 114, 193, 270
小箱	182
コビキA	122, 188
コビキB	122, 188, 235, 236
木舞	230

項目	ページ
狛犬	8, 156
五輪塔	140, 145, 188, 243
金剛般若経	71, 140
祀	71
材質・産地	121, 124, 131, 193
砂岩	184, 242
柵列	45, 46, 58, 77, 83, 92, 93, 95, 96, 97, 259, 260
刺網	228
差歯下駄	135
雑釉	208
猿投窯産	49, 53
匣鉢	145
皿	46, 49, 51, 52, 53, 124, 126, 128, 132, 134, 143, 145, 150, 154, 156, 159, 166, 170, 176, 182, 188, 193, 195, 202, 207, 209, 210, 211, 212, 213, 215, 216, 219, 221, 225, 226, 227, 231, 239
算木手	210
サンプリングエラー	123
仕上げ砥	184, 242
JR東海道本線	31, 32, 33
信楽窯	124, 170, 176, 182, 188, 200, 201
字款	212, 213, 216, 219
敷石	60, 61, 62, 65
試掘調査	2, 3
地震考古学	18, 28
地震痕	5, 8, 13, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 28, 37, 106
自然遺体	120, 123, 149, 248
自然堤防	9, 13, 17, 43, 55, 75
七本塔婆	140
漆器	7, 55, 56, 134, 192, 239, 240, 241
湿地	13, 30, 43, 65, 116
志戸呂窯	193
洩瓶	175
持仏	184
笏谷石	243
蛇ノ目釉剥ぎ	209, 210
砂利敷	83, 85, 86
重圍皿	128, 134, 145, 154, 156, 159, 166, 170, 176, 188, 231
十三仏像	71, 228
十字花文	215, 216
集落	29, 42, 43, 44, 55
朱書	211
宿場町期	30, 33, 34, 35, 36, 37, 58, 60, 75, 102, 120, 198, 240
朱彩	184
数珠	145
主屋	92, 259, 262, 263, 268, 270
主要幹線	80

項目	ページ
巡礼橋	38
商職人居住域	202
消息	140
小土坑群	40, 43, 47, 53
消費地遺跡	55, 120, 132, 207
錠前	244
小碗	126, 155, 159, 166, 170, 176, 188, 193, 203, 207, 211, 212, 219
植物遺体	66, 134
初山窯	193
白化粧	202
人・獣骨	7, 71, 113, 149, 248
す 鍾	122, 124, 169, 203, 226, 228, 229
瑞果文	213, 216, 219
水注	129, 152, 154, 169, 184, 193
水滴	129, 169, 193, 202, 247
須恵器	44, 49, 51
鈴	122, 124, 184, 226, 228
珠洲窯	193
スタンプ紋	193, 229, 236
砂目積み	208
スラグ	131, 184, 230
播鉢	124, 128, 134, 143, 145, 150, 154, 156, 162, 169, 175, 182, 188, 193, 195, 198, 200, 201, 203, 206, 252
せ 青花	131, 145, 154, 156, 159, 166, 170, 176, 182, 188, 209, 210, 211, 212, 221, 225
清郷型鍋	51
青磁	52, 131, 145, 150, 154, 159, 176, 188, 209, 210, 216, 221, 225
整地	13, 14, 17, 21, 23, 24, 25, 26, 30, 31, 32, 33, 34, 36, 37, 38, 39, 40, 59, 61, 76, 78, 84, 85, 86, 87, 88, 93, 113, 116, 117, 118, 166
青白磁	209, 225
石製品	54, 120, 123, 143, 150, 154, 155, 159, 163, 166, 170, 176, 188, 242
石列	83, 85, 95, 262
瀬戸美濃窯	8, 52, 53, 59, 68, 71, 114, 124, 126, 128, 129, 130, 134, 143, 145, 150, 152, 154, 155, 156, 159, 162, 166, 169, 170, 175, 176, 182, 184, 188, 192, 193, 195, 221, 228, 231, 274, 275
瀬戸窯	53
柱	239
穿孔	130, 131, 152, 227, 228
線香立て	135
穿孔土師器皿	8, 71
そ 総構え	2, 3, 59, 65, 72, 118, 272, 274
草花文	175, 182, 212, 213, 225, 247
双耳壺	129, 145
双耳瓶	129, 169

項目	ページ
総注	87
粗製(青花)	159, 176, 209, 212, 213, 216, 219, 221
礎石建物	36, 58, 59, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 94, 117, 258, 260, 262, 263
卒塔婆	68, 71, 75, 140, 239
外堀	2
祖母懷	231
た タール付着	131
第一礫層	9
大改修	21, 27, 29
台付碗	126, 143, 145, 152, 231
胎土目	170, 207
タイ窯	124, 225
大和製本地区	32, 254
タタキ	49, 51, 122, 208, 225, 235, 236
竪穴住居	42, 44
田中町地区	14, 29, 32, 42, 43, 45, 49, 55, 72, 75, 81, 83, 98, 116, 118, 195, 201, 202, 204, 210, 227, 237, 253, 271, 272
玉取獅子	216
炭化物	44, 80, 93, 112, 113
短頸壺	169
短冊型地割	258, 262
断層	19, 27
丹波窯	175, 188, 206
ち 築堤	31
地籍図	8, 65, 254
茶入	129, 154, 184
茶臼	154, 163
中国窯	52, 124, 131, 143, 145, 150, 154, 155, 156, 159, 166, 170, 175, 176, 182, 188, 209, 211, 212, 225
中世	2, 7, 8, 14, 17, 29, 30, 32, 38, 40, 42, 43, 45, 47, 52, 53, 54, 55, 56, 71, 72, 106, 198, 201, 203, 207, 228, 274
中世集落	43, 55, 56, 72
沖積下部砂層	9
沖積上部砂層	9, 13
沖積中部泥層	9
長者橋	36, 38, 40
長石釉	59, 131, 159, 162, 166, 170, 175, 176, 184, 188, 193, 207
朝鮮窯	124, 170, 176, 182, 188, 208
チョウナ	240
貯蔵施設	113
地割	118, 271
つ 束柱	85, 87
土犬	193, 226, 228
筒形容器	124, 129, 145, 154, 162, 169, 175, 182, 193, 198, 200, 203, 208, 229
罎皿	216, 219

項目	ページ
壺	49, 52, 124, 129, 130, 145, 150, 156, 169, 175, 182, 184, 193, 198, 200, 203, 206, 225, 226, 227, 228, 231, 247
釣瓶	182, 239
て 泥塔	228
鉄滓	184, 244
鉄砲玉	248
手持ちヘラケズリ	49
天正地震	5, 8, 13, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 36, 37, 61, 68, 76, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 96, 102, 113, 117, 134, 155, 159, 192, 271
天目茶碗	20, 56, 62, 126, 134, 143, 154, 155, 159, 166, 170, 176, 188, 195, 207, 231
と 砥石	88, 145, 154, 163, 184, 242
陶丸	122, 124, 154
胴木	62
道具瓦	233
頭骨	71
陶磁器	8, 120, 274
銅銭	163, 184, 247
灯明皿	188, 193
道路	65, 76, 78, 80, 252, 258, 268
ドーナツ化現象	195
土器	54, 55, 56, 99, 120, 121, 122, 124, 226, 230, 231, 274
土坑	39, 42, 43, 44, 45, 47, 49, 51, 58, 59, 66, 68, 93, 98, 112, 113, 114, 118, 152, 159, 166, 176
常滑窯	52, 53, 124, 130, 131, 145, 150, 162, 166, 170, 175, 176, 182, 188, 198, 204
都市	5, 71, 116
トチン	122
土橋	65
土間	83
留金具	163, 244
渡来銭	163
トリベ	154, 230
土塁	61, 116, 271
な 内耳鍋	130, 143, 158, 163, 169, 184, 227, 228
中砥	242
中堀	2, 20, 23, 33, 34, 36, 37, 60, 64, 65, 75, 76, 116, 117, 188, 257, 258, 271
投網	228
名古屋環状2号線	2, 5, 30, 43, 59, 65, 116, 233
鍋	56, 80, 113, 124, 130, 134, 145, 150, 163, 169, 184, 226, 227, 231, 244, 270, 275
鉛製品	248
鳴海織部	175
縄目タタキ	54, 235
軟質陶器	166, 202

項目	ページ
南部地区	17, 29, 38, 40, 43, 47, 55, 56, 72, 81, 83, 95, 98, 112, 118, 195, 225, 228, 230, 237, 239, 268, 271, 272
に 日常生活空間	252, 253
如意雲	213
ね 根石	59, 83, 84, 85, 90, 92, 93, 95, 97
根尾谷断層	26
の 濃尾地震	18, 19, 20, 26
濃尾平野	8, 9, 13, 17, 19, 26, 28
濃飛流紋岩	62
軒平瓦	188, 233, 234, 237
軒丸瓦	188, 233
鬘斗瓦	233
延板	184
は 廃棄土坑	36, 113, 155, 159, 252, 263, 265, 270
排水	72, 73, 81
白磁	52, 131, 145, 154, 159, 166, 170, 176, 188, 208, 209, 210, 211, 221, 225
羽口	184, 230
羽子板状木製品	71, 239
挟み皿	128
箸	135, 239
土師器	7, 44, 49, 51, 52, 53, 54, 56, 113, 124, 130, 131, 134, 143, 145, 150, 152, 154, 155, 159, 163, 166, 169, 170, 176, 184, 188, 193, 226, 228, 230, 231, 270, 275
土師器皿	52, 59, 71, 102, 112, 114, 130, 134, 143, 145, 152 , 154, 156, 159, 166, 170, 176, 182, 188, 226, 228 , 231, 254, 274
波状紋	49, 128, 193, 211
芭蕉葉文	212, 213, 215
端反皿	128, 143, 145, 154, 156, 159, 166, 170, 176, 188, 209, 211, 216, 221
畑	17, 37, 64, 111, 259
バタビアンウェア	166, 219
羽付鍋	56, 130, 143, 163, 169, 184, 227
八宝文	219
波濤文	212, 213, 215, 216
花生	193, 203
埴輪	54
ハバキ	247
破片数	43, 121, 122, 123, 195, 198, 200, 202, 203, 206, 207, 208, 209, 211, 212, 213, 225, 274
刃物	134, 163, 244, 247
刃物痕	140
版築	83, 87, 95
バンドコ	163, 243
ハンネラ壺	225
ひ 火打石	163, 242, 243
火打金	163, 244

項目	ページ
微高地	13, 14, 43, 57
庇	87, 91, 92
菱格子帯文	213, 216
柄杓	134, 188, 239, 182
備前窯	124, 156, 170, 175, 176, 182, 184, 188, 203, 231, 274
ひだ皿	128, 156, 176, 207
火のし	184, 227, 229
飛馬	213
火鉢	130, 169, 184, 226, 227, 229, 230
百代寺窯式期	35, 51, 53
鋳	247
平瓦	112, 122, 188, 233, 235, 236
平鉢	128, 134, 145, 193, 198
平碗	126, 143
非ロクロ成形	59, 130, 134, 143, 145, 152, 159, 166, 170, 182, 226, 227
浜堤列	13
ふ 風伊	130, 175, 229, 230
武家屋敷	59
蓋	49, 124, 184, 193, 226, 227, 228, 243
二股刺突具	163
仏像	247
船入橋	38
芙蓉手	213
ふれあい広場地点	254
噴砂	13, 17, 19, 21, 22, 23, 24, 26, 37, 61, 76, 87, 89, 96, 102, 113, 117, 134, 155, 159
粉青沙器碗	208
分銅	247
へ 瓶	124, 129, 145, 156, 169, 175, 182, 184, 193, 203, 206, 208, 212, 219, 231
紅皿	225
篋	135, 239
ヘラ記号	49, 231
ほ 方位	38, 45, 46, 47, 72, 74, 75, 76, 78, 80, 81, 84, 85, 87, 90, 92, 93, 96, 97, 111, 258, 270
防御	65, 72, 97
方形区画	59
方形土坑	38, 39, 114, 268
炮烙鍋	130, 143, 163, 184, 227
ボーリング資料	9, 13
墨書	7, 8, 53, 71, 131, 140, 145, 152, 184, 228, 231
墓坑	47, 53
祠	262
牡丹唐草文	216
掘立柱建物	45, 58, 59, 76, 83, 90, 91, 92, 93, 94, 253, 255, 258, 259, 268, 270
法螺貝	212
堀	7, 14, 59, 64, 65, 72, 116, 118

項目	ページ
堀之内花ノ木遺跡	13, 18
梵字文	216
本町地区	17, 29, 30, 36, 56, 65, 72, 76, 81, 83, 84, 98, 117, 118, 195, 204, 210, 211, 227, 228, 230, 237, 242, 258, 262, 264, 271, 272
本丸	2, 3, 31, 59, 74, 228, 252
本丸地区	14, 29, 31, 72, 74, 81, 83, 116, 195, 201, 202, 204, , 237, 252, 271
ま 曲物桶	46, 68, 98, 122, 134, 182, 188, 239
間仕切り	92
枅状遺構	86
「町」	231
町屋敷	39, 40
摩滅	49, 53, 131, 135, 201, 207, 211
丸瓦	122, 188, 233, 235, 236
丸皿	128, 143, 145, 154, 156, 159, 166, 170, 176, 188, 207, 209, 210
丸碗	126, 134, 145, 155, 159, 166, 170, 176, 188, 207
饅頭心	213, 219, 225
み 水溜	98
水堀	2, 64
御園地区	13, 29, 30, 43, 45, 55, 56, 72, 73, 81, 83, 95, 116, 118, 195, 201, 202, 204, 225, 228, 230, 271, 272
三股製品	244
ミニチュア	229
美濃須衛	49
宮迄道	65
妙法蓮華経	71, 140
む 無構造物井戸	98, 106
向付	59, 128, 162, 166, 170, 182, 188, 193
「村」	231
め 名鉄名古屋本線	3, 38, 39
面戸瓦	233
も 木製構築物	35, 68, 228
木製人物立像	7, 78, 184
木製品	7, 54, 71, 113, 120, 122, 135, 150, 154, 155, 159, 166, 170, 176, 182, 188, 192, 231, 239
木胎漆器	134, 143, 176, 182, 188, 192, 239, 241, 275
模造品	248
木筒	7, 8, 134, 140, 231, 239
木器椀	134, 176
モミ痕	53
盛土	5, 23, 36, 40, 116, 117, 118
や 焼塩壺	184, 226, 227
焼締	52, 131, 156, 159, 162, 166, 169, 193, 198, 203
槽	65, 270
屋敷	39, 40, 59, 72, 76, 77, 78, 80, 94, 98, 116, 250
屋敷割	2, 72, 78
薬壺	49
山茶碗	13, 52

項目	ページ
山中遺跡	13, 18, 28
弥生土器	54, 132
ヤリガンナ	240
ゆ 結桶	59, 98, 99, 100, 102, 106, 182, 239, 240
結桶井戸	98, 100, 102, 106
有基鐵	244
有孔石板	243
釉薬	51, 121, 124, 126, 128, 130, 175
よ 用水	47, 72, 81
ら 楽窯	124, 166, 169, 170, 202
り 龍頭	184
龍泉窯	145, 150, 209, 210
稜花皿	128, 176, 209, 211, 216
稜皿	128, 154, 211, 216
る 瑠璃釉皿	225
れ 礫群	73, 74
蓮花水禽文	213
蓮花	212, 215, 216
蓮子碗	212
連歯下駄	134, 135, 143, 184
蓮弁帯	212
蓮弁紋	126, 145, 159, 209, 210, 225
ろ ロクロ成形	56, 130, 134, 143, 145, 152, 159, 166, 170, 182, 202, 226
わ 輪違い瓦	233, 235
割高台皿	145, 211
椀	122, 134, 143, 154, 155, 159, 166, 170, 176, 188, 239
碗	46, 49, 51, 53, 56, 124, 126, 128, 134, 143, 145, 150, 154, 155, 159, 166, 170, 176, 193, 195, 202, 207, 208, 209, 210, 212, 213, 219, 221, 225, 226, 229, 231
鏡	247

報 告 書 抄 録

ふりがな	きよすじょうかまちいせき 4							
書名	清洲城下町遺跡Ⅳ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	鈴木正貴・加藤安信・服部俊之・岡田智子							
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567-67-4161							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃 〃	南緯 〃 〃 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きよすじょうかまち 清洲城下町	にしかすがいぐんきよすちよう 西春日井郡清洲町	23346	21002	35 2 58	136 6 57	19860701 19930731	29,750	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
清洲城下町	集落跡 城館跡	古 代 中 世 戦国時代	竪穴住居 1 他 井戸 1 溝・土坑他 中堀・石垣 溝・畝状遺構 礎石建物13 掘立柱建物 4 柵列 4・井戸108 旧五条川流路 土坑・地震痕 整地層他	須恵器・灰釉陶器・瓦 灰釉系陶器・土師器他 瀬戸美濃窯産陶器・瓦 常滑・信楽・楽・備前 ・丹波・唐津窯産陶器 朝鮮・中国窯産陶磁器 土師器皿・鍋類・瓦器 木・石・金属製品 刃傷頭骨・自然遺体他		清須城の中堀 天正地震（1586年発生） 永正五年紀年銘木簡 （武家屋敷） （町屋敷）		

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集

清洲城下町遺跡Ⅳ(本文編)

1994年3月31日

編集 財団法人
発行 愛知県埋蔵文化財センター
印刷 東海プリント社
